

---

# 彼女たちの平々凡々な日常

ありすきゃろる

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

彼女たちの平々凡々な日常

### 【Nコード】

N7392L

### 【作者名】

ありすきやるる

### 【あらすじ】

いつも元気いっぱい神社神無と、悩みなんてほとんどない水城水無。

そんな2人を中心として、いつもカッターを持ってる普通の人とか、神様になってみせると言ってるけど普通な人とか、双子とか、姉が好き過ぎて殺せる人とかが出てくるこの小説は、笑いあり涙あり感動ありなハートフルでほのぼのなコメディであるという噂でした。

## 0 - 1 登場人物の設定を確認(前書き)

- ・この小説は神無と水無の放課後の続編らしいです。
- ・ですが、読んでなくても問題ないという噂です。
- ・最初の4、5話は、作者がキャラを思い出すために使用するらしいです。
- ・読み飛ばしてもいいですが、読むとどんなキャラなのか理解しやすいかと思われます。
- ・どうぞよろしくお願ひします。

## 0 - 1 登場人物の設定を確認

かみやしろかな  
神社神無

- ・ 主人公
- ・ 20才
- ・ 大学三年生
- ・ 誕生日は10月
- ・ 身長は普通
- ・ クレープが好き
- ・ 好き過ぎて死ねる
- ・ 苦手な物や嫌いな物はほとんどない
- ・ 強いていうなら高いところ
- ・ 水城水無と三途舞歌と春風巡は友達
- ・ 水城火無と火邪とは知り合い
- ・ 日向月読と日向命は可愛い
- ・ 子供って可愛い
- ・ 姉との仲は微妙
- ・ 実家暮らし
- ・ たいてい水城水無と一緒にいる
- ・ 体力学力共に普通
- ・ 本人的には

みずきみな  
水城水無

- ・ 主人公である
- ・ 20才
- ・ 大学三年生
- ・ 誕生日は6月
- ・ 身長は普通
- ・ 好きな物はあるまない

- ・嫌いな物は結構ある
- ・神社神無は親友
- ・三途舞歌と春風巡は友達
- ・水城火無と火邪は妹
- ・日向月読と日向命は苦手
- ・子供ってよくわからない
- ・母親との仲は険悪
- ・義父との仲は零
- ・妹との仲は、ふ、普通？
- ・一人暮らし
- ・だったはずなのに、妹と二人暮らし
- ・父親の形見である腕時計で、手首の傷を隠している。
- ・実は、茶髪です
- ・特に意味ないけど
- ・たいてい神社神無と一緒にいる
- ・体力学力共に普通よりちよい上

三途舞歌 さんずまいか

- ・主人公に違いない
- ・20才
- ・大学三年生
- ・誕生日は3月
- ・身長は高め
- ・アイスクリームが好き
- ・好き過ぎて殺せる
- ・図書館で本を読んでも
- ・人間関係についての本が多い
- ・水城水無とは友達
- ・神社神無とは友達っぽい
- ・春風巡はよくわからん

- ・水城火無と火邪とは面識なし
- ・日向月読と日向命は好きじゃない
- ・子供は好きじゃない
- ・親との仲は零
- ・リストバンドで左手首の傷を隠している
- ・常にカッターを持ち歩いている
- ・持つてると安心するらしい
- ・たまに図書館で一人、カッターをカチカチさせて微笑んでるらしい
- ・実家暮らし
- ・たいてい春風巡が近くにいる
- ・実は毎日日記をつけている
- ・体力学力共に普通よりちよい上
- ・しかしカッターを装備すると基礎パラメーターがぐーんと上昇する

はるかぜめぐる  
春風巡

- ・主人公です
- ・20才
- ・大学三年生
- ・誕生日は12月
- ・身長は低め
- ・職業は探偵
- ・罪状はストーカー
- ・本人的には人間だけど神様
- ・好きな物や嫌いな物はない
- ・神社神無と水城水無と三途舞歌とは友達
- ・水城火無と火邪は知ってるが会ったことはない
- ・日向月読と日向命は妹分
- ・父親は教師で、普通の仲
- ・母親はどこにいるかも知らない
- ・弟はもう死んでる

- ・ 実は、一人暮らし
- ・ たいてい三途舞歌に付きまとってる
- ・ 語尾に『です』をつける癖があるです
- ・ 力とか体力とか足の速さとかすごいよ
- ・ だって神様だもん

ひゅつがつくよみ

日向月読

ひゅつがみこと

日向命

- ・ 主人公かな？
- ・ 双子
- ・ 5才
- ・ 孤児院所属
- ・ 保育園とか行ってるのかな？
- ・ 捨て子だった気がする
- ・ 誕生日は11月だった気がする
- ・ 身長はちっちゃい
- ・ 月読は自分のことを『僕』という
- ・ 命は自分のことを『みこと』という
- ・ 月読の好きな食べ物はプリンで、命はチョコ
- ・ 神社神無は優しい人だなあってると思う
- ・ 水城水無はなんだかんだで優しい人だなあってると思う
- ・ 三途舞歌はとりあえず怖い人だなあってると思う
- ・ 春風巡はお姉ちゃん
- ・ 月読は『巡姉ちゃん』と呼ぶ
- ・ 命は『巡お姉ちゃん』と呼ぶ
- ・ 水城火無と火耶は存在すら知らないなあ
- ・ 月読は命のことを『命』と呼ぶ
- ・ 命は月読のことを『つくよちゃん』と呼ぶ
- ・ 2人とも母親が迎えにくるかもしれないと少なからず思っている

- ・しかし母親が迎えに来ることは、ありえない
- ・たまに大学に2人で遊びに来る
- ・暇なのかな？
- ・というか自由なのかな？
- ・どちらかというと月読の方が運動ができて
- ・命の方が頭がいい

水城火無 みずぎひな

・お姉ちゃん大好き！！ 好き好き大好き愛してる！！ もうずっと一緒にいたい！！ というかもうずっと一緒だよね！？ 年齢なんてどうでもいいでしょ！？ お姉ちゃんがいてくれればそれでいいの！！ 誕生日なんてどうでもいいでしょ！？ 好きなものはお姉ちゃん！！ 嫌いなものはその他。

- ・ふう、調子のつた。
- ・18才
- ・誕生日は7月
- ・職業無職
- ・高校中退
- ・家出中
- ・姉と暮らしてます
- ・幸せです
- ・職業は家事手伝いでもいいや
- ・好きなものは水城水無
- ・嫌いなものは神社神無
- ・三途舞歌と春風巡との面識はない
- ・姉を愛してる
- ・家族愛的な意味で
- ・母親とか父親はどうでもいいけどね
- ・多重人格もどき



- ・嫌になったら、チェーンジ
- ・自分のどうしてもしたいことを許してくれないなら、チェーンジ

火邪<sup>かや</sup>

- ・姉さん大好きです。好き好き大好き愛してます。というわけで、爪剥いでいいですか？
- ・水城火無のもう一つの人格
- ・とりあえず、最初の一文みたいな人
- ・好きなものは水城水無
- ・嫌いなものは特にない
- ・呼ばれて飛びでて、ジャジャジャーザーン
- ・みたい感じ
- ・火邪が眠ると、水城火無に戻る
- ・つまり寝ないと……ふ、ふふふふ
- ・なんか他にも設定があった気がしたけど、気にしない

かみやしろかんざき  
神社神裂

- ・完璧で天才という誇大広告を持っている姉
- ・『暗中模索で友情探求』に出演してた
- ・この作品に出てくるかは未定
- ・この作品現時点では、妹との仲は微妙に改善されている
- ・微妙に

## 0 - 1 ・登場人物の設定を確認（後書き）

ありすきやるる（作者）

・もう六月か。

・六月か。

・水無月だ。

・そうだ。新しいの書こう。

・そんな軽いノリで書き始めましたどうもこんにちわありすきやるるです。

・なのであんまり先のことを考えてません。

・気楽に読もう気楽に書こうの精神です。

・この小説の時間はだいたい現実と同じ時間。

・神無と水無の放課後終了は12月。

・だから終了してから6カ月後の話。

・ではどうぞよろしくお願いします。

0 - 2 人となりを確認（前書き）

キャラクターを思い出し中・・・

## 0 - 2 . 人となりを確認

Case 1 . 一人で歩いていたら空き缶を見つけた。周りに人はいない。

さあ、どうしましょう？

神社神無の場合。

神無は買い物途中、道端に空き缶が転がっているのを見つけた。

「……………」

神無はそれを拾った。

辺りを見回すが、ゴミ箱は見当たらない。

そういえば、さっきゴミ箱があった気がする。

神無は来た道を戻り始めた。

結果。神社神無は、空き缶を拾い来た道を戻る。

水城水無の場合。

水無がぶらぶらと散歩をしていると、道端に空き缶が転がっているのを見つけた。

「……………」

水無は辺りを見回し始めた。

周りに人はいない。

周りにゴミ箱はない。

それを確認した後、水無は空き缶を拾った。

テキトーに歩いてたら、ゴミ箱くらいあるっしょ。

水無は空き缶を持ちながら、またぶらぶらと歩き始めた。

結果。水城水無は周りを確認した後、空き缶を拾う。

三途舞歌の場合。

舞歌がふらふら散歩をしていると、道端に空き缶が転がっているのを見つけた。

「……………」

そのまま通り過ぎた。

結果。三途舞歌は拾わない。

春風巡の場合。

巡が困っている人を探しながらふらふらと歩いていると、道端に空き缶が転がっているのを見つけた。

「む。空き缶が転がっているです。つまりポイ捨てです。これは事件です。犯人を見つけます。神として人としてこの犯人を見つけます！　とりあえず犯人は誰ですか！！ さっさと教えてさす！！」

結果。春風巡は空き缶に話しかける。

日向月読と日向命の場合。

月読と命が「迷子？」 「迷子じゃないやい！」という感じで歩いていると、道端に空き缶が転がっているのを見つけた。

「あ。空き缶落ちてるよ」

先に見つけたのは命だった。

「ほんとだ!」

そして先に拾ったのは月読だった。

「あ! みことが先に見つけたんだから命が拾うの!」

命が月読から空き缶を取ろうとするが、月読は空き缶を離さない。

「ダメ! 僕がゴミ箱に捨てて巡姉ちゃんに褒めてもらうの!」

「みことが褒めてもらうの!」

命は諦めずに月読から空き缶を取ろうとする。

「僕!」

「みこと!」

しばらくそんな押し問答をしていたら、

「うー! 命しつこい!」

月読が命をポカンした。

「うつ……つ、つくよちゃん、叩いた……」

涙目で月読を睨む命。

「み、命がいけないんだもん!!」

怯みつつも、命のせいにする月読。

「みこといけなくないもん!! みことが先に見つけたんだからみことのだもん!!」

命が泣きながら月読に襲いかかる。

その結果、二人とも倒れる。

その結果、二人とも泣く。

二人ともわんわん泣く。

二人とも泣きながら立ち上がる。

二人で泣きながら手を繋ぎ、歩き始める。

結果。空き缶の存在を忘れる。

水城火無の場合。

火無が水無を探しながら歩いていると、道端に空き缶が転がっているのを見つけない。

「お姉ちゃんどこー!!」



結果。お姉ちゃんどこー？

火邪の場合。

火邪が水無を探しながら歩いていると、道端に空き缶が転がっているのを見つけた。

「……………」

火邪は空き缶の近くで屈み込み、空き缶を拾う。

「……………」

観察する。そして、空き缶を立たせて、自分も立ち上がる。

そして、おもいつきり踏む。

一度では飽きたらず、二度三度。

全力で、踏み潰す。

空き缶は見事にぺっちゃんこ。

火邪はそれを拾い、空き缶がぺっちゃんこになったのを、至近距離で確認する。

「……………ふ、ふふふ」

ふふふふふ……………。

笑いながら火邪は空き缶を放り投げた。

そして水無を探し始める。

結果。なんか怖い。

Case 2・一人で歩いていたら空き缶を見つけた。周りに人はいる。

さあどうしましょう？

神社神無の場合。

神無は買い物途中に、道端に空き缶が転がっているのを見つけた。

「……………」

神無はそれを拾った。

辺りを見回すが、ゴミ箱は見当たらない。

そういえば、さっきゴミ箱があった気がする。

神無は来た道を戻り始めた。

結果。神社神無は、特に変わらない。

水城水無の場合。

水無がぶらぶらと散歩をしていると、道端に空き缶が転がっているのを見つけた。

「……………」

水無は辺りを見回し始めた。

周りに人はいっぱい。

周りにゴミ箱はない。

「……………」

それを確認した後、水無は空き缶をもう一度見る。

そして、空き缶を蹴り始めた。

蹴る。

蹴る。

「……………」

そしてゴミ箱を発見。

周りに人はいない。

蹴っていた空き缶を拾い上げ、捨てる。

「ふう……いいことしたぜ」

結果。水城水無は人にいいことをしているのを見られるのを嫌う。

三途舞歌の場合。

「……………」

結果。拾うわけがない。

春風巡の場合。

巡が困っている人を探しながらふらふらと歩いていると、道端に空き缶が転がっているのを見つけた。

「む。空き缶が転がっているです。つまりポイ捨てです。これは事件です。犯人を見つけます。神として人としてこの犯人を見つけ

だすです！！ とりあえず犯人は誰ですか！！ さつさと教えるです！！ お前ですか！？ あなたですか！？ そうなのですか！？ あ、違うですか。ごめんなさい。じゃああなたですか！？ あ、違うですか……ほんとですか？」

結果。周りの人に迷惑。

日向月読と日向命の場合。

(中略)

「みこといけなくないもん！！ みことが先に見つけたんだからみことのもん！！」

命が泣きながら月読に襲いかかる。

その結果、二人とも倒れる。

その結果、二人とも泣く。

二人ともわんわん泣く。

「だ、大丈夫かい君達？」

周りにいた人たちが集まってくる。

「ほらほら。二人とも泣いちゃダメよ？ 喧嘩もダメ。仲良くしな

いと。ね?」「どうしたんだい君達。お父さんやお母さんは一緒じゃないのかい?」「君達そっくりだね。双子かい? 仲良くしないとダメだよ?」「飴ちゃんあげようか?」「ロリコン」「誰だ今ロリコン言った奴ぶつ殺すぞ!」「子供の前で何汚い言葉言ってるんだいあんた達は!! 恥を知りな恥を!!」「す、すいませんでした」「」

結果。大変なことになる。

水城火無の場合。

「お姉ちゃん?」

結果。お姉ちゃん。

火邪の場合。

(中略)

空き缶は見事にぺっちゃんこ。

火邪はそれを拾い、空き缶がぺっちゃんこになったのを、至近距離で確認する。

「…………ふ、ふふふ」

ふふふふふ……。

笑いながら火邪は空き缶を放り投げた。

そして水無を探し始める。

「……」

結果。周りの人達、見てみぬ振り。

## 0 - 2 ・人となりを確認（後書き）

落ちている空き缶を見つけたら拾うのがいい子なのか、そのまま無視するのが普通の子なのか、踏み潰すのが悪い子なのかは、きつと永遠の謎に違いないと思いますか知らん。



0・3・組み合わせの確認(神無と) (前書き)

作者練習中 . . . .

### 0-3・組み合わせの確認(神無と )

Case3・友達(妹)と歩いていたら空き缶を見つけた。周りに人はいない。

さあ。どうしましょう？

神無と水無の場合(散歩)

神社神無と水城水無が歩いていると、道端に空き缶が転がっているのを見つけました。

神無が空き缶を拾いました。

「神無、偉いねー」

「普通だよ。ゴミ箱どこかな」

「さあ？ どこかにあったかな……まあ、歩いてればあるんじゃない？」

「なるほど。じゃあ、歩く」

「じゃあ歩こう。ところで神無」

「なにかな水無」

「プルタブってあるじゃん？」

「あるね」

「あれを集めると車椅子が出来るっていう噂を聞いたんだけど、ほんとかない？」

「プルタブを集めて出来たお金で車椅子は買えるけど、プルタブが車椅子になるわけじゃないよ？」

「へえー、ベルマークみたいなものか」

「まあそんなもんだね。しかしベルマークかー。懐かしいねー」

「ベルマークに似てるやつあったよね。なんだっけ？」

「なんだっけ？ 忘れちゃった」

結果。ベルマークの話をし始める。

神無と舞歌の場合（買い物途中）

神社神無と三途舞歌が歩いていると、道端に空き缶が転がっているのを見つけました。

「あ。空き缶落ちてる」

神無が空き缶を拾いました。  
舞歌は驚きました。

「ん？ どうかした？」

「い、いえ。神社さん、空き缶拾うんですね」

「そりゃ、ゴミが落ちてたら拾うでしょ？ 三途さん拾わないの？」

「え！？ い、いや、拾いますよ！？ 当然拾いますよ！？ 拾わないわけありませんよ！？ 拾いまくりますよ！？ 昨日も50は拾いましたよ！？」

「そ、そんなに空き缶落ちてたんだ。世も末だね……。さっきゴミ箱あつたから、ちよつと戻るっか」

「え、あ、はい。そうですね」

結果。三途舞歌が今度から空き缶を拾うようになる。

神無と巡の場合（散歩）

神社神無と春風巡が歩いていると、道端に空き缶が転がっているの

を見つけてました。

「む。空き缶が転がっているです！」

巡が拾いました。

「これはポイ捨てです！ これは事件です！ 犯人を見つけます！ 神として人としてこの犯人を見つけだすです！！ 神社神無手伝うです！」

「え、うん。いいよ」

「ということで犯人は誰です！？ 吐くです！！ しらをきつても得しませんですよ！？ さつさと私に教えるです！！ さあ早く教えるです！！」

「空き缶が教えてくれるの？」

「……そ、そうです。私くらいになれば物の声を聞くのはたやすいのです！！」

「へえー、それは凄いね。で、空き缶はなんて言ってるの？」

「ふ、ふむです。私が悪かったの。私がスチール缶だったのが悪かったの。だから彼を責めないで。それより私をゴミ箱に連れて行って。私をリサイクルさせて！！ と、言ってるです。なかなか器うつくわがでかい空き缶です」

「そうだね。しかも女性？ みたいだね」

「こいつに免じて犯人探しはやめておいてやるです。神社神無。ゴ  
三箱はどこです?」

「えっと……さっきあっちにあったかな?」

「じゃあさっさとこいつをリサイクルさせに行くです!」

「あ、うん。了解しました」

結果。空き缶が擬人化される。

神無と月読と命の場合(迷子の保護)

神社神無が日向月読と日向命と手を繋いで歩いていると、道端に空  
き缶が転がっているのを見つけました。

「あ。空き缶が落ちてるよ」

命が最初に見つけた。

「ほんとだ!」

月読は神無の手を離し、空き缶を拾いにいった。

「あ! みことが見つけたのに!」

命が涙目で神無に、月読が悪いことしましたーって報告しました。  
神無は命の頭を撫でてあげます。

「月読ちゃん。命ちゃんが先に見つけたんだから、命ちゃんに渡してあげて?」

「嫌だもん!」

「どうして?」

「僕が先に拾ったんだから僕のだもん! だから命には渡さないもん! 僕が捨てるもん!」

「みことが捨てるの!! つくよちゃんそれ返して!!」

「やだ!!」

「んー……じゃあ、それは月読ちゃんにあげる。で、今度見つけた空き缶は命ちゃんにあげる。それでいい?」

「うん!」

「命ちゃんもそれで今は我慢出来る?」

「……うん。みこと我慢する」

「うん。偉い偉い」

神無は命の頭を撫で撫で。

命は褒められて照れ照れ。

「僕も空き缶拾って偉い？」

「うん。月読ちゃんも偉いよー」

神無は月読の頭も撫で撫で。

月読は褒められてえへへへー！。

「よし！ それじゃあ、ゴミ箱と空き缶を探しに出発しましょー！」

「「おー！」」

結果。三人仲良く、ゴミを探しに行く。

神無と火無の場合（姉搜索）

神社神無と水城火無が歩いてしていると、道端に空き缶が転がっているのを見つけない。

「お姉ちゃんどこー？」

「水無どこに行っちゃったんだらうね」

水無を探している火無の後ろをついていく感じで、神無は一緒に歩いています。



「お姉ちゃんどこー？ どうして私がこんな奴と一緒に歩かないといけないのー？」

「こんな奴って……火無さん？」

「お姉ちゃんどこー？ 私こんな奴じゃなくてお姉ちゃんと一緒に歩きたいよー？」

「……ひ、火無さん？」

「お姉ちゃんどこー？ 私を置いてどこに行っちゃったのー？ どうしてこんな奴と歩かないと行けないのー？ どうしてお姉ちゃんはこんな奴と一緒にいるのー？」

「……火無さんって、私のこと嫌い？」

「ううん。嫌い」

「え……いや、どっち？」

「お姉ちゃんどこー！！」

「……」

結果。水無助けてー！！

神無と火邪の場合（姉搜索？）

神社神無と火邪が歩いてみると、道端に空き缶が落ちていているのを見つけた。

「全く姉さんはどこに行っただんでしょうか。あ。空き缶が落ちてますね。神無さん。あの空き缶で姉さんの足の小指を踏み潰す練習をしてもいいですか？」

「実際にやらないなら別にいいと思うよ。というか、火邪さん？ さつきから肘間接が悲鳴をあげてる気がするんですけど……」

火邪と神無は腕を組んで歩いていて仲良くみえるけど、実際は火邪が肘間接をきめている感じである。

「悲鳴ですか？ 私には全く聞こえませんので気のせいじゃないですか？ ああ。悲鳴といえば姉さんはなかなかいい悲鳴をあげます。知っていましたか？」

「そうなの？ 知らなかったなー。悲鳴なんて聞く機会ほとんどないからね」

「それは人生の半分を損してますね。神無さん。この空き缶で姉さんの悲鳴を聞くための練習をしましょう。さあ、どうぞ。姉さんの頭だと思って」

「頭って……まあいいか。こんな感じ？」

神無、空き缶を踏む。

「いいえ違います。惜しいですが、こんな感じですよ」

火邪、さらに空き缶を踏む。

「……ああなるほど。最後にグリグリするんだね。とどめ？」

「そうです。断末魔を聞くにはこれが必須です。さあ、もう一度ど  
うぞ」

「いや、もういいんじゃないかな？ 十分潰れたし。ゴミ箱に捨て  
よ」

「姉さんですか？」

「空き缶をです」

結果。神無が水無の頭の踏みかたを会得する。

0 - 3 ・ 組み合わせの確認 (神無と) (後書き)

神無は優等生……………火無は神無が嫌い……………火邪はそんなに嫌いではない……………ぶつぶつ……………ぶつぶつ……………

0・4・組み合わせの確認(水無と) (前書き)

もう少し空き缶の話に付き合ってくださいませ。

#### 0 - 4 ・ 組み合わせの確認（水無と ）

水無と舞歌の場合（散歩）

水城水無と三途舞歌が歩いていると、道端に空き缶を見つけた。

「……………」

水無が立ち止まる。

「どうしたんですか？」

舞歌も立ち止まる。

「いや、ほら、空き缶」

「空き缶ですね」

「こつこつというのは捨てるべきだと思っただよ。舞歌君はどう思っかね？」

「拾いたい人が拾えばいいと思いますよ。どうしたんですか？」

「舞歌は拾わないわけ？」

「面倒ですから拾いません」

「いや、面倒って、ちょっと腰<sup>かが</sup>屈めるだけじゃん」

「それが億劫です」

「こ、この軟弱者！ 恥を知れ！」

「はあ？ 何が言いたいんですかあんたは。私に拾えと？」

「まあ、そういう解釈でも間違っではない」

「自分で拾えばいいじゃないですか」

「い、いや、ここはあれだよ。舞歌にいいことをさせてやるつという私の優しさ的な何か？」

「何かって……意味がわかりませんよ。……とりあえず拾いますよ。これでいいですか？」

「それでいいのだ。じゃ、いこつか。どっかにゴミ箱くらいあるっしょ」

「私はたまにあなたのことがわからなくなりますよ……」

「人を完全に理解するのはなんとかかこんとか……」

「全然わからない……人付き合いは面倒……はあ」

結果。水無は舞歌に拾わせる

水無と巡の場合（強制散歩）

水城水無と春風巡が歩いてしていると、道端に空き缶が落ちているのを見つけた。

「む。空き缶が転がっているです。つまりポイ捨てです。これは事件です。犯人を見つけます。神として人としてこの犯人を見つけだすです！！ 水城水無手伝うです！」

巡が拾う。

「え、やだ。犯人見つけるって、無理じゃん？」

「協力してくれるですか！ さすがです！」

「いや、話聞いているかな？」

「ということで犯人は誰です！？ 吐くです！！ しらをきつても得しませんですよ！？ さっさと私に教えます！！ さあ早く教えます！！！」

「……………え、なに？ 巡なにしているの？ え、まさか空き缶に話しかけてんの？ ありえない光景を私は今目撃しているの？……………が、頑張って生きる、巡」

「……………水城水無」

「な、なんでしょうか？ 空き缶が握りしめて、ぺっちゃんこで、どどしました？ お、怒った？」



「ありがとうございますですー!!」

「なにゆえ!? そして抱き着く、こ、呼吸が……」

「そういう反応を私は期待していませんです!! 私は周りに人がいるときに空き缶に話しかけるほど恥を知らない人間ではないです  
!」

「ひ、人が、いない時は、話し、かけ、んのか、ごふっ……離して、  
」

「それなのに神社神無は!! 神社神無は真顔なんです!! 真顔で褒めてくるんですよ信じるんですよ!! そうなったら引けなくなるですよ!! 人の期待に答えるのが神様っぽいものの義務とはいえ平静を保つのは大変でしたですよ!! 私は神様を目指しますがまだ人間なんですよー!! テンパりますですよー!!」

「い、言ってる、意味、が、という、か、じごう、じ、と……がく  
っ」

「む。どうしましたですか水城水無。水城水無? しっかりするです。こんなところで寝ると風邪をひくですよ?」

結果。水無が眠りに堕ちる。

水無と月読と命の場合（迷子の保護的な何か）

水城水無と日向月読と日向命が手を繋いで歩いていると、道端に空き缶が転がっていた。

「あ。空き缶落ちてる」

命が見つけた。

「ホントだ！」

月読が水無から手を離して、空き缶を拾った。

「あ！ みことが先に見つけたのに！」

命も手を離し、空き缶をワイイってしてる月読に文句を言う。

「はあ、やっと解放された……」

手を繋がれていた水無は、手をぶらぶら振ってつかの間の休息を満喫する。

「つくよちゃんそれ返して！！ みことが先に見つけたんだからそれみことのなの！」

「やだもん！ 僕が拾ったんだから僕のだもん！」

「みことのなの！」

「僕のだもん！」

「……おい子供たち。なんでそんなに空き缶に執着するのかない？」

面倒だけで喧嘩はよくないからな。しかたないよな。と思いがら水無は、「うーっ!」「うーっ!」ってやってる二人に声をかける。

「ゴミを捨てるのはいいことなの!」

「いいことすると巡お姉ちゃんに褒められるの!」

「だから僕が捨てて巡姉ちゃんに褒められるの!」

「違うもん! みことが褒められるんだもん!」

「僕!」

「みこと!」

「うーっ!」「うーっ!」

「……君達。喧嘩はいいことかな? ダメなことだと思わないかな? そんなことしてたら巡姉ちゃんは悲しむんじゃないかな?」

水無のその言葉に、ハッとする二人。

「……うう、でも」

「でもなにかな? なにか言い訳するのかな?」

「……………」

しょんぼりする月読。

命は巡に怒られると思って涙目。

そんな二人を見て、これだから子供は。と思う水無。

月読の手から空き缶を掻っ攫う。

「あ！」

「ふふふ！ 騙されたなお前ら！ 巡の姉貴に褒められるのはこの私だー！！ お前らはそこで泣いているがいいわ！！ 悔しかったら捕まえてみな！ あーはっはっはっはっ、はあ……………」

適度なスピードで水無は走り出した。

「……………騙された？ 騙された！」

「つくよちゃん早く追いかけないと！」

「うん！ あの人悪い人だね！」

「そうだね！ 騙すなんてひどいね……………騙されたかな？」

「えっと……………よくわかんないけど騙された！」

「うん！ そうだね！」

月読と命は手を繋いで、水無を追いかけ始めました。

結果。水無の好感度が下がる。

水無と火無の場合（買い物に行きたいといつから仕方なくですね…）

水城水無と水城火無が手を繋いで歩いていると、空き缶を見つけた。

「あ、お姉ちゃん空き缶が落ちてるよ！」

「そうだねー。つと、引つ張るな。空き缶は逃げないよ」

火無が、ワイって空き缶を拾いに行き捨つ。

「ポイ捨ては悪いことだよね」

「いいことではないねー」

「捨つのはいいことだよね」

「悪いことではないねー」

「捨つた私はいいことしたよね」

「まあ、そうだね。あ、偉いぞー火無」

火無が褒めてもらいたいと理解した水無は、おざなりに褒めた。

「えへへへー、お姉ちゃんお姉ちゃん。いいことした火無にご褒美くれる?」

「いや、空き缶拾ったくらいでご褒美はないでしょ。ほら、早く行くよ」

水無が手を引き、ゴミ箱を探しに行こうとしたが、火無はそれに抵抗する。

「ご褒美くれる?」

「いや、だから」「ご褒美くれる?」「あげな」「くれる?」「あげ」「る?」

「……………要求を聞くだけきこうじゃないか。言ってみやがれ、何か欲しいのか?」

「私、お姉ちゃんが欲しい!」

「はい、行くよー。私何も聞かなかったよー」

「やだやだやだやだやだー! 私お姉ちゃんが欲ーしいー!」

火無が駄々をこねはじめた。

お姉ちゃんくれるまで私ここから動かないー!という態度である。

「いやいやいやいやいや! 意味がわからないからね!? なんでここで駄々をこねるか全くわからないからね!? というかお姉ちゃん欲しいっていう意味もわからないからね!? 手を振るな!!」

じたんだ踏むな！！ わがまま言うな！！ お姉ちゃんは非売品ですよ！？ 売買は無理！ 手を繋いであげているんだから満足しなさい！！」

「やーだー！ 私お姉ちゃんが欲しいー！ お姉ちゃんにご飯食べさせたいー！ お姉ちゃんを着せ替えしたいー！ お姉ちゃんの体洗いたいー！」

「それはもはや介護！？ というか人形！？ 私は人形じゃないー！ ああもう！ わがまま言うんじゃないー！」

「うう……私いいことしたのに……お姉ちゃんご褒美くれるって言ったのに……」

火無、俯いて沈黙。

「げっ……ひ、火無ー？」

水無、嫌な予感を感じて手を離す。

「いいえ火邪です。姉さん。わがまま言うんじゃないーありません」

火邪は手に持っていた空き缶を水無に全力投擲。

「私わがままなんですか！？」

水無は空き缶を避けて逃亡開始。  
空き缶を捨てる余裕はない。

結果。鬼ごっこが始まる

水無と火邪の場合（火無が買い物に行きたいって言ってたけど面倒だったから嫌じゃー。って言ったら火邪が……）

水城水無と火邪が歩いてしていると、道端に空き缶が落ちているのを見つけた。

「姉さん。空き缶が落ちてます。これは踏み潰さないといけません」  
そう言いながら火邪は、水無の足を踏み潰す。骨を砕く勢いで。

「あぶなっ！　って、痛い！　なんで!？」

水無は間一髪避けた。が、その直後腕を思いつきり握られて痛かった。

「それは罰です。姉さんが避けるからいけないんです。もう一度やりますから避けないでください」

「ちょっと待て！　落ち着け！　話し合おう！　って、聞けよ!！」

問答無用で足を踏み潰そうとする火邪。

「姉さん、なんで避けるんですか？　踏み潰さないと姉さんが逃げるから仕方なく私は踏み潰してるんだから避けてはダメですよ？　なんでわからないんですか？」



「わかるかボケー！！ 空き缶を踏み潰すんじゃないのか!？」

「空き缶より姉さんを踏みみたい」

「空き缶で我慢しなさい！」

「仕方ないですね。じゃあ、姉さん。手を繋ぎましょう」

「脈絡がわからなくてなんか怖いからやだ」

「じゃあ、潰します。素敵な断末魔を期待します」

じりじりと迫る火邪。

「おっけーわかったわかりました！ 私、手を繋ぎます」

バツって手を差し出す水無。

「それでいいんです」

ガシツて掴む火邪。

「言っておくけど、手を砕くくらいの強さで握るのはなしだから」

「やって欲しいんですか？ 姉さんが望むなら私、がんばります」

「望んでないから頑張らなくていい……」

はあ。とため息をついて空き缶を拾って歩きだす水無。

そして火邪はおとなく歩く。空き缶はもつとつでもいいらしい。

結果。なんかよくわからないけど手を繋いで二人仲良く歩きだす。

0 - 4 ・ 組み合わせの確認（水無と ）（後書き）

水無は苦勞人…… 舞歌は人によつて態度を変える…… 巡は案外普通  
…… 月読と命は子供…… 火無は水無に甘える役…… 火邪は水無を痛  
めつける役…… ぶつぶつ…… メモメモ…… あ、この物語はフィクシ  
ョンなので簡単に人が眠りに堕ちますます。

0・5・組み合わせの確認(その他)(前書き)

空き缶の話はもうこれで最後・・・

## 0・5・組み合わせの確認(その他)

舞歌と巡の場合(舞歌が散歩してたらなんかくっついてきた)

三途舞歌と春風巡が歩いていると、道端に空き缶が落ちているのを見つけた。

「む。空き缶が転がっているです。つまりポイ捨てです。これは事件です。犯人を見つけます。神として人としてこの犯人を見つけだすです!! 三途舞歌手伝うですって、無視ですか!?!」

巡が拾う。

そして舞歌は気にせず進む。

「無視はよくないと思うです! そういうのはよくないと思うです! 私が矯正してやるです! 神様を目指す私にとってはたやすいことですって、立ち止まって聞いてくなくてもよくないですか!?!」

「……………あなたは口を開かなきゃまともなんですけどね……………神様って、バカだろ」

舞歌はいったん立ち止まり、そう呟いて、またすぐ歩きだす。

「どういう意味です! 喧しいということですか!?!」

「わかっているなら口を閉じて黙れ」

「む。わかったです。願いを聞いてやるです。黙ってやるです。それで満足です?」

「満足です」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………限界です！」

「早い……………」

「喋らずに歩いていて何が楽しいですか!？」

「十分楽しいじゃないですか」

「そ、そうです?」

「ああ、勘違いしないでくださいよ? あなたと歩いているだけで楽しいという意味ではないのであしからず。青空の下散歩しているこの状況が楽しいだけで、あなたの存在は一切合切関係ないです」

「……………か、勘違いなんかしてないです甘く見ないで欲しいです!」

「……………そうですか。じゃあ、黙れ」

「むぐ……いいですいいです。わかったです。もう、二度と喋ってやらないです。三途舞歌が喋るまで私は口を開いてやらないです。私と話したかったらいつでも話しかけてくるがいいです」

「……」

「……」

「……」

「……喋りたくなかったです？」

「ならねえよ」

結果。巡は人肌が恋しい。

巡と月読と命の場合（三人仲良くいいこと探し）

春風巡と日向月読と日向命が仲良く手を繋ぎ歩いてると、道端に空き缶が転がっているのを見つけた。

「あ。空き缶が落ちてる」

命が見つけて。

「ホントだ！」

月読が拾おうとして。

「お姉ちゃんが拾っちゃうです!」

巡が拾っちゃう。

「ふふふです! まだまだ甘いです二人ともです!! まだまだ速さが足りないです!」

「巡お姉ちゃんはやーい!」

「巡姉ちゃんすごい!」

月読と命は、さすがお姉ちゃん! 憧れるー! という尊敬な眼差しで巡を見ている。

「当たり前です! 妹分に遅れるようでは神様見習い春風巡の名が廃るです! さあこの空き缶をリサイクルさせに行くです!」

「「おー!」」

というわけで、巡たちは「ミ箱を探しに歩きだそうとしたのだが。

「あ……」

「つくよちゃん……」

さっきまで巡は、左手で命と手を繋ぎ、右手で月読と手を繋いでいたのだから、今は右手には空き缶があるので、月読と手を繋げないの



だ。それに気付いた月読はちょっとしょんぼりしてしまったのだ。命も月読が手を繋げないのに自分だけ手を繋いで、なんだか悪い気分になってしょんぼりしちゃうのだ。かわいそうなのだ。

というわけで。

「大丈夫ですよ月読。これで月読とも手を繋げるのです！」

巡は頭の上に空き缶をのせた。

「巡姉ちゃんありがとうー!!！」

わーい！手が繋げるー!!って感じで、月読は巡の右手を握った。

「巡お姉ちゃん大丈夫なの？」

命は、不思議な物を見るような目で巡の頭についている空き缶を見ながら、尋ねた。

「当たり前です！ バランスを取りながら歩くのなんて私には造作もないです!! だって私は神様っぽい人間であなたたちのお姉ちゃんだから!!！」

「さすが巡姉ちゃん！ カッコイイー！」

「さすが巡お姉ちゃん！ 大好きー!!！」

「ふふふです。私も二人が大好きですよ。さあ行くです……………ゆっくり……………いいですか二人とも？ ゆっくり行くですよー!!！」

「「おー!」」

結果。巡、頑張って空き缶を落とさないように歩く。

0・5・組み合わせの確認(その他)(後書き)

舞歌は巡に対して厳しい……………月読と命は巡を慕ってる……………巡は  
もはや道化……………メモメモ……………ブツブツ……………これを読んで空き  
缶を拾うのが楽しくはない……………フムフム……………次回から本編的な  
何かだと思っ……………。

1 - 1 水無と火無の朝はこんな感じ(前書き)

6月3日

## 1 - 1 ・水無と火無の朝はこんな感じ

水城水無は一人暮らしだったのだが、今は妹である水城火無と暮らしている。

正直言えば、妹を追い出したまた優雅な一人暮らし生活に戻りたいのだが、その希望が叶うことはおそらくないだろうから、もう半ば諦めている。

水城水無の朝はこんな感じである。

ピピピピピ

「……………」

水無が朝、携帯のアラームと共に起床すると、目の前に火無の寝顔があった。

「……………はあ」

水無は呆れと諦め、そして少しばかりの安堵が混じったため息をついてから、火無を起こさないようにベッドから出て、朝の準備を始める。

勘違いしないでいただきたいが、水無と火無は一つのベッドで最初から寝ていたわけではない。  
ちゃんと火無用の寝具がある。ベッドじゃなくて布団だけど。  
つまり寝るときは別々。起きると一緒。そこから導き出される答えは、火無が寝ぼけてベッドに潜り込んでくるんだろっなー。ということだ。

週に五日も？

『お前確信犯だろ』  
と水無が聞いたところ。

『いやお姉ちゃん。私はいつもベッドだったからこれは仕方がないのだよ』

みたいな答えを火無からいただいた。

それならばと。水無はベッドと布団を交代してあげた。優しい。

火無は寝ぼけて布団に潜り込むようになった。ですよー！。

『お前あれだよ。私と一緒に寝ただけだよ』  
水無はそう聞いた。  
『うん』  
火無は悪びれず頷いた。

火無は水無と一緒に寝るのを嫌がるとわかっていたので、水無が寝たあと潜り込むことにしたのだ。しかも水無が寝苦しいだろうと思つて週に二日は我慢することにした。優しい妹だよ。

さて。

水無はその行為を許しているわけだが、許している理由はもちろん、可愛い妹だから仕方がないな。ではない。

火邪がいるからである。

今朝水無が安堵したのは、火無だったからだ。火邪じゃなくてよかった。という安堵である。

水無が寝ている間に何があったのかはわからないが（眠れないからお姉ちゃんを起こそうと思ったのにお姉ちゃん起きない。とかかな？）、火無が火邪とチェンジしている時がある。

その時は、朝から命の危機である。

水無の目覚めはこんな感じである。

『……………』

水無が、なんか寝苦しいと思って携帯のアラームより早く起床すると、火邪が無表情で体の上ののって首に手をかけていた。

『お、おはようございます』

丁寧に朝の挨拶をしてしまうのは狩られる立場の姉。

『ちっ。起きてしまったならおはようございます。ではおやすみなさい』

と言って、姉から下りて、姉の横に横になるのは狩る立場だった妹。

『……………』

水無は隣で寝息を立て始めた妹を見ながら、なんで私は朝から嫌な

汗をかかなきゃいけないんだ……。と思うのであった。

水無の朝はスリリングなのだ。

こうなる確率を低くするために、水無は火無が潜り込んでくるのを許しているのである。

「いただきまーす」

「はい、どござー」

朝食を作るのは、言うまでもなく水無である。火無は料理できない。というか包丁持たせると危ない。色んな意味で。

今日の朝食は、目玉焼きとサラダとご飯と水である。

火無が来る前は朝食なんてテキトーに済ましていた水無だったが、火無が来てからはそうもいかない。

火無は、一人で二人分食べてるんじゃないかね？と思うくらいの食いしん坊さんなので、朝食もちゃんと食べるのだ。食べないと不機嫌になるのだ。不機嫌になると奴が来る。

火無の分を作るなら自分の分も作りましょうということだ。



「今日も雨……火無。洗濯物は部屋に干しといて」

「うん。わかった」

水無は天気予報を確認して火無に指示を出す。今日は一時限からあるので洗濯物は火無の仕事なのだ。

火無の職業は今現在家事手伝いである。昔は職業学生だったが、教師を半殺しにして高校を中退して無職になった。そして荷物もろくに持たずに水無の下に転がり込んだわけなのだ。

仕方ないので水無が実家に出向き火無の荷物を持つてついでに、母に頭を下げて火無の生活費を送ってもらおうように頼んだのは、今になっても嫌な思い出である。火無の面倒を自分が見るという条件、つまり火無をこっち寄越すなという条件で、仕送りをしてくれることになった。義父に頭を下げてよかったのは不幸中の幸いである。

「お姉ちゃん今日も大学行くの？」

「そりゃ行くに決まってるでしょ？」

「お姉ちゃんはどうして毎日大学行くの？」

「そりゃ毎日講義があるからね」

「お姉ちゃんが大学に行ってる間、私つまんなーい」

「つまんなーいって言われてもね……テレビでも見てれば？」

私寂しい。みたいな目で自分を見る火無に、呆れたように水無は答えを返した。

水無はすでに服を着替えているが、火無はまだパジャマだ。  
火無は一人で出かけることはほとんどない引きこもりさんなので、  
一日中パジャマなこともある。

「テレビつまないもん。ねえ、私も行っていい？」

「ダメ。大学にはついてこない約束でしょ？」

「むー。お姉ちゃんのケチ」

「ケチで結構」

大学生活までこいつに侵略されてたまるかー。

という気分の水無なのであった。

「出かけるときは戸締まりをちゃんとすること。昼食はいつも通り  
冷蔵庫にあるから温めて食べることに。じゃ、行ってきまーす」

水無は大学に行く準備ができたので、火無に声をかけて出かけよう  
とした。

「お姉ちゃん本当に行っちゃおうの？ 今日雨だから行かないほう

「がいいと思うよ?」

出かけようとしたが、火無に手を掴まれ、子犬の目で引き止められた。

「雨ごときで休むわけがないでしょ? 私はどこかの王様じゃないんだからね」

嘆息しながら水無は火無の手を引きはがす。

「お姉ちゃんは どうして毎日私を放って大学に行くの?」

むすーとしながら水無を睨む火無。

「だから講義があるからだよ」

今日はいつにもましてしつこい。

「嘘だ。あいつに会いに行くんだ」

「あいつって……だれ?」

神社神無のことだと思っけど惚けてみる。

火無は神無のことが嫌いらしい。これは水無にもわからないミス터리ー。

「お姉ちゃんは勉強じゃなくてあいつに会いに行くんでしょ。遊びに行くんだ。私とは遊んでくれないのに!」

もー! って感じて火無が怒った。

「違う違う。大学は勉強しに行くの。遊びに行くんじゃないの。神無と話すのはついでなの」

はあ。って感じで水無は火無の機嫌を取ることにした。このままだと奴が来る気配がするぜ。

「今日は早く帰ってくるから。で、遊んであげる」

水無は火無の頭をポンポン叩く。

「ホント？ あいつとじゃなくて私と遊んでくれる？」

「ホントホント。だからおとなしくしててね」

「うん。私お姉ちゃんが帰ってくるのおとなしく待ってる！」

「よし。じゃ、行ってきまーす」

「いってらっしやーい！」

いってらっしやいとおかえりを言うてくれる奴がいるというのは、悪くないんだけどなあ。

そう思いながら、水無は大学に向かうのであった。

1 - 1 水無と火無の朝はこんな感じ（後書き）

とりあえずのんびりほのぼの書きながらこの小説をどうしようかな  
ーって考えようかなーって思ってるのかなーって思いますます。

## 1 - 2 ・神無と水無はこんな感じ

水城水無と神社神無の大学生活は、講義に出る、どこかでテキストにテキストな会話をする、講義に出る、どこかでテキストにテキストな会話をする、昼食を食べる、どこかでテキストにテキストな会話をする、講義に出る、どこかでテキストにテキストな会話をする、講義に出る、どこかでテキストにテキストな会話をする、帰る。

そんな感じである。

「ということがあったわけだよ神無」

「ということがあったんですね水無」

「全く……火無には困ったもんだよ。さっさと出ていってくれないかなーと常々思っちゃうね」

「またまたー。そんなこと言って結構今の暮らしが気に入ってるんでしょ？」

「言うて良いことと悪いことがあるー!!」

「ごめんなさいー!？」

「神無は朝起きる度に、ああ……今日も無事起きた……。と、しみじみ思う生活が気に入ると思うのか!？」

「うん」

「え!？ マジで!？ じゃあ交代しよ！ 神無もある日朝起きたら体が縛られてるとかいう不思議体験したらいいと思うよ!」

「何その不思議体験!！」

「いや、聞いてくださいよ神無さん」

「いや、聞くに決まっていますよ水無さん」

「朝起きたら体が動かなかったわけよ」

「うんうん」

「最初は金縛りかなーって思ったわけさ。あ、金縛りってどうしてなるか知ってる?」

「あれは脳の働きの一部、意識部分は起きたんだけど、運動部分は寝てるから、起こるんだっけ?」

「なんでそんなことが起こるんだっけ?」

「レム睡眠時とノンレム睡眠時で、寝ている脳の一部が違うからだっけ?」

「幽霊とかは関係ないんだっけ？」

「関係ないという噂だけど、関係してた方が夢があるんじゃないかな？」

「ところで神無？」

「なにかな水無？」

「金縛りは関係ないんだよ」

「うん。知ってる」

「まあ、普通に雑誌とかまとめるロープで縛られてたから動けなかったわけだよ」

「普通だね。状況おかしいけど」

「で、私の隣ですやすや寝てる妹がいるわけだよ。他にはいないわけだよ」

「いないわけですか」

「犯人間違いなくこいつじゃん？」

「いや、わからないよ。もしかしたら寝ている間に泥棒が入ってきて水無だけ縛っていったかもしれないよ」

「うん。もしそうだったとしても、こいつ間違いなく共犯じゃん？」



「うーん……否定できない」

「否定しなくていいから。で、私は火無を起こそうとするわけだよ。一人じゃどうにもならないからね」

「犯人に頼るしかないとは困った状況だね」

「しかしなかなか起きないわけだよ。んー。とか言って抱き着いてくるありさまさ！ 私はロープ+妹に縛られたようなもんさ！」

「水無。ある意味幸せだね」

「神無。この状況が幸せに感じられるようになったら私は不幸だと思っよ」

「ふっ……つまり不幸か幸せかなんて、所詮主観でしかなく、みんなの幸せなんて存在しないってことか……」

「黄昏れてるとこ悪いけど先進めていい？」

「あ、どうぞー」

「で、なんとか火無を起こしたわけだよ」

「起こしたわけですか」

「そしたら火無だったわけだよ」

「火邪さんじゃなかったというわけですね」

「そうそう。こんなことするのは火邪なわけだよ。だから火無は口  
ープでグルグル巻きにされた私を見てビックリして言うわけさ。お  
姉ちゃんどうしたの!? 私は、お前のせいだよ! って叫び返して  
やったさ!」

「あ、手足だけじゃなくて体中グルグルだったんだね」

「え、ああうん。漫画みたいにグルグルだよ」

「それは後始末が大変そうだね」

「そうそう。大変だった……続き話していい?」

「あ、どうぞどうぞ」

「えーっと……どこまで話したっけ?」

「お前のせいだよ! って叫び返してやったさ! ってどこまで」

「ああそこか。で、私は火無に言ったさ。H e l p m e ! ! っ  
て」

「発音頑張ったんだね」

「そしたら火無は言うさ。えーって」

「えー」

「火無はさらに言うさ。これならお姉ちゃんずっとここにいてるよね  
って。私は言うさ。いや、冗談言っていないでさっさとハサミ持って

こいつて。そして私を解放しろと。そしたらあいつは言うわけさ！私、ハサミの使い方わかんないから無理だもん。だもん！？ 馬鹿か！？ あいつは私をなんだと思ってるんだ！」

「お姉ちゃんじゃない？」

「態度が姉に接するものじゃない気がするのは私だけ……？」

「ところで水無？」

「なにさ神無……」

「どうして縛られてたわけ？」

「え、それ今聞く？後でよくない？」

「今聞かなかつたら後悔するよ！？」

「そ、そうなの？じゃ、じゃあ答えるけど………わかりません」

「わかんないの？というか、グルグル巻きにされてる途中で水無はなんで起きなかつたわけ？ 起きない普通？ いや、寝ている間にグルグルなんてされたことないから普通がどうかわからないけどさ」

「……………熟睡してたから？」

「ふむ……………熟睡していた水無が悪い！」

「その結論はない！」

「姉は妹の愛に応えるべきか!？」

「き、聞かれてもわからない!!！」

「どうせ寝相が悪くて寝にくかったからグルグル巻きにされたんでしょ!!！ お姉ちゃんならもつと頑張りなさい!!！」

「なんか色々言いたいことあるけどとりあえず寝相をよくするためには何をどう頑張ればいいのか教えてくれるかな!？」

「意識しても意味ないよ。寝やすい環境を作ると寝相がよくなるらしい。あ、あと抱き枕とかいいらしい」

「あ、本当に教えてくれるんだ。というか知ってるんだ」

「つまりね。水無は火無さんを抱き枕として使えば万事おっけーだよ! 異論は認めない!!！」

「な、なんで異論は認めてくれないわけ!？」

「だってもう時間だし」

「あ、ホントだ。次の講義なんだっけ」

「ん。あれだよあれ」

「あああれかー。あれは眠くなるよね」

「でも寝ちゃダメだよ」

「寝ない寝ない。あ、というわけで今日はさっさと帰るから」

「りょうかーい。妹は大事にしてね」

「言われなくてもわかってますよー」

こんな感じでいい感じ？

## 1 - 2 ・神無と水無はこんな感じ（後書き）

最初から描写をする気がないというのはまあ楽チンと言えば楽チン  
だけどもあなんとというか、書いてて楽しいからいつか。

こんな感じで頑張ろー！。

えい、えい、おー。

勢いだけで生きてます。

ではではー

### 1 - 3 ・神無と舞歌はそんな感じ

三途舞歌の大学生活は、講義、図書館、講義、図書館、ご飯、図書館、講義、図書館、帰宅。

そんなもんである。

「とういわけらしいんだよ三途さん」

「とういわけなんですか神社さん。それは水無さんも大変ですね」

「うん。確かに水無は大変な気がするけど、案外楽しんでる気もするんだよ」

「楽しんでる、ですか？ 私はとてもじゃないですけどそうは思いませんけど……そんな妹本当にいるんですか？」

「本当にいるんだよ。でも、実際に会ってみると案外いい子なんだよ？ 三途さんも今度会ってみたら？」

「出来れば遠慮したいですけど、神社さんが言うなら会ってみます」

「三途さんが遠慮したいなら遠慮した方がいいと思うよ？」

「じゃあ遠慮します。そんな危険人物には会いたくありません」

「危険人物というほど危険じゃないと思うんだけどなあ……」

「ところで神社さんは何しに来たんですか？」

「え？ ああうん。本を借りに来たんだよ。そしたら三途さんがいたから話しかけようと思って……」

「そうですか……。ええ別に期待してませんでした……」

「思っていたような気がしたけどそれは夢の話だから現実ではないよ。うん。現実には三途さんに会いに来たんだよ。うん。本なんて二の次だよ。うん。本がついでだよ。うん。だからそんな悲しそうな顔しないで！」

「本当ですか！？ ありがとうございます！ 嬉しくて泣きそうです！」

「そ、そこまで言われるとなんだか罪悪感が……」

「それでどんな話をしましょうか！」

「え？ ああうん。そうだね……えっと……」

「……………神社さん」

「え、なに？」



「無理、しなくてもいいですよ……どうせ私に話すことなんて、ええないですよね……水無さんの話くらいですよね……」

「いやいやいやいや！そんなことないって！全然あるからね!？」

「本当ですか!？」

「ホントホント！だからとりあえずカッターを仕舞おうかな!？」

「あつ、すいませんでした。つい無意識で……」

「う、うん。む、無意識なら仕方ないよ……」

「それでどんなお話ですか？」

「え、あー……あつ！三途さん私が来るまで本読んでたでしょ？どんな本読んでたの？」

「これです」

「見して貸して触らせて！。『夢見がちな人間との付き合いかた』……変なタイトルだね」

「はい。タイトル通り夢見がちな人間との付き合いかたが書かれます」

「ふむふむ。『第一章・自分が神様だと思ってる人間との付き合いかた』……春風さん？」

「偶然です」

「偶然ですか……なになに……まずは相手がどのような神様を目指しているかを知ることが大事です……大事なんだ」

「大事らしいです」

「破壊神を目指している場合。一・実際に生物を殺していたら即警察に相談しましょう。二・物を壊していたら、先生に言い付けましょう。三・頼みを聞いてくれるタイプの破壊神なら、自分の壊してもらいたい物を頼むのもいいでしょう。実際に壊せなかつたらこそとばかりに馬鹿にして神の座から引きずり落としましょう……引きずり落とすんだって」

「当然ですね」

「当然かな？で、救済する神を目指している場合。これが春風さんタイプだね」

「ですね。あいつは関係ないですけど」

「えっと。一・金銭を要求する場合は、すでにそれは夢見がちの間ではないので距離を置きましょう。現実を生きている可能性がありません」

「残念ながらあいつは金銭を要求しません」

「残念かな？ まあいいや。二・金銭を要求しない場合は、うまいこと言って面倒なことを任せましょう。パシリだね」

「ですね」

「ふむふむなるほどな」。他には……………自分の前世は　だと言  
張る人、未来で俺は世界を救うと言い張る人、いつかビッグになる  
と言い張る人、玉の輿にのりたいなあとか言う人……………色々あるね  
」

「世の中には夢見がちな人が多いということです。全く嘆かわしい  
ですね」

「確かに現実を見ないのはよくないけど、ちょっとくらい夢を見な  
いと生きていけないと思うよ？あ、本ありがと」

「そうですか？私は夢なんて見ないでも生きていけると思っています」

「うーん。でも、三途さんだって毎晩夢を見てるでしょ？夢を見な  
い人なんていない。それってやっぱり、人は夢を見ないと生きてい  
けないってことだと思うな」

「……………神社さんにしては、夢見がちな意見ですね」

「そう？私的には素敵な意見な気がしたんだけど」

「私は毎晩夢じゃなくて悪夢を見ます。悪夢を見ながら生きて行く  
のは、つらいと思いませんか？」

「毎晩悪夢を見るって……………一度病院に行ったほうがいいと思うけど  
……………でも、悪夢だつて見方を変えればいい夢になるよ？そう考える  
と、三途さんは毎晩いい夢を見ていることになるね」

「……………いい夢ですか」

「どうかした?」

「いいえ……なんでもないです」

「……そっか。私はそろそろ帰らないと。三途さんは?」

「私はもう少しここにいます」

「ん、わかった。じゃ、またねー」

「はい。またいつか」

こんなもんである。

### 1 - 3 ・神無と舞歌はそんな感じ（後書き）

彼女たちはデフォルトで、小声で叫ぶの技能を会得しているので図書館で叫んでも怒られません。皆さんもその技能を会得してから図書館で叫びましょう。

しっかしあれですね。舞歌と神無は相性が悪い感じですよ。うまく書けません。

水無と神無は会話文だけでも許される気がする。私の中で。

でもなあ。会話文だけじゃダメだよなあ。でもなあ。俺から逃げろー！ってクマさんが言ってたしなあ……一人称二人称三人称。そしてナレーション……ナレー称？これはおもしろ（略）。

ではでは。

#### 1 - 4 ・舞歌と巡はこんなもんだ

春風巡の大学生活は、講義に出る、困ってる人に声をかける、講義に出る、昼食、ゴミ拾い、講義に出る、悩んでる人に声をかける、図書館に行く、もしくは月読と命に会いに行く、そして帰宅。

そんなもんだ。

「どづいづいことですか!?!」

「……………何がですか」

「なんとなく言ってみただけです」

「……………はあ」

「三途舞歌。今日は私とお喋りするです。そういう気分です。だから本を読むのをやめてこっち見るです」

「……………」

「無視ですか。しかし私は諦めるということを知らない人間味溢れる神様ですから諦めずに話しかけ続けるです!」

「……………」

「三途舞歌何読んでるんです？ちょっと私に貸してみます」

「嫌です」

「むっ！……………三途舞歌！私は常々思っていたです！私に対する態度と神社神無に対する態度がちよつと変わり過ぎじゃないですか！さつきは神社神無に簡単に貸していたじゃないですか！」

「……………なんで知ってるんですか」

「本棚の陰に隠れてずっと見ていたです！」

「……………」

「そんな目で私を見るなです！このゴミが。クズが。さつさと消える。みたいな目は傷つくですよ！？」

「……………態度が変わる理由を知りたいですか？」

「是非知りたいです！」

「神社さんは優しい人ですから大好きです。そしてお前は神様とか馬鹿みたいなことを臆面もなくほざいて馬鹿だから大っ嫌いだ。嫌いな人と好きな人の前で態度が変わるのも仕方がないと思いませんか？」

「はいです。好きあります。なにににです。夢見がちな人との付き

合いかたですか。夢見がちな人間が近くにいるですか？」

「……………お前だよ」

「それは心外です。私は現実をちゃんと見てるですよ？現実を見ずして神は名乗れないです」

「……………落ち着け私。怒るだけ無駄だ。言うだけ無駄だ。落ち着け。そつだ。落ち着け。あの色を見たいと思うな……………」

「カッターに話しかけるより、悩み事があるなら私に話すといいと思うですよ？」

「もう、我慢しなくても、いい気がする……………」

「嘘です嘘です！ごめんなさいです反省するです冗談です！だからカッターの刃を私に向けるのはやめるです！本も返すです！どうぞお納め下さいです！」

「……………もう帰ります」

「ちょっと待つです！もう少しお喋りするです！」

「嫌です。あんたと話すと、ホント、疲れますよ……………」

「……………もう帰ります？」

「……………でも帰ります。さよなら」

「アイスクリーム」



「……………あ、アイスクリームがどうしましたか？」

「アイスクリームを奢ってやるです。水城水無から聞きましたですよ？アイスクリームが大好きらしいですね。今日はアイスクリームが食べたい気分だから帰りに奢ってやってもいいですよー？」

「仕方ないですね。あなたがそこまで言うならお喋りに付き合っただっていいですよ。さあ早く喋りなさい。うたいなさい。そして一緒に帰りましょう。そして私にアイスクリームを奢れ」

「わ、わかったです……………さ、三途舞歌？顔がにやけてるですよ？」

「気のせいです。さっさとくっっちゃべれ」

「さ、三途舞歌？私がちよっと引くくらい顔が輝いてますですよ？」

「アイスクリームを食べれるならそのくらい当たり前でしょうが！さあ、さっさと話してさっさとアイスクリームを私に奢りなさい！」

「わ、わかったです。わかったですから身を乗り出して私の胸倉を掴めのをやめてくれです！」

「やめます。じゃ、帰りましょうか」

「なぜです！？まだ全然喋ってないですよ！？」

「ちっ。まだ満足しませんか。ええええわかりましたよ。アイスクリームのためなら我慢します。本当はすごい面倒ですし帰りたいたしあなたと話すの嫌ですけど我慢します。ええ我慢しますとも」

「ど、どんだけ私と話すの嫌なんですか！さすがに私も傷つきますよ！？そしてどんだけアイスクリームが好きなんですか！」

「嘘ですよ。口に出したほどは、実は嫌じゃありません。嫌ですけど。嫌ですけどそこまで嫌じゃありませんよ。嫌ですけど。嫌ですけどね？」

「そんなに嫌嫌言わなくてもいいじゃないですか……神様っぽいのを目指してるとはいえ人間ですよ傷つきますですよ……」

「私がどれだけアイスクリームが好きかですか？そうですね……」

「な、慰めてくれてもいいと思いますですよ！？」

「大丈夫ですか？」

「心がこもってないです！」

「心こめてないですから」

「心こめろです！」

「無理です」

「なぜです！？」

「慰める気がないからですよ。何か私悪いこと言いましたか？私は本当のことを言っただけですよ？あなたが勝手に傷ついただけですよ……」

「いつかその性根を叩き直してやるです！」

「私の知らないところで頑張ってください。さっ、行きましょうか。もう十分でしょ？アイスクリームが私を待っています」

「まだ奢ってもらえるつもりですか！私はご立腹です！」

「え！？奢ってくれないんですか！？嘘ついたんですか！？………終わった。何もかも。……裏切りだ。これは取り返しがつかない裏切りだ………万死に値する」

「冗談ですジョークです！奢ってやるです！カッター怖いです！」

「よかった……。じゃ、行きましょうか。美味しいアイスクリーム屋を知ってますからそこに行きましょう」

「アイスクリームはリスキーです……三途舞歌が話してくれるんですけど色々とめんどくさいことになるです……」

「なにブツブツ言ってるんですか？早く行きますよ」

「まあいいです。私の三途舞歌矯正計画はまだ始まったばかりです！」

「なに馬鹿なこと言ってるんですか。あつ、二歩後ろを歩いてください。あなたみたいな人と友達だと思われたくありませんから」

「殺意がわいたです！絶対に隣を歩きます！」

「……………我慢だ私。全ては、アイスクリームのために」

「いつかその性根、完膚なきまでに叩き直してやるです……………」

どんなもんだ。

#### 1 - 4 ・舞歌と巡はこんなもんだ（後書き）

このやり取りは全て図書館で小声で叫んで行っていると考えると馬鹿らしくておもしろーいっていう自画自賛。

はい。まあ。とりあえず。こんなもんだ。やっぱり基本組み合わせ神無水無。舞歌巡。が1番相性がいい気がするぜー。

次回からは会話だけじゃなくそうかなー。面倒かなー。頑張ろうかなー。

ではではまたまた次回次回ー。

## 1 - 5 ・月読と命は案外普通

月読ちゃんと命ちゃんは、暇だったので大学に遊びに来ました。本当は勝手に入っちゃいけないんだけど、まあいいですよ。そんなのあってないような規則ですし、子供ですから。

「巡姉ちゃんどこにいるのかなー」

「んー。ここー!」

「ここ?」

「うん!きつとここ!」

二人は逸れないようにちゃんと手を繋いで、大学構内をてくてく歩いて行きます。

大学構内には建物がいっぱいあるし、ただっ広いので、巡お姉ちゃんがどこにいるかわかりません。あの人はいつも決まったところにいるわけじゃありませんから。

とりあえず月読ちゃんと命ちゃんは、なんとなく巡お姉ちゃんがいそうな建物に入りました。

「わー。ひろーい」

「巡お姉ちゃんどこかなー」

二人が入った建物は、新しく作られた綺麗な建物で、大きな教室がある建物のようです。

ロビーのような場所には、この時間講義がない人たちが、友達同士集まって話していたり、本読んだり、トランプしたり、PSPしたり、DSしたり、パソコンしたり、寝てたりしていました。

どうやら今は講義がある時間のようなので、ロビーにいる人たちは多くはありませんが、それなりにロビーにいた人たちが、明らかに場違いな月読ちゃんと命ちゃんに注目しました。

至るところで小声で月読ちゃと命ちゃんに対する会話が始まりました。

「なんで子供が？」

「誰かの子供かしら？ちっちゃくて可愛いわね。私もいつかあんな子供欲しいなあ」

「そういえばあいつ、できちゃったから大学辞めるらしいぜ」

「ホント？」

「だから避妊はちゃんとしないとって言ったのに……ということは結婚？」

「籍はいれるって言ってたかな。あああと、結婚式はあげないけど、なんか身内と友達呼んで小さいけどパーティーするらしいぜ」

「あ、それは僕も聞いた。だけど子供が出来たのは知らなかったなあ」

「……私、どつちも知らなかったんだけど」

「……」

「……」

「これはこれから知らされるってことよね？それとも私はあの子に

とって友達じゃないってことかしら。私結構仲良かったと思うんだけどなあ。ねえ、どう思う？どうして顔を背けるのかな？ねえ、どうしてのかな？」

「そっくりだけど双子か？」

「双子って可愛いよな」

「双子じゃなくて子供っていうだけで可愛いだろ」

「まあそうだな。っておい、お前どうした？なんか目がやばいぞ」

「……双子萌え」

「……俺、こいつと縁切るわ」

「俺も。まさかこいつがここまで末期だとは思わなかった」

「子供かあ。可愛いくて汚けがれを知らない……でも成長したら……はあ」

「ちよつと、なんで私のほう見てため息つくのよ」

「時の流れは……はあ」

「殺されたいのかしら。それともなに？あなたは子供みたいに可愛いくて純粋な子のほうが好きなの？」

「いや、君みたいな子が好き」

「……バカ」

「なあ」

「ん？」

「あのカップル殺していい？」

「やめとけ。もっと悲しくなるだけだ」

一部の良好だった人間関係を歪ませながら、月読ちゃん命ちゃんは巡お姉ちゃんを探します。

「いないねー」



「うん。どこかな」

ここにはいませんでした。

二人は別の場所を探しに行きます。

「つくよちゃん……みこともう疲れちゃったよ」

「うん。僕も……」

「巡お姉ちゃん、もう帰っちゃったんじゃないかな……」

「うん……僕たちもお家帰ろ」

「うん。夜ご飯なにかな？」

「カレーかな？」

「みことはシチューがいいなあ」

「今日のお手伝い当番誰だっけ？」

「確か、あずきちゃんたちだよ」

「じゃあシチューだよきつと」

「やった！」

その日。

結局二人は巡お姉ちゃんには会えませんでした。

二人はしょんぼりしながら帰って行きました。

その日。

大学構内の至るところで、人間関係が時にはいい意味で時には悪い意味で歪んだことを、二人は知るよしもありません……

## 1 - 5 ・月読と命は案外普通（後書き）

これが噂の子供パワーです。そこにいるだけで場を掻き乱すという例のあれです。

しっかしあれですね。月読と命は二人だけだとうまく会話が作れません。もう一つ何かないとダメみたい。不思議だぜー！。

とりあえずこれで基本的な組み合わせは網羅したのかな？いや、まだまだかな？

次は誰を書こうかなあ。

2・1 三度の飯よりウィッチが好き(前書き)

6月8日

## 2・1・三度の飯よりウィッチが好き

始まり始まり〜

「ちょっと聞いてくれますか!?!」

「あつ、春風さんどうもー」

「……急に現れたよこいつ」

神無と水無は昼休み、いつも通り二人で特に何の意味もない会話をしていました。すると、巡が急に現れました。

「巡さん何の用でしょうか?私と神無は、サンドイッチなのかサンドイッチなのかを話し合うのに、忙しいんですけど?」

水無はどうやら巡が現れたのが嫌なようです。しかし勘違いしてはいけません。水無は神無と二人で話していたのを邪魔されたのが嫌なのではなく、巡が出てくると面倒なことになると学習しているからなんです。誰でも面倒なことや、厄介なことは遠慮したいですからね。

「そうそう。春風さんはどっちだと思う?私はどっちでもいいと思う」

しかし神無は厄介なことでも面倒なことでも堪えるタイプなので、巡を邪険に扱うことはしません。ストレスが溜まるタイプですが、優し

い人ですね。

「なんですかそのどうでもいい議論は！です。サンドウィッチに決まってるです！サンドイッチのわけがないです！サンドウィッチは魔女が二人で作ったからサンドウィッチです！サンドイッチだったら二人が作りたいたものが一致して出来たことになるです！はいです！これでこの話は終わりです！私の話を聞くです！」

巡はサンドウィッチ・サンドイッチ論争に終止符を打ち、許可を取らずに椅子をよそから引きずってきて神無と水無と同じテーブルにつきました。さすが神様を目指す人間ですね。遠慮がない。

「あれ？サンドウィッチの由来ってそんなのだっけ？」

神無は、水無に尋ねます。絶対違うと思っけていても、他の人に確認するのが重要なのです。

「いや、確か……魔女を三回殴ったあとに食べたからサンドウィッチじゃなかった？」

水無はどうやら意地でもサンドウィッチの話が続ける気のようにですね。

「あれ？サンドウィッチ伯爵がどうかじゃなかったっけ？」

神無は腕を組んでうーんと考え中。もしかしたら自分が間違っていたかもしれないと思っけています。三人いて二人が魔女説を真顔で言っけてきたら、不安になるのも仕方ありませんね。うん。仕方がない。

「神社神無。それは違つてです。それは魔女否定派が広めた嘘の由来です。本当は魔女が二人で作つたからサンドウィッチです。いいですか神社神無？遙か昔はサンドウィッチは呪具だったのです。魔女が二人、呪いを込めて具材を作り、そして最後の仕上げに、二人でその具材をパンでサンドし、呪いたい相手に送つたのです。二人の呪いの矛先、呪いの強さが同じではないと失敗してしまう上級呪具なのです」

「そ、そうなの？」

神無は自分が今まで食べていたサンドウィッチがそんな恐ろしいものだったと知つて、驚きました。断じて巡が、そんな戯言を真面目に話して引いたわけではありませんよ？

「ふうー。巡。神様とかなんとか言つてるわりにはそんな嘘情報を信じているなんて……がっかりだね」

水無は、首を横に振り、ふう。やれやれだぜ。とアピールしました。どうやら意地でもサンドウィッチの話題を続けるために、巡を挑発したようです。

「む。それはどういう意味です？」

巡は簡単に挑発にのりました。案外単純なのです。

「巡。あんたが言つた説は魔女肯定派悪者グループが作つた………デマだ！」

水無は巡を指さし断言しました。効果音は、バーン！です。

「そ、そんな馬鹿な！？です」

巡は目を大きく見開いて驚ききました。効果音は、ガーン！です。

「え、あの、あれ？伯爵は？伯爵関係ないの？ホントに？」

神無は二人を交互にみました。効果音は、オロオロです。

「神無。伯爵はスケープブゴートだよ。そんな、サンドウィッチ伯爵が最初に作ったんだか食べたんだか知らないけどさ。サンドウィッチ伯爵だからサンドウィッチなんてありえないよ。ジェニファーが作ったらジェニファーかってんだよ。そして巡の説は魔女が悪い奴と思ってる奴が流したデマさ。真実は、魔女狩りと称していたいな薬剤師や病人を殴ったあとに食べたから、サンドウィッチ。右手で殴り、左手で食べるのさ。左手で食べながら、右手で殴るのさ。なんて酷いことをするんだ！だから私たちはサンドウィッチを見る度に思い出すべきなんだよ！歴史の闇を！サンドウィッチを見る度に想像するべきなんだよ！差別や偏見のない素晴らしい世界を！」

「……………」

「……………」

水無はサンドウィッチを熱弁しました。神無と巡はポカーンです。

「……………こ、こほん。あっ、もうこんな時間だー」

水無はわざとらしく咳ばらいをして、わざとらしく腕時計で時間を確認しました。どうやら自分でも熱く喋り過ぎたと反省しているようです。



「神無、講義に行こう。さあ行こう」

「え、ああうん。そうだね。じゃあ、また。春風さん」

「はいです。またです」

水無と神無は、次の講義をやっている教室に行ってしまう。  
残ったのは巡だけ。

「……………はっ！やられたです！」

残ったのは結局自分がしたかった話ができなかった、巡だけでした。  
とさ。

おしまい……

## 2・1・三度の飯よりウィッチが好き（後書き）

どーこーかーで、見たよーなネタ。しかし記憶にないから気のせいだー。

サンドウィッチ。サンドイッチ。

どっちでもよくない？よくない？

僕は。僕わ。と似たような間違え？小学生？小学生の間違え？違うか。

サンドウィッチ伯爵って誰だ。

ではでは

## 2・2・昔と今はだいぶ違う

始め。

「ちょっと聞いてくれますか!？」

「……………」

舞歌がいつも通り講義も終わったので、いつも通り図書館で本を読んでいると、巡が現れました。が、舞歌は巡を一瞥して読書に戻りました。

「聞いてくれるですか。そうですね。さすが三途舞歌です。優しさに満ち溢れてるです。どっかの水城水無とは心の広さが違います。本を読むのをやめて私の話に耳を傾けるともっとポイントアップですよ?」

「……………」

「まあいいです。高望みはしないです。なんだかんだ言っただけ私のお話を聞いてくれるとわかっていますよ」

「……………」

「わかっているです。わかっているから別に本を読み続けていても悲しくないです。悲しくなんかありません。泣いてなんかありません…

…」

巡は机に顔を伏せてしまいました。

「はあ……………なんでもいいからさっさと話せ」

舞歌は本を閉じて、話しを聞いてあげる態度を見せました。話しを聞いてさっさと帰ってもらおう作戦です。

「さすが三途舞歌話しがわかる奴です！」

ガバツと顔をあげてニコツと笑います。

「話しというのは月読と命のことです」

「……………ああ、あの子供」

「です。月読と命がたまに大学に来ることは知ってるですよね？」

「……………」

「無言は肯定と受けとるです。二人でとことこやってくるわけです。この前も来たみたいですよ。どう思ってます!？」

「いや……………どうも思いません」

「危ないと思わないですか!？ か弱くて可愛い子供が二人で魔の巣窟である大学に来るなんて!! 何かあったらどうするですか!？」

「魔の巣窟って……………そんなに危ないとこじゃないでしょ!？」

「何を言ってるんですか!？ 大学に行く奴なんてたいてい変人です」

よ！？ 大学なんて小中高で社会に適応出来なかった人間の集まりですよ！？危険がいつぱいです！」

「いや、それは暴論……………そんなに変な奴いないでしょ……………目の前にいるけど」

「私の目の前にもいます」

「……………」

「……………」

「……………別に大学だけが危ないわけじゃない」

「です。しかし子供が二人でとことこ歩くのが危ないと思うです」

「いや、別に平気ですよ。私は昔、一人でよく出歩きましたけど、ご覧の通り、まだ死んでませんよ」

「昔と今は違います！ 昔は口裂け女に気をつけないといけない塾帰りが変質者に気をつけないといけない時代になっているです！ トイレでは花子さんに気をつけないといけないのがカメラに気をつけないといけない時代ですよ！？」

「……………はあ、どうでもいい」

「どうでもいいとはなんですか！ 子供を守るのは大人の仕事ですよーっ。」

「自分を守るのは自分の義務です」

「子供にそれを求めるのはこくつてもんです！」

「じゃあ、あなたが一日中一緒にいればいいじゃないですか。あなたに会いに来てるんでしょ？ それで万事解決ですよ」

「それが出来ないから困ってるです。私も三年になつて色々大変です。月読と命に一日中構うなんていうことは出来ないです」

「じゃあ、大学に来ないように言えばいいじゃないですか。で、あなたが出向く。それで万事解決です」

「私も言ったですよ。危ないから大学に来ちゃダメですよーと。私も休みはそつちのお手伝いに行くからその時遊びますですよーつて。その時はわかつたつて言つてくれたです！ でもしばらく経ったら、やっぱり来ちゃった。お姉ちゃんと遊びたいんだもん。だって休みのときはお姉ちゃん、みんなのお姉ちゃんだもん。あんまり遊べないもん……………ですつて！ 可愛いですー！！」

巡歡喜。

「……………もう、勝手にしろ」

舞歌嘆息。

「そんなこと言わずに協力して欲しいですー！」

「……………職員さん、とかに頼めばいいじゃないですか。大学に来ないように見張ってくれつて。それで万事解決」

「職員さんというか、まあシスターさんみたいな人が確かにいますですけど、あの人たちも忙しいです。私みたいにボランティアの人もいますですけど、子供はたくさんいますですから、月読と命だけを見張ってるなんて無理です」

「じゃあもう諦めるしかないですね。あの二人が不幸な事故に遭わないように神様にでも祈ってればいいじゃないですか。それで万事解決ですよ」

「三途舞歌。神様に祈ったところでどうにもならないと知りながら、そういうことは言わない方がいいです」

「……………」

舞歌は読書に戻りました。

「無視ですか。まあいいです。だから私は行動する神様を目指します。というわけで三途舞歌。協力するです」

「嫌です」

「ま、まだ中身を言ってないですよ？」

「どんな内容だとしても嫌です」

「ただちよっと、ボランティアに参加するだけですよ？」

「嫌です」

「子供と遊ぶのは楽しいですよ？」

「嫌です」

「月読と命だけを見ていればいいだけですよ？」

「嫌です」

「いいことすると」「嫌です」「神様が」「嫌です」「心が」「嫌です」「あい」「嫌です」「……………こんなに頼んでるのに」「嫌です」

「……………三途舞歌にはがっかりです！」

「そうですね。じゃ、さつさといなくなつて下さい……………私の相手をする暇があるなら他に相手をするべき人がいませんか？」

「む……………三途舞歌のくせにまともな事を言つです」

「……………」

「まあ確かにそうですね。私とした事が三途舞歌とお喋りするのに夢中になつてしまつたです。楽しいのがいけないですよ！？」

「……………知るか」

「あれ？三途舞歌？どこことなく顔が赤いですよ？照れたですか？照れたんですか？それともこれは風邪気味だからとか言い訳するですか？わざとらしく咳とかする」「さつさと行け！」

「三途舞歌が怒つたですー！」



わーい、怒った怒ったーって感じで、巡が走り去りました。

「全く……」

舞歌はため息をついて、読書に戻りました。

終り……

## 2・2・昔と今はだいぶ違う(後書き)

こう………なんというか………なんか物足りないよね。

私はなぜか口裂け女が好きなんですよ。いや、付き合いたいかそういう意味じゃありませんよ？

口裂け女マジ怖いですよね。走って逃げたいですよね。ま、逃げれないんですけどね。

ではではー

## 2・3・識別反応『黒』コマです

始めまして

「ねえ、水無……」

「ん、なに？」

神無と水無はいつも通り講義が終わって、いつも通りくつちゃべっ  
ていました。

「あそこをトコトコ歩いてるの……月読ちゃんたちじゃない？」

「あー……ホントだ」

話している途中、月読ちゃんと命ちゃんがいるのを見つけました。  
二人は手を繋いで、キョロキョロしながら歩いています。明らかに  
人を探しています。と、こっちに気付きました。

「おーい」

神無は二人に手を振りました。二人も手を振り返して、トコトコか  
ら、スタタターになってこっちに近づいてきます。水無は、また厄  
介なことになりそうだ。と、心の中でため息一つ。

「こんにちわー！」

命ちゃんは元気よく神無にご挨拶。

「はい、こんにちわー」

神無もニコニコ笑ってご挨拶。

「巡姉ちゃんはいないの？」

月読ちゃんはキョロキョロしながら水無にご質問。

「いませんよー。たぶん図書館じゃないかなー。というわけで、図書館に行ったほうがいいよー。お姉さんたちは忙しいからねー」

水無は愛想笑いで厄介払い。

「神無お姉ちゃんたち忙しいのー？」

命ちゃんは首を傾げて疑問形。

「ううん。全然忙しくないよー？今はねー。あんパンの上になんてゴマがあるのかを話しあってたんだよー」

神無はニコニコ笑顔で真実暴露。

「嘘ついたの？」

月読ちゃんは子供特有の純粹な目で水無を断罪。

「い、いや、嘘じゃないよ？ 私たちはあんパンのゴマについて真剣に話しあってたんだよ？ ねえ神無？ 私たち、あんパンについて議論するのに忙しいよね？ 子供の相手する暇ないよね！」

水無は子供の純粹さから逃れるように、神無に救援要請。

「いや、全然不真面目に話してました。命ちゃんたちはあんパン好きかな？」

水無は裏切られました。

「みこと好き！あんパン美味しいもん！」

「僕はあんパンよりジャムパンが好き！」

「そっかそっかあ。あ、二人とも座る？つと……椅子がないね」

残念なことに回りに空いている椅子はありません。というわけで、神無はどうしようかと考えました。

「よし。命ちゃんは私の膝の上に座って、月読ちゃんは水無の膝の上に座ろう」

考えた結果、そういう結論になりました。どうにかしてこいつらを巡りに引き渡さなければ、と思っていた水無は、「は？」と言いました。命ちゃんと月読ちゃんは、わーい！と思いました。

「よっ、と」

神無は命ちゃんを抱き抱えて（軽い軽い）自分の膝の上に座らせました。

命ちゃんと神無は顔を見合わせて、えへへへー。と笑いあいます。ほほえましいですね。

「……………」

月読ちゃんは、水無を無言で見ます。はよして。と、訴えてるに決まってるじゃあ、あーりませんか。

「……………」や、やるの？ マジで？ きみ、私の膝に座りたいかな？  
座りたくないよねー？」

水無は、膝の上に座らせるのが恥ずかしいのでやりたくないみたいです。

「僕、座りたい」

水無は、月読ちゃんにも裏切られました。

「くっ……………」

水無は、引き攣った笑みを浮かべながら、月読ちゃんを膝の上ののせました。

月読ちゃんと命ちゃんは、えへへへー。と笑いあいます。

そんな二人の頭上では、水無が恨めしそうな目で『カーンーなー？』というメッセージを神無に送って、神無がニコニコ笑いながら『まあまあたまにはいいじゃないか』というメッセージを水無に返しています。二人が気付くはずありません。

「二人はどうしてあんパンの上にゴマがのってるか知ってるかな？」

神無は、命ちゃんの頭を撫でながら話題を振ります。

「みことは知らない」

命ちゃんは、撫でられて気持ちよさそうです。

「僕も知らない……?」

月読ちゃんは催促するように水無を見ます。

「……………ぐっ……………これで満足か!いやしんぼうめ!」

水無は気付かないフリをしていましたが、月読ちゃんのうるうるした目に屈服したようです。乱暴に月読ちゃんの頭を撫でます。撫で回します。月読ちゃんは、キヤー!あーたーまーがー!ってなりながらも、嬉しそうです。よかったね。

「水無はどうしてあるって言ってたっけ?」

「え? あー……………昔はあんこが高かったから作るの大変で、ゴマを入れて増量していた名残というか成れの果て! ……だったかな?」

自分が考えたテキストな話を思い出すのも結構大変なのです。

「そっなのー?」「のー?」

子供たちは純粹です。

「うーん。命ちゃんたちはどうしてだと思っかな? 考えてみようか」

「「「はーい」」」

神無の言葉を受けて二人は、腕を組んで考え始めます。二人とも考えるポーズが一緒に、神無は、かーわーいーいー！ と思いましたが、水無は、足が痛い。と思いました。

「えつとね、みことはね、ゴマも食べたかったからだと思うー！」

命ちゃんが先に元気よく答えを発表しました。神無を見上げて、ねえ、これ合ってるー。と輝く笑顔で聞きます。

「命ちゃんはゴマも好きなのかな？」

「えつとねー、んーと……好きでも嫌いでもないよ！」

ですよねー。

「そっかー。あのね命ちゃん。ゴマは、とっても健康にいいんだよね？ だからね。あんパンと一緒に食べたい人もいたかもしれないよねー」

神無はニコニコ笑いながら、命ちゃんの答えを認めてあげました。命ちゃんは嬉しそうです。よかったねー。

「僕はね、僕はね………なんかあんパンにゴマのつてると、いい感じだからだと思うー！」

月読ちゃんも命ちゃんに負けじと、こんなんでしょうか？ と発表しました。水無に、どんな感じー？ と聞きます。

「いい感じって………あんパンにゴマのつてると、どくらへんがい



「い感じなの？」

水無は、本当に不思議そうに聞きました。別に意地悪してるわけじゃないよ？

「えつとね、えつとね……………色？」

月読ちゃんは水無を見ながら首を傾げました。自分でも、よくわかんないんですね。

「色って……………黒？ あんこも黒じゃん」

水無も、首を傾げます。

「でも、パンは茶色だよ？」

「パンは茶色だけど……………だから？」

「だから、黒なのゴマなのいい感じなの」

「……………そっか」

「うん」

「……………あんこだけじゃ、いい感じじゃないの？」

「うん」

「そっか……………ゴマは、いい感じなんだ」

「うん」

「そっか……………」

「……………」

「なら……………仕方ないね」

「うん」

「……………」

「……………」

「……………ん？ いいのか？ 私これでいいのか？」

「？」

水無はなんだかよくわからなくなりましたが、とりあえず月読ちゃんの頭をポンポン叩いてあげました。月読ちゃんもよくわからなくなっただけ、それで満足しました。

「神無お姉ちゃんは どうしてだと思っのー？」

「ん？ 私？ そうだなあ……………命ちゃんは、あんパンに種類があるって知ってる？」

「ううん。知らない」

「僕知ってるよ！ えっと……………あんこが違うんだよね！」

「はいその通り。じゃあ、水無君。知っていた月読君を褒めてあげたまえ」

「え？ ああはいはい。わかりましたせんせー。はい、よくできましたねー」

なでなで。えへへへー！

「知らなかった命君には、ほっぷぶにぶにの刑だ」

ぶにぶに。きゃー。

「いいですか皆さん？ あんパンにはつぶあんとしあんがあります。ですが、あんの違いは傍目からは見分けがつきませんね」

「はためってなにー？」

「命君。つまり、食べてみないとわからないということですよ」

「なるほどー」

「ま、まさか先生……！」

「そうです水無さん。察しがいいですね。あんパンの上のゴマは、それを見分けるためにあるんです……！」

驚愕の事実！

「な、なんだってー！？」

その事実には水無が最初に大袈裟に驚いて。

「な、なんだってー？」

次に月読ちゃんがとりあえず水無の真似をしてみても。

「なんだってー！」

そして最後に命ちゃんがおもしろがつて、二人の真似をする感じ。

「ちなみに、ゴマがある方がつぶあんだよ？」

「へえー」

「へえー」

「へえー」

へえー。

4へえーで、おしまい・・・

## 2・3・識別反応『黒』ゴマです(後書き)

こしあんはケシの花らしいよ。たぶん。

ほら、あんパンまんっていますよね。

あいつはたしかつぶあんですよ。

ということは、あんパンまんの目とかほっぺとかは、ゴマってことだね。たぶんそうだね。あれはゴマ成分だね。違うか。

では

2・4・首を洗いたまえ。 浄めたまえ（前書き）

一章が一日……。

何月何日かは一話目の前書きに……。

基本的に投稿日と一致……。

## 2 - 4 ・首を洗いたまえ。 浄めたまえ

始まった。

「ジャムパンのジャムは何が一番美味しいと思いますかー？」

「みことはイチゴー！」

「僕はリンゴー！」

「私はチョコレートー！」

「ちよこのジャムなんてあるの？」

「チョコレートパンはチョコレートパンじゃないの？」

「君達は冗談という言葉を知らないの？」

という会話を繰り返していた四人。

「月読！ 命！ ここにいたですか！」

そこに巡が現れました。

「あつ！ 巡姉ちゃんだ！」 「巡お姉ちゃん！」

月読ちゃんと命ちゃんは、水無と神無の膝の上からピョンと飛び降り、ワイって巡に駆け寄りました。神無はちよっぴり残念。水無

はホツと一息。

「やっぱりいたですか！ 全く……子供二人で出歩くのは危ないですと言いませんでしたか？」

「別に危なくないよ。ね、命」

「うん。今日もね。知らないお姉ちゃん達から飴もらったけどおいしかったもんね。みんな優しいもん！」

「うん！美味しかった！」

「やっぱりあなた達だったですか！ 帰る途中に、さっきの子達可愛かったよねー。うん。飴あげたら目が輝いてたよねー。リヌみた이었다よね。という会話を聞いてまさかと思ったです！ 知らない人から飴をもらっちゃダメと教えましたか！？」

「うう……でもー」

「いい人っぽかったから……」

「いい人っぽい悪い奴は世間にはいっぱいいるですよ！？」

「「ごめんなさい……」」

しょんぼりん。

「全く……ちゃんとお礼は言ったですか？」

「うん！ありがとーって言った！」



「うん！ちゃんと言った！」

「そうですか。お礼が言えたのは偉いですよ」

頭よしよし。えへへへーx2。

「ほら、帰りますですよ。話しは帰ってからです。あなた達に言ってもダメみたいですから、みんなと話さないとです。神社神無にも言いたい事はあるですが、今日はやめておいてやるです。首を洗って待つてるです。水城水無は………生きていたら話しをしますですか？」

巡はニヤリと悪そうに笑います。水無は首を傾げます。意味が全くわかりません。死ぬ予定はありませんからね。

「バイバイ！ 神無お姉ちゃんに、えっと、水無お姉ちゃん！」

「またねー！」

「うん。また遊ぼうねー」

命ちゃんと月読ちゃんは、巡と手を繋いでいない方の手で、元気よく手を振って帰って行きました。

神無はニコニコ笑いながら、手を振り返します。水無は腕を組んで、巡の言った意味を考え中です。

「どうしたの水無？」

「いや、どうしたのって神無。巡の言った言葉の意味を考えている

んだよ」

「ああ、そんなこと考えてたの？」

「そんなことって、神無意味わかったの？」

「うん」

「教えておくれ」

「いいですよー。春風さんが言った言葉の意味はね」

「うん」

「切腹ってあるじゃん？」

「うん？」

「で、介錯の時首切るでしょ？ その時首が汚れてるのは恥ずかしいことらしいんだよね。」

「神無さん？」

「だから、切腹の前には綺麗に首を洗っていたらいいよ？ まあつまり、首を洗って待ては、殺されてもいいくらいの覚悟を持って待つてなさいって意味だよ」

「……………神無さん。わざとかな？」

「水無さん。わざとだよ？」

「じゃあ、私が知りたい巡の言葉の意味はわからないということかな？」

「いや、それがですね水無さん……私、わかるんですよ」

「わかるなら最初からそっち説明しようよー！」

「説明してほしい？」

「是非ともお願いします」

「では水城水無様、後ろをご覧ください」

神無は水無の後方を指さします。水無は当然そちらを見ます。そして遠くに妹の姿を確認。こちらで確認出来たということはすなわちあちらも確認出来るということだと瞬時に状況を理解し、ついでに巡の言葉の意味も理解し、この場を離脱した水無は、忍者スキルが高いですね。

「また明日ー」

クスクス笑いながら神無は水無を見送ります。

「逃げられましたか。神無さんが教えなければ後ろから近づいて首をクルツて出来たんですよ？」

そして交代で火邪が、水無が座っていた席に座ります。

「追わなくていいの？」

「今日は追わなくてもいいんです。それに、逃げたところで姉さんが帰れる場所は一つだけですから」

「そっか。今日は追わなくていいって、どづいこと？」

「今日は大学に来て見たかっただけです。姉さんにプレッシャーをかけるのはついでです」

「見てみたかったって、火邪さんが？」

「まさか。火無です。私は大学なんかに興味はありません。姉さんの切った爪くらい興味がありません」

「その例えはよくわからないけど、じゃあなんで火邪さんが？」

「説明するのは面倒ですが、珍しく私はやることがないので説明します。姉さんは火無が、私たちが大学に来るのを禁止しています。そんな約束焚火に焼くべたいですが、約束は約束ですからそれは守らないといけません」

「うん。約束は守らないといけないね」

「しかし大学には行ってみたい。大学に行くとしたら当然姉さんが通っている大学です。行くなら姉さんとも遊びたいです。でも行くのと怒られるし嫌われる。でも行きたい。というわけで、私です。これなら自分は怒られずに大学に行った達成感は得られる。ついでに姉さんに早く帰ってこないと約束なんてどぶに捨てるというプレッシャーもかけられるという、火無的には一石二鳥です」

「はあー、なるほど。それは、ご苦労様だね。損な役割を押し付けられてるみたいで、嫌にならないの？」

「嫌になるわけありません。それが私の役割ですし、姉さんが怯えて逃げる様を見るのは気持ちいいし、神無さんとも会話できましたから」

「えっ、あー……まあ、ありがとうございます？」

照れるー。

「そうそう、さっき神様に会いました。さすが大学ですね」

「さすがかどうかは置いといて……それは凄いね。神様どうだった？」

神無は聞かれなければ答えない、中立的立場を望むので、その神様に心辺りがありすぎても、何もいいません。

「なかなかでしたね。まずなぜか私の名前を、私の存在を知ってました。私が理由を聞くと、神様だからとかなんとか。神様なんて私は生まれてこの方初めて見ました。珍しいです。というわけで私は、神様を捕まえて姉さんに料理してもらおうと思って、まずは弁慶を砕くことにしました」

「……あー、火邪さんってさ。基本的に水無以外には暴力を振るわないと言ってた？」

「そうです。私は姉さん以外の生物には基本的に暴力は振るいません」

「じゃあ、なんで？」

「なんでって、何を言ってるんですか？神様は生物じゃありません。どんな形をしてもどんな言語を使っても、生物じゃないから何をしても許されるんですよ？知らないんですか？あんなの空き缶と同じです。空き缶を踏み潰すのはいけないことですか？」

「い、いや。空き缶を踏み潰すのはいけないけど……まあ、いつか。それで、どうだった？神様の弁慶砕けた？」

「いいえ。さすが神様です。私の蹴りを避けました。当然私は追撃し、鳩を狙いましたが、素早くで当たりませんでした。残念です。神様鍋とか食べてみたかったのに」

「神様鍋……」

「しかもさすが神様です。足も速くて私は見失ってしまいました。そして私は諦めずに神様を探していたら、姉さん達を見つけたんです。そういえば神無さん。神様見ませんでしたか？」

「え？ あー、見てないよ」

神様見習いなら見ましたけどね。

「本当ですか？嘘をついたら三日三晩監禁しますよ？というか嘘ですね。今日から三日、自室に監禁します」

「嘘じゃない嘘じゃない！私神様なんて見てないから！だから監禁はなし！おとなしくそこに座ってて！腰を上げないで！」

「残念です」

火邪は、本当に残念そうです。三日も神無と一緒にいれると思ったのにダメだったんだから、落ち込むのも当然ですね。普通に、お泊りに来ませんか？ と言えればいいんですけど、彼女にはそれは許されません。

「私は残念じゃない気分だよ……。火邪さんはこれからどうするの？ もう帰る？」

「神無さんは帰るんですか？」

「私？ 私は、水無もいなくなっちゃったし帰ろうかなあって思ってるけど、火邪さんがまだ残るなら一緒に残っていいよかな」

「そうですか。それじゃあ私ともう少しお喋りしてもらいます。いつも姉さんとどんな話をしているか教えてくださいませんか？ 火無も気になってるみたいですし、私も気になります。もちろん、嫌とは言いませんよね？」

「もちろん、嫌とは言いません。そうだね。いつもたいして意味がない会話してるかな。火邪さんは、あんパンにゴマがのってる理由知ってる？」

「知りません。あんな無駄でしかない物に意味があるんですか？」

「無駄って、それはゴマが可愛そうだよ。あれにはね」

二人はその後、あんパンの話で盛り上がりましたとさ……。おしま

61



2・4・首を洗いたまえ。 浄めたまえ（後書き）

首を洗って待っててね。

今、会いに行きます。

……ふ、二つの意味がありそうだね。 キャーハレンチー！ 何想像してんだよ！

はい。

また次回↓

## 2・5・私悪い子ですから！

「……………」

舞歌は一人静かに（それは周りも静かで心も静かという意味です）本を読んでいました。

「舞歌ー！ 匿ってくださいませー！」

そんな舞歌のもとに、水無がやってきました。

水無は舞歌の許可を取らずに、舞歌が座っている机の下に潜り込みました。

「匿ってくださいませって、誰かに追われてるんですか？」

舞歌は机の下を覗きこみながら尋ねます。

「い、妹という恐ろしい存在に追われてるんだよ……………」

ガクガクブルブル。

「……………そんな恐ろしい存在は見当たりませんが…」

「え……………？ またまたー。私を騙す気だな？あの妹が私の背後を追ってこないわけが……………ホントだ。いない」

水無は騙されたと思って机から抜け出し、周りを確認して、ようやく自分が追われていないことに気付きました。水無は妹に追われていると思っていたわけです。背後を振り返る余裕はありませんでし

だから、ずっと気付きませんでした。

「これは……どういことだろう」

水無はとりあえず舞歌の向かいの席に座りました。

「先に言っておきますけど、私に聞かれてもわかりませんよ」

舞歌は本を読みながら水無の相手をします。水無相手なら、心静かでいられますから読書に支障はきたしません。水無も別に本を読むのをやめさせる気はありません。

「……あ、もしかして神無が引き止めてくれたのかな。さすが神無。対火邪戦闘には定評があるな」

「火邪というと、妹さんの裏人格という胡散臭いやつですか？」

「そうそう。胡散臭いやつ。遠目だからいまいちわからなかったけど、あれは間違いなく火邪だったね」

「見た目でわかるものなんですか？」

「うん。表情が無表情になって、雰囲気ギリツとなるんだよ。怖いぜ。あれは」

「そうですか。大変ですね」

「人事ですね。舞歌さん」

「人事ですから。水無さん」

「問題は どうして 大学に 来たか だよな。 大学には 来ない 約束だっ たのに…… 破りや がって あいつめ、 最近 調子の ってるな」

水無は 舌打ちで 不快感を 表しました。

「約束は 破るため にあるら しいです からね。 ご愁傷 様です」

「約束は 守るため ではなく 信じるため にあるの だーって ことですか ……」

水無は 机に バタン キュー。

「あいつ ホントに 追い出して やろつか なあ ……」

そして ポツリ と 呟く。

「出来る んですか？」

「んー、 右腕 …… いや、 両腕を 捧げる 覚悟で いけば あるいは」

「それは 無理と いうこと じゃない ですか」

「いや、 犠牲を 気にしな ければ 出来ない ことはない ということ だよ」

「本当 ですか？ 神社さん が 言って ましたよ。 なんだか んだ 言って 水無は 今の 生活を 気に入 ってる っつて。 本当は 口だけで、 追い出す 気は 皆無 じゃない んですか？」

カッ チーン。

「カッチーンという効果音が私の脳内に響き渡ったよ舞歌君。君は私が口だけの女と思っっているようだね」

水無は、ボタンキューのままジト目で舞歌を睨みます。

舞歌は、本から顔をあげてそんな水無を一瞥してから、また読書に戻りました。本当に怒ってるわけではないので、真面目に相手しなくてもいいと判断したようです。

「そんなことは思っけませんよ」

「じゃあどう思っているというのだね？」

「水無さんはなんだかんだ言って人がいいという噂ですからね。どうせ、妹を追い出すことは出来ないでしょう。と思っっています」

「ちょ、それは心外だ！これでも私、昔は相当の悪だったんだからね！」

水無は慌てて否定開始。いい人認定されるわけにはいきません。

「その発言が既にいい人っぽいですよ」

「今の発言のどこにいい人要素があったというのだ！？」

「じゃあ、昔どんな悪いことしてたんですか？」

「き、聞いて驚けよ！ えっとだなあ……未成年でタバコとか吸っ  
てましたから私！」

「そうなんですか。それは体に悪いですね」

「でしょでしょ！？未成年でタバコを吸ってる私がいい人なわけがなかるうに！」

「タバコはどこで吸ってたんですか？周りに人がいるところで吸ってたんですか？」

「いや、周りに人がいるところじゃ吸わないよ」

「副流煙に気をつけていたわけですね」

「！？ ち、違いますう！ 私、副流煙なんていう言葉一度たりとも考えてないし！ じゃあ一人で吸ってたって！？そりゃあれだよ！私って、一匹狼的な何かじゃない！？」

「じゃない？ って言われましても。水無さん、学校サボったりしませんでしたか？」

「したした！ 悪だつたからね！ サボりまくりでしたよ！ サボって昼間から街を闊歩かつぽしてましたよ！」

「それは悪ですね。でも、そうやって闊歩してる時に、困っているお婆さんとか見かけたら助けたりするんですね」

「そうそう。案外いるんだよね。困ってるお婆ちゃんとか。買い物はもっと計画的にしるよなって思うくらい重たそうな荷物持って…」

……

「……………」

「……………」

「……………」水無さんは、いい人じゃない。ということにしておきましようか？」

舞歌は優しさを見せました。

「その優しさが私を苦しめるー!!」

水無は頭を抱えました。面倒な人です。

「……………」私、もう、お家帰る」

「大丈夫ですか？」

「心配するなら私をいい人っぽく言うのは金輪際やめてくれー」

「ああ、声に覇気がないから大丈夫ですか？じゃなくて、妹さんの件は大丈夫なんですか？ という意味ですよ？」

「そっちかよ……………まあ、とりあえず……………どうしようかなあ……………機嫌取って、話し合いでもしようか……………はあ、面倒」

「……………」

「何その沈黙。なんだよ。結局こいつ妹追い出す気ねえよ。やつぱりいい奴だな。と、思ってるのかな？」

「まさか。そんなことカケラも微塵も一片たりとも思ってますんよ」

「白々しい……舞歌はまだ帰らないわけ？」

「私はもう少し本を読んでから帰ります」

「ふーん。そんなに面白いの？その本」

「面白いですよ。貸してあげましょうか？  
多重人格の人との接し方も書いてありますよこの本」

「是非貸してもらいたい」

「じゃあ、読み終わったら持って行きます」

「ん。了解。じゃ、バイバーイ」

「はい。さようなら」

おしまい……



3 - 1 四大精靈は気のせい(前書き)

6月14日。

### 3 - 1 四大精霊は気のせい

「……」

今日は雨です。

神無は講義が終わったあと、大学構内のとある棟のロビーのような場所から一人ぼんやり眠気を感じながら外を眺めて、雨やまないかなあと思っていました。天気予報だとそろそろ、やむはずなんですけどね。小降りになってきてますから、期待はできません。

「神社神無。ここにいたですか」

そんな神無のもとに巡が現れました。

「あ、どうもー。なんか久しぶりだね」

「です。レポートとか人助けとかお手伝いとか、神様っぽい人間は色々と忙しかったです」

「ただの人にはわからない忙しさがあるんだね」

「そんな感じですよ。……水城水無がいらないですけど……死にましたですか？」

「死んだ報せはもらってないよ。今日は早く帰る日だからーって言って帰っていったよ」

「そうですね。妹に殺されなかったですか」

「うん。殺されなかったみたい。三日に一度は必ず早く帰るから、もう勝手に大学に来ないっていう約束を取り付けたみたいだよ?」

「そうですか……しかしあれです。私はあの日、初めて水城水無の妹と絡んだわけですけど……なかなかやるです」

「火邪さんも同じこと言ってたよ。さすが神様だーって。あ、それと次見つけたら絶対に神様鍋にするって」

神無はクスクス笑います。気に入られたね。みたいに思ってるみたいですね。巡はそうは思えないけどね。

「水城火邪は私を食べる気だったですか!?!」

「うん。弁慶折って動けなくしてから水無に料理してもらおうと思っただらしいよ?」

「らしいよ? って神社神無。らしいよ? っていう軽い感じですよ」

「そう? 大丈夫だよ。本当に春風さんをバラバラにして鍋にするわけじゃないじゃない。冗談冗談。笑い話だよ。火邪さんいい人だよ?」

「いい人は神様を目指す人を食べるなんてことはそもそも言いませんですよ!?!いきなり弁慶を砕く勢いの蹴りをしてくるいい人がいてたまるですか!」

「世界は広いからねー」

「達観した感じですか!?!」

「ところで私を探してみたいんだけど何か用？」

「どことなく投げやりな感じがするですよ!？」

「気のせいだよ。うん。木の精だね」

「本当に気のせいですか!?　　というか木の精ってなんです!？」

「えっと……ドリアードだったっけ？」

「名前を聞いてるわけじゃないです!合ってますですけど!ちなみに複数系はドリユアデスです!」

「へー。ドリユアデスデス？」

「違います!ドリユアデス、です!」

「あ、なるほど。複数系まで知ってるなんて、さすがだね」

「当たり前です!だって私は神様気味な人間ですから!精霊の名前もバツチリです!」

「おー、すごい。じゃ、雨やんだから帰るね。また明日ー」

神無は巡をパチパチと褒めたたえ席を立ちました。

「また明日ですーって、ちょっと待つです!」

出ました。これが巡のノリツッコミです。神無の肩を掴み帰宅を阻

みます。

「え？まだ何か用あるの？」

出ました。これが神無の素面で驚くフリです。これを日頃人の話をちゃんと聞く人にやられると、心が折れる音がする場合があります。

「あるに決まってるです！どうしたですか！？今日の神社神無は冷たいですよ！？水城水無に毒されましたですか！？」

「いや、別に毒されてはないよ。ないけどね……」

神無は席に座る。

「正直言っ方がいい？」

真剣な眼差しです。

「いいです」

「眠い」

真剣そのものです。

「……眠い、ですか？」

「春風さん。私は眠いと……」

真剣とはまさにこの事という感じですよ。

「…………眠いと？」

「寝たくなります」

真剣に言い切りました。

「……………それだけですか？」

「うん」

「……………真剣に、言うことですか？」

「睡眠という人間の生死に関わることを話す時に真剣じゃないなんて許されないでしょうが！！」

机、BURRN!。

「じ、ごめんなさいです!？」

「謝る暇があつたら早く話し進めてくれないかなあ。私眠いって言ったよね？神様のくせに聞いてなかったの？」

「か、神社神無がくれたです!!怖いです!!」

ガクガクブルブル。

「あはは。嘘嘘。眠いのは本当だけど、眠いだけでそんなに変わらないよ。たまにはこんな私はどうだろうと思っただけ。どうだった？」

「怖いを通り越してあなた誰です!??って感じでしたです!!」

「そっかぁ……」

神無は、寂しげに笑います。なぜかって？ 寂しいからに決まってるじゃありませんか。

「どうかしたですか？」

「ううん。なんでもないよ。で、話ってなに？ 眠いのは本当だから手短によるしくね」

「………わかったです」

何か釈然としませんが、巡はとりあえず、神無に用件を話すことにしました。

続く……

### 3 - 1 . 四大精霊は気のせい（後書き）

タイトル思いつかないなあ。

後書き思いつかないなあ。

木の精言いづらないなあ。

ドリユアス。ドリユアデス。

言いづらないか。

メタノールは別名木精らしいけど、木の精霊ではないよ？  
キジムナーでもよかったかなあ。

続く・・・



### 3・2・子供と姉と、それから携帯

「神社神無が眠いということなので手短にわかりやすく話すです」

「よろしくお願いしまーす」

「休日ボランティアはどうです？」

「……うん。もう少し長めにわかりやすく話してくれる？」

「そうですね？しかしどうも、神社神無の眠いというのは危険な気がするですから……長くなってもいいですか？」

「いや、別に全然いいよ。あまりに中途半端に教えられると逆に気になるし。それにいざとなったら帰りの電車でうとうとするからね」

「神社神無は電車通学だったのですか？」

「そうだよ。ここから、五駅くらいかな。毎朝ガタンゴトンと揺られて来てるんだよ」

「上りですか？下りですか？」

「下り方面だよ」

「そうですね。知らなかったです」

「春風さんは？」

「私は近くのマンションで一人暮らしです」

「へえー、じゃあ毎日徒歩？」

「です。免許はあるですけど、近いですから徒歩です。だいたいここから十分くらいです」

「あつ、免許取ってるんだ。凄いね」

「ふふふ、神様を目指すなら自動車くらい運転出来ないとダメなのです。今度遊びにくるですか？」

「え？」

「え？つて、そんなに驚くことないです。別に友達の家遊びに行くのは普通ではないですか？」

「え、あー、うん。そうだね。えっと……春風さんが迷惑じゃなかったらいつか遊びに行こうかな」

「迷惑なんてことはないですよ。迷惑なら最初から提案しないで」

「そっか。そうだよね。ごめんね」

「謝ることじゃないです。っと、話が逸れてしまっただです」

「だね。ボランティアだっけ？」

「です。月読と命が孤児院みたいところで生活しているのは知ってるですよね」

「うん……親に捨てられたんだよね」

「です。いつかその親を探し出したいと思ってんですけど、今はそれは関係ないです。今問題なのは、月読と命が二人でこの大学に来ることです」

「え？ 何か問題なの？」

「問題大有りです！ 子供二人で出歩くのは大変危険がいつぱいですよ！？」

「う、うん。そうだね。なんか、普通に來てたから危なくないと思つてたけど危ないよね。というか、二人はどこから來てるの？ 子供だけで來てるんだから、それなりに近いところから來てるのかなあつて思つてたけど」

「子供の足だと徒歩三十分くらいです。位置的には隣街になるです」

「三十分！ 結構遠いね！ そっかあ……それは心配になるね」

「です。だから私は月読と命に二人だけで大學に來ないように言うんですけど……なかなか言うことを聞いてくれないです」

「言うこと聞いてくれないの？ 春風さんの言うことなら聞くような気がするけど」

「昔、昔と言つてもまだ三、四ヶ月くらいですか。そのくらい前まではそうだったですけど、今は何でも言うことを聞いてくれるわけではないです……全く、子供は成長するのが早いです」

「寂しい？」

「寂しさ半分、嬉しさ半分というところですが……あの子たちはホントに、妹みたいなものですから」

巡は、慈愛に溢れた笑みを浮かべました。本当に、妹のように思っているのがその笑みからは伝わってきます。

「そっか……春風さんもお姉ちゃんなんだね」

「人事みたいに言ってるですけど、神社神無。人事ではないですよ？」

「ん？ どういう意味？」

「月読は微妙ですけど、命はあなたの事をお姉ちゃんのように慕っているですよ？」

「ええ！？ 私がお姉ちゃん！？」

「そ、そんなに驚くことですか？ この前もお姉ちゃんって呼ばれていたじゃないですか」

「い、いや、だってあれは、年上の人はみんなお姉ちゃんって呼ぶんじゃないの？」

「確かに命は懐いた人を、お姉ちゃんと呼ぶですけど……、でも命はこう言ってたですよ？ 神無お姉ちゃんは巡お姉ちゃんみたいに優しく、ホントにお姉ちゃんみたいだって。命と月読が大学に

来る理由の中に、神無お姉ちゃんに会いたいから。というのが生まれつつあるのは間違いないです」

「そ、そうなの？ ……そっかあ、私がお姉ちゃんかあ……」

神無の呟きには、感慨深い。恐れ多い。買い被り。この三つの想いがこめられていました。

「です。というわけで、最初の提案に戻るわけです」

「最初の提案って、ボランティア？」

「です。月読と命に、神社神無が会いに来るならどうです？ と提案したら、命が、それなら大学行くの我慢すると言っていたです。月読は、水城水無がお気に入りみたいですから、食いつきが悪かったですけどです」

「ん。つまり、私が休日、その、月読ちゃんと命ちゃんの、家？ に行くなら、月読ちゃんと命ちゃんは大学に勝手に来ないってこと？」

「です。水城水無と水城火無の約束みたいなものです」

「ボランティアって、どういうことなの？」

「それほど難しいことじゃないですよ。ただ、子供たちと一緒に遊んだり、料理したりするだけです。料理は出来るですか？」

「んー、まあ、人並みにはね」

「それなら大丈夫です。私も一緒に行くですから、そんなに心配し

なくてもいいですよ。やってくれるですか？」

「うーん……」

神無は悩みます。時間的には大丈夫です。休日はいたい家にいますから。それに子供と遊ぶのは好きです。

ただ、自分に出来るだろうかと不安です。施設には月読と命以外にも、子供たちはいっぱいいるでしょう。その子たちと仲良く出来るか不安なのです。

「……………今すぐ決めなくてもいいですよ。とりあえず、考えておいてくれますか？」

巡は神無の不安を察しました。巡はたまに思うことがあります。神社神無は、自己評価が低すぎる。と。

「……………うん。考えとくね」

「よろしく願います。しかし、考えるだけでは決められないかもしれないです。実際に一度体験した方がいいかもしれないですね。今度の日曜日、行ってみるですか？」

「今度の日曜日？ ……ん、そうだね。行ってみようかな。ちょっと興味あるし」

「わかったです。じゃあ、色々と連絡をしないといけなくなるかもしれないですから、携帯番号を交代します」

巡は、ポケットからスチャット携帯を取り出します。

「ん……わかった」

神無は、鞆から携帯を取り出します。二人はまだ、携帯番号を交換していなかったのです。

赤外線をピピッとやって番号とアドレスを交換しました。

神無にとっては、家族以外では二人目のアドレス交換でした。巡にとっては、友達として交換したのは始めてでした。

「よしです。完璧です。……神社神無。連絡したくなったらいつでも連絡してきます」

「春風さんこそ、連絡したくなったら遠慮せずにいつでもしてきていいよ？」

「いいんですか？遠慮しないですよ？丑三つ時に電話するですよ？」

「うん。それはやめて欲しいな」

「ですね」

二人は笑いあいます。

昨日よりも大切な物になった携帯を握りしめながら。

おしまい……

### 3・2・子供と姉と、それから携帯（後書き）

タイトル考えるの大変。

この小説は本筋とどうでもいいお話が混同しているようです。前作は五話おきに進んでいたけど今回はテキトーです。

はい。大学生メンバー四人は携帯を所持していますが、交換していたのは神無と水無だけでした。

神無は自分からは交換しようとはしませーん。一步引いてる感じがありますから。

巡は人助けとかボランティア関係、つまり神様関係、まあわかりやすく言えば仕事関係の人とは交換はよくしていたんですけど、友達枠はなかったということですね。

神様には上下関係はあっても横はない。という考えかたを持っていたからです。だからなかなか言い出しにくかったんでしょう。たぶんきつとね。

では、また次回。



4 - 1 火無はまだ。 18だから (前書き)

6月15日。

つまり次の日。

4 - 1 火無はまだ。 18だから

「ん？」

水無が、今日は昼からの講義なので、のんびりとリンゴヨーグルトを火無と一緒に食べていると、メールが届きました。

「…………ふむ」

メールは神無からでした。体調不良なので今日は休むので、プリントがあつたらよろしく。という内容だったの、水無は、了解しました。ゆっくり休みなさい。と返信します。

「…………ん、なに？」

水無が、風邪でも引いたのかな？ と携帯を見ながら考えていると、向かいに座っている火無が、じーっとこっちを見ていました。

「お姉ちゃん、私も携帯欲しい」

「…………持ってなかったっけ？」

「うん」

「…………別にいらなくない？ あんたほとんど外でないし。知り合いもないし」

「私もお姉ちゃんとメールしたい！」

火無の携帯が欲しい理由を聞いて、水無は、ポカーンとしました。呆れちゃいますよね。

「……いや、一緒に生活してるんだからメールする必要はない？」

「なくなかない！」

「なくなかない？」

「なくななくなかないの？」

「なくななくななくなかないの」

「なくななくななくななくななく」「はい、やめー。不毛な感じだからやめー。ついでに携帯の話もやめー」

「やだやだやだやだ！ もっとお姉ちゃんとなくななく言いあいたーい！」

「え？ そっち？ そっちでいいの？」

「あつ、携帯だった。お姉ちゃん教えてくれてありがとう！」

「……私、バカ過ぎる」

「携帯欲しい携帯欲しい携帯欲しいー！！ お姉ちゃんとメールするのー！ お姉ちゃんの写真撮って待受画面にしたりするのー！ お姉ちゃんと同じ携帯でお揃いなわー！ あいつみたいに私もお姉ちゃんにメールするのー！ 負けてられないのー！」

火無は子供みたいに手足をジタバタさせます。駄々っ子モードですね。  
そんな妹を見て、水無はため息をつかずにはいられません。妹の将来が不安になると同時に、相手にするのが面倒だという気持ちがあります。

「火無、とりあえず駄々っ子やめ」

「……やめたら携帯くれる？」

「やめたら考えてあげる」

「……むー、仕方ないなあ」

なぜか火無は自分が妥協してやった。みたいな態度をとります。不思議だねー。

「仕方ないって……まあいい。じゃあ考えてみる。携帯にはお金がかかる。そのお金は誰が出すの？」

「お姉ちゃん？」

「私は自分の携帯料金だけで精一杯だから無理」

「じゃあ、お母さん？」

「あいつが出すわけないでしょ？」

火無を自分に押し付けることが出来て清々しているだろう母の顔を思い出し、水無の顔には嘲笑が浮かびます。

「じゃあ、お義父さん？」

「……あの人なら出してくれるかもしれないけど、私は頼みにはいかないよ。頼みに行くなら一人で行きな」

義父に対しては色々複雑な思いがあるのか、水無は険しい表情になります。

「えー、お姉ちゃんも一緒に頼んでよー」

火無は、自分勝手です。大切なお姉ちゃんの気持ちを彼女はあまり、考えません。いい性格してますね。

「やだ。そのくらい自分でやんな」

「むー、お姉ちゃん得意地悪」

「……得意地悪でもなんでもいいけどね。わかったでしょ？ お金がかからないなら携帯は買えません。だから携帯は諦めなさい。それとも自分で払う？」

「むー、お姉ちゃんがお金くれないから払えないって知ってるくせに……得意地悪」

「あげてるでしょ？ 毎日千円。月三万円。お小遣いとしては高めじゃないかな。これは」

ちなみに実家からの仕送りは四万円。残り一万円は、食費に消えます。

「むー、むー、むー!!」

火無は頬を膨らませて、不満ですよーっとおアピールです。そんなの水無は慣れっこなので、きにせずヨーグルトをパクパク食べます。いちいち構っていたら疲れるだけですからね。

「むー！ お姉ちゃんの意地悪！ けちんぼ！ だけど大好き！」

「意地悪でもきちんぼでも大好きでもいいけど抱き着くな。暑苦し  
い」

「むー、どうしてもダメなの〜？」

上目づかい+猫撫で声で聞いてみます。

「……別にダメじゃないわけだよ。誰にも払ってもらえないなら、自分で払えば問題ないわけだよ？」

「じゃあお金ちよーだい！」

ニコツって笑って金銭要求です。

「そうじゃなくて働けっつーことだよおバカさん」

ニコツって笑ってふざけんなです。

「働く？ 私が働くの？ お姉ちゃんは？」

キョトンな火無。自分が働くななんて考えたこともないみたいですな。

「お姉ちゃんはって……私は高校時代に嫌というほど働いたからいいの。欲しい物があるなら働くのは当然でしょ？」

「私が働くの？ ……無理だよ。私、まだ子供だもん」

「子供って……火無、自分がいくつだと思ってるの？」

「えつとねー、18、くらい？ あ！そっいえばもうすぐお姉ちゃん誕生日だね！」

「あー、そうだったっけ。誕生日とか嬉しくもなんともないからなー……よし。じゃあこの話はおしまい。私はガッコに行ってくる。ちよつと早いけど、行ってきまーす」

「待ってよお姉ちゃん！ 私携帯欲しいよー！ 買ってよー！ 働くなんて無理だよー！ 私まだ子供だもん！ お姉ちゃんいないとなんにも出来ないもん！」

「ええーい！ 離せ離せ！ 泣きつくな！18なのに子供とか言ってるんじゃない！！ どんなに言ってもダメなのはダメじゃ！ 今回ばかりは火邪に頼んでも絶対ダメ！！」

「火邪ってだれ？」

「……………誰でもない」

水無は、頭の上にハテナマークを出している火無を見て、本当に面倒な妹だと思つと同時に、この子が働けるとこなんてあるんだろうか。と、心配になりました……





4 - 1 火無はまだ。 18だから (後書き)

この姉妹。 噛み合っていない。

火無は火邪を知りませーん。

なのに火邪の時の充足感 (大学に行ったという気持ち) とか、火邪の時に決めた約束は覚えてまーす。 記憶が飛んできるとかはないです。 火邪の時の火無は、現実っぽい夢を見ている感じなのかな？ 火無にとって火邪は、寝ている間に働いている小人みたいなもんなのかもしれないね。

はいまた次回ー。

#### 4 - 2 ・ 姉の心妹知らず？

「……………」

舞歌はいつもと変わらず図書館で、読書をしています。

「……………はあ」

しかし今日は珍しいことに、舞歌の隣に水無がいます。

しかもその水無があらさまに、私悩んでいます。とアピールしてくるのは大変珍しいことです。

まあ珍しいからこそ、面倒事の気配がビンビンしますので、舞歌は気付かないフリをするわけですが。

「……………」

「……………はあ」

「……………」

「ああ……………悩ましいなあ」

「……………」

「……………はあ、誰か話を聞いてくれないかなあ、チラチラ」

「……………」

「ああ、いい、うう、ええ、おお、はあ、ひい、ふう、へえ、ほお、

なあ、にい、ぬう、ねえ、のおー」

「……………いい加減うっとおしいですね」

舞歌は本を閉じて諦めるように溜息を一つつきました。話を聞くことに決めたようです。

「え、話聞いてくれんの？ 舞歌さんは優しいなあ」

「白々しいですね。なんなんですか？ 今日の水無さんはめんどくさいですね」

「面倒がない人付き合いなんて存在しないよ……………はあ」

頬杖をつけて水無はくたびれた溜息を一つつきます。お疲れのようです。

「それはそうですね、今日の水無さんのめんどくさは度を越えていますよ。お腹が空いてるなら食堂に行くことをオススメします」

「もうお腹いっぱいですよー。ちゃんと昼を食べてから図書館に来ました」

「そういえば、神社さんは一緒じゃないんですか？」

「ああ、今日は休み。体調不良だつてさ」

「それは心配ですね……………ああ、今日の水無さんが面倒なのはそのせいですか？」

「違う違う。神無が休みだからって私が面倒になるわけないでしょうが。まあ、神無が休みだから舞歌に会いに来たわけだけだよ」

「私は神社さんの代わりということですか……恐れ多いですね」

「恐れ多いって……はあ、まあいいけど。舞歌。携帯って持っている？」

「一応持ってますよ。鳴ることないですけど」

「ボソツと寂しいこと言わないでくれる？ 番号交換とか、してみる？」

「遠慮します」

「遠慮されまーす。って、遠慮すんのかよー！」

「遠慮します」

「なに、その頑かたくなな意志……まあいつか。鳴らない携帯にも価値があるのかもしれないしね。でさ。私の妹が携帯欲しいとか言ってるんだよ」

「欲しいなら買ってあげればいいじゃないですか」

「金がねえ」

「じゃあ諦めるしかないですね」

「火無があんたみたいに物分かりがよければいいんだけどねえ……」

「はあ、ケチってなんだよケチって。意地悪だあ？ ホント何様のつもりだよなあ……舞歌だってそう思わない？」

「あまり事情を知らないのでもなんとも言えませんが、確かに我が儘な気がしますね」

「でしょ？ さすが舞歌。話がわかるねー。愚痴するには舞歌が一番だね。うんうん」

「褒め言葉として受け取っておきますよ」

「受け取っという………はあ。いや、別にさ。毎日あげてる千円をなしにすれば買ってあげることが出来なくもないかもしれないんだよ………だけどねー、私としては火無がさ。自分で働いてどうにかして欲しいんだよ。わかるかい？この気持ち」

「わかりませんがわかります。なんだかんだいって、妹の将来が心配ということですね」

「………そうですね。なんだかんだ言っても妹だし、あんな風になっちゃったのは私に責任がなくもないしさ………それなのにあの野郎、意地悪けちんぼ、しまいにや子供だもんだと？ ふざけんなよな。心配するこっちの身にもなれってんだよ………はあ、ホント、しんどい………」

水無は、グテーっと机に突っ伏してしまいました。

「お疲れ様です。私にはどうすることも出来ませんが頑張ってください。図書館で本を読みながら応援してますよ」

舞歌は、グテーっとなった水無を尻目に読書に戻りました。そつとしておこうと思っただけではなく、これで話は終わりだと思っただけです。

「ありがとございます舞歌さん。愚痴を聞いてくれるだけで十分だよ。神無は愚痴り相手にはあまり向かないからさ……」

水無はグテーっとなったまま、舞歌らしい労いの言葉を聞いて、苦笑を浮かべました……

#### 4 - 2 ・姉の心妹知らず？（後書き）

神無は愚痴り相手には向きませんが、相談相手には結構向くんだよ？

そんな感じですよ。

バイバイ

#### 4 - 3 ・約束は破るためにある。わけがない

「……………」

今日の講義も終わって、神無もないし帰ろうか。でも、帰ったら火無の面倒みないといけないし。面倒だなあ。どっかで時間潰そうかなあ。と、水無はぼんやり椅子に座りながら考えていました。考えていたら、雨が降ってきてしまいました。

「……………傘、忘れたー」

今日は家を出る時バタバタしていたので、傘を持ってくるのを忘れてしまった水無は、はあ。今日は運がない日なのかもしれない。しんどい。と思い、机に突っ伏しバタンキューです。

「こんなところでなにしてるですか？」

そんな水無の元に、巡が現れました。

「……………巡かあ」

水無はバタンキュー状態ですが、声で巡だとわかりました。バタンキュー状態のまま、やっぱり今日は不幸な日なんだなあ。と思いました。

「どうしたですか？ 覇気がないです……………ああ、傘を忘れたですか」

水無の側に傘がないのを見て、巡は察しました。巡はもちろん持っていますよ。



「そうですよー。それで力尽きてるんだよー」

「ふむです……神社神無は今日はいないですか？」

「いないいない、体調不良だから休むって連絡がきましたよー。いたら途中まで入れてってもらえたのになあ。うう……ビニール傘って案外高いんだよなあ」

「どうして私のところに連絡がこないですか!？」

「なんで怒ってんの!？」

急に巡が大きな声を出したので、水無はビックリしてボタンキューから復活してしまいました。

「せっかく昨日メールアドレスを交換したのにどうして水城水無に連絡がきて私にはこないですか!神様差別ですか!？」

「神様差別って……いや、学部が違うからじゃん？」

「学部差別ですか!？」

「違うから! よく聞け神様もどき」

「よく聞いてやるです迷ってそんな羊」

「神無から、体調不良だから今日は休むね。って連絡がきたら、どうする?」

「心配するです。心配だから住所を調べてお見舞いに行くです。お見舞いにはメロン持参です。完璧です」

「完璧過ぎてダメ過ぎる。そんなに心配されたら困るでしょ？だからあえて巡には連絡しなかったんだよ。うん。そこに違いない」

他にも思い当たる理由はありますが、説明するのも大変なので、水無はこれで納得してもらうつもりです。

「なるほどです。全く、水臭いやつです。水臭いですって送ってやるです」

巡は納得したようです。携帯を取り出しメールを打ち始めます。水無は、やめておけと言おうと思いましたが、止めると面倒なことになるりそうだったので、放置することにしました。

「ああ、そういうばです。水城水無も今度の日曜日、ボランティアに行ってみるですか？」

メールを打ち終えた巡は、携帯を机の上に置きました。返信がきたらすぐにわかりますからね。

「ボランティア？ なにそれ」

「今度の日曜日、月読と命が住んでいるところに神社神無を連れて行くことになっているです。水城水無もどうです？」

「あー、私はパス。遠慮しとく。そういうの、向いてないし」

「向いてないことはないと思うですよ？ 月読も懐いていますです」

し」

「懐かれても困るし。私、子供って苦手だから。それに、私には子供みたいな妹がいるから。他の子供の世話なんかしてる暇ないの」

「それもそうですと、メールがきたです！」

巡は飛びつくように携帯を取りました。水無は頼杖をつきながら巡を見て、メールの返信がそんなに嬉しいとは。案外こいつ、人肌に飢えてるよなあ。神様目指してるからか？ と思いました。

「もう帰るですか？帰るなら私が傘に入れて行ってやってもいいです。夢は神様な人間である私は、困っている人は見捨てられないです。どうしますですか？」

巡は携帯をまた机に置き、外を見ながら尋ねます。雨はやみそうもありません。

「巡って、どこ住んでんの？ 私と同じ方向だっけ」

「あつちですから、水城水無のマンションとは逆方向です」

「教えた覚えがないのになんであんたは私の住んでるマンションを知ってるんだ？」

「神様ですからです」

本当は、昔水無を調査しているからなんですけどね。

水無は巡のその態度に溜息をつきます。色々と諦めたようですね。

「反対方向ならいいよ別に。コンビニ行って傘買ったから」

「そうですか？ 残念です。水城火無に会いたかったですけど諦めるとするです」

「そういう魂胆だったか……会ってどうするつもりだったわけ？」

「とりあえず挨拶するです。水城火邪にはこの前会ったですから、どれだけ違うか確かめるです。そしてボランティアに誘ってみるです。あと、もうすぐ水城水無の誕生日ですから、その計画を練るのも悪くないです」

「色々言いたいことがあるけど、とりあえず、誕生日の計画ってなんでしょうか？」

「神様たるもの、人の誕生した日は盛大に祝うべきだと思いますか？」

「思わねえ。……巡さん、面倒事はごめんですよ……？」

「心得たです」

「心得られた気が全くしないのはなぜだろう……」

「ところで水城水無」

「今度はなにかな春風巡」

「あそこにいるのはあなたの妹じゃないですか？」

巡は外を指差しました。そこには傘をさして、キョロキョロと親を捜す子供のように、姉を探している火無の姿がありました。手にはもう一本、傘を持っています。それだけで、ここにきた理由はわかりません。

「……………あいつ、約束破りやがって」

複雑な面持ちで火無を見ながら、水無は呟きます。火無はこちらにはまだ気付いていません。水無がいる建物の入口付近で、入ってもいいのか悩んでいるように、うろちよろしています。

「傘を持ってきてくれたんですよ？いいじゃないですか」

「……………確かにそれはいいけど、あいつのことだから、ここで許せば、理由があれば大学に来てもいいんだ。とか思つて、大学には来ないつていう約束を守らなくなるに決まつてる。……………だから私は、あの傘を受け取らない。あいつにはこれからも約束を守ってもらわないといけないから」

水無はそう言つて、席を立ちます。逃げる気のようにです。

「……………約束は破るためにあるという言葉を知ってますか？」

水無を逃がさないように、巡は尋ねます。

「知ってるよ。相手を信じると馬鹿を見るから相手を信じるなつていう、世界の真理を教えてくださいよ？」

水無はそんな言葉、大嫌いです。

「それは違つてです。この言葉は、約束という縛りに捕われず、臨機応変に行動しなければ、約束は守れても大事なものは守れません。という意味です。だから水城水無。今日のところは傘を受け取つてやるべきですよ。自分の妹をもう少し信じてあげてもいいじゃないですか」

「……………なにそのポジティブ解釈。人のいいところだけ見ましょつてこと?」

水無は巡を、馬鹿を見る目で見ます。

「違いますですよ。信じる者は、救われるということですよ」

巡は微笑みます。

「あつ！ お姉ちゃんいた！」

そんなやり取りをしていたら、水無は火無に見つかってしまいました。

水無は恨めしげに巡を睨みますが、巡は澄まし顔で携帯を弄り始めました。

「……………火無、大学には来ないつて約束じゃなかった？」

自分の側にきた火無に、水無は冷たくそう聞きます。火無は、水無が怒っていると感じ、落ち込みながらも言い訳します。

「……………だって、お姉ちゃん傘持っていないのに、雨いっぱいで……………お姉ちゃん風邪引いちゃうと思つて……………それで私、傘持つて行くこと思つて……………」

「約束は忘れてたってこと？あんたにとって私とした約束はすぐに忘れちゃうようなものだったわけ？」

「違うもん！私覚えてたもん！覚えてたけど……覚えてたけど……お姉ちゃん風邪引いちゃうのやだから……それで、私……」

火無は水無の冷たい態度に、今にも泣きそうです。

そんな妹を見て、あと巡の冷たい視線を受けて、水無は力を抜くように溜息をつきました。

「ホントはあれでしょ？ 私が風邪引いたら家事とか自分でやらなくちゃいけないからでしょ？心配だったのは家事とか料理でしょ？」

水無はからかうようにそう言いました。

「違うもん！ 私はホントにお姉ちゃんが心配だったんだもん！！」

火無はもう半分泣いています。

「ホントかなあ？ ホントは風邪引いて寝込んだら一日中一緒とか考えたんじゃないの？」

「……………あ」

今気付いたけどそれもありがたな。

火無の顔から涙が引きました。

「おいこら。なに納得してんだ。そこは反論するところだろ」

そんな妹の頭を水無は軽く小突きます。  
火無は小突かれたところを摩りながら、「考えてないもん……」と小声で反論しましたが、信頼性は零です。

「……今回だけは許してあげる。傘、ありがとう」

水無は火無から傘を受け取り、火無の頭を優しく撫でます。火無は褒められて嬉しそうです。

「じゃ、巡。私帰るから」

「さようならです。妹とは仲良くしないとダメですよ」

巡は携帯をカチカチと弄りながら、ヒラヒラと手を振ります。  
興味がない態度の裏には、弟と仲良く出来なかった自虐的な色が見えます。

「わかってるよ。あんたも妹は大切にね」

そんな巡の気持ちを察したのかはわかりませんが、水無は微笑みながら巡に今大切にすべき存在を教え、励ましました。

「ねえお姉ちゃん。あの人だれ？」

「あの人はなんでもないよ。ほら、置いてくよ」

「あつ、待ってよ！」

火無は慌てて水無の後を追いかけてきました。



「……………妹、ですか」

水無と火無がいなくなってからしばらくして、巡は携帯を閉じて立ち上がりました。

巡はこの後、図書館にいたであろう舞歌のところへ行き、携帯番号をうまいこと言って聞き出してやるうかと思っていたのですが、それはやめて、月読と命に会いに行くことにしたようです。

雨が降っているので外では遊べず退屈しているであろう月読と命の姿を思うと、巡は自然と早足になりました。

おしまい……

#### 4 - 3 ・約束は破るためにある。わけがない（後書き）

え？　なんで火邪じゃなかったって？

そりゃあなた。傘を持っていくなら、大学にきちやダメっていう約束は破つても怒られない。いや、逆に褒められるに違いない。と、火無が考えたからに決まってるじゃありませんか。

褒められるのに他人になるなんて、するわけないじゃありませんか。わざわざ手柄を他人に譲る馬鹿は、いませんよね？

5・1・説明しよう。そうしよう。(前書き)

620。日曜日。

日時設定にすでに限界を感じる。

## 5 - 1 ・説明しよう。そうしよう。

「ふう……雨は……大丈夫そうかな」

日曜日、もうすぐ十時になるくらいの時。神無は駅前にいました。空模様は微妙な季節。曇ってますが、所々青空も見えます。予報では、夜から雨とのことです。

「神社神無！こっちです！」

と、空を眺めていた神無は呼ばれました。声のした方を見ると、駅前の時計台の下に巡がいました。

「あ、春風さん。待った？」

「三十分前に来てましたですけど、ここはセオリーに従って、待ってないです」

「せ、セオリーに従うなら待ち合わせ時刻三十分前じゃなくて、十分前くらいに来て欲しかったけど、ここは私もセオリーに従って、待ってない？よかったー」

「よかったです。では行くですよ。私についてくるです」

「はい、了解しましたー」

さて、二人が目的地に向かっていている間に今現在の状況を説明ししよう。

二人がどこで待ち合わせしていたかというところ、二人が通う大学の最

寄り駅、小町駅こまちえきの一個隣の駅、胡桃割駅くるみわりえきです。  
神無はいつも通過するだけで、一度も下りたことはありませんで  
したが、なかなか大きな駅でした。

次に、どうして二人がそこで待ち合わせをしていたかを説明しまし  
よう。

今日は日曜日です。そうです。月読ちゃんと命ちゃんがいる養護施  
設、『くるみわり園』にボランティアに行くためです。  
簡単説明終わり。

「その、くるみわり園だっけ？ どちら辺にあるの？」

「胡桃割駅から歩いて、だいたい三十分くらいのところです」

「結構遠いね。ん……養護施設から大学まで子供の足で三十分だっ  
たよね？」

「です。大人なら二十分くらいです」

「最寄り駅より大学の方が近いんだ」

「です。つまりですね神社神無。説明してやるです」

「うん。説明されてやるです」

「私たちが向かってる養護施設、くるみわり園は、この町、胡桃割くるみわり  
市の外れにあるわけです。胡桃割駅を中心とすれば、北西に位置す  
るです」

「ああ、なるほどね」

「理解したですか。私たちが通っている大学は、胡桃割市の隣町、つまり小町の外れ、だいたい南西に位置するから、大学の方が近いというわけなのです」

というわけなんです。

「なるほどね」。ところで春風さん」

「なんです?」

「もう少し詳しく、くるみわり園について教えてもらっていい? いまいちまだよくわからないというか……結局私は何をするの?」

「ふむです。ところで神社神無。聞きたいことがあるです」

「ぎゃ、逆質問? まあいいけど。なに?」

「体調はもう大丈夫ですか?」

「え、ああうん。もう平気。ちょっと寝不足だっただけだし。というか、もう何日も前の話だよ? そんなに心配しなくて大丈夫だよ。つて、三日前くらいにも言った気がする」

「私も三日前くらいに聞いた気がするです。しかし何度も聞きたくなるのが人の性さがというやつです」

「それもそうだね。私も一度説明聞いた気がするけど、また聞いちやたし」

「そして何度でも答えてやるのが人の業というものです。というわけで教えてやるです」

「教えられます」

「くるみわり園は、教会に付属している感じですよ」

「うん。実はそれがいまいちよくわからないんだけど、運営してる人が、神父さんなの？」

「です。近く、というか同じ敷地に教会が立ってるんです。その神父さんが施設を作って、園長さんなのです。働いてる人も、シスターさんとかが多いですよ」

「なるほど。ということは、月読ちゃんたちはキリスト教ってことになるのかな？」

「それは違つてます。もちろん礼拝などはあるんですが、別に宗教に入ることを強制しているわけではないです。食事の前のお祈りとかはあるんですが、子供たちにとってはいたただきますと同じくらいの意味合いですよ」

「ふーん、日本人的な感じなのかな？ 知ってるしやってるけど信仰はしてないみたいなの？」

「そんなもんです。だから神社神無も安心するんです。勧誘はされませんですよ」

「そんな心配はしてなかったけど……あ、そういえば何人くらいいるか聞き忘れていた気がする」

「多くはないです。生活している子供は二十人くらいです。小学生が十五人くらいで、中学生が五人くらいです」

「高校生はいないの？」

「いません。くるみわり園は、入居年齢は、一歳から十五歳までです」

「じゃあ、十五過ぎたらどうするの？」

「たいていは十五までに引き取られたりしますが、十五を過ぎたら一人暮らしです。高校の入学金は施設が出してくれます。一年間は、家賃も払ってくれますし、施設にいたときの貯金もあるみたいです。生活にいきなり困るということはないようです。その辺は、私もあまり詳しいことはわかりません」

「ふむふむ。わかってきたようなわかってきていないような。職員さんは何人くらいいるの？」

「いつもいるのは五人程度です」

「少なくない？」

「少ないです。給料も少ないです。だからボランティアを募集していますよ」

「なるほどね。ボランティアさんは何人くらいいるの？」

「そうですね……私みたいに週に何回も来るような人は少ないで



す。休日に来る人は多いですが……十人くらいですか」

「ふーん。どんな人がいるの？」

「普通の主婦とか、大学生もいるですよ」

「そっかそっか……」

「そんなに不安にならなくてもいいですよ。案ずるより産むがやすしという言葉もあるです」

「あるけどさー……結局水無と三途さんは来ないんだよね」

「です。水城水無は妹の世話です。三途舞歌はボランテニアなんてくだらないらしいです」

「んー、あの二人も一緒だったらよかったよねー」

「私一人では不安ですか？」

「いやいや、不安じゃないけどやっぱり知らないところに行くなら知り合いが多い方がよくない？なんか、こっつ、ねえ？」

「それは不安ということじゃないですか……まあそんな恐ろしいところじゃないですよ。気楽に行くです。あなたには神様がついてるです」

「神無なのには？」

「神の社に神がい無いなら、神はどこにいるんです？ そつです。こ

「ここにいます！」

「……ん。なるほど。そういう考えかたもあるかな……」

神無は思案顔です。何かを考えていることは間違いないですね。

「どっしたです？」

「なんでもないよ。今日は雨が降らないといいね」

「ですね」

というわけで、二人はくるみわり園に向かっています。

5 - 1 ・説明しよう。そうしよう。(後書き)

はい。タイトル通りね。

名前とか考えるの大変だよね。

普通の名前もなんだかなあだし、変な名前もなんだかなあですよぬ。普通の名前だとリアルであるとなんだかなあだし、変な名前だと名前みたいじゃなくてなんだかなあですよね。

というわけで、くるみわり園と胡桃割市と小町です。

小町ね。そこに大学と三途家と水城水無と水城火無が住んでるマンションがあるわけだよね。

で、その隣町が胡桃割市ね。

胡桃割市にはくるみわり園があるんだね。  
で、胡桃割駅から三つ四つ行ったところに神社神無は住んでるんだね。

わかりづらいね。

春風巡はどこに住んでるのかな。小町かな？

養護施設編をさっさと書かないと水無の誕生日が六月中に書けないことに気付いた私はガクガクブルブルです。

また次回。

## 5・2・くるみわり園の子供たち

「ついたです」

「ついたねー」

というわけで、つきました。くるみわり園。教会の裏手にあり、二階建ての、まるで保育園みたいな建物です。庭にはブランコやシーソーなどの遊具が設置されています。花壇もあります。保育園っぽいですね。

「遊んでるですね」

「遊んでるねー」

庭では、小学生と思われる子供たちが遊んでいます。十人くらいです。ボランティアさんらしき人が一人、シスター服の人が一人、子供たちと遊びながら、見守ってるようです。ボール遊びや鬼ごっこ。ブランコをしている子もいます。とりあえず、楽しそうですね。その中には、月読ちゃんと命ちゃんもいました。

「あつ！ 巡お姉ちゃんに神無お姉ちゃんだ！」

「ホントだ！」

命ちゃんが二人に気づき、ボールを持ったままこっちに走ってきました。

月読ちゃんも当然走ってきます。

命ちゃんと一緒にボール遊びをしていた子供たちも走ってきます。

鬼ごっこをしていた子たちも、なんだなんだとこっちを見えています。

「神無お姉ちゃんホントに来てくれたんだね！」

命ちゃんはニコニコ笑顔です。ホントに嬉しそうです。

「うん。約束したからね。元気だった？」

「うん！みこと元気だったよ！神無お姉ちゃんは？」

「うん。私も元気だったよ」

神無も笑顔で応えます。命ちゃんの頭を撫で撫でします。ついついやっちゃいます。命ちゃんは撫で撫でされるのが好きなので、どんどこいです。

「巡姉ちゃん遊ぼうよー！」

神無の隣では月読ちゃんが、巡の手を引っ張っています。

「私とも遊ぼうよー！」「僕と遊ぼうよー！」「僕も僕も！」「わたしもー！」

他の子供たちも巡を引っ張ります。巡は子供たちに大人気のようにです。

「ちょ、ちょっと待つです。私は神社神無にもう少し色々と説明しないとイケないです。だから遊ぶのはあとですよ」

「えー、遊びたいよー」「遊ぼうよー」「おままごとしたい」「」

僕、鬼ごっこがいい!」「わたしカクレンボ!」「カクレンボ!」「カクレンボいいね!」「巡姉ちゃん、カクレンボ!」

子供たちは早く早くという純粹で輝く目で巡を見ます。

「うう……神社神無……」

巡は困ったように神無を見ました。

子供たちに大人気の巡の様子を見て、神無は苦笑気味に、「私は大丈夫だよ。遊んであげて」と言いました。

「うう、すまないです神社神無。職員の人には、神社神無のことを話してあります。色々と聞いて下さいです」

巡は申し訳なさそうにそう言って、「じゃあカクレンボでいいですか? 危ないところには隠れるのはダメですよ? わかってるですね?」「……はい」「……」という会話をしながら、施設の方に歩いていきました。庭には隠れるところが少ないので、施設内でも見たいです。施設内に向かう間にも、子供たちが合流していきま。まるでハーメルンの笛吹きみたいだな。と、神無は思いました。巡が慕われているのがよくわかります。

「さてと……」

神無の前には、命ちゃんと、命ちゃんと同い年くらいの女の子がいます。この二人は、巡にはついていきませんでした。命ちゃんはニコニコ笑顔ですが、女の子は、この人誰だろう。というように神無を見えています。

「えっと、こんにちわ?」

とりあえず目線の高さを合わせて、「ご挨拶。

「こんにちは」

女の子は神無をジーっと見ながら挨拶を返しました。「この女の子、気が強そうです。」

「えーっと、名前聞いていい？ あっ、私は神社神無っていうの。よろしくね？」

「わたし、あかね」

「そつかあ。あかねちゃんか。命ちゃんの友達かな？」

「うん。神無さんは、神様なの？」

「え？」

神無はあかねちゃんの質問にビックリしましたが、すぐに、理解しました。

「ううん。私は春風さんの友達だけど、神様じゃないよ」

「ふーん……」

あかねちゃんは、神無をジロジロと見始めました。な、なんだろうこの子。と、神無は思いました。

「ねえ神無お姉ちゃん。一緒に遊ぼうよー」

横で話が終わるのをじっと待っていた命ちゃんが痺れを切らして、神無を引っ張ります。

「ん……そうだね。でも、ちょっと待ってね」

神無は命ちゃんと遊ぶ前に、シスターさんに挨拶しておこうと思いましたが。

「…………あれ」

しかし、さっきまで庭にいたシスターさんはいなくなっていました。というか、庭にはもう人がほとんどいなくなっていました。さっきまでは十人くらいいたのに、今は、ブランコで遊んでいる子供と、そのブランコを押してあげているボランティアさんしかいません。巡の力は恐ろしいですね。今頃、施設の中では大カクレンボ大会が開かれていますでしょう。

「ん……………命ちゃん、あそこにいる人、知ってる？」

どうするか悩んだ神無は、とりあえずあのボランティアさんに話しかけることにしました。その人に話しかけて、事情を説明して、それから施設内に入るか、命ちゃんと遊ぶかを考えようという算段のようです。

「うん。知ってるよ。あのね、たまに来て遊んでくれるお姉ちゃんなの。つららお姉ちゃんに用事なの？」

「うん。ちょっとね……………私のこと、紹介してくれる？」



「うん！ いいよ！ そしたら遊ぼうね！」

「うん。そうだね」

「あかねちゃんも一緒に遊ぶ？」

命ちゃんはまだ神無を観察していたあかねちゃんにも声をかけます。

「みことが遊びたいなら遊んであげる」

ツンとした態度をあかねちゃんは取りましたが、命ちゃんは「じゃあ三人で遊べるね！」と嬉しそうに言いました。特に気にしてはいないようです。どうやら、あかねちゃんがこんな態度を取るのはいつものことのようにです。

「じゃあ、みことが連れて行ってあげるね！」

命ちゃんはそう言って、持っていたボールを地面に落として、神無の手を取りました。そしてブランコがある方向にボールを蹴って、神無を引っ張ります。そしてまたボールを蹴ります。ボールは今度はブランコの方には真っすぐ行きませんでした。命ちゃんはボールを追いかけました。神無は、ほほえましいなあと思いつつ、命ちゃんに引っ張られていきます。

「あかねちゃんも、手、つなぐ？」

自分が頼られてるみたいで嬉しいんだろなあ。可愛いなあ。もう少し命ちゃんの自由にさせてあげよ。と神無は思いながら、横を歩くあかねちゃんに尋ねます。

「……子供じゃないからいい」

あかねちゃんは、楽しそうに手を繋いでいる命を見てからそう呟いて、フンツ。という感じで、そっぽを向いてしまいました。しかしチラチラと神無の手を見ています。

「んー……大人だって、手を繋ぎたくなる時もあると思うよ？」

神無は、子供だと思われたくない年頃なのかなあ。可愛いなあ。と思いました。

「………そうなの？」

「うん。私も大人だけど、手を繋ぎたくなるよ？今もあかねちゃんと手を繋ぎたいと思ってるよ？」

「………ぐうぜんだけど、わたしも手をつなぎたい気分だから、大人だけど、あなたと手、つないであげる」

「うん。ありがとう」

あかねちゃんと神無は手を繋ぎました。

あかねちゃんは手を繋げて嬉しいのか、表情が綻んでいましたが、神無は気付かないフリをしました。きつとそれを指摘したら、恥ずかしがるだろうな。と思ったからです。そしてそれは、正しいです。

「あつ！ あかねちゃんも手つないでる！ あかねちゃんいつも子供っぽいつてバカにしてたのにー」

やっぱり、手つなぎたかったんだ。というように、命ちゃんはニヤ

ニヤ笑います。あかねちゃんの顔はトマトのように真っ赤になりました。

「こ、これは違うの！ 大人だけどたまにはこういうのも必要だからなの！ だから！ えっと、あの、たまには子供の気持ちも……だから、これは……違うから……だから……」

あかねちゃんは、手を繋いでいる理由をうまく説明出来なくて、手を繋いでいる言い訳がうまく出来なくて、助けを求めるように、涙目で神無を見上げます。神無はあかねちゃんを安心させるように、微笑みました。

「命ちゃん。意地悪いわなの。たまには手だつて繋ぎたくなる時があるんだよ？ 命ちゃんだつて、カレーが食べたいときとシチューが食べたいときがあるでしょ？」

「えー。みことはいつもシチューが食べたいもん。カレー、辛くてみこと嫌いだもん」

「甘口も辛いのか？」

「うん！ 甘口もすっごい辛い！ 全然甘くないから、みこと、あれはうそだと思う！」

「確かに甘いつて書いてるのに、甘くないよね。あれは嘘かもね」

命ちゃんはカレーの不満に意識が言つて、あかねちゃんが手を繋いでるのを追求するのを忘れてしまいました。あかねちゃんは、涙を拭いながら「……ありがと」と聞こえなくもいいくらいの小声で言いました。しかしちゃんと聞こえた神無は、あかねちゃんにウィン

クで応えました。あかねちゃんは恥ずかしくて、また顔が真っ赤になりました。神無は可愛いなあと思いました。

「ついたー！」

なんだかんだやってるうちに、無事、ブランコに到着しました。

「ありがとう命ちゃん」

神無は命ちゃんの頭を撫でてあげようと思いましたが、生憎両手が塞がっていたので無理でした。

ブランコで遊んでいた女の子は、神無と命ちゃんとあかねちゃんが近づいてくるのを見て、ブランコから下りて、ボランティアさんの背中の後ろに隠れています。人見知りするタイプなのかもしれませ

ん。  
ボランティアさんは後ろに隠れている女の子に、大丈夫だよ。というように頭を撫でてあげています。

「つららお姉ちゃん！ 神無お姉ちゃんがお話があるって！」

「そう。教えてくれてありがとう命」

命ちゃんは、ボランティアさんに褒められてエへへへです。

ボランティアさんは命に微笑みかけて、神無を見ます。

「あ、どうもこんにちわ。えっと、春風さんに誘われて今日来た神社神無です。よろしくお願いします」

神無はボランティアさんに挨拶をしました。ボランティアさんは、

ショートカットで、見た目はキリツとしているけど中身は優しさで溢れているような人に見えます。そんな雰囲気は漂っています。どこことなく、水無に似てる。神無はそう思いました。

「話は聞いてます。あたしは氷山つらら。よろしく願いします」

ボランティアさんのつららは、神無にニコツと笑いかけました。

## 5・2・くるみわり園の子供たち（後書き）

この小説は『暗中模索と友情探求』と『神様はサイコロを知らない』と世界を共有しています。なぜそんなことになっているかというところと世界を共有して。あぐどい。この作者あざとい。というのはまあ理由の三分の一くらいなんですけどじゃあお前他の理由言ってみると言われたいやだつてあまり創作能力ない私としてはキャラを使い回せるからかなり便利なんだもの。というわけであまり考えずそんなことをした結果何が起るかと言われれば、そのキャラを知らない人は特に問題ないけど知ってる人は違和感と戦う羽目になるといって、残念無念もう読まねえよ！の可能性がります。も、もろ刃のつるぎー。ハイリスクローリターン。

まあつまり私が何を言いたいかというと、氷山つらら。暗中模索で友情探求の主人公クラスのキャラです。神無と同年ですね。高校生時代の彼女を知りたいかたは暗中模索の登場人物紹介を読もう。二つくらいあるよ。ついでに暗中模索も全部読もう。はい、宣伝終わり。また次回！。

### 5・3・見えない傷は、刃に似てる

「これからの予定としては。まずお昼があります。昼食作りは当番制になってますので。その手伝いをしたりするんですけど……。最初ですから。神社さんはやめておきましょうか？ 慣れないと大変ですから」

「そうですね……。やめておきます」

現在、神無はつららからこれからの予定と自分が何をやるかを聞いています。

二人はブランコに座って、お話しています。命ちゃんとあかねちゃんは、近くでボール遊びをしています。お話が終わったら神無も入る約束をしています。

つららと一緒にブランコをしていた女の子、アイちゃんというらしいですが、アイちゃんはつららに抱っこされています。つららの胸に顔を押し付けているので、顔は見えません。よほどの恥ずかしがり屋さんのようです。コアラの子供が親に抱き着いてるみたいで可愛いなあ。と、神無は思いました。

「命とあかねは当番ではないので。お昼まではあの二人と遊んでいればいいと思います。その後は夕食まで自由時間ですから。そうですね……。今日はあの二人についていればいい。という感じですね。お昼もあの子たちと一緒に食べてください」

「あ、そんな感じでいいんですか？ なんかこう……。みんなの面倒をみないといけないのかなあと思ってたんですけど……」

「もちろん周りの子も気にかけては欲しいですけど。先生方が全体

を見て。ボランティアは数人を見る。というのが大きい役割分担ですね。あたしも。この子の面倒を見る人が多いです。というか。あたしはこの子の面倒だけ見ている感じですかね。まあ。春風さんは例外ですけど。あの人。神様ですから」

クスツとつらはら笑いました。それは、馬鹿にしたというか、身内にしかわからない冗談を言ったという感じです。神無は、春風さんはどこでも変わらないんだな。と思い苦笑しました。

「よ」

と、アイちゃんが顔を上げて何か小声で言いました。「ん？なに？」とつらはら耳を近づけて聞き返します。「たよ」マイちゃんは神無には聞こえないくらい小さい声で、つらららに囁きます。

「あ。ホント？ 無意識に言ってたみたい。教えてくれてありがとう。アイ」

つらはらアイちゃんの頭を撫でました。アイちゃんは目を細めて撫でられます。神無は、ほほえましいなあ。と思いながら二人を見ていました。と、アイちゃんが神無を横目で見ました。目が合いました。アイちゃんは、パツと。つららの胸に顔を埋めてしまいました。そんなアイちゃんを見て神無は苦笑いです。嫌われちゃったかな。

「ごめんね。神社さん」

つらはらアイちゃんの頭を軽く小突きました。あからさま過ぎるぞ。と注意したみたいです。

「いえ、別に大丈夫ですよ。恥ずかしがり屋さん、なのかな？」



アイちゃんに話しかけますが、無反応です。

「恥ずかしがり屋さん……。というのは少し違うかな」

つららは、昔を思い出すかのように、淡く微笑みました。

「神社さん。ここにいる子はどんな子か知ってる？」

「えっと……。命ちゃんと月読ちゃんは、親に捨てられた、んですよね？」

「うん。ここには今。命と月読を入れて二十人。その内捨て子や保護者がいない子は十人。虐待されていてここに来たのが五人。親が育児が出来ないからしばらく預かってくれと言ってここにいるのが五人」

「預かってくれ？」

「そう。金銭的な問題や環境や……。まあ色々あるのかな。あた……。私にもよくわからないけど。あそこで遊んでるあかねちゃん」

つららは、命ちゃんと遊んでいるあかねちゃんを指差しました。

命ちゃんとあかねちゃんは、ボール遊びに夢中のようです。命ちゃんはどうかやらノーコンのようで、あかねちゃんのところ的真つすぐボールが飛んでいきません。あかねちゃんは文句を言いながら、そのボールを追いかけています。でもその顔には、笑みが浮かんでいて、楽しそうです。

どこにでもいる、女の子です。

「大人。つて言つてなかつた？」

「え？ ああはい。大人だもんつて……」

「あの子の親は。あの子が大人になったら迎えに来るつて言つて。あの子をここに預けて行つたらしいの」

「……………」

神無は、あかねちゃんに自分はなんて言つたかを考えます。無神経なことを言つてしまったのかもしれない。

「こういうことは軽々しく話しちゃいけないんだけど。知らなくても見守れる人と。知つておかないと見守ることができない人がいるから……。神社さんは見たところ。春風さんみたいに。いい意味で人の心に土足では入ることが。出来ない人でしょ？」

「……………そう、ですね。人をどうこう出来るほど、私は出来た人間じゃありませんから」

神無は、自分の足元を見つめます。自分が情けないのです。出来ると言いつれない自分が。

「……………なら。これは忠告というか注意事項だけど。一人でいる子は。難しいから話しかけない方がいいよ。この子みたいに。見えない傷が。深いかも知れないから。下手に触れると。あっちも傷ついて。あなたも傷つく」

「……………わかりました」

神無は、また緊張し始めました。ここにいる子の中には、そういう

子もいるということを再認識したのです。しかしそれを意識するあまり、腫れ物に触るように接すれば、逆に傷つけてしまうであろうことを、神無は知っています。

知っているけど知らないフリ。

神無は、それは得意ですが、得意であるが故に、そのつらさを知っています。

「神無お姉ちゃん！ まだー！？」

命ちゃんが、神無を呼びました。神無と遊びたくて仕方がないようです。

「神社さん。行ってあげて。もうだいたい話すことは話したし。またわからないことがあったら聞いて。あたし……私はたいてい。アイと一緒にここにいるから。あ。あかねちゃんのことには」

「わかってます。聞かなかったことに、ですよね」

神無は、大丈夫です。というように笑いました。さっきまで自分に来るか不安に思っていたとは思えない笑顔です。気負ってるわけでもなく、緊張しているわけでもなく、つららの心配を払拭させるかのような笑顔です。それを見て、つららは微笑みました。

「神裂さんが話していた通りの人ですね」

「え……………？」

思いがけない名前がつららから出て、神無は驚きました。

その驚いた顔を見て、やっぱり黙っていた方がよかつたかな。とつららは反省しましたが、言ってしまったからには話すしかありません。

「昔。あなたのお姉さんにお世話になったことがあるんです。あなたの話も少し聞いていました。あなたはあたしと似ている。自分自身がないところが。そう言っていました」

「……………」

神無はどう返事をすればいいかわかりません。神無は、自分とこの人とは似ていないと思いましたが、姉がいうなら似ているんじゃないだろうかと思いました。そう思って、ああ確かに自分は自分の意見が薄いかと再認識し、やはり姉の言う通りかと思い、少し、泣きそうになりました。

結局自分は、姉と自分を比べなくてもいいと思ってるのに、比べてしまうのをやめられないんだな。と。

「神無お姉ちゃん！ 早くー！」

「……………今行くよー！！ ……それじゃあ氷山さん。色々ありがとう。アイちゃんも、またね」

神無は、つららにニコツと笑いかけ、アイちゃんの背中に手を振ってから、命ちゃんとあかねちゃんの元に向かいました。

神無はつららの言ったことを、聞かなかったことにしました。

「……………アイ。これからどうする？　またブランコする？　それとももう食堂行こうか」

つららは、神無が何事もなかったように命ちゃんとあかねちゃんと遊んでいるのをしばらく見つめたあと、アイちゃんに話しかけました。

アイちゃんは神無がいなくなったからでしょうか、顔をあげていません。

「さっきまたあたしって言ってたよ」

平淡な声と無感情な瞳。俗にいうと、まるで人形みたいな子供です。

「ん……………気付かなかった。まあ。ゆっくり直すよ。あたしも私。私もあたし。だからね」

「そ」

アイちゃんは素っ気なく答えて、器用に体の向きを変えました。抱っここの体制から、つららの膝の上に座っている感じになりました。

「……………」

アイちゃんは無感情な瞳で、三角形のフォーメーションでボール遊びをしている神無たちを見ます。

「アイもボール遊びする？」

「……………ブランコする」

アイちゃんは首をフルフル横に振りながら、そう答えました。

「入れてって言えば。入れてくれると思うけど？」

答えまでに間があったので、つららは聞いてみました。

「怖いからブランコする」

「……そう。このままする？」

「する」

「じゃあ。落ちないように。ちゃんと鎖持って」

アイちゃんは言われた通り、ブランコの鎖を小さい手でギュッと握りました。

それを確認してから、つららはゆっくり漕ぎ始めました。

加速はさせず、ゆりかごのように動かします。

アイちゃんはブランコに揺られながら、ずっと無感情な瞳で、神無たちを見続けました……

### 5 - 3 ・ 見えない傷は、刃に似てる（後書き）

この小説はフィクションです。現実ではありえない変な感じになる可能性がります。特にくるみわり園は現実の養護施設とは違う感じ……。

アイちゃんとあかねちゃん。

もしかしたらこれからも出てくるかなあ。って思います。

あかねちゃんは預かってもらっている。つまり迎えが来る可能性が高いっつーことです。命は可能性零。

アイちゃんは……アイちゃんですよ。

冰山つららはあんまりでしゃばらないと思います。三途舞歌と出会うとやっつこしいことになるから。

でもなあ……アイちゃんが出てくるなら出てくるだろうなあ……。

あたしと私。

一人称は大事だよってことです。

軽く流してくれてもいいです。

どういう意味か知りたい人は、暗中模索げふんげふん……。

また次回！





6 - 1 ・嘘じゃない事実 事実(前書き)

621。

次の日だよ！。

月曜日だよ！。

6 - 1 ・嘘じゃない事実 事実

唇ですよー。

「神無さん神無さん」

「なにかな水無さん」

「昨日あれ行っただんでしょ？」

「昨日あれ行っただんですよ」

「どうでしたか？」

「気になりますかね？」

「気になりますね」

「では教えてしんぜようかね」

「教えてくれる前に……」

「教える前に……？」

「普通に話そっか」

「だね」

「で、どうだったわけ？ 子供たちと戯れちゃった？」

「うん。戯れちゃったね。んー……最初から話す？ それとも最後から話して欲しい？」

「ここは普通に最初から話してもらおうかな」

「まずね。くるみわり園という名前なんだよね」

「ほう。胡桃の木はあった？」

「あったあった。命ちゃんとかかねちゃんと一緒に拾っちゃったよ」

「新キャラだね。あつ、詳しく教えなくてもいいよ。たぶん私は合わないと思うから」

「フラグな感じだね。でも、水無がそういうなら教えないでおこう。でね。くるみわり園に到着した途端、春風さんが子供たちに連れてかれちゃってさ。人気物なんだよ春風さん」

「あゝ、確かにあいつは子供に人気っばいからなあ」

「神様は子供と相性がいいということだね。でも私は困ってしまっただけだよ。見知らぬ土地でオロオロですよ」

「オロオロですか」

「とりあえず私は、近くにいた、氷山つららさんというボランティアさんに話しかけることにしました」

「また新キャラか……あつ、詳しく以下略」

「フラグ以下略。その氷山さんはね。どことなく水無に似てて、親感がわいちゃったよ」

「私に似てた？　ありえないありえない。それは神無の気のせいだよ」

「いや、雰囲気<sup>が</sup>似てたんだよ？」

「私に似てる輩<sup>やから</sup>がボランティアなんぞやるわけないでしょうが。私より神無に似てたんじゃないの？　だから親近感わいたとか」

「……………やっぱり、そうなのかなー」

「え、いや、そんなに落ち込むことなくない？　私に似てると思っただ人が自分に似てたというのがそんなにショックだった？」

「ショックだった……………」

「私もショックじゃないそれ！？　それは遠回しに私に似てるって言われてショックだった的な意味じゃない！？　私にはなりたくないのな！？」

「私は私になりたい！！」

「深い！　けどどこか浅い！　どんな形であれ自分は自分であると知りなさい！」

「……………水無、たまにいいこと言っね」

「神無、たまに毒を吐くよね」

「でさ」

「うん」

「冰山さんから色々話しを聞いてから、私は命ちゃんとあかねちゃん  
とボールで遊んじやいました」

「ふむふむ。遊んじやいましたか」

「命ちゃんがコントロール悪くてね。あかねちゃんが文句いいながら  
それを拾いに行つてね。大変だねー。場所交代しようかー。つて  
言ったら、別に。わたし大人だから平気つて。強がっちゃって可愛  
かったよー」

「それはなかなかの強がりっ子だね」

「でしょ？ で、日曜の礼拝つていうのかな？ それに行つていた  
人たちが戻ってきたら、お昼の時間でした」

「お昼の時間でしたか。どういふところで食べるわけ？ 一人一人食  
べる感じ？」

「んー、食堂みたいなのかな。水無、保育園行つてた？」

「行つてた行つてた。保育園みたいな感じつてこと？」

「そうそう。調理場がくつついてる教室みたいなのかな。食堂  
つてみんなは呼んでたけどまさに食堂だね。そこでみんな食べる

の。いやー、ビックリしたよ。冰山さんに案内してもらったんだけどさ。調理場で私が見た驚愕の光景。春風さんが五、六人の子供たちを仕切ってテキパキと働いてました」

「はあー、働き者だねー。それで神様とか言わなければ、普通に来る奴なのに……おいしい」

「ボランテイアさんとか職員の人も言ってたよ。巡さんが来ると仕事が楽でいいわねえ。あれで神様を目指すとか言わなければ、もつといいんだけどねえ。って」

「どこでも同じ評価ですか……」

「昼食は、ラーメンだったね。メンマとかちゃんが入ってあるやつね」

「おお。奇遇だね。私もラーメンだったよ。素ラーメンだけど」

「昼食でも春風さんは人気物だったね。こっちで一緒に食べようー。って誘われまくりでしたよ」

「誘われまくりでしたか。神無は何してたの？」

「私？ 私は、月読ちゃんと命ちゃんとあかねちゃんと冰山さんとアイちゃんと同じ島で食べてた。月読ちゃんと命ちゃんが同じタイミングでフーフーするのが可愛いなあと思って、あかねちゃんがフーフーするのは子供っぽいと思ってフーフーしなかったら、グホってなつて可愛いなあと思って、アイちゃんが小皿によそって食べさせてもらって可愛いなあと思ってた」

「とりあえず、神無が可愛いなあって思ってたことはわかった」

「昨日の私は終始可愛いなあって思っていました」

「それは幸せだね。ところで神無先生ー。質問があります」

「はい水無君。質問を許そう」

「くるみわり園の施設がどんな感じなのかが興味あります」

「興味がありますか。では、教えてあげましょう。まず食堂と呼ばれる三十人は入れる教室があります。そこには調理場もあって、そこは五、六人が一度に作業出来る大きさですよ」

「メモメモするフリ」

「食堂は、食事だけではなく、色々な用途で使われるらしいです。リビングみたいなもんだね。で、他には職員室みたいなところでしょ？ トイレは三つくらいあったかな。で、後は子供たちの部屋。一階は、小学生以下の子たちね。二人から三人部屋。二階は中学生の子の部屋で、一人部屋なんだって」

「ふーん。なるほどなー。二人部屋とか、色々大変じゃないのかな。疲れないのかな。私は実の妹との二人部屋で死にそうですぜ」

「んー、その辺は、どうだろうね。色々考えてるみたいだよ。関係性とか、境遇とかも考慮してるみたい。アイちゃんは、まだ四歳らしいんだけど、一人部屋なんだって」

「また新以下略」

「以下略。こんな感じで、わかってくれたかな？」

「わかりましたー。なんとなく聞いたただけだから、明日には忘れてそうだけどね」

「じゃあなんで聞いたの……まあいいや。さて。私たちは昼食を食べました。ちゃんと歯磨きもしました。ここからは自由時間です」

「あ、自由なんだ。なんかみんなで何かするのかなー。って思ってた」

「うん。私もそう思ってたけど違うんだって。基本的に、朝食、昼食、夕食以外は自由なんだって。あ、門限はあるらしいけど」

「ふーん。だからあの子たちも勝手にここに来れるわけね」

「みたいだね。午後になったら、近くにある自然公園に遊びに行く子たちと、園に残って遊ぶ子たち、それと勉強する子もいたかな。そんな感じになりました。そして私はまた驚愕の光景をみたのです！」

「見たのですか！」

「自然公園部隊は最初五人くらいだったのに、春風さんが自然公園部隊に組み込まれた途端！ ほぼ全ての子供たちが、冰山さんいわく、中学生三人と命ちゃんとあかねちゃんとアイちゃんと他二人以外全員が！自然公園部隊になったのです！」

「ど、どんだけ好かれてるんだよあいつは！？ それなのに大学構



内であいつが私たち以外と話しているところ見たことないのはどう  
いうことだろうね！ 私は逆に可哀相な子な気がしてきたよあいつ  
のことが！今度あったら優しくしてあげたくなつた！」

「んー、まあ私たちとは学部違うから、見たことないだけじゃない  
かな……………そう、信じようよ」

「……………うん。そうだね。それで、えっと、神無は命と残つたのかな  
？」

「そう。残つたんだよ。神無お姉ちゃんと今日は遊びたいって言わ  
れちゃった。あまりの可愛さにギューって抱きしめちゃったら、あ  
かねちゃんが羨ましそうに見てたから、かーわーいーいーって感じ  
でギューって！」

「……………あれだね……………なんというか……………あれだね。……………まあいいや。  
ところでさ。気になってたんだけど、いい？」

「いいよ？」

「月読と命って、結構別行動とるんだね。いつも一緒にいると思っ  
てた」

「あつ、私もそれ気になつてね。それとなく命ちゃんやあかねちゃ  
んとかに聞いてみたんだけどね。どうやら、二つの理由により、別  
行動を取ってたみたい」

「ほう。二つ」

「そう。二つ。まず一つめは、月読ちゃんは私より水無と遊びたか

つたらしい。だから私と遊びたかった命ちゃんと別行動になった。今度来る時は、水無姉ちゃんを連れて来てね！ というコメントをいただいておりますが、いかがですか水城さん？」

「……ノーコメント」

「ノーコメントね。で、二つめは、月読ちゃんは大勢と遊ぶのが好きで、命ちゃんはあんまり大勢と遊ぶの好きじゃないかららしいよ？ だから自然公園部隊にはついていかなかったみたいだね。だから喧嘩してたわけじゃないから安心していいよ？」

「いや、別に私は喧嘩してたかなんて、全然興味なかったけど」

「そういうことしておきましょう。でまあ、私たちは、午後もボール遊びや縄跳びとかして遊んだわけだね。楽しかったなあ。うん。楽しかった」

「それはよかったね。その、冰山？ だっけ。そいつはどうしてたの？」

「冰山さんはね。ずっとアイちゃんを膝にのせながら、こっち見たよ。アイちゃんが途中で眠くなっちゃったみたいだね。途中から抱っこしてた。親子みたいでほほえましかったなあ」

「いや、そいつと私の似ているところが全くわからない。私はそんなに母性に溢れてないよ？」

「んー、でも、似てるよ？」

「……………わからん」

「会ってみたらわかるんじゃない？ 帰る時、四時くらいに春風さんと帰ったんだけどね、命ちゃんにまた絶対来てね。って言われたし、あかねちゃんからも、わたしは別に来て欲しいとは思ってないけど命が悲しむから来なさいよね。というツンデレコメントももらったからさ。今度は一緒に行こうよ」

「私はその、あかねちゃんには絶対会いたくない気分だよ。絶対面倒なタイプ」

「そんなこと言わずにさ。毎月教会でバザーとかしてるらしいからその時行ってみない？ 毎月第三土曜日だって」

「んー……まあ、考えとくよ。バザーなら、火無も連れていけると思うし。神無は、今度はいつ行くの？ 今度の日曜日も行くわけ？」

「まだ考え中だけど……今月は行くのやめとこうかな。楽しかったしいい経験だったけど……結構疲れたから」

「やっぱり、気をつかった？」

「……ちよつとね」

「神無は優し過ぎる時があるからねー。ほどほどにしとかないと、体調崩すよ？」

「ん。気をつける。ところで水無？」

「なんだい神無？」

「明日は早く帰る日だっけ？」

「え？ あー、うん。早く帰る日。面倒だけど仕方がない。こっちが約束を破るわけにはいかないからね……。それがどうかした？」

「んー、まあ、なんでもないよー」

「いや、なんでもない気がしない……。なにかこう、嫌な予感しかない」

「大丈夫大丈夫。私を、信じなさい。いや、神を信じなさいかな？」

「みじかにいる神様を名乗ってる奴は全く信用できない……」

「水無」

「な、なに？」

「頑張つて」

「なにを!？」

終わり……

6 - 1 ・嘘じゃない事実 事実（後書き）

「ニアイコール？」

あとは………あかねちゃんはツンデレじゃないんだから！素直じゃないだけなんだから！！

グッドバイ！

7 - 1 甘えと自立と他力（前書き）

6 2 2  
次の日。

## 7-1・甘えと自立と他力

放課後ですよー。  
図書館ですよー。

「とうわけで集まってもらったです」

巡ですよー。

「とうわけで集まりました」

神無ですよー。

「とうわけで集まったんですか？」

舞歌ですよー。

「ではです。神社神無も来たということ、水城水無の誕生日パーティーについて考える会議を始めるです」

「了解しました春風さん」

「ちょっと待つてくれますか神社さん。なんなんですかこの集まりは。勝手に来て、ああいえ、神社さんは別にいてくれてもいいんですよ？ なんですか？ 誕生日パーティーという単語を口走りましたか？」

「色々と言いたいことが山盛りですけど最小限にしてやるです。まず誕生日パーティーという単語は口走ったです。次にそれは水城水

無の誕生日パーティーです。その計画を立てようという集まりです。そしてなぜ図書館というと三途舞歌。あなたが図書館から動くことが少ないからここにやってやっただです。わかったですか？」

「……誕生日パーティー？」

舞歌は視線を落として考えます。

「です。何か問題がありますか？」

「私は特にないよ。誕生日を祝うのはいい事だと思うしね」

「……………」

舞歌は視線を落として考えます。

「三途舞歌も特に問題はないですか？ 祝いたくないというなら無理強いはしないですし、何か用事が、来週の月曜日ですけど、何か用事があるなら言えます」

「……………」

舞歌は視線を落として考えます。

「無言は問題ないと受け取るです。さてです。パーティーをするなら場所が必要です」

「必要ですね。というかさ。本当にパーティーするの？」

「どつという意味です？」



「いや、パーティーって……パーティー？ 春風さんはどんなパーティーをする気なの？」

「ふむです。パーティーはパーティーです。紙飾りで飾るです。ケーキに蝋燭二十一です。料理はたくさんです。ハッピーバースデー歌うです。プレゼントをプレゼントです。とっても楽しいパーティーにしてやるです」

「か、紙飾りまでやるの？ 本格的な、感じ？」

「やるなら徹底的に」「やめましょう！」

舞歌はいきなり、怒ったのはわかりませんが、机を叩いて発言しました。

「な、なんですか三途舞歌。急にどうしたんですか？」

「やめましょう。そんなパーティー。くだらないですよ。誕生日を祝うなんてなんの意味もないです。祝ったところでなんの意味もないです。それに、水無さんはこのことを許可したんですか？」

「い、いや、水無は知らないかな……ど、どうしたの急に？」

舞歌が急に怒りだして、二人はビックリです。

「本人が許可していないのにパーティーをするなんて馬鹿ですか？」

ああ神社さんはこいつに誘われたんでしょうから被害者ですね。

本人が望んでないのにやるなんて、迷惑ですよ。迷惑以外の何物でもないです。そもそも……誕生日パーティーは、誕生日を祝うのは、

家族水入らずでやるべきじゃありませんか？ 友達がでしゃばるよ  
うなことじゃありませんよ。というわけで、私は抜けます。こんな  
のに付き合ってもらえませんから。神社さんもやめたほうがいいです  
よ？」

舞歌はそう言っつて、席を立ち、不機嫌そうな足取りで、帰ってしま  
いました。

神無と巡は、急なことで声をかけることもできず、呆然、という感  
じで舞歌を去っていく舞歌の後ろ姿を見送りました。

「……………なんですかあいつは」

先に我に帰ったのは巡でした。

「なんですかあいつは！！」

机をバーンと叩き憤怒です。

「空気読めないを通り越してふざけてやがるです！！ 誕生日を祝  
うのなんて意味がないですって！？ あるに決まってるじゃありま  
せんか！！ 生まれてきた事を祝うのに意味がないとのたまいやが  
りやがつて！！ その計画をした私が馬鹿！？ 馬鹿はあいつの方  
に決まってるです！！」

巡は机を睨みます。机に置いた拳を怒りで震えています。舞歌に対  
する鬱憤が爆発したようです。

「は、春風さん？ お、落ち着こうか？とりあえず落ち着こうか？  
ここ図書館だから静かにしようよ、ね？」

「神社神無は腹が立たないんですか！？ あいつのあの態度に腹立ちませんか！？」

キツと巡は神無を睨みました。神無は、こわっ！と思いました。

「は、腹が立たないことはないけど……三途さんがあそこまで言うなら何かこう、あるんじゃないのかな？」

「あるってなんですか！？ 私にはあいつが捻くれてるとしか思えませんー！」

「捻くれてるけど、その捻くれにも何かこう、意味があるんじゃないかなーって、思わない？」

「思いませんです！！ というか意味があつたとして教えてくれないとなんにもわからないですよ！！ 私は神様じゃないんだから一挙一動で全てを理解出来るわけじゃないんだから！！ 言ってくれないとわからないんですよ！！ だから私は言ってくれるまで待つてやろうと思つたんですよ！！ それなのにいつもあんな態度をとりやがって！なんですかあの態度は！！誕生日は祝うだけ無駄！？誕生日は家族で祝うもの！？迷惑！？馬鹿！？嫌い！？あっちに行け！？携帯番号を教える理由がない！？神社さんは別！？甘えてるんですよあいつは！！言わないでも周りの人間が理解してくれると！！ 試してやがるんですよあいつは！！ああいう態度をとつてもまだ自分と一緒にいてくれるか！！ふざけやがってあの野郎……！！いい加減私もうんざりですよ……！！」

巡はまた机を睨み、そして、笑みを浮かべました。それはどす黒い悪魔の笑みです。

「あいつがそういう態度ならやってやるです……言わないなら調べ  
てやるです……言わないってことは調べて欲しいってことでしょ？  
友達になって相手が心を開くのを待つなんてもうめんどくさいです  
……手っ取り早く徹底的に完膚なきまで塵ちりも残さず調べ尽くして、  
あいつの歪みをくつきりはつきりめつきり浮き彫りにして、叩いて  
叩いて叩きまくって、均ならして均ならして均ならしまくって、ひらべったくし  
て平らにして真っ白にして、他人を傷つけるあんな態度を取れない  
ように、救って」「春風さん」

神無は強い口調で巡を止めました。

「そういうのは、もうやらないんじゃないの？　そういうやり  
方の神様を目指すのは、やめたんじゃないの？　それは救いには程遠  
いって、反省したんじゃないの？」

神無は巡を諭すように尋ねます。巡は顔を伏せたまま、何も答えま  
せん。

「……………取り乱したです」

そして巡は、ポツリとそう呟きました。

「ちょっと、疲れてたから自制が足りなかったです……。まだまだ  
神様の道は遠いですね」

巡は顔をあげて、自嘲の笑みを浮かべました。

「そんなことないよ。少なくとも、私よりは神様に近いと思うな」

神無は巡を労り、優しく笑いました。

その言葉と笑みは、巡を励ますために出たものであり、神無の本心がどうかはわかりません。少なくとも、巡にはわかりませんでした。だから巡は、疲れた笑みを浮かべながら、尋ねました。

「神社神無は、疲れませんか？ いい人を演じるのは？」

「私？ 私は別に？これが普通だからね。演じてるつもりは、ないよ？」

神無は巡に笑いかけながら、なんでもないようにそう答えました。その笑みは、相手に強要する笑みに巡は見えました。

つまり、違うと思っても反論するな。もそういうことにしておけ。お前に迷惑をかけていないんだから。という笑みです。

舞歌が - の歪みなら、神無は + の歪み。巡は、神無が普通ではないと、ようやく気付きました。

そもそも自分の戯言に付き合ってくれてる時点で、おかしいじゃないか。

巡は、自嘲の笑みをもう一度浮かべました。

「……………神社神無」

「ん？ なに？」

「くるみわり園で、ボランティアしている私は、どうでしたか？」

「どうでしたかって……………凄いなあって思ったよ。あんなに子供に好かれてさ。私にはとてもじゃないけど、真似できないね」

「私の真似をする必要はないですよ。神社神無も、あかねとあんなに早く仲良くなれるなんて、凄いなと思うですよ」

「そうかなあ……あかねちゃんが人懐っこいからだと思うよ？」

「あかねは人懐っこくはないです。園内ではよく喧嘩をする問題児です。私には決して懐きません。神様なんて、馬鹿らしいです。子供は騙せても大人は騙せないって。全くとってあかねの言う通りです……」

「……」

そういえば最初に神様かどうか聞いてきたな。あれにはそういう意味もあつたのか。神無は、巡の憂いを帯びた笑みを見ながら、そう思いました。

「……ああ、やめましょう。どうも今日の私は弱ってます。最近眠れないからですね……体調管理も出来ないとは……」

「何か、心配事でもあるの？」

「ええまあ少し……神様も色々悩みごとがあるですよ」

巡は、精一杯笑いました。強がりと見て取れる笑顔でしたが、神無にはそれ以上追求する勇氣はなかった。「そっか。お大事にね」と言うだけに留めました。自ら、悩み事を聞けるほど、神無は強くありません。

「さてです。誕生日パーティーはどうするんです？ 三途舞歌の言う通りやめますですか？」

「……………ん、パーティーはいいと思うけど、サプライズパーティーはやめた方がいいかもね。やっぱり水無の事情も考慮しないと。水無には、火無さんもいるから。火無さんは多分、二人だけで誕生日を祝いたいと思うよ?」

「……………ですか。わかりましたです。神社神無は、水城水無に聞いてみてください。本当に迷惑なら……………プレゼントを渡すくらいにしましょ?」

「ん。了解」

「それでは、呼びだして悪かったですね。今日はこれで解散です。一緒に帰るですか?」

「春風さんの住んでるところはどこだっけ?」

「駅の方ではないですけど、今日は駅前に買い物に行きたい気分ですから、一緒に帰ろうです」

「そっか。じゃあ一緒に帰ろう。春風さん、なに買いに行くの?」

「神社神無は何か買うんですか?」

「え!?!私? そうだなあ……………あ、消しゴムがなかった気がするから、文房具屋さんに寄ってこようかな」

「奇遇です。私も文房具屋に行こうと思ってたですよ」

「……………そっか」

終わり  
・  
・  
・



7-1・甘えと自立と他力（後書き）

……何が書きたかったがわからない。

甘えが三途舞歌だとしたら、自立は神社神無。他力が春風巡。まあ、神無も他力といえれば他力だけ。

春風巡は神様に頼ってる。

……だから、何が書きたいかわからん。

次回までにわかればいいなあ

7・2・私の誕生日を忘れていたのに他の女の誕生日は祝うなんて!! (嘘)

623

つまり次の日。

章は変えなくてもいいやと思った。

タイトルはノリで決めればいいやと思った。

7・2・私の誕生日を忘れていたのに他の女の誕生日は祝うなんて!! (嘘)

「……珍しい」

今日は一時限から講義だから、水無は朝早くきました。

一時限からある時は神無より水無が先に大学に着くときがあります。今日も大学には、神無より水無の方が先に着いたようで、神無の姿はロビーにありません。

代わりに、舞歌の姿がありました。

舞歌は席に座り、静かに本を読んでいました。

「あなたが図書館以外にいるとは、天変地異が起こりそうだね」

水無は舞歌の対面に座りました。

「勘違いしているようですが、私だっずっと図書館にいるわけじゃないませんか?」

舞歌は本を閉じ、本の上に手をのせます。手をモジモジはさせませんが、表情はどこか固いです。緊張しているのかもしれない。

「そりやまあ知ってるけど、で、なに? 私に用事でしょ?」

本を閉じたということは、つまりそうということなのです。

「もうすぐ誕生日らしいですね」

舞歌は唐突に本題らしきことを言う。

「え？ まあ、そうだけど……なんで知って……巡か」

「その通りです。昨日、教えてもらいました。あいつはパーティーをすると言っていましたよ」

「パーティーって……ああ、神無めそういうことか」

「そうですね。神社さんも引き込まれてましたよ。水無さんは誕生日パーティーについてどう思いますか？」

「どう思いますかって言われてもね……そうだなあ。誕生日パーティーなんて、保育園以来されたことない。というか、誕生日を祝ってもらった記憶が、保育園でなくなってるね。ま、別にいいけどさ」

水無は皮肉気に笑います。誰を皮肉ってるのだろうか。誕生日を祝ってもらっていた自分か。それとも、祝わなかった母親か。おそらくどちらでもでしょう。

「ケーキくらいは出ませんでしたか？」

「舞歌の親は、ケーキくらいは出してくれるわけ？」

「ケーキだけは、出してくれます。ホントにそれだけですけどね。別にプレゼントをくれるわけでもない。おめでどうも言わない。ケーキだけ」

舞歌も皮肉気に笑います。皮肉ってるのは、親です。ついでに、巡も。

「あいつは、パーティーをするのが普通だと思ってるんですよ。全くわかってないですよ。神様とかふざけたこと言ってる夢見がちな人間には、そういう誕生日を知らないんですよ」

「いや、知ってはいるでしょ。知ってるからこそ、パーティーとか計画してるんですよ。私は誕生日なんてどうでもいいし、パーティーは遠慮したいけど、祝ってもらうのは、普通に嬉しいよ。生まれたことを祝ってもらえる嬉しさや大事さを、巡は知ってるわけよ」

「……あいつは、自分がやりたいからやってるに違いありません。誕生日パーティーをして祝ってやるという自分に酔ってるんですよ。他人の迷惑も考えずに。あいつは全然私たちのことがわかってない。神様とか名乗ってるんだから当たり前なのかもしれないですけどね」

「……………あんたさ」

水無は頬杖をついて、呆れ顔で舞歌を見ました。

「自分が不幸とか、思わない方がいいよ？ いや、あんたの境遇が不幸の部類には入ると思うよ？ そんな傷がある奴が、不幸じゃないとは、私は言わない」

水無は舞歌の左手首を見ます。リストバンドで隠れてますが、そこには傷があることを、水無は知っています。

「だけどさ。一番不幸なわけじゃないよね。あんたより不幸な奴なんて腐るほどいるし、あんたが幸せだと思う人間も腐るほどいるわけよ。そして何より重要なのはさ、不幸だからって正しいとは限らないわけ。言ってる意味、わかる？」

「……………いまいわかりませんね。何が言いたいんですか？」

舞歌は少々苛立っているようです。水無が自分の意見に賛同してくれなかったのが、予想外だったのかもかもしれません。

「春風巡がただのお節介野郎だと思うなってことだよ。神様名乗ってるのにはそれなりに意味があるんだよ。それなりの、不幸があるんだよ。自分だけが不幸だと思うなよ。不幸な自分は救われるべきだと思ふなよ。神無の一件。あんたはもう忘れたのかな？ っていうこと。わかってくれた？」

「……………」

舞歌は水無を睨みます。凶星を突かれたので怒ってるのか、的外れだから怒ってるのか。そのどちらかに違いありません。

「舞歌の誕生日っていつなわけ？」

睨まれても全く気にしない水無は、頬杖ついたまま、ふと思いついたことを確かめてみます。

「三月……………三日」

舞歌は水無から目を逸らし、恥ずかしそうに告げました。三月三日。ひな祭りです。

「ひ、ひな祭り？ あ、いや。馬鹿にしてるわけじゃないようん。いや、似合ってる似合ってる。うん。舞歌は雛祭り似合ってるね。うん。だからポケットに入れた手をゆっくり戻そうかな!？」

水無は昔、舞歌のカッターの餌食になりそうになったことがあるので、舞歌の殺意に敏感なのです。

舞歌は、いや、こんなことで怒るなよ私。と思ったのかはわかりませんが、ため息をついてポケットから手を戻しました。

それを見て水無は、ホッと息をつき、そしてニヤリと笑いました。

「巡に祝ってもらった？」

「……」

「無言は時に無言ではない。いやいや舞歌さん。自分の誕生日を祝ってもらえなかったのに、人の誕生日は祝うのかよって怒るのは、どうだろう。お門違いじゃない？」

「……別にそんな理由で怒ったわけじゃありませんよ。というか、なんで私が怒ったってわかるんですか？」

「あんたが図書館で待つんじゃないで、出向いてきたんだからそれなりに理由があるんだろうな。って考えてればわからなくもないよね。巡の悪口ばかり言うし」

「悪口を言った覚えはないですけど」

「もし心からそう思ってるなら、あんたの性格最悪だ」

「………あいつは私の誕生日を知らないんだから、別に祝ってくれなくても当然です」

「話を唐突に戻すね、三途の舞歌さんは。そうそう。知らないなら祝わないのは当然なわけよ。私だって知らなかったんだから。やっ

ぱりさ。自分がやってもらいたいなら自分がまずはそれをやれみたいな言葉があるんだから祝ってもらいたいなら自分から教えないといけないと思うわけだけどどう思う?」

「……とりあえず、どうして早口なんですか?」

「言ってるなんか面倒になった……。なんで私があんと巡の関係を考えないといけないんだ……」

はあ、しんどい。水無は机に倒れました。

「……まあ、考えておきますよ。というわけで、本題に入っていますか?」

「まだ本題じゃなかったわけ!?!」

水無は机から起き上がりました。

「どうぞ」

舞歌は机に置きっぱなしにしていた本を、水無の前に移動させました。

「どうぞって……ああ、この前読んでた本? 貸してくれるの?」

『夢見がちな人間との付き合いかた』というタイトルですよ。

「いえ……あげます」

舞歌は恥ずかしそうに、顔を背けました。顔が赤いです。



「へ？　なんでくれんの？　貸してくれるんじゃないっけ？」

そしてここにきて、水無は鈍感力を発揮。

「なんでって……だから、あれですよ」

「……あれって、なに？」

「……だから、あれです」

「……だから、なに？」

「……ああもう！　誕生日プレゼントですよ！　生まれてきておめでとうございませぬの気持ちですよ！　なんでそこは気付かないんですか！？　私を羞恥心で殺すつもりですか！？」

逆ギレってやつです。いや、羞恥ギレってやつです。プレゼントをあげるといのが、よほど恥ずかしかったのでしよう。というか散々誕生日祝うとありえなくねとか言っというてプレゼントあげてるのが、恥ずかしかったに違いない。

「い、ごめんなさい！？　そしてありがとうございます！？」

なんでそんなに怒って祝ってくれるのかわからない。という気持ちになりました。

「パーティーをやるかは知りませんが私は不参加だから先に渡しておこうと思ったんですよ！　何か文句ありますか！？」

「い、いや、文句ないけど……うん。文句ない。どうもありがとう  
舞歌」

本を持って、笑顔を浮かべる水無。それを見て、また恥ずかしくな  
る舞歌。

「………ならいいです。じゃ、私はもう帰りますので」

舞歌は用事も終わったので、席を立ちました。

「帰るって、授業は？」

まさかこれを渡すために来たのか？と水無は思っ  
て不思議不思議。

「出ますよ。図書館に帰るという意味です」

「お前の家は図書館かよ……神無には会っ  
ていかないわけ？」

「昨日ちよつとあれだから……会  
いづらいです」

「ふーん。神無は気にしないだ  
ろうけど……あんたが気にする  
か。よろしく言っ  
といてあげる」

「言っ  
といてください」

そう言っ  
て舞歌は、颯爽と去らな  
かった。

「ん？ なにかまだ用なの？」

言っ  
べきか言わぬべきか悩んで  
いる。といった表情で立っ  
たままこ

ちらを見ている舞歌に、水無は尋ねます。

「……………あなたはなんだかんだ言っつて、優しいですから、パーティーを許すかもしれませんけど……………」

舞歌は言いづらそうに、水無に自分の願いを告げます。

「誕生日は家族と、妹さんと祝うべきだと思います。友達と一緒にいたら、ダメだと思います」

舞歌はそう言っつて、水無の答えを聞かず、今度こそ去っていきました。

「……………なんだあいつ？」

残された水無は、はて。舞歌は妹に会ったことあったかな。ないよな。なのになんでそんなに妹を気にしろっつて言うんだ？ あんなに真剣に。と思い、頭にハテナマークを浮かべました……………

7・2・私の誕生日を忘れていたのに他の女の誕生日は祝うなんて!! (嘘)

いや、だからさ。コメデーが薄い気がするわけよ。

神無と水無の会話以外だとコメデーが薄い気がするわけだよ。

三途舞歌がいつぱいいる気がするんだよ。

何が書きたいかわからないんだよ。

ノリで次回に続く。

### 7-3 パーティーの規模

舞歌が去ってからしばらく経ってからですよー。

「へい神無ー」

「やー水無ー。今日は水無の方が早かったね。本読んでたの？」

「まあね。さつき舞歌が来てさ。誕生日プレゼントとしてくれたわけよ」

「三途さんが……？ そっか。よかったね」

「うん。よかった。よかったんだけどね神無さん」

「よかったんだけどなかな水無さん」

「君、何か私に言うべきことはないかな？ 例えばパーティーとか。例えばパーティーとか。例えばパーティーとか。例えばパーティーとか！」

「な、なぜそのことを！？ さ、サプライズなパーティーがおじやんだよー！」

「ふふふ、もう全てネタはあがってんだ！ さっさと白状しまえー！」

「春風さんがサプライズなパーティーを計画してたけど三途さんの忠告を聞きサプライズではなくちゃんと水無に許可を取ってからパーティーをしようということになりましたことを、ご報告します」

「懇切丁寧に」報告ありがとうございます」

「で、どう？」

「パーティーねー……規模によるよね」

「紙飾りを作るって言ってました」

「却下だね」

「却下ですか。では、どのくらいの規模なら？」

「クラッカーもないくらいの規模ならまだ許されるね」

「クラッカーもないくらい……つまり、ロウソクが二十一本刺さってるケーキを用意するくらいの規模？」

「んー……そこに、『HAPPY BIRTHDAY 水城水無』  
って書かれているチョコがないならセーフかな」

「つまり、ケーキ以外に寿司があったらアウトみたいなの？」

「あ、うん。それはアウトだね。完璧アウト。その規模はやばい」

「手づくりケーキは？」

「あー……ギリアウト。その規模はギリギリアウト」

「ギリかー……ねえ水無？」

「なに神無？」

「よくわかんない」

「私も」

「……とりあえず、小規模ならいいってこと？」

「とりあえず、小規模ならいいね。んー、例えばさ。大学の食堂で集まって、コンビニで買ったくらいの小さいケーキを食べる。くらいなら全然いいよ？」

「水無の家でやるのはどうなの？」

「アウトだね。まず間違いなくアウトだね。というか、火無がいるから無理っしょ」

「やっぱり火無さんはダメかー」

「ダメだろうねー。あいつ今、料理勉強し始めてるからね。お姉ちゃんに誕生日、私の手づくり料理食べさせてあげるからねー。二人つきりだもんねー。いっぱいお祝いできるねー。ということらしいです。嬉しいやら悲しいやらですよ全くもう……」

「嬉しいはわかるけど……悲しいの？」

「キッチンが……キッチンが……大変なことにー!!」

「そ、そんなに力強く言うほどですか……」

「そんなに力強く言うほどなんですよ……というわけで、無理ね」

「んー、じゃあ、春風さんの部屋でワイの規模は？」

「あいつ一人暮らしとか言ってたか……ギリセーフかなあ。でもなあ、結局は、火無がなんて言うかなんだよなあ……」

水無は頬杖ついてため息一つです。

「やっぱり火無さんがネツクなんだねー」

神無は両手で頬杖、クスクス笑いです。

「三途さん家の舞歌さんにも妹は大切にしろと言われたからなあ……巡るところでパーティーするなら火無も連れて行きたいし……だけど、無理だよなあ。あいつ絶対、家で二人でやりたい言うし……」

ため息一つ追加！。

「春風さん家でお祝いしてから、水無の家で二人だけだとかは？」

人差し指立て、提案追加！。

「私が面倒」

「うわっ、正直者で怠け者」

のけ反り驚きビックリ反応。



「二回も祝られるって、お腹いっぱいだよ。色んな意味で」

「じゃあ……やっぱり火無さんか」

「火無だねー……神無、説得してくれない？」

「私が？ 無理無理。なんか私、嫌われてるじゃん」

「だよー……なんで嫌われてんの？」

「知らないよー……」

神無も頬杖ため息一つ。

「誕生日……面倒」

水無も頬杖ため息一つ。

「水無そういえばさー」

「なにさー」

「何か欲しいものあるー？」

「あー………悩みが解決出来る何かー」

「わかったー」

「わかったの!？」

今度は水無が、のけ反り驚きビククリ反応・・・

## 7-4・火無と巡の邂逅

「あ、これおいしそー」

火無は部屋で、寝転がりながらテレビを見ていました。

テレビには料理番組が流れていて、火無はそれを見て、これ作れたらお姉ちゃん喜ぶかなー。と考えていました。その料理のレシピをメモっていないので、考えが実現されることはないですけど。

最近火無は料理の勉強を始めているのですが、それは水無に教えてもらってという形です。一人で料理をしたりはしません。それは水無に一人の時に火を使うと言われてるからという理由の他に、料理するのが楽しいのではなく、お姉ちゃんと料理するのが楽しい。という理由があります。

ですから日中は、料理番組を見たり、水無と一緒に買った料理本を読む。そして水無が帰ってきたらそれを作る。たまにテレビで見た料理を作りたいとか言っつて（レシピをメモってはいない奴です）水無を困らせます。

最近の火無の生活はそんな感じですよ、

ピンポン

「んー？」

チャイムが鳴りました。

もうすぐお昼というこの時間。一体誰が来たんだろう。勧誘なら追いかけて、荷物ならちゃんと受け取るよ。どっちにしても、ちゃんとしたらお姉ちゃんに褒められるな。火無はそんな風に考えながら、玄関を開けました。

そこには、

「……………だれ？」

知らない人が立っていました。もちろん勧誘の人とか宅配の人とかも知らない人ですが、そこに立っていた人は、明らかにその人たちではない、いわば一般人。もちろん火無は会ったことありません。でもどこかで会ったことがあるような気がしました。

「お前が水城火無ですか。なるほどです。確かに水城火邪と同一人物とは思えない雰囲気ですね」

火無にとっては知らない人でも、知らない人、つまり巡にとっては当然、火無は知らない人ではありませんでした。

「とりあえず、家の中に入れてくれませんか？ 私はお前の姉の友達です」

だから怪しい人じゃないよ。入れてよ。という意味で言ったのですが、残念ながらそれは逆効果のようでした。

火無はこの、私より背が低いくせに生意気な奴が、お姉ちゃんの友達のはずがない！という結論に達しました。

「……………」

というわけで、扉を閉めました。

「……………ちょ！なんで扉を閉めるですか！開けるです！私は怪しいものではないです！ただの神様を目指す普通の優しい人間ですよー」

あまりにも静かに自然な感じで閉められ、反応できなかった巡は、すぐに扉を叩きながら怪しい人じゃないよーと言いましたが、扉を叩きながら神様とか言う奴は間違いない怪しい人だ。

「今日は暑いんだー」

火無は、ほっとけばいなくなるよねきつと。とあって、また寝転がりながらテレビを見始めます。

ピンポーンピンポーンピンポーンピンポーンドンドンドンドンドンドンドンピンポーンピンポーンドンドンドンピンポーン。

「開けるですよー！！ 今日あなたに有益な話し合いしにきたですよー！！ これを逃すと多分後悔ですよー！！ 早く開けるですよー！！ 近所迷惑ですよー！！ 神様のお願いは聞くべきですよー！！！！」

しつこい宗教勧誘だなー。早くいなくならないかなー。

「……………」

火無がそう思っていたら、その願いが伝わったのか、音がしなくなりました。

帰ったのかな？ 火無がそう思い玄関の方を見ていると、

「あ！水城水無！ちょうどいいところに来たです！ 聞いて下さいです！ あなたの妹は客を追い出すような酷い奴ですよー！」

そんな声が聞こえてきました。

「お姉ちゃん!？」

火無は慌てて玄関に向かいます。

自分が悪い子だと思われたら大変です。

こんな時間に帰ってくるわけがない。なんていうことは、全く考えません。

「お姉ちゃんそいつが言ってるの全部「はいひっかかたですー!!」  
というわけで失礼しますですよー」……」

玄関を開けながら弁明したら案の定水無はいなくて、巡は勝ち誇りながら固まっていた火無の脇を抜け、潜入に成功した。

「ふむふむです。なかなか綺麗な部屋です。これなら五人は入れる  
ですね」

巡は固まっている火無は気にせず、靴を脱ぎ、部屋を見る。

「……お姉ちゃん呼びますよー!!」

火無は巡の前に回り込み、お姉ちゃんを呼ぶと脅した。

「……そこは警察を呼ぶ。じゃないですか？」

冷静にツッコミを入れた。

「じゃあ警察呼びます! さっさと出て行ってください! ニジは  
私とお姉ちゃんの部屋なんだから!」

両手を広げ、ここから先は行かせない。みたいにするけど、ここから先はないです。ワンルームですから。キッチンと部屋を別になっているけど、部屋は一つしかないから。

「呼びたければ呼ぶがいいです。呼べたらですけど?」

挑戦的な巡の言葉に火無はむっとして、呼んでやる! と思った。

「……」

思った。

「呼ばないですか?」

勝ち誇った。

この部屋には電話がない。電話線を引いていないから。そして火無は携帯を持っていない。巡は火無が携帯を持っていないことを知っていた。知っていたというか絶対そうだろうなと思っていた。なぜならこんな妹に水無が携帯を渡すとは思わなかったからだ。一日にメール百件とかさらに送ってきそうだからねこの子は!

「むー……む?」

お姉ちゃんが意地悪して私に携帯買ってくれなかったからこんなことにー! と思っていた火無は、ふと思いついた。

「携帯貸して」

目の前の人に借りればいいじゃん。

「馬鹿ですか？」

貸すわけないじゃーん。

「バ、バカじゃないもん！　じよ、冗談だもん！」

顔を真っ赤にして、否定。

「冗談ですか。それはよかったです。もし本気だったら馬鹿認定でしたです。馬鹿じゃないなら大声を出すが正解でしたですよ。まあ、近所に人がいないのは確認済みなので無駄ですけど。おとなしく、私の話を聞きます」

いや、ストーリーじゃないし犯罪者じゃないよ。ただ神様としては、事前に上下左右の部屋に人がいるのかを確認するのは当然のことなのですよ。

「……………出てつてよ」

いまさらになって目の前の相手に恐怖を感じた火無。後ずさって距離をとります。こいつ私に何する気なの！。

「ふう、いまさら怯えられても困るです。大丈夫ですよ。何もしいですよ。私はお前の姉の友人です。今日は水城水無抜きでお前と話したかったから来たわけです。わかったですか？」

「……………こんなチビがお姉ちゃんの友達なわけない」

「ち、チビ!？」



驚愕でもない事実。春風巡の身長は150?。水無や神無、当然舞歌もそんなこと気にしないので指摘しないが、小さい部類に入るのだ。巡はひそかにそのことを気にしていたのだ! 実は子供に人気なのは小さいからじゃね? とか思う日もあるのだ! ひそかに舞歌は背が高く羨ましいな!。とか思っているのだ! ちなみに火無とか水無とか神無の身長は平均なのだ!

「言っでいいことと悪いことがあるですよ!? ことにかいてチビとはなんですかチビとは! 私はこれでも立派な神様を目指す大学生ですよ!?。」

巡、火無に怒って詰め寄る。

「ち、チビをチビって言っで何が悪いの! 私、チビなんて怖くないから!。」

火無、怯えを振り払う。

「チビチビ言っでなです! お前の方が年下なんですからある意味お前の方がチビですよ!。」

よくわからない理屈。

「意味わかんないよこのチビ! あっち行っでよチビ! 早く出て行っでよチビ! ここは私とお姉ちゃんのお城なの!。」

「チビチビうるさいですよ年下馬鹿! チビチビ言っでな! これならチビチビ言わない水城火邪の方がまだいいです!。」

「水城火邪なんて知らない！ よくわかんないこと言うなチビ！！  
早く出てかないとぶつよ！」

「やってみやがれです！ 私の勘忍袋は思いの外小さいですよ！？」  
巡は火無に襲いかかった。

「チビなんかに負けないもん！」

火無は巡を向かいうつ。

「神の名の元に二度とチビとは言わせません！」

「チビの戯言を聞き飽きたー！」

そして水無の部屋から、ドタンバタン。キヤーキヤーワーワー。死ねー。チビ言うなー。あっち行けー。行かない。チビー。バカー。と聞こえ始めましたが、近所の人はお出かけ中なので、近所迷惑にはなりませんし、近所で変な噂が立つことありません。

水無、よかったねー。

#### 7 - 4 ・火無と巡の邂逅（後書き）

おや？

この二人なかなか相性がいいな。

巡は背が低いです。という設定でしたが、あまり使いどころないよなー。とか思ってたらここで使えた。

イエーイ。鈴乃げふんげふん……イエーイ。

まだまだ続くぜイエーイ。

7 - 5 ・ 神様は、甘くない

「私の、はあ、勝ち……です！」

巡は火無に座って勝利宣言。

「もーやだー！！ こいつやだー！！ お姉ちゃん助けてよー！！」

火無は布団でグルグル、顔だけしか出ていない状態で泣いている。

約10分の死闘でした。

部屋の中は荒れ果て、二人の髪や衣服はボロボロ。とまではいかな  
いけどそれに近い状態である。

最終的に巡が火無を転ばせ、ベットにあった布団でグルグルにして、  
その辺にあった荷造り用ロープでグルグル固定し身動きを封じ、電  
波女じゃなくて蓑虫女になった火無を巡は気合いと根性とチビの怒  
りで、ベットに放り投げ、自分もそこに飛び込んだ。火無の、ぐえ。  
という声と共に勝敗が決した。

「全く、はあ、無駄に、はあ、疲れた、です」

息を整えながら、衣服の乱れと髪をテキトーに直す。

「どうする、ですか、この、部屋の荒れよう……です」

巡は、火無に座りながら部屋の荒れようを嘆く。

「知らないもん！ チビが悪いんだもん！ 私悪くないもん！ 早

くこれ解いてよー！ 酷いことしないでよー！……うう、暑いよー、お姉ちゃん助けてよー……」

巡の下でなんとか抜け出そうと暴れるが、残念、火無は力尽きてしまった。

「全く、水城火邪とはまた違うめんどくささがあるですね……水城水無もご苦労様ですっ」

巡は火無にチョップを食らわせながら、水無に同情した。

「痛い！ うう……もうやだよー。お金ならあげるから、もう酷いことしないでよー」

「金が目当てではないです。私はお前と話をしにきただけです」

「そんなの信じられない……話をしにきただけならこんなことしないもん……」

こんなこと。布団でグルグル巻きにすること。

「それはお前が言っではいけないことを言っただけです。お前が悪いです」

「私悪くないもん！ チビをチビって言ったただけだふおん！ いふあいよー！ おねえひゃーん！」

「この口ですか！ この口がまだチビって言うんですか！？」

巡はマウントポジションに変更して、頬っぺたを引っ張ります。こ

の二人、仲良しさんだねー。

「全く、次チビって言ったら、水城水無にあることないこと言い触らすですよ」

頬っぺを離して、脅し。

「やめて！ そんなことしないで！ なんでも言うこと聞くからお姉ちゃんに変なこと言わないで！ そんなことされて………お姉ちゃんに嫌われちゃったら私、もうどうすればいいかわからないよー………」

火無は顔を歪ませて泣きました。両手が使えたら顔を隠して泣けたのに、残念ながら泣き顔を隠すことができません。

「………そこまで泣くことはないじゃないですか」

決して綺麗とは言えない泣き顔を見て、ちよっぴり罪悪感。そしてそんな水無しか頼れる人がいない火無が、ちよっぴりかわいそう。というわけで、頭を撫でて泣き止ませてみようと思いました。

「やめてよ触らないでよ！ お姉ちゃん以外に髪の毛触られるなんて気持ち悪いー！！」

頭を振って、巡の手から必死に逃れようとする火無は本当に、気持ちわるがっているようです。

「………同情してやった私が馬鹿だったです」

「いやぁー！！」とか火無が叫んでいるのは気にせず、思う存分巡

は火無の髪の毛をぐしゃぐしゃしてあげた。

「うう……お姉ちゃん私、汚されちゃった……」

「人聞きが悪いこと言ってるんじゃないねえです」

巡は、さっきとは別の感じの涙を流している火無を、満足気に見下ろす。もう気が済んだらしいです。

「さて、本題にいくですよー。水城水無の誕生日をここで祝うことにしたです。よろしいですか?」

「……意味わかんないから下りてよ」

「だからお前の姉の誕生日を祝うから場所貸せよこらってことですよ」

「やだから下りて」

「一緒に祝ってやるといふことです。よろしいですか?」

「やーだっ。だから下りて」

「誕生日というのは多数で祝った方がいいと思わないですか?」

「思わないから下りて」

「つまり水城水無の誕生日は二人だけで祝いたいということですか?」

「わかってんなら早く下りてよ」

「ふーむ。困ったですねー」

巡は火無の上で悩ましげに考える。

「困ったなら早く下りて早く出て行って野垂れ死んでよ」

火無は巡の下でぶーたれる。

「水城水無は別にお前と二人つきりじゃなくてもいいと言っているですよ？」

ニヤリと笑う巡は、悪役にしか見えない。

「嘘だ！ お姉ちゃんそんなこと言わない！！」

火無怒る。布団が暴れる。しかし巡は落ちない下りない諦めない。

「嘘じゃないですよ。お前のお姉ちゃんは、別にどうしてもお前と二人だけで祝いたいわけではないです」

「嘘だもん嘘だもん！ 私知ってるもん！ お姉ちゃんずっと家族に祝って欲しかったって知ってるもん！ あのお家じゃ祝えなかつたから私が祝うんだもん！ 二人つきりで祝うんだもん！！」

火無は涙目になって必死に否定する。

巡はそんな火無を冷めた目で見下ろす。  
そして、突き放すように告げる。

「水城火無。それはあなたの我が儘です。水城水無は確かに家族に



祝られたいのかもしれない。しかしそれは家族だけに祝られたいという意味ではない。二人で祝いたいのはあなたの望みであり水城水無の望みではない。私は神として、そして友人として、水城水無の望みを叶える。わかりましたか？ 私は決して、水城水無や神社神無のように、あなたの我が儘を認めない。あなたの我が儘に、屈しない」

「うっ……うっ、違うもん……我が儘じゃないもん……お姉ちゃん、私と二人で祝いたいもん……」

巡の静かな威圧に怯みながらも、火無は自分の意見を変えないし、我が儘だとは認めない。

「じゃあ聞いてみるですか？」

「え？」

「今ここで水城水無に聞いてやるです。それで、水城水無が別に二人つきりじゃなくてもいいと言ったら、ここでみんなでパーティーです。二人つきりが言いというなら私は諦めて、誕生日は二人ぼっちで祝うがいいです」

「……いいよ。絶対お姉ちゃん二人がいいっていうもん」

「いい度胸です。では、審判の時です」

巡は不敵に笑いながら、どこからともなく携帯を取り出し、電話をかけはじめた。

もちろん、火無の上ののったままで。



7・5・神様は、甘くない（後書き）

ゆっくり書こう。うん。六月中に誕生日当日までいけなくてもいいじゃないか。うん。

え？ どうして巡との死闘において火邪が出てこないって？ そりゃあなた。火邪は水無が関わっていないとあらわれないんですよ。たぶん。

また次回！。

## 7 - 6 ・神様 vs 人が作りしモノ

ところかわって大学。

午前中の講義が終わり、いわゆるお昼休みの時間帯。神無と水無は食堂で昼食をいただいでいました。

「水無、携帯がピカピカしてる」

「ん？ ホントだ」

水無は鞆のポケットに携帯を入れておいた。携帯は少しポケットから出ている状態だったので、対面に座っていた神無が先に着信に気付いた。

「電話だけど……誰だこれ？神無知ってる？」

水無は、見知らぬ携帯番号に首を傾げる。

「んー？……あー、これ多分春風さんだよ」

「巡う？ なんであいつ私の番号……ああ、あの時か」

水無は一度、巡に救ってやると言われて、根掘り葉掘り調べ尽くされたことがあるのだ！ その時携帯番号も調べられていたに違いはない！ よい子は真似できないことを平気でやってのけるのが神様の

素質らしいのだ！ 嘘だ！ ちなみに巡が水無のアパートの合い鍵を持っているのはトップシークレットなのだ！ 未使用だから許してあげてね！

「もしもし？ 巡だったら許さないよー」

『許すのは神の特権ではないのですよ？』

「意味わからん。まあいいけどさ……で、何の用？」

『用というのはお前の『おねえちゃー！』おっとすまないです。テレビのリモコンを押し間違えたようです』

「……………お前今どこにいんの？」

電話の向こうから、聞いたことがあるような声がある。本当にテレビなのかな？

『家です。家。今日は講義がないから家にいったです。嘘じゃないですよ？』

「わざわざ嘘じゃないと言ったのが怪しいけど……………まあありえないか」

巡が私の家に行くわけないし。ましてや火無が巡を家にあげるわけないだろうし。と、水無は考えたわけです。まさか妹が布団でグルグル巻きにされているとは思いませんよねー。

『ありえないですありえないです……………ちょっと待つです』

「え？　なんで？」という水無の疑問には答えが返ってこない。代わりに電話の向こうから、遠くで暴れている音が聞こえてくる。

『ふー。お待たせしたです。ちょっと掃除してたです』

「なんで電話の途中で掃除するんだよ……」

『深いことは気にしないです。で、用件ですが、神社神無から話は聞いたですか？』

「話？　ああはいはい。誕生日パーティーね。聞いてますよー」

『どうです？』

「どうですって聞かれてもね。あんたが考えてるような、紙飾りとかクラッカー鳴らすようなパーティーは遠慮したい」

『つまり、小規模ならいいということですね。よかったです。ここで、パーティーなんてやりたくない。とか言われたら、天に唾つばを吐いた感じになるとこだったですよ』

「いや、今日のお前はいつも以上にわからない。なにか企んでるんじゃないでしょうね？」

『企んでるのはお前のパーティーだけです。では、みんなでパーティーするのは問題ないということでもいいですね？』

「私はね。私は別にいいけど火無がね。いや、やるなら火無も一緒じゃないとあれだなー。とか私も思うわけよ。だけどあいつがなー。絶対二人でやりたいって言うと思う」

『なるほどです。すいませんがもう一度言ってくれませんか？ 聞き逃したです』

「聞き逃したのになるほどって言ったのか？ ……いや、ホントになんなの？ なんでわざわざ電話で『いいから言うです』……………私は別に皆様とパーティーをするのは問題ないですが、火無を蚊帳の外にするのは出来ないので、火無が許可しないと無理です。これでいいですか神様？」

「それでいいです。では、また連絡するです。お前の人生に幸あつ！？」

巡が慌てたような声を出した。

「なんだ最後のその台詞って、切れたし……………」

電話は切れてしまいました。

「春風さんなんだって？」

「……………いや、よくわかんない」

水無は携帯を見つめながら、首を傾げました。

最初から最後まで、よくわからない電話でした。

「油断したです。まだそんな力が残っていたとは……です」

巡はベットから距離を取って、苦々しい感じで見ろ。

「神様なのに油断することがあるんですね」

そして衰虫状態でベットに立つ火無、ではなく火邪。

順を追って説明しましょう。

まず巡は、火無が電話の間邪魔出来ないように、手で火無の口を塞いでいました。それが出来やすいように、馬乗りしている感じで座りなりました。警察を呼ばれたら捕まることは間違いないですね。そして巡は、水無にもう一度言ってくれと頼んだとき、火無の耳に電話を当て、水無が別に二人つきりでやらなくてもいいと思っていますと教えたのです。電話を切ったあとに自分が言っても信じないかもしれないと考えたわけです。

水無の言葉を聞いたとき、火無は目を大きく開け、大粒の涙を流しました。

それを見て、さすがにやり過ぎたか。いや、でもこのくらい普通かな。と思いつながら、巡は口から手を離し、電話の締め言葉の言葉を言っていたとき、火無が跳ねたのです。上に乗っていた巡は火無から、ベットから落ちて、上に何もなくなった火無は、器用に立ったのです。いや、どうやって立ったのかの具体的方法は、ほら、首跳ね？

「それにロープの縛りも甘いです」



火邪はそう言っつて、簡単に布団から脱出してしまいました。暴れたから、ロープが緩くなっていたようです。

「私ならもっとうまくやれます。やりましたと言っべきですけどね」

「……今度やる時はそうしてやるです。そんなことより水城火邪。何の用ですか？」

巡は火無を相手した時と打って変わって、警戒しながら話す。火邪の危険性はこの前味わったからね。

「あなたに用事はありません。姉さんにお灸をすえにいくだけです。あとは……誕生日まで監禁ですね」

「……逆ギレですか。水城火無は思った以上に我が儘のようですね……」

巡は苦虫を嚙んだような顔になる。

「否定はしませんよ。そんな火無だからこそ、私みたいなのがいるんですから」

火邪は涼しい表情で肯定。

火邪が出てきた理屈は簡単だ。火無は水無に裏切られたと思った。だから火邪が暴力で制裁する。火無は二人でパーティーをしたい。だから火邪が暴力で二人つきりにする。巡との約束なんて関係ない。これから水無に二人つきりでしたいって言わせればいいんだから。

ね？ 簡単でしょ？

「では、そういうことで。さようなら神様。ああ、別にここにいってもいいですよ。ただし。私が姉さんを連れ帰ったときもいた場合は、今日の夕飯は神様鍋になりますね」

火邪はクスツと笑いました。背筋が凍りそうな笑いでした。ベットの上に立ち、冷たい笑みを浮かべながら見下ろしてくる火邪はまるで氷の女王のような威圧感。髪ボサボサだけど、すげえ堂々としてます。

そんな火邪の言葉と態度に、巡も寒気が走りましたが、怯まなかったのはさすが神様というべきですね。巡は玄関に続く道に立ち塞がりました。

「……邪魔するつもりですか？」

火邪はそれなら容赦しないという雰囲気を漂わせます。

「水城火邪。暴力はよくないです。話し合ってください。約束は、守るべきです」

しかし巡は怯みません呑まれません。暴力はよくないという言葉に説得力はありませんが、ここは絶対に通さないと決めた気迫に満ちています。

そんな巡を見て、火邪はため息をつきました。

「私に言われても困ります。それは火無に言ってください。私は火無が望んだことをするんですから、私にやめろと言われても困りません。だけど安心してください。私だって姉さんが傷つくの嫌です。楽しいし気持ちいいですけど、嫌です。姉さんが話し合いで前手を撤回して、パーティーは火無と二人ですと言ってくれば、私は

暴力を振るわないですから」

「それは認められないです。それは結局、水城火無の我が儘が通るといふことです。それを私は許さないです。私は水城水無の友人として、あいつの望みを叶えてやるんです」

巡は火邪を指さす。

「水城火邪。それにはお前のつてなにするですか!？」

巡は慌てて指を引っ込める。だって火邪が指搦もつとするんだもん。

「もう面倒だから指を折ろうとしただけですけど、何か問題か？」

「問題しかありません！ なんですかお前は！ 今私はカツコイイ台詞を言おうとしていたところなんですよ！ 邪魔するなです！ もう一度言うからよく聞きます！ 水城火邪！ お前協力します！」

「嫌です」

「なぜです!！」

「嫌というが無理です。あなたが姉さんの望みを叶えるためにいるなら、私は火無の望みを叶えるためにいるんですから。私とあなたは相入れない存在です」

「ふふふ、確かにそうかもしれないです。しかし水城火邪。私は知っています。お前という存在は、水城火無の切り札的存在。つまりお前でもダメだったとき、水城火無は諦めるしかないというわけです!！」

不敵に笑う巡を見て、火邪は首を傾げる。

「何が言いたいんですか？ 確かに私でもダメなときは、火無は諦めます。しかしそれは稀ですよ。今回は火無の決意が固いですから、ああ、それはあなたに対する対抗心に近いですが、だから今の私は、両手両足を折つても姉さんに言うことを聞かせますよ？ 神様に私を止めることが出来ますか？ 火無に勝てたからって、私に勝てると思ってるんですか？ 火無は私に暴力的なのを任せています。その意味が、わかりますか？」

つまり、今の私をさっきまでの私と同じと思うなー！ということですよ。

「確かに私にはお前を倒せません。戦っても一分と持たないです。私は逃げるのが精一杯です。しかし水城火邪」

巡はニヤリと笑う。

「水城火邪。お前は水城火無から生まれ、水城火無の望みを叶えるだけと、自分は水城火無の影と言っているですが、それは違うです。私から見ればもはやお前という存在は、水城火無とは別物です。ちやんとした一個の人格です」

「……何が言いたいんですか？ もうわからないから殴り飛ばしていいですか？」

「それです。水城火邪。お前が本当に水城火無の望みを叶える、水城火無の泥を被るだけの存在なら、私をさっさと殴り飛ばすはずですよ。なのに私を殴り飛ばさない」

「つまり……殴ればいいんですか？」

拳を固める。

「違います。つまり、水城火無の説得には水城火無の説得方法。水城火邪の説得には水城火邪の説得方法があるということです。水城火無と同じ手法ではダメということですよ」

「……………」

火邪はよくわからない。この人が何を言いたいのかわからない。私は火無のために存在するのにさっきから何を言ってるんだろう。さっきから水城火邪っていうのもわからない。私は、ただの火邪なのに。

火邪が混乱しているのを見て、これはチャンス。やはり水城火邪が出てきたときの対象も考えておいてよかった。と、巡は思い、ニヤリと笑って決め台詞を言う。

「覚えておくがいいですよ水城火邪！私の名前は春風巡！神様もどきの人間もどき！そして水城水無のお友達！そして！お前の大好きな神社神無ともお友達なんですよ」

スチャット、どこからともなく巡は携帯を取り出す。

「神社さん……………」

火邪は驚いた。巡のたいそうな名乗りに驚いたわけではない。巡からその名前が出るとは思わなかったのだ。だって前会ったとき、神

無は火邪に神様は知らないって言ってたからね。

「です。水城火邪。私が聞いた話によると、どうやらお前は神社神無が好きのようですね。神社神無だけがお前に対しての評価が高いのがその証拠です。そして水城火無は嫌い。そこがお前と水城火無の明確な違い。水城火無には使えない手法。つまり！お前の説得は、神社神無にしてもらおうです！」

巡は自信満々で、最後の詰めを人任せです。

## 7 - 6 ・神様 vs 人が作りしモノ（後書き）

ホムンクルスじゃないよ？

巡が言ってることが支離滅裂な気がするけど、ほら、あいつ神様だしさ。

火邪は多重人格もどき。火無から生まれた火無自身。しかし名前をもらったから火無からだんだん分離していく。

まあ、つまり。春風巡がやってることはある意味、病気を悪化させているのです。

作られた人格に人権があるのかどうかで、春風巡の行いが善か悪かが決まるぜ。

次回をお楽しみにー。

## 7・7・私が私でいれる時間

ところかわって大学。神無と水無は昼食は食べ終わり、いつも通りテキトーな会話をしていた。お題はメロンクリームソーダのさくらんぼ。

「む。携帯が呼んでる」

会話をしている途中、神無はバックに入れてあった携帯が震えているのに気付いた。

「春風さん……?」

携帯番号を確認して首を傾げる。

「なに? 今度は神無に電話? 一体今日のあいつはなんなんだ?」

「さあ? とりあえず、電話に出てみる。もしもし?」

『もしもです。神社神無元気ですか?』

「うん。元気だよー」

『それは結構なことです。近くに水城水無はいますか?』



「いるよ。代わる？」

『いえ、代わる必要はないです。ちょっと水城水無には内緒の話をしたいからよろしくです』

「ん？ 了解。ちょっと待ってねー」

『私待つです』という巡の返答を聞いたあと、神無は巡に聞こえないようにしてから、水無に事情を話す。

「なんか水無には内緒の話をしたいらしいから、あっち行って電話してくるね」

馬鹿正直です。

「え、なにそれ。すごい気になるんだけど」

そりゃ気になりますよ。

「たぶん水無の誕生日のことじゃないかな。だから内緒にしたいんだと思うよ」

「いや、あいつまだサプライズとか考えてんの？ なしなし。サプライズはなし。神無、あとで話した内容教えてくれる？」

「んー……考えとく。とりあえず、電話してくるね」

「はい、いつてらっしゃーい」

神無は席をたち、周りに人がいないところに移動した。

『もしもし……もしもし？春風さん？』

神無が電話の向こうに話しかけても、向こうからは『ギャー！やめるですよ！やめるですよ！それは折りたたみじゃないから曲がらないですよ！』というか曲げれる形状じゃないでしょうがです！』という声と、携帯を取り合っているような音しかしない。

『全く、とんだクラッシュャーです……』

「春風さん？ もしもーし」

『おっとすまないです。ちょっとどたばたしてたです。水城水無にはうまいこと言ってきたですか？』

「うん？ うん」

うまいことってなんだろうー。

『……まあいいです。実は今、私は水城火邪と一緒になのです』

「え？ なんで？ 火邪さんが春風さんの家にいるの？」

『説明するのは面倒ですので後回しですが、とりあえず神社神無。お前に水城火邪の説得を頼みたいです』

「説得？ 何を？ どうして？ 何が？」

『詳しいことは勢いと雰囲気です。水城火邪を、一緒に誕生日を祝うように説得するです！出来なければ私の命と水城水無の

両手両足がただじゃ済まないですよ!？」

「突然過ぎてよくわからないし責任が重過ぎるから逃げ出したいんだけどって春風さん!？」神無が呼びかけるが、『いいですか水城火邪? これはこのままで使えるですよ? 下手なところ押すなですよ? 後で遊ばしてやるから絶対に曲げるなですよ? 神様、人は騙しても嘘はつかないです』という声しか聞こえてこない。つまり聞いてねえよこいつ。こっちの都合考慮零だよ。といった感じである。

『……もしもし。神社さんですか?』

火邪の喋りかたは電話に慣れていない感じがする。

「そうだけど……火邪さんですか?」

神無はよくわからないまま、火邪を説得しなければいけなくなった。ご苦労様です。

『そうです。火邪です』

「火邪さんですか……」

『そうです』

「そっかぁ……」

『……』

「……」

で、何を話せばいいの？

「あー……元気？」

ジャブ。

『元気じゃないです。よくわからない神様が目の前にいて腹立たしいです。むかつきます』

カウンター。

「そ、そっかー……火邪さんは、あれ？ いつの間に春風さんと仲良く……仲良くなったの？」

とりあえず仲が良いということにした。

『仲良くないです。こいつが勝手に家に来て火無を追い詰めたから私がでばることになったんです。そういう神社さんは神様と知り合いたったんですね。この前は知らないって言ってたのに。嘘をついたんですね。万死に値します。今、会いに行つていいですか？』

「い、今！？ いや、それはちょっとあれだからというか、あの時は嘘というか、一応春風さんは友達だから神様鍋にされるのはあれだったからで……ごめんね？」

『別に……神社さんが謝ることはないです。どうせ私なんか火無のおまけですから。友達の方が大事ですよ……。神社さんなんて死んじゃえばいいのに』

拗ねた。

「違う違う！ 私は火邪さんも友達だと思ってるよ！？ だから、ね？ そんな拗ねないで！ そして死んじゃえとか言わないで！」

神無はどうもやりにくかった。そもそも神無は電話というのが苦手なのだ。相手の顔が見えないと、相手が自分の言葉をどう受け止めてるかよくわからなくて不安になる。しかも今の相手は、あの火邪だ。基本的に肉體言語（暴力的な意味で）が得意な火邪も、当然電話は苦手だ。そのため今の火邪は、どうもいつも神無が知っている火邪より弱っている気がして困ったなあである。

「……友達？ 私がですか？」

火邪が驚いたような声をあげた。

「え、ああうん。友達じゃないの？」

「友達……」

火邪はその言葉を確かめるように呟きました。

「……嬉しいですけど、友達は無理です。火無が怒ります」

「あー、そっか。火無さん私のこと嫌いだもんね。私と友達になんかなりたくないか……そっかそっか……怒られちゃうのか……怒られちゃうの？」

いまいちよくわからなかった。友達になると怒られちゃうの？

「火無は私を知りませんから実際に怒られはしませんけど……あん

まり神社さんと話していると、機嫌が悪くなります。私が楽しんでいるのが気に入らないんです。きつと。だから、友達は無理です』

よくわからないけど、火邪さんが自分の求めていないことをするのが、火無さんは気に入らないのかな？  
と、神無は解釈した。

「そっかあ……火邪さんも大変なんだね」

『……そうです。大変なんです。それが私の役割って言うても大変なんです。私だってもっと姉さんと遊びたいし神社さんとお喋りしたいのに、火無ばっかりずるいですよ』

神無、愚痴られる。

「えっと……頑張ってるね？ 私は、えっとー、応援してるよ？ いつでも話し相手にもなってあげるし」

なにぶん、どう答えればいいのかからない神無は、とりあえず応援しといた。遊べばいいとか、頼めばいいとか言おうとも神無は考えたが、多重人格というのはよくわからないので、下手にそういうこととは言えないのだ。上下関係ができてるのは、ある意味いいことだと思っし。

『……私も携帯が欲しくなりました。そうすればこうやって神社さんと普通に話せるのに。会って話すと、私は神社さんの両足を折って連れて帰りたいという願望を抑えるのが、大変ですから』

「りよ、両足折る……」

じよ、冗談だよね。冗談だよね！ あんパンの話してるときずっと我慢してたとかありえないよね！？つて、神無は心の中で大絶叫です。

『ああ、でも、こつやつて話しても神社さんに今すぐ会いに行つてロープで引きずつてきたいとおも』おい水城火邪。ちよつと返すです『嫌です。なんですか。まだいたんですか。踏み潰しますよ』それは暗にチビつて言ってるんですか！？』

「……………あのー」

携帯の取り合いが始まったようだ。どうやら巡が、いつこつに進んでいない内容に痺れを切らしたようだ。さつきから本題とは関係なさそうな単語しか、火邪の口から出てなかったからね！。

『手、届きますか？』こいつ水城火無よりやることが陰湿ですー！

『！』

「……………おーい」

携帯から離れたところから話しているような感じ。想像してごらん。火邪が携帯を持った手をあげて、巡がそれに手を伸ばす姿……………身長164前後が手を伸ばして身長150前後がそれに手を伸ばす……………ぎりぎり届きそうだな。

『返せです返せですー！！』邪魔しないでください。神社さんと話せないじゃないですか『ぐえ！』……………神社さん。もう平気です。邪魔モノはいなくなりました』

「……………そ、そつかあ、いなくなつた……………のかあ」

神無は深く考えないことにした。

『何を話しましょうか』

「え？ いや、何か本題があつたんじゃないの？ 私、春風さんに火邪さん説得してつて言われたんだけど……」

『私と話すよりこんな虫けらみたいにはいつくばってるやつのことを選んで選ぶんですか？ さつきいつでも話してくれるって言ったのに、また嘘をついたんですか？ そんなに嘘をつく舌はいらぬんじゃないですか？』

「嘘を言ったつもりはないんだけど……あつ、この舌は必要だよ。これがないと火邪さんと話せないでしょ？」

『それもそうですね。危なく二度と神社さんと話せなくなるところでした』

「うん。私も二度と喋れなくなるとこだった……えつとさ。本題を片付けたあとに、ゆっくり話さない？」

『神社さんが言うならそうします。私の目的は、火無に姉さんと二人つきりで誕生日を祝わせてやることです。私はこれから大学に向かつて姉さんを拉致監禁する予定です。それを神社さんは説得すればいいと思います』

「なるほどー」

説得相手に説得内容を教えられる図。



『神社さんはどう思いますか？』

「どう思うって……水無は別に二人つきりじゃなくてもいいって言うたよな。だから、二人つきりにこだわらなくてもいいと思うな。どんな形であれ、祝ってることには変わりないし、祝ってもらえば嬉しいと思うし……水無はなんだかんだ言っただ言っただ、火無さん抜きじゃパーティーはしないって言うてるしね。それって、やっぱり火無さんに祝って欲しいと思ってることだよな。……それに、私も水無の誕生日祝いたいな。だから、私は二人つきりは我慢して欲しいと思う」

『わかりました。じゃあ、やめます』

「やめるの!？」

すんなりいってびっくりしちゃった。

『わかりました。じゃあ、やめません』

「やめないの!？」

前言撤回が早過ぎてびっくりしちゃった。

『もう、どっちですか。いい加減にしないと怒りますよ』

「怒るの!？ いや、ごめん。ちよつと気が動転しちゃって……。え？ そんな簡単に諦めちゃっていいの？ 火無さん怒らない？」

『怒るかもしれないですけど……いいです。私、神社さん好きです』

から。神社さんが姉さんを祝いたいなら協力してあげます』

「……………あ、ありがとう」

はーずーかーしいー。

『それに、私も最近の火無は我が儘が過ぎる気がしますから。ちょっといいと思います。自分の願いが全く叶わないこともあるということ、思い出すべきです。じゃあ、これで神様の用件は終わります。お喋りしましょう。嫌とはいいませんよね』

「嫌とはいいませんよ。言わないけど……………」

そろそろ時間が……………。

神無が時間を確認しようとしたとき、

「神無ー。講義そろそろ始まるよー」

水無が現れました。やはりそろそろ午後の講義が始まる時間のようにです。

「まだ電話してんの？ 巡なんだって？」

電話の内容に興味津々。

「いや、春風さんじゃなくて、ちょっと待って……………もしもし？ こめんね。講義始まつちゃうから、ちょっと時間ないや。また後で話そっか」

神無は軽い気持ちでそんなことをいいました。

火邪はその言葉を、軽い気持ちでは受け取れませんでした。

あとあとつて。私には後があるかはわからないのに。私に次はないかもしれないのに。

『……………嫌です』

小さな声でした。泣く一歩手前のような声でした。

「え？ いや、でも……………」

神無は水無に目で助けを求める。

しかし水無は事態を掴めないので首を傾げる。

『それが無理なら約束なんて守りません。これからそっちに行つて、講義中でも関係ないです。姉さんを連れ出して、ついでに神社さんも連れて行きます。姉さんに頼んで神社さんも一緒に住めるようになります。達磨だるまにしても一緒に住みます』

火無と違つて火邪の場合、我が儘というか、脅しです。

「だるま……………達磨！？ ちょ、火邪さん！？ それはちょっとダメじゃないかな!？」

神無は自分が達磨になつた姿を想像して慌てた。火邪ならホントにやりかねない。

「神無……………今、火邪つて言った?」

水無は訝しげに神無の携帯を見る。ゆっくり神無に近づく。

『それが嫌ならこのままお喋りしましょう。もしくは、今日私の家に来てください。泊まってください。一晩中お喋りしましょう。そうすれば、神社さんを飼うのは諦めます』

「飼う!? 私はペットじゃ「すきありいただき! 一体なんの電話してるんだ!?!」水無!? 今色々大変だから返して!?!」

水無は神無の携帯を奪った。神無は取り返そうとする。水無は携帯を返さないようにがんばる。がんばる。がんばる。そして水無に軍配があがった。そういう争いごとには、神無は向いていないのだ!

「もしもし火邪? どういうことか……火邪?」

水無が携帯を耳に当てると、向こうも何かドタバタしていた。そして、こんな声が聞こえた。

『あははは!! 油断大敵でしたね水城火邪!! 神様を足蹴にするなんていう罰当たりなことをするからそんな痛い目を見るんですよ!! あははは!! ざまあみやがれです!!』

「……………」

巡さんはたいそうご機嫌に勝ち誇っていられます。

『もしもし神社神無ですか? 説得はうまく言った「おいこら春風巡……お前、人の妹になにした? というか今どこだ? 家にいるって、誰の家だ?」……………あ、電池切れた』

「ちよっ!?!?こらてめえ!! なに古典的な逃げ方してんだ!?!」

水無が携帯に吠えても、携帯はツイッターとしか言いません。機嫌が悪いんだね。

「水無！？ どうなったの！？ 私は達磨になる運命なの！？そして水無はタコになるの！？」

神無は、水無に縋るように問いただします。

「達磨！？ タコ！？ なにがどうしてどんなことが起こるとそんな単語が出てくるの！？ 説明してくれないかな！？」

「あ、講義始まっちゃった」

神無は取り返した携帯の時間を見て、そう呟いた。

「なんでこのタイミングで冷静に時間確認したんだー！！」

「水無……今日私、家に帰りたくないの……」

神無はうるうるとした目で水無を見た。

「コロコロとテンション変えないでくれないかな！？」

「達磨はいやぁー！！」

神無は髪の毛を掻きむしり始めた。

「神無が錯乱してる！？」

水無は、全く事態はわからないけど、とりあえず、ツツコミに精を出しました。

## 7-7・私が私でいれる時間（後書き）

あぶね。神無がプツンするところだった。まだ早い。まだ早いよ。

火邪は口だけじゃありません。やるといったらやります。こいつにとっては傷つけるっていうのは愛情表現です。

神社神無の両手両足ぶち切って鎖に繋いで、不眠不休で世話をする覚悟があるなんて、愛が深いですよー……いや、大丈夫だって。そんな展開なりえないって。水無がいるから……うえ。達磨が二体並んできるとこ想像したら気持ちが悪くなっちゃった……ごめんなさい。

次回でこの章終わり。そして誕生日当日にワープ。だと思っ

一気に説明しましょう。

巡は神無に電話をかけました。そして火邪は巡の携帯に興味を持ちました。なぜなら巡の携帯は『あいふおん』だったのです。新しいです。新型です。水無の折りたたみ携帯とは全くの別物です。そんなものがホントに携帯なのかしらん。と思った火邪は油断していた巡から携帯を奪いました。折れるか試しました。落としたら壊れるんじゃない？とも思い自由落下実験も行いました。ギリギリで巡はキャッチしました。「全く、とんだクラッシュヤーです……」と巡が汗を拭ったのは言うまでもありません。

そして巡は火邪に、絶対折るなよ。いいか？絶対だぞと言って、携帯を渡しました。巡は、しばらくは横でじっと待っていました。なかなか話しが進まないようなので、やはりここはもう少し説明しなければと思い「おい水城火邪。ちょっと返すです」と火邪に言いました。おそらく近くに水無がいたら、もう少し話させてやれよ。と言ったに違いないです。なぜならその時の火邪はうつつすらとでしたが笑っていたのです。それほど神無とお喋りが楽しかったのに邪魔されたら、そりゃ怒るさ。「手、届きますか？」とか意地悪言っちゃうさ。「返すです返すですー！」って両手をあげてる巡に対して、ボディーがから空きだぜ？って感じで鳩尾に拳を入れちゃうさ。「ぐえ！」という声と共に膝をついた巡を、はいつくばれ。虫けらのごとく。って感じで踏み潰すさ。そこまでしちゃうのは仕方ないじゃないか。今しか喋れないのに邪魔するんだもん。



そんなこんなで火邪は誰の邪魔もされずに、巡を踏み潰しながら（たまにグリグリもしました）神無と談笑していたわけですが。もちろん巡は黙って踏み潰されていたわけもなく。虎視眈々と勝機を窺っていました。踏まれながら。別にそういう趣味はないのでこの状況は屈辱でしかありません。そしてついに勝機がきました。神無のほうでトラブルがあつたらしく「神社さん？ ちよつと姉さん邪魔しないでください」と言っている火邪は電話に集中して、完全に巡の存在を意識の外に置いていました。踏み付けている足の力も弱まっています。というわけで巡は、おいおい。足元がお留守だぜ？ っと感じて火邪の足元からゴキブリのように脱出し、足を掬い上げました。「っ！？」完全に油断していた火邪は、下に住人がいたら間違いないと怒るような音とともに床に尻餅をつきました。さすがの火邪もあまりの痛みで、悶絶。マジ痛いんですもん。そんな火邪に対して巡はやり過ぎたと思うわけもなく「あははは！！ 油断大敵でしたね水城火邪！！」と勝ち誇ったわけです。そして火邪の手から「あいふおん」を取り返して「……………あ、電池切れた」ということになったのだ。

では、携帯電話を切ったあとかからの続きをどうぞ。

「……………なにするんですか」

火邪はフラフラしながらも、なんとか立ち上がりました。リカバリー早いね。

「それ返してください。まだ話が終わってません」

右手を伸ばしてよこしなさいアピールです。

「嫌です。誰が自分踏み付けていた奴に貸すですか。それにもう話

は終わったです。神社神無はお前を説得したです。お前に電話を貸す理由はもうないですよー」

巡は、あっかんべーをします。挑発です。いつもの火邪なら即、ポコポコですが、なにぶんお尻が痛いので動きが鈍くなっているので無理っばいです。巡はそれを見越しての挑発です。悪役が板についてきましたね。

「あなたになくても、私にはあります。いいから寄越しなさい。私は、もつと神社さんとお喋りするんです」

火邪はフラフラと巡に近づく。巡は、「その程度の速さで、私は捕まらないですよー！」と言いながら、火邪を避け、ベットに飛び乗った。自由過ぎるよこの神様。

「ふー、水城火邪。だいたいの話はお前に踏み潰されながら聞いていました。私は神様を名乗るだけあってお前の焦ってる理由もだいたい理解したです。私は多重人格というのはよくわからないですが、別にそんなに焦らなくてもいいじゃないですか。人格というのはそんな簡単に消えないのですよ？ 私を見るがいいです水城火邪。周りにどれだけ言われようと私は私をやめる気はないです。私は神様を目指し神様と名乗り続けてやるです」

ベットに乗ることにより火邪より目線が高くなりいい気分なのか、巡は腕まで組んで偉そうです。

そんな巡を火邪はじと目で睨みます。こいつ馬鹿だと思ってるに違いないです。

そしてさりげなく火邪は、玄関への通路を塞ぐように立ち、巡の退路を封じました。

「……あなたが最初からそういう人ならその言葉を信じられます。ですが、あなたは最初から神様を目指していたんですか？ 生まれた瞬間から神様ですか？ あなたには今のあなたじゃなかった時があるんじゃないませんか？ 今のあなたじゃないあなたはもういないんじゃないですか？ 人格なんて案外簡単に壊れるんじゃないかな？」

袋のネズミならぬ袋の神様に、火邪は自分の不安を言います。神無と電話をして、火邪の不安が大きくなりました。私がいなくなったら私はもう神社さんと話せなくなるんだな。と。矛盾していて矛盾していない不安。

「ふむです。確かにお前の言うとおり私は生まれたときからそうではありませんでした。しかし水城火邪。過去の私があつて今の私がいるわけです。別に過去の私が死んだわけではないです。壊れたわけではないです。私の積み重ねが今の私です」

「過去の火無に私はいません。積み重ねがない私は、いついなくなってもおかしくないと思いませんか？」

「ないなら今からじつくりと積み重ねればいいって、いけないです」  
ハツと我に帰った巡。今日はこんな話をしにきたわけではないのだ。

「いけないですいけないです。今日はお前を救いに来たわけではないのです。お前を救うにはまだ私の情報が足りません。今日の目的はもう達成したです。この話はまた今度です。水城水無と神社神無によるしく言っておいてくれです！ お前のこれからの幸運を祈るです！」

巡はそう言つて、ベットから飛び下り、玄関に、火邪に向かつて走り出します。勝ち逃げに近い所業。

しかし火邪は当然それを止めます。左手で巡を掴み、右手で鳩尾を殴る。そうやって巡を止めようとした。しかし。

「っ！」

火邪は左手に走つた激痛で顔を歪ませます。

その隙に巡は火邪を突破し、玄関に到着しました。巡は一度立ち止まり、火邪のほうを向きました。

火邪は怨みと殺意を込めて、巡を睨みます。もう逃げられてしまいます。結局全て、巡にいいようにやられたみたいなのです。怨むのもしかたがない。

そんな視線なんてどこ吹く風。巡は一仕事終えたあとのように晴々とした笑顔を浮かべています。

「水城火邪。携帯を守ってくれてありがとうございます。いいことをすればその後いいことがあるです。お前にももうすぐいいことがあるですよ。さようなら水城火邪。水城火無によく言つとけです。またいつの日か会おうです」

巡はそう言つて、行ってしまいました。嵐のように来て、嵐のように去っていきました。

「……………」

一人残された火邪は、玄関を睨むだけで追いかけてはしませんでした。どうせ追いつけません。ベストコンディションでも逃げられたのに、今の状態じゃとてもとても。お尻もまだ痛いし。左手首

も痛いし。

火邪が尻餅をついた時。当然手をつこうとしました。しかし右手にはすっかりと、神無と繋がっている携帯を握っていました。このまま手をついたらこれが壊れてしまって、電話が出来なくなる。そう思った火邪は、右手を、携帯を守るため、左手だけを変な風についてしまったので、その時痛めたようです。

「……………」

火邪はとりあえず玄関のカギを閉めてから、部屋の惨状を眺めます。火無と巡が暴れたので、部屋はそれなりに酷い有様です。巡は一切片付けていきませんでした。ホント迷惑な客だ。

火邪はため息一つ漏らさず、部屋の片付けを始めました。このままだと火無が水無に怒られてしまいますから、火邪に片付けないという選択肢はありません。

「……………」

火邪は痛む左手とお尻を気にもせず、黙々と部屋を片付けます。

片付けを初めて20分は経ったでしょうか。片付けはまだ全然進んでいません。

その理由としては二つ。

まず一つ目は、火邪が片付けとか苦手だから。

そして二つ目は、左手が痛いからです。

お尻はもう痛くはないですが、左手首の痛みは全くなりません。もしかしたら骨にヒビでも入っているのかもしれない。

左手が痛いので、うまく左手が使えず、片付けがはかどらないわけです。

「……………」

左手に何の処置もせず、火邪は黙々と片付けを続けます。

火無の後片付け。

それが火邪の役割です。

だから火邪は黙々と片付けをします。左手首の痛みは増すばかりで子供なら、火無ならもうとくに泣いているくらいの痛みになりつつあります。だけど火邪は涙はおるか、泣き言一つ漏らせず、ため息一つつかず、黙々と片付けを続けます。

まるで自分自身に、さっきの自分が間違っていて、今の自分が正しい在り方なんだ。そういうように、黙々と、一心不乱に自分の役割をこなします。

と。

「水無水無！！ 早くカギ！！」

玄関の方からそんな声がありました。

「?」

火邪は、どうして神無の声が聞こえたんだろうかと思ひ、本棚に本を戻す作業を中断して、玄関の方を見ます。

玄関が開く音がします。  
走ってくる音がします。

そして神無が現れました。

「神社さん？」

火邪はビックリしました。なんで来たんだろうか。そりゃ、自分は来て欲しいって言ったけど。ホントに来るとは思わなかった。

「火邪さん……」

神無と火邪は目を合わせて固まりました。先に動いたのは神無です。持っていたカバンを落として火邪に近づいてきます。その表情は必死。そして。

「達磨はいやだあー!!」

そう叫びながら、本棚の前に座っていた火邪に抱き着きました。

「か、神社さん？」

火邪は動揺しました。なぜに抱き着いてきたのこの人。という感じ  
です。ちよつと背中打ったけど気にしません。

「達磨は嫌だ達磨は嫌だー!! 私会いにきたから達磨はなしだよ

ね！！今日は泊まっていくよ！？　だから達磨はやめて！！　私は嘘つきじゃないんだよ！！」

「か、神社さん？あの、痛い、です」

神無は痛いくらい火邪を抱きしめながら、達磨は許してくれー！！  
と言いつつ続けます。

そこまで嫌だったのか。火邪は困惑します。抱きしめられるという経験がほとんどない火邪は、こういう状況をどうすればいいかわかりません。抱きしめられるのは、火無の役割です。もしかして神社さんはこのまま私を抱きしめ殺す気なのかもしれない。だから火邪はそんなことも考えてしまいます。だって火邪にとっては、抱き着いてくるっていうのは、さば折りみたいなものです。でも、神無の様子はそんな感じではありません。ただ必死に、怒っている親に縋り付いてくる子供みたいなものです。あまりに必死過ぎて痛いけど

「達磨になったらこうやって抱きしめることも出来なくなっちゃうんだよー！？」

神社さんをどう対処すればいいんだろう。引きはがすのは……やりたくないし。困った火邪は、助けを探すために神無から目を離しました。そして部屋の入口で立ち尽くす水無にようやく気付きました。

「……………なにこの散らかりよう」

水無は部屋の有様を見て、置物とかは転がってるし本は開いたまま落ちてるしあれがあーなってこれがこーなってるしテーブルの上は醤油が零れてたりしているのを見て、愕然としました。

「姉さん」



火邪は水無を呼びました。当然、神無をどうにかして欲しいという意味で。つまり助けを求めたわけです。それも本来の火邪の役割ではありません。神無が絡むと、途端に火邪は色々出来なくなっ、色々やれるようになります。

火邪に呼ばれた水無は、抱き着いてる神無と抱き着かれてる火邪を見て、ため息をつきました。神無、暴走し過ぎ。火邪に抱き着くとか、命知らず。とか思ったのかもしれない。

「神無！。火邪が苦しいから離れてくれってさ」

「嫌だ！！ 離れたら達磨にされるー！！」

驚愕でもない事実。神無が抱き着いていた理由は、自衛手段だったのだ。

「……………だから、達磨ってなに？」

水無は呆れ顔です。どうやらよくわからないまま、神無と一緒にこまできたようです。

「火邪。達磨はしないとかが言ってみな。あと、部屋の片付け手伝えとも言うって」

自分の言葉は届かないようなので、火邪に言ってもらうことにした。さりげなく、部屋の片付けを頼んだ水無はたくましい。

「……………神社さん。達磨はしません。諦めます。それと一緒に部屋の片付けしてください」

火邪は水無に言われたように言いました。暴力表現一切なし。

「本当？ 本当に達磨しない？ 部屋の片付けしたら達磨しない？ 火邪さん嘘つかない？」

神無は火邪の肩を掴み、涙目で確認します。よほど達磨が嫌だったようです。

「本当です。神社さんが嘘つかないなら、私も嘘つきません。そんなに達磨が嫌なら達磨はやめます」

「ありがとう火邪さん！ 私は嘘つかないよ！ 私は嘘つきじゃないよ！ 火邪さん大好きだよー！！」

感極まった。という感じで神無はまた火邪に抱き着きました。今度はさつきとは違い痛くありません。いわゆる、ハグに近い優しい抱きしめです。

これならずと抱きしめてて欲しいな。火邪は頬を赤く染めながら、そう思いました。でも。

「よーし！ 私、部屋片付けるよー！ 私頑張るよー！ 私は片付けて奴が大の得意なのさ！！」

神無はそう言って、火邪を抱きしめるのをやめて、立ち上がり、部屋の片付けを始めようとしてしまいました。

「あ……っ」

火邪はそれを引き止めるように、神無に両手を伸ばしましたが、忘

れていた左手首の痛みには邪魔されてしまいました。

神無はそんな火邪の動作に気付かず、「やれる！ 私はやれるー！」とか言いながら片付けを開始しました。神無、テンションがおかしい。

でも、水無は気付きました。

「火邪。あんた左手どうした？」

水無は神無と交代するように、左手首を右手で隠す火邪に近づきながら、聞きます。

「別にどうもしてません」

「どうもしてないわけがないでしょうが。見せてみ……あー、どうしたのこれ？」

水無は火邪の赤く腫れてる左手首を見て、顔をしかめます。

「神様に虐められました」

「虐められた？ …… まあいいや。詳しい話と巡の処置は後回し。それよりも……神無ー。捻挫の処置ってどうするんだっけー？」

水無はとりあえず、捻挫と判定し、基本的になんでも知ってる神無に尋ねました。が、「全ては私の手の中にー！」という返答をいただきました。今の神無は使い物にならない。水無はため息をつきました。

「とりあえず冷やすか……」

水無はそう呟き、火邪の右手を引きながら、台所に向かいました。火邪はおとなしく引つ張られながら、狂ったように部屋の片付けをしている神無を見ています。

「ほら、冷やしな。火邪？………つたく」

水無は、火邪が自分からは何もしないので、手を引き、赤く腫れているところを冷たい水道水で冷やしてあげます。

「どのくらい痛む？」

「別にこのくらい痛くなっ！」

火邪が強がろうとしたら、水無に手首をギュツと掴まれました。痛かった。

「アホ。なに強がってるわけ？こんなに腫れて痛くないわけないでしょ？というかこの状態放置で部屋の片付けしてたわけ？全く………ヒビとか入ってたらどうすっかなー。接骨院かな………」

水無はぶつぶつとどうするか呟きます。

「………今日の姉さんは優しいですね」

自分のことを本気で心配しているようなので、火邪は思わずそう言っただけでした。

「優しくないって。妹が怪我してたら心配するのが普通なの。優しいと思うなら今日の火邪がしおらしいからだよ。暴力もふるってこないし。どうしたわけ？巡になにか言われた？それとも怪我してる

から？それならずと怪我してて欲しいな。まあ、「冗談だけどさ」

水無は苦笑しながらそう言います。

「……神社さんは、どうしたんですか？」

この話をあまり続けるのはよくないな。と火邪は思い、向こうで「あるべきものをあるべきとこへー！」と叫びながら片付けをしているおかしな神無のことを聞きます。

「それは私の方が聞きたいよ。早く火邪のそこに行かないとーって。今日は水無の家に泊まるからーって。達磨は嫌だーって。そればかり。講義までサボったんだよ？ あんたなんか変なこと言った？ というか、達磨ってなに？」

どのくらい冷やせばいいんだろう。と考えながら水無は聞きました。

「……神社さんが嘘ばかりつくから。本題が終わったらゆっくり話そうって言ったのに、また後でまた後でって。だから私怒って姉さんに頼んで神社さんを家で飼うことにしたんです。達磨にしても飼うって。だってそうすればずっとお話できるから」

「ああ、達磨ってそっちか……達磨で飼う。そりや嫌だわ。それに、嘘ばかりね……なるほどなるほど。火邪。神無にあんまり嘘つきとか言うのはやめたほうがいいよ」

水無は水道を止めながら、火邪に忠告します。

「なんでですか？ 神社さんは嘘ばかりつくんですよ？ 本当のことを言うのがいけないんですか？」

「本当に神無は嘘ついたわけ？ あんたが勝手に嘘と思っただけじゃないの？」

火邪の手を引いて台所から部屋に戻ります。「あれがこれでそれー！」と叫びながら神無は掃除中です。その勢いは、散らかる前より綺麗になりそうな勢い。

「私が勘違いしたって言うんですか？ そんなことありません。勝手なこと言わないでください。殴りますよ」

「なんかいつも通りな感じに戻ってきて嬉しいような悲しいような……。そこ、座って」

火邪を床に座らせ、水無は救急箱を取りに行く。

「湿布貼って……テーピング……まあ、テキトーでいいか」

水無は救急箱から湿布と包帯を取り出して、火邪の治療を試みます。

「……まあ、あんたは嘘だと思ったのかもしれないけど、神無は嘘をついたとは思ってないわけよ。それなのに嘘つき呼ばわりされたら嫌でしょ？ 火邪だって、神無に暴力女って言われたら嫌でしょ？」

「殺したくなるくらい嫌です」

「神無だってそのくらい嫌なんだよ。火邪はその嫌をすぐ発散出来るでしょ？ 神無は出来ないの。だから、溜めすぎちゃって、あんな風になっちゃうの。あんたらみたいにスイッチを切り替えるみた

いにこまめに発散できたらいいんだけど、そんなの無理なわけよ。だから神無は、ゆっくり溜めていつて、一気に爆発するの。わかった？」

「……………今の神社さんは、爆発してるということですか？」

火邪は貯金箱に「君はそこにいるのがいいと思うよ！」と言っている神無を見ながらいいました。爆発してるのかー。

「いやいや。あれはまだ不発。達磨の恐怖でちよつと溢れただけだよ。よかったね火邪。あれ以上話してて、あんたが嘘つき呼ばわりし続けて、我が儘言い続けたら、神無は爆発してたよつと……………まあ、こんなもんか」

不格好ですが、一応固定は出来た……………気がする。

「よかったねつて……………爆発してたらどうなつてたんですか？」

火邪は水無にしてもらったテーピングを見ながら、気になったので聞いてみます。

「そうだなあ……………少なくとも、あんたが好きな神無じゃなくなるね。あんたを大切にする神無では、なくなるよ」

「……………そんなの嫌です」

神無が自分を避けるのを想像すると、火邪はとても嫌です。悲しいです。泣きたくなるくらい悲しいです。

「それならさー、火邪」

水無は、泣きそうな顔をしている火邪の頭を撫でながら、呆れたように言います。

「もう少し神無を大切にしていあげな。あんたみたいな奴と、普通に接してくれる人なんて、珍しいってことわかってるでしょ？」

「……姉さんに言われなくても大切にしています。足とか手とか折るのは痛いだろうから我慢してるし、達磨もやめることにしました。今日だけじゃなくて本当はずっとここにいて欲しいけど、それも我慢しています。これ以上どうやって大切にしろって言うんですか」

じと目で水無を睨みます。私頑張ってるのに！

「……とりあえず、飼うとか言わないことにしたら？ そしてその我慢を私にも適用してくれない？」

改めて、火邪の価値観というか火邪の性質を感じながら、水無はさりげなく自分の希望も言ってみました。今日の火邪はなんか暴力的な気配があまりないので、約束出来るのではなからうかと思っただです。甘い。甘すぎるぞ水無。

「それは無理です。私の姉さんを愛する形はそれしかないんですから。姉さんの腕を折ったりするのはとっても気持ちよくて愛する形。それは私の魂に刻まれてるから抗あいつがえません」

さっきまでの泣きそうな顔がコロッと変わり、澄ました表情で、私の愛は重いぜ。的な発言です。

「……………カワイイ妹に愛されて私は嬉しいですよ本当にありが



とうございますだこの野郎が!!」

水無はなんとも形容しがたい気持ちに襲われ（愛してくれて嬉しいけどその表現が嬉しくないしというか火無はホントに火邪にそういうのを押し付けてるんだなちよつとこいつも可哀相だけど元々は一人なんだからあれ？よくわからないぞ）とりあえず、火邪の髪の毛をグシャグシャに撫で回しました

「……………」

火邪は、水無にやられるがまま頭を揺らしています。いつもの火邪なら、こんな風に撫でられたら水無の手を取り、「やめてください目が回ります。そんな悪さする手はこうです」と言って止めるのだが、今日は水無がやめるまでなすがままです。

これは仕方ないことなんです。火無の役割を取ったわけじゃないんです。仕方ないんです。だって今の私は、怪我をしてるんですから怪我をしてたら、いつもの役割をこなせないのも仕方ないじゃないですか。

『いいことをすればその後いいことがあるです。お前にももうすぐいいことがあるですよ』

なるほど。確かに神様の言つとおりだな。

火邪は頭を撫でてもらって気持ち良くて、猫のように目を細めながら、そう思いました。



7・8・人格 役割。ご褒美。（後書き）

根源の渦には繋がってないぜ。

甘える私と甘えられない私。

暴力を振るわない私と暴力を振るいたい私。

お姉ちゃんが純粹に好きな私とお姉ちゃんが歪んだ形で好きな私。

後者はいらないや。

甘える私と甘えられないお前。

暴力を振るわない私と暴力を振るいたいお前。

お姉ちゃんが純粹に好きな私とお姉ちゃんが歪んだ形で好きなお前。

お姉ちゃんに純粹に甘えられて暴力も振るわないし純粹に愛してる私。

お姉ちゃんに甘えるのが下手で出来なくて暴力を振るうことしか考えられない歪んだ形で愛してるお前。

お姉ちゃんに愛されるのは、私。

なんちゃって。

また次回。

8 - 1 誕生日パーティー(序)(前書き)

628

水無の誕生日。

8 - 1 誕生日パーティー（序）

夕方。

水無の家では、水無と火無がパーティーの準備をしています。

「火無。いつまでもベットでふて腐れてないで、手伝ってくれない？」

「……むー。私はお姉ちゃんと二人でパーティーしたかったのにー」

「その台詞は聞き飽きたよ。あんたももう諦めなさい。ほら、皿並べるの手伝って」

「左手痛いから無理ー」

「お前には右手があるだろ右手が」

「右手は包丁で切っちゃって絆創膏いっぱいだから無理だもーん」

「………はいはい。じゃあずっとそうしてなさい………全く………なんで今日の主役の私が働かなきゃいけないんだよ………やっぱりパーティーなんて断ればよかったなー」

「………お姉ちゃん」

「なに？ 手伝う気になった？」

「さっきから楽しそうだね」

「そう？ 気のせいじゃない？」

「気のせいじゃないもん。さつきから顔にやけてるし、料理してる  
ときも鼻歌歌ってたし……そんなにパーティー楽しみなの？」

「……………木の精じゃない？それより本当に手伝ってくれないの？お  
姉ちゃんのお願いつて奴だよ？」

「むー……………私の誕生日は二人つきりでやるんだからね！」

「はいはい。わかってるよ。ほら、手伝って」

「はい」

準備は着々と進んでいます。

夕方。

「……………蒸し暑いなー」

神無は大学から一旦家に戻り、色々と準備をしてきてから、また大  
学最寄り駅に降り立ちました。

「おーい。神社神無。こっちですよー」

「あつ、春風さん」

駅前には待ち合わせていた巡がもういました。巡は片手にエコバック、片方にケーキの箱を持っています。

「春風さんすごい荷物だね。お菓子とか、お惣菜とか？お金大丈夫だった？」

「大丈夫だったです。事前に徴収してた分で万全でしたです。食べ物たくさんです。水城水無の要望通り寿司と刺身は買わなかったです。全く、我が儘な奴です」

「ふーん……ところで、その長いのはもしかして？」

エコバックから飛び出してる長細い長方形の箱。もしかそれは間違いない。

「です。シャンパンです。シャンペンでも可です。他にもアルコール多数です。結構重いです」

「……………飲むの？」

「飲まないですか？」

「私はお酒ってあんまり飲んだことないけど……………というか、火無さんはまだ未成年だよ？一人だけ飲めないのは、可哀相じゃない？」

「別に水城火無も飲めばいいじゃないですか。問題ないです。十八

歳はもう二十歳みたいなもんです。さすがに月読と命には飲ませるわけにはいかないから、あの二人は今日のパーティーには不参加です。さ、行くですよ。申し訳ないですが、ケーキを持って欲しいです」

「え、ああうん……………いいのかなあ……………」

巡からケーキを受け取りながら、未成年の飲酒を許してもいいのかなあ。という感じの神無。

「いいんです。私がいいと言ったらいいんです。だって私、神様に限りなく近い人間ですから！」

「……………まあ、いつか」

ダメなときは、水無が止めるだろうし。

水無のアパートは、駅から徒歩十五分くらいです。神無と巡はエコバックとケーキを持ちながらえっちらおっちら歩きます。

「三途さんはやっぱり不参加？」

「……………。私がどれだけ許可は取ったですよーって言ったのに、あいつは嫌だ嫌だの一点張りです。理由を聞いても教えてくれない



ですし……」

はあ、と巡は嘆息しました。そして、思い出し笑いを浮かべます。

「そして私はふと思ったです。そういえば三途舞歌の誕生日を知らないな。と。だから私は聞いたです。お前誕生日いつですか。と。あいつはしばらく言い渋ったですが、しつこく聞いたら三月三日と白状したです！ 神社神無！ あいつは自分の誕生日を祝ってもらえなかったから拗ねていたのですよ！ 全く捻くれ者を通り越してカワイイ奴だと思わないですか!？」

「え？ あー、うん。思わなくもないけど……理由それだけかな？」

「まあ他に理由はあるかもしれませんが、とりあえず、来年の三途舞歌の誕生日も盛大に祝わなければいけませんですね。協力してくれるですか？」

「もちろん」

「ありがとうございます。ところで神社神無」

「なに？」

「水城水無の誕生日プレゼントはバッチシですか？」

「うん。バッチシだよ」

神無は肩掛けカバンを軽く叩いて万事おっけーとアピールです。

「春風さんもバッチシ？」

「バッチシです！」

巡は肩掛けカバンを高らかにあげ、バッチシです。

というわけで。

あ。

つという間に、水無の家に到着しました。

火無と巡がちよつと喧嘩したけど、無事、パーティーの準備が整い、四角いテーブルの上にはこれでもかというほどロウソクが刺さったバースデーケーキ（ショートケーキがでっかくなつた奴だよ）と、揚げものとかサラダとかチーズなどなど、色々な食べ物が並んでいます。

今は部屋の明かりを消し、ロウソクの火がぼんやりと部屋を照らしています。

「さて。水城水無。誕生日おめでとうです」

水無の対面に座る巡がそう言いました。

「誕生日おめでとう」

続けて水無の左横に座る神無がそう言いました。

「おめでとー！」

そして最後に火無が拍手つきでそう言いました。

「はい、ありがとー」

水無は笑顔です。

「では、水城水無。一息でロウソク消すです」

「いや、一息つて……厳しくない？」

「水無ならやれるよ。頑張つて」

「お姉ちゃん早く早くー」

「はいはい………」

水無は三人に促され、二十一本のロウソクに挑みました。本来なら歌を歌つてから消すのがある意味正しい順番ですが、水無が、歌なんていらんわボケ。と言ったので歌なしで、おめでとー言つて、ロウソク消す。ということになったのだ。

ふー……ふっ、ふっ、ふー……。

つて感じで水無がロウソクの灯を消して、三人が拍手して、もう一度、おめでとー言つて、水無がありがとー言つて、神無が

電気を点けて、巡がシャンパン開けて、巡が全員について、神無がケーキを切り分けて、カンパニーして、パーティーが始まりました。

「うわー。炭酸みたいで美味しいー」

「火無。あんまり急いで飲んじゃダメだよ」

「わかってるよー」

結局火無もアルコールを飲むことになりました。

最初は水無が反対したので、火無は興味があつたけど飲まないつもりでした。水無が反対した理由は簡単。今まで飲んだことがない火無が飲んだらどうなるかわからなかったからです。面倒事になる心配がしたからです。ちなみに水無は火無に隠れてたまに飲んでるので、アルコールは余裕です。

火無が飲まないことで決まりそうだったとき、巡がこう言いました。

「ふっ、アルコールを飲めないとは。やはりお前はガキですね」

挑発つてやつだ。火無が飲まないなら神無も飲まない。みたいな空気があつたので、やつすーい挑発をしたのです。火無はそんなやつすーい挑発にカチンときた。

「チビに飲めて私に飲めないわけないもん！」

「いやいや水城火無。やつぱりやめておいた方がいいかもしれないですよ？ 子供のお前は酒なんか飲んだらすぐに酔っ払って大変なことになってしまつてしまうですから」

「むー！私絶対飲む！チビこそ背伸びしない方がいいと思う！」

「はん。私は神様ですよ？ 酒なんて余裕です」

こんなやり取りがあつて、火無は飲むことになりました。水無はこのやり取りを見て、強情になつた火無の説得を諦め、神無は、神様つて酒に強いイメージないけどなあ。と場違いなことを考えていました。

というわけで、四人はアルコールを飲みながら、それなりに楽しく和やかな時間を過ごしました。

「このケーキ美味しいね。春風さん、どこで買ったの？」

「駅前のケーキ屋です。たまに買うですよ。値段もリーズナブルです」

「お姉ちゃんお姉ちゃん。私左手怪我してるから、あーんして」

「アホ。お前の利き手は右手でしょうが」

「この肉じゃが美味しいね。水無が作ったの？」

「いや、それは火無が作ったんだよ」

「そうなの？ 火無さん料理うまいね」

「じゃあ私がお姉ちゃんにーんしてあげるね。この肉じゃがはお姉ちゃん専用だよ！ お姉ちゃんだけのだよ！。他の人が食べるのは許されないんだよ！。それなのに勝手に誰かが食べちゃって私悲しいなー」

「……………」

「神社神無。謝ることはないです。さっ、飲んで忘れるですよ」

「うん。ありがとう」

「ほらお姉ちゃん、あーん」

「やめんか。一人で食べれるっつーの。……………うん。最近料理始めたにしては美味しい。頑張ったね」

「えへへへー。ありがとうお姉ちゃん！」

「そんなに美味しいんですか？ 私にも食べさせてくれます」

「やだ」

「しかしすでに私の箸は肉じゃがをつまんでいるのでしたです。ふむ。まあまあです。みりんが少ないですね」

「あー！ お姉ちゃんなののにー！ チビのバカ！」

「チビじゃないと何度言ったらわかるですかー！」

「神無？ ちょっとペース早くない？」

「え？ そうかな……お酒って初めてだから、よくわかんないや…

…」

こんな感じで和やかな時間が、一時間後、残念な時間になることを、  
四人はまだ知りません…

8 - 1 誕生日パーティー（序）（後書き）

この小説はフィクションの塊です。

どれだけ屁理屈を言っても、未成年の飲酒は法律で禁止されています。神様がいいと言ってもダメですよ！。

うまく書けないな！。構成がな！。

あ。神無は必殺『それ、無かったことに』を使用したので、爆発した時のことは忘れたフリです。

次回。アルコールによる壊れていく少女たちの物語。誕生日パーティー

イー（破）

お楽しみに？



## 8 - 2 ・誕生日パーティー（破）

「お姉ちゃんずっと一緒だからねー……えへ、えへ、えへへへー」

火無はそう言っつて、水無の膝にほお擦り。典型的な酔い潰れ。

「お前はパンなのかペンなのかハッキリしろです！ ハッキリしないと叩き……あ、パンですか。それは失敬したです」

巡はそう言っつて、空になったシャンパンに頭を下げる。典型的な酔っ払い。

「うう……私なんていらぬ子です……生まれてきてごめんなさい……」

神無は泣きながら、片手に空き缶を掴み、テーブルに突っ伏してる。典型的な泣き上戸。

「……………はあ」

水無は、絡み酒の輩やかいがいなかったただけラッキーだなあ。と、不幸の中で小さな幸せを見つけてる。典型的な酒の席で一人酒が強くて疲れ人。

一時間後の風景です。

「むー？ お姉ちゃん……お部屋がグルグルしてるよー？」

一番最初にダウンしたのは火無でした。シャンパンを一杯。チューハイ一缶でダウンです。

「お姉ちゃんが一人お姉ちゃんが二人……えへへ、お姉ちゃんがいっぱいだー」

「ちよ、火無？ 大丈夫？」

火無はフニヤフニヤしながら水無に近づき、倒れ込みました。

「お姉ちゃん好きー……ぐー」

そしてそのまま、規則正しい寝息を立て始めました。

「はい、おやすみ……寝顔だけは天使みたいなんだけどなあ……」

水無は火無の頭を自分の膝にのせて、火無の寝顔を見て、優しく微笑みました。

「ふん。なんだかんだ言ってるいい姉じゃないですか水城水無。そして水城火無！ やっぱり子供ですね！ あんだけ私をチビチビ言ってるのさまですか！ やはり精神的チビはお前の方です！ あは！ あはははー！」

「ちよっと巡、さすがに言います……ぎゅ？」

巡を嗜めようと、水無が顔をあげると、巡は豚の貯金箱に話しかけていました。シャンパン一杯。チューハイ二缶であちら側に行ってしまったようです。

「む。水城水無。なんだか小さくなったですね。手の平サイズです」  
巡は貯金箱を手にとって、首を傾げています。水無は、あかんわあいつ。終わってる。ほっとこ。と思いました。

そして、ん？ そういえば水無は大丈夫なのか？ と思い、水無に視線を移します。水無は普通に飲み食いしています。

「水無は……………大丈夫みたいだね」

水無の大丈夫みたいだね発言を受けた水無は、エビフライは食べてから「ん？」と言って、コップの中にあつたチューハイを飲みほしてから「うん」と言って、新しくチューハイを開けてコップにつがずにそのまま飲み「うん？」と言った。顔は真っ赤である。

「……………水無？」

なんかおかしいような。

「……………うん……………うん……………うん……………うん？」

トマト、チューハイ、ポテチ、チューハイ。

「……………水無、もう飲まない方がいいって」

静かに壊れてやがる。水無は水無の手から、アルコールという悪魔

を遠ざけようとした。

「やめて!」

しかし神無は悲痛な感じでそれを拒否。

「うう、ごめんなさいごめんなさい……私がもつとちゃんと止めておけば火無さんはそんな風に酔い潰れなかったし私がもつといっぱいアルコールを飲んでれば春風さんも変にならなかったのに……それに二人がダメになっちゃったなら二人の分まで食べないとせつかくのご飯が腐っちゃう……私が食べないから食べ物ダメになっちゃう……うう、ごめんなさい。本当にごめんなさい。私頑張るから……私頑張ってもつと飲むから……私頑張ってもつと食べるから……見捨てないください怒らないでござーい……うう、お姉ちゃーん」

神無はテーブルに泣き崩れました。しかし缶は離さない。シャンパン一杯、チューハイ五缶で、ネガティブに爆発しました。水無はなんとも言えない表情で、神無を見ます。そして。

「……………神無ー、こつちの缶と交換しよ」

「うう……水無はこんな私にも優しいんだね……ありがとう、もちろん断らないよ。私みたいに使えないやつに、断る権利なんてないんだから……うう、うう」

水無は無事、神無に空き缶を渡すことに成功しました。これでとりあえず、これ以上の飲酒を止めることができます。神無は空き缶だと気付かず、缶に口をつけます。そしてまた、泣き始めます。もう、末期だね。

「ったく……………一応私の誕生日のはずなんだけどなー」

水無は愚痴りつつ、神無から受け取ったチューハイを一気にあおり、  
処分。

さあ、これからどうしよう。

現在時刻は、19時です。

「火無ー、ベットに移りましょうねー」

火無の頭をぺちぺち叩いて起こしてみる。

とりあえず水無は、火無をどうにかすることにしました。一番楽だし。というか火無が膝に寝てたら動けないから他の二人の相手無理だから。

「むー……………やっ」

火無はそう言って、膝の上で寝返り。

「……………」

ある意味思った通りの反応をいただいた水無は、立ち上がった。す

ると火無は「にゃ！」と言って膝から落ちる。水無は火無の脇に手を入れ「やあやっ。やあやあー」と言って暴れる火無をベット付近まで引きずる。引きずると言ってもすぐ後ろだし、火無は酔ってフニャフニャだから暴れる力も弱々しいから楽ちん。まず自分がベットにのり「ややあ。お姉ちゃんがいいー」と言っている火無をベットにのせて寝かせる。そして自分はベットから下りようとしたら服を掴まれる。

「なに？ 火無？」

「お姉ちゃんおやすみのキスー」

「ここは日本だから無理ですよー」

水無は軽く火無をあしらひ、手を外し、ベットから下り、「お姉ちゃん行かないでー」とか言って手を伸ばしている火無に枕を手渡す。「お姉ちゃんふかふかー」火無はそれを抱きしめ夢の世界に旅だった。「はい、今度こそホントにおやすみー」水無は布団をかけてあげて、ミッシヨン終了。

水無は無事、酔っ払いを一人倒した。

「なかなかの手際ですね水城水無。優しい姉。妹を想う普通の姉。という感じです。ですが。水城水無。お前が水城火無に優しく接す

る理由には普通の姉にはない感情が働いているです。恐怖と罪悪感。この二つがなくなっても、お前は水城火無に優しく接することができるかどうか。全てはそれで決まるです。さあもつと飲んで語ろうではないですか」

巡は何も写っていないテレビに、チューハイの缶を渡そうとしますが、当然テレビは、自分アルコール、というか水分系全般苦手なんです。という感じで受け取り拒否。「なんですか水城水無！私の酒が飲めないと言うのですか！」巡はテレビに憤慨。水無はそんな巡を見て、苦笑い。

水無の次のターゲットは巡です。理由は簡単。神無の飲酒はストツプさせましたが、巡はまだ飲んでいるからです。

「巡、あんたさー。自分で酒持ってきて弱いつて、どういうこと？」  
水無は話しかけながら、巡がしつこくテレビ画面に押し付けてるチューハイの缶を掠め取ります。

「む」

巡は水無の方を（本人的にはずっと水無を見ていたんでしょうけど）見ました。

「なんですかお前は。そこにいるだけなら害はないと思ってほつききましたが、話しかけてくるなら容赦しませんですよ」

「いや、なんですかお前はって、私が水城水無なだけどって……巡？」

水無は苦笑いを浮かべながら巡に自分が水無だつっのと言いましたが、途中で、巡の目が、自分ではなく自分の背後を見ていることに気付きました。水無は背後を向きます。そこには青色のカーテンしかないです。カーテンを開けたら外の雑踏が見えますが、今は閉めているので見えません。とりあえず、水無の後ろにはカーテンしかありません。水無には、カーテンしか見えません。

「あははは!!」

巡がいきなり笑って、水無はビクツとなりました。

「私を甘く見るなですよ。神様を名乗るだけあって除霊や浄霊の作法も会得してるです。私の手にかかればお前ごとき一発で昇天させてやるです。いくですよ。そして逝けます。全知全能であり全種全霊ありとあらゆる全ての父であり母であり子である我が主の名の下に。む。なんですか。言いたいことがあるですか。未練たらたらですか。全く、仕方ないです。私は慈悲深いのです。聞いてやるです。ほれ、喋れです」

巡は虚空に、話しかけ続ける。

「……………」

水無は黙ってそこから、巡と虚空の間から離れて、巡はほつと。酒も奪ったし。話しかけなくても横から見ただけで楽しいし。それに……カーテンとお喋りに忙しいみたいだから邪魔しちや悪いよね。うん。カーテンと。うん。カーテンとお喋りしてるんだよあいつは。空き缶と喋るのと同じレベルさ。カワイイじゃないか。うん。ほつと。カーテン。カーテンだから。巡は断じて私には見えない何かと話してるわけじゃない。と思いながら、巡から奪ったチ



ユーハイを一気に飲み干しました。信じたくないことって、あるよね。

なにはともあれ、水無はまた、酔っ払いを一人倒した。……倒した。

「神無ー、水飲む？」

残るは神無である。神無からはすでにアルコールも奪ったので、別に対処しなくてもいい気がしないでもないが。神無はあまりアルコールを飲んだことがない。ということは慣れていない。なのに他の二人より多く飲んでいる。というわけで、一番どうにかしてあげないといけないのだ。

「うう……水無は優しいね。こんな私にいつも優しくしてくれてありがとうね。もちろんもらうよ。断る理由が私にあるわけないよ……」

神無はテーブルから体を起こし、水無から水を受け取る。神無の顔が真っ赤なのはアルコールのせいだろう。そして目が真っ赤なのは泣いたからだ。

「……神無。あんまり自分をダメだと思わないほうがいいよ？」

おとなしく水を飲んでる神無に、水無はそう言わずにはいられません。お酒が入ってるからこそ、できる話もあるのです。

「うう……ホントに水無は優しいね。でも、いいんだよ。私がダメなのは本当なんだから。去年の水無の誕生日覚えてる？」

「え、あー……神無にケーキを奢ってもらったね。たしか」

「そう。その程度なんだよ私は……うう、春風さんはこんなパーティーを計画して実行できたのに、私はたかがケーキを奢っただけ。たったそれだけだよ……やっぱり私はダメな奴だー！！お姉ちゃんの劣化バージョンなんだー！！お姉ちゃんには一生かかっても追いつけないんだー！！……だからお母さんにもお父さんにも愛されること死ぬまでないんだ……うっ、うー！」

神無は水を飲み干し、テーブルに泣き崩れてしまいました。

「……神無、別に、お姉ちゃんを指摘さなくてもいいと思うよ？自分は自分なんだからさ。そうしてればいつか神無の親も神無を認めてくれるって……まあ、たぶんだけどね。でも、今よりは確率が高いと思うよ？」

水無は神無の肩に手を置きながら、そう言って神無を励ました。それに対して神無は。

「……あつ、クレープの森だー。えへ、私一人で全部食べ切れるかなー」

寝言を返しました。

なんとということでしょう。神無は寝てしまったのです。

「……………いい夢を」

水無は頬を引き攣らせながら、そう言いました。そして、自分がいつも使っている布団を神無の肩にかけてあげて、とりあえず、酔っ払いを倒しました。

「……………ふう」

水無は、いつもとは雰囲気が違う妹と友人たちを一通り楽しんだので、自分が座っていた位置に戻り一息つきました。

「すーぴー」

背後のベットから火無の規則正しい寝息。

「あ、お姉ちゃんクレープありがとうー」

左からは神無の幸せそうな寝言。

「ああ。あいつは私の友人の神社神無です。お前に似ている？どこですか？お前みたいに首は長くないですよ？」

右からは巡の怖い独り言。

「……………」

水無は肉じゃがに箸を伸ばします。

肉じゃがは、幸せな味がしました・・・

## 8 - 2 ・誕生日パーティー（破）（後書き）

泣き上戸って、あんな感じだったけ。なんか違う気が……まあ、いつか。

水無も酔っ払ってますよ。念のために言っておきますけど。

じゃ、次回予告ね。

活動を停止した神無。虚空に喋り続ける巡と急に起き上がる火無。そしてついに現れる完璧な存在。

段々と收拾がつかなくなる水無の誕生日パーティーの最後に待つものとは。

次回。誕生日パーティー（急）

次回もサービスシーンはございません。

### 8 - 3 ・誕生日パーティー（急）

「すかー！ーびっ」

「私にはわからないですね。どうして首なんか吊って死んだのですか。そのくらいの覚悟があれば……いや、それはわからないのですか。私にはあなたの気持ちを理解できないのですから。私は死にたくないような事は経験していても、死んでしまった経験はしたことがないので。まあいいです。飲むです。飲めないますか。じゃあ私が飲むです」

「家族みんなで食べるクレープは本当に、本当に、美味しいね……」  
「……………」

現在時刻は20時。

火無は相変わらず枕を抱えながら眠っています。巡も相変わらず独り言、誰がなんと言おうと独り言、断じて昔この部屋で首を吊って死んだ人と話しているわけではない。神無も相変わらず幸せな夢を、家族みんなでクレープを食べるといふ夢を見えています。

そして水無は、一人ちびちびと飲んだり食べたり、空き缶を積んで遊んだり、巡また飲んでるけど、どうしようかなあ。止めようかなあ。それとも巡が話してるあたりに塩をかけようかなあ。と思ったり、火無のほっぺをつついたり、神無の寝言に和んだり悲しんだり、舞歌からもらった本を読んだりして、十分楽しんでました。

と。

「ん……」

火無がむくりと起き上がりました。

「あ、火無起きた？ 大丈夫？ 水飲む？」

「……」

水無が声をかけますが、火無はぼーっとしています。ゆっくりと頭を動かして、今の状況を、自分がどこにいるかを再確認しているようです。

「火無……？」

寝ぼけてるのかな？

「いえ……火無じゃなくて、火邪です」

火邪は自分でもよくわからない。といった感じで、困り顔で水無を見ます。

「は？ ……なんであんたが出てくんのか？」

水無はポカーンでした。火邪が出てくる理由が全く思い当たらないからです。

「……私にもよくわかりません……アルコールの力ですか？」

火邪は首を傾げます。

「……アルコールの力って……少年探偵？」

水無も首を傾げます。

よくわかりませんが、誕生日パーティーに火邪が参戦しました。

「とりあえず、喉が渴きました。姉さん水ください」

火邪はベットから下りて、水無が座っていた場所に座りました。

「はいはい、どうぞ」

水無は火邪のコップに水をついであげます。

「ん。生き返る気分です」

水を飲んで一息ついた火邪は、横で「首を吊った気分はどうでしたか？」と言っている巡に興味を持ちました。

「神様は誰と話してるんですか？」

火邪は巡に尋ねます。

「今忙しいです。話しかけるなです。ほう。首が伸びた気がしたで



すか。確かに首が伸びてますですね」

巡は相手にしません。

「姉さん。この人誰と話してるんですか？」

「誰とも話してないよ。独り言だ独り言。酔っ払いの行動を深く考えちゃダメだ。……そう、深く考えない。家賃が安い気がしてきたけど深く考えない……」

水無は、深く考えないために、チューハイの缶をまた一つ開けました。

「神社さんは……寝てるみたいですね。遊べると思っただのに、残念です……」

火邪は水無に言われた通り巡について深く考えるのをやめ、対面に座ってる神無を見て、ちよっと寂しそうに呟きました。

「まあずっと寝てるわけじゃないと思うから、起きたら遊べば？」

それより火邪。お腹空いてない？　なんか食べたくない？　巡のやつ……こんなに買ってきて……どうすんの？」

水無はテーブルの上にまだたくさんある食べ物を見て、嘆息。から揚げコロッケ海老フライ、焼鳥フライにエビチリも。サラダに煮物にそれからパスタ。お惣菜の全てがここに。という感じである。さらにおつまみなども多数。アルコールも馬鹿みたいに買ってきて、これどうすんの？　余ったらもらっていいの？　という感じである。

「少し空いています。それより姉さん。私もお酒飲んでみたいです」

「はいはい、飲みなさい飲みなさい。ほどほどにお飲みなさい」

水無は火邪のコップにほどほどにチューハイをついであげました。水無も酔ってますので軽い感じですよ。

火邪は恐る恐るそれに口をつけました。

「……ピリピリして美味しくないです」

火邪は、うー。って感じになりました。

そんな火邪を見て、水無は苦笑いです。火邪のそんな顔は珍しいですから。

「何か食べたいものある？」

「パスタが食べたいです」

「りょうかい」

水無は火邪にパスタをよそってあげます。優しいです。火邪は自分の相手をしてくれるわけですから、当然といえば当然かもしれませぬね。

「そついえば姉さん。肉じゃがは美味しかったですか？」

パスタを食べながら、火邪は聞きます。

「え？ ああうん。美味しかったよ」

すでに火無手づくりの肉じゃがは全部食べきってしまいました。

「それはよかったです。火無が頑張って作った誕生日プレゼントだったんですから、もしも姉さんがまずいなんて言ったら、私は許しませんでしたよ?」

火邪はそう言っつて、舐めるようにチュウハイを飲みました。やっぱり美味しくないです。

「ああ、誕生日プレゼントのつもりだったわけか……」

あの肉じゃがは、そういう意味もあったようです。

「ん?」

そして水無は気付きました。私、巡と神無から誕生日プレゼントもらってないな。と。

水無がそれに気付いた瞬間、巡がグルンと首を回して水無の方を見て、神無がカバツと顔をあげました。

「な、なに?」

水無は示し合わせたようなその二人の行動に、ビビりました。火邪は、パスタうまい。って気分でした。

「「忘れてた!!」です!!」

二人は声を合わせてそう言いました。

そうです。二人はプレゼントを渡し忘れていたのです。断じて作者が忘れていたわけではない。

「うう……そんな大事なことを忘れてたなんて……やっぱり私って奴はダメダメだー……きつと今までも大事なことを忘れてて、その度にお姉ちゃんがフォローしてくれてたんだ……うう……やっぱり私は一人じゃなんにもできない奴なんだー!!」

寝ても酔いが覚めなかった神無はそう叫んで、水無のコップを掴み中に入っていたチューハイを飲み干してから、自分の鞆をごそごそ漁り始めました。なぜチューハイを飲むというワンクッションを入れたのかは謎である。あと、寝ていたはずなのに話し聞いていたのも謎である。エネルギー補給かな？ 夢うつつだったのかな？

「私としたことが、パーティーの準備が楽しくてうつかりしてました。お前も気付いていたなら教えてくれればいいものを……あ、そうですか。教えてくれていましたか。私が聞こえていなかっただけでしたか」

巡はぶつぶつと独り言(?)を言いながら、鞆を漁っています。そして。

「誕生日おめでとう!!」「です!!」

「あ、ありがとうございます……」

二人は同時に水無にプレゼントを渡しました。巡の方は細長い包み。神無の方は長方形の包みです。

水無はとりあえず、神無の方から中身を確認することにしました。理由は察しなさい。

「本……?」

本でした。ポケットサイズの小さな本。題名は『魔法の本』。ぺらぺらと中身を見ると、一ページに一言ずつ、意味深な言葉が書かれています。なんだこりゃ。と、水無は思いました。

「うう……だってだって、水無が悩みがなくなるものが欲しいって言うから……」

神無は、どんよりした空気を纏わせたまま、その本を説明します。

「よくわかんないけどその本を持って悩み事を思い浮かべてページを開くとそこに悩みを解決するヒントが書かれてるらしくてだからそれがあれば悩みなくなるかもなーって、おもしろいかなーって、うう……おもしろくないよね。全然使えないよね。いらないよね。実用性零だよ。いいいいよ。遠慮なく言っ方がいいよ。いらないでしょ？ いらないならいら」「いやいや、いらなくないって。結構おもしろそうだよ。ありがと。大切にするよ」

水無はとりあえず苦笑です。困ったときは苦笑です。今の神無には何を言ってもダメなので苦笑です。

「うう……本当に水無は優しい。でも本当は三途さんからもらった本の方がいい」「神社さん神社さん。遊びましょう」

火邪が声をかけ、神無のネガティブを止めた。

「え？ 火無さんが私と遊ぼうなんて……信じられない……きつと何か裏が」「私です。火邪です。どうしたんですか？ 様子が変ですよ？ 酔っ払ってるんですか？ 遊べないんですか？」

「うう……そんなことないよ。こんな私でよければ遊ば。でも、火邪さんと火無さん間違うような私で本当に」

火邪が神無の近くに移動して神無の相手をし始めたので、その際に水無は巡のプレゼントを開けることにしました。

「ペンダント……?」

巡のプレゼントはペンダントでした。しかも二つ。青色の水滴のシンボルのペンダントと、赤色の炎のシンボルのペンダントです。

「です。気に入ったですか? そっちの炎の方は水城火無にくれてやって下さいです。お揃いです」

「ああ、なるほどね。ありがとう。でも、高かったんじゃない?」

「お前と出会えた価値に比べれば安いもんです。大切にしてください」

ペコツと巡は頭を下げました。

「いや、言われるまでもないよ。大切に。ありがとう」

水無はさっそくつけてみます。派手じゃないので、結構好みます。

「どう?」

「さすが私が選んだだけはあるです。似合ってるです。む。お前にはないですよ。お前はさっさと天国に行くです。え? 地獄に逝きたい? 珍しいやつですね。そろそろちゃんと理由を」

巡是水無のペンダントをつけた姿を見て、満足そうに頷いて、また独り言、誰がなんと云おうと独り言、を始めました。

「火邪。これ、巡がくれるってさ」

水無は当然、巡の独り言にノータッチで、火邪にもう片方のペンダントを渡すことにします。

「神社さん？ 私の話を聞いてください。そんなこと言っていないじゃないですか」

しかし火邪はネガティブ神無と話すのに忙しいらしく、水無を無視です。水無、ちよつとシヨック。

「うう……いいんだよ。私、知ってる。火邪さんがいつも私に暴力的なことを言ってるのは私が嫌いだからですよ。いいよいいよ。本当は嫌いなのに遊ぼうとか言わなくていいよ……うう……私と遊んだってつまらないよ。水無と遊びなよ……その方がいいよ」

神無はそう言つてアルコールをあびるように飲みました。いつの間にもアルコールを手に入れたんだ？ と、水無は思いました。

「そんなことないです神社さん。私が暴力的なことを言うのは決められてるからで嫌いとかじゃないです。私は神社さんと遊びたいんです。私が遊びたくないなんて言わないでください。そんなこと言う舌は切り落としますよ。だからそんなこと言わないでください」

そう言つて火邪も、アルコールをあびるように飲みました。なんでお前も飲むんだ？ まずいいんじゃないのか？ 神無の真似か？ と、

水無はアルコールを摂取しながら思いました。仲間外れは嫌なので摂取しました。

「うう……そうだね。そうだね。私みたいに嘘ばかりつく舌なんて切り落とした方がいいよね……うっ……そしたら死んじゃうね。でもきつと死んでも誰も悲しまないね。お父さんもお母さんもお姉ちゃんがいればいいし。火邪さんだってあれでしょ。私知ってるよ。私が好きなのは水無に甘えられないからでしょ。私が死んだらまた別の人を見つければいいよ……うう……私の代わりはいくらでもいるのよー!!」

神無はまた、テーブルに泣き崩れてしまいました。

「……………姉さん。私、この神社さんやです」

火邪は、涙目で水無に訴えます。こんな私が知ってる神社さんじゃない。

「やですって言われてもね……私だって嫌だよ。でも、ある意味あれが本当の神無なんだよなあ……とりあえず、今の神無に何言ってもダメ。諦めな」

水無もお手上げです。

「やですよ。私は神社さんと遊びたいんです。姉さんどうにかしてくださいよ。どうかかしてくれないと血を吸いますよ〜?」

最後だけ妙に間延びした声を出した火邪は、水無の肩を揺さぶりまです。酔いが回るー。揺らしている火邪も自分の頭を揺らしているの酔いが回るー。



「……………火邪。酔った？」

全く力がこもっていない揺さぶり、間延びした声、緩んでいる表情。まるで甘えているようなその行動。こいつ、コップ一杯でダウンだと、水無は思いました。

「酔ってないです。全然酔ってないです。変なこと言わないでください。もう姉さん、火邪は怒りましたよ。血、吸います」

「いや、お前完璧に酔ってるってちよっ！ 落ち着けバカ！ のるな！ 重い！ 下りろ！ ちよ！ やめてやめてやめてー！ 助けて誰かー！」

巡無視。神無睡眠。

「かぶ」

「はう……………！」

「がじがじ」

「甘噛みはやめてえええ……………」

「はむはむ」

「はむはむもやめてえええ……………」

「ちゅうちゅ」

「あううう……」

「それには全面的に同意できます。あの姉妹は仲が良すぎるです。どこを見れば仲が良くないのかがわからないくらいです。ああ。いつも見ているお前もそう思うですか」

時刻は21時30分を回りました。

水無と火邪は空き缶を積んで遊んでいます。水無の首筋には鬱血した、まるでキスマークのようなものがあって、心なしか顔がげっそりしていますが、本当に血を吸われたわけではないのでご安心下さい。

どちらが高く積めるか競ってるのに、火邪はわざと自分が積んだ空き缶を倒すので、勝負は水無の圧勝。と思いきや、火邪は水無の空き缶も倒すので、勝負は永遠につきません。永遠にこの勝負は決着がつかないので、火邪は永遠に水無と遊んでられます。水無にとつてこのゲームは、倒す度に火邪がケタケタ笑うさまを楽しむゲームになりつつあります。

「じゃあ今度お前の子供を私が連れてきてやるです。そうすればお前も成仏できるでしょう。名前はなんと言つですか？ わからない？ 忘れたですか。じゃあ私もわからないです。困ったですね」

「むにゃむにゃにゃー」

巡と神無は相変わらずです。

「あれ……21時過ぎてんじゃない」

水無は時計を確認して、気付きました。そして寝ている神無の方を見ます。確か神無は21時には帰ると言っていた気がします。明日も大学があるんだからまあ妥当かなあ。と水無も思い、じゃあ21時にはお開きしようと思っていたのですが、水無が思っていた状況と今はだいぶ違うので、さあどうしよう。という感じです。

「神無ー。起きてー。21時過ぎてたよー」

とりあえず水無は神無を起こすことにしました。火邪はちょうど、十缶のタワーを倒してケタケタ笑っていて楽しそうなので放置。ちなみにペンダントも火邪が嫌がったので放置。

「うっ、うっ……水無ー？」

神無が目を擦りながら起床しました。

「大丈夫？ 水いる？」

「うん……ありがとう」

神無は酔いがそれなりに覚めたのか、それともまだ完全に起きていないからなのか、とりあえず、眠そうな目で、水無から水を普通に受け取り普通に感謝しました。

「神無、21時30分だけど、どうする？ 帰る？ 別に泊まって

いってもいいよ。たぶん巡も泊まることになると思うから……」

水無は呆れた眼差しで巡を見る。巡は「なるほどなるほど。しかしそのどこが神社神無に似ているですか？」と、独り言、いや、もう認めましょう。自縛霊と会話してます。会話しながら、チューハイを飲んでます。酔うのが早くせして、飲んでも飲んでも酔い潰れない不思議。とりあえず、巡が今日帰る気がないのは間違いないな。と、水無は思っています。

「21時30分……？」

神無はコップを握ったまま、ボーツとしながら呟きました。現状が把握出来ていないようだ。

「21時30分……21時が30分過ぎてる……帰る……22時過ぎる……終わった」

神無はテーブルに倒れ込んだ。お惣菜が数品テーブルから落ちた。水無は、どういうこと？ と思った。火邪は、「姉さん姉さん、早くもつかい積みましょう。早く早く。早くしないと口裂きますよ。あ、神社さんもやりましょうよ」と、水無の背中にのしかかりながら言った。巡は、「ああ。やはりそうでしたか。神社神無の自己採点が低いのは姉のせいですか。教えてくれてありがとうございます」と、巡は自縛霊さんに頭を下げていた。自縛霊さんは、いいってことよ。って言ったかはわかりません。

「ちよつと神無？ どうしたの？ まだ酔ってんの？」

テーブルに倒れたままピクリともしない神無の肩を揺さぶる水無は、さりげなく火邪を背中から落とした。落とした火邪はまたくっつこ

うと手を伸ばしたので、代わりにチューハイの缶を渡した。結果、火邪はそれを飲み始めた。なんか色々おかしい気がした。

「……私は、もう、終わりだ」

神無は肩を揺さぶられながら、ぽつりと呟き始めた。

「お母さんとお父さんに22時には帰るって言ったのに……もう、無理。22時までには帰るとか……無理。つまり、私、約束破る。悪い子。もう、いいや。うん。私、悪い子。今頃、お母さんとお父さんもそう言ってる。そうに違いない。絶対そう。間違いない。もう、いいって。私、悪い子でいいって。疲れたって。神無は悪い子。神無はダメな子。そのレッテル、もう剥がれないって。それならそれで生きていくしかないって……もう、今日は帰らないです……というか、もうずっとここに住みます!!」

神無はガバツとまた起き上がり、「これからお世話になります!」と、水無の手を握り上下にシエイク。

「ええ!? なに言ってるの神無!? そんなのダメに決まってるじゃん!!」

こいつまだ酔ってやがんのかよ! と、水無は思いました。

「炊事洗濯家事手伝い! 火無さんのお世話から火邪さんのお世話まで! 私、なんでもやりますからここに置いて下さい!!」

何とぞ、何とぞよろしくお願いしますー。という感じで神無は深々と頭を下げる。

「いやいやダメだってば！　ちゃんと神無の家に帰らないとダメだって！」

「もう帰りません！　いいんです！　どうせ神社神無は悪い子なんだから、無断外泊してもいいんです！　家出してもいいんです！」

「いや、だからね神無。神無は、悪い子じゃないでしょ？」

「私もそう思っていた時期がありました。だけど、悪い子なんです。もう、そうやって決められているんです……」

神無は水無の手を掴んだまま、顔を伏せました。

「もう……無理なんだもん……どんなに私が頑張っても、無理なんだもん……お母さんとお父さんの評価を変えるなんて、もう無理だもん……神無はずっと悪い子のままだもん……だから泊まるもん。帰らないもん。家出だもん……悪い子だから家出だもん……」

しくしくと。静かに神無は泣き始めました。「神無……」水無は困ってしまう。どうしよう。「む。それは無理です。口寄せの技術は会得してないです」自縛霊さんは神無に何か言いたいらしいですが、残念ながら口がありません。そして火邪は。

「姉さん姉さん。神社さんもそう言ってるんだから神社さんも住ませてあげましょう。それがいいです。そうしましょう。私が責任持つて面倒見ますから」

水無に、神社さん飼って！。と頼みました。

「火邪……そんな犬猫みたいに言わな「ありがとう火邪さん！」……神無さーん？」

水無が火邪を窘めようとした途中で、神無が水無から手を離し、火邪に飛びつきました。笑顔です。神無さーん？ さっきまでの淋しさの塊。みたいな空気はどうしたのー？ 変わり身早くないー？ と、言いたくなる笑顔です。

「火邪さんありがとう！ これからもよろしくね！」

「こちらこそよろしくお願ひします」

「私、頑張つて家事とかするから！」

「そんなことは姉さんに任せて、私と遊びまくりましょう。ずっと私と遊んでください。ずっとずっと。私と遊んでましょね。ピーターパンみたいに、ずっと私は神社さんを遊び相手にすることになります」

「うん！ そうだね！ 私悪い子だから大学なんて行かずに火邪さんとずっと遊んでるよ！ 私はずーっと永遠にここで火邪さんの遊び相手だよ！」

「ああ、それは幸せですね」

「うん！ これほどの幸せはないね！」

二人は手を取り合い、休日の予定を楽しく計画しているとき。みたいな笑顔を浮かべています。本当に楽しそうに。これからの幸せな生活を夢見ています。

「……」

そんな二人を水無は引き気味で見えています。そんな生活無理だしそんな生活幸せでもなんでもないのでこいつら本気でそう思ってるの？ 火邪はそうだとしても、神無は酔ってるからだよ？ そうだよ？ それの本心なわけないよね？

「おい水城水無。どうにかするです。お怒りですよ」

「………わかってるって」

誰が怒ってたんだ？ というかお前は酔ってるんだよな？ という疑問を飲み込んで、さて、こいつらをどうしようかと水無は考えます。考えました。もう色々と面倒なので、この手で行くことにします。

「さ、二人とも！ この素晴らしい日（嘘）を飲んで祝おうじゃないか！」

水無は作り笑顔を浮かべながら、神無と火邪にチューハイを渡します。

「ありがとう水無！ そうだね！ この素晴らしい日（私が悪い子と認めた日）を祝おう！」

「そうですね姉さん。この素晴らしい日（神社さんが私と永遠に一緒にいられるようになった日）を祝いましょう」

「はい、カンパニー！」



「カンパーイ！」

「カンパーイ」

22時30分です。

「ぐー」

「すかー」

「「びー」」

神無と火邪は酔い潰れました。二人仲良くベットで寝ています。

「眠れ。二人とも。そして、忘れなさい……永遠に……この日のことを……ふ、ふふふふ……」

そんな二人を水無は見下ろしながら、不敵な笑いをもらします。水無も相当きてます。

水無の作戦は簡単です。酔い潰して、さっきのをなかったことにする。です。

「なかなかの手際です水城水無。及第点です。しかし、根本の問題は一切解決していないですよ。神社神無の問題はお前が解決すべき

問題かはわかりませんが、水城火邪の問題は、お前が解決すべき問題ということをお忘れなです」

「はいはいわかって……お前なんでこっち見て喋ってんの？」

水無は巡の方を振り向いて、ビックリしました。だつてずっとカーテンを、自縛霊じゃなくてカーテンを、見て喋っていた巡が、こっちを見て喋ってきたのです。

「何を言ってるのですか？ さっきからお前の方を見てずっと喋っていたですよ」

「いや、見てなか……」

見てなかった。やっぱり酔ってるな。と、水無は苦笑しながら言ううと思った。思ったが、あることに気付き、水無の表情が固まった。巡は水無の方は見ていた。しかし巡の視線は水無の横だった。水無の横。つまり神無と火邪の枕元。枕元……枕元に立つあれ。

「……………」

水無は横を向く。そこには何もいない。水無はそのまま後ろに、神無と火邪の足元付近まで下がる。巡の方を見る。

「おい。話しを聞くです。いつまでも頭撫でてないで話し聞くです。誰のために私が考えてると思ってるのですか？」

巡は、神無と火邪の足元にいる水無ではなく、神無と火邪の枕元にいる何かに話しかけていました。

「…………私、しーらないっ」

水無は、塩、まこうかな。と、半ば本気で思いましたが、それをやったら完璧認めることになるな。よし。私は何も知らない。うん。知らない。と、考えて、神無が座っていた場所に座りました。

「だからお前が神社神無が心配なのはわかったですから、今はお前の話をさせるです。さっさとお前をいるべきところへ逝か」

「…………さて」

巡が話している内容を意識から締めだして、水無はこれからどうするか考えます。本を読もうにも、本はベット付近に置いてあるので取りに行けません。行けないんです。精神的な問題で行けないんです。じゃあ空き缶を積もうかとも思いましたが、それはさつき神無と火邪と三人で遊び尽くしてしまったので、やる気がでない。じゃあどうしようかな。もうさすがに食べれないしな。何かおもしろいものないかな。水無はキョロキョロと周りを見回します。

「……………」

そして神無の鞆に目をつけました。いや、別に鞆の中身を漁ろうとしたわけではないよ。ただ、鞆の中に携帯があるだろうから、神無の家に連絡をしようかな。と思ったわけです。神無が泊まっていることはもはや決定です。

「…………よし」

水無は誰も見ていない、つまり巡がこっちを見ていないのを確認してから、神無の鞆を引き寄せて、漁って、神無の携帯を取り出しま

した。

「……………」

携帯を見る。メール・電話、着信共になし。神無の話によると、2時に帰ると言っていたらしい。まあ、まだ30分だし、神無も大学生で20歳だから、連絡がなくてもおかしくはない。しかし神無の話を聞いた後だと、着信がないというのは神無が帰って来るかどうかなんてどうでもいいと思っているんだな。と誤ってしまう。水無は親と仲良くない。別に自分はそれでいい。仲良くしたいと思っ  
てないから。でも、神無は仲良くしたいんだよねー。

「……………」

そんなことを考えてたら、水無は自然とアドレス帳を開いてしまった。どうやら自分は神無の親に連絡しようと思っているらしい。神無は泊まることになった。以外を伝えるのは我慢出来るのかな。私は。と、水無は人事のように思いながら、神無の母親の携帯番号を選択しようとした。が。

「うわっ!」

そのタイミングで携帯が鳴った。震えた。ビツクリして放り投げてしまった。「携帯は投げるものじゃないですよー」と巡が言ってきたがスルー。水無は恐る恐るまだ鳴っている携帯を拾う。メールではなく電話のようだ。画面には着信者の番号と名前。そこに表示されている名前は『神社神裂』。名前からして神無の家族。母親か父親か、姉。

「……………」

水無は神無を確認。神無は「かにやみにや」という寝言(?)を言  
つて熟睡中。起こすのは忍びない。起こしても電話出来るとは思え  
ない。  
というわけで。

「……………はい。もしもし？」

水無は電話を取った。

『……………神無じゃないわよね？ 水城水無さんかしら？』

「そうですね……………あなたは？」

『神社神裂。神無の姉です。神無から話、聞いてない？』

「まあ……………それなりに」

『そう。それで、神無はいる？ 22時に帰ってくるって言った  
らしいんだけど、まだ帰って来てないのよ。あの子が約束の時間を  
破るなんて、何かあったのかと思って電話したんだけど』

「……………心配するんですね」

『え？ ええもちろん。心配するわよ。私が心配するの、おかしい  
？』

「いえ、別に……………神無は今日は泊まっていくことになりました。今  
は眠ってますよ。安心して下さい」

『そう。よかった。安心したわ』

「じゃ、切りますね」

『怒ってるの?』

電話の向こうから、クスクス笑っている気配がする。

「……………」

はて。自分は怒っているのだろうか。水無がそう思っていたら、「水城水無。どうしたですか? 眉ねを寄せてご立腹ですか?」と、巡に言われた。どうやら自分は怒っているらしい。

怒っている理由はなんだろう。怒っている相手は誰だろう。

『神無のために怒ってくれてるのかしら?』

「……………あなたの話を神無はあまりしないからよくわからないけど、あなたは凄いらしいですね」

『そうね。神無が思っているほど凄いかはわからないけど、私は平均よりは、神無よりは、凄いらしいわね』

やっぱりそうか。神無より凄いのか。なら。

「なら、神無のことをどうにかしてよ。もう私はあんな神無見たくない。神無がかawaiiそう。神無はあんなにいい子なのに。私より全然いい子なのになんであんなに傷ついてるわけ? あんたがどうにかしろよ。なんで神無を守ってやらないんだよ!」

怒っている理由は神無が可哀相だから。  
怒っている相手は凄いい姉。

『私が何にもしてないと思ってるなら即刻その認識を改めなさい。  
不愉快極まりない』

「……………」

神裂の言葉は冷たかった。本気の言葉だった。本当に不愉快だったらしい。水無の頭がすつと冷えた。水無の脳もアルコールに着々と侵食されていた。少々熱くなり過ぎた。理性より感情のほうが強かった。

「……………すみませんでした」

反省した。生意気なことを言った。自分はこの人のことを全く知らないのに。神無の言葉だけで決めつけてはいけなかったのに。

『別にいいわ。神無を心配してくれてありがとう。神無にそんな友人が出来て、本当によかった。今の神無は、昔の神無とは比べものにならないほど、明るくなったわ。本当に、ありがとう』

「……………」

水無は、大学一年の時、初対面の時の神無を思い出す。あれは、酷かった。

『レットテル』

「……レッテル？」

『そう。レッテル。シールやテープでもいいけど。あれって、落ち着いて、ゆっくりと、慎重に剥がさないと、うまく剥がせないでしょ？ 綺麗に剥がせないでしょ？ 後が残っちゃうでしょ？ 残ってしまつたら、もうどうにもならないのよ』

「……」

『期待してるわ。あなたがレッテルを剥がす、レッテルをおとす薬品に、潤滑剤になることを……。なんてね。それじゃあさようなら。おやすみなさい』

「……おやすみなさい」

水無はそう言つて、電話を切ろうと『あ！ ちょっと待って！』

「まだ何か？」

『機嫌が悪いみたいね。眠いの？ それともお酒でも飲んだ？』

「……なんでわかるんですか」

『それは水無が今日出かけた理由を私が知ってるから。かな』

「……？」

『お誕生日おめでとう。水城水無さん。誕生日パーティーだからって、羽目を外し過ぎたらダメよ？ 水無のこと、これからよろしくね』



神裂はそう言って、電話を切りました。

「……………そっか」

水無はすっかり、今日が自分の誕生日で、今が誕生日パーティーと  
いうことを忘れていました。

「……………」

テーブルの上を見ればそこには、火無が自分へのプレゼントとして  
作ってくれた肉じゃが。の汁が入った皿、誕生日ケーキの残骸、巡  
が買ってきた料理の残骸、チューハイの空き缶、などなど、パーテ  
ィーの名残が散乱している。

「むにゃー」

「ふにゃー」

ベットの方を見れば、自分の誕生を祝ってくれた神無と火無。と火  
邪が寝ている。幸せそうに眠ってる。見てるこっちも幸せになれそ  
うだ。ベットの横には、神無と舞歌がプレゼントしてくれた本が置  
いてある。

「そうですか。神社神裂はいいお姉ちゃんみたいだったですか。お  
前は盗聴とかが出来て便利ですね。今度家に来るですか？ あ、こ  
こから離れられないんですか。残念ですね」

テレビの方を見れば、このパーティーを計画してくれて、自分を祝  
ってくれた巡が、誰かと話している。話している誰がも、祝ってくれ

ているのだろうか。それはそれで怖いけど。

「ふむ……」

水無は片手で、巡からもらったペンダントを弄りながら、満足気に頷いた。

なんか色々あったけど。楽しかったな。父さんがいた頃以来かな。誕生日が楽しくて、誕生日が来るのが待ち遠しかったのは。

水無の顔には当然、幸せな、笑みが浮かんでいました。

おまけ

次の日の朝。

「お姉ちゃん。頭が痛いよー」

「私、吐くです……」

「昨日の記憶が、本当に、ない……」

「……何も喋りたくない」

神無、水無、巡の三名。

一日酔いにより、自主休講。

おしまい・・・

### 8 - 3 ・誕生日パーティー（急）（後書き）

ながーい。くせして終わりが無理矢理綺麗にした感じがいなめない。

誕生日パーティーの果てに待っていたのは当然二日酔いです。

神裂の行動について補足。

神裂は実家にいつもいるわけではないです。たまたま今日は時間があつたので夜神無の様子を見に実家に戻ってきました。しかし神無がいません。親から話を聞くと、神無は22時帰ると言って、友達の誕生日パーティーに行ったようです。神裂は、神無の悪口（あの子は全く、自分が決めた時間すら守れないなんて。本当に、ダメな子ね。神裂とは大違い。あなたじゃなくてあの子が早く出ていってくれないかしら。そうすれば私たちも楽できるのに。あの子は本当に出来損ないの役立たずよね）を聞き流してから、神無の携帯に連絡した。という感じですよ。

自縛霊は、まあ、スルーで。

はい。水無の誕生日パーティーはこれにて終了。

次回からは新章がスタート。影が薄かった舞歌と月読と命を出そうかなあ。と思ってます。

かしこ。

1・1・1 ビー玉vs王冠(前書き)

七月上旬といふことで手を打ちませんか？

「神無ー」

「なにー」

午前中。講義の合間。水無はへたっていました。なぜなら。

「暑い」

からです。

「確かに暑いねー」

「こつこついう日はあれだね。ラムネが飲みたくなる」

「あー、飲みたくなるね。美味しいよね。暑い日に冷たいラムネ」

「私はずっと疑問に思ってたことがあるんだけどさ、聞いていい？」

「聞いていいよ」

「なんでラムネってビー玉でフタしてんの？」

「なんでって……ラムネだからだよ」

「そっか……ラムネだからなのか」

「いや、だってさ水無。ラムネがビー玉でフタしてなくて、ペット

ボトルのフタとか、王冠とかだったら、どう？」

「どうって神無……それは、ラムネじゃなくて、ただのサイダーじゃないか！」

「でしょ？ だから、ラムネはビー玉のフタなんだよ。ラムネがビー玉のフタなんじゃなくて。ビー玉のフタがラムネなんだよ」

「そっかあ……。うん。よくわからん」

「うん。つまり。ラムネはあの飲み物を指す言葉じゃなくて、ビー玉のフタを使った飲み物を指す。らしいよ。ってことだよ？」

「つまり……ビー玉のフタをしたコーラは？」

「黒いラムネだね」

「ビー玉のフタをしたオレンジジュースは？」

「オレンジのラムネだね」

「……そ、そんなラムネ私は認めない！」

「認めないと言われても……そうなんだもの」

「というかそもそも私はもっと根幹的なことを聞いているんですよ神無さん！」

「そ、そうなんですか水無さん？」

「なんでビー玉なんですかっていう話ですよ！ オレンジジュースみたいに王冠じゃないのはなぜかっていう話ですよ！」

「そもそもラムネという飲み物は外国から来た当初は、コルクでフタをされていたのです」

「いきなり始まった……」

「しかしコルクでは炭酸が抜けてしまいます。どうすれば炭酸が抜けずに、つまり完全に密閉出来るかみんな一生懸命考えました。そして。そうだ。ビー玉にしよう。と思いついたのです！」

「だからなぜそこでビー玉……」

「ビー玉なめんな！ 密閉率スツゴいんだからね！！ やべえからね！ べらぼうに高いから！ ラムネ開ける時のあのシュワー！ あのシュワーが全てを物語っているじゃないか！」

「う、ごめんなさい！」

「わかればいいんだよわかれば……で、ビー玉の密閉率高いから、他の飲み物もそれで密閉しようみたいなノリになるはずじゃん？ 実際なるはずだったんだよ。オレンジジュースもビー玉になるはずだったんだよ！ きつと」

「最後の一言で信憑性が、ガクツと下がった」

「ビー玉の運の悪いところはね。ちょうどその時期に、王冠が開発されちゃったんだよね。王冠の方が開けるの楽でしょ？」



「まあ確かにラムネって開けにくいよね。開けにくいって言うか、シュワーってくるもんね」

「でしょ？ だからビー玉フタは普及しないで、王冠がはばをきかす世の中になってしまいました。ビー玉がビールのフタになることは夢のまた夢のお話です……おしまい」

「なるほどなー。いい話だった……気がする」

「今もビー玉フタを使ってるのは、日本と、どこだっけ、インドだったかな？ だけらしいよ」

「へえー」

「へえーいただきました。というわけで、百円」

「そのネタ古くない!？」

「古いものも、たまにはいいというお話でした」

色々あっても、神無と水無の二人はいつも通りの生活を送るのでした。

1・1 ビー玉vs王冠(後書き)

いや、だって、暑いんだもん。  
ラムネすっげえ飲みたいもん。

それだけです。

## 1 - 2 ・織り姫と彦星はある意味ダメ夫婦

昼休み。巡は図書館で、舞歌に人魚姫について熱く語っていました。

「とうわけで、人魚姫の中で一番悪い奴はどう考えても、王子様です。わかったですか？」

「わかりました」

「そうですね。わかってくれたですか。しかし三途舞歌。お前は私が話している間ずっと本を読んでいましたですね。本当に、わかったんですか？」

「わかりました」

「……私の話、聞いてたですか？」

「全く」

「そこはわかりましたと言うところではないですか!？」

「わかりました」

「そこでは言わなくていいんです! 全く……お前は会話というものがわかってないですね」

「……………」

「ん? 今、なんと申したのですか? 声が小さくて聞こえなかった

です。もう一度言ってみるです」

「しむらい」

「本当に言わなくてもいいんですよ！そこは、何も言っていないです。でしょうが！」

「……………」

「今度は無視ですか。いいですいいです。話題をコロツと変えてやるです。今度はちゃんと話を聞くですよ？」

「嫌です」

「七夕ですね」

「……………」

「七夕といえば短冊です。短冊といえば願い事です。三途舞歌は何か願い事を書いたですか？確か、この大学の中央棟に笹が飾ってあったですよ。短冊もあったと思うです」

「そんなことするわけないじゃないですか。馬鹿らしい……………」

「そういつと思っていたです。そして今回は、私もそう思うです」

「神様のくせに？」

「皮肉ありがとうございます。神様のくせに、です。そもそも七夕の神様、

まあつまり彦星と織り姫のことですが、あいつらは怠け者なんですよ！ 私と違って！」

「……」

ノーコメント。

「あいつらは夫婦なわけですよ！ 結婚したわけですよ！ 彦星と織り姫は結婚する前は働き者だったですよ！ だけど結婚したあとはいちゃいちゃらぶらぶらぶらふふのふなんですよ！ わかるですか三途舞歌！ あいつらは結婚生活が楽しくて仕事をしなくなったんですよ！ 神様のくせに！ 神様のくせに！ 神様のくせにー！」

「……そんなに怒ることか？」

「怒ることですよ！ いいですか三途舞歌！ それを見て怒った織り姫のお父上が、彦星と織り姫を離れ離れにしたわけですよ！ そしたらですよ！ そしたらですよ！ そしたらですよ！？ 織り姫の野郎メソメソ泣きやがるですよ！ 天の川大氾濫ですよ！ 泣くな馬鹿ですよ！ てめえが夫といちゃついてたからいけねえだろうがですよ！ てめえが夫をちゃんと教育しなかったのがいけねえんだろうがですよ！！」

「そ、そこまで織り姫を怒らなくてもいいんじゃないですか？ 誰かが言っていましたよ？ 愛は神をも惑わすって」

「なんですか三途舞歌。織り姫擁護ですか。神様が嫌いなくせに織り姫擁護ですか。そういう趣味ですか」

「どつという趣味だよ……いや、嫌いは嫌いですけど……あなたは

織り姫になんの怨みがあるんですか？　そこまで怒るのはさすがの私も、引きます。なに作り話に本気でキレてるんですか」

「作り話にも本気で向き合える、そんな神様に、私はなりたい……」

「……はあ」

「なんですかその、こいつ馬鹿だ。みたいなため息は」

「……」

「無視ですか。まあいいですけど。ところでお前は何をさっきから読んでるんですか。貸すです。よこすです」

「嫌です」

「しかし春風巡は簡単に本を奪うことが出来たのでし……た」

「どうしました？　顔色悪いですよ？」

「三途舞歌……なんですかこの本は」

「そこにタイトル書いてあるじゃないですか。読めないんですか？」

「読めるですよ！　なにお前は本気で心配してるみたいな顔してるんですか！　馬鹿にしてるんですか!？」

「まさか」

「白々しいですねこの野郎は……なんでお前はこんな本ばかり読

んでるですか……神殺しって。そのままずばり神殺しっていうタイプはどうかと思うです……」

「なかなかおもしろいですよ？ 貸してあげましょうか？」

「遠慮するです！」

「あ、お酒飲みます？」

「なぜこのタイミングですか！？」

「神様を殺すにはお酒が必須らしいですよ？」

「殺す気満々ですか！？ 絶対お前の前では飲酒しないですよ私は

！」

「……………はあ」

「どうしてそこで外を見ながらため息をつくですか！ 私がつくべき時ではありませんか！？」

「本返してくださいよ」

「……………」

巡はたまに、舞歌がよくわからなくなるときがあります。が、舞歌もたまに巡がわからなくなるときがあるので、おあいこつてやつです。ね。





1 - 2 織り姫と彦星はある意味ダメ夫婦（後書き）

いや、だって、七夕だったから。

三途舞歌も久しぶりに出したかったし。

それだけです。

### 1 - 3 . ダメな理由

「パンダは笹が嫌いだと思う。嫌いなのに笹を食べるのを求められるから食べるパンダは、さすがだと、私こと水城水無は思う」

「パンダは笹を食べることを求められているとは知らないと思う。私こと神社神無はそう思う」

今日の講義も全て終わって放課後のな何か。

水無と神無はいつも通り、どうでもいいことをそれなりに真面目に話していました。

と、そこに。

「あっ！ 見つけたー！」 「見つけたー！」

月読ちゃんと命ちゃんが現れました。

二人はパタパタパターという感じで、驚いている二人に走りより、命ちゃんは神無の前で、月読ちゃんは水無の前で、両手を向けました。つまり、抱っこして膝にのせなさい。という意味です。

神無は笑顔でそれを承諾し、命ちゃんを膝にのせ抱っこ、そして顔を見合わせ、えへへへー。

水無は引き攣った笑みを浮かべながら、月読ちゃんを膝にのせた。が、月読ちゃんが「抱っこがいい」って言って方向転換。そして引き攣った顔をしている水無と顔を見合わせて、えへへへー。

「命ちゃん、また来ちゃったの？」

膝の上に座ってご満悦の命ちゃんに神無は話しかけます。

「みことまた来ちゃったの！ だってね、だってね、みこと、神無お姉ちゃんに会いたかったんだもん！」

「そうなの？……それなら、仕方ない……のかな？」

「仕方ないの！ だって神無お姉ちゃんちつとも遊びに来てくれな  
いんだもん！ それならみことが来るしかないもん！ ねえ神無お  
姉ちゃん、何かお話して！」

「お話？ んー……そうだなあ………命ちゃん、ラムネって、知っ  
てる？」

「知ってる！ あのね！ ビー玉が入ってきれいでシュワシュワす  
るやつでしょ！ たまにおやつで出てくるよ！」

「うん。それだよ。命ちゃんは、どうしてラムネがビー玉でフタさ  
れてるか、知ってる？」

「みこと知らない。どうしてビー玉入ってるの？ きれいだから  
？」

「うん。それもあるけどね。あのビー玉はね」

神無と命ちゃんがラムネについて話している向かい側では、月読ち  
やんと水無が、別のことを話しています。

「君たちはあれじゃなかったかな？ 大学には来ないって、巡と約  
束してなかったっけ？」

「約束してたけど……だって、水無姉ちゃん全然来てくれないんだもん」

月読ちゃんはじーっと水無の顔を見上げます。

「私？」

水無は自分を指差し、確認作業。私って、そんなに懐かれてたっけ？

「うん。水無姉ちゃん来てくれないから、僕、来たの」

「そうなの？」

「そうなの」

「巡に会いに来たんじゃないわけ？」

「巡姉ちゃんにも会いたいけど………巡姉ちゃん最近、あれもダメこれダメばかりだもん」

ぷいっと横を向く月読ちゃん。

あらら。巡の奴嫌われてやんの。と、水無は思っただけです。

「なに？ 巡姉ちゃん嫌いになっちゃったわけ？」

「嫌いになんかなってないもん！ 巡姉ちゃんいつも遊んでくれるしおもしろいし、僕大好きだもん！」

「こら、暴れるな。叩くな。痛い。痛くないけど痛い」

月読ちゃん、怒って水無はポカポカ叩く。

「…………でも」

月読ちゃんは叩くのをやめ、しょんぼりしてしまいました。

「でも?」

「…………ダメダメ言う巡姉ちゃんは好きじゃない…………。どうして巡姉ちゃんダメダメ言うの? どうしてここ来ちゃダメなの? 巡姉ちゃん、僕のこと、嫌いになっちゃったの?」

月読ちゃん、涙目づるづる。

そんな月読ちゃんの頭を、水無は撫で撫で、慈愛の笑顔。

「嫌いになっちゃったわけじゃないでしょうが。巡姉ちゃんはちゃんと君に、ダメな理由、言わなかった? 大学に来ちゃダメな理由はなにか覚えてる?」

「…………命と二人だと、危ないから…………でも、危なくないよ? ちゃんと青で信号渡るよ? 右見て左見て、もう一度右見て渡るよ? 手も上げるよ? 知らない人にもついていけないよ? 人が少ない道、通らないよ? 危なくないよ? なのにどうしてダメなの?」

「交通ルール守っても、危ないことはあるの。どんなに君が注意してても、危ないことにあっちゃうかもしれないの。というかそもそもね。危ないからここに来ちゃダメなわけじゃないの。心配だから、ここに来ちゃダメなわけ。ここに来る間に君たちに何かあったらと思うと、巡姉ちゃんは心配なの。あんたたちが心配なの。だから、色々ダメダメ言うんだよ?」

「巡姉ちゃん、僕たちのこと、心配してるからダメダメ言うの?」

「そうだよ。それともあれかな? 君は、巡姉ちゃんに心配されたくない? ダメダメ言われるのが嫌だから、巡姉ちゃんには、自分のことなんかほっといて欲しい?」

「……ほっとかれると、どうなるの?」

「君はダメダメ言われなくなるよ。その代わり、巡姉ちゃんは遊んでくれなくなるね。ああ、君があんまり約束破ってばかりでも、遊んでくれなくなるかもよ?」

水無は、だからあんまり巡を困らせるなよ? という意味で言ったのですが、月読ちゃんは、その言葉を受けて、ポロポロと涙を零し始めました。

「そんなのやだ! 僕、巡姉ちゃんともっと遊びたい! ほっとかれるなんてやだよー!」

月読ちゃんは水無の胸に顔を埋めて泣き出してしまいました。水無は、しまった。泣かされるつもりはなかったのにー! と思って慌てて、背中を叩いたり頭撫でたりと、泣き止ませようとしています。

「どうしたのつくよちゃん。どうしてつくよちゃん泣いてるの? 水無お姉ちゃん、つくよちゃん虐めたの?」

命ちゃんは泣いている月読ちゃんが心配なのか、泣きそうな顔で神無に聞きます。

「水無は虐めてないよ。大丈夫。すぐ泣き止むよ」

神無は命ちゃんの頭をポンポン叩きながら、目で水無に、『みーずーきーさーん？』と送りました。水無は月読をあやししながら『わ、私は精一杯頑張ったって！ 不可抗力だって！ 私悪くないって！』と、神無に送りました。

「……僕、帰る」

そんなこんなで月読は泣き止みました。水無の胸から顔を上げ、鼻を噉りながら、そう呟きました。

「命、帰るよ」

水無の膝の上でクルツと方向を変え、命ちゃんの方を向いて、月読ちゃんはそう言いました。

「え？ ……みこと、もつと神無お姉ちゃんといたい」

命ちゃんは月読ちゃんと神無の顔を交互に見て、そう言いました。

「帰るの！ 巡姉ちゃんにほつとかれるのやだの！ ここ来ちゃダメって言われてるから帰るの！ 早く帰るの！」

「うつ……や、やだもん！ みこと、神無お姉ちゃんとまだお喋りしたいもん！ ラムネの話するんだもん！ 帰るならつくよちゃん一人で帰ればいいでしょ！」

月読ちゃんと命ちゃんはお互いに睨み合い、膝の上で暴れながら喧嘩し始めました。

「ちよ、命ちゃん落ち着いて？ 落ちるって、危ないって！」

「やだもんやだもん帰らないもん！」

「き、君も暴れるな！ 頭から落ちたらお前は死ぬぞ！」

「やだもんじゃないの！ 帰るの！ 巡姉ちゃんに見つかる前に帰るのー！！」

「巡お姉ちゃん怒らないもん！許してくれるもん！怒られるのが嫌ならつくよちゃん一人で帰ればいいんだもん！」

「み、命ちゃん？落ち着いて？」

「命は一人で帰れないでしょ！だから一緒に帰るの！」

「おい。私の話、聞いてくれない？」

「帰れるもん！みこと一人で帰れるもん！」

「……」

部外者の言葉なんぞ聞く耳持たぬわー。という感じの二人に、神無と水無は困っちゃう。アイコンタクトで会話しちゃう。まず水無が「かーみーやーしーろーさーんー？」と伝えて「え！？ 私のせいなの！？」で「神無が懐かれ過ぎてるのが悪い！」で「それが悪いことなの！？」で「とりあえずどうにかしないさい！」で「ここは水無がどうにかするべきじゃない！？ 水無がなんか言ったんでしょ！？」で「私はここにいたら巡姉ちゃんに怒られるんじゃない？」



早く帰った方がよくな？って遠回しに言ったただけだよ！？」で『それが悪い！』で『悪くないでしょ！』というかそんなこと言ってる場合じゃないって！ そろそろこいつら泣く！』で『水無。もう泣いてる』で『ああ……周りの視線が痛い。ヤンママとか言われている……。神無、どうにかして！』で『どうにかしてどうやって！？』で『なんでもいいからどうにかして！』で『うう……ああ……わかったー！』で、アイコンタクト終了。アイコンタクトのやり方は企業秘密。

「よし！ 命ちゃん！ 送って行ってあげるよ！」

「おくつ、て、くれ、る？」

命ちゃんが泣きながら、神無の言葉に反応しました。勝機あり！

「そつだよー。だからくるみわり園につく間、いっぱい話してられるよ？だから今日はもう帰ろうねー」

よしよしと神無は頭を撫でます。

「らむ、ね、の、ひみ、つ、教え、て、くれ、る？」

「うん。教えてあげるよ。だからもう、喧嘩しちゃダメだよ？ 月読ちゃんも水無が送って行ってくれるよ。よかったね。月読ちゃんも、本当はもっと水無とお喋りしたかったんでしょ？」

「うん！」

「え！？」

水無は、自分は送って行かなくていいよな。と、勝手に思っていたのでビツクリ仰天。

「え、ちょ、神無さん？ 私はちよつと……」

「え！？ 水無さん！送って行ってあげないんですか!？」

わざとらしい感じで驚く神無。

「水無姉ちゃん、送って行ってくれないの？」

月読がうるうるした目で、水無を見る。

「うつ……うつ……わかりましたよー」

そんな目で見つめられた水無は、ガクツ。という感じ領きました。

私は妹という大きな子供の相手で精一杯なんだけどなー。

### 1 - 3 ・ダメな理由（後書き）

なんか、物足りない感じがするようないような……。なんだろう……。なんだろうね？

とりあえず、月読ちゃん達が可愛いからいつか。

## 1 - 4 . 続。くるみわり園の子供たち

神無と水無と月読ちゃんと命ちゃんが、じゃあくるみわり園まで手を繋いで仲良く行こうねー。という感じで大学を出発した頃、巡はくるみわり園にちょうどつきました。

くるみわり園の庭では五人くらいの子供たちが遊んでいた。

「あ！ めぐねーちゃんだ！」 「ほんとだ！」 「巡遊びにきたの？」  
「遊ぼうよー」 「……またきた」

巡に気付いた子供たちが、巡の側に近づいてきました。

「誰ですか呼び捨てにしたのは。私を呼ぶときは、『姉ちゃん』か『さん』か『ちゃん』を付けるです。もしくは神様と呼べです」

「めぐちゃんなにに来たのー？」 「巡ちゃん遊ぼうよー」 「巡ちゃん。おれ、サッカーしたいー」 「巡ちゃん、あたしご本読んで欲しいー」 「巡ちゃん……？」

「どうしてそこで『ちゃん』を選ぶですか！ 『ちゃん』を！そこは神様と呼ぶとこですよー！」

わー！ 怒った怒ったー！

子供たちは口々にそう言って、蜘蛛の子が散るように、逃げました。巡は、はあ。やれやれ。大人をからかうとは困った奴らです。と言わんばかりに、ため息をつきました。

「……む」

さて。追いかけるか。と、巡は思い、庭を見渡しました。そこで、月読ちゃんと命ちゃんがいらないことに気付きました。あの二人はたいていこの時間は、庭で遊んでいるのに。何か嫌な予感がします。

「めぐねーちゃんどうしておっかけて来ないのー？」「巡お姉ちゃんほんとに怒っちゃったの？」「ごめんなさい、巡姉ちゃん……」  
「ごめんなさい……」「……わたし、悪くないもん」

巡が追いかけてこないの、子供たちはまた、巡の側に来ました。

「怒ってないですよ。この程度怒るほど私の器はちっちゃくないです。ところでお前たち。月読と命がどこにいるか知ってるですか？中で遊んでるですか？」

子供たちと目線の高さを合わせ、泣きそうな子の頭を撫でながら、巡は尋ねます。

「つくよちゃんたち？ 中で遊んでると思うよ」「え？ さっきまで庭で遊んでたよ？」「おれ、あいつらが外行くの見た！」「じゃあまた二人だけでお外行つたんだ！ すごーい！」「……」「つくよちゃんたちよく平気だねー」「うん。私も怖くて、一人で外なんて行けないよー」「あいつらすごいなー。二人だけで外行くなんて、大人みたいだもん」「あたしもそう思う。つくよみちゃんとみことちゃん、すぐくて大人みたいだねー」「……大人」

「こらこらお前たち。二人で勝手に外に行くのは淒くもなんともないですよ。いいですか？ 真似しようとなんて考えるなですよ？」

「はーい」「まねなんてできないよー」「おれもむり」「つくよみ

ちゃんたちやっぱりすごいよねー」「……………」

「だから凄くないです。全く……………」

巡は、はあ。とため息をつきました。同い年の仲間たちにできないことをやる。そして褒められる。これもあの二人が出歩く原因なのだ。全く、どうするべきか。

「ねえねえめぐねーちゃん。遊んでー」「遊ぼうよー。遊ぼうよー」「サッカーやりたい!」「えー、あたしはご本読んで欲しい!」「……………本は子供っぽいからわたしやだ」「あー! あかちゃんまたそういうこと言うー! あかちゃんだつて子供でしょ!」「! あかちゃん言うな!」「いーだつ! あかちゃんはおかちゃんだからあかちゃんだもん!」「意味わかんない!」「ふ、二人ともやめなよー」「あかねが悪い! あかねあやまれ!」「わたし悪くない!」「うう……………あたしが、いけないの?」

子供たち、さえちゃん、かなちゃん、けんちゃん、あかねちゃん、らんちゃんは、喧嘩を始めてしまいました。

「こらこら。かなの言う通りですよ。さえもあかねもやめるです。けんもそんなこと言うなです。らんもお前のせいではないから泣くなですよ。ほら、喜ぶです。今日はらんの要望通り、本を読みに来たですよ? 人魚姫です。好きですか?」

巡は五人をあやしなから、カバンから童話『人魚姫』を取り出して見せます。

「えー。私、人魚姫好きじゃない。だつて、ばつとえんどだもん」「え? 人魚姫って、バットエンドなの?」「おれ、サッカーやりたーい」「ばつと、えんど、つて、なにっ?」「……………ふん」

「わかったですわかったです。とりあえず、外で遊ぶのはやめです」

「えー。なんでさー」

けんちゃんがぶーたれました。

「ほら、あっちの空を見てください」

巡は立ち上がり、あっちの空を指差しました。子供たちは、あっちの空を見ました。あっちの空には、もくもくと大きな大きな、真っ黒い雲がありました。いわゆる、積乱雲ですね。

「あの大きな黒い雲があるということは、もうすぐここに……ゲリラがやってくるということですよ……だから外では遊べないです……！」

巡は、ババーン……と発表しました。子供たちは、な、なんだって……？という顔をして驚きました。

「大変だー！ゲリラが来るー！」「雨がいつぱい降るー！」「逃げるー！」「せんとく物入れないとー！」「……………」

子供たち、さえちゃん、かなちゃん、けんちゃん、らんちゃんは、わー！ゲリラが来るー！というところで、走って園内に入っていきます。

「本は食堂で読むから、聞きたい子は食堂集合ですよー！！他の子にもそう伝えてくれですよー！！」

巡は走つていく子供たちの背に、その声をかけました。子供たちは走りながら、はーい！と答えました。可愛い奴らめ。巡は笑顔です。

「……で、あかねは何かようですか？」

巡は一人残ったあかねちゃんと目線を合わせて、尋ねます。

「……二人で外に行くのは大人？」

あかねちゃんは真剣な眼差しで、ジーツと巡の目を見ます。

「あんなの大人でもなんでもないですよ。勝手に外に行くのは、どちらかという子供です。だから、お前も真似するなですよ？」

巡は呆れ顔でそう答えます。やっぱりそこに食いついたか。という感じです。

「……」

あかねちゃんは、うんともすんとも言わず、嘘か本当かを見定めているかのように、ジーツと巡を見たままです。

「……あかね。わかってると思うですが、一応言っておくですよ？ さっきみたいなのはよくないです。後でらんに謝っとくです。わかっただですか？」

巡もジーツと見て、あかねちゃんを諭します。

「……やだ。わたし、別に悪いこと言っていない。だからわたし、あやまらない！」



あかねちゃんは、巡から目を逸らしてそう答えました。  
巡は、はあ。とため息をつきます。素直じゃない子だな。全く。

「あかね。もつと素直になりなさい。本当は悪いと思ってるんでしょ？ それなら謝らないと。悪いと思ったら謝る。それも、大人になる第一歩ですよ？」

巡は優しく微笑みました。

「うっ……うっ……か、神様とか言っつて子供だましてる奴の言うことなんて私は聞かないんだから！」

巡の言葉を受けて、あかねちゃんは謝るかどうか迷うような素振りをしましたが、結局は巡に反発して、走り去ってしまいました。

「……食堂で待ってるですよー!!」

巡はあかねちゃんの背にそう声をかけました。あかねちゃんは振り向いて「本を読んでもらうなんて子供っぽいこと、わたしされてもうれしくないもん!」と言って、あっ・かん・べーしてから、また走り出しました。

「……」

あかねも可愛い子供ですけど、もう少し懐いて欲しいですね……神社神無にコソを聞くですか。

巡は手を振りながら、そう思いました。

「……………さて。です」

巡の仕事はまだ終わらない。

巡は五人のやんちゃな子供たちの相手を終えたのだが、まだもう一人庭には子供がいるのだ。

一人でブランコを漕いでいる子供、アイちゃんである。

「……………むー」

巡は悩む。

アイちゃんは、厄介なのだ。厄介というか苦手というか。どのくらい巡が苦手かというと、そこにいるのがアイちゃん以外の子供だったら、神様である巡の選択肢は、声をかけてから園内に向かう。という一択なのだ。しかしアイちゃんの場合は、声をかけずに園内に向かう。という選択肢が生まれる。そのくらい苦手なのだ。どのくらいかわかりづらい気がするが、困ってる人を神様の代わりに助けるために神様を目指している巡が、一人ぼっちで明らかに寂しそうなのに、無視するという選択をするか悩んでしまう。それくらい苦手。としか言いようがないのだ。

なにせ巡は、まだアイちゃんと会話は疎か、挨拶を返してもらったことすらないのだ。

「……………ダメです私。弱気になるなです私。やれば出来るです私。諦めるな私。神様だろ。頑張れ私」

巡は、園内行こうかなー。と思う自分を奮い立たせ、ブランコに向かう。やれるぞ私。やれば出来る。出来るはずさ。そうだ。氷山つららに出来て私に出来ないはずかなーい！

「……………」

巡はアイちゃんからだいたい二メートルの距離で立ち止まりました。

「……………」

アイちゃんはブランコを漕ぐのをやめ、あかねちゃんと同じように巡をジーツと見ます。ジーツと見るのはあかねちゃんと一緒ですが、巡が受ける感じは全く違います。あかねちゃんがジーツと見ているとき、巡は、嘘かどうか見極めようとしてるんだな。本当かどうか信じていいか確認しているんだな。と思い、それに応えるように、巡も目を逸らさず、あかねちゃんを見ます。しかし、アイちゃんにジーツと見られているとき、巡は不安定になる。アイちゃんがなぜ自分を見ているからわからないから。ではない。アイちゃんの目が、アイちゃんの人形のように無機質な瞳が、まるで自分のありのままの姿を見ているような気がするから。まさに観察されている。そんな感じを受けるのだ。神様ではない『春風巡』の根っこの部分を、見られている。知られている。そんな気がして、巡は不安定になり、この子の前から早くいなくなりたい。そう思わずにはいられない。気のせいに決まってるのに。そう思ってしまう。

「……………アイ」

巡は気持ちを落ち着けるために一度深呼吸してから、話しかけました。

「ほら、あの雲を見るです。あれがあるということとは、もうすぐ雨が降るです。だから、園内に入った方がいいですよ」

巡は五人と同じようにあの積乱雲を指差しました。その積乱雲は、アイちゃんの後ろの空にあります。つまりアイちゃんは振り向かないと積乱雲は見えません。

というわけでアイちゃんは、巡から目を離し、後ろの空を見ました。アイちゃんの瞳から解放され、巡はホッとため息をつきました。緊張してたぜ。

しかし今日はなんだか調子がいいです。アイちゃんは、巡が何かを指差したとしても、そちらを見ないことの方が多いのです。例えばボールを放つても、そのボールに目もくれず、ジーツと巡を見たりするので。しかし今日は振り向いた。もしかしたら今日は機嫌がいいのかもしれない。仲良くなるチャンス。そう思った巡は、一歩アイちゃんに近づきました。

ジャリ

「……」

巡が足を動かした。小さな小さなその音を。アイちゃんは聞き逃しませんでした。

アイちゃんはビクツとして、バツと振り返り。その瞳はさっきまでの無機質な瞳ではなく怯えた、言い方は悪いですが人間のような瞳で巡を見て、巡が声をかけるよりも早くブランコから飛び降り、逃げなきゃ殺される。そう言わんばかりの必死さで園内に向かい走りました。あまりにも急いでいて途中、足が纏もつれて転びました。しかし、服についた土埃を気にするよりも。転んだ痛みを気にするよりも。巡から逃げる方が大事。そう言わんばかりに、すぐに立ち上がり、また走り出しました。

「……………」

残されたのは、一人寂しく立ち尽くす巡と、なんか……すみません。というようにゆらゆら揺れるブランコ一台。

今度絶対。冰山つららに仲良くなるコツを聞きます！聞き出してやるですー！

巡は拳を握りしめ、そう決めました。

神様見習い春風巡。

アイちゃんとは会話は疎か挨拶すら返してもらったことはなく、半徑二メートル以内に近寄れたことも、あんまりない。

神様の道は長く険しい！

だけど決して諦めるな！

頑張れ巡！

負けるな巡！

輝く明日が待ってるといいね！

1 - 4 ・ 続。 くるみわり園の子供たち（後書き）

さえちゃんは、小学校入学前の子供たちのリーダーさん。きつとA型だね。

かなちゃんは、みんなをまとめる陰のリーダーさん。きつとO型だね。

けんちゃんは、サッカーが大好きな男の子。好きな女の子はさえちゃん。秘密だよ？

らんちゃんは、泣き虫な女の子。将来の夢は、お姫様だつて。

あかねちゃんは、大人になりたい女の子。早くお母さんとお父さんに会いたいな！。

アイちゃんは、不思議な女の子。ブランコが大好きな女の子。人が怖くて逃げちゃう女の子。本当のママとパパは、もういない。そんな女の子。

1・5・続々。くるみわり園の子供たち

「きゃー！ ビシヨビシヨだー！」「ビシヨビシヨだー！」

「二人とも！ 舌嚙むかもしれないから喋っちゃダメ！」

「はーいー！」「」

「いや、喋っちゃ……もういいや」

「だーっ！ もう！ そんなことより目的地はまだですかー！？」

「もうすぐだよ？」「だよー？」

「さっきもうすぐって言うてもう大分経ってる気がするんですけどね！」「」

「ピカツとした！」「カミナリだー！」

「……おい、子供」

「水無！ あれあれ！ あれがくるみわり園！」

「やっとかこんちくしょうめ……！！」「」

神無と水無は、月読ちゃんと命ちゃんを一度しっかり抱き抱え直し、豪雨の中、くるみわり園に向けラストスパートをかけました。

なぜこんな状況になっているのか簡単に説明します。

水無と神無は月読ちゃんと命ちゃんの二人をくるみわり園に送っていくことになった。

途中、雷が鳴り、雲行きも怪しくなり、四人は急ぐことにした。

「みこと歩くの疲れたー」になった。神無は抱き抱えて進むことにした。「僕も僕もー」になった。水無は抱き抱えて進むはめになった。

豪雨に襲われた。神無は折りたたみを所持していたが折りたたみごときが防げる勢いではない。神無と水無は雨宿りをしようとした。しかし月読と命は「もうすぐだから走るー!」「走るー!」と言いました。走るの神無と水無だけだ。

その結果、5分間程度。神無と水無は雨に濡れながら重労働でしたとさ。

「……神無」

「……なに」

二人はくるみわり園の玄関で息を整えながら会話をしている。



「私……着いた直後に……雨止んだら……とりあえず……キレル……  
…そう決めてた」

「そっか……よかった……雨、ザーザーで……」

雨は止む気配はありません。ゲリラのくせに居座る気のようにです。カミナリも鳴ってるし、まだまだこれからが本番だぜ。という感じ  
です。

「「ただいまー！」」

月読ちゃんと命ちゃんは元気よくただいまの挨拶をしました。  
神無と水無が精魂使い果たした。という感じなのとは対象的に、月  
読ちゃんと命ちゃんは元気いっぱいです。雨に濡れてもなんのその。  
テンションが下がるわけもなく。逆に雨に濡れてテンション上がっ  
てるようです。子供は雨の子、元気の子。

月読ちゃんと命ちゃんの挨拶に反応したのか、まあ反応したんだろ  
うけど、玄関から左方向、まあつまり食堂から、誰かが、まあぶっ  
ちやけ巡が、ドタバタバターとやってきました。

「こら！ 月読命！ ツクヨミノミコト お前らはまた勝手………に………なんでお前  
らどっしたですか？」

巡は月読ちゃんと命ちゃんを怒ろうとしたんだけど、どぶねずみの  
ような神無と水無を見てビックリして、どうしてここにいるんです  
かと何があっただんですかを同時に聞いてしまいました。

「……とりあえず、タオルくんない？」

水無がそう言いました。  
神無も横で頷きました。

「僕も欲しいー」「みこともみこともー」

月読ちゃんと命ちゃんもおねだりです。

「……話はあとで聞くですよ」

巡はそう言つて、園内の奥に走って行きました。脱衣所にタオルを取りに行つたようです。

そして、巡がいなくなつたのを見計らつたように、食堂から子供たちがぞろぞろ現れました。

「つくよちゃんにみこちゃんお帰りー」「大丈夫だった？」「カミナリ落ちた？」「ビショビショだね。かぜ引くよ？」「ねー、どうだったー？」

子供たち、さえちゃん、かなちゃん、けんちゃん、らんちゃん、はなちゃん、月読ちゃんと命ちゃんに近寄り話しかけます。

「ただいま！ 大丈夫だったよ！」「カミナリ落ちてたよ！ ゴロゴロドツカーンだった！ 雨はバチバチバチバチーだったよ！」「うん！ すっごかった！ それでビショビショになっちゃった！ 寒いー！」「あのねあのね。雨降つたからね。みこととつくよちゃん抱っこしたまま、神無お姉ちゃんたち走つたんだよ！ すっごい楽しかった！」「うん！ すっごい揺れてね！ すっごい速くてね！ 雨もバーツでね！ カミナリピカピカーでね！ すっごい楽しかった！」

月読ちゃんと命ちゃんは、笑顔で今日の冒険(?)を語りました。子供たちは、へー、凄いなー。やっぱり凄いなー。みたいな言葉を口にした後、月読ちゃんと命ちゃんの後ろで、ぐてーっとなつ立っている神無と水無に視線を移しました。

まずは神無について子供たちはゴニヨゴニヨ話し合い始めまして。

「あのお姉ちゃんこの前来てたお姉ちゃんだ」「うん。命ちゃんとあかねちゃんと遊んでた」「ボール投げるのうまかった」「あたしとも遊んでくれるかな……」「優しそうなお姉ちゃんだねー。みことちゃん。あのお姉ちゃん優しいー?」「うん。神無お姉ちゃんすっごい優しいよ」「うん。それに神無姉ちゃん、色々知ってておもしろいよ」

ゴニヨゴニヨと小声で話し合う子供たち。内緒話のつもりだろうけど、丸聞こえである。

「こんにちわー」

神無はとりあえず、笑顔で、疲れた笑顔だったけど笑顔で、手を振って挨拶しておきました。

「こんにちわ!」「こんにちわ」「こんにちわ!」「こ、こんにちわ?」「こんにちわー」「こんにちわ!」「こんにちわー!」

なぜか月読ちゃんと命ちゃんも挨拶を返しました。子供たちはとりあえず、あのお姉ちゃんは優しそう。という結論に達し、次に水無について話し合うことにしました。

「あのお姉ちゃん、私知らない」「私も知らない」「髪の毛茶色い

ぞ」「外国の人かな」「かつこいいいな」「かつこいいいかな?」「私はきれいだと思う」「もしかしてスーパーサイヤ人もしんない」「あ、あたしはちよつと怖いかも……」「かつこよくてきれいな姉ちゃん? みことちゃん。あのお姉ちゃんかつこよくてきれいなー?」「うん。水無お姉ちゃんはね。なんかかつこいいよ」「うん。水無姉ちゃんはね。なんかかつこいい」「かつこいい?」「かつこいい?」「かつこいい?」「かつこいい?」「かつこいい?」「かつこいい?」「かつこいい?」「かつこいい?」「かつこいい?」「かつこいい?」

「……………」

子供たちは水無を見ながら、かつこいい? と口々に言います。水無は、反論する気力もないのか、それとも喋るのが面倒なのか、何も言わず、フラフラと手だけ振りました。

「お待ちせしたですよー」

子供たちがとりあえず、あのお姉ちゃんは綺麗というよりかつこいい。という結論に達したとき、巡が奥から大量のタオルを持って現れました。

「……………どうして、こつなつたのかな」

水無はテーブルに突っ伏しながら、そう、呟いた。

「……水無が、月読ちゃんを泣かしたからじゃないかな」

神無は両手で頬杖つきながら、そう、呟いた。

「……………私のせいなわけ？」

「……………いや、水無のせいじゃないよ。誰のせいでもないけど……………強いていうなら……………あのシスターさんのせい」

「……………はあ」

二人は、食堂の隅っこで座っている二人は、食堂の隅っこで憂鬱な気分です座っている二人は、食堂の隅っこで憂鬱な気分です修道服を着て座っている二人は、同時にため息をつきました。

二人が憂鬱になっている最も大きな原因は、当然修道服です。シスターでもないのにこの服を着るとするのは憂鬱以外の何物でもありません。違和感バリバリ。慣れない服は着てるだけで疲れる。なんで二人が修道服を着ているのかテキトーに説明します。

服が乾くまでの間はこれ着とけてシスターさんに言われたから。

それが全てです。それが原因の終着地点です。ですが、味気ないのもう少し詳しく説明しましょうね。

タオルをもらって髪や服を拭いた四人。しかし服はビショビショです。そこで巡は、乾燥機で乾かすとよかです。と提案しました。まあ確かに乾かした方がよかですよ。と神無と水無は思いましたが、服ねえよ。ということになります。巡は、大丈夫けん。服ぐら

い貸してやるけん。と自信満々に言ったので、二人はジャージとか貸してくれるわけやね。ありがたいね。と思いました。月読ちゃんと命ちゃんは着替えるために自分たちの部屋に。巡は、神無と水無を事務室のような部屋に連れて行き、そこにいたシスターさんに事情を話した後、あの二人説教しちやる。と意気込み、月読ちゃんと命ちゃんの部屋に向かいました。

物静かそうなシスターさんは、「ではこちらに」と言って二人を脱衣所的な何かに連れて行きました。そこには洗濯機が二つ乾燥機が二つ洗面台が三つくらいあって、奥は五人くらいは一度に入れるくらいのお風呂に続いていました。

外見年齢二十代後半のシスターさんは「これを使って下さい。体が冷えてると思います、シャワーなどはないので、ご了承下さい」と言って、着替えを取りに行きました。二人は服を脱いで乾燥機に服を入れて乾燥機のスイッチをオンしました。そしてたちょうどシスターさんが戻ってきました。その手には修道服。律儀にベールまです。

シスターさんは「どうぞ」となんでもないように言いましたが、二人は、いやいや。ちよつと待て。それはなくないか。それは神聖な服じゃないのか。私たちシスターでもなんでもねえし。それになんか恥ずかしいし。なんか恥ずかしいし。なんか恥ずかしいし。だから申し訳ないけど他の服くれ。と言いました。

しかし物静かな雰囲気を纏まとう外見年齢二十代後半のシスターさんは「無理です。これしかありません。これ以外ありません。これを着るしかないです。とうか着る。着なさい。着て。着てみて。着るよ。う。お願い。似合うから。絶対に似合うから。本当に似合うから。間違いないから。お願い。本当にお願い。これ私の手づくりだから着心地抜群だから。着てみればわかるから。ほら。触ってみて。いいでしょこれ。着たくなつたでしょ。なるでしょ。ほら。私を困らせないで。早く着て。早く早く。風邪ひくわよ？ これ。暖かいから。ほら。早く早く。一度着れば病み付きだから。ほら。早く受け

取って。そして着てください」と血走った目で二人に迫ったのでした。二人はそれに屈したのでした。シスターさんは「私の目に狂いはなかった」と言って二人の写真を撮ったのでした。この人、修道服着てるけどシスターさんじゃないかもしれない。と、二人は思ったのでした。

そしてたっぷり写真を撮ったシスター（仮）さんは「雨が止むまで食堂でおくつろぎください。その服を着てくれただけで私は嬉しいですが、子供たちと遊んでいただけたらなお嬉しいですよ」と言って去って行きました。その顔には一仕事を終えた満足感が滲み出ていました。神無と水無の顔はその顔に反比例した顔でした。

二人はフラフラとした足取りで、食堂に向かいました。その姿は、子供たちが声をかけるのを躊躇ためらうくらい、疲れ果てていました。

というわけで、明らかに出る作品が違う気がするシスターさんのせいで、神無と水無は修道服を着るはめになり、憂鬱な気分になっていたのです。

「雨やばいね。これ、やまないかも」

「いざとなったら傘借りて走って帰るしかない……」

「服は……まあ、あと30分くらいで乾くよね」

「つまり私たちが帰れる時間は早くても、17時30分……家到着

推定時間18時過ぎ……雨より火無の機嫌がやばい」

「」愁傷様……」

神無と水無は窓の外を見て、そんな会話をしました。

なんやかんややって結構時間が経った気がするけど、雨は全くやみそうもありません。逆に雨足は強くなっている気もします。屋根と窓を雨が打つ音が激しくなっている気がします。カミナリもたまに鳴っています。今日のゲリラはやる気満々です。

「春風さん、戻ってこないね」

「あの悪ガキもどきたちをこっぴどみっちりしぼってんでしょ」

水無はベールを指でくるくる回しながら、呆れたようにそう言いました。

食堂には十人くらいの子供たちがいますが、巡と月読と命の三人の姿はありません。

子供たちは、勉強をしたり遊んだりしています。

さつきから、子供たちはこちらをチラチラ見えています。気になるようです。あんなシスターさんいたかな？あの二人はシスターさんだったのかな？

「やつほー」

神無はさつき玄関で会った子供たちの一人と目が合ったので、手を振りました。水無は手を振る神無をじと目で見ながら、また神無は面倒事を引き寄せて。と思いました。



目が合った子、つまりさえちゃんは手を振り返して、こっちに近づいてきました。神無が手を振ったことによりさえちゃんの警戒心が薄れたのです。

他の子もさえちゃんに続いて近寄ってきました。

「こんにちわー。お姉ちゃんたちはどうして先生たちの服着てるの？」

みんなを代表して、さえちゃんが二人に尋ねます。

「服が濡れちゃったから、乾くまでこの服借りてるんだよー」

二人を代表して、神無が質問に答えます。水無は、私は無関係ですよー。というように、ベールをくるくる回しながら外を見えています。

「みんなは何してたのかな？」

今度は神無が子供たちに質問です。

「私たちは遊んだの！」「おはじきしてたの！」「弾いて遊んだ！」「あたしうまくできない……」「わたしもすぐ落としちゃうの！」「僕たちは一緒に宿題してたんだよ」「学校の宿題なの」「九九難しいんだよ」「うん。七の段がむずいんだよ」

子供たちはみんなで答えました。

「確かに七の段はむずいよね……ところで、職員さんがあんまりいないけど、みんなどこにいるの？」

神無が見かけた職員さんは、あのシスター（仮）さんだけです。巡の話だと、いつもは五人くらいいるということでしたが。

「今日はお祭りがあるからそっちに行ってるんだよー」「うん。七夕だもんねー」「でも危ないから中学年以上じゃないと行けないんだよ」「うん。ヤンキーが出るんだって」「だから早くに行くんだよー」「僕も行きたかったのにー」「ななも行きたかったー」「行きたかったー」「行きたかったー」

とのことである。どうやら、七夕祭りがあるらしく、その引率に行っているので、シスター（仮）さんしかいないようだ。それを知っていたから、今日巡は手伝いに来たのかもしれない。

「なるほどねー……」

「……」

神無と水無は、あの人が引率に行かなかった理由をなんとなく考えてしまいました。

「ねえねえお姉ちゃん。私たちと遊ぼうよー」

さえちゃんが神無を誘いました。

「そうだね……ん。そういえば、あかねちゃんとアイちゃんはいいの？」

まあ時間もあるし遊ぼうかな。と、神無は思いましたが、そこでふと。あかねちゃんとアイちゃんの姿がないことに気付きました。

「あかちゃんは本を読んでもらうなんて子供っぽいからヤダって言うってお部屋に行っちゃったよ」「あかねちゃん本当は本読んでもらうの好きなのにね」「あかねは意地っ張りなんだよな」「アイちゃんは……お部屋かな?」「アイちゃんよくわかんないよね」「それより遊ぼうよ」「おはじきやるうよ」「べいごまもあるよ?」

子供たちは神無を引つ張ります。

「水無はどうする?」

神無は席を立ち上がりながら、聞きます。

それに対して水無はペールを振って、いつてらっしやいの合図。

神無は苦笑しつつ、「あんまり引つ張らないで。伸びちゃっから」と言いながら、子供たちに連れて行かれました。

「……………」

残ったのは水無と、勉強をしていた小学生低学年組、たっちゃん、なっちゃん、みっちゃん、かっちゃんの四人です。

「お姉ちゃんは遊ばないの?」

たっちゃんが尋ねます。

「お姉ちゃんは遊ばないの」

水無はそう言って、立ち上がりました。

「どこ行くの?」「帰るの?」「教会行くの?」「僕たちの勉強

見てくれるの？」

「帰らないし教会にも行きません。暇だから、ちょっと探検してくるの。じゃあね」

子供と遊ぶのは好きくないのです。しかし暇なのです。

「僕も行くー！」 「ななも行くー！」 「私も行くー！」 「僕も僕もー！」

子供たちは探検が大好きです。

「ダメダメ。君達は勉強してなさい」

水無はそんな子供たちにそう言って、持っていたベールをなつちゃん頭の頭にポンとのせ、あばよ。という感じでひらひらと手を振りながら、食堂から立ち去りました。

子供たちは、ポカーンと水無を見送りました。

「……探検ってどこ行くのかな。お宝を捜すのかな」「……」「……」「……」  
「強終わったらさがしにいこうよ」「なつちゃんどうしたの？」

なつちゃんは頭にのっけられたベールを握りしめながら、水無が去っていった方をポーツと見ています。そしてポツリとこう呟きました。

「……かっこいいー」

「」「！？」」「」

たっちゃん、みっちゃん、かつちゃんは、恋する乙女オーラ全開の  
なっちゃんの眩きに、どよめきました。

1・5・続々。くるみわり園の子供たち（後書き）

水無の何がかっこいいのかは、企業秘密レベルだよ。

はなちゃんは、のんびり屋さん。みんなのマスコットの存在なんだから。

たっちゃんは、サッカー大好き二年生。低学年組のリーダーさん。なっちゃんは、ななっというんだ本当はね。だけどみんななっちゃんって呼ぶんだよ。不思議だね。なっちゃん。

みっちゃんは、みかんっというんだ本当はね。みかんと一緒に捨てられてたからみかんっというんだよ。不思議だね。みっちゃん。かっちゃんは、たっちゃんと仲良しさん。たっちゃんとけんちゃんと一緒にサッカーやるのが大好きだよ。

まあ、誰が誰かなんて、あんまり意味ないけどね。特にたっちゃんとかっちゃんは違いがわからん。

## 1 - 6 ・水無のくるみわり探検

「あーるーきーづーらーいーっと」

子供の世話という精神的体力的にも疲れる行為から見事逃げ出した水無は、慣れない服装とスリッパに文句を言いつつ、園内を歩いていた。

探検中である。

こういう施設には初めてきたので興味がなくもないし、おそらく、というか絶対二度と来ることもないだろうか、ちょうどいい機会とどうか暇なので、施設内を探検しようということである。

食堂を出ると玄関。学校の職員玄関を彷彿とさせる玄関である。床も学校みたいな床なのでここは学校かもしれないと思ってしまうほどだ。ここを左に曲がると脱衣所なので、水無はとりあえず前進。事務室的な何かとお手洗い（トイレも学校みたいだった）を通り過ぎると、扉がいつぱい並んでいた。おそらく子供たちの部屋だろう。扉の横に病室にありそうなプレート、名前が書かれているからネームプレート、を入れることが出来るあれが設置されているのでまず間違いはない。

「……………」

開けるのはまずいよな。

と思い、ぶらぶら突き当たりまで歩くことにする水無。二階に続く階段をまだ見ていないので、おそらくこの突き当たりにあるのではなからうか。

「……………」

途中『ひゅうがつくよみ』『ひゅうがみこと』と書かれているネームプレートがある部屋を見つけた。扉に耳を近づけてみる。雨の音がうるさくよく聞こえないが、うん。怒っているような声が聞こえなくもない。まだ怒ってんのかよ。

開けて見ようかとも思ったが、とりあえずスルーして進む。

「……………やまない、かな。これは」

突き当たりに辿りついててもそこには階段はなく、まだ通路が続いていた。先ほどまでの通路には扉が壁の両側にあり、扉に挟まれるているような通路だったが、今度の通路は窓がある。ので、片側にしか扉がない。窓の向こうは雨ばかり。やむ気配なし。これはやばいな！。

そう思いつつ通路を進むと、二部屋過ぎたところで階段があった。階段の向こうにはまだ扉が二つ。そして突き当たりには外に続いていそうな扉が。

「三部屋と四部屋……………それに二部屋で、計九部屋」

先ほどの通路には合計七つ扉があった。そしてこの通路には計四つあったわけだが、ネームプレートがあったのは階段の手前側の二つの扉。階段の奥の扉にはプレートを入れるものがなかったので、おそらく物置だろう。試しに開けて見ると、一つの部屋には布団やらの室内品が、もう一つの部屋には草刈り道具など園芸品が置いてあった。やはり物置のようだ。

「……………ふむ」



確か二階は中学生の部屋って神無が前言ってたかな。そういえば、二人部屋と三人部屋があるって言ってたから、もしかしたら三人部屋が二部屋で、あとの七部屋が二人部屋なのかも。あとでネームプレート確認してみよ。

そんな感じで結構ノリノリに探検している水無は、階段を上って二階に。

二階の通路も一階と同様折曲がっていた。一階の物置があった部屋の上には同様に物置が二部屋あるようだ。三人部屋と思われる部屋の上にも同様に二部屋。ネームプレートは一つ。聞いていた通り中学生は一人部屋のようだ。

通路を曲がると、一階とは違いこちらの通路も窓と扉が並んでいた。部屋数は計三つ。一階のお手洗いと同じ位置に個室のお手洗い。そして突き当たりには外に出れそうな扉。試しに開けて見た。

「うわー……………」

ベランダだった。食堂の上がベランダになっているようだ。なかなかいい眺め。南側なので、日当たりは抜群のはず。洗濯物を干すのだろう。物干し竿がある。今は雨が降っているし、水溜まりが出来ているので、足を踏み入れたくないが、晴れていたらひなたぼっこしたくなるような場所だ。

「何してるんですか？」

水無がそんなことを思っていると、後ろから声をかけられた。正直驚いた。ビクツとした。別に悪いことはしてないけど。いや、勝手に歩き回るのは悪いことといえは悪いことか？ と思いつつ、ゆっくり扉を閉め、ゆっくり振り返る。

そこには、中学生らしき少女が立っていた。おそらく何かの用事で

部屋から出てきたところ、水無を見つけ声をかけた。というところだろう。眼鏡をかけていて人を寄せつけない空気を纏まとっている。教室の隅で一人でいるというよりは、教室の真ん中で一人座ってそう。雰囲気は舞歌に似てなくもないか。水無はそう思った。

「あー、どうもこんにちわ」

水無は愛想笑いを浮かべる。

「だれですか？ 不審者ですか？ あなたみたいな人いましたか？  
警察呼びますか？ それとも自首しますか？」

水無の挨拶愛想笑いを気にせず少女は矢継ぎ早に尋ねてくる。警戒心バリバリだぜ。

「不審者じゃないですはい。えーっと、説明するの大変なんで簡単に言いますと、許可をもらって雨宿りさせてもらってます。なんかすみません」

なんだか怒り気味の少女にへこへこ頭を下げる水無。あれ？ 私なんで頭下げてんの？ 悪いことしてないのに。という感じである。

「そうなんですか？ なら私は気にしないべきですか？」

睨まれながら疑問文で聞かれるというのは、違和感バリバリだぜ。

「……あー、気にしないべき、です」

いや、私に聞かれても。と水無は思った。

「そうですねか？　じゃあさよならしますか？　またいつか会い  
ますか？」

「……………会いません」

「そうですねか？」

少女はそう言って、階段の方に歩いていきました。最初から最後ま  
で疑問文の少女でした。

「なんなんですか……………」

水無は、無駄に緊張し無駄に疲れ、肩をガツクリと落としました。

窓の外では雷が鳴っていました。

「……………自家栽培」

さて。

水無は思わぬ出会いがあった二階から一階に戻ってきました。  
先ほどは開けなかつた外に続く扉を開けて見ると、そこは畑があり  
ました。トマトとかナスとか。お花畑もあります。

「やっつと……………」

扉を閉め、一通り園内を回った水無はこれからどうするか考えながら歩き出しました。食堂に戻るか、あの部屋を覗いて見るか。まあ、食堂に戻るのが妥当な線だよな。水無が考え始めすぐにその結論に達したとき。

「わっ」

水無がビククリするくらいの轟音が鳴りました。雷です。近くに落ちたのでしょうか。外がピカッと光ったすぐに音が鳴りました。驚きました。

「やばいなこれ……」

窓から外を眺めながら水無はそう呟きました。雨は弱まるどころか強まっています。雷も頻繁に鳴っています。これは傘ではなくカッパを借りなければならぬかもしれないかもしれません。というか出来ることならやむまでずっといたい。やまなかつたら泊まっていきたい。水無がそう思うほどの雨です。

と。また大きな雷が落ちました。そして。

「ん………停電か」

通路の電気が消えました。まだ日が落ちる時間ではありませんが、外がこの有様。電気が点いていないと園内はほの暗いです。まあすぐまた点くだろう。水無はそう思いました。と。

ドスン！

「……………」

物音。というより何か落ちた音がしました。水無は後ろを見ました。後ろには扉が一つ。音はこの扉の向こうから聞こえた気がしません。階段のすぐ横の三人部屋です。

物音は一度きりでした。今は扉の向こうからは何の音もしません。聞こえるのは雨の音と遠くに聞こえる雷の音、それとどこかの扉を開ける音。誰かが走っている音だけです。

「……………」

さっきの音の大きさはちょっと水無が心配になるくらい、大きな音でした。そうまるで。三段ベットの一番上から降りようとしてたら停電になりビククリして落ちた。そんな時に鳴りそうな、大きな音でした。

水無はネームプレートを確認します。この部屋が使われていなければ、さっきの音は気のせいで処理出来ます。

しかし残念ながらネームプレートはありません。三人部屋なのにネームプレートは一つだけ。一番上にだけプレートが入っておりその下二つには何も入っていない。

「入ってますか……………」

小声でそう言いながら、水無は扉をノックしてみた。反応なし。部屋にいないからか。はたまた部屋にいるけど返事が出来ない状態なのか。

「……………」

水無はドアノブを掴み回す。入ることにしました。中で誰か倒れてたら困るしね。鍵はかかっていないようで、ドアノブは簡単に回り、

水無は扉を開けることが出来ました。

「あれ？ 誰も……いない？」

部屋の中には誰もいませんでした。部屋には三段ベットが一つ。そして勉強机が三つ。勉強机の横には立方体のカラーボックスが二つ、長方形の大きめのカラーボックスが一つずつ置いてあります。が、とりあえず人影がありませんでした。というよりこの部屋に、人が住んでいるのかも怪しいです。三つの勉強机のどの上にも何も置かれていませんし、入口から見える範囲のカラーボックスには何も入ってません。三段ベットの一段目と二段目には、布団もシーツもなく、使用しているようには見えません。

「……」

水無は部屋に足を踏み入れました。さっきの音は気のせいとは思えないし、幽霊にしてはちょっと大きな音過ぎる。ということはここには誰かがいるはずだ。絶対いる。間違いなくいる。しかし幽霊はいない。うん。誰かはいる。しかし幽霊はいない。そうさ。私の部屋に自縛霊なんていないんだー！と水無は考え、もう少し部屋の中を探索することにしたのです。

まずは三段ベットの一番上を覗いてみることにしました。一段目と二段目はシーツすらありませんでしたが、三段目にはシーツが敷いてあるのが水無には見えたのです。水無はハシゴを上り三段目を覗きました。

三段目はやはり使用している痕跡がありました。シーツに布団に目覚まし時計。やはりここには人が住んでいるんだ。という核心を得た水無は「もしもーし」と声をかけました。なぜなら布団は少し膨らんでいるように見えたのです。しかし布団からは何の反応もあり

ません。水無が、はて。私の勘違いか。いや、でもこの膨らみは子供だろ。寝てるのか。それとも頭ぶつけて気を失ってるのか。いや、それはありえないか。もう面倒だ。その布団引きはがし、お前の化けの皮を剥がしてやるぜ！ と、思ったかはさだかではありませんが、水無はハシゴから片手を離し、布団を引っぱりました。

「いつ！ つ！ ったあ……！」

いつ！ で驚き。つ！ でハシゴから落ち。ったあ……！ がお尻を打って苦しむ姿。

布団の膨らみの正体は、枕と日本人形でした。日本人形にビビった水無はハシゴから落ちたというわけです。

なんで布団の中に枕と日本人形があんだよ……からかってんのか？  
水無は心の中で毒づきながら立ち上がった。

そしてグルツと首を回し一番奥の机を見る。

人が入るとしたそこしかない。というかいる。間違いない。ハシゴから落ちた時目があつた気がする。見てやがった。気のせいだったら怒る。誰かに怒る。誰にでも怒る。

水無は滑るように一番奥の机まで移動。椅子をどかし机の下を確認。小動物みたいな子供がいるのを発見。

「みーつけた」

水無は、当初は心配になってこの部屋に入ったのに今は大人をからかった子供を叱る気満々の水無は、ニヤリと笑いました。

「ビツ……」

机の下に隠れていた子供は、椅子に座ってうたた寝してたら雷の音で起きて夢うつつだったところで急に電気が消えてビツクリして椅子が倒れて頭打って痛い痛いだったところで部屋がノックされてビツクリしてとりあえず机の下に隠れていた三人部屋を一人で使っている子供、すなわちアイちゃんは、恐怖でビクツと体を震わせました。



1 - 6 ・水無のくるみわり探検（後書き）

行き着く先が見えないわー。アイちゃんにするかあかねちゃんにするか最後まで悩んだ。うん。悩んだ。その結果水無が落ちた。不思議だね。

くるみわり園の中をなんでこんなに詳しく説明しているか自分でもわからない。大学は一切説明なしなのに不思議だね。

不思議がいっぱいだね。

## 1・7・一方その頃食堂では

「神無姉ちゃんーん!」「あー!らんちゃんいいなー!」

「あ。月読ちゃんと命ちゃん。遅かったね。春風さんにいっぱい怒られちゃった?」

停電してしばらく経ってから、食堂で子供たちとあや取りで遊んでいる神無の元に、月読ちゃんと命ちゃんと巡が来ました。ちなみに神無の膝の上ではらんちゃんが座りながらあや取りしていました。命ちゃんに指摘されてらんちゃんは恥ずかしそうに、俯いてしまいました。しかしおりようとはしない。

「うん。僕いっぱい怒られちゃった!」

「みこともいっぱい怒られて、しくしくなの!」

反省の色なし。二人の後ろで巡が腰に手を当て嘆息。神無は、春風さんも大変だなあ。と思いき笑い。

「ねえねえ。神無姉ちゃんどうして先生の服着てるの?」

「神無お姉ちゃん先生になったの?ここに住んでくれるの?」

二人は神無の修道服に興味を持ちました。神無はようやく慣れ始めた、というより服のことを忘れていたのに、二人の言葉で思い出してしまいました。ちなみに神無は律儀にベールもしていません。まじめー。

「うっん。違うよ。これは服が乾くまで借りてるんだよ。優しい優しいシスターさんがね。貸してくれたんだよ?」

神無は笑みを浮かべながら二人に説明しました。二人は、そっかあ。残念だなあと思いました。

そして巡は神無から目を逸らしました。なぜなら神無が一瞬、巡と目が合ったとき、睨んだからです。巡は初めて神無に睨まれた気がします。怖かった。そんなに怒るとは思わなかった。あの人に任せたらそうなるかもしれないとは思ってたけど、そんなに嫌なのか修道服。私は嫌じゃないけど。でも着ないけど。だって私は神に仕える側ではなく神そのものですからー! と、思ったりすることにより精神の安定を巡は試みる。

巡が試みている間に現状説明。

まだ停電中。巡は停電を機にお説教をやめ、みんながいるだろう食堂に月読ちゃんと命ちゃんを連れ移動。現在の食堂はほの暗い水の底ぐらいの明るさである。そんな感じね。

精神を安定することに成功した巡が、ロウソクを使うかどうか悩んでいると、シスター（仮）さんと疑問少女が食堂に入ってきた。手にはロウソクではなく、アロマキャンドルを持っている。小学生低学年のなっちゃん以外が二人の側に寄って行った。なっちゃんはベール掴んでボケーっとしてしている。たまに匂いとか嗅いでる。あの子の将来が心配である。シスター（仮）さんと疑問少女は子供を引き連れアロマキャンドルをつけ始めた。

手伝わなくても大丈夫そうだと、巡は思い、幼児組に視線を戻す。

「ん。あかねも来ていたですか?」

自分が本を読んでいた時はいなかったあかねちゃんに気付きました。

あかねちゃんは神無の後ろにいたから先ほどは気付きませんでした。

「……一人でいてもつまないから来ただけ。何かもんくある？」

あかねちゃんは巡に見つかり、罰が悪そうな顔を少ししましたが、すぐにツンとしました。

「嘘だー。あーちゃんはカミナリがこわくて一人はいやだから来たんだよー」

はなちゃんがサラッと真実を暴露しました。

「ち、ちがう！ わたしは別にカミナリなんてこわくないもん！

あと、あーちゃん言うな！」

「でもあかちゃん、カミナリ鳴るたびに神無さんの服つかんでるよ。こわいからつかんでるんでしょー」

さえちゃんが笑いながら証拠を提示しました。

「ち、ちがうもん！ わ、わたし別にカミナリなんか、こ、こわくない！ 服つかんだのは、その、あの、えっと、だから……こわいとかじゃなくて……わたし、子供じゃないもん……」

あかねちゃん、しくしく。

みんな、あたふた。

巡は、ため息。

神無はあや取りしながら器用に、頭撫で撫で。

「こら二人とも。あかねを泣かすなです。謝るですよ」

「えー、でもー」

「私たちそんなにわるいこと言っていないよ。あかちゃんいつもそつくんだもん」

私たちそんなに悪いこと言っていないよねー。って感じですよ。

「はあ……お前ら。いいから」

巡が、いいから謝りなさいです。と言おうとした時。外がパツと明るくなって。

ドンガラガツシャーン!!!

という感じの鈍くて重い音が鳴りました。だいが近くにカミナリが落ちたようです。

子供たちは悲鳴をあげました。

月読ちゃんと命ちゃんとかなちゃんは巡にくつつきました。巡はしやがんで三人を頭をぎゅつとします。正直巡も怖かった。さすが神鳴り。神様もビビりました。

さえちゃんとあかねちゃんとらんちゃんは神無にくつつきました。

神無はらんちゃんをギューと抱きしめました。

けんちゃんはさえちゃんにくつつきました。さえちゃんに嫌がられました。シヨックでした。

はなちゃんは一人怖がらず、スゴイと思いい外を見ていました。

「今のカミナリは私も怖かったよ。大人でも怖かったよ。別にカミナリ怖くても恥ずかしくないよね？」

神無は囁くようにそう言いました。さえちゃんたらんちゃん、そしてあかねちゃんは、恥ずかしくないです。怖いです。もう強がりません。というようにコクコク頷きました。

聞こえていた子供のうち、はなちゃんだけが、そうかなー。別に怖くないけどなー。というように首を傾げました。

はなちゃん。末恐ろしい子。

1・7・一方その頃食堂では（後書き）

こ、子供たちの名前をテキストにつけた結果誰が誰で何が何かかわからなくなつた……。

かなちゃんつてだれ？そんな子いた？つて感じ。

困つたもんですね

1 - 8 . 『I』の世界(前書き)

O  
r  
z



時は戻ってここから始め。

「みーつけた」

水無は、ニヤリと笑いました。

「ヒッ……」

アイちゃんは、恐怖でビクツと体を震わせました。そして、机の下から這い出し、逃げようと思いました。

「こら待て。逃がすと思ったか悪ガキめ」

水無は、四つん這いで逃げるアイちゃんの襟を掴んで捕まえました。アイちゃんは首が絞まって、ぐえっとなりました。

その隙に水無はアイちゃんの脇に手を入れ、えい、で持ち上げ、やー、でクルツと回してこつちを向かせ、とー、で正座させました。や両手を掴まれ逃げれないと悟り、アイちゃん涙目。

「さておチビちゃん。私が怒っているのがわかるかな？」

水無は怖い笑顔です。

アイちゃんを首をブンブンと横に振りましました。

「わからないのか。じゃあ教えてあげようおチビちゃん。私は、怒っているんだよ?」

水無、ニコツ。アイちゃん、ヒツ。

「どうして私が怒っているか、わかるかな?」

アイちゃんは涙目で首を横に振りました。わかるわけがない。水無も冷静になれば、こんなに怯えている子がいたはずするわけがないということに気付くだろうに。そんなに人形が怖かったのかな? そんなにお尻痛かったのかな?

「おチビちゃんが私を驚かしたから怒っているんですよ! 痛かったです! スツゴい痛かったんだから! とうか、なんなんだあの人形は! おかつぱ頭に真つ赤な着物! 市松人形か!?」

水無は、理不尽な理由で怒った。水無自身も『市松人形か!?』と怒鳴ったあと、市松人形かって、どんな怒り方だ? ん? そもそもなんで私こんなに怒ってんだ?と自問自答。

「?」

怒鳴られたアイちゃんは涙目で、キョトンとなった。怯えの色が消え、頭の上にハテナマークが浮いた。ちんぷんかんぷん。

「……………」

自問自答してたら冷静さを取り戻した水無。アイちゃんを見る。こんなデコピンしたら死んじゃいそうな子が、私をおびき寄せて驚か

す。そんな策士みたいなことしなくない？ 私が落ちるとこ見て笑うとかありえなくない？

「……あー、私の勘違い？ 私、自分のミスをおチビちゃんに押し付けちゃった？」

水無は首を傾げながらアイちゃんの意見を聞いてみる。

「？」

アイちゃんも首を傾げる。水無が何を言っているかよくわかんないようだ。

「……」

ふと。アイちゃんは水無から目を離し、自分の手を掴んでいる水無の手を見ました。

もうすっかり怒りが収まり、逆に子供に理不尽に怒ってしまった恥ずかしさに襲われていた水無は、アイちゃんのその視線から、手を離して欲しいんだなと読み取り、手を離してあげました。

アイちゃんは手を離しても逃げませんでした。小さい手で目をグジグジと擦って、涙目から普通の目に。そして、無機質な瞳に。その瞬間、部屋が変わった。部屋の主が変われば部屋の空気も変わるのはある意味、当然のことだが、ここまで顕著に空気が変わるのとは異様でしかない。アイちゃんは、水無をじーっと観察するように見始める。

「な、なんだ………な、なんですか？」

水無がついつい敬語になってしまいう不気味さが、今のアイちゃんに

はあった。急に人が変わったかのような顕著な変化ではない。そういう変化なら、水無は火無で慣れてる。ある意味慣れてるからこそ、水無はアイちゃんの変化の不気味さを巡よりも感じとったのかもしれない。

人が変わったような不気味さではない。人が人形になったような、ありえない不気味さが、今のアイちゃんからは漂っていた。

「……………」

アイちゃんはただじーっと水無を見る。水無はただじーっと見られている。

無機質な瞳に釘付けにされたように動けない喋れない目を逸らせない。

『アイ』に吸い込まれるように、無機質な瞳に吸い込まれるように、この部屋に吸い込まれるように、『私』は何も、考えられない。

『私』に聞こえるのは雨が建物を打つ音だけでした。自分が呼吸している音も聞こえないほど、雨の音がうるさいのです。まるで自分の耳元で雨が降っているかのようです。ああ。もしかしたらこの部屋は外にあるのかもしれませんが。だからこんなにも雨の音が響くのです。きつとこの部屋の中は外なのでしょう。

そんな部屋だから、この子の呼吸音なんて聞こえるわけもありません。いいえ。この子が呼吸している音はきつとどこでも聞こえない

でしょう。

だってこの子は、最初から息をしていないんですもの。

それを理解したとき、部屋が外から戻ってきました。雨の音が遠くに聞こえたので、それを知ることが出来ました。しかしまだ、ここは最初にいた部屋ではありません。霧もやがかかったようなこの部屋は、酷く呼吸がしづらいです。ああきつと。この霧が雨の音を吸収しているでしょう。だから雨の音も霧がかかったように聞こえるのです。

つまりこの部屋で呼吸をするということは、雨の音を吸い込むということになります。それは困りました。雨の音を吸い込むなんてしたことはありませんので、やり方がわかりません。やり方がわからないと呼吸が出来ません。

このまま呼吸が出来なければ『私』は死んでしまうでしょう。ではどうすればいいんでしょうか。呼吸が出来ないのは酷く苦しいです。ああなるほど。呼吸が出来ないこの部屋は、きつと水の中にあるんでしょう。どおりでほの暗い水の底のようだと思いました。

それを理解した時、霧はなくなりました。ああ。これで呼吸が出来る。しかしここは水の底。呼吸など出来ませんでした。雨の音は遠くに聞こえ呼吸も出来ない。先ほどの部屋とやら変わらねえ。『私』がこのままでは死んでしまうということも、変わりませぬ。ああ。どうしましょう。『私』はまだ死にたくはありません。しかしこのままでは死んでしまいます。どうかしなければ。

『私』は『アイ』を見ました。『アイ』は苦しそうではありません。恐怖していません。このままでは『私』は死ぬんだよ。『私』はそう教えてあげたかったです。水の中沈んだこの部屋では声を出すことさえままなりません。ああ。きつと『私』はこのまま死ぬのでしょう。こんな深い深い水の底。誰も『私』を助けてはくれ

ません。お父さんも。もう『私』を助けてはくれないでしょう。それにここは道路ではなく水の底。お父さんでも『私』を助けられません。ああ。息が苦しい。もう『私』の死は目の前のようです。『私』はただ、苦しむ『私』を見ているだけです。ああ。どうしてこんな簡単なことに気付かなかったのでしょうか。呼吸をしようとするから苦しいのです。『私』のように呼吸をしなければ、苦しくもなともない。ほら。苦しくない。呼吸を諦めれば、何にも苦しくないのです。

それを『私』が理解すると、『私』が手で何かを指しました。『私』は『私』が指すものを見ます。そこには『それ』がありました。『それ』は無機質な瞳で『私』を見ています。『私』は口を開きます。市松人形ってなに？ 『私』はその問いに答えようと窓の外がパツと明るくなって。

ドンガラガツシャーン!!!

という感じの鈍くて重い音が鳴りました。だいぶ近くにカミナリが落ちたようです。

水無の心臓は跳ね上がり、アイちゃんは座ったまま、物理的に跳びはねました。

心臓が跳ね上がった水無は吐き気を感じ、嗚咽をもらしながらうずくまり、物理的に跳びはねたアイちゃんは逃げるように部屋から飛び出しました。

「……………白昼夢？」

水無はアイちゃんが出ていった扉、開けっ放し、を呆然、という感じで見ながら呟いた。嫌な汗をかいた。白昼夢。だよな？ どこまでが現実だったのかわからない。何が現実かわからない。まだ水の底に、夢の中にいるみたい。停電はいつ直るんだ。私の日常はいつ戻ってくるんだ。

「……………なんなんだよー」

水無は、三段ベットのの上を、夢の中でアイちゃんが指していた場所を見て、嘆き、その場に倒れた。

もう、疲れたよ神無……………。私、眠くなってきた……………。

市松人形の無機質な瞳が、そんな水無を見下ろしている。

## 1 - 8 ・ 『I』の世界（後書き）

関係者各位には多大なる混乱を与えたこと、深く、お詫びいたしました  
ところですが、作者迷走中のため、正式なコメントは差し控えさ  
せていただきます・・・



## 1・9・つまりフィールド効果

「こんにちわー」

薄暗い玄関に入ってきた新しい人物。その名は、氷山つらら。外は激しい雨のはずなのに、つららの服や髪はほとんど濡れてはいない。不思議。

そこに走ってきたのはアイちゃん。靴を揃えていたつららを見つけ、その体に横からダイブ。

「どうしたの？」

つららは至って冷静に、アイちゃんを受け止める。靴を揃え終わってたつららは、アイちゃんを抱っこして立ち上がりました。

「へんなひとへやきた。こわい」

アイちゃんはつららの胸に顔を埋めながら、不審者の報告。

「変な人？ 大丈夫だった？ 怪我とかしてない？」

見たところ大丈夫そうではあるが、一応確認。アイちゃんはコケンと頷き大丈夫の合図。

「いちまつにんぎょうってなに？」

アイちゃんは顔を上げてつららに質問。その瞳はやっぱり無機質。

「市松人形？ アイが持つてる日本人形の名称だよ」

しかしつららは無機質な瞳で見られてもなんとも思わないので、普通に対処。

「あの子ほんとはいちまつちゃんっていうの？」

アイちゃん小首を傾げて奇妙な、けどつららにはわかる質問をしました。

「アイ。あれはただの人形。名前なんて付けちゃダメって言うてるでしょ？」

つららは軽くアイちゃんの頭を小突きました。

アイちゃんはまだ何か言いたそうでしたが、誰かが来る足音が聞こえたので、顔をまた埋めました。

「あ、冰山さん久しぶり。こんにちは。アイちゃんもこんにちはわー」

「こんにちはわー」「わー」「もうこんばんわだよ」「こんばんわ！」

食堂から現れたのは神無と愉快的仲間たち（月読、はな、あかね、さえ）。

「こんにちはわ神社さん。その服どうしたの？」

神無の修道服を見てつららはクスクス笑いました。神無は、うつ。と怯み「これには触れないで下さい……」と肩を落とし呟きました。子供たちは、似合ってるよー。と言いましたが、そういう問題ではない。

「大所帯でどこに行くの？」

神無の気持ちを汲み取り、つららは修道服にはそれ以上触れず、質問を変えた。

「水無が、あ、私の友達なんだけど、散歩に行つたままなかなか帰つてこないから捜しに行こうと思つて」

「水無姉ちゃんきつと迷子なんだよ」「真つ暗でカミナリでガクガクブルブルふるえてるんだよ」「それはないと思う」「私もそれはないと思うな」

「へえー。そうなんだ……」

つららはアイちゃんの後頭部を眺めながら、そういえば変な人が来たとか言つてたなと考えます。と、アイちゃんが顔を上げて、目が合いました。二回瞬きして、またすぐに顔を隠してしまいました。つららはアイちゃんが言いたいことを察しました。

「その人たぶん。アイの部屋にいるよ」

「え？ 水無がアイちゃんの部屋にいるの？」

「アイちゃんの部屋だつて」「スゴイねー」「……」「大丈夫かな？」

アイちゃんの部屋と聞き、神無は驚き、子供たちはざわめきました。

「多分ね。ここを真つすぐ行つて。曲がると階段あつて。その横がそうだよ」

子供たちのざわめきには触れず、つららは神無にアイちゃんの部屋の場所を教えました。

「わかった。行ってみるね。って、どうしたの？」

神無はとりあえず行ってみることにしましたが、月読ちゃんが服を掴んで何か言いたそうにしているので、屈んで話を聞く態勢に移行。

「あのね。アイちゃんの部屋。お化け出るから行かない方がいいよ？」

月読ちゃんは小声でそう言いました。

「お化け？」

「うん。あのねー。アイちゃんがつかつてる部屋はね。むかしつかつてた人が死んじゃったからね。その人のお化けが出てくるんだよ」

はなちゃんが補足説明しました。

「うん。夜、変な声をするんだよ。アイちゃんしかいないのに、話し声もするんだよ？ それにねそれにね。先生たちもあの部屋はあんまり入っちゃダメって言うんだよ？ きつと入るとお化けにつかまって出てこれなくなっちゃうから、入っちゃダメって言うんだよ」

さえちゃんが信憑性を高めました。

「わ、わたしは別にこわくないけどねっ」

あかねちゃんはとりあえず強がりました。

「でも、アイちゃんが使ってるんだから大丈夫なんじゃないの？」

出てこれなくなるならアイちゃんここにいないじゃーん。

「アイちゃんだから平気なんだよ」「そうだよねー」「アイちゃんは平気だけど私たちが入ると大変なんだよ?」「わ、わたしも平気だけど……」

どうやら子供たちの中では、アイちゃんは特別粋らしい。

「……」

神無は、どういふことなの? と、目でつららとアイちゃんに尋ねました。

しかしつららは、意味深に微笑むだけで、うんともすんとも言いません。

「曲がって階段……」

神無は一人アイちゃんの部屋に向かいました。愉快的仲間たちは、アイちゃんの部屋行くならいかなーい。と言って、パーティーから抜けてしまいました。あの強がりのあかねちゃんさえついてこなかったのです。よほど、アイちゃんの部屋はアンタツチャブルのようです。神無も緊張します。

階段の横の扉が開いていました。どうやらそこがアイちゃんの部屋のようにです。神無は緊張しつつも部屋の前まで歩き、中の様子を見て。

「み、水無!？」

神無は部屋の中で、二時間ドラマとかでダイイングメッセージを残そうとしたんだけど途中で力尽きた死体のように右手を伸ばし人差し指だけ立てながら倒れていた水無を見つけ、驚きました。

「どうしたの!？ 何があつたの!？」

神無は慌てて部屋の中に入り、水無を仰向けにし水無の頭を膝の上にのせました。だってこういう時は頭を心臓の上にするべきって聞いたことがあるし。あれ？ 足を高くするんだっけ？ 神無、混乱中。

「うつ……うつ……か、神無？」

水無が呻うめきました。神無は、よかった！ 生きてる！ と喜びました。死んでると思つてたのかよ。というツツコミはなし。

「どうしたの水無! 何があつたの!？ 誰にやられたの!？」

「あ、あいつに……やられた……」

水無は震える手で、神無の頭の上を指差しました。神無は上を向く。そこには。

「!? 人形にやられたの!？」

おかつぱ頭の人形の顔がありました。見てたな!。

「どういうことなの!？ お化け!？ 本当にここにはお化けがいたって!？」 水無! 答えてよ水無!」

ガクガクと水無の体を揺らす神無。落ち着いて欲しい。

「わ、私はもうダメ……か、神無……後は、頼ん……だ……ガクリ」

水無は、ガクリ。した。

「水無!?!？」

死んだの!?!?

「二人とも仲良しだね」

そんな二人の小芝居を入口付近で見っていたつらは、クスクス笑っていました。つららに抱っこされているアイちゃんも、私の部屋で何してるんだらうこの人たち。というように、二人を見ていました。

「あ、冰山さんにアイちゃんも来たんだ」

コロツと態度を変える神無は、役者タイプ。

「だれ!？」

水無はバツと神無のひざ枕から起き上がり、入口の方を向きます。神無しかいないと思っただからあんなことしてたのに見られていたとなると、なかなかに恥ずかしい。

「げっ！ ちびっこ！」

そしてアイちゃんを確認した水無は、ゲッ。ってなつて神無の後ろに隠れた。恐怖心恐怖心。アイちゃんも、つららでまた顔を隠します。恐怖心恐怖心。お互いに怖がっている図。

「神無気をつける！ あのオチビちゃんは妖しい術と書いて妖術を使ってくる！ 目を合わせるな！ 精神ポイント、つまりMPを持つてかれるぞ！」

水無は神無の後ろで好き勝手なことを口走る。状態異常混乱。

「水無が言ってることが全くわからないよ。え？ アイちゃんにやられたの？ 人形じゃなくて？」

「人形にもやられたの！ というか部屋にやられた！ もう私お家帰りたいー！」

水無の心はとつくの昔に折れていた。小芝居をして回復させようとしたけど無理でした。

「部屋につて……」



どういうことなの？ 神無は全てを知ってそうなららを見て、説明を求めめる。当事者であるアイちゃんはこつちを見てないので説明を求められない。残念。

「部屋はその人そのものである。ってことかな」

ねー。というようにつらはアイちゃんの顔を覗きますが、アイちゃん嫌々と首を横に振りました。

「……？」

全く意味がわからない神無。そして神無の後ろでガクガクブルブルの水無。「お家帰りたい……」と譫言うわごとのようにぶつぶつと呟いてます。

「ここはアイの部屋だから。アイに引き込まれやすいんだよ」

「引き込まれる？」

「うん。部屋には空気ってあるでしょ？ その人の雰囲気ってどうか。色ってどうか。この部屋はアイの空気。雰囲気。色に染まっているの。アイの世界。部屋にやられたっていう。その人の言葉は。ズバリだね」

「……言いたいことはなんとなくわかるけど……」

例えば。ピンクが大好きな人がいるとする。その人は部屋の壁も天井もカーテンも机もありとあらゆる物をピンクに染める。ピンクが好きな人にとってはその部屋は住み心地がいいだろうが、ピンクが嫌いな人、そこまで好きじゃない人はそんな部屋にはいたくない

だろう。そんな部屋、彼らにとっては異世界と呼んでもいいくらい現実から掛け離れている。30分で根をあげそうだ。頭が痛くなり目が痛くなり、呼吸も苦しくなるだろう。もしかしたら逆に、長時間そんな部屋にいれば、ピンクが好きになることもあるかもしれない。つまりつららが言いたいことは、そういうことだと思う。

しかし。

「んー？」

神無は部屋を見回す。この部屋は特に特徴があるわけではない。せいぜい市松人形があるのが特徴といえば特徴か。確かに物が少なく生活感がない空気を漂っていて、不安定になりそうな気がしないでもないけど、水無がこんなに錯乱というか混乱というか心が折れるとは思えない。というかホント、何があったの？

「アイは普通じゃないから」

普通じゃない。それが全ての答えのように、つららはそう呟きました。

「んー！」

と。アイちゃんがつららの腕の中で暴れ始めました。下りたいようです。つららは、珍しいこともあるもんだと思いながら、アイちゃんを床に下ろしました。

床に下りたアイちゃんは神無を見ました。じーつと見ました。

「ん？ なにかな？」

神無もじーつとアイちゃんのその、無感情な瞳を見「神無！ その目は魔眼だから見ちゃダメー！！」「ちょ！？ 水無！？」「ようとしたら水無に背後から目隠しされました。水無錯乱。神無動揺。アイちゃんきよとん。つららクスクス。

「もう！ 水無！ 何があったかわからないけどちよつとは落ち着きなさい！」

水無の目隠しを外し、神無は水無を叱ります。

「無理！！」

水無は二つ返事でそれは出来ないと言いました。神無が「そ、そうですね」と言ってしまうくらいの勢いでした。

「というかおチビ！ お前は何者だ！ 人間か！ 魔法使いの弟子か！ 私は一般人だぞ！ 私を解放しろ！」

その勢いで水無はアイちゃんにも噛み付きました。神無の後ろからだけどね。

怒鳴られたアイちゃんは、こわっ！と思ひ、慌ててつららに抱っこを要求しました。つららは、なんで一度下りたんだろうと思いつつ、もう一回抱っこしてあげました。

「……………よ」

抱っこしてもらって安心したアイちゃんは、神無の後ろで威嚇いかくしている水無をちらっと見たあと、何かをつららに囁きました。

「えっと。水無さん？ だっけ」

「そうですね私が水無さんですよ！ 皆さんじゃないのであしからず！」

「アイが。私も。お父さんはもう助けてくれないから。一緒だよ。だって。あたしにはよくわからないけど。意味。わかる？」

「……………なんなんだよー」

その言葉を聞き、水無は力尽きたように両手を床につき、「もうこやだ……………お家帰る……………私は生まれてこの方初めてかもしれない……………こんなにも火無に会いたいの……………」と呟いて、神無の肩を揺さぶり「もう帰ろうよー。お家帰ろうよー。こんな人外魔境もう居たくないよー。よくわかんない奴らがここには多過ぎだよー」と甘え始めました。これが噂の現実逃避の内の一つ、幼児退行って奴か。と神無は思いつつ、結局何が何だかわからないけど、この部屋とアイちゃんの組み合わせはよくないということなのかな。と、自分なりに結論付けました。

なんだかんだあつて30分経過。

二人の服も、そろそろ乾いた頃でしょう。

広げすぎてたためなくなった話のオチ。

「……………」

舞歌は図書館の入口で、いつこうに弱まらない雨を見ていました。その手にはしっかりとした傘を持っていましたが、舞歌はなぜか歩き出しません。

まるで何かを待っているかのようです。

普通に考えたら雨がやむのを待っているのでしょうか、普通に考えたら雨がやむまで図書館内にいるのが普通だし、傘があるんだから雨がやむのを待たなくてもいいんだから、はてさて舞歌は何を待っているのでしょうか。

と。

「お姉ちゃんどこー！」

そんな大声をあげながら、見知らぬ誰かが現れました。

傘を二本所持して、お姉ちゃんどこ発言。おそらく傘を忘れたお馬鹿な姉の為に優しい妹が傘を大学まで持ってきたのだらうと、簡単に推測できます。

「うう……………お姉ちゃん……………おかしいな……………お姉ちゃんの匂いが全然しないよ……………雨だからかな……………うう……………雨ごとくでお姉ちゃんの匂いがわからないなんて……………ここかな？」

優しい妹、もとい変な妹。火無は、舞歌の横を通り図書館に入って行きました。

「……………」

古今東西。ありとあらゆる妹という存在は、姉をあんなに慕う……  
といふかなんといふか。とりあえず、変なんだな。

舞歌は間違った妹像を再認識し、小さくため息をついてから、傘を  
開き、一人家路についた。

つまりそれは。

舞歌が待っていたモノは、来ることはなかった。ということであり、  
舞歌自身も来ることはないを知っていたということなのです。

1・9・つまりフィールド効果（後書き）

言い訳タイムー。ワーワーパチパチー。

私は悪くない。

全然悪くない。

強いて言うならあかねちゃんと水無の組み合わせではなくアイちゃん和水無の組み合わせを選んだのは私が悪かったと思う。

うん。ということかどうか。今回の話はなかったことにしてみてもいいと思う。深く考えずサラッと読むのが一番だと思うね。うん。

そもそもだよ。そもそもね。アイちゃんはこの小説に出てくるキャラクターじゃない気がするよ。サイコロだよ。どちらかというとサイコロだよ。うん。

とりあえず次回から通常営業にしたいと思う今日この頃ですが通常営業ってなについて感じなので気にせず書きたいように書くつもりです。

かしこ。

## 2 - 1 我が儘はだあれ？

「お姉ちゃん起きてよー。ご飯作ってよー。私お腹空いたよー」

「もうちよつと……」

「むー。もうちよつとってもう四回は聞いたよ……早く起きてよー……学校行かなくていいのー？」

「うう……もうちよつと」

「むー……お姉ちゃんのもうちよつとってどのくらいなの？」

「……一年ちよつと」

「餓死しちゃうよ!？」

火無は悲痛な声をあげながら、水無の布団、引っぺがそうとします。水無は、その突っ込みはなんか違う。と思いつながら、布団、死守します。今の状況、説明します。

火無が起きない水無を起こしています。

これは珍しいです。いえ、水無が起きる前に火無が起きているのが珍しいわけではありませんよ。そういうことはたまにあります。火無が水無を起こしているのが、珍しいんです。火無は基本、平日、水無より早く起きてても水無を起こしません。だって水無が寝てればイタズラし放題なのにわざわざ起こすわけないじゃないですか。というのは嘘ですが、わざわざ大学に（自分を置いて）行ってしま



のに、起こすわけないじゃないですか。

しかし今日は、学校行かなくていいの？　と言ってまで、起こそうとしているのです。こいつは異常事態だぜ。なぜそんな事態になっているかというと。

「お腹空いたよー！」

火無がお腹空いてるから。  
なぜお腹空いているかというと。

「お姉ちゃん起きてよ！　もうお昼だよ！？」

もうお昼だからです。二食抜くのはきつい健康体質なのです。

「うう……嫌じゃー」

水無は昼になつても布団から出てきません。ベットの上で布団を被ってイヤイヤです。学校に行きたくない子供みたいです。

弱ってるお姉ちゃんも悪くない。そう思っていた時が火無にもありました。しかしそれが長いこと続くとさすがにちよっとねー。

「むー！　お姉ちゃんどうしたの！　昨日からなんかおかしいよ！  
昨日のは別にいいけど今日はダメだよ！」

火無はむすーっと膨れっ面です。

火無が言った通り、水無の様子がおかしいのは昨日からです。  
昨日火無が水無のために傘を大学に持って行ったのに水無が見つからなくて、家に帰ってきて、しょんぼり八割怒り二割で水無を待つ

ていたら、水無が帰ってきたわけなんですけど、帰ってきた早々水無は火無に抱き着いてきたわけで、火無はビックリしたわけで、でもその時のことを思い出すと今も顔がにやけちゃうほど嬉しくて、その後も何かと昨日の水無は優しかった。やっとお姉ちゃんも私の気持ちがあわかってくれたんだ！と、火無は思ってた嬉しかったわけで、昨日のようなおかしさなら火無としてもどんとこいのばっちこーいだったんですけど、でも今日はこんな感じで、全然自分の相手してくれないわけで、こんなお姉ちゃん嫌だー。と、火無は思ってしまうのです。私の相手をしてくれないお姉ちゃんなんてお姉ちゃんじゃなーい。

「……………火無」

「なに！？ ご飯作ってくれるの！？」

布団から顔だけ出す水無に、火無は期待します。

「今日の私はMPの回復に全身全霊をかけるからあんたの世話できない。ごめんね」

水無はそう言っつて、布団に潜り込み、火無に背を向けました。

「MP……………？ ……お姉ちゃん！」

MPってなんだ？ という疑問で頭の上にハテナマークを浮かべた火無は、すぐにハツと我に帰り水無への揺さぶりを再開しました。

「起きてよ起きてよおーきーてーよー！！」

布団を押して、引いて、また押してー。揺さぶり揺さぶり、いい迷

惑。

「うう……私は疲れてるんだ察しろバカ!!」

というわけで布団の中から怒鳴り声。

「私はお腹が空いてるの!!」

「自分でなんか作れ!!」

「無理だよ!!」

「なんで!!」

「私はお姉ちゃんの料理食べたいんだもん!!」

「お前の理屈はよくわからん!! いいから寝かせろ!! 私はお前が疲れた!! お前は疲れてる姉をいたわ労れ!!」

「お姉ちゃんこそ腹ぺこの妹が可哀相じゃないの!？」

「全然」

「お姉ちゃんは間違ってるよ!!」

「間違ってるのはどう考えてもお前だ!!」

つてな感じの押し問答を繰り返す水城姉妹。

「むー!! お姉ちゃん学校行かなくていいの!？」

不本意だが、こちらの方面で攻めてみる。

「……………学校」

水無は、お前には言われたくない。と思いつつ考える。確かに大学には行かないといけない。そろそろ期末。レポートとかの話もあるし。でもすでに午前中の講義サボったから午後もサボっていい気がする。ああでも神無に連絡しておくべきか、心配するかもしれないし。いや、心配しないか。来てないということはなんかあったんだな。明日来たとき聞こう。程度だな。まあそんなもんだ。サボるべきかサボらざるべきか。それが問題だ。あと、昼食を作るかどうか。ああ、考えるの面倒。今日は何もせず、何も考えず過ごしたい。でもなあ。うう。ああ……………。

「……………お姉ちゃん？ ご飯作ってくれるの？」

水無は起き上がった。火無を無視してベットから抜け出し、テーブルの上に置きっぱなしだった神無からもらった『魔法の本』を手取る。そして目をつぶり、私は今日何もしないでいいですか？と尋ねながら、パツと本を開く。開いたページを見る。

『ほとんど確実です』

と、書かれていた。

「……………」

水無は無言のまま本を置き、ベットに戻り、布団を被り、

「おやすみなさい」

をした。

「…………お姉ちゃん!？」

水無の行動を見守っていた火無は、なんだったの!？ という気分でした。

「今日は何もしない。確実にしない。ほとんど確実にしない。だってそう書いてあったし」

水無は布団の中でぶつぶつ呟きます。なんか病んでるね。

「お姉ちゃんしっかりしてよ!! ご飯作ってよ!! 起きてよ!! 遊んでよ!!」

今日一番の力で揺さぶりました。

「何がなんでも確実に、やだ」

今日一番の取り付く島のない感じの返答でした。

「お姉ちゃん!! あんな本で何かを決めちゃダメだよ!!」

「…………ぐー」

「お姉ちゃん!!!」

火無はご立腹である。どうやら水無はあの本で今日の予定を決定したようだ。火無はあのよくわからない本が嫌いだ。よくわからないし、それなのにお姉ちゃん気に入ってるし、あいつの本だし。

「……火無」

布団から自分を呼ぶ声。

「なに？」

むすつとしながら返答。

「お姉ちゃんホントに疲れてるの。今日は寝かして。お願い」

水無の真摯しんしなお願いでした。布団被って背を向けたままのお願いだけど、ある意味それが疲れを物語っていますね。

「……………むー！！じゃあ私のご飯はどうするの！？」

しかし真摯なお願いではお腹は膨れないのだ！火無がなぜこうもご飯に執着するのかという二人分食べないといけないからに違いない！妊娠的な意味ではなく多重人格的な意味で！多分冗談！

「……………」

ここは黙って引き下がるところだろ。我が儘な奴め。と、思いながら水無は布団から左手だけ出す。掴もうとする火無の手を弾き、テーブル辺りを指差す。

「むー？」

渋々といった感じで火無は指差すところを見る。水無の財布があった。

「コンビニ行って好きなもの買ってきな。アロエヨーグルトは絶対に買ってくるように」

水無は火無に指令を与えた。そして沈黙。火無がどれだけ声をかけても、どれだけ布団を揺さぶっても、布団の上に乗っても無視。無視無視無視。もうこの話は終わり。私は今日一日は何もしない。という態度です。火無も、もう自分が何を言っても水無が今日は自分の相手をしてくれないことを悟りました。

「むー。むー！　むー！！　お姉ちゃんはホントにホントに、我が儘なんだから！！」

というわけで火無は、膨れっ面でそう叫んで、えい、やー、とー、で、パジャマを着替えて外出準備をして、水無の財布を掴み、「私が帰ってきたらいなくなったら許さないからね！」と叫んで、家から出て行きました。

「…………意味がわからない」

水無は布団の中でそうぼやき、ようやく得た静かな空間で、ゆっくりMP回復に努めましたとぞ。

おしまい……

2 - 1 ・我が儘はだあれ？（後書き）

とりあえず暑い!!

というわけで前回の話はなかったことに!!

嘘です!! 前回のアイちゃんについては次回フォロー入れることにするよ!! あとキーワードにもフォローいれておくことにするね!!

勢いで書いてもいいじゃない! 人間だもの!!

そんな感じで更新頑張ろう!! ファイトー!! おー!!



## 2・2・考えるな！ 感じるんだ！

水無が布団と一体化して、火無がもうこうなったらいっぱい買っちゃうぞー。お弁当買い占めちゃうぞー。と、思いながらコンビニに向かっていた頃、神無は大学の食堂で巡と一緒に昼食をパクつきながら、昨日の一件を話していました。

「というわけで、かくかくしかじがあって、水無の心が折れちゃったみたいなんだよねー」

「なるほどですなるほどです。それで昨日帰るとき水無は幼児退行していたわけですか」

「わけですねー」

簡単に補足説明すると、昨日アイちゃんの部屋から脱出した水無は半ベソかいて、神無に手を引かれながら帰っていったわけなんですね。巡は詳しいことはその時聞けなかったの（水無がお家帰るお家帰ると連呼してお話にならなかった）、今教えてもらったわけです。

「たぶん今日大学来てないのも、そのせいだと思っただよね。今頃頑張ってる、MPを回復してると思うよ」

わかってらっしゃる。

「MPですか。わからなくもないです。アイの相手をしたわけですからね……」

「んー。春風さん、ちょっと聞いていい？」

「なんでも聞くがいいです」

「私まだ、いまいち何があったかわからないんだよね。水無の説明もちんぷんかんぷんだし、氷山さんの説明もいまいちわからないし……結局、アイちゃんってなんなの？ 水無はなにされたわけ？」

「ふむです……まず、水城水無が何をされたかですが……おそらく見られたんだと思うです。自分の内面を」

「内面を見られた？ そんなことあるの？ というか、出来るの？」

「出来るといえば出来るですが……むむむ……というか、内面を見られたというか、自分の内面を見せられたという方がいいか、いや、知られたというか……説明するのは難しいですね……神社神無。お前は普遍的無意識という概念を知ってるですね？」

「うん。無意識の深層にある、個人的な領域ではない集合的な領域のことだよな」

「です。離れた場所で似たような童話が書かれたり、家族の考え方が似たり、父親や母親に似た人に惹かれやすいというのも、この領域が関係しているのかなんとからしいですが、今回重要なのは、人には無意識の深層に、似たようなシステムがあるということです」

「元型ってやつだね」

「です。誰もが持つてる感情。と、言ってもいいかもしれません。例えば有名でわかりやすいのは、影。シャドーという概念です」

「自分の闇、負の部分のことだね。だけど、それが何か関係あるの？」

「まあ待つです。だんだん関係してくるです。影というのは神社神無が言った通り、闇の部分、自分が生きていかなかった、生きていけなかった、抑圧した部分のことです。例えば、仕事人間の影は、遊び人って感じですよ」

「遊び人の影は、仕事人間。ってわけだね。あ、私、火無さんと火邪さんの関係がそれに近いような気がするんだけど。どう思う？」

「私も思ったことはあるですが、あいつらはちょっと複雑過ぎるですから、今論ずるのはやめるですよ」

「了解しました」

「自分の影を知るのは案外簡単です。自分の嫌いな人間を思い浮かべて、どうして嫌いなのか考えればいいですよ。それが、自分の影ですよ」

「自分の嫌いなところがあるから嫌いになるわけだね」

「です。自分の影を他人に見る、つまり、投影するわけですよ。人は何かに、自分を投影する生き物なんです。ということ的前提として、水城水無に何が起こったかを説明するですよ」

「お願いします」

「まずは簡単に結論から言うですよ。水城水無は、アイの中に自分

を見たのです」

「……アイちゃんに自分を投影したってこと？」

「アイに自分の面影を見た。と、言いかえればわかりやすいかもしれないです。見た。ということは見られた。ということであり、知られた。ということでもあるです」

「んー……ごめん。よくわかんないや。面影を見たとしても……せいぜい同情するくらいだね。同調はしないと思うし……それに氷山さんは部屋がどうとか言ってたし……」

「ふむです……そこが問題というかなんというか……神社神無はアイをどう思ってますか？」

「どうって……ちっちゃくて怖がりな可愛い女の子だね」

「それだけですか？ こう、なんというか、アイの無機質な瞳に見られると、自分の内面を覗かれる気分にならないですか？」

「んー……アイちゃんの無機質な瞳？ というのを経験したことないからなあ。無機質な瞳ってなに？ 無感情な瞳なら見たことあるけど……」

「無感情ですか。無機質じゃなくて無感情ですか……んー、それは困ったです。神社神無はアイに投影しないようですね……んー、どうするですか……アイの人形的なところを理解してくれると説明しやすいんですが……」

「いや、そんな説明しづらいならもういいよ？なんとなく理解した

から。ニュアンスは理解した。うん」

「ダメです！ 説明出来ないなんて神様の名がすたるです！ いいですか神社神無！！ 俗的にいえばアイは鏡です！ アイの前では誰もが自分を見るです！ それがアイの特性なのです！」

「と、特性？」

「です！ いや、やっぱり違つです！」

「違つの！？」

「特性というか、ジャンルです！」

「じゃ、ジャンル！？」

「違つです！ 今の嘘です！」

「嘘なの！？」

「やっぱり嘘じゃないです！ 神様嘘つかない！」

「どつちななの！？」

「水城水無はアイに自分を見て見られたです！ 今回はそこまでです！ アイの正体については放課後話です！ こうご期待ですよー！」

「え、あの、えー……？」

逃げるように去っていった巡の後ろ姿を、そこまで必死に説明してもらわなくてもわからないならわからないでいいのに。と、思いながら神無は見送るのでした。

続く・・・

2・2・考えるな！ 感じるんだ！（後書き）

考えるな！

感じるんだ！

ニュアンスを！

えーっとさー。まあ次回に期待しようぜ。次回はもう少しわかりやすい説明になるはずだぜ。巡が講義も受けずに必死に説明を考えるはずだからわかりやすい説明になるぜ。

無意識とか影とか投影はてけとーな説明なので間違っても気にしない。

興味がある人は専門書を読むか心理系の大学に進むかGoogle先生に聞くか断彰のぐりむを読もう。

## 2・3・狂ってやがる。暑すぎたんだ。Ver・春風

「私の名前は春風巡！ 神様もどきの人もどき！ そんな私に説明出来ぬモノはない！ というわけでアイを完膚なきまでに説明しつくしてやるですー！」

「4時間くらい経ってるのにテンションが変わっていない!？」

というわけで放課後。

神無がメールで指定された大学構内にあるカフェラウンジにいたら、巡がダダダーっと現れズサーっと前の席に座り、ドドドンっと第二部の始まりを告げてきたのでした。

「そりゃテンション高くもなるですよ！ 私は今日の午後の講義の時間は全てこの説明に費やしたですからね!？ つまり私の全てをここにぶつけてやる気満々ですよ!？」

「ええ!？ ちゃんと講義受けようよ！ というか講義を説明に費やしたってどういいうこと!？」

「午後の講義はゼミだけだったんです」

「ふむ」

「ゼミの時間、私はずっといかにアイという存在を神社神無に説明するか考えていたです。腕を組んで。んー。あーでもないこーでもない。という感じでしたです。すると教授が、春風君どうしたんだい？ ちゃんと発表聞いているのかい？ と、聞いてきたです。だから私は言っちゃったですよ。自分も理解していないような内容を



参考書丸写しでそれをそのままただただ説明するつまらなくて意味不明で役に立たないプレゼンなんて聞くわけないです！ 今忙しいから話しかけるなです！ というか逆に私の話を聞くです！ そして私は、残り時間いっぱい。愛について語ったです……」

「語ったです……って、やり遂げたみたいないな空気を漂わせてるけど語っちゃダメじゃないかな！？ しかも春風さんはアイはアイでもアイちゃん以外のアイについて語ってる気がするよ！？」

「どうしてくれるですか！？ ゼミの中でまた孤立したじゃないですか！！」

「それ私のせいなの！？ というかやっぱり孤立気味なんだね……」

「別に神様は孤独になれてるからいいんだもん！！ DEATH！！」

「ですがなんか怖い！ というか今日は終始このテンションなの！？」

「空気が悪くなったゼミを終えた私は神社神無はまだ講義があるのを知っていたのでメールを送り図書館に向かったです」

「なんで急に話を戻してテンションも戻ったのとか、私が取ってる講義をなんで知っているのかは置いといて、なんで図書館に行ったの？」

「アイについて調べるために決まってるじゃないですか！」

「図書館で調べられるの！？」

「ダメだったです」

「やっぱり……」

「使えねえ図書館です!」

「どんな使える図書館でも多分ダメだったと思うよ!」?

「仕方ないので私は図書館の主もとい三途舞歌に聞くことにしたです」

「図書館の主って……まあ、三途さんいつも図書館にいるから主みたいなものなのかな? そっいえば三途さんって、ちゃんと講義受けてるのかな?」

「受けてるですよ。あいつは図書館に行く。講義を受けに教室に行く。図書館に行く。教室に行く。の繰り返し人生です。10分休みにも図書館に行くわけです。で、次の講義に遅刻しそうになって慌てるですよ。で、こけたりするんですよ。それを偶然たまたま奇跡的に、それはもう天文的確率ぐらいのナイスタイミングで見ている私が高笑いしたらカッター持って追い掛けられました……死ぬかと思っただです……」

「……春風さんって、なんていうか……毎日楽しそうだね」

「二度と陰からこっそり三途舞歌の様子を監察もとい見守るのはやめようと思っただです」

「ああうん。やっぱり偶然とかじゃなかったんだね……」

「というわけで、私は三途舞歌に愛ってなんです？ と、尋ねたわけなんです」

「ここで『というわけで』を使うと、まるで、カッターを持って追いかけるという危険な行為をした三途さんを諭すために愛の尊さを語ろうとしました。みたいに聞こえるね」

「なぜわかったですか!？」

「ええ!？ そういう理由だったの!？ 私に説明するための情報収集じゃないの!？ その理由もなんか違う気がするけどね!？」

「さすが神社神無。私が認めただけはあるです。神様の嘘を見抜くとは……」

「神様は嘘つかないんじゃないの?」

「神様は嘘をつかないけど騙すことは結構あるから騙しに隠しはいんじゃないですか?」

「なんかテキストだね……」

「だって私! 人の形した神様ですから!」

「ここでその台詞はどうなんだろうね……」

「というわけで、私は三途舞歌に愛ってなんです? と、尋ねたわけなんです」

「あ、本筋に戻った。ん？ 本筋はアイちゃんの説明だからまだ戻ってないのかな……まあいいや」

「そしたらあいつは露骨に顔をしかめて嫌そうな顔をしたですよ。そんな言葉聞きたくもないというように露骨にですよ」

「へえー。そんなに露骨に？」

「です。というわけでももちろん私は、気にせず愛について語ったわけなんです……」

「そこはやめておくべきところじゃ……まあいいや」

「愛から無意識。無意識から普遍的無意識。普遍的無意識から影。影から水城水無。水城水無からアイ。アイから人形。人形から投影。投影から鏡について語ったわけなんです……」

「恐ろしくよくわからないマジカルバナナだね」

「懐かしいです。マジカルバナナ。よく父とやったものです。私の知識量はマジカルバナナで増えたと言っても過言ではないですって、マジカルバナナで知識量増やしたわけねえだろうが！！ です！！」

「そこはマジカルバナナじゃなくて伝言ゲームでいいだろ、的なノリツッコミだと思ったらまさかの自己完結！？」

「ふう……なるほどです」

「え？ 額の汗を一仕事終えたぜ。みたいに拭きながら何を納得したの？」

「納得じゃないです。水城水無が神社神無と一緒にいる根源的な理由をなんとなく理解したです」

巡は、慈しみを持った眼差しで神無を見ました。急にシリアスモードに入ってしまったので、急に地の文が働く羽目になりました。困ったもんです。

「水無が私という理由……？」

神無は首を傾げます。そんなの考えたこともありません。

私と一緒にいるのは気まぐれみたいなものじゃないのかな。何か理由でもあるのかな？ という感じですよ。

「安心です。神社神無。安定した安心ですよ」

羨ましい。そういう親友がいる水城水無が。

羨ましい。そういう気持ちを抱かせる神社神無が。

「……ありがとう？」

安定した安心？ 神無にはいまいちよくわかりませんでした。とりあえず褒めているようなので、感謝しておきました。

「さてじゃあアイについて説明するですよ！ 三途舞歌にお前病院行け。と、本気で言われた私のアイについての説明を心して聞きます！」

「え、ああ……うん。お願いします」

慈しみの眼差しが消え、さっきまでの燃え盛りやる気に満ち溢れた眼差しに巡は戻りました。神無的には、アイちゃんの説明より、水無が自分という理由の方が気になりましたが、巡は説明する気はないようなので、諦めて心して聞くことにしました。が。

「私はもうすでに喋り疲れて喉が渴いているです!」

「まだ一切本題喋ってないのに!?!」

「というわけでちょっと待つです。ちょっと飲み物買ってくるです。メロンソーダが飲みたい気分です」

そう言つて、巡はカフェの券売機に向かいました。

神無はそんな巡を見て、自由だなあ。と、呆れを通りこして感心しました。

まさかの続く...

2・3・狂ってやがる。暑すぎたんだ。Ver・春風（後書き）

狂ってやがる（作者のテンションが）

暑すぎたんだ（地球の気温が）

Ver春風（前も似たような題名つけた気がしたから）

という感じの話でしたー。

春の風は巡る。

同じところを永遠に。

クルクルと。

グルグルと。

ってな感じが。

春の風は巡る。

自由気ままに永遠に。

クルクルと。

グルグルと。

ってな感じでしたー。

自分でも『？』ですー。

暑いのがいけないんだ！

また次回ー。





2 - 4 ・ (鏡 + 人形) × 恐怖 II 『I』 (前書き)

さあみんな。楽しい楽しいよくわからないお話の時間だよ。

「ぷはーっ。この一杯のために生きてるですー。って感じの台詞って、明らかに嘘だと思わないですか？ この一杯のために生きてるって、ありえねえです。じゃあお前はその液体が失くなくなら生きる意味を失うのかっていう話です！」

「それは、ノリというかそう言っちゃうくらい美味しいというか格別という意味だから、嘘じゃなく誇張表現ってことでいいんじゃないかな。冗談みたいなもんだよね。だからそんな本気にならなくても……」

「私はどんな小さなことにも本気でぶつかれる人間もとい神様になりたいです！」

「そ、そっかあ……頑張ってるね？」

てな感じで、巡と神無はメロンソーダを飲んでいました。神無の分は巡の奢りです。勝手に買ってきました。神無は二回、お金払うよと言いましたが、ここは神様の顔を立てると思ってー。みたいなことを言われたので、ありがたくいただくことにしました。

「さて。そろそろ本気でアイについて説明するですよー」

「え、ああうん……」

「む。どうしたですか。気分が乗らないみたいな空気を出してます」

「いや、なんていうか……私が説明してと言ったのにこっぴつのも

あれだけど……もう説明いいんじゃないかな？ 水無はアイちゃんに自分を見られて混乱しました。で、いいんじゃないかな。うん。どうやってとかどうしてとか、もう、いいよ。そういうもんだ。と私は納得しました。うん。だから、もう、説明しないでいいんだよ？」

「ちよっ！ どうしてそんな優しい目で私を見るですか！？ もう、頑張らなくていいんだよ……みたいな空気を出すなです！ 説明してやるですよ！ もう意地でも説明してやるですよ！」

「えー、まあ、春風さんが説明したいならいいけど……大丈夫？」

「何がですか？」

「なんかこう……ハードル高くなってるよ？」

「神様気味の私の前にハードルの高さなど意味をなさないです！」

「んー、やる気が空回りしなきゃいいけど……まあいいや。では、よろしくお願ひします」

「よろしくお願ひされるです。四感全てを開いてよく聞きよく見てよく味わいよく嗅ぐがいいです！！ タッチはNGですよ！！」

よくわからないことを叫んでから、やり遂げたぜ。みたいに満足気に、巡はメロンソーダを飲みました。

「春風さんって、その場の勢いで生きてる感じだよねー」

神無はメロンソーダを啜り、優しく微笑みました。そんなあなたも

受け入れます的な空気が滲みでてます。

「というわけで、説明するです」

「というわけで、説明されます」

「一気に説明するです」

「一気に説明するの？」

「です。行くですよー。一気に行くですよー！！ 秘技！！ 全ては神の想うがままに！！！」

「な、なんだってー！？つて、ホントになに！？」

「気にするなです。さ、行くですよー。水城水無がアイに自分を見た。投影した。その結果アイに自分の内面知られ、混乱したというところまでは説明したですね。そして神社神無は、投影したとしても、自分の影を見たとしても、同情したとしても同調はしない。と言ったわけですが、なかなかいい言葉遊びだったです。

「です。いまさら褒めたのはなんとなくです。すまないです。ではこれからどうしてアイは水城水無の過去を。父親はもういないことを知っていたのか。しかも父親が助けてくれたことを知れたのか私なりの解釈で説明するです。あらかじめ言っておきますですが、私

にも完全にはアイという存在を理解することはできません。なので説明も完璧とは言えません。なぜなら私もアイに投影できるタイプであり知られてしまうタイプだからです。つまり、アイについて完全に説明するためには私は私という存在を完璧に理解していかねばならないです。それは神様なら可能な行いですがいかんせん私はまだ人間の身です。人間は一生をかけてようやく自分という存在を完璧に理解出来るかどうかです。まだ人生の三分の一も生きていない私にはまだ無理なのです。ですから申し訳ないですが、アイという存在を完璧にお前に説明することは出来ません。それでもいいですか？

「ありがとうございます。では、説明するです。投影しても、同情はしても同調はしない。確かにそうです。投影とは所詮自分の一部を相手に見るだけです。他者は他者であり自分は自分です。過去の想いは共有出来ても過去の想い出は共有出来ません。しかしここで逆に考えてみるです。もし。例えば。万が一。自分と全く同じ他者がいたならば、投影により同調、すなわち自分の悪いところも良いところも、全てを、相手に知られるということが起こるのかもしれないです。

「いえ。違います。鏡のような人間ではないです。俗的に言えば、アイは他者の内面を写し出す鏡のような人間。と、表現されます。ですが、今回に限りは鏡のような人間という表現は誤りとさせてもらいます。なぜなら鏡は自分そのものではないです。反対なのです。左右だけではなく上下も反対。つまり同一な存在とは言えません。神社神無。お前は鏡を見たとき、鏡に写った自分に嫌悪感を抱くのですか？ 鏡に写った自分を殺したいと思うのですか？ 思わないですよ。鏡に写った自分自身に嫌悪感を抱いたとしても鏡に写った自分には嫌悪感は抱かないですよ。どうしてですか？ 鏡に写った存在が生きていない、存在しないと知っているからですか？ 鏡に写ったのは自分と認識しているからですか？ 理由はどうでもいいです。私が言いたいのは、鏡に写った『それ』は、

ある意味、もつとも自分から離れた、投影できない、同情も同調もできない存在であるということですね。まあ、簡単に言うと、鏡は内面は映し出さない。という意味です。外は似てても、もしかしたらあいつら、中身は別物かもしれないですよ？

「……ふう。メロンソーダパワーを充填したです。さて、蛇足を長々と語ってしまったです。本筋に戻ります。ようは、理論上、机上の空論ならば、人は人を完全に理解出来る、つまり同調出来るという話でしたですね。何か違かった気がするのですが気にするなです。状況は刻一刻と変化してるのですよ！！

「失礼。取り乱したです。まあ実際自分にそっくりな人間なんていないですよ。外見は似てる奴はいるとしても中身までそっくりな奴はいないです。しかし、一部は似ている奴はいるですね。類は友を呼ぶという言葉があるように、人は無意識に自分に似てる人と惹かれ合います。私もお前も水城水無も三途舞歌も同じ類なのかもしれないです。しかし、友というのがポイントですね。類は恋は呼ばないです。似てる奴らが恋に落ちてもうまくいかない。という忠告的な意味があるのかもしれないですね。

「ところで神社神無。お前は小さい頃、人形で遊んだりしたですか？　です。おままとみみたいなことです。人形に話しかけたり、人形が喋ってるようにしたり、そういう遊びをしたことはあるですか？

「ないですか……そうですね。人形と添い寝くらいは？　それもないですか……いえ、別に悪くないですけど……。ようはですね。私が言いたいことは、人形なんです。アイは人形なんです。鏡じやなくて、人形なんです。人形は鏡の反対です。外は全く自分には似てませんが、内は自分にそっくりです。そっくりに、出来るです。なぜなら人形の内は、自分で作れるからです。自分の一部を人形に投影してるわけです。そうに違いありません。そうです。心辺りがないですか！？」

「失敬。取り乱したです。アイはまるで人形のようにです。人間にそ

ういうことを言うのはよくないかもしれないですし、神社神無はそうは思わないでしょうが、私は、そして水城水無はそう思うのです。しかし勘違いしてはダメですよ？ 私はアイに意思がないと思ってるわけではないですよ？ ただ、なんというか、人形なんです。役割というか、キャラクタが？

「ですですそうです。人形は元々空っぽですから、投影がしやすいです。そしてアイも投影しやすい。と、言いたかったわけですよ。さすが神社神無。なかなかやるですね。

「投影しやすいからなんなのかという事です。それだけなら別に問題ないんですけどね。愛着がわくとかいいことなんですけどね。アイは人形みたいに中身がないというか、中身がブラックボックスで見えないというか、だから投影し過ぎた結果、全てを吞まれるというか、というかそもそもですね！ アイの防衛本能なんですよあれは！ 人が怖いからこそ相手を呑みこもうとするんですよ！ 他人が怖いから他人を自分に換えようとするんですよ！ いえ！ 待ったです！ やっぱちよつと違う気がするです！ あいつは自分が怖いから他者が怖いんです！ だから自分に似てる奴を呑みこむんです！ 恐ろしい奴ですよ！

「落ち着けないです落ち着けないですー！！ 全く微塵も落ち着ける気配が……む……メロンソーダを飲んだら落ち着いたです。メロンソーダ様様です。

「さてです。そもそも根本的な問題として何故アイがそんなことが出来るというか、投影しやすいからって過去までわかるってありえなくね？ っていう疑問があるでしょうが残念ながら、それは私にはわからないです。しかしただわからないだけじゃ、神様もどきの名折れです。なぜわからないかを説明するです。自分自身を理解出来ないから。以外の理由ですよ？ ずばり。ジャンルが違うからです。です。タイプじゃなくてここはジャンルということにします。

タイプは変わりますが、ジャンルはなかなか変わらないですから。神社神無。お前は小説とか読むですか？ どんなジャンルを読むで

すか？ ふむです。雑食タイプですか。まあいいです。コメディー。恋愛。ミステリー。歴史。ホラー。ファンタジー。SF。まあ、ラノベに文学もジャンルということにするですか？ このように色々ジャンルがあるわけですが……ふー、ちょっと疲れたです。全ては神の想うがままにー。ですー」

「だからその言葉はなに……？」

「神社神無。気にしたらそこで、試合終了ですよ」

「試合終了は嫌だから気にしないことにするよ……」

はあ。と、神無はため息をついて、メロンソーダを啜りましたとき。

続く……!?!?



えー。まだ続くのー。

でも仕方ないんだってー！全部神様の想うがままになんだからー！いや違うよー！？神様って俺のことじゃないからね！？小説のキャラクターにとっては作者たるこの私が神様のな立ち位置かもしれないよー！？だけどもねー！その作者たるこの私もまたー！神様と呼ばれる存在に操られるキャラクターという可能性もあるわけだからこんな長々と説明する必要もないことを書いていて途中から投影って言葉間違ってるねー？とか思いつつ書いてしまったのは僕のせいじゃなくて僕を操ってる神様のなにかのせいなんだよー！！全ては神の責任問題！！

失敬。取り乱しました。後悔はします。だが反省はしねえ！！

また次回ー。

## 2・5・コメディ―目日常系会話科

「じゃ、続き行くですよー」

「はい。頑張りまーす」

「例えば。日常系ほのぼの学園コメディ―。というジャンルがあったとします」

「そのジャンルに含まれるのは、日常系ではのぼのな学園で繰り広げられるコメディ―な内容の本なんだね」

「です。そういうジャンルの本でいきなり、包丁やらナイフやら木刀やらを持った人間が学園に侵入してきて生徒の半数が殺されてしまった。という話になったらどうです？」

「どうですって……斬新だね」

「そこは、斬新だね。じゃなくて、それじゃあ日常系ほのぼの学園コメディ―じゃねえだろうが!! でしょうが!!」

「ごめんなさい!？」

「全く……です。はい、やり直すですよー。そういうジャンルの本でいきなり、包丁やらナイフやら木刀やらを持った人間が学園に侵入してきて生徒の半数が殺されてしまった。という話になったらどうです?」

「それじゃあ日常系ほのぼの学園コメディ―じゃねえだろうが!!」

「か、完璧です……」

「頑張りました。で、何が言いたいの？」

「包丁やらナイフやら木刀やらを持った人間が学園に侵入してきて生徒の半数が殺されてしまった。が、なぜ日常系ほのぼの学園コメディーじゃないんですか？ と言いたかったですよ」

「なぜって……まず日常じゃないよね。それ」

「そうですか？ 学校に包丁を持った人間が侵入してくるのはあることですよ？ 日常の一場面になることはあるですよ？ ジャンルの上での日常とは、私たちの生きている世界と掛け離れないという意味合いが強いならば、危険人物が侵入するのは日常としてもいいのではないですか？」

「まあ……いきなり魔法使いが出てくるとか宇宙人が侵略してくるとか異世界がどうかよりは、日常かなあ……でも包丁持った危険人物がいきなりっていうのも……ん、ああ、つまりこういうこと？ 日常なんて個人によって変わるってこと？」

「です。本日未明。包丁を持った危険人物が学園に侵入して死者が多数出ました。というニュースは、日常ですよ？」

「まあ、そういうニュースはたまにあるからそうかな……ふむふむ。なんとなくわかってきたよー。例えば、日本では銃は非日常だけど、外国じゃあ日常に含まれることもあるってわけだね。場所により、人によりそれは変わるってことでしょ？ つまりジャンルとはその人の価値観的とか思想的に変換すればいいのかな？」

「その通りです。一度でも、包丁を持った危険人物に襲われたら、その人は日常で襲われる可能性を考えられるということですよ。被害妄想ではなく。現実的な危機として、です。その人のジャンルにスプラッタが追加されたわけですよ。しかしこれはちょっとわかりづらいですね。もう少し身近な例をあげます。神社神無。あつちにいる奴らを見るです」

巡はストローで、あつちに座ってるカップルを示しました。

「ん、カップルさんだね……一つのケーキを二人で分け合ってるね。交互にあーんしてる……なんというか、あれだね……」

神無は、あつちに座ってるバカップルを見て、なんかこう、呆れましました。

「あの二人。どう思うですか？ 率直に。正直にお願いします」

「んー……まあ、正直言つて、理解に苦しむ光景かな」

あんなこととして楽しいのかな？

「です。正直私にも理解出来ません。二つケーキ食べるよ。と、思ってます。なぜそう思うかという……」

「ジャンル理論で言えば、ジャンルが違うからってこと？」

「です。あいつらのジャンルは、そうですね、恋愛目バカップル科です」

「な、なんかジャンルっぽくない単語だね。普通にジャンル恋愛でよくない？」

「よくないですー!! っと、言いたいところですが、まあそれでいいです。神社神無。恋愛に興味はありますか？」

「んー、あんまりないなあ」

「私もないです。つまり私たちは、恋愛ジャンルじゃないということですね。だから、恋愛を理解するのは難しい。ということですよ」

「理解は出来ると思うけど……まあ、そういうことにしておこうかな。ちなみに、そのジャンル理論で言えば、春風さんはどんなジャンルなの？」

「私のジャンルは、ギリ日常系ほのぼのハイテンション神様もどきですー!!」

「なにそのジャンルなんか怖いー!!」

「神社神無はなんですかね。ちょっと待つですよー。考えてやるです。日常は入るですね。日常は、恋愛、ホラー、下手したらファンタジーも内包出来る便利ジャンルですからねー」

「いいいいいよ! やっぱいいいよ! なんか怖いからいい! それより本題戻ろ! アイちゃんのジャンルはなんなの!? つまりアイちゃんのジャンルが違うから理解出来ないんでしょ!？」

「アイのジャンルは、オカルトですよ。数あるジャンルの中でも最も理不尽なジャンルと言えるです。オカルトミステリーなら理屈も

作れますが、ただのオカルトは説明も理屈もつけねえです。もはやファンタジーに近いです」

「ふーん……でも、オカルトって魔術とか錬金術とか占星術とか、結構理屈的なものもあるよね。そんな理不尽ってほどじゃ「あーあー！！」聞こえないです聞こえないですー！！ ジャンルじゃなくて最初からタイプで説明すればよかったじゃないかとか、そんな言葉微塵も聞こえないですー！！」

巡は耳に手を当て、あーあーモードに入りました。

「んー、まあ、うまく説明出来ない現象。説明したところで正しいかどうか保証出来ない。証明出来ない。というところは、オカルトといえばオカルトかもね」

フォロー入りましたー。

「ですよねですー！！」

復活しましたー。

「ん。ということは、氷山さんもオカルトジャンルなの？」

「それに近いのは間違いないですね。オカルト目日常科ってとこですかね。あいつもちょっとおかしいと思わないですか？」

「え？ 別に全然普通だと思うよ？」

「そうですね？ 喋り方とか、なんかこう、ぶつ切りな感じしませんですか？」

「んー……言われて見ればそんな気もしないでもない……」

「なんかこう、あいつは歯車が一つ欠け落ちてる気がするです。歯車がつまみ合っていないというよりは、歯車が一つ無くなってる感じがするです。だからこう、ぶつ切りな、処理落ちみたい感じになってると思うんですけど……」

巡は思案顔で、残り少ないメロンソーダをズルズルと啜りました。氷山つららも、アイちゃん同様、巡にはうまく説明出来ないようです。ジャンルが違いますから仕方ないです。ジャンルというか、作品が違うんですけどねー。

神無は別段、つららに違和感を感じないので、春風さんは色々考えてるんだな。私知識だけだもんな。凄いなあ。とか思いつつ、メロンソーダを飲み終わり、時計を確認。もういい時間だなあ。

「む。なんですか神社神無。もう帰るですか？」

時間を確認した神無を見て、巡はつららのことはとりあえず、置いておきました。

「ん？ まあ、アイちゃんについてはわかったし、もう帰ろうかなあつて。春風さんはどうするの？」

「私も特に用はないですから、お前が帰るなら帰るんですけど……」

ふむー。と、巡は腕を組んでストロー噛み噛み。

「どこか遊びに行くですか？」

巡、首を傾げる。

「遊びに？」

神無も、首を傾げる。

「です。なんかそんな気分です。風の噂で聞いたですよ。神社神無。お前はクレープが好きらしいじゃないですか。食べに行こうじゃ」「それはいい考えだね！……で、ですよね」

神無は身を乗り出して、賛成しました。巡が引くくらいの輝く笑顔です。

「か、神社神無。お前、そんなにクレープ好きだったですか？」

三途舞歌のアイスクリームレベルじゃないですか。

「好き？ バカ言っちゃいけないよ！！ 私は！ クレープが！！ 大好きなんだよ！！！！」

テーブル、バーン。ギロリ。

「ごめんなさいです！？」

冷や汗。

「あなたのジャンルがギリ日常系ほのぼのハイテンション神様だとしたら私のジャンルは、クレープだ！！！！ そこんとこよろしく！！」



「よ、よろしくされたです……」

り、理解できねえですう。

「じゃ、行くよ。さあ、行くよ。私についてきなさい。美味しいクレープを食べに行こう。ジャンルやら日常やら鏡やら人形やら投影やら無意識なんてどうでもいい！！全てはこのために！！全てはクレープのためにある！！」

おー！！ と、神無は空になったコップを高らかに上げました。

「お、おー？」

三途舞歌といい神社神無といい、食べ物って怖いな。

そう思いつつ、巡はコップを上げました。

「イエイー！！」

「い、いえーい？」

カツン。と、乾杯。

なにはともあれ。

神無と巡は、今日一日でだいぶ仲良くなれました。

おしまい……



## 2・5・コメディ―目日常系会話科（後書き）

サマーウォーズ！

あ、叫びたかっただけです。

ジャンル理論は、気にしちゃダメです。

まあ今回は内容より二人が長々と会話して仲良くなればいいんです。という言い訳。

この理論により俺がモテない理由は、恋愛ジャンルじゃないから。という言い訳が出来るようになります。やったね。しかたねえよ。恋愛要素がねえジャンルに生まれ育ったんだからしかたねえよ。せいぜいこれから恋愛ジャンルになれるように努力しようぜ。

この小説のジャンルに恋愛は含まれてないので恋愛要素皆無です。さて。

氷山つららについてですが、あいつの喋り方がぶつ切り（独特と解釈してね）という情報はこれまで一切書いてなかったと思いますが、気にするな。そういうこともある。

まあ、その理由はあれだ。この小説は三人称ナレーター風味なんですけど、視点はずっと、いわゆる神視点ってわけじゃないんですよ。たまにキャラ視点になったりします。つららが出てくる時はずっと神無視点三人称ナレーター風味だった（多分）から、つららの口調については地の文で触れなかった。という言い訳。まあ、つららの台詞が『。』だけなのは、ぶつ切りな感じと解釈してください。

なので、アイの無機質な瞳と無感情な瞳は本当は一緒なんですよね。神無にとっては無感情な瞳で、水無や巡にとっては無機質な瞳なわけです。無機質と無感情。何が違うのかは、私にもわからないです。

けどねー。

はい。そんな感じで。

今回は噂による50話らしいので、命ちゃん視点の一日でも書こうかなあって感じですよ。

また次回もよろしく願いしまーす!!

### 3 - 1 ・命と月読の朝

「ん……」

命ちゃんは何だか寝苦しくて目を覚ました。まるで自分の上に何かのっているような寝苦しさです……。

「……………重いよつくよちゃん」

やっぱりです。命ちゃんのお腹に月読ちゃんの足がのってました。月読ちゃんは寝相が悪いです。とてつもなく悪いです。寝る時はちゃんと命ちゃんの横に寝てたはずなのに、今は頭がベットから出て、足が命ちゃんのお腹にのっています。命ちゃんはいつとも不思議です。どうしてこんな風になるんだろう。夜の間妖怪さんがつくよちゃんにいたずらしてるのかな。

「つくよちゃん起きてよー」

命ちゃんが足をぺちぺち叩いても月読ちゃんはピクリともしません。いつものことです。

命ちゃんは、えい。と、足をどかして、よいしょ。と、ベットから出て、えいやー。と、月読ちゃんをベットに戻してあげました。

そして今何時かを確認するために、椅子によいしょと上り、机の上に置いてある目覚まし時計を手に取りました。

「えっと……短いのがここで長いのがそこだから……」

命ちゃんは、短い針が『6』にあって、長い針が『11』と『12』の間だから。短い針が『6』だから長いのが『12』に行ったら6

時だから。『1』のところに長い針がある時は5分だから。ってな感じで、指を折りながら今の時刻を確かめます。

「えっと………6時くらい!」

今の時間は、6時くらい! と、わかった命ちゃんは、椅子から下りて、カーテンを開けました。夏だからもう外は明るいです。命ちゃんは暗いのは嫌いなので、起きると明るい夏が好きです。窓を開けると風が気持ちいいです。

「ん………」

まだ寝てる月読ちゃんが、日の光を避けるようにベットを転がり、うつぶせに移行しました。

「つくよちゃん起きて。みことたち、今日当番さんだよ」

そんな月読ちゃんを、命ちゃんはぺちぺちゆさゆさ。起こすことにしました。

さて。

命ちゃんが月読ちゃんを起こそうとしている間に、ちよっと部屋の説明を。

命ちゃんと月読ちゃんは二人部屋を使っています。二人部屋ということで二段ベットがありますが、命ちゃんと月読ちゃんは二段ベットの下の二人で使っています。ちよっと狭いし月読ちゃんの寝相は悪いけど、お互いに一人で寝るのは寂しいので、そうしています。

この部屋だけではなく、全ての子供部屋には窓が一つあります。学校の窓のちよっと小さいバージョンです。

それと勉強机が二つ。入口の机の上には、ビー玉とかまつぼっくり

など色んな物が散乱していて、奥の机の上には絵本とかが綺麗に並んでいます。目覚まし時計も奥に置いてあります。奥が命ちゃんの机で、手前が月読ちゃんの机です。そんな感じですよ。

「つくよちゃん起きてよー」

「んー……やや」

「ややじゃなくて起きてよー!」

「……やーやっ」

「つくよちゃん!」

月読ちゃんはなかなか起きません。月読ちゃん起こすのは毎朝大変です。

命ちゃんが腰に手を当て、どうしよう。と、考えていると、

ジリジリリリ!

机の上の目覚まし時計が、6時くらい!ではなく、6時!をお知らせしました。

「んー……ジリジリうるちやい」

月読ちゃんが嫌そうに顔をしかめました。

「つくよちゃんが起きればジリジリ鳴らないんだよ?」

命ちゃんもジリジリは嫌いなので、早く止めたいけど我慢です。

「……おきりゅ」

「つくよちゃんおはよー」

「……よー」

月読ちゃんは目を擦りながら、起きました。まだ半分夢の中みたいだけど、命ちゃんは目覚まし時計を止めました。

「つくよちゃん寝ちゃダメだよ？」

「うん……ねない……」

命ちゃんはまだ寝ぼけてる月読ちゃんの手を引きながら、洗面所に向かっています。顔を洗うためです。

月読ちゃんは朝が弱いです。なので、朝は命ちゃんがお世話しないと何にも出来ません。着替えも命ちゃんが手伝ってあげないと、すぐに寝ちゃいます。

昼間の自分を引っ張ってくれる頼りになるお姉ちゃんみたいな月読ちゃんも命ちゃんは好きですが、朝のフニャフニャしてる月読ちゃんも大好きです。まるで自分がお姉ちゃんになったみたいだからです。



月読ちゃんと命ちゃんは双子なので、どっちがお姉ちゃんかどっちが妹とか、あんまり気にしません。というか、どっちがお姉ちゃんか（どっちが先にお母さんから出てきたか）はわかりません。でも、名前的にも（ツクヨミの方が先）性格的にも（お姉ちゃん気質）身長的にも（月読ちゃんの方がちょっと背が高い）、命ちゃんも月読ちゃんも周りも（先生とか友達とか神無とか巡とか）月読ちゃんをお姉ちゃんと認識しています。だからどうしたという話ですが。

「……よし」

部屋から玄関までたどり着き、命ちゃんは気合を入れました。ここからが本番だぜ。って感じです。

何が本番かというと、怖いのが本番なのです。

命ちゃんは暗いのが嫌いです。お化けが出てくるからです。お化けを見たことはないけど、間違いなくお化けはいます。いるに決まっています。怖いです。

くるみわり園では、夏場は廊下の電気をあまりつけません。節電です。エコです。ということ、部屋から玄関までの廊下の電気はついていませんでした。ほの暗かったです。でも、玄関と突き当たりにある窓からの日の光が合ったので、そんなに怖くありませんでした。

しかし。

「……」

ぎゅっと。命ちゃんは、洗面所の方の廊下を見ながら、月読ちゃんの手を強く握りました。月読ちゃんは、命ちゃんが歩き出さないの、立ったまま寝てしまいました。

玄関から洗面所までの廊下は暗いです。さっきの廊下とは違い、日

の光が届いていないのです。やべえです。そんなに距離はありませんが、暗くてやべえです。さらに洗面所も暗いので、洗面所についたらすぐに電気をつけないといけません。命ちゃんは、暗い時に鏡を見たら鏡の中に吸い込まれてしまうということを、信じて疑わな  
いません。

これはとても難易度が高いミッションです。お化けに見つからないように進みながら、ちよつと高いところにある洗面所の電気をつける。寝ぼけ月読ちゃんを連れてですよ？今まで一度も失敗したことがないのが奇跡に近いです。もしかしたら今日。ついにお化けに出会ってしまうかもしれないのです。もしかしたら鏡の中の自分に手招きされてしまうのかもしれないのです。いやいやもしかしたら寝ぼけ月読ちゃんがお化けに連れてかれて「おはようございます」

「みゃー！」

「……みゃー？」

命ちゃんが自分の想像もとい妄想に怯えていると、いきなり挨拶されました。ビックリして変な叫びをあげて、跳びはねてしまいました。月読ちゃんも、その声で起きました。みゃー？ って鳴いて可愛いです。

「……真奈美先生、ビックリさせないでよー」

「普通に挨拶したただけなんですけど……」

命ちゃんに挨拶したのは、真奈美先生まなみでした。玄関の横の職員室から現れたようです。そして命ちゃんと月読ちゃんを見つけて、挨拶をした。というわけです。

「ああ。命ちゃんと月読ちゃんは、今日の当番さんでしたかね？」

「うん。顔を洗ったら、畑に行くの。ね？ つくよちゃん？」

横の月読ちゃんに同意を求める。

「うん……いくの……」

月読ちゃんは目をつむりながら答える。

「つくよちゃんしっかりしてよー」

そろそろフニヤフニヤから復帰して欲しいなー。

「うん……しっかりする……」

しかしまだフニヤフニヤ。命ちゃんは諦めます。と。

「……………真奈美先生どうしたの？」

真奈美先生がこっちをジーっと見ていることに気付きました。まるで値踏みするように見えています。服を。命ちゃんではなく服を見ている感じがします。あれ？ 服反対に着ちゃったかな？ と思い、命ちゃんは服を確認しましたが、別に普通です。月読ちゃんも普通です。普通の半袖に普通の半ズボンです。お揃いです。服も顔つきも髪型もそっくりです。でも、見分けはつきません。フニヤフニヤしてるのが月読ちゃん、しっかりしてるのが命ちゃんです。朝はそれで見分けがつかず。

「……………まだまだですね。背と雰囲気足りないか……………」

観察を終えた真奈美先生は、ポツリとそう呟きました。命ちゃんは、意味がわからなくて首を傾げました。月読ちゃんは、あくびをしました。

「私も洗面所に行くところですから、一緒に行きましようか？」

一切説明せず、真奈美先生は話を進めます。

「うん！」

命ちゃんにとって、それは願ってもないことです。先生と一緒にならお化けも全然怖くないです。だって先生はシスターさんだもん。

命ちゃんは真奈美先生と手を繋ぎ、洗面所に向かう暗い廊下を歩きます。やっぱりちょっと怖いです。ぎゅっと。真奈美先生の手を握ります。

「トイレにはもう行きましたか？」

無事洗面所について、命ちゃんが目をつむってる間に、真奈美先生は電気をつけました。

「ううん。顔洗って、つくよちゃん起こしたら行くことと思ってたの。明るければ怖いものなしの命ちゃんは、踏み台を洗面所の隅っから持ってきます。」

「ついて行きましようか？」

「うん。ありがとう真奈美先生ー」

トイレもお化けがいっぱいです。でも、先生がいれば平気。

真奈美先生は優しいなー。真奈美先生がいてくれてよかったなー。

命ちゃんはそんなことを思いつつ、顔をバシャバシャ洗います。

真奈美先生。別名シスター（仮）さんが、虎視眈々と、命ちゃんと月読ちゃんに修道服を着せるタイミングを窺ってることを、命ちゃんはまだ知りません。

### 3 - 1 命と月読の朝（後書き）

はい。記念すべき50話は命ちゃんのほのぼのな朝でした！。ほのぼのした？

真奈美先生は、神無と水無に修道服着せた人です。シスター（仮）さんということで、別にシスターさんなわけではありません。修道服が大好きなんです。彼女については、またいつか語る日があるでしょう。確か、私の脳内設定によると、神無たちと同じ年だった気がするなあ。

ま、次回もよろしく。

### 3・2・命と月読の朝食当番

「つくよちゃん起きたー？」

「うん……起きた」

月読ちゃんは、あくびを噛み殺しながら答えました。まだ完全に起きたわけではないようですが、フニャフニャではなくなりつつあります。

さて。二人は真奈美先生と別れ、畑に向かっていきます。

畑ではトマトやキュウリやスイカなどが栽培されていて、朝食当番の子は、早起きして野菜を収穫すると共に、畑の草むしりや水やりをしなければなりません。

今日二人は、その当番さんなのです。

二人はとことこ廊下を進み、裏口の手前の倉庫で軍手と草刈りの道具を入手して、玄関から持ってきた靴を履き、畑に出ました。

「園長先生おはようございます」

「まーす……」

「はい。命さんに月読さん、おはようございます」

畑にはすでに、園長先生と数人の子供たちがいました。園長先生というのは教会の神父さん兼くるみわり園の代表さんのことで、いつもニコニコ笑っている優しく暖かい人です。子供たちは、園長先生と違って呼んで慕っています。

「みんなもおはよー」

「よー……」

「もう。二人とも遅いよ。草むしりほとんど終わっちゃったよ?」

「みこちゃんおはよー。つくよちゃんも……おはよー?」「二人ともおはよう。月読はまだ半分寝てるっばいね。あ、二人はトマトのわき芽摘んでくれる?」

「うん! つくよちゃんががんばる! 『おめいへんじょう』ってやつだね!」

「うん」

二人は他の当番の子供たちに挨拶してから、作業に移りました。

「さえさんと命さんと月読さんは、テーブルを拭いてきてくれますか?」

「はい……」

「はい……」

畑仕事を終え、現在時刻は6時30分。



命ちゃんと月読ちゃんは、畑で取った新鮮な野菜を持って、食堂に移動しました。当然、朝食を作るためです。

朝食作りと言っても、まだ命ちゃんと月読ちゃんは5才なので、包丁を使わせてはくれません。なので、テーブルを拭いたりお皿を並べたりという作業を主にやります。野菜を切ったり、スクランブルエッグを作るのは、小学生以上の子の仕事です。もちろん、先生たちが側にいます。今日は園長先生が仕切ってます。

「みこちゃんはそっちから拭いて。私はこっちから拭くから」

「うん。わかったー。じゃあ、つくよちゃんは真ん中から拭いてね」

「うん……僕、がんばる」

命ちゃんと月読ちゃんは、さえちゃんと一緒に頑張ってテーブルを拭きます。

「ねえねえみこちゃん」

「なにー？」

さえちゃんがテーブルを拭きながら、話しかけてきました。

「かなお姉ちゃんは次いつ来るの？」

「かなお姉ちゃん……？」

かなお姉ちゃんって、だれ？

命ちゃんは、テーブルを拭く手を止めて、考えます。かなちゃんは知ってるけど、かなちゃんはお姉ちゃんじゃないしー。

ちなみに月読ちゃんは、復活してきた眠気と戦うのに忙しいので、会話は聞こえていないようです。忙し過ぎて、テーブルを拭く手が止まっています。

「あのお姉ちゃんだよ。ほら、かつこいいお姉ちゃんと一緒にきた優しいお姉ちゃん」

さえちゃんは、手振りを交えて補足説明をしました。手振りは意味がないのは言わずもがなですが、命ちゃんはようやく『かなお姉ちゃん』が誰かわかりました。

「神無お姉ちゃんのこと？」

「うん。かなお姉ちゃん次いつ来るのかなー。私、あや取り教えて欲しいなあ」

「……さえちゃん。かなお姉ちゃんじゃなくて神無お姉ちゃんだよ。わかりづらいよー」

命ちゃんは呆れ顔です。

さえちゃんは人の名前を略す癖があります。親しみを込めているのか面倒だからか、理由はよくわかりませんが、たまにわかりづらいことがあります。例えば、かなちゃんのことを、なっちゃんと言って、ななちゃんのこと、なっちゃんと言つのです。なんか違うよね。

「かなお姉ちゃんはかなお姉ちゃんだからかなお姉ちゃんなの。ねえねえいつ来るの？みんなも来るの楽しみにしてるよ？いつ来るのいつ来るのー？」

さえちゃんは直す気はないようです。何か理由があるのかもしれませんね。

「……みこと知らない……神無お姉ちゃん、忙しいからあんまり来れないって言ってた気がするよ」

「えー。そんなー」と、さえちゃんが言ってるのを無視して、命ちゃんは、ちよつと不機嫌になりながら、テーブル拭きを再開しました。

不機嫌な理由はなんでしよう。神無お姉ちゃんが忙しくて来れないからでしょうか？ さえちゃんがしつこくいつ来るのと聞くからでしょうか？ さえちゃんが神無お姉ちゃんを慕ってるからでしょうか？ 神無お姉ちゃんは自分だけのお姉ちゃんだったのに、みんなのお姉ちゃんになつちやつたからでしょうか？ 月読ちゃんが立っただまま寝息を立て始めたからでしょうか？

おそらくきつと、全部でしょう。命ちゃんも色々複雑のようです。

「ん？めぐお姉ちゃんは忙しくないのかなー」

しばらくぶーぶー言ってたさえちゃんは、ふと、思いました。

「かなお姉ちゃんと同じ学校なら、めぐお姉ちゃんも忙しくて来れないんじゃないの？」

巡は頻繁にくるみわり園に来ます。もしめぐお姉ちゃんが忙しいのにここに来れるなら、かなお姉ちゃんが忙しくて来れないのは嘘じゃないかな？ と、さえちゃんは思ったのです。

「巡お姉ちゃんも忙しいよ。だって、巡お姉ちゃん神様だもん。色々することあるもん。巡お姉ちゃんすごいもん」

ちょっと誇らしげ。命ちゃんは巡が大好きです。神無も大好きです。水無も大好きだし、月読ちゃんも大好きです。命ちゃんは大好きがいっぱいです。

「そっか。めぐお姉ちゃんは神様だもんね。忙しくても来れるのは当たり前だよな」

さえちゃんは納得しました。

巡Ⅱ神様。という方程式は、結構浸透してるのです。そこに畏怖や尊敬はなく、親しみや信頼しかないですけどね。

巡Ⅱ神様 マスコットの存在。

って、感じですよ。

その後も色々あって（例えば、お喋りばかりしてたら当番の年上の子に怒られたり、月読ちゃんをもう一度起こすのが大変だったり、お皿を落としそうになったり、サラダを盛りつけたり、プチトマトをつまみ食いしたら怒られたり、朝練がある中学生が先に朝食を食べたりなどなどあって）現在時刻は7時過ぎ。朝食はほとんど完成して、食堂には起きてきた子供たちが集まっています。ちなみに朝食メニューは、ご飯とスクランブルエッグとベーコンとサラダ。おかわりは基本的になしです。

「命さんと月読さん。いつも通り、まだ寝てる子たちを起こしてきてくれますか？」

「はい！」

園長先生に頼まれて、二人はまだ食堂に来ていない子を起こしに向かいます。

「つくよちゃんはもう起きた？」

「うん！ もう起きた！ だから起こしにこなくていいよ！」

「よかった！」

「うん！ よかったー！」

二人はそんな会話をしながら、廊下を進んで。

「おはよー！」

「ご飯ですよー！」

「……いないね」

「ねー」

部屋を確認していきます。誰が起きてるか、誰がもう食堂にいるかはまいちわからないので、手当たり次第部屋に入る作戦なのです。

「えっと、ねねちゃんはいいんだよね？」

「うん。いつも通りだから、ねねちゃんの部屋はいいんだよ」

手当たり次第といっても、全ての部屋を回るわけではありません。二階と、一階の一部の部屋には入りません。いつも通り、です。

「おはよー！」

「ご飯だよー！」

「起きたー？」

「起きてー！」

という感じで、二人は進んでいきます。

「おはよー！」

「ご飯だよー！」

「あかねちゃん起きてー！」

「もう朝でご飯だよー！」

「…ん」

二人はあかねちゃんをべしはし起こします。

二人が入った部屋には、あかねちゃんがまだ寝ていました。あかねちゃんと同室の子はもうすでにいません。恐らくきつと、同室の子

も食堂に行くときあかねちゃんを起こしたんだけど、先に行ってみたいなことをあかねちゃんが言って、あかねちゃん二度寝。って感じだと思われます。

「……………おきた……………」

起きました。

「ほんとー?」

「また寝ちゃうんじゃないのー?」

疑いました。あかねちゃんは二度寝の常習犯です。

「起きたったら起きたの!!」

怒りました。寝起きは機嫌が悪いです。

「わー! あかねちゃん怒ったー!」

「起きて怒ったー!」

二人は楽しそうにそう叫んで、部屋から出て行きました。

さて。そんな感じで、二人は楽しく元気にみんなを起こして回り、一階最後の部屋に辿りつきました。そう。アイちゃんの部屋です。

「……………」

アイちゃんの部屋の前で、二人はお互いの顔を見ます。

「ねえつくよちゃん。どうする？」

「どうしようか」

いつも通りなら、アイちゃんは起こしません。園長先生に、アイちゃんは無理に起こさなくていいよって言われてるし、先生たちも、この部屋にはあんまり入っちゃダメだよって言うてるし、みんなは、この部屋にはお化けが出るって言うてるし。お化け怖いし。アイちゃんよくわかんないし。アイちゃん逃げちゃうし。でも……………」

「この前神無お姉ちゃん、なんともなかったって言うてたよね」

「うん。言うてた」

「じゃあ大丈夫かなー？」

「……………かなー？」

先日神無がこの部屋に入りました。で、戻ってきました。で、命ぢやんたちは大丈夫だったー？ お化け出たー？ って聞きました。で、神無は大丈夫だったよー。お化けの『お』の字も出てこなかつ



たよー。と言ったわけです。それならみことたちも大丈夫かな？  
巡お姉ちゃんは神様だから平気だし、つららお姉ちゃんはなんかア  
イちゃんと仲良いから平気っぽかったけど、神無お姉ちゃんは特に  
そういうのなにに大丈夫ならみことたちも大丈夫かな？ って、  
思ったわけです。

二人は好奇心旺盛です。この部屋にとっても興味があります。起こす  
という大義名分があるから、今はチャンスです。でも……。

「水無姉ちゃんは変になってたよね」

「なってた。お化けに会ったみたいに変になってた」

水無は変になってました。神無の背に隠れて、お家帰るお家帰る。  
あの部屋怖いあいつ怖い。って言ってました。何があつたのー。っ  
て、みんなが聞いても、触らぬ何かに祟りなし！。とか、よくわか  
らないこと言ってました。やっぱり何かあつたのかな？ お化けか  
な？ と、みんな思いました。なっちゃんは、そんな水無もステキ  
！。みたいな目で見てました。よくわかりません。

「どうするー？」

「どうしよー？」

二人は顔を見合わせて、腕を組んで、首を傾げて、鏡合わせのよう  
に悩み中です。  
と、

「どっかしましたか？」

「あ、くるみ姉ちゃん。おはよー！」

「おはよー!」

二階からくるみお姉ちゃんが下りてきました。

「二人は何をしてるんですか?」

「あのね。僕たちみんなを起こしてるの」

「それでね。アイちゃんを起こそうか悩んでるのー」

「悩んでるんですか?」

くるみお姉ちゃんは、アイちゃんの部屋の扉を見ます。

「なんで悩んでるんですか?」

特に扉に異常はなさそうだし。入るならさっさと入れればいいのに。という感じでしょうか。

「だって、アイちゃんの部屋お化け出るんだよ?」

「でも出ないかもしれないの」

「だから、みことたちどうしよーって、悩んでるの」

「お化けですか?」

くるみお姉ちゃんは、視線をもう一度扉に移します。

「私が行きましようか？」

「え？ くるみ姉ちゃんいいの？」

「ダメなんですか？」

「ダメじゃないけど……くるみお姉ちゃん、お化け怖くないの？」

「お化けは怖いんですか？」

私は怖くないよ。と、暗に告げたのはわかりませんが、くるみお姉ちゃんは、部屋の扉を開けて、中に入り、扉を閉めてしまいました。開けたら閉める。これ、基本です。

「くるみ姉ちゃん大丈夫かな？」

「かなー？」

二人が部屋の前で待っていると、すぐにくるみお姉ちゃんが一人で出てきました。

「くるみ姉ちゃん大丈夫？」

「お化けいた？」

「アイちゃんは熟睡してましたから起こさない方がいいと思いますか？」

「え？ うーん。熟睡してたら起こさない方がいいよね」

「うん。熟睡してたなら起こさない方がいいよ。起こすの大変だもんね。ね、つくよちゃん」

「むー。みこと今、僕のことバカにしたでしょ」

「してないよー。ねえくるみお姉ちゃん、お化けはー？」

「お化けはいた方がよかったですか？」

「お化けはいない方がいいよ？」

「そうなんですか？　ところで、早く食堂に行かなくていいんですか？」

「あ！　早く行かないとみんな待ってるかも！」

ちよつと今日は時間をかけ過ぎました。こんなところで立ち話してる場合じゃありません。

「つくよちゃん早くいー！」

「うん！　くるみ姉ちゃんも早く！」

「私はゆっくりじゃダメなんですか？」

「ダメだよダメー！」

「ほら早くー！」

命ちゃんと月読ちゃんは、話しが噛み合ってるような噛み合ってい

ないような疑問少女、くるみお姉ちゃんの手を引っ張りながら、食堂に向かいました。

### 3・2・命と月読の朝食当番（後書き）

疑問少女。またの名をくるみお姉ちゃん。本名、胡桃くるみ（仮）。  
疑問系で喋る以外は至って普通。平々凡々な中学生である。

### 3・3・命と月読の午前中

「おいしいねー」

「ねー」

ほぼ全員が揃った食堂で、月読ちゃんと命ちゃんは朝食を食べます。食べる前に、なんかお祈りとかしたけど、よくわかんないので（作者がわからないんじゃないよ。二人がよくわかってないから）割愛。食べる席は基本的に自由。二人も仲が良い子と一緒に島の、モグモグ朝食を食べます。ここにきていない（来れない）子の分は、先生たちが部屋まで運んで行きます。で、先生と一緒に食べたり、一人で食べたりします。

食べ始めはみんな一緒ですけど、食べ終わりはみんなバラバラです。学校にはまだ行ってない、月読ちゃんと命ちゃんと愉快な仲間たちは、ゆっくり食べる傾向にあります。

「さえちゃん。つくよちゃん。そろそろ食器洗う？」

「うん。そだね」

「だねー」

食器洗いは、朝食当番さんの役目です。学校がある子は準備とかで忙しいので、食器洗いは幼少組がやります。

「ねえねえみこちゃん、つくよちゃん。この後なにする？」

食器洗いをしながら、さえちゃんが二人に話しかけてきました。

「なにしょっかー」

「僕、外で遊びたいなー」

「つくよちゃん、遊んでばっかじゃダメだよ。お勉強もしないと」

「みこと、ビーズ遊びしたいなー」

「もー。みこちゃんまで……みんなにも聞いてみよっと」

朝食を食べた後は、昼食まで基本的に自由です。

勉強したり遊んだり、みんな色々なことをします。

時刻は9時過ぎ。学校がある子はみんな学校に行き、園内はそれなりに静かです。

命ちゃんたらんちゃんとかかねちゃんは、食堂でお勉強です。来年から小学校。今から準備です。

「さえちゃん、お勉強しないといけないよって言ったのに、つくよちゃんとかねちゃんたち連れて遊びに行っちゃったね」

命ちゃんは、呆れ顔です。



「さえちゃん、気まぐれだから」

と、らんちゃんはフォロー(?)を入れました。

「遊んでばかりで、子供なんだから……」

と、あかねちゃんは、わたしは勉強してるから大人だけどね。と、暗に告げました。

「あつ、あかねちゃん。そこ間違ってるよ?」

命ちゃんは、あかねちゃんのノートを覗き込み、指摘しました。

「……そこつて、どこ?」

しかしあかねちゃんには、どこが間違ってるかわかりません。ちなみに今三人は、算数してます。足し算です。

「あかねちゃんここだよ。3 + 9は8じゃないよ。足し算なのに数がへっちやてるよ」

らんちゃんがクスクス笑いながら、具体的に教えてあげました。

「……………?」

あかねちゃんは指摘され、指折り確認。でもよくわかんない。折れてる指は、8だよな!。

「あかねちゃん。リンゴで考えればいいんだよ。リンゴが三個ある

でしょ？」

命ちゃんもクスクス笑い。

「……うん」

あかねちゃんの頭の中にリンゴが三つ浮かんだ。

「で、そこにリンゴが九個増えたら何個なの？」

「えつと……1個、2個、3個……12個……あつ」

あかねちゃんは自分のミスに気付きました。気づいた瞬間、自分の間違いが恥ずかしくて顔が真っ赤になりました。そしてらんちゃんを睨みました。らんちゃんは、ビクツてなりました。なぜにあたし睨まれるの？

「わ、わたしわかってたんだから！！こ、これはわざと間違ってたんだからね！！こんな間違いわたししないんだから！！」

顔真っ赤でらんちゃんに言い訳というか八つ当たりをするあかねちゃん。

「え、え、え、え！？」

らんちゃん、オロオロ。え？あたしがいけないの？教えちゃダメだったの？あたしが笑ってたからいけないの？でも、みことちゃんも笑ってたし最初に間違ってるの教えたのみことちゃんだよ？なのにあたし怒られるの？あたしが悪いの？らんちゃん涙目。

「あかねちゃん。らんちゃんイジメちゃダメだよ？ らんちゃんは親切で教えてくれたんだからー」

命ちゃん、あかねちゃんを窘める。

「べ、別にイジメてない！ それに、親切にして欲しいなんて頼んでない！」

「じゃあ、あかねちゃんは親切にされたくないの？」

「そ、それはやけど……もういい！ わたし一人で勉強するから！」

あかねちゃんは、一人で勝手に怒って食堂から去って行ってしまいました。

食堂に残ったのは、やれやれあかねちゃんは困ったさんだなー。と、笑ってる命ちゃんと、あたしのせいなのー？ と、涙目のらんちゃんと、自分が使った食器を一生懸命洗ってるアイちゃんの、計三人です。

「ね、ねえみことちゃん？」

らんちゃんが、怖ず怖ずと命ちゃんに話しかけます。

「ど、どうしてあかねちゃんは、あたしだけに怒ったのかな……。あかねちゃん、あたしのこと、嫌いなのかな……」

「そんなことないと思うよー？ あかねちゃんからんちゃんだけを怒ったのはねー。らんちゃんが、怒りやすいからだよ」

ニコニコと命ちゃんは、よくわからないことを言いました。

「え、ええー……?」

らんちゃんは涙目のまま、困惑しました。怒りやすいつて、どうい  
うこと?

「ねえ、らんちゃん。次は国語の勉強しよ」

「え、あ、うん……」

らんちゃんは、よくわからないまま、国語の勉強をすることにしま  
した。国語の勉強をすれば、命ちゃんの言った意味もわかるかもし  
れませんしね。

そして食器を洗い終えたアイちゃんは、命ちゃんたらんちゃんに見  
つからないように、小走りで食堂から脱出しました。

「ねえ、つくよちゃん」

「なにー、さえちゃん」

命ちゃんたらんちゃんが、『ぬ』って書きづらいよねー。と、言っ

ている時、庭でカン蹴りをしていた月読ちゃんは、茂みに一緒に隠れていたさえちちゃんと、お喋りしていました。ちなみに鬼は、けんちゃんです。

「つくよちゃんとみこちゃんって、双子なんだよね？」

「うん。そうだよ」

「でも、双子双子してないよねー」

「双子双子……？」

なに、それ？ 月読ちゃんは、首を傾げます。

「わたしもそう思うー」

二人の近くに隠れてたはなちゃんが、話しに加わってきました。

「でしょでしょ？ ねえ、なんで双子双子してないの？」

「あのさ、さえちゃん、はなちゃん。双子双子って、なに？」

「例えばねー。いつも一緒にいるとかー」

「そうそう。一緒に同じこと言ったりしたりー。つくよちゃんとみこちゃん、双子なのに全然そういうことしないよね。もっと双子双子するべきだと思うな」

双子双子＝双子っばい。ということらしいです。

「え？ 双子って、そういうことしないとダメなの？」

初耳です。

「そうだよー。だってねー。本とかの双子は、みんなそうだよー？」

「そうそう。テレビに出てた双子も、みんなそうだったよ？」

テレビは職員室というか事務室っぽい部屋に、一台だけあります。たまにみんな見えます。

「え、あ、でも。僕とみこと。いつも似た服着てるよ？ それに、顔もそっくりだよ？ 僕たち双子だよ？」

月読ちゃん、なんか責められてる感じがです。君たちホントに双子なのー？ って言われてる感じがです。双子です。家族です。双子じゃないなんて困ります。

「いつも似た服着てるのは、双子双子だねー。でもー。なんかー。いんぱくと？ が、足りないよねー」

「いんぱくと？」

なんじゃそりゃ。

「そうそう。はーちゃんの言う通りだよ。顔も確かにそっくりだけどー。なんか、パツとしない双子双子だよねー」

「うっ、うっ……ふ、双子だもん！ 僕とみことは双子だもん！ 双子双子してるもんー！！」

月読ちゃん、二人が言ってることがよくわからなくて、困っちゃって、怒っちゃって、涙目で、今にも泣きそう。

「つくよみちゃん、どうして怒ってるのー？」

はなちゃん、よくわかんない。

「僕怒ってないもん！！ はなちゃんとさえちゃんがよくわかんないこと言うからいけないんだもん！！ 僕とみことは双子だもん！！」

月読ちゃん、手をバタバタさせて、泣く、一歩手前。

「ごめんなさいつくよみちゃん。私たちが悪かったよー」

いまいちよくわかんないけど、さえちゃん、とりあえず謝る。

「僕とみことは双子だもん！ 双子だもん！！」

しかし、月読ちゃんは止まらない。癪癪かんしゃくです。ヒステリーです。たぶん。

「そうだねー。つくよみちゃんと、みことちゃんは、双子双子してない双子だよねー」

「うん。つくよみちゃんとみこちゃんは、双子だね」

なにを当たり前のことを？ みたいな二人。

「双子双子してる双子だもん！ 双子だもん！」

「えー。あんまり双子双子は「はなちゃん。双子双子してるってこと」にしよう。つくよちゃん、泣いちゃってるし」うん。わかった！。つくよみちゃんとみことちゃんは、双子双子してる双子だよー」

「そうそう。双子双子してるよ。バッチシだよ。完ぺきだよ？」

「……ほん、と？ 僕と、みこと、双子、双子、してる？」

月読ちゃん、嗚咽おんげつを漏らしながら最終確認。

「してるよー。でも、もつとすればいいよねー」

「そうだね。その方が楽しいね」

「……うん。僕、がんば、る」

「頑張れー」

「私たちも協力するよー！」

「ありがとう」と

月読ちゃんは涙を拭いて、えへへへー。と、照れ笑いをしました。泣いちゃって恥ずかしい。はなちゃんとさえちゃんも、えへへへー。と、笑いました。月読ちゃん泣き止んでよかったー。の、笑いです。この二人に悪気もなければ、悪意なんて全くありません。



「あのさー。今、カン蹴りしてるんだよなー」

そしてけんちゃん、茂みに隠れてる（つもり）の三人を見下ろしながら、呆れ顔で呟きました。

「えーい！」

そして一人、反対方向の茂みに隠れていたかなちゃんは、その隙にカンを元気よく、蹴っ飛ばしました。

3・3・命と月読の午前中（後書き）

誰が喋ってるかよくわからなくなる今日この頃でしたー。

後三話くらいは、くるみわり園の話って、風の便りが言っていましたー。

さえちゃんとはなちゃんがタッグを組むと、相手は泣く。って、かなちゃんが言っていましたー。

眠いですー。

### 3・4・命と月読の昼

「おいしいねー」

「ねー」

デジャブ。

そんな感じでそんなわけで、どんな感じでどんなわけかはわかりませんが、お昼です。冷し中華です。昼は麺になることが多いです。不思議です。不思議だけど、命ちゃんと月読ちゃんは麺類好きなので、無問題もーまんだいです。

午前中。

命ちゃんと月読ちゃんは色々やりました。命ちゃんらはらんちゃんと勉強した後、ビーズ遊びをしました。指輪とか作りました。あかねちゃんも途中でやってきて（たぶん一人で部屋にいるのに飽きたんです）一緒にやりました。ブローチとか作りました。

ビーズ遊び飽きたなー。って、三人が思っていたら、外で遊んでた月読ちゃんたちがやってきて、双子特訓とかしました。いつせーのーでっ。で、喋る練習とか、テレパシーとか練習しました。やってるうちに、みんなでやることにしました。ワイワイガヤガヤ。あーでもないこーでもない。あかねちゃんは今、子供っぽいと思ってる。あかねちゃんは今、だけど楽しいなー。あかねちゃんは今、お腹空いてる。とか、言い合いました。あかねちゃんが怒って、半ベソかき始めたのでやめました。みんなで謝ったら、大人のあかねちゃんは許してくれました。

なんやかんやそんな感じでしてたら、真奈美先生が食堂に顔を出したので、双子双子するにはどうするのー。ってみんなで聞きました。双子だから何しても双子双子ですよー。って真奈美先生は答えて去

って行きました。月読ちゃんと命ちゃんを見て、双子が修道服着るとミステリアスでいい感じだろうなー。と、真奈美先生が思っていたのは内緒です。

そんな感じでそんなわけで、昼になって、お昼はみんなで作ることが多いので、みんなで冷し中華を作って、美味しくいただきました。ちなみにアイちゃんは、朝食を食べた後はお部屋に戻って、しばらく市松人形とにらめっこしてました。その後は、真奈美先生がお昼ですよー。と、呼びに来るまで、ずーっとブランコを漕いでました。

一人でいて寂しくないのか寂しいのか。一人で遊んで楽しくないのか楽しいのか。それは、アイちゃんにしかわかりません。もしかしたら、アイちゃんにも、わからないかもしれませんが。

現在時刻は午後1時過ぎ。

お昼を食べた後は、また自由時間です。

お昼の後の子供たちの行動は、まずはお昼寝するかしないかで別れます。

アイちゃんやらんちゃんとはなちゃんは、たいてい寝ます。だって眠いんだもん。  
月読ちゃんと命ちゃんは、たまに寝ます。だってたまに眠いんだもん。

かなちゃんは、周りの雰囲気によって、寝たり寝なかったりです。

遊ぶ人数が足りないなら寝ない。それでもない時は寝るー！。さえちゃんは、たいてい寝ません。だって眠くないんだもん。けんちゃんも、たいてい寝ません。だってさえちゃんと遊びたいんだもん。眠いけど我慢だもん。あかねちゃんは、寝ないと言いつつ、たいてい寝ます。ね、眠くないんだからね！ わたし大人だからお昼寝なんかしないんだから！ ねむくなんて……ないん……だから……。って感じです。さらに、こ、これはお昼寝じゃなくて、その、あの、えっと、ふて寝！ ふて寝だもん！ ってな感じになります。

さて、本日はどんな感じかというところ。まず、アイちゃんやらんちゃんとはなちゃんは、自分たちの部屋に向かい、お昼寝タイムです。おやすみー。おやすみー。って、みんな言います。

月読ちゃんは、午前中外で動き回って疲れたので、お昼寝タイムです。命ちゃんは眠くないので、お昼寝しません。おやすみー。みー。って、みんな言います。

他の子たち、命ちゃん、さえちゃん、けんちゃん、あかねちゃん、かなちゃんは、寝ないことになりました。

寝ないことになると、どうなるかというと、遊びます。午後は、近くの自然公園に、先生と一緒に散歩に行くことが多いです。先生が忙しいと、散歩はなくなり、みんなは午前中同様、園内で遊ぶことになります。

今日は、真奈美先生が引率してくれるようです。2時に出発ということで、それまではみんな準備したり、なんかしたりして過ごしました。

そして2時。

食堂に、散歩組が揃いました。あかねちゃんを除いて。

「あかねちゃんはどうしましたか？」

真奈美先生はみんなに聞きます。ちなみに真奈美先生は、自然公園に行く時も修道服です。黒いです。今日はいい天気。暑くないのかな。

「あかねちゃん、自分の部屋にいるんじゃないの？」

命ちゃんが、あかねちゃんと同室のかなちゃんに聞きます。

「んー。あかねちゃんね。やっぱり、寝ちゃったみたい。起こすのかわいそうだから、置いてきた」

かなちゃんは、やっぱりなー。みたいな感じですが。

「あかちゃん眠くてフラフラしてたもんねー」

さえちゃんも、やっぱりなー。みたいな感じですが。

「眠いならおとなしく寝てればいいのに。なんで、散歩行くなんて言っただろっな」

けんちゃんは、呆れ顔です。ちなみにけんちゃんも眠いです。

「先生ー。どうするのー？」

命ちゃんは、真奈美先生に、あかねちゃん置いて行くのー？ と、聞きます。

「そうですね……いつも通りで行きましょう」

真奈美先生はちよつと考えてから、いつも通りで行くことにしました。

子供たちは、「……はい」「……」と、答えました。

真奈美先生に後に続いて、子供たちは食堂から玄関、ではなく、あかねちゃんが寝ている部屋に向かいます。

「あかねちゃん。入りますよ」

真奈美先生は、そう言って、部屋に入りました。部屋の中では、あかねちゃんが、すーすーと、寝息を立てて眠っていました。天使の寝顔！。

「あかねちゃん。起きて下さい。散歩に行く時間ですよ」

真奈美先生は優しくあかねちゃんを揺すりながら、起こしてみます。後ろでは、子供たちが「あかねちゃん一緒にいこうよ」「あかねちゃん。散歩行こうよ」「あかねちゃん起きて」「あかね起きろー」と、小声で言っています。

「……やっ！」

あかねちゃんは、不機嫌そうな顔になって、寝返りをうち、真奈美先生に背を向けました。

「仕方ありませんね。さ、みんな行きましようか」

「「「「はーい」「」」」」

真奈美先生は、早々に諦め、子供たちと一緒に部屋を出て、玄関に向かいます。

つまりこういうことです。

最初から真奈美先生はあかねちゃんを起こす気はありませんでした。というか、起こせるとは思っていませんでした。じゃあなぜ、こういう行動を取ったかというところ、このプロセスを踏まないと、後で起きたあかねちゃんが、置いてったー！ と、怒った時大変なんです。ということで、真奈美先生は、一度起こしたんだけど、起きなかつたから仕方なく置いて行っただけですよ。と、言えるように、こういう事をしたわけです。なんか悪いか！

「みんなちゃんと帽子をかぶらないといけませんよ。日差しが強いですから」

真奈美先生は、子供たちに麦藁帽子を配ります。みんなおとなしく被ります。真奈美先生も、ベールの代わりに被ります。修道服に麦藁帽子。あんばらんすー！。

「じゃ、行きましようか。忘れ物はありませんね？」

「ありませーん！」

「ないでーす！」

「私もー！」

「俺もー！」



子供たちは、水筒とポシエットみたいな小さい鞆を叩いて、忘れ物がないのをアピールです。

「一人ではぐれないように、ちゃんと手を繋ぎましょう」

「はい。みことちゃん。今日は私と遊ぼ」

「うん。かなちゃんいいよー」

「じゃあ私は、けんちゃんと遊ぼ」

「う、うん」

真奈美先生のはぐれること前提の指示で、かなちゃんは命ちゃんとさえちゃんはけんちゃんと手を繋ぎました。けんちゃん、眠いを我慢したかいはありました。さえちゃんの手、柔らかいです。空気を読んだかなちゃんに感謝するのですが、かなちゃんが空気を讀んだことは、誰も気付いてないです。

「では、行つてきます」

「「「行つてきますーす！」「」「い、行つてきますす！」

照れ照れのけんちゃんが、一人ちよつと遅れましたが、みんなは大きな声で行つてきますと言いました。

事務室的な何かの部屋で作業していた職員さんが、「行つてらっしゃい。車に気をつけてね」と、返してくれました。



### 3・4・命と月読の昼（後書き）

これは一度。どこかでくるみわり園の子供たちをひとまとめで紹介した方がいいかもしれない。なによりも、私のために。つてな感じで、昼のお話でしたー。

命と月読、らんちゃんとはなちゃん、あかねちゃんとかなちゃんが同室です。さえちゃんとけんちゃんは、小学生の子と同室です。つてな感じという噂でしたー。

あかねちゃんの対処は先生によって変わります。真奈美先生は寝かしておくという対処をしましたが、他の先生の場合、おぶって連れに行く。ということをすることもあります。つてな感じに結構自由。というか変な園なのでしたー。

かなちゃんのKY率（空気読める率）は、半端ねえらしいです。もはやそのKYはKY（空気読める）ではなく、KY（危険予知）に達してるらしいです。

かなちゃん、恐ろしい子。

つてな感じで、次回は自然公園で、あんなことやこんなことが起る話です。

また次回。

### 3・5・命と自然公園

「着いたー!」

「着いたねー!」

「着いてるねー!」

「確かに着いたー!」

というわけで、命ちゃんと愉快な仲間たちは、自然公園噴水前に着きました。

自然公園自体にはだいたい10分くらいで着きました。歩こう歩こう。私元氣ー。歩くのそれなりに好きー。と、元氣よく歌っていたらすぐ着きました。で、自然公園から自然公園のだいたい中心にある噴水まで10分かかりました。かんとりーろーどー。なんだろー。かんとりーろーどー。と、歌っていたら着きました。

この自然公園。自然公園というだけあって、木々がいっぱい植えてあり、芝生があったり、茂みがあったりと、自然溢れる公園です。特質するべきことは、その広さです。東京ドーム何個分? と、聞かれたら、5個分はあるんじゃない? と、答えても、あながち嘘じゃないんじゃない? と、思う広さです。

自然公園ということで、遊具などはあまり置かれてはいませんが、一部アスレチックゾーンがあったりなかったり。休日は、親子連れやカップルがピクニックをしたりしなかったり、メタボな人がランニングしたりしなかったり。平日は、近所の子供が遊んだり遊ばなかったり。奥様たちが井戸端会議をしたりしなかったり、ペットの散歩したりしなかったり。夜はあんなことやこんなことをしたりし

なかったりと、まあつまり、市民の憩いの場的な場所に違いありません。

「では、一時間後にここに集合です。知らない人についていけないように注意して下さいね?」

「「「「はい!」」」」

真奈美先生のお許しをもらった子供たちは、ワイと、駆け出しました。真奈美先生はそれを見送り、近くのベンチに座りました。ポーツとするのは、嫌いではありませんし、ポーツとするのも仕事なのです。たぶん。

真奈美先生は、この公園についたら、基本的に自由行動にさせます。子供たちも自由に遊びたいだろうと思つての判断です。断じて、自分が楽だからではありません。かなちゃん、命ちゃん、さえちゃん、けんちゃんは、しっかりしているので、問題ないという判断もちゃんとしています。問題がある(心配な)子供がいる場合は、ちゃんと見ますよ?

「ねえねえ何して遊ぶ?」

「やっぱりあれだね。ベンチ探そ!」

「うん! 私もさんせー!」

「おれもー!」

「じゃあ、前みたいに勝負する?」

「うん! 私とみことちゃんチームと、さえちゃんとけんちゃんチ

「ムね！」

「うんいいよー！ けんちゃん頑張ろうね！」

「う、うん！」

「じゃあ、一時間後に噴水に集合だね！」

「うん！」

「みこちゃん一人だと心配だけど、かなちゃんがいるから大丈夫だね！」

「みことは時計、たまに間違えるもんな」

「むー！ けんちゃんだってたまに間違えるじゃん！」

「さえちゃんがいるから安心だよね」

「けんちゃん？わからなかったら恥ずかしがらずに、私に聞くですよ？優しく教えてあげますからね？」

「こ、子供扱いすんなよ！」

「あー！ けんちゃんあかねちゃんみたいなさ言っただー！」

「ホントだー！ おかしいのー！」

「あかちゃんの真似したのー？ なんでなんでー？」

「ま、真似なんかしてねえ!!」

「わー! けんちゃんが怒ったー!」

「逃げるー! じゃあさえちゃん! また後でねー!」

「うん! またねー! ほらけんちゃん行くよ。私たちはあっち探しに行こ」

「う、うん」

というわけでそんな感じで、子供たちは二組に別れて遊び始めました。

さてさて。

木々がたくさんあり広々としたこの公園では、どのように遊ぶのが一番楽しいでしょうか。ずばりかくれんぼです。間違いなくかくれんぼです。広いところでやるかくれんぼは、大人も夢中になる楽しさがあります。

当然、くるみわり園の子供たちも、この自然公園でかくれんぼをするのが大好きです。しかし、広いところでやるかくれんぼは危険があります。そうです。見つからなくて迷子です。大変です。あと、夏場は虫刺されとかも大変です。

昔、この自然公園でかくれんぼをしていたら、迷子になってしまっ

た子がいました。探すのは大変でした。それからというもの、くろみわり園の子供たちは、二人一組で行動するようになっていきます。迷子になっても二人ならそれなりに安心です。たぶん。今日ここにいるのは四人。つまり二組です。二組でかくれんぼというのも味気ないので、今回四人はかくれんぼをしませんでした。

かくれんぼではなく、ベンチ探しをすることになりました。

さて。この自然公園の特徴は広いこと。そしてもう一つが、隠しベンチがあるあることです。隠しベンチとはその名の通り、隠してあるベンチのことです。

普通本来平々凡々なベンチというのは、疲れた人が座ったり休憩したり話したりという用途で使われるため、目につきやすい場所や、通路沿いに設置されているものですが、この自然公園にはなぜか、わざと見つかりにくいところに設置されているベンチが多数あるのです。それが通称『隠しベンチ』。例えば、木々の間。茂みの奥。建物の影。獣道のような場所を抜けた丘の上などなど、色んな場所に設置されています。その数は噂によると百は越えるらしいです。隠してあるなら探したくなるのが人の業。命ちゃんたちも、ベンチを探して遊ぶのです。

「かなちゃんあつたよー！」

「二個目だね！」

たかがベンチと侮るなかれ。この隠しベンチ。隠してあるだけに、他の平々凡々なベンチとは一味違う。例えば今、命ちゃんとかなちやんが、茂みを分け入り木々に囲まれた場所に見つけた隠しベンチは、



「わー！　なんかこれ、ゆらゆら揺れるよー！　楽しいー！」

「みことちゃん！　私も座りたい座りたい！」

ロッキングチェアです。いわゆる安楽イスです。ゆらゆら揺れる安楽イス型のベンチです。一人用です。雨風にさらされても大丈夫なように加工もされています。高そうです。でも、ベンチです。隠しベンチです。他にも隠しベンチ、色々なタイプがあるらしいです。とまあそんな感じに、隠しベンチは一味違うのです。子供たちが、宝探し感覚で楽しく遊ぶには最適なのです。大人になると、自分に最適な隠しベンチ、マイベンチの一つや二つ持ってる（知ってる）人もいるとかいないとか。隠しベンチのプロともなれば、隠しベンチマップなるものを作成して、その情報売ってるとかなんとか。隠し隠しベンチなるものが存在していて、そのベンチは黄金に光り輝いているとかなんとか。

「かなちゃんあったよー！」

「ホントだー！　ぐにゃぐにゃしてるね！」

なかなか不思議なこの自然公園は、恰好の遊び場なのです。

### 3・5・命と自然公園（後書き）

ほのぼのー。

東京ドーム何個分とか言われても、東京ドームがどのくらいの大きさかわからないからいまいちどのくらいの大きさなのかわからない私でごめんなさい。

隠しベンチ。

重要アイテムなのです！！

たぶん！！

がんばります！！

また次回！！

### 3・6・命とかなの迷子のベンチ

「ねえみことちゃん。ほんとにこっちでいいの？」

「うん！ たぶん！」

「多分なんだ……」

命ちゃんの自信満々の、たぶん！に不安を感じながらも、かなちゃんは命ちゃんの後ろをついていきます。

これまでに二人は、ロックチエア風、ぐにゃぐにゃ風、高い低い、普通、の計四つの隠しベンチを発見しました。ちなみに『高い低い』というのは、二人くらい座れるベンチなただけ、なぜか高低差があるベンチです。滑り台みたいに遊びました。

現在二人は、藪に囲まれ獣道のように狭いところを進んでいます。もちろん、隠しベンチを見つげるためです。しかし行けども行けどもベンチは見えず。緩やかな上り坂は、ゆつくりと二人の体力を削り取り、回りはずっと同じ風景で、なんだか迷子になりそうで、かなちゃんは精神的にも疲れます。

「みことちゃん。ちょっと休もうよー。私疲れちゃったよ」

「もうちょっとー！」

「もうちょっとなの？」

「うんー！」

「多分？」

「うん！」

「……みことちゃん元気だねー」

「うん！」

かなちゃんとは違い、命ちゃんは元気いっぱい。かなちゃんの手を引きながら、ずんずん歩きます。

命ちゃんが今向かっている隠しベンチは、月読ちゃんに教えてもらった隠しベンチです。先日、命ちゃんが神無と遊んでいた時に月読ちゃんが偶然（かくれんぼ中に）見つけた場所で、月読ちゃんがすごいすごい言っていたので、命ちゃんは一度行ってみたかったです。が、なかなか行くタイミングがなく（みんなで遊んでると忘れちゃうんです）、今日こそは！ と、命ちゃんは意気揚々でやる気満々です。

「あ！ ほらほらかなちゃん！ もうすぐみたいだよ！」

「ほんとだ！」

前方がなんだか明るく開けた場所になっているようです。かなちゃんもゴールを見て、元気を取り戻しました。

二人は自然と早足になり、そして、藪から抜けました。

「着いたー！！」

「うわー……なんだかすごいとこだねー」

命ちゃんはバンザイをして喜び、かなちゃんは、こんなところがあつたんだー。と、感嘆の声をあげました。

藪を抜けたそこは、ツツジや木々に囲まれた中で、ぽっかりと開いた空間でした。小さな丘になっていて、そこにはベンチが一つ、ぽつんと、置かれています。まるで全てに忘れられたような、時が止まっているような場所。

一言で言えば、淋しい場所。

かなちゃんはそう思いました。

「かなちゃん行くよー!」

「あ! 待ってよー!」

かなちゃんがこの場所について思いを巡らしていたら、命ちゃんはかなちゃんから手を離して、ベンチに駆け寄って行ってしまいました。かなちゃんも慌てて命ちゃんの後に続きます。

「いちばーん!」

命ちゃんがぴょーんとベンチに座って。

「じゃあ私、にばーん!」

かなちゃんもぴょーんとベンチに座って。

「わぁ……すーい……」

「ほんとだねー……」

二人は感嘆の声を上げました。

いえ、別にベンチの座り心地が格別によかったわけではありません。ベンチ自体は普通のベンチです。子供なら三人座れるくらいの普通の木製ベンチです。

ただ、ベンチから見れる風景が、素晴らしいものでした。

この自然公園は、元々胡桃割市の高いところに位置するわけなんです。この場所はそんな自然公園内で高いところにあるわけで、そして図はかつたように、まあ恐らく図はかつたんだらうけども、ベンチの前方には木々がないわけで、ということは、このベンチからは街が一望出来るというわけなんです。遠くもよく見えて、すごい眺めがいいわけですよ。具体的に言うと、胡桃割市を一望出来るわけではなく、小町を一望出来るわけなんですけど、まあ、眺めがいいことには変わりないです。

夜は、街の光と夜空の煌きらめきが合間って、もつと綺麗な眺めが見れるでしょう。こんな場所で告白とかしたら間違いなく成功しちゃうと思うね！

「あ！ かなちゃん！ くるみわり園も見えるよ！」

「ほんとだ！ ちっちゃいね！」

「うん！ なんかおもちゃみたいだね！」

命ちゃんは景色に夢中です。巡お姉ちゃんたちが通ってる学校はどこかなー。巡お姉ちゃんたちいるかなー。と、探しています。

日向命。月（暦）を読む神様というわけで（？）、視力は2.0。どんなに視力がよくても、ズームイン機能がなければ巡たちを見つけることが出来るわけないけど、楽しそうだからいいじゃない。

「ほんと、おもちゃみたい……」

隣に座ってるかなちゃんは、命ちゃんとは打って変わってなんだか寂寥感に溢れています。

おもちゃみたい。

つまりそれは作り物みたいで現実感がないということ。命ちゃんは楽しそうにこの景色を見ているけど、私はこの場所の淋しさも合間つて、なんだかこの景色も淋しく見える。それと同時に寂しくなる。なんだか自分の居場所がないような。なくなったような。いや、元から自分には居場所がなかったような。そうまるで、迷子になったみたいだ。

「……」

アンニョイな表情を浮かべながら、水筒から麦茶を飲むかなちゃん。その姿は5才とはとても思えないです。

「……ねえ、みことちゃん」

一服して体力は回復したけど、心はなかなか回復しないかなちゃんは、命ちゃんに話しかけました。

かなちゃんはどこか真剣な感じですが、命ちゃんはそんな様子には気付かず、ベンチの後ろを覗き込みながら、「なにー？」と軽い感じで答えました。さっきまで景色を眺めていましたが、今はベンチに興味を示しているようです。興味の対象がコロコロ変わりますねこの子は。

「みことちゃんは、寂しくない？」

「全然」

命ちゃんは即答でした。深く考えずに、何も考えずに答えたという

よりも、深く考える前に、何かを考えてしまつ前に、即座に速答した。そんな感じでした。

「私には真奈美先生も園長先生もアイちゃんもけんちゃんもらんちゃんもはなちゃんもあかねちゃんもさえちゃんもかなちゃんも水無お姉ちゃんも巡お姉ちゃんも神無お姉ちゃんもつくよちゃんもいるから全然寂しくない」

そして言い聞かせるように、固い口調でそう言いました。

自分に言い聞かせるように。かなちゃんに言い聞かせるように。そう言いました。

「そっかあ……」

かなちゃんは、おもちゃを見下ろしながらそう呟きました。だから命ちゃんがどんな顔で、自分の質問に答えたのかは見てなかったけど、きつと命ちゃんは無表情なんだろうなあ。と思いました。そんな風に思っているかなちゃんの横顔は、子供とは思えない、大人びた色をしていました。

「ねえねえかなちゃん。これ、なにかない」

命ちゃんがさつきとは正反対の柔らかい口調でかなちゃんに話しかけました。

「ん？ なになにー？」

かなちゃんも、歳相応な調子です。

命ちゃんのようにかなちゃんもベンチの裏側を覗き込みました。命



ちゃんが指差したところには、漢字が彫られていました。

「これなんて読むのかな。みなみ……なみ……やく？」

命ちゃんは漢字の勉強中です。

「えっとねー……みなみ……ほなみ……けいやく？　かな？　『南穂波契約済み』って書いてあるよ」

かなちゃんは優秀過ぎます。まだ小学校にも通ってないのに、漢字完璧とは。天才かもしれませぬ。

「どういう意味？」

「んー……わかんない」

二人は首を傾げます。天才のかなちゃんでも、よくわかりませぬと。

「あー！」

かなちゃんが何かに気付いたように、声を上げました。

「どろしたのかなちゃん？」

「もうすぐ一時間経っちゃうよー！」

「そうなの！？　え、でも、どうしてわかるの？」

この辺に時計はありません。

「私には体内時計があるんだよ！ 私の体内時計は完璧だよ！」

「体内時計！ なにそれみことも欲しい！」

「あげれないよ！ ほら、早く行こ！」

「うん！」

命ちゃんとかなちゃんは、手を繋いで駆け出しました。

「かなちゃん速いよ！こけちゃっつよ！」

「大丈夫！多分！」

「たぶんなの！？」

先程の会話なんてなかったかのように、二人は子供らしく子供のよ  
うに何の悩みも不安もないように、元気よく、楽しそうに走ってい  
ます……

### 3・6・命とかなの迷子のベンチ（後書き）

南穂波契約済みについては、まあ、特に深い意味はないです。知ってる人は知っている。知らない人は別に知らなくても何ら問題ないそんな漢字です。ただ一つ。ただ一つだけ。これだけは知っておいて欲しい。南穂波さんは私が1番気に入ってるキャラだということ。ええはい。出番はないけどね。たが！出番の多さが全てじゃないんだよ！出番がなくても私に取っては穂波さんは特別なんだよ！失礼！興奮してます！

さて。

かなちゃん……いくつ？

という話でしたー。かなちゃんにも色々あるみたいです。

命ちゃんが途中、名前を上げていくシーンがありましたが、あそこ  
に上げられた名前の順番。あれは………テキストに見えてテキスト  
ではない可能性があります。

だからどうした。

という話でしたー。

毎日は無理でも一週間に一度は更新したい今日この頃。

これからもよろしくどうぞ。

また次回。

### 3・7・命と月読のおやつ

「おいしいねー」

「ねー」

デジャビュ。

自然公園から帰ってきた命ちゃんと愉快な仲間たち。

隠しベンチ発見勝負は、5対2で命とかなチームの勝ちでした。

「けんちゃんが全然やる気なかったから負けたんだよ！」と、さえちゃんはご立腹でした。けんちゃんは面目ない。という表情でしたが、どこか幸せそうだったので、察して下さい。

くるみわり園に戻ってきた時刻は16時。小学生低学年組がそろそろ帰ってくる時間でした。

「命おかえりー！」「つくよちゃんおはよー！」

お昼寝組もすでに起きてきていて、食堂で遊んでいました。あかねちゃんはちよつぱり不機嫌そうでした。置いてかれたんだから、まあ、不機嫌なもの仕方ありませんね。ちなみにアイちゃんは、外でブランコしてました。もちろん一人で。

「でねでね。つくよちゃんが教えてくれたところ行ったの！すごいキレイだったよ！」「でしょでしょ！僕はね、らんちゃんたちとあや取りしてた！あかねちゃんうまく出来なくて、ちよつと泣いてた！可愛そうだったから僕、優しく教えてあげたの！」

命ちゃんと月読ちゃんが互いに互いがいなかった時の情報を交換、共有、補完していると、園長先生がダンボール箱を持って食堂に入ってきました。

「あ、園長先生だー」「ほんとだー」「先生なに持ってるのー」  
子供たちは、珍しいなー。と思い、園長先生に群むらがりました。

園長先生は、教会の仕事もあるので、日中ここに来るのは大変珍しいのです。

「ラムネをたくさん頂きましたので、皆さんどうぞ」

園長先生はそう言っつて、ダンボール箱を開けました。中にはラムネがたくさん入ってました。子供たちは、わーい。と、手に取りました。

そんなわけで、今食堂では、子供たちがラムネを飲んでいるのでした。

このラムネ。近所で飲食店を営業してる人からもらいました。なんでも、ラムネの発注をミスして、たくさん仕入れてしまい困っていたらしく、格安で譲ってくれたのです。格安過ぎて、もらったも同然です。

なぜそのお店がラムネを発注したかというところ、八月の始めに大きな祭があるので、その準備のためなのですが、それはまた別のお話です。

「ん……ビー玉取れない！」

ラムネをもう飲んじゃったさえちゃんが、そう言っつてラムネのビンテーブルに転がしました。フタは開かないし、指入れても届かないし。さえちゃんは諦めちゃいました。

「俺が取っつてやるよ！」

けんちゃんが、自然公園の失敗をここで挽回するぜ。という意気込みで名乗りを上げました。さえちゃんが転がしたビンを取り、フタを外そうと頑張ります。

「けんちゃん頑張れー！」

さえちゃんの応援を受け、けんちゃんはさらに頑張ります。しかし悲しいことにけんちゃんは気付いていません。回す方向が逆だという事実……。

「そういえば、どうしてラムネって、ビー玉でフタしてるんだろう……」

ビンの中にある透き通っていて綺麗なビー玉を眺めながら、らんちゃんはその呟きました。

「なんでだろうねー」

隣に座っていたはなちゃんも、疑問に思いました。

かなちゃんもあかねちゃんもさえちゃんも、近くにいた小学生組もなんでだろうと思ひ、さらに庭で一人なかなかビー玉を落とせなくて困っていたアイちゃんも偶然、なんでだろうと思っていました。

けんちゃんは、そんなことより頑張らないと。と、思っていて、月読ちゃんと命ちゃんは、なんでだっけ。と、神無の話を出していました。

「あ！ 思い出した！」 「みことも思い出した！」

二人はほぼ同時に思い出しました。

「なにを思い出したの？」

かなちゃんが尋ねました。

「どうしてラムネがビー玉でフタしてるか思い出したの!」「この前、神無お姉ちゃんに教えてもらったの!」

「え? みことちゃんたち、どうしてビー玉でフタしてるから知ってるの?」

らんちゃんビックリ。まさか知ってる人がいるとは思いませんでした。

「うん! えっとね、ラムネは最初は、えっと……」「コルク!」

「そう! コルクでフタしてたの!」

「コルクって……シャンパンフタしてるやつ?」

かなちゃん、確かそんな名前だったような……。という感じで尋ねました。

「そうそれ! クリスマスにポーンって飛ぶやつ!」「うん! 木っぼくてなんか細長いやつ!」

あー、あれかと、コルクってなんだ? と思っていた子供たちも、コルクをイメージすることができました。くるみわり園では毎年クリスマス、シャンパンを飲むのです。

「最初はコルクだったのに、どうしてビー玉になったの?」

さえちゃんが続きを話すように促します。

「えっとね……えっとー、んーっと、コルクは、なんかダメだったの!」「そうなの! コルクはね、なんかもれちゃうからダメなの

！ だからビー玉にしたの！ だってそっちの方がキレイだしいい感じだもん！」「そう！いい感じなの！」

二人は肝心なところが説明出来てませんが、子供たちは「なるほどな」「確かにビー玉はキレイだもんね」「コルクは開ける時怖いしね」「飛んじゃうしね」「ビー玉の方がいい感じだよな」と、納得しました。

「みことちゃんたち、よく知ってたね」

「すごい」

らんちゃんとはなちゃんが、二人を褒めました。

それに続いて他の子たちも、「ためになったよ」「物知りだね」「明日学校で友達に教えよつと」「こんなこと知ってるなんて、先生みたい」と、二人を褒めました。

月読ちゃんと命ちゃんは、えへへへ。と笑って、満更でもない様子です。

「……………ふん」

「……………」

みんなに褒められてる二人を、あかねちゃんがつまらなそうに、しかしどこか羨ましそうに見ていた事に気付いたのは、あかねちゃんの向かい側に座っていたかなちゃんだけでした。

「開いたー！取れたー！」

そして一人無我夢中でフタと格闘していたけんちゃんは、ようやく



開けることができて、ビー玉を取り出すことができました。

「やった！ けんちゃんありがとう！」

ビー玉を受け取り、さえちゃんはけんちゃんに満面の笑みを浮かべて感謝しました。

けんちゃん、頑張ったかいがありましたね。

### 3・7・命と月読のおやつ（後書き）

えっと、おやつまで辿りついたから、後は……夕食、夜……いや、夕方もあるかも……あと三話くらいで三章は終わりかな。そんな感じですよ。今回の章は、神無やら水無やらは一切出てこない、ある意味特別章です。そんな感じですよ。

ああ後、内容とは一切関係ないですけど、最近、二週間夫婦の振りして！とかいう広告を頻繁に見るんですけど、まあ興味はありますよ。そういう話というか展開？嫌いじゃないですし。でも、毎日その宣伝見るとなんか逆に絶対クリックしねえぞ。とか思っちゃいますよね。私だけじゃないと思います。そう思っちゃう人。

なんでも噂によると、人は頻繁に見る物に好意というか興味を持つ性質があるらしいんですよ。CMとかは、そういう性質があるから効果があるらしいんですけど。

でも逆に、何度も見ていると強制されているように感じて、自由を勝ちとるために、逆に嫌いになっちゃう性質もあるらしいんですよ。何度も同じCMやっていると、逆に嫌いになったりしませんか？それはこういう性質のせいらしいですよ。買えと強制されている気がするんですよ。

ベストセラーとか。今大人気！とかいうのは、逆に読まない使わない人も同様です。みんなが読んでるからお前も読めよ。と強制されている気がするんですよ。しかしそういう仕組みを知っちゃうと逆に、みんなが読んでるからお前も読めよと強制されている気がするから読まない。と強制されている気がするから読む。ということも起こるらしいんですよ。ということは、みんなが読んでるんだからお前も読めよと強制されている気がするから読まないと強制される気がするから読むと強制されている気がするから読まないと強制されてる気がするから無限ループって怖くね？

まあ何が言いたいかというと、投稿スピードをあげて、『彼女たちの平々凡々な日常』という単語を頻繁に利用者に見せるだけじゃアケセス数は伸びねえんだよチクショー！ 内容が面白くなきゃ伸びねえんだよコンチクショー！ と、海に叫びたくなる今日この頃でしたと言いたかったんじゃないですか？

なんだこの結論。と思いつつ、次回に続く・・・

### 3・8・命と月読の夕方

「今日巡姉ちゃん来ないのかなー」

「うーん。どうかなー」

月読ちゃんと命ちゃんは、食堂で、ビー玉をコロコロ転がして遊んでいます。回転を加えて戻ってこーい。

「巡お姉ちゃん、テストとかればーと？ とか忙しいです！ って言ってたから、来れないんじゃないかなー」

七月中旬。大学は前期のテストがあつたりなかつたりするのです。

「じゃあ、水無姉ちゃんたちも来れないのかなー」

「たぶんねー」

「会いに行こっか」

月読ちゃんが小声で、回りにいる子供たちには聞こえないように、命ちゃんに提案しました。ニヤツ。と、笑っています。悪い事をしようとして誘う笑みです。

「んー。今から行くと遅くなっちゃわない？」

今の時刻は16時30分。行って遊んで帰って来ると、18時過ぎになってしまふ。それはちょっとダメかな。

「じゃあ、明日行こっか」

「うん！」

命ちゃんと月読ちゃんの明日の予定が決まりました。来ちゃダメとか言われてたけど、きつと気のせいだね。巡がこの前結構叱ったんだけど、効果なしみたいだね。

「あきたー！！」

と、二人と同じようにビー玉で遊んでいたさえちゃんが、そう叫んで、ビー玉を投げました。

ピンをゴール代わりにして、机上サッカーをやっていたんだけど、飽きたようです。

「外でオニごっこする人はついて来なさい！」

さえちゃんは、ワイイと駆け出しました。けんちゃん、はなちゃん、月読ちゃんと、数人の小学生組がその後に行きました。

「もー。さえちゃんたち、後片付けしないで行っちゃって……」

かなちゃんは、呆れた。という顔しながらも、さえちゃん達が置いていったピンを片付けます。別にこういうの、嫌ではありません。

「ビー玉もらっちゃおっと」

命ちゃんは、さえちゃん達が置いていったビー玉目当てで残りました。

「あ、みこちゃん、あたしも欲しいな……」

らんちゃんもです。

「うん。いいよ。あかねちゃんとかなちゃんは？」

「そんなの知らない」

あかねちゃんはビー玉目当てではなく、『後片付けをするいい子』が目当てです。

「私はこの1コだけでいいから、みこちゃんたらんちゃんだけで分けていいよ」

「じゃあ、これらんちゃんの分ね」

「みこちゃん、ありがとー。……キレイだねー」

らんちゃんはビー玉を光に照らして、うっとり。

「あ、真奈美先生」

そこに真奈美先生がやってきました。手にはダンボールを持ってます。

「飲み終わったビンはここに入れて下さいね」

「はい」

命ちゃんたちは、真奈美先生が持ってきたダンボールにビンを片付

けました。

「あれ？ 命来ないのかな……」

さえちゃん達と一緒に食堂を出て玄関に着いた月読ちゃんは、命ちゃんがいない事に気付きました。てっきりついて来ているものかと思っていたのに……。

「まだまだ双子双子が足りないねー」

月読ちゃんの隣で、ニコニコとはなちゃんがそう言いました。

はなちゃんのその言葉に、月読ちゃんはちょっとムツとしました。双子だもん。

はなちゃんに何か言っただろうかと月読ちゃんが思った時、「あ、真奈美先生だー」真奈美先生が現れました。手にはダンボールを持っています。子供たちは真奈美先生に群がり、月読ちゃんのはなちゃんに言い返すタイミングを失いました。

「みんな集まって、何して遊ぶんですか？」

「うん！ オニごっこするの！」

さえちゃんが代表で答えました。

「そうですか。ケガをしないように注意して下さいね」

「はい！」

「ところで、飲み終わったラムネはどうしましたか？」

「置いてきたから、今みこちゃんたちが片付けてると思う！」

さえちゃんは確信犯でした。

「自分で片付けないとダメですよ？」

真奈美先生は呆れ顔です。

「大丈夫！ お礼にビー玉置いといたから！」

さえちゃんは色々確信犯でした。

真奈美先生は、「そういう問題ではないですよ」と、軽くさえちゃんを叱った後、小学生組を見て、「宿題は終わりましたか？」と、尋ねました。小学生組はうんともすんとも言わず、脱兎の如く逃げ出しました。まだ終わっていなかったようです。

やれやれ。といった感じの真奈美先生は、「多分大丈夫だと思いますけど、雨が降ってきたら洗濯物、よろしく願いますね」と、残った子供達に言っつて、食堂に行っつてしまいました。

「よし！ 遊びに行こー！ ……つくよちゃん、どうかした？」

改めて気合いを入れ直したさえちゃん。月読ちゃんが食堂の方を見ているのに気付いて声をかけました。



「……ううん。なんでもない。早くオニゴっこしよ！」

ちよっとビー玉が欲しかった月読ちゃん。今から戻ろってビー玉貰おうかな。と考えていましたが、後で命にもらおつと。と思い、オニゴっこを楽しむ事にしました。

子供達（月読ちゃん、さえちゃん、けんちゃん、はなちゃん）が、靴を履きかえ、さあ遊ぶぞー！ と思った時、玄関からとある人物達が入ってきました。

入ってきたのは三人。一人は、つらら。もう一人はアイちゃんでした。アイちゃんは、つららと手を繋いでいて、もう片方の手にはラムネを持っています。つららに開けてもらったようです。うまうま。と飲んでます。

そしてもう一人の人物は、ふわふわとほんわかしている雰囲気を出している女性でした。柔らかい表情をしていて、つららより幼い印象を受けますが、つららと同じ年です。つららが頼りになるお姉さんだしたら、この女性は優しいお姉ちゃん。といったところでしょうか。

「さくらちゃんだー！」

その女性、つまり桜木さくらぎさくらを見て、真っ先に声をかけ、真っ先に駆け寄ったのは、はなちゃんでした。

「はなちゃん久しぶりー」

さくらは間延びした声、ニコニコ笑顔。はなちゃんと目線を合わせ、撫で撫でよしよし。ふにふにぶにぶに。カワイー！。柔らかーい。

「さくらちゃん抱っこしてー」

はなちゃんは両手を伸ばして、抱っこをせがみました。「いいよー」と、さくらは承諾して、よいしょ。と抱っこしました。はなちゃんは夢見心地です。

「はーちゃんは、さくちゃんが大好きだね」

「はなちゃん、さくらちゃん来るといつもこうだもんねー」

「はなは甘えん坊だな」

いつものはなちゃんは、マイペースでのんびり屋さん。私は私の道を行くぜ。という感じなのですが、さくらが来るとマイペースな甘えん坊さんになってしまいます。どうも、さくらとはフィーリングが合うらしく、はなちゃんはさくらが大好きです。

「さくちゃんも一緒に遊ぶ？」

さえちゃんがさくらに尋ねました。さくらは「んー」と悩んで、アイちゃんの壁になっているつららを見ました。つららは、笑いながら頷きました。それを見てさくらは「いいよー。一緒に遊ぼう」と答えました。二人は目と目で物が言える仲良しさんなのです。

「つらら姉ちゃんとアイちゃんも遊ぶ？」

月読ちゃんが二人を誘いましたが、アイちゃんはフルフルと首を横に振り、つららは「私たちはいいや。みんなで遊んで」と言って、二人は食堂の方に歩いて行きました。

二人と入れ違えに、命ちゃん達もやってきて、みんなでオニごっこではなくカクレンボをすることにしました。

はなちゃんがさくらちゃんから離れないので、カクレンボをする事になったのですー。

### 3・8・命と月読の夕方(後書き)

何かが、おかしい……。

以下。簡易紹介。

月読と命(5)

・双子。

さえ(5)

・リーダー。神無、巡に懐いている。

かな(5)

・リーダー。

けん(5)

・男の子。さえちゃん好き

あかね(5)

・子供。神無に懐いてる。

らん(4)

・引つ込み思案。神無に懐いてる

はな(3)

・マイペース。さくらに懐いてる

アイ(3)

・不思議。つららに懐いてる

真奈美(20)

・先生。修道服マニア

つらら(20)

・一週間に一、二度くらいの頻度で来る人。基本的にアイちゃんと遊んでる。子供達は、アイちゃん専属のお姉さんと思ってる。

さくら(21)

・ごくたまーにやってくる人。つららとは同級生で親友。子供達は、ちゃん付けで慕っている。車の免許を持っており、つららを送り迎

えしたりしてるので、くるみわり園にはよく来ているが、顔を出すのは稀<sup>まれ</sup>。色々忙しいらしい。

また次回。

### 3・9・月読と命の夜

「つくよちゃん辛いね！」

「僕は辛くないよ？」

デジャブじゃないよ。

現在19時。

みんなで楽しくカクレンボして遊んだ命ちゃんと月読ちゃんは、夕食をパクパクムシヤムシヤと食べてます。メニューはカレーです。甘口です。しかし命ちゃんは辛い辛いと言ってます。そんなもんです。あ、つらいじゃないよ。からいだよ。

「はなちゃん元気出しなよ」

「ん……」

月読ちゃんと命ちゃんが、「辛いよ」「辛くないよ？」「辛い」「辛くないの」「あかねちゃんも辛いつて言つてたよ？」「そうなの？」「言つてない！別にわたし辛くないもん！」「でもあかねちゃん。一口食べる度にお水飲んでるじゃん」「ほんとだ。お水いっぱい減つてる」「こ、これは……喉が渴いてるからで……」「と、あかねちゃんと戯れている側では、かなちゃんが落ち込んでるはなちゃんに声をかけていました。

はなちゃんは元気がなく、スプーンも進んでません。

はなちゃんの元気がない理由は、さくらが帰ってしまったからです。子供達とカクレンボをして遊んださくらは、18時くらいに帰って

しまいました。

はなちゃんはもつと一緒にいたかったので、いやいやと泣きながらさくらを引き止めましたが、「また後で来るからねー」と帰ってしまいました。色々忙しいようです。

さくらは帰りましたが、つらはまだ帰っていません。月読ちゃんやらはなちゃんやらから、少し離れた所でアイちゃんに餌付けしています。

今日つらが帰るのは21時くらいです。さくらは、つららを迎えるに来た時はなちゃんと一緒に寝てあげるよー。と、はなちゃんと約束しました。それならばと。渋々はなちゃんは、さくらから離れませんでした。でも、寂しいのは寂しいので、元気がないのです。

はなちゃんは、さくらが来て、帰ってしまった後は、いつも元気がありません。声をかけても心配しても甘い物をあげても遊んでも、その日一日は、はなちゃんが元気を取り戻す事はありません。しかし一晩経つと、ケロツと、いつも通りのマイペースなはなちゃんに戻っています。なので子供達は、さくらが来た後のはなちゃん、さえちゃんいわく蓄モードはなちゃんは、そっとしておく、悪く言えばほっとく事にしてます。

かなちゃんが今声をかけたのも、心配だからというよりは、ルーチンワーク、機械的な、『元気がない人がいたから声をかけた』に近い行為でした。

くるみわり園の子供達は、まるで家族のように仲良しですが、結構ドライな部分もあります。

「ポカポカだねー」

「さっぱりだねー」

夕食の後は、お風呂です。

お風呂は、女の子、男の子、その他。という順番で入ります。その他はその他です。察して下さい。ちなみに、アイちゃんとかなちゃんはその他の時間に入ります。

お風呂で、わしゃわしゃわしゃって頭を洗い、シャンプーが目にとか、百まで数えるんですよーとかやった後は、消灯時間の22時まで、外に出なければ何をしていてもいい事になっています。

月読ちゃんと命ちゃんは、食堂でみんなとお喋りしました。パジャマパーティーっぽくて、昼間とは違う楽しさがあります。

「命、大丈夫？」

「大丈夫じゃない……つくよちゃん。みこと、もうねむい……」

しばらくお喋りしていた20時30分。命ちゃんが、目をこすりながらそう言いました。命ちゃんはお昼寝してないで、もう眠くて眠くてたまりません。

「うん。もう寝よっか」

月読ちゃんはお昼寝しましたが、カクレンボをして体力も使ったしまだ子供だしという事で、ほど好い眠気を感じてます。今寝れるというわけじゃないけど、布団に入ったならすぐ寝れる。ほど好い眠気。



「じゃ、今日はもう寝よっか」

さえちゃんも、もう眠い。というわけで今日はお開き。

「はなちゃん？ 起きてる？ あたしたちもお部屋もどろ」

「……や」

らんちゃんは、もう半分寝てんじゃね？ という感じの同室のはなちゃんを、部屋に連れて行こうと腕を引っ張りましたが、はなちゃんはそれを拒否。さくらをここで待つ気のようにです。

しかしこのままだと、ここで寝てしまうのは確実。かといって、無理矢理連れて行こうとしたらのはなちゃんは駄々をこねて、最終的に泣く。どうしよう？

「いつも通りほっとけば？ 寝ちゃっても先生たちが運んでくれるし」

困ってしまったたらんちゃんが、助けを求めるようにさえちゃんを見ると、さえちゃんはあくびをしながら、そう答えました。

そう。この時ののはなちゃんはほっとくしかないのです。だけど優しい、というより弱い、らんちゃんは、毎回オロオロして、誰かに助けを求めるのです。

「う、うん…… はなちゃんおやすみ」

「また明日ねー」

「おやすみー」「みー……」

「……みー……」

というわけで、らんちゃんとかえちゃんと月読ちゃんとか命ちゃんは、はなちゃんに別れを告げ、食堂を後にします。

「みこと、歩いたまま寝ちゃダメだよ？」

「……ん、がまんすりゅ」

もう限界ぎりぎりの命ちゃん。月読ちゃんに手を引かれながら、なんとか歩いてる感じでした。朝とは逆ですね。そんな感じでした。歩いてると。

「あ、みんなこんばんわー」

玄関にちょうどさくらが現れました。

「こんばんわさくちゃん。そしておやすみなさーい」

さえちゃんはテキストに挨拶して、さっさと歩いて行きました。さっさと眠りたいみたいです。

「はい、おやすみなさーい」

さくらはクスクス笑いで見送ります。

「こんばんわー。つらら姉ちゃんの迎えに来たの？」

月読ちゃんとからんちゃんは、ちゃんと立ち止まってあげます。命ち

「やんは、月読ちゃんが止まったから止まっただけなので、ちゃんとは言えねえ。」

「そっだよー。あと、はなちゃんにも会いに来たんだよー？」

「さくらはその場に屈み、目線を合わせます。ちゃんと目線を合わせて話すのが、さくらクオリティです。」

「あ、あの……はなちゃん食堂に……」

「らんちゃんは、結構恥ずかしがり屋さんです。オドオドとさくらにはなちゃんの場所を教えました。」

「食堂にいるの？ 教えてくれてありがとうねー」

「さくらはらんちゃんの頭を撫で撫で。らんちゃん顔真っ赤。」

「つららお姉ちゃんはどこにいるか知ってるー？」

「えっとね、たぶん、アイちゃんの部屋だと思うよ。お風呂もつ出たと思うから。ね、命」

「……むじゅ」

「あははは、命ちゃん、もうほとんど寝ちゃってるねー。カワイイねー。月読ちゃんもカワイイねー」

「左手で命ちゃんのほっぺプニプニ。右手で月読ちゃんのほっぺプニプニ。」

「やーん。プニプニだねー。さすが双子だねー。柔らかさ一緒だねー」

「そうなの？」

月読ちゃんは自分のほっぺと命ちゃんのほっぺの柔らかさを比較してみます。

「ほんとだ」

「でしょー？」

「プニプニだー」

プニプニ。

「プニプニだよー。いいなー。私もこのプニプニが欲しいなー」

プニプニプニプニ。

「えー、さくらちゃんも十分プニプニだよ？」

プニプニプニプニプニ。

「二人には敵わないよー」

プニプニプニプニプニプニプニプニ。

「あ、あの、早くはなちゃんのこと……」

急にプニプニやり合い始めた二人に、怖ず怖ずと声をかけるらんちゃん。何が怖いって、声をかけたら自分も巻き込まれそうで怖いよね。

「おつとつとー、プニプニの魔力にやられとこだったよー。ありがとうねらんちゃん」

さくらは、ポンっとらんちゃんの頭に手を置いてから、「よいしょつとー」と言って立ち上がりました。

「じゃあ私は、はなちゃんを連れて来るねー。らんちゃんは先にお部屋行ってるー?」

「あ、行ってます……」

「らんちゃんも一緒に寝るー?」

悪戯を思いついたという笑みを浮かべるさくら。

「いいですいいですよめときます!」

それに対して必死にブンブンと首を横に振るらんちゃん。さくらと一緒に寝るのが、そんなに嫌なわけじゃないよ? というか、寝たいなー。と思うよ? だけどね。前一度、さくらと一緒に寝たらね。はなちゃんがね。はなちゃんがね。すっごい睨むんだよ。すっごい怖いんだよ。

「そっかそっか。残念だなー」

そしてその事実をさくらは知っている。つまり、らんちゃんが拒否

するのをわかったあんな事を言ったのだ。というわけで、全然残念そうじゃない。よしよしと、もう一度らんちゃんのを頭を撫でるさくら。それでらんちゃんは、さくらが気を悪くしてないとわかり、ホッと息をついた。

「じゃ、月読ちゃんと命ちゃんおやすみー」

「おやすみなさーい」

「……みなさい」

「命行くよー」

「……みこといく」

月読ちゃんは、もう夢の中の命ちゃんの手を引きながら、部屋に戻りました。

「命、おやすみ」

「ん……つくよちゃん、おやすみ」

そして二人で一つのベットを使い、手を繋いで眠るのです。

「明日もいっぱい遊ぼうね」

「ん……あしよぶ」

明日も楽しい一日でありますようにと想いながら。

「……お母さん、来るかな」

「ん……わかんない」

お母さんとお父さんが迎えに来るかなとちょっと思いながら。

「おやすみ……」

「み」

二人の一日は終わって、また新しい一日が始まるのでした。

おしまい……

### 3・9・月読と命の夜（後書き）

な、なんじゃこりゃー。

結局この話はなんだったんだー。

とりあえず命と月読の一日シリーズはこれでおしまい。  
二人が毎日楽しく生活してるのがわかるお話でしたね。

次回はまた、神無達が出てきますよ。

さあみんな。頑張ろー。



#### 4 - 1 . 三人寄れば

七月中旬がどんな季節かご存知ですか？

もうすぐ海の日！の季節ですか？

夏真っ盛りだぜ！の季節ですか？

これから夏だぜ！の季節ですか？

夏休みが近いぜ！の季節ですか？

いいえ違います。

「もうすぐテストなんだけど私どうすんの！？」

の、季節です。

「水無、落ち着きなつてば。ここ図書館だよ？」

「そうですねよ水無さん。神社さんの言う通りです。静かにして下さい」

「しかし叫ばずにはいられない……！！」

と、水無は言いつつ、叫び声を押し殺しました。

さて。

学生という身分ならば避けては通れぬテストという問題。大学生にも当然あります。

神無達が通う大学は二学期制です。まあ大半の大学は二学期制でしょう。そして前期のテスト、つまり前期の講義の単位が取得出来るかどうかの分水嶺は、七月下旬にあるわけで。という事は中旬から

いには準備を始めないといけないわけで。

高校や中学とは違い、大学には筆記試験ではなくレポート試験を行う講義もあるので、一夜漬けで万事解決。というわけにもいかないわけで。まあもちろん、締め切り前日にレポート始めて間に合う強者もいるわけなんですけど、残念。水無はそんな強者ではない。

というわけで、水無はレポートの資料を捜しに図書館にやって来ました。神無も図書館で勉強しようとして来ました。舞歌は最初からいました。

「何から手をつければ、何を書けばいいか、どう書けばいいか、その全てが、わからない……」

水無は机に倒れました。倒れた水無の周りには、水無が持ってきた本が多数積まれてます。なんか使えそうだなー。面白そうだなー。

あ、これ授業で聞いたなー。という感じで、水無が持ってきた本達その大半は最初の二ページを見た、読んだのではなく見た後、二度と開かれる事はなく積み本にされたのです。なんたる悲劇。本が泣いてるぜ。

「なるほどなるほど……」

本の泣き声が聞こえたわけではないでしょうけど、神無は水無が持ってきて積まれた本を手に取り読んでます。そして、む。こいつはレポートに使えそうだな。という部分をメモメモ。神無と水無は同じ学科なので、取ってる講義も被ってるのです。つまり神無は、さりげなく水無を利用し効率よく作業を進めていいるわけです。

今の神無を神無のお姉ちゃん、神裂が見たら、変わったわね。昔のあなたなら、人が持ってきた本を勝手に読んだり絶対にはなかつた。成長したわね、神無。と、感激するのですが、残念。神裂はこの場にはいなかった。

「神社さんは、今回の試験どんな感じなんですか？やっぱりレポートが多いですか？」

神無と水無は同じ学科に所属していますが、舞歌は違います。なので舞歌は、神無達がどんな試験を受けるのか知りません。

ちなみに、神無の隣に座ってる舞歌の前にはレポート用紙と一冊の本。舞歌は、その一冊の本の内容をまとめて、レポートとして提出する魂胆のようです。というか手書き？

「えっとね、レポート試験が三つで、筆記試験が二つ、後は平常点があつたかな？うん。レポートの方が多めだね」

シャーペンをクルツと回して神無はそう答えました。

平常点というのは、授業中の小テストやレポート提出などで単位が決まる講義で、そもそも期末テストがない講義の事です。こういう講義は毎回ちゃんと出席しなければ取れないので、サボり癖がある人にとってはつらい講義ですが、神無のようにサボるといふ単語が辞書にない人にとっては、これほど楽な講義ありません。たぶん

「そうなんですか。私の方も、レポート試験の方が多いですよ。

まあ、筆記試験よりは楽ですからいいんですけど……」

舞歌は、うんざり。というように顔をしかめました。

筆記試験とレポート試験。どっちの方が楽かというのは、個人によって答えが変わります。

水無のように、レポートって何書けばいいかわかんねえー！調べたりするのめんどくさいー！という人は、筆記試験の方が楽と考えるでしょう。与えられた問題に答えればいいだけだからね。しかもノ

ートとか持ち込んでいい試験とか、勉強しなくても平気だしね。舞歌のように、一々教室行ってテスト受けるとか怠い。時間も拘束されるし。私は自由だー！という人は、レポート試験の方が楽と考えるでしょう。レポートは答えがないからある意味自由に書けるしね。しかも締め切りまで、何度もやり直し出来るしね。ちなみに、神無と巡はそのどちらにも属さない。試験を楽とか面倒だとは思わない。巡は、己が越えるべき課題だと思って嬉々として取り組み、神無は、ただ、与えられた課題を淡々とこなすだけだ。楽とか面倒だとか、そう考えちゃう気持ちはわかるけどね。

「楽だからいいんだけど？」

楽ならうんざりしなくてもいいじゃないかー。

「手が疲れます」

舞歌は、ひらひらと、レポートを書いていた手を振りました。帰れ。というボディランゲージではなく、疲れました。というアピール兼手首の運動です。

「確かに手書きで三枚とか四枚はつらいよね。パソコンで書かないの？」

神無は気になっていた事を尋ねました。

手書きでレポートを書くというのは大変です。今のご時世、ほとんどの人がレポートはパソコンで作成するでしょう。

作成しない人は、パソコンが苦手な人が、持っていない人くらいではなかるうか。舞歌はそのどちらか。もしくは手書きじゃないとダメなレポートなのかもしれない。

「パソコン持ってないんですよ」

だから仕方なく。と、舞歌は嘆息。  
欲しいんだけどお金ないし。親に頼むとか有り得ないし。というわけ  
で舞歌は、手書きで頑張ります。

「神社さんは持ってるんですか？」

「持ってるよ？大学入学祝いって言って、お姉ちゃんがノートパソコン  
買ってくれたんだ」

神無はちよつと恥ずかしそうにそう言いました。姉の話<sup>はなし</sup>を他人にする  
のが恥ずかしいのか、姉から施<sup>ほどこ</sup>しを受けたのが恥ずかしいのか。  
さあどっちだろう。どっちもかな。

「神社さんお姉さんがいたんですか？」

知らなかった。と、舞歌は驚きます。  
ということは神社さんは妹なのか。

「うん。まあね」

神無は、素っ気ない感じで肯定して、本に目を落としました。この  
ままだと、舞歌が、どんなお姉さん何ですか？ と聞いてきそくだ  
だったので、会話を終わらせようとしたのです。

「神社さんのお姉さんって」

しかし残念。舞歌は空気を読む能力がマイナス値でした。

「というかお前ら私を心配しろー!!」

しかしラッキー。神無をフォロー出来る人材がここには居ました。ずっと机に伏せてた水無です。

「水無、静かにね」

神無は苦笑いを浮かべながら水無を窘めます。アイコンタクトで、ありがとうございます。と伝えるのも忘れません。

「寝てたんじゃないんですか？」

舞歌はちよつと冷たい感じ。起きるんじゃないよ。邪魔すんなよ。つて感じです。

舞歌は水無より神無とお喋りしたいのです。別に水無が嫌いというわけではないです。水無は、まあ別に冷たく接してもいいかと思っているのです。あと、神無の方が好きだし。神無ともっと仲良くになりたい。

「寝てるわけがないじゃない。ちなみに私もノートパソコン持ってます。自分で買いました。褒めて褒めてー」

「わー、水無すごい」

本、読み読み。

「凄いですね」

レポート、書き書き。

「わー、予想通りというか期待通りの反応ありがとー」

水無は両手を上げて喜んだ。

「というか神無さん舞歌さん、私の愚痴を聞いてくれる？」

仕切直し。

「嫌です」

即答。

「いいよ」

苦笑い。

「じゃあ嫌じゃないです」

手の平返し。

「なんかさ、巡があんたの性根を叩き直したいって気持ちが変わらなくもないよね……」

水無は舞歌を呆れ顔で見ます。舞歌は、何の事ですか？ というか巡って誰ですか私知らないです。って感じで窓の外を眺めています。

「で、愚痴って、火無さんの事？」

クスクス笑いながら、神無は話を促します。最近の水無の愚痴と言ったら、火無以外にはないのです。

「そうそう火無がさー。もう私、困っちゃってます。どっしりどっしり」

「どっしりどっしりもないんじゃない？」

「そうです。諦めるべきです」

「内容聞いてから答えてよ！」

「じゃあ内容言ってからどっしりどっしり言ってみてよ」

「そうですよ。段取りしっかりして下さいよ」

「なんだろう。舞歌に軽くイラッとするね」

ニコッ。

「水無、そんな事言っちゃダメだよ。謝りなさい」

メッ。

「そうですよ。謝るべきです」

うんづん。

「……ごめんなさい」

なんかアウエーだ……。

「で、今度は何があったの？」



そろそろ話しを進めよう。

「実はですね」

「うん」「はい」

「私がこう、自宅でレポート書きますよね。ノートパソコンでカチカチと」

「ああ、わかった」「私も理解しました」「それで邪魔されたんだ」「いつも通りですね」「だね。多分、ノートパソコンしてたら後ろからのしかかられたり」「パソコン閉じられたりするんですよね」「大変だね」「ですね」「でも、仲良しだよね」「ですね」「じゃ、レポートやるっか」「はい」

「いや、あの、えー……」

水無は、なんか、えー。だった。いや、神無と舞歌が言った事でだいたい合ってるし、多分こいつら最終的に、仲良しだねー。って言うとは思ってたから、別にその結論に不服ないけど、いや、不服だけど、それよりなんか、なんかこう、省略されちゃって、不完全燃焼？

「水無も勉強すれば？」

もつと喋りたいような、もつといいような。という微妙な表情を浮かべている水無を見て、神無はクスクス笑い。水無の演技ではない困った表情は珍しい。

追い詰めたかいたが。あつたぜ。ゾクゾクするぜ。とは、神無は思っ

ません。

「んー……ま、勉強しとくか……」

どうも今日は、お喋りはダメな日らしいと悟り、水無は、積んで置いた本に手を伸ばすのでした。

三人がようやく集中してレポートに取り組み始めたその五分後、巡が「神様をのけ者にするとはいい度胸です!!」と言って乱入してくるのはまた、別のお話……

4 - 1 . 三人寄れば (後書き)

やべ。久しぶりに書いたし変な短編書いた影響で神無がSっぽくなつちやつた。え、なつてない？ でも神無がなんか水無をからかつて楽しんでたよね。あ、いつも通りか？ 『落ち着け私』よかったら読んでね？

宣伝終了。

三人寄れば文珠の知恵なのか三人寄れば姦しいなのか。まあ、姦しいんじゃない？ たいてい姦しいんじゃない？ 男も女も関係なく喧しいんじゃない？ 文珠の知恵は無理じゃない？

はい。また次回！。

#### 4 - 2 . おや？神様の様子が？

「お前より先に出来たです書けたですやったです見るです水城水無  
！」

「…………え？ ごめん、聞いてなかった」

「む。じゃあもう一度言うです。お前より先に出来たです書けたです  
すやったです見るです水城水無、これが神の力ですー！！」

「…………は？」

「…………イヤフォン取りやがれです」

「…………ん？」

「イヤフォン！です！」

「……………」

「プツンきたです！」

「春風さん落ち着いて！ 暴力はダメだよ！」

「そつだそつだー。神を名乗るくせにすぐ暴力に頼るとは、ちゃん  
ちやらおかしいぞー」

「…………お前、聞こえてるだろ。です」

「……え？」

「この女許あまさねえ!!!」

「春風さんキャラキャラ!!!イメージを大切に!!!」

なかなかの暑さの今日この頃、ワーワーキヤーキヤーと騒いでる三人がいるのは図書館ではなく、大学にあるとある棟のとある休憩スペース。やってる事は前回同様、レポート作成。

違う所は舞歌の代わりに巡がいる事。そして机の上に、本だけではなくノートパソコンがあるという事でしょうか。

今回は本格的にレポートを書いているのです。

なぜ舞歌がないかというと、前回一人後からやって来た巡に対して舞歌が、呼んでないんですけど。来て欲しくなかったんですけど。神様は一柱でやってればいいじゃないですか。神社さんと水無さんがいるだけで十分なんですけど。というような事を言ったので、「今度はお前をのけ者にしてやるです!仲間外れにされた寂しさをお前も味わうがいいです!はっはっはー!」って感じになったのです。巡的には。

神無と水無的には、図書館に行く用事もなかったので、ここで力チカチとレポート作成したら、なんか巡が来た。つまり舞歌をのけ者にしてる気はございません。

「ふー。助かったです神社神無。危なく化けの皮というか神様の皮が剥がれるとこだったですー」

巡はブラックコーヒー(神無の奢り)をチビチビ飲みつつ、落ち着きました。

「それは何よりだよ。私も春風さんの化けの皮というか神様の皮が

剥がれなくてよかったと思ってます。うん。ホントよかった……」

神無はミルクティー（自腹）をチビチビ飲みつつ、ホッと一息。

「巡……あんたの地、ただの不良じゃん。私、結構怖かった」

水無はアイスココア（神無の奢り）をチビチビ飲みつつ、巡に冷たい眼差し。

「とっつかんで水城水無も奢ってもらってるですか！神社神無！こいつを甘やかしてはダメです！ちゃんと教育しとかないと、近い将来大変な事になるですよ！？」

巡は隣に座っている神無を見ながら、正面の水無をビシッと指差しました。

「いや、甘やかしてるつもりないよ？あと、友達は教育するものじゃないと思うんだけど……」

春風さん、今日はいつにもましてあれだなー。と思いつつ、神無は愛想笑いを浮かべます。

「巡、あんた今日いつにもましてあれだけど、どうしたの？レポートが調子よく進んでテンション上がったの？」

水無も神無と同じ事を思いました。ので、率直に聞いてみます。

「別にお前達と一緒にレポートを書くのが楽しくて楽しくて自分を抑え切れないわけじゃないんですからねです！！」

やり切ったぜ。というように満足気な顔を浮かべ、巡はブラックコーヒーを啜ります。

「……………」

水無は無表情で、神無を見ます。神無は苦笑しつつ水無を見ます。水無は『こいつ酔ってる?』とアイコンタクトを送り、神無は『今日、暑いから』と巡をフォロー?するアイコンタクトを返し、水無は『ツンデレ?』で神無は『いや、これはツンデレ語であって春風さんがツンデレなわけじゃないよ』それから『つまり巡は可哀相な子という事でオッケー?』というわけで『うん。それでいいんじゃないかな』そしたら『いいわけないです!』と、巡が割って入ってきた。神無はビックリして、水無は驚愕した。

「め、巡、あ、あんたまさか……………」

ガクガクブルブル。

「ふふふ、私を甘く見たですネ水城水無。将来の夢は神様と、冗談ではなく書ける私にとって、お前達のアイコンタクトの内容を把握する事なんて造作もないのです!!」

「そ、そんなバカな…………私と神無のアイコンタクトが破られるなんて……………」

水無は愕然という表情を作った。

「春風さん凄いね」

神無は純粹に凄いと思っってます。という表情を作った。

「……お前達、どうでもいいと思ってるですね」

巡はジト目で二人を睨んだ。

「いや、正直どうでもいいよね。アイコンタクトの内容はれたくらいさ。アイコンタクトなんて所詮アイコンタクトだし」

水無は、演技をやめ、はい、お遊び終わりー。というように、キーボードをカチカチと押し始めました。

「所詮アイコンタクトって、お前らのアイコンタクトはアイコンタクトの域を越えてるという事に気付いてないのですか……私がどれだけ努力してその領域に達したと思ってるですか……」

巡は、もはや超能力レベルです。それを破られたんだからもっと動揺してしかるべきではないですか。と、呆れた。

「……」

神無は、その域に乱入してきたあなたが呆れても……。と、人事のよ用に思った。

「そもそもどうやって、こんな高レベルのアイコンタクトを取得したですか？」

と、巡は神無に尋ねます。

「どうやって取得したと言われても……気付いたらとしか？」



と、神無は答えに困りながら答えます。

「アイコンタクトというのは、心が繋がってないと出来ないです。まあ私は神様予備軍ですから気合いで使えるですけど」

巡は誇らしげに言いました。

「さすが春風さん。凄いね」

と、神無は巡を褒めながら、そっちの理屈の方が私的には知りたいような知りたくないような。と、思いました。

「神様予備軍じゃないお前達が使えるという事は、お前達の関係がいわば、目と目で物が言える関係、友情という枠内での最高峰地点にあるという事です」

「……それ、褒めてんの？」

という水無の呟きはスルー。

「しかし私の水城水無調査によると、お前達が出会ったのは大学入学してからです。それより前には一切接触はないです」

「調査って……」

という水無の呟きはスルー。

「たった三年、いや恐らく去年からお前達は使えていたでしょうから、たった二年でそのレベルに達するとは、きつとお前達の間には何か合ったはずですよ！ 何か運命的な出会いの果てにそんな絆を

得たはずです！ それを私に教えるです！」

巡は神無に詰め寄りました。神無は、「い、いや、そんな事言われ  
ても」と引き気味です。

「私と水無は、至って普通に平々凡々な出会いを果たして、友達に  
なっただよ？」

「ダウトです！ 神社神無と水城水無！ お前達が平々凡々な出  
いをするわけがないです！ 神社神無の人格特性を考えれば、水城水  
無のような茶髪で見た目遊んでますみたいな奴と友達になるわけが  
ないです！ 話しかける事もしないはずです！」

「そ、それはそうだけでも……」

どうも巡は、神無と水無の出会いを聞き出したようです。しかし  
神無はあまり話したくない。というわけで神無は、水無に目で助け  
を求めました。

「あのさー、巡」

水無は神無からのSOSを受け取り、巡はホント、めんどくさい奴  
だよ。と思いながら巡に声をかけます。

「さっきからどうも私に突っ掛かって来ているような気がするんだ  
けど、私の気のせい？」

レポートが先に出来たー。とか、暴力こそが全てー。とか、何奢っ  
て貰ってんだー。とか、お前と神無が友達ってなんかおかしくね？  
とか、どうも攻撃的な、気がします。でもいつもおかしいからいつ

も通りかな。

「気のせいじゃないです。ようやく気付いたですか水城水無。私はお前にご立腹です」

神無に詰め寄るのをやめ、巡は水無を睨みます。神無はホッと一息。ミルクティーで一服。

「ご立腹って、私なんかしたっけ？」

心当たりなし。

「ペンダントはどうしたんですかー！」

巡は両手を上げてガオー。擬音語は、ドーン。

「ペンダント？ああ、そういう事ですか……」

一瞬何の事かわからなかった水無。しかしすぐに理解しました。ペンダントとは巡がこの水無にプレゼントした奴です。そして水無はそれをしていない。つまり巡、ご立腹。

「どうしてしてないですか捨てたんですかー!？」

「いや、捨てるわけないから。ちゃんと大事にしまっただけよ」

「しまっただけよです!」

「えー、私、あんまりペンダントとかしないからさー」

「いいから着けるです着けるです！せつかくプレゼントしたのにどうして着けないですか！神社神無のプレゼントとかは使ってるくせにどうして私のは使わないですかー！」

巡は座りながら駄々をこねはじめた！まるで子供だ！

「いやちよつと待て。あんたなんで、私が神無からもらった本を使ってるって知ってる？私、話したっけ？」

返答次第じゃ、盗聴機を探さないといけなげ。

「あ、水無あれ使ってくれてるんだ」

そして、マイペースな神無。隣でじたばたしてる巡を宥めながら、聞いてきました。宥めかたは、頭を撫でる。巡は「子供扱いですかー！」とご立腹です。

「結構使ってるよ。あれ、なかなか面白くてさ。昨日も火無が、パンが食べたいパンが食べたいうるさかったから、魔法の本を開いた結果、うどんになりました」

何か使い方が間違っている気がしなくてもない。

「神社神無だけずるいですずるいですー！私のプレゼントも使ってます使ってますー！初めて友達に送ったプレゼントなんですー！選ぶの一週間かかったんですー！使ってくれなきゃですよー！」

巡は駄々をこねる大人から、ただの駄々っ子に退化した！今の巡には、神様を名乗っていた面影は微塵もない！

「わかったわかった、だから落ち着け」

こいつあれだよなー。人として不安定だよなー。舞歌が人付合いに慣れてないとしたら、巡は人の感情に慣れてないって感じだよなー。いや、自分の気持ちに素直なだけか？まあ不安定でいいや。神様っていう支えなくなったら、神無より不安定じゃね？と、思いながら水無は呆れ顔で、「落ち着いて落ち着いてー。ほらー、春風さんはだんだん落ち着いてくるー。そして、だんだん戻ってくるー。神様予備軍の春風さんが戻ってくるー。全ては神へと続いているー」「うーうーですー、私は神様予備軍ですー」催眠術ごっこをしている二人を眺めるのでした。

4 - 2 ・おや？神様の様子が？（後書き）

おや、春風巡が何かおかしいぞ？ホントおかしいぞ？いいのか？これでもいいのか？

まあいいや。

また次回。

#### 4 - 3 ・変態じゃないよ。愛故にだよ

「お姉ちゃん何してるのー」

「んー？ 私としては、お前が何してんだって感じだよねー」

水無は、火無の言葉にテキトーに返答しつつ、ペンダントを探します。

その後ろのベットでは、火無がコロコロ転がってます。なぜ転がっているのかというと、「お姉ちゃん分を補給してるのー！」という事らしいです。水無はそれを聞いて、それ以上聞くのをやめました。ほっとくのが一番かもしれないぜ。

「よし、見つけたー。なかったらどうしようかと思っただー」

水無は、巡からプレゼントされたペンダントが入ってる箱を見つけました。ホッと一安心です。無くしたら、巡が号泣する可能性があります。つたぜ。

水無はこのペンダントを大切に保管してありました。なのになぜ、探す羽目になったかというところ、ここ最近、何を思ったのか、水無が大学に行ってる日中、火無が掃除をする事があるのです。掃除してくれるのは水無としても嬉しいのですが、物の位置が変わってるのが困り物です。ちなみに火無は、料理よりは、掃除の方が上手です。

「中身も、ある」

箱を開けて中身も確認。ちゃんと、火のシンボルのネックレスと、水のシンボルのネックレス。二つが仕舞ってありました。水無は水のシンボルの方のネックレスを取り出し、装着。水属性が上がった

気がした。

そして火無の方を向く。火無は枕（水無の）に顔を埋めていた。水無は目を逸らしたくなかった。妹が変態になっちまった。

「火無火無」

しかし目を逸らすわけにもいかない。よくわからないが、あんな事をしているのは自分のせいらしいし。いや、ホント、理不尽だ。私の責任かよ。と、水無はいつも思ってる。

「なに！」

最愛の姉に呼ばれ、瞬時に枕から顔をあげる。残り香より、やっぱり生がいいよね。

「これ」

と言って、水無はネックレスをさします。火無はネックレスに注目。あれは……。

「どう？ 似合って」「似合ってない！」

火無は食い気味に否定しました。

てつきり似合うとか言うかなー。と思っていた水無は、ちょっとビツクリ。

「それ、あの変な奴のプレゼントでしょ！ だから似合ってない！」

ふーんだ！ というようにそっぽを向いてしまう火無。拗ねてる？

「……巡もあなたに変な奴とは言われたくないと思うけどね」



水無は、ああそういう事か。と、納得しました。火無は、巡が嫌いです。神無は大嫌いです。じゃあ誰が好きなんだと言えば、水無だけです。寂しい奴。

「じゃあ、あれだ。逆に聞くけど、私に似合うネックレスってどんなやつ？」

「私がプレゼントしたネックレス！」

手を上げて、はい！ それしかないと思いまーす！ って感じの火無。

「だからお姉ちゃんお金ちょうだい！」

満面の笑みで金銭要求。そのお金でプレゼント買ってあげるよ！  
って言う宣言だよ。

「はいはい、馬鹿な事言つてないで、ちょっとこっち来い」

水無は火無を手招き。火無は、「はい」って警戒なんてするわけもなく行きます。

「はい、座ってー」

「はい」

「はい、じつちに背中向けてー」

「はい」

「目をつむってー」

「はい」

「何でこっち向き直ったのかなー？」

「キスじゃないの？」

「殴られる前にあっち向いて目をつむろうかなー？」

「むー。お姉ちゃんはほんと我が儘だなー」

「お前はそんな私よりも我が儘だという事に、そろそろ気付いて欲しいなー」

「お、お姉ちゃんくすぐりたいよー」

「我慢しなさいっと、はい、出来たー。目、開けていいよ」というやり取りを経て、

「む？ むー……あー!!」

火無は火のシンボルのネックレスを装備した！ 火属性が上がった気がした！

「おー、似合う似合う」

と、水無はおざなりに褒めました。ネックレスに似合うも何もない

よな。というのが本音。でもまあ、装着したのを見たら褒める。それが基本です。

「似合わないのー！　こんなの全然似合わないのー！」

火無はポカポカと、水無を叩きます。しかしネックレスを取ろうとはしない。あいつのプレゼントだから今すぐぶち壊したいけど、お姉ちゃんがせっかく着けてくれたし似合うって言うてくれたしー！  
という狭間で揺れてます。

「まあまあ、せっかくもらったんだし、ちゃんと使わないとね」

今まで自分が使っていないかった事は棚上げ。基本です。

「むー……むー……お姉ちゃんがくれたのなら何でも着けるのにー！  
！ー！」

ポカポカポカポカ。

「こら、やめなさい。そろそろ痛い」

ポカポカ叩いてくる両手を捕獲。バンザイのポーズ。

「むー！　私はお姉ちゃんが買ってくれたなら犬の首輪でも着ける覚悟があるのにー！」

「一生のお願いだからその覚悟を早く捨ててくれ！」

「お姉ちゃん犬をバカにしちゃダメだよ。そういう人間の傲慢さが地球を破壊するんだよ」

「昼間にあれかな？　そういうドキュメンタリー番組みたのかな？  
でもね妹。私は犬はバカにはしていないんだよ？」

「私、変じゃないもん！　お姉ちゃんが構ってくれないからいけな  
いんだもん！」

「いや、私は一言も変とか変態とか言っていないから。バカとしか言  
っていないから。言っていないのにそういう事言うという事は、あんた  
自分でもじか、って暴れるな！　こら！　下に響くって、ぐふっ…  
…！」

駄々っ子のように暴れ始めた火無。掴まれている手をバタバタ。足  
をバタバタ。油断していた水無は、鳩尾にいいのをもらいました。  
こ、この攻撃力は……。

「か、火邪さん、ですか？」

入れ代わってるのに気付かないとは……。最近出て来ないから、油  
断していた……。

「火邪なんか知らないもん！」

しかし水無の予想に反して、火無は火無のままだった。火無は、わ  
ー！とペンダントを外し、水無に投げつけ、ベットにダイブ。布団  
巻き巻き。夏場でもそんな事が可能なのは、クーラーが働いている  
から。感謝しろよな！

「……あ、あれー？」

なんかおかしいなー。と、思いつつ、鳩尾の痛みに堪える水無なの  
でしたー。

## 5 - 1 . そうついう時期、なのかな？

「なーにーかーがつ、おかしい気がする、ようなつ、気がする……」

水無は頬杖をつきながら、ポツリと呟いた。水無の前にはノートパソコンが置いてある。画面にはワードが表示されており、その画面に表示されている文章の量、そして今の水無の表情を見れば、ああ、レポート進んでないんだな。と、わかる感じになっています。

「おかしいって、何が？」

そんな水無の向かいに座っているのは、おなじみ神無。水無同様、ノートパソコンが前に置いてある。水無が独り言っぽい事を呟く前までは、軽快にキーボードを叩いていた事、そしてつらそうでもなく涼し気な表情を見れば、ああ、順調なんだな。と、わかる感じになっています。

おやつ時、今回は二人でレポート作業中です。

「んー、なんつーか、色々？」

「例えば？」

「巡とか、火無とか、レポートとか、巡とか、火無とか、レポートとか？」

「うん。順番に聞いて行くのかな。まず、二番目の巡とかから聞く」

「一番目からじゃダメ？」

「んー……仕方ない。許そう」

「ありがとうございます」

という感じで軽くウォーミングアップな会話を終えた二人。

「まあ、ほら、ペンダントね」

水無は、ペンダントをヒラヒラと。

「うん。似合ってるよね」

朝も言いました。

「ありがとう」

朝も言いました。

「で、昼だよ」

昼の出来事を思い出して、水無はため息を一つ。その成分は、疲れ100%。

「あー……春風さんね」

昼の出来事を思い出して、神無は苦笑い。その成分は、同情50% おもしろかったな40%不思議10%。

昼、何があつたかダイジェストでお伝えしましょう。

『ラーメンうまい』

『うどんうまい』

『あ、水城水無発見です。あ、ペンダントしてるです。いやったあああああああ、です！！』

『おま、ちよ、泣くとか』

『月見うどんうまい』

『ありがとうありがとうホントありがとうあなたのその優しさが世界を救うかはわからないけど私は救われたああああ、ですうううううう！！』

『おま、ちよ、土下座って』

『スープうまい』

ダイジェスト終わりー。

「……あれ、ちょっと待って。神無あの時、明らかに、私無関係ですよー。部外者ですよー。っていう振る舞いだったよね。どういう事？」

水無は昼の出来事を振り返っていたら気付いてしまった。自分が必死に巡に土下座をやめさせていた横で、神無が、無（関）心の境地で、うどんを食べていた事に。

「……そういえば！近所の人に困いが」

「カツコイイー。で、どういう事かな？」

神無は話題を逸らそうとした。しかし水無は逸らさせてはくれなかった。



「…………ほら、私って、そういうところ、あるよね？」

神無は気まずそうに水無から目を逸らしながら、自分を自分で抽象的に非難する事によりなんか色々と許されようとした。いや、だって、あの時の春風さんはなんか私には手に負えない感じだったんだもん！

「…………まあ、いいけどさー」

自分も神無の立場だったとしてら、他人のフリをしただろうから、あんまり責められない水無なのでした。なんだかんだで困った時は助けてあげる水無が他人のフリをしたくなる程、あの時の巡はなんか、おかしかった。

「なんか最近、七月に入った辺りからかな、巡おかしくない？」

私の誕生日の後くらいかな？

「ん……………」

神無は天井を見上げながら、最近の巡の様子を思い出す。

『人間っぽい神様ですよー』

『レポート出来たですよー。これが神のレポートです！』

『さつきご老人が困っていたから助けてやっただです。神気味な私としては当然な事です』

『月読と命がまた言う事聞かないです。反抗期ですかねです…………。神もどきに反抗するとは…………強い子に育ったです！』

ふむ。

「いつも通りな気がするけど?」

うん。いつも通り。

「いつも通りがおかしいから気付いてないだけじゃない?」

水無、ちょっと呆れ気味。

「んー……あ、人間っぽい神様って言ったのは、確かにいつもと違う気がする」

ピツと、人差し指を立てて、そういえばのポーズ。

「神無……天然なのかポケなのがわかりづらいよ」

ポケだと、信じたい。

「まあ言われてみれば、確かにいつもより神様にこだわってる気がしないでもないね。勢いもある気がする」

真面目モード。

「なんか、悩みでもあるのかなー」

「あるなら相談にのるの?」

クスクスと笑う神無。水無は優しいな。

「いや、悩みが無くなるまで近づくんじゃねえ。って言う」

違う違うと手を振る水無。

「神無はどうしてだと思っ？」

「私はそもそもあんまりおかしいとは思ってないからよくわからないけど……」

んー。と、あごに指を当て考えるポーズ。そして、ピツ。と、人差し指を立て、こういうのはどうでしょう。のポーズ。

「春風さん、神様っぽい人間だから、調子悪い時期とかあるんじゃない？ 半人半妖みたいな感じで」

「ああ、なるほどね。満月が近づくと強くなるみたいなの？」

「そうそう。新月には普通の人間になったりするの」

「神無」

「なに？」

「次、行こうか」

「だね」

5・1・そういつ時期、なのかな？（後書き）

章の切り換えが、よくわからなくなってきたし、他にも色々よくわから  
ないから、よくわからない時期なんだな。  
どうでもいいけど、%の次に。ってなんか変。

%。  
%。  
%。  
%。  
%。

よく、わからない。  
また、次回。

## 5 - 2 ・全てが本心、全てが偽り

「で、次のおかしい人何ですけどねー」

と、水無は買ってきたオレンジジュースの缶を弄びながら話し始めた。

「我が妹、火無何ですよねー」

「ほー、火無さんがおかしいの？」

と、神無はキーボードを叩きながら答えました。レポートもちやんとしないよね。

「まあ、おかしいのはいつもの事何だけどさー」

ながらもちやんと神無が聞いてると知っているので、水無はそのまま話しを進めます。

「火邪が、最近出てこないんだよ」

「火邪さんが？」

「そう、火邪が」

「それがおかしいの？」

パソコンから顔を上げ、首を傾げる神無。

「おかしいでしょ。今まで、散々出てきてたんだから」

水無も首を傾げる。おかしいとは思わないの？

「そもそも火邪さんがいる事がおかしいんだから、出て来ないのは正常な事じゃない？」

神無の目には冗談の色は一切ない。水無もそう思ってたんじゃないの？という純粹な疑問。確認に近い、疑問。

「……まあ、そうなんだけどね」

カツン。

と、空になった缶を置き、神無をちらつと見る。神無は既にレポート作業に戻っていて、こつちを見てはいない。

火無より自分を好いている火邪の存在を、平然とおかしいと言える。出てこない方が正常だと本心から言える。そして火邪の前では、居て欲しいと平然と言える。いなくなると悲しいよと言える。本心から、言える。

そんな神無も、やっぱりおかしいんだろうな。類は友を呼ぶ。つまり傍から見れば、私もおかしい。

水無は苦笑い浮かべる。

だからどうした。おかしくて、何が悪い。

「でも、急に出てこないのはやっぱりおかしいと思うんだよね」

口と思考は分離する。考えている事と言っている事が違つのはよくある事だ。

「まあ確かにそうかもね」

そう同意した神無も、頭の中じゃ何を考えているかわからない。今している会話に興味なんてなくて、今日の夕食とかを考えているのかもしれない。

「最後に火邪さんに会ったのはいつ？」

「あー……私の誕生日が最後かな？」

「という事は、もう二週間近く出てきてないの？」

「だね。それまでは、三日に一度は出てきてたから、なんか、おかしいなーって思ってたさ」

「んー、そもそも火邪さんは、火無さんがやりたいけど水無に嫌われるから出来ない事をやる為にいるんでしょ？」

「まあ、そんな感じだね」

「なら、火無さんが別に水無に嫌われそうな事をやろうと思わなくなっただけじゃない？」

「んー、そこ何だよね。なんか最近さ、今までなら火邪になったであろう場面でも、出てこないんだよ」

「詳しい説明を求めますます」

「わかったです。例えば昨日、私は火無にペンダントを騙して装備させたんだよ」

「春風さんのプレゼントだね」

「そう。で、あいつ巡も嫌いだから嫌がったんだよね。まあ、いきなり家に侵入してきてグルグルにされて嫌いにならない方がおかしいとは思っけど」

「確かにね」

「でも、私は似合ってると思ったわけよ。だから褒めた。でも火無は巡のプレゼントのペンダントをしたくなかった。でも私に褒められたから、火無はペンダントを外すかどうか悩んでた。今までならここで火邪が出てきてたと思うんだよね。火邪がペンダントを壊して終わり。私に別のペンダントを買うよう強制もしてきたかもね」

「なのに、出てこなかったの？」

「そう。出てこなかっただけじゃなくて、火無は私に暴力を振るっただよ？ 暴力は火邪の役割なはずなんだけど……」

「んー、ただ単純に、火無さんが成長したって事じゃない？水無が簡単には自分を嫌わないっていう自信がついたとか」

「かなあ……なんか違う気がするんだけど……」

「火邪さんは元々火無さんの一部何でしょ？ だんだん統合されてきたって事じゃない？ 火無さんが暴力を振るえたのは、つまりそういう事じゃないかな」

「……こんな短時間に？ かれこれ四年近く火無と火邪に別れてたんだよ？ そんな急に統合されるもんなのかな」



「その辺はよくわからないけど……水無は、火邪さんにいなくなつて欲しくないの?」

「……………暴力は遠慮したい」

「水無……私が言う事じゃないけどさ。火無さんは心の病気だよ? それを忘れちゃいけないよ。病気は、治さないといけない。春風さんのおかしいと、同列に扱っちゃダメだよ」

「……………神無」

「なに?」

「ドライだね」

「普通だよ」

### 5 - 3 . なんでやねん

「とかなんとか言ってるうちに、レポートが終わりましたー」

ばんざーい。

「とかなんとか言ってたから、レポートが終わりませんでしたー」

お手上げー。

「水無、嘘はよくないよ」

やれやれ。

「え、私ホントにレポート終わってないよ?」

きよとん。

「うん。それは嘘じゃない。嘘は終わってない理由の方。つまり！水無のレポートが終わってない理由は喋っていたからじゃない！ただ単純にやってないからだ！」

ばばーん。

「な、なんだってっ!?!」

どどーん。

「うん。それは嘘じゃない。嘘は終わっ」「あ、聞こえなかったわ

けではないです。聞こえてました」

ぺこぺこ。

「な、なんだってー!？」

どどーん。

「あ、聞こえなかったわけ」「あ、聞こえなかったわけではないです。聞こえてました」

ぺこぺこ。

「な、なんだ」「私、飲み物買ってくるね」

すたっ。

「いってびっしーい」

ふりふり。

「いってきまーす」

ふりふり。

「神無!」

ばっ。

「なに?」

くるっ。

「……絶対、帰って来てね」

どきどき。

「水無……それは、言わない約束でしょ？」

ういんぐ。

というやり取りを経て、ようやく神無は自販機に旅だった。飲み物を買っていくのも一苦労ですね。

「……さてと」

巡と水無のおかしな事を話したので、最後のおかしな事、レポートに手をつけなければいけない。ある意味これが、水無にとって一番重要な、おかしな事なのだ。

巡の情緒不安定も、火邪が出てこない事も、本質的なところを水無がどうこう出来るわけでもない。ただ、ただレポートだけは、レポートだけは水無が頑張るしかないのだ！ 本からコピーとかネットからコピーとか誰かからコピーとか、そういう悪い事はもうやめたのだ。自分の力で、頑張るのだ。

「よーし」

水無はやる気があるのかないのか中途半端な掛け声を上げ、イヤフォンを装着。パソコンに入ってる曲を再生開始。最高にハイだぜ！にはならない曲を聞きながら集中を増していく。外界を遮断。私は、

このレポートに、全てをかける！という意気込み。  
水無は今、本気になった。  
レポートの、鬼になったのだ。

「水無姉ちゃん！！」

子供の声って、よく聞こえるよね。それこそ、イヤフォンして何かに集中していた時でも、不思議と聞こえてくるよね。

「……………」

意識したゆっくりさで首を動かし、声が出た方を見る水無。  
そこには飲み物を買に行ったのに、手にペットボトルも缶も紙コップも持つてはおらず、代わりに、二人のそっくりな子供の手を掴んでいる親友の姿。その表情は満面の笑み。そして水無は、引き攣った笑み。

「……………家<sup>うち</sup>じゃ世話出来ないから元いた所に戻して来なさい！！」

ずびし。

「それは無理だよなー」

「「ねー」「」

にににに×三。

というわけで、水無のおかしなレポートは、まだ解決しなそうです。

「……レポートやりづらいんですけどー」

と、水無がぼやいたところで状況が改善されるわけもなく、水無の膝の上には月読ちゃんが居座り続けるのだった。

唐突に現れた月読ちゃんと命ちゃんは、そこが私達の指定席ですから。と、言わんばかりに膝の上を要求してきた。席、空いてるのに。そして神無も、心得てます。と、言わんばかりに淡々と命ちゃんを膝に乗せた。となると、水無が拒むのはなかなか大変。優しいよねー。

「あつ、こら、勝手に押すな」

月読ちゃんがキーボード部分をぺたぺた触り、画面には奇妙な文字列が形勢された。それが素晴らしい文章だったらよかったんだけど、残念、奇妙な文章は常人には理解出来ないようだ。

「水無姉ちゃん何してるのー？」

にじー。

「勉強してるんだよー？だから邪魔しないでねー」

にじー。

「じゃあ遊ばー」

「なんでやねん」

水無はなぜか関西弁でツッコミを入れた。自分でも理由はわからない。

「なんでやねん、なんでやねーん！」

ケラケラと月読ちゃんは笑い始めた。なんか月読ちゃんの笑いの琴線に触れたようです。

楽しそうで何よりだねー。だけど膝の上で体を揺らさないで欲しいなー。痛いから。という事で水無は、「えいつ」月読ちゃんの停止ボタン、つまりつむじをプッシュ。ぴたっと止まる月読ちゃんは、よく訓練された子供です。

「遊びたいなら神無の方に行きなさい」

ずびし。っと、前方で「ここが『1』」という事は、この回りに一個地雷があるって事なの。わかった？」「わかんない」「そっかあ、じゃあトランプの方教えてあげるね」という明らかにパソコン使って遊んでる会話をしている二人を指差しました。

「神無姉ちゃんは命、水無姉ちゃんは僕なの」

だから、やだー。と、首を横にふりふり。

「何その役割分担。なに、君は神無と遊びたくないわけ？」

「ううん。僕も神無姉ちゃんと遊びたいよ？」

「じゃあ遠慮しないで飛び込んでいけー！」

膝の上から月読ちゃんを持ち上げようとする水無。「やだーっ！」と反抗する月読ちゃん。「これここに置ける?」「うん。置けるよ。よくわかったねー。でも、画面をタッチしちゃダメだよ?」と仲良く遊んでる神無と命ちゃん。

「わけっこなのー! 命は神無姉ちゃん独り占めで、僕は水無姉ちゃんを独り占めのー! そういう決まりなのー!」

じたばたじたばた。と、持ち上げられながら暴れる月読ちゃん。

「決まりって、誰が決めたのかな?」

子供って結構重いな。と、高い高いみたいになっていた月読ちゃんを下ろして、素朴な疑問を尋ねる水無。なんか下ろしたら向かい合う感じになっちゃった。

「?」

きよとん?

「いや、だからね。誰が決めたのかな? 神無があっち、私がこっちって誰が決めたのかなってこと。神無が二人担当じゃダメなの?」

懇切丁寧に聞きました。

「ダメだよ?」

そんなの当たり前だよ?



「どうしてなのかな？」

だからなぜに？

「決まりだから」

疑問なし。

「誰が決めたのかな？」

だからだれが？

「？ わかんない」

きよとん。

「君じゃないの？」

いやいや。

「うん」

こくろ。

「あっち？」

指差し。

「ううん」

ふりふり。

「……じゃあ、誰が決めた？」

首傾げ。

「わかんない」

首傾げ。

「わかんないか……」

じー。

「うん。わかんない」

じー。

「……わかんないのに、その決まりに従うわけ？」

首傾げ。

「うん」

こくん。

「そっか……なんか、おかしくない？」

首傾げ。

「ううん。おかしくないよ。僕、水無姉ちゃん好きだもん。だから  
独り占めできて嬉しいもん」

にににに。

「そっか……そっか？」

首傾げ。

「うん」

こくん。

「……」

じー。

「……」

じー。

「………なんか、飲む？」

じー。

「僕甘いのがいい！」

わーい！



## 5・4・夏風邪には気をつけようね

16時過ぎ、舞歌は今日の講義が全て終わったので、いつものように図書館に向かっていた。

「……暑い」

今日も大変いい天気。太陽らんらん青空さんさん。全くもって憎らしい。

舞歌が空を睨んでいると。

「とっ」

「きゃ」

人とぶつかりました。舞歌は上を見て、前方不注意。相手はキョロキョロしていて、前方不注意。お互いに非があります。

「ちゃ、ちゃんと前見て歩きなさいよ！」

しかしぶつかって来た方は、まるで舞歌に全面的に非があるような事を言いました。

「はあ？」

なんだこいつ。と思って舞歌が見下ろしていると、「き、気をつけないとっ！」と、自分に言い聞かせるような事を舞歌に向かって叫び、逃げるように相手は走り去った。

「……」

走り去る後ろ姿を、舞歌は不思議そうに眺めた。

何で子供がいるんだろう？

「水無姉ちゃんありがとー！！」「神無お姉ちゃんありがとー！！」

二人はアイスココアを買ってもらってご満悦です。

「ちゃんとお礼が言えて偉いねー」

と、神無は命ちゃんの頭をなでなで。命ちゃんは、えへへへー。

「お礼は行動で示して欲しいねー」

と、水無は月読ちゃんの頭をぺしぺし。つまりどけて言う意味何ですけど、意味がわからなかったのか、月読ちゃんは、水無を見上げて首を傾げ、

「お礼は体で？」

と言った。

「どこで覚えたそんな言葉!？」

忘れる忘れるー!と、月読ちゃんの忘却スイッチ、つまりつむじをプッシュプッシュプッシュユー。「やーん!」と、月読ちゃんは悶えた。「楽しそうだねー」「ねー」と、ニコニコな二人。

「忘れた?」

「忘れたー!」

よく訓練されております。

「よし。じゃあ、じっとしてなさい。私はお勉強しないといけないからね」

水無の要求が、膝から下りるから、おとなしくしていて欲しいに、ランクが下がった。仕方ないじゃないか。

「僕もするー!」

「君はしなくていいの」

ぺしっと、月読ちゃんの頭を叩いて、キーボードを打ち始める。そして月読ちゃんも、キーボードを打ち始める。

「なんでやねん」

停止スイッチポチツとな。

しかし今回のつむじは停止スイッチではなかったようで、月読ちゃ

んは「なんでやねんねんなんでやねん、なんでやねーん！」と、体を揺らしながら陽気に歌い始めた。陽気スイッチだったか。

「おとなしくしてなさい」

スイッチがダメなら言葉で言うしかないぜ。

「なんでやねーん」

言葉でもダメみたいだぜ。

「おチビちゃんは、あれなのかな？なんでやねん病なのかな？」

「あ、そういえばさえちゃんが風邪引いちゃったの」

唐突な報告。

「……それは、お大事に」

自由だな。と、思う水無。というか、さえちゃんって誰だ。

「そういえば、さえちゃんが神無お姉ちゃんに会いたがってたよー」

月読ちゃんの口からさえちゃんの名前が出たので、命ちゃんと神無もさえちゃんの話に。

「そうなの？」

「そうなの。さえちゃん、神無お姉ちゃん気に入ったみたい。全くもー、ぶんぶん！」



口に出して怒ってますアピール。

「急に怒ってどうしたの？」

髪さらさらだなー。と、神無は命ちゃんの髪を梳く。

「神無お姉ちゃん、独り占めできなくなっちゃー！」

だから、ご立腹なんです！

「んー、今は独り占めだよ？」

水無は、神無適当に喋ってんな。と思った。

「うん！ 神無お姉ちゃん好きー！」

にぱー。

「私も好きだよー」

にこー。

「水無姉ちゃんは僕が好きだよ？」

「うん。ちょっと意味がわからないかなー」

水無姉ちゃんは、僕が好き。と、断言されたのか、水無姉ちゃんは僕が、好き。だから安心してねー。と、言われたのか。どっちでもいいか。

「で、その、さえちゃん？は大丈夫なわけ？」

遊んでないで看病してあげた方がいいんじゃないかなー。だからもう帰った方がいいんじゃないかなー。

「たぶん大丈夫だと思うよ？」

月読ちゃんは、キーボードを押すのが気に入ったのか、カチカチとキーボードを押して遊んでます。水無はもう止めない。諦めた。好きにさせる。保存はしてあるから大丈夫。

「多分って……ああ、風邪がうつつたら大変だから、会ってないわけ？」

こいつ、ほっぺた柔らかかそうだな。と、思う水無。

「うん。昨日からさえちゃん部屋にかんきん中なの」

クスクスと笑ってるけど、言ってる事は物騒。

「監禁？」

ロープでグルグル？

「そうなの。風邪引いたら寝てないといけないのに、さえちゃんすぐに遊ぼうとするから、さえちゃんが風邪引くと、いつも先生が見張ってるの。外出しようすると、捕まっちゃうの。だからさえちゃん、かんきんだー。っていつも言ってるんだよ」

「ああ、それはそれは……」

先生達も大変そうだ。

「風邪、流行ってるの？」

ぶにぶにと、月読ちゃんのほっぺを突きながら聞いてみる水無。月読ちゃんは、おー、ここ押すと消えてくー。と、学習中。

「小学校で流行ってるんだってー。それでみえちゃんももらってきて、さえちゃんも風邪引いちゃったみたい」

「ふーん」

みえちゃんって誰だ？という疑問を聞く代わりに、耳たぶをぶにぶに。子供はどこもかしこも柔らかいなー。私にもこのくらいの時があっただなー。

思い出したくもないけど。

「水無姉ちゃん、僕が風邪引かないか心配？」

月読ちゃんはつぶらな瞳で、じーっと水無を見つめます。

「心配ですよー」

という答えを返すしかないだろうなこの場合。

「じゃあ、風邪引いたら来てくれる？」

小首を傾げる無垢な瞳。

「あー、それはですねー……」

いつの間にかシリアスな空気が。と悩む水無。ここで、「みことが風邪引いたら看病してくれる?」「うん、いいよー」というように、軽々しく肯定すると、よーし、頑張つて風邪引こう。みたいな事になりかねない。しかし否定するとこいつ、えー、どうしてー。なんでなんでー。みたいな感じで「つて、おい」

「ど、どうしたの水無?」

水無が急に空中にツツコミを入れたので、神無はビックリしました。

「いや、なんでもない、なんでもないさ……」

神無はたまにバカだ。後先考えず、今、最善の答えを答えるからだ。いつか後ろから刺されそうな性格だなあ。と、昔水無は思った事がある。

「ねーねー水無姉ちゃんは、来てくれないの?」

「えーつと……」

神無が行くとか言うから月読ちゃんの目に期待の光が宿ってます。

「でも命ちゃん。風邪は引かない方がいいんだからね?帰ったらちゃんとうがいと手洗いするんだよ?」「はい!」それだ。さすが神無、かしこいぜ。

「風邪を引く時の事を考える暇があるなら、風邪を引かない方法を

考えるべきではないかね？」

「どんなに注意しても引いちゃう時は引いちゃうから引いた後の事も考えるべきだと思う」

「あ、そうですね……」

この子五才だっけ。

「水無姉ちゃん来たくないの？」

「来たくないの？って、どこに？」

惚けてみました。

「僕達のお家！」

ぷくーっとほっぺを膨らまして、怒ってますアピール。

「……えい」

突く。ぷしゅー。ぷくー。突く。ぷしゅー。ぷくー。つ「水無姉ちゃんー!」「どっちらほっぺを押しても、空気は出ても怒りは出ていかないらしい。

「水無姉ちゃん僕の事嫌いななの？」

うるっ。

「いや、君は嫌いじゃないんだけどねー……」

なんかあそこ、変な奴（修道服マニア）とか、変な奴（疑問系）とか、変な奴（市松人形）とかいるし。だから極力行きたくないというのが本音。

「それにほれ。おチビちゃんには、私以外に神様がついているじゃないか」

だから私行かなくてよくな？

「巡姉ちゃんには巡姉ちゃんのいいところがあつて、水無姉ちゃんには水無姉ちゃんのいいところがあるの!」

もー!

「……君、いくつだっけ？」

いい事言っじゃないか。

「五才!」

パー。

「じゃあ、巡のいい所と私のいい所を言ってみなさい」

「巡姉ちゃんは神様などで、水無姉ちゃんはカツコイイところ!……!」

大声で言い切りました。

「うん。ちょっとボリユーム落とそうか」

水無は月読ちゃんの髪の毛をクルクルと指で巻きました。ボリユームを落とすためには、スイッチじゃダメなのです。「はい……」月読ちゃんはよく訓練された子供です。

「……見つけたです！」

「あ！巡姉ちゃんだー！」「巡お姉ちゃん！」

噂をすれば神。巡が現れました。

二人はぶんぶん手を振ってここだよアピール。水無はようやく保護者が来たか。と一安心。神無は、命ちゃんをポニーテールにするのに夢中。

「む……です」

四人の側までやってきた巡は、すぐ、眉間に皺を寄せて考え始めた。さつき月読が叫んでいた事とか、机の上に置いてある二つのココアの缶とか、二人が膝の上から下りてこっちに来てこれなくてちょっと悲しいとか、そんな事よりも……。

「お前達、ずっと二人で行動してたですか？」

「？」「うん。みこと達、神無お姉ちゃんに会うまでずっと一緒だったよ」

「そう、ですか……」

「それがどうかしたの?」「したのー?」

巡は、大学構内に子供がいた。という噂を聞いて、まさか、というより、またかと思い二人を探していた。

しかし今回の噂は、子供が一人で歩いていた。という噂だった。なので巡は、月読ちゃんと命ちゃんが個別に行動しているのかと思いつつもより必死に探していたのだが……二人は喧嘩しているようには見えないし嘘をついているようにも見えない……。

「……お前達、誰かと一緒に来たですか?」

「ううん」「いつもみたいに、内緒で来たよ!」

「後で説教です」

「「やだー!」「」という二人の声を聞き流しながら、巡は一つの可能性について考える。

もしかして、もう一人『内緒で』来てるのか?



5・4・夏風邪には気をつけようね（後書き）

最近色々強引な気がしたけど、そんな事はなかったぜ。

いつもこんなもんだったよ。私が書く話ってのはさ。

またまた次回！。

## 5 - 5 ・妖精 パソコン

「先生ー」

16時過ぎ、真奈美先生がくるみわり園の事務室で内職をしていると、かなちゃんが入ってきました。

「どうしました？」

作業の手を止めて、話を聞く体勢を取る真奈美先生。事務室には今、真奈美先生しかいないのです。

「真奈美先生服作ってたの？」

真奈美先生の机の上にはミシンが置いてあって、かなちゃんが来るまではガタガタガターと音を立てて動いていました。

「ええ、そうですよ」

真奈美先生は服を作るのが上手なのです。今は、子供用の修道服を作っていました。

「みんなと一緒にじゃないんですか？」

外で遊ぶのが大好きなさえちゃんが今日は監禁中なので、子供達は食堂で遊んでいたはずです。

「みんなは食堂で勉強してるよ」

「それは偉いですね」

真奈美先生はかなちゃんの頭を軽く撫でます。さえちゃんがいない時は、かなちゃんがみんなをまとめるので、恐らく勉強もかなちゃんが提案したのでしょうか。という事で、撫で撫で。かなちゃんはニコツと笑い、撫でられるがまま。黙して語らず笑うのみ。

「わからない問題でもあったんですか？」

勉強していたならそういう事かな？

「ううん。そうじゃなくて、あのね……みことちゃんと月読ちゃんがないの」

あまり重要ではないけど内緒にしといた方がいい秘密をばらした時のように、かなちゃんは曖昧に笑いながら報告しました。

「ああ、またですか……」

真奈美先生は顔をしかめます。

月読ちゃんと命ちゃんの無断外出は、先生達の間でも、結構問題になっていきます。

四六時中監視は出来ない事、一人じゃなくていつも二人で行動している事、向かう先が巡がいる大学とわかってる事、ちゃんと門限には帰って来ている事、二人が親を探しているわけではない事、などなどの理由で、二人の無断外出は実質黙認されていますが、本来は子供の無断外出はダメなのです。友達の家に遊びに行く時も、ちゃんと先生に言ってからというのが決まりです。

二人の無断外出が問題なのは、何も、危険だから、というだけでは

ありません。一番の問題は、二人を真似て無断外出をする子供が増えてしまう可能性です。今のところはそういう子はいないようですが……。

「わかりました。園長先生に話しておきますね」

そろそろどうにかしないとね。

「あ、違うの先生。別に命ちゃんと月読ちゃんがいないのはいつもの事だからいいんだけど……」

よくはないけどね。

「あか」「真奈美先生！」

かなちゃんが本題を言おうとした時、事務室に新たな先生、恵子けいこ先生（女性、四十代後半、保育士免許有り、特技ピアノ）が息を切らしてやって来ました。

「さえちゃんが窓から逃げました！靴も隠し持っていたとは……一人じゃ捕まえられないので協力して下さい！」

若さには敵わないぜ！

真奈美先生が事務室の窓から庭を見ると、パジャマ姿の女の子が両手を上げて、元気よく走っていた（逃げていた）。その後ろ姿からは、私は自由だー！！という想いが伝わってくる。

病み上がりなのに全くもう。

「はあ、わかりました。恵子先生、プランBです」

「わかったわ！」

恵子先生（心はハタチ）は大きく頷いた。

「かなちゃん、話はまた後で」

かなちゃんにその声をかけ、真奈美先生は事務室を出ます。

「はい……」

かなちゃんは、先生達忙しいからしょうがないかなあ。と思いつつ、真奈美先生を見送ります。

外に出た真奈美先生は「さえ！ 待ちなさい！」と、修道服のまま猛ダツシユ。「いやじゃー！！」と、さえちゃんは答え加速。恵子先生（ノリはいい方）は走らず、玄関近くでスタンバイ。

「あかねちゃん大丈夫かなあ……心配だなあ」

真奈美先生が手を伸ばしたけど「つかまらなーい！！」クイツクターンで回避してこつちに帰ってきたさえちゃんをスタンバイしていた恵子先生が「つかまらなーい！！」「あつ！プランB失敗！」「次プランC！」「無計画ですね！？」「無計画という計画です！」「私は自由だー！」「という感じの鬼こつこを、玄関から眺めながらかなちゃんは、そう呟きました。

そして偶然、一人の少女が、その呟きを聞いていました。

「何か心配事でもあるんですか？」

「あ、くるみさん。あのね」

「巡姉ちゃんどうしたのかな?」「かなー?」

「んー、なんか色々忙しいみたいだねー」

「んー、なんかもうどうでもいいかなー」

月読ちゃんと命ちゃんが仲良く首を傾げてご質問。神無はポニーテール出来たー、とニコニコ笑って答えて、水無は欠伸を堪えながら答えました。

巡はすでにこの場にはいない。「お前達はここでじっとしてろです。後で迎えに来るです」と言い残し、去って行った。

「忙しいってお勉強?」

命ちゃんが神無に聞きます。

「んー、どうだろ。勉強ならここでも出来るだろうし、何か用事でもあるんじゃないかな?」

「そっかぁ……」

納得できかねるけど納得するしかあるまい。という感じの命ちゃん。

「残念？」

「ううん。神無お姉ちゃんいるから残念じゃないよ？」

つまり残念って事か。と思いつつ、「嬉しい事言ってくれてカワイイねー！」と、命ちゃんをギューってしました。「きゃー！」って命ちゃんは歓声をあげました。

「水無姉ちゃん水無姉ちゃん」

そんな二人を、神無よくやるなあ。と感心と呆れがミックスされた眼差しで見ていた水無の服を、月読ちゃんが引っ張りました。

「何だいおチビちゃん？」

面倒だが相手をしてあげるしかあるまい。

「なんか変だよ？」

月読ちゃんは、パソコンを指差しました。先ほどまではパソコンの画面には、月読ちゃんが作成した奇妙な文字列が映し出されていますが、今はぐにゃぐにゃしたパイプみたいなのが増えたり消えたりするのが映し出されています。

「ああ、スクリーンセーバーだよ」

水無はキーボードをタッチ。

「戻った！」

画面が戻ってビックリな月読ちゃん。

「どうやったの!?!」

キーボードをでたらめに押す月読ちゃん。しかしさっきの画面には戻らないし、別の画面にもなりません。謎は深まるばかりだぜ!

「あんま押すな。しばらくじっと見てなさい」

「はい!」

月読ちゃんしばらくじっとパソコンを見ています。見えています。見えています。見て「目が痛いよー」「まばたきしろ」「まばたきスイッチオン。」

「あつ!勝手に変わった!」

しばらく経つと(5分)画面が変わり、またパイプが画面内を縦横無尽に動き回り始めました。

「ほら、なんか押してみ」

「うん!」

水無に促され、月読ちゃんはポチツとな。すると「戻った!」

「どうして!?!ねえどうして!」



不思議過ぎるぜ！

「どうしてって、スクリーンセーバーっていうのはそういうもんなんだよ」

「すぐリーンセーバーってなに!？」

「いや、だから、スクリーンセーバーっていうのは……」

どう説明したもんかな。

「パソコンの電源点けたまましばらく使ってないと、スクリーンセーバーが動くんだよ」

「どうして動くの!？ どうやって動くの!？ 誰が動かしてるの!？」

「あー……」

キラキラと無邪気な瞳。すっごいめんどくさい。「どういっつのはどちらかというと、神無の役割だ。しかし神無は……」。

「みこと知ってるよ！ これ、ポニーテールって言っつんでしょ!」

「うん。そっだよ。よく知ってるねー」

「でも、どうしてポニーテールっていうの?」

「それはね、お馬さんの尻尾に似てるからだよ?」

「どうしてお馬さんの尻尾に似てるから、ポニーテールっていうの？」

「それはね、お馬さんは英語だとポニー、尻尾はテールっていうからだよ？」

「どうして英語でいうの？」

「それはね、英語の方がカッコイイからだよ？」

「あ、そいえばどうして神無お姉ちゃんは、みことをポニーテールにしたの？」

「それはね……命ちゃんがカワイイからだよー!!」

「ぎゃー……」

つてな感じで赤ずきんちゃんごっこに夢中なので頼りにはなりません。

というわけで水無は、テキストに説明する事にしました。

「スクリーンセーバーが、どうして動くのか、知りたいのかい？」

ワイルドー。

「うんー!」

ワクワク。

「それはね……ずっと同じ画面だとパソコンだって飽きるからさ！」

BURRN!

「そつか！」

納得！

「じゃあ誰が動かしてるの!？」

ドキドキ。

「そりゃ、妖精に決まってるじゃん」

あっけらかーん。

「妖精さんが動かしてるの!？」

実在したのか！

「そうだよ？ パソコンの中には妖精が住んでいるのさ。知らなかったの？」

おっくれってるう。

「知らなかった！ この中にもいるの!？」  
バンバンとパソコンを叩く月読ちゃん。

「こら！ 妖精は衝撃に弱いんだから叩いちゃダメ！」

「そうなの！？ごめんなさい……」

妖精バグモに謝る月読ちゃん。

「妖精さん、出て来ないの？」

優しくキーボード部分をノックしてみる月読ちゃん。入ってますか？

「妖精はデリケートな引きこもりだから、出て来ないんだよねー」

内心、あれ？こいつマジで信じたぞ？大人っぽいのか子供っぽいのかどっちかにしてよ。と焦り気味の水無。

「妖精さんはどうしてパソコンの中に入ってるの？」

「それは、あー、仕事だからだよ」

「妖精さんはどうしてパソコンの中で仕事してるの？」

「それは、あー……不況だからだよ！」

子供の夢を守るのも大変だぜ。

「不況だと妖精はパソコンで仕事するの!？」

「そりゃそうさ。もうあれだよ？世界の常識だね。妖精は賃金安くても大事にしてたら働くから便利便利。不況になったら妖精を。

これ、常識。」

妖精には学校も勉強もレポートも人権もない。

「妖精さん、ずっとこの中で働いてるの？」

「まあ、だいたいはね。たまに電波に乗って移動したりもするけど、ほとんどはこの中で頑張ってるかなー」

「妖精さん偉いねー」

妖精をよしよし撫でる優しい月読ちゃん。

「妖精さん、ご飯は食べるの？」

「食べるよ。主食は夢と電気かなー」

もうどうにでもなれやい。

「夢を食べるの!？」

「バグ?」「命ちゃん、ホント物知りだねー」という二人の会話はスルー。

「食べるっていうか、チヨウチヨが蜜を吸う感じ?だから不況になるとねー、パソコンに出稼ぎにこないといけないんだよねー。ほら、不況になると、夢を見る人間が減るじゃん?」

子供に同意を求めちゃダメじゃん。

「どうやって妖精さんにご飯あげるの?僕あげてみたい!」

「あー、じゃあ、これをここに入れて、こっちをここに入れて？」

コンセント近い席でよかったー。

「出来たよ？」

水無に言われた通りやったけど、パソコンに変化はなし。どういう事ー？

「今食べてるよ。ほら、ここが光ってるでしょ？これ、食事中の合図」

「妖精さんは静かにご飯食べるんだねー」

おー。と、感心した様子。

「ねえねえ水無姉ちゃん。僕、妖精さんとお話したい！」

「うえー!？」

お、お喋りっすか!？

「それは、ちょっと……ほら、食事中は静かにしないと、ね？」

「じゃあご飯食べ終わったらお話する！」

「そ、それもちょっと……」

「妖精さんと、お話出来ないの？」

「うっ」

キラキラとした眼からの泣きそうな眼は卑怯だよ。

「あー、うー……あぁもうあれだ！お喋りは無理だけどお手紙は届けるぜ！？」

ど、泥沼ー。

「ホント！？僕お手紙書く！」

「よーし！いいかいおチビちゃん？ここに絵を描くんだ！」

水無は勢いと勢いと勢いに任せてペイントを表示させた！

「絵？」

「そうだよー。妖精は文字じゃなくて絵を使ってコミュニケーションを取るんだよー。だから絵でお手紙だよー？」

「なるほどー。じゃあ僕、絵を描く！」

「よしよし。じゃあやり方を教えよう。まずはね」

水無は月読ちゃんにペイントの使い方を教え始めました。

そんな水無を、水無ってたまに不器用だよなー。と思いつながら見ていた神無。ふと、ピンボールに夢中の命ちゃんに声をかける。

「ねえ命ちゃん。命ちゃんは妖精さんに興味ないの？」

「パソコンの中の妖精さんは気になるけど、今はいいー」

別に後でもいいやー。という態度の命ちゃん。妖精にはそんなに興味ないのかな？

「命ちゃんは、妖精さんに興味ないの？」

命ちゃんの方が興味ありそう、というか信じそうだったけど。

「興味あるけど、別にいつでも会えるから今じゃなくても、後で妖精さんに聞けばいいかなーって」

何でもないように言った命ちゃん言葉に、神無は「いつでも会えるの!？」と、衝撃を受けました。

「いいの？」

「じゃあ、私が迎えに行きましょうか？」

「いけないんですか？」

「いけなくないし行ってくれるなら安心だけどー……くるみさん、場所わかるの？」



「行くと行った私が、場所を知らないわけがないとは思いませんか?」

「んー、普通に考えたらそうなんだけどー……なんか心配だなあ」

「何か心配事でもあるんですか?」

「……」

「私だって、冗談くらい言ってもいいとは思いませんか?」

5 - 5 ・妖精 パソコン（後書き）

ああ、私も妖精に会ってみたい。  
私は自由だテキトーだ！

行き着く地点がまだ不明。

頑張れ私。

明るい明日が待ってるぜ。

## 5 - 5 ・大人の責任、子供の責任

「…………ふう」

図書館。舞歌はシャーペンを置き一息つきました。

舞歌は携帯を取り出し時間を確認。図書館に来てから、かれこれ一時間程度経っていた。集中してレポートを書いていたので、もうこんな時間に時間が経ったのかと驚く。作業をしていた時間を自覚すると、急に疲れがやってくる。

「…………」

窓から外を眺める。夏の太陽はまだまだ沈まず、憎々しいくらい元気に世界を照らしてる。

何か飲もうかな。

舞歌がそう思った時だった。

「三途舞歌!!」

図書館では許されない大声で、名前を呼ばれた。

そんな事をする人間の心辺りは舞歌には一人しかいませんし、その声にも聞き覚えがありまくりだったので、舞歌は声のした方を向く事はせず、外を眺めるのでした。

「無視ですかといつもなら怒るところですが、今日は忙しいので我慢してやるです」

巡は、舞歌の前方に無許可で座りました。  
それでも舞歌は外を眺め続けます。

「三途舞歌、お前、子供を見かけなかったですか？」

「子供……？」

さすがに舞歌も無視は出来なかった。

「心辺りがある感じですか！？」

舞歌のその反応を見て心辺りがあると感じた巡は、身を乗り出した。  
まさに、切羽詰まってますという巡の姿に、「え、ええまあ………」  
舞歌は引いた。

「どこで見たですか！いつ見たですか！！誰を見たですか！？」

今の巡には、机を越えて、舞歌の胸倉を掴みそうなぐらいの勢いがあります。

「ちよ、落ち着いて静かにして下さいよ」

何なんだよもつ。

「落ち着いて静かにしたですからさっさと教えてください」

今の巡はまさに、餌を前にして我慢を強いられた犬。

「さっさと教えて言われても……見かけましたよ。だけですよ」

「どこですか!？」

はい、我慢終了。

「ど、どこって、図書館前ですけど?」

ホント何なんだよ。

「どんな様子でしたか!？」

「どんな様子って……ぶつかって」

「ぶつかったですか!？」

世界の終わりを聞いた。というような悲痛な声を巡を上げた。

「怪我したですか大丈夫ですか!？」

「い、いや、全然大丈夫だったみたいで、なんか変な事言って走って行きましたよってどうか、ホント落ち着け」

「どうしてそこで行かせたですか!？捕まえるです!!」

自分に必要な事だけを聞き、不都合な事もしくは出来ない事を聞かえなくするのは、神様見習いではなくても使用出来るスキルです。

「ど、どうしてって、別にいいかなと思って」

「行かせていいわけがねえだろうが!!」

机に拳を叩きつけ、激怒する巡。

「子供が一人でこんな所にいていいわけがないだろうが!! どうしてそんな事もわからない!! 危険だろ止めるよ馬鹿!!」

「ば、馬鹿って……と、とりあえず落ち着け、机叩くな」

なんかこいつ、様子おかしくね？

「いつ見た!？」

今の巡に、舞歌の言葉を聞く心はない。

「い、一時間前？」

「一時間!？その間一切行動しないでここで呑気にレポート書いてたのか!？お前には他人を心配する心はないのか!!」

「そ、そこまで言う事はないでしょ!？」

「そこまで言う事何だよ何でそれがわからない!？」

巡は、髪を掻きむしり始めた。その事が本当に理解出来なくて、わからなくて、つらい。

「神社神無も水城水無もわかってない!子供は何にもわかってないのに!自分のしてる事がどれ程危険か!自分のしてる事がどんな影響を与えるか!自分がどれだけ心配されているか!だからそれを教えなきゃいけないのに!大人がきちつと全部をちゃんと教えないとわからないのに!!それなのに!!!」

心からの悲痛な絶叫。

「は、春風さん？」

舞歌が心配になる程、巡は壊れていた。いつもの『自分は神様です』というのが、プラスの、前に進む壊れ方なら、今の巡は、マイナスに、後ろ下がりに壊れ方いる。

過去に引きずられる、壊れ方。

「三途舞歌」

巡は舞歌を睨んだ。怨みがこもった目で。

「子供に何かあったら、大人の責任おまえになるんです」

巡は、自分が言いたい事だけを舞歌にたたき付け、去った。恐らく子供を捜しに行ったのだろう。しかし舞歌にはそんな事はどつでもよかった。いや、そんな事を気にする必要はなかった。

「……責任」

舞歌は巡の最後の言葉おんごで過去を思い出す。

去年、巡に言った言葉、巡に言われた言、水無に言われた言葉、水無に言った言葉、神無に言った言葉、神無に言われた言葉、それからずっと前に言った言葉に言われた言葉。

思い出す度に、リストバンドに隠れた傷が疼く。

「…………クソがつ!!」

舞歌は机を思いっきり殴った。

舞歌のその行為を、ましてやその汚い言葉を、咎める友人は、今はいない。

「ここで合ってますか?」

「たぶん合ってるけど……………ほんとに来てよかったのかなあ」

「仕方ないとは思いませんか?」

「確かに先生たち、さえちゃん捕まえるの必死だったから、声かけるのあれだったけど……………あつ、くるみさん待ってよ!」

「まだ探すのは早かったですか?」

「早くないけど、私を置いてかないですよ。ミイラ取りがミイラだよ」

「あなたはホントに子供ですか?」

「子供だよ。そんな事より、あかねちゃん、ほんとにここにいるの



かなあ。なんか、不安になってきちゃったよ」

「とりあえず、行きませんか？」

「……もう、どうしてくるみさんはそんなに危機感とかないの？中学生なのに」

「私に危機感がないんじゃないかと、あなたが子供らしからぬ危機感を持っている可能性はありませんか？」

「かなは子供だもん！」

「冗談ですか？」

「ううん。みことちゃんの真似」

5 - 5 ・大人の責任、子供の責任（後書き）

さすが神様。私には理解出来ない程のスピードで壊れていくぜ。

いつ、崩壊スイッチ押したんだろう……

「そういえば命ちゃん」

と、神無は、みことも描く。と言って、今はペイントに夢中の命ちゃんに話しかけました。

「命ちゃんは、お盆って知ってる？」

「みこと知ってるよ。お化けが来る日だね」

だいたい合ってる。

「うん。ご先祖様がお化けになって還って来る日だね。もうすぐ……って言っても、まだ二週間くらいあるけど、まあもうすぐお盆だけど、くるみわり園では、何かするの？」

ふと、その事が気になったので、神無は聞いてみたのです。

「ううん。何もしないよ？」

「そうなの？やっぱり宗教が違うからかな……」

なるほどな。と、神無が納得しかけましたが、「しゅうきょうはよくわからないけど、お盆をしないのは、みことたち達には必要ないからだよ？」と、命ちゃんが言いました。

「必要ない？」

「うん」

意味がわからない神無に、命ちゃんは、パソコン画面を見つめながらうとうとつぶやいてる。

「だって私達の家族は誰も死んでないもん」

お母さんもお父さんもおじいちゃんもおばあちゃんも死んでないから。

お盆に還って来る人は、誰もいない。

迎えに来てくれる人は、いる。

一人の少女と一人の女の子が、大学の全体図が描かれた掲示板の前に立っています。

少女はその図をじっと眺めていて、女の子は少女の服を掴んで、警戒するようにキョロキョロと回りを見回しています。

そんな二人を、特に女の子の方を物珍しい目で色んな人達が見ています。その視線を感じ、女の子が少女の服を掴む力が強くなります。

「ねえ、くるみさん。やっぱり帰ろうよー。やっぱりここ、いちやいけない気がするよー」

くいくいと、少女の服を引っ張る女の子の名前はかなちゃん。

「私は馴染んでるとは思いませんか？」

どこか得意気な少女の名前はくるみ。

「くるみさんは制服着てないから、中学生ってわからないからだよ。私、背も低いし見るからに子供だもん。浮いちゃってるよ。見られてるよー」

びくびくと、今にも怒られちゃうんじゃないかと怯えるかなちゃん。

「制服を着て来なかった賢い私を、あなたは褒めるべきじゃありませんか？」

催促。

「私が言わなかったら、くるみさん制服のままだったでしょ」

じと目。

「つまり私はあなたを褒めるべきですか？」

逆に？

「そんな事はどうでもいいよ。ほら、早く行こうよー。早くあかねちゃんか巡お姉さんか月読ちゃんかみことちゃんか神無お姉さんか水無お姉さんを捜そうよー」

とりあえずここから移動したいかなちゃん。

「この広い場所で、探す対象が多いのはいい事なのか悪い事なのか  
悩みませんか？」

「悩まないで早く行こうよ」

「……」

「くるみさーん」

くるみは、もう少し待ちなさいというように、かなちゃんの手  
を置きました。

さて、説明のお時間。

現在二人がいるのは、所謂中央棟一階ロビー。その名の通り大学の  
中央付近に立っていて、東西南北四つの門のどこから入っても、直  
進するとこの建物にたどり着く、この大学で一番高い建物です。

この大学は学科の多さが売りのようで、他にも建物がたくさんあり  
ます。食堂やら図書館やら実験棟やら購買やらカフェやら情報なん  
とかセンターやら大学院のなんたらやら体育館やらテニスコートや  
らグラウンドやら噴水やら、色々な建物があるみたいです。

入るのが難しい建物もあるようですが、ほとんどがノーチェックで  
入れる建物、これは探すのは大変そうです。

「とりあえず、ここに行ってみますか？」

大学の全体図を覚えたくるみは、数ある建物の中の一つを指差しま  
した。

「じじじってどじじじって？」

実は、案内図がある場所は高くてよく見えないかなちゃん。指差した建物が何なのかわかりません。

「図書館、あなたは確か、本が好きではありませんでしたか？」

「好きだけど……くるみさんの方が好きだよね」

自分が行きたいだけでしょ。

かなちゃんはじと目でくるみを見ます。

「行きましようか？なんとなく、あかねちゃんがいる気もしてきませんか？」

「全然してこないけど……まあ、いつか」

当てもないのだ。行きたい所に行こう。

ちよつと興味もあるし。

5・6・ニューペアー（後書き）

何だろう。

この二人が主人公でいいんじゃないだろうかと思いはじめた。  
くるみの喋り方が面倒だけどね。



## 5 - 7 ・変な人たち

「あのさー神無」

「なにさー水無」

「私、もう帰っていい？」

「ダメに決まってるじゃん。ねー？」

「「ねー」」

「……」

腕時計に示されている時間は17時20分。

そろそろ帰らないと、火無がやばい気が。

「ねえくるみさん。ほんとに入るの？」

図書館の入口のゲート（無断持ち出し不正のあれ）付近で、くるみの袖を引くかなちゃん。

「入っちゃいけないんですか？」

入る気満々のくるみ。

「いいのかなー……」

「大学の図書館は誰が利用してもいいという噂を聞いた事はありませんか？」

「あー、聞いた事あるような、ないようなー」

大学の図書館は大学生じゃなくても使ってもいいらしい。

「じゃあ入りましょうか？」

くるみはかなちゃんなんて気にせず、中に入ります。「ま、待つてよくるみさーん」かなちゃんは置いてかれないように、その後ろをついていきます。

図書館は三階建て、とても広いです。一階は雑誌とかパソコンなどが置いてありました。

こんな広い図書館に来たのは初めてです。お上りさん。かなちゃんはキョロキョロと回りを見ます。

「くるみさん、広いね。探すの大変かもって、くるみさん？」

キョロキョロしていたら、くるみを見失いました。このままじゃ、ミイラ取りがミイラです。かなちゃんは慌ててくるみを捜し始めます。

「あつ！いた！」

幸いくるみはすぐに見つかりました。雑誌のバックナンバーが入ってる棚の前にいました。雑誌を一心不乱に読みあさっています。

「ちょっとくるみさん。本読む前に、あかねちゃん捜そうよー」

「もうちょっと待ってもいいと思いませんか？」

かなちゃんに返答しながらも、本を読む手は止めないくるみ。傍で見えていたら、ぺらぺらと眺めているだけに見えるスピードでページをめくり、読み終わったら次の雑誌に手を伸ばす。その姿は、楽しいとかおもしろいという感情を挟む事なく、ただ、情報だけを記憶しているように見える。ちなみに読んでいるのは料理雑誌。

「もうちょっと待っていいわけじゃないでしょ。早く捜そうよー」

かなちゃんは、服を引っ張りくるみを移動させようとするが、残念、くるみの足には根が生えたようだ。

「ここは涼しいですからあなたも涼しいでしょうし、しばらく休憩するという案はどうですか？」

「確かに涼しいけど、休憩するのは捜してからにしようよ」

「休憩してから捜すという案はどうですか？」

「くるみさんー!!」

やっぱりこの人と一緒に来たのは間違いだったー！先生達を待つて

ればよかったー!!

という気持ちを込めて出した大声がいけなかったのかもしれない。

「ちよつとそこのあなた」

「はいっ!!」

かなちゃんは、声をかけられました。

「くるみさーん!!」

舞歌が図書館から出ようと、一階に下りてくると、そんな声が聞こえた。

声が出た方を見ると、そこには変な女の子がいました。さっき自分がぶつかつた子供ではなかったけど、この子も子供。何か知っているかもしれない。

私は子供に縁があるのか？

舞歌はため息をつきたい気持ちを堪え、「ちよつとそこのあなた」と声をかけた。

「はいっ!!」

変な女の子、かなちゃんはビクツとしてこつちを振り返り、怯えた目で舞歌を見た。

別に驚かすつもりはなかったんだけど。

「何で今日は子供がこんなにいるんですか？何か遠足でも？」

呆れたように舞歌はそう言いました。かなちゃんは、どうやら怒っているわけではないようだとし安んじましたが、まだ怯えた様子。「く、くるみさん」と、くるみの服を引っ張って、なんとかしてよとアピール。

くるみは雑誌から顔を上げ、ようやく舞歌の方を見ました。

舞歌は、こいつ、大学生か？という疑問を持ちました。どこか、幼い感じ、というより、未完成な感じが、くるみという少女からは感じられました。

「遠足ならもつと子供がいるとは思いませんか？」

「……はあ？」

いや、唐突に何？

「あ、あの、遠足とかじゃないよって、言いたいんです」

いつの間にか、くるみの後ろに隠れていたかなちゃんが、くるみの言葉の意味を説明しました。舞歌は、通訳係？と思った。

「あなたは、あかねちゃんを見かけましたか？」

舞歌が色々疑問に思っているのも気にせず、くるみは問い掛けます。

「……あかね？」

あの子の名前か？

「あ、あの、私と同じくらいの背の女の子で、ちょっと気が強くてでも弱虫何だけど、あっ、髪はこのくらいで」

このくらい。といって、肩辺りを示すかなちゃん。

「……ああ、見かけましたよ」

「ほんとですか！」

舞歌の肯定を聞き、かなちゃんは喜びました。

「今はどこにいるかは知りませんがね」

「そうですか……」

舞歌の言葉を聞き、かなちゃんは落ち込みました。

「……」

どうやらこの変な子は、あの女の子を捜しに来たようだ。という事は、この変な奴も大学生じゃないだろう。まあそれはどうでもいい。重要なのは、この二人もまだ見つけてはいないということ。

「……はあ」

舞歌はため息をつき、聞く事も聞いたので、立ち去ろうとしました。

「あなたは一緒に捜してはくれないんですか？」

しかしくるみのその言葉に、舞歌は立ち止まりました。

「……何で私がそんな事しなきゃいけないんですか」

舞歌は不愉快そうな顔を浮かべました。かなちゃんは舞歌が不機嫌になったのを敏感に感じ取り「く、くるみさん？」と、服を引つ張つてもう止めた方がいいよと合図。

「何であなたが捜してはいけないんですか？私達に話しかけて来たのは捜すつもりがあるからじゃありませんか？一人より二人という言葉を知りませんか？」

「……ちっ」

くるみの言葉は、舞歌の神経を逆なでする。いや、くるみの言葉と  
いうより、その問い掛けてくる喋り方が、舞歌の心を揺さぶるの  
かもしれない。

「いちいち人に尋ねない方がいいですよ。不愉快だから。私、そう  
いうの大嫌いです」

舞歌は苦虫を噛むような表情を浮かべながら、くるみにそう言って、  
今度こそ立ち去った。

「……くるみさん」

「何ですか？怖いなら一緒に寝てあげましょうか？」

「冗談を言うタイミングじゃないよ？」

「じゃあ何ですか？私はハンバーグの簡単な作り方をマスターするのに忙しいようには見えませんか？」

「あの人」

「無視ですか？」

「あの人、なんか変な人だったね。ぐちゃぐちゃしてた。くるみさんの事、嫌いなのか好きなのかよくわかんなかった」

「誰かがおかしいとか変とかなんて、私達が言える立場ではないと思いますか？後、あなたホントは大人なんじゃないですか？」

「かなは子供だもん！子供子供してるもん！」

「みことちゃんの真似ですか？」

「ううん。みことちゃんと月読ちゃんの真似ー」



図書館から出ると、強い日差しが舞歌を襲って来た。暑い暑い蒸し暑い。

こんなに暑いのに、あの女の子は長袖を来ていた。

まるで何かを隠すように。

「……」

ホント、変な子供だ。

## 5・7・変な人たち（後書き）

な、なんだってー。かなちゃんか、長い袖を着てるなんて、今までどこにも書かれていなかったじゃないかー。

これは酷い後付け設定を見たぜ？  
頑張ろうぜ？

全てを誰かに確認して行動出来るって、素晴らしい事だぜ？

5・8・そういつ時期、なんだよ

「私は、ゲホ、じゅ、ゴホ、だー……」

さえちゃんは、とある部屋の布団の中で、そんな事を言っていました。

さえちゃんがなぜそんな所にいるかという点、先生達の裏をかいたのです。

今頃先生達は、見失った私を捜して外をさ迷っているだろう。しかし私はすでに園内にいるのだ！見つかりっこない！

「私は、ゲホゲホ、かしこいー」

さえちゃんは、布団に隠れながらそう勝ち誇りました。

「本当にさえちゃんは賢いですね。恵子先生」

「そうですね真奈美先生。まさか自分から部屋に戻ってくれるとは」

布団の向こうから、そんな声が聞こえた。

「……………はっ！」

さえちゃんは慌てて布団を吹き飛ばして、回りを確認。よく見たら見覚えがある物がありまくる部屋だぜ。

しまったここ私の部屋じゃん！！

「だ、騙されゲホゲホ！」

騙されたと叫ぼうとしたら咳こんでしまったさえちゃん。

「ほらあ、病み上がりで走り回るからそうなるのよ？汗もたくさんかいて……」

恵子先生は、そんなさえちゃんの背中をよしよし。

「い、いやー……」

さえちゃんは恵子先生の手から逃れようとしませんが、残念、精魂尽き果てています。

「恵子先生。後よろしくお願いしますね」

「はい、ありがとうございます。さっ、さえちゃん。汗いっぱいかいたから、新しい服にしましょうねー。脱ぎ脱ぎしましょうねー。眠るまで一緒にいてあげますからねー」

「ぬ、ぬーがーさーれーるー……！……！……！……！……！」

さえちゃんの断末魔を聞きながら、真奈美先生はさえちゃんの部屋を出て、事務室に向かいます。

「ふう……」

事務室の時計を見ると、もう17時30分。

さえちゃん捕獲にだいぶ時間がかかってしまった。回を重ねる事に、

さえちゃんの逃亡は巧妙になっている。今の所、敷地内からは出ていけないが、来年小学校に通うようになれば、どうなるかはわからない。

「はあ……」

全く困ったものだ。と、真奈美先生は嘆息しました。

そういえば、かなちゃんは。

「せんせい」

真奈美先生が、かなちゃんの事を思い出したちようどその時、はなちゃんとらんちゃんが事務室にやって来ました。

「先生遊ぼう。二人で遊ぶのあきちゃったー」

はなちゃんはニコニコと笑いながらそう言いました。らんちゃんは、なぜかびくびくしています。というか、二人？

「二人って、他の子達は？」

「さえちゃんはんきんちゅーでしょー？けんちゃんは、なんか元気なくて外ばかり見てて使い物にならなくてー」

指折り数えながら言うはなちゃん。らんちゃんは「はなちゃん、使い物にならないっていうのはちょっと……」と、弱々しく注意します。

「アイちゃんはいいつも通りブランコで遊んでー、つくよみちゃん

とみことちゃんはお外に行つてー」

「は、はなちゃん……」

ちらちらと真奈美先生を見るらんちゃん。月読ちゃんと命ちゃんが無断外出していると知って、真奈美先生が怒るのを恐れているのです。

でも、真奈美先生が、全く仕方ないな。というようにため息をつくだけだったので、一先ず安心。

「でー、あかねちゃんも外に行つちゃつてー、かなちゃんもあかねちゃんを捜しに外に行つちゃつてー、らんちゃんとわたしの二人だけなのー」

ニコニコと、ほら、残つたの二人ー。と、ピースでアピールするはなちゃん。

「あ、あの、あかねちゃんは何か、あの、理由があると思うし、えつと、かなちゃんはくるみお姉ちゃんと一緒だから大丈夫だと思つから、あの、だから、その、怒らないであげて欲しいかなつて、あの」

その横で、オロオロしているらんちゃん。

「……つまり、あかねちゃんとかかなちゃんも、無断外出ですか？」

そして真奈美先生は、額に手を当てた。

ちよつと頭が痛い。さえちゃんの風邪がうつつたのかな？

「あのさー、おチビちゃん」

「なにさー、水無姉ちゃん」

頑張つて妖精バツコンにお手紙を書いている月読ちゃん。画面に表示されているペイント画面には、芸術的な絵が。水無には幾何学模様が乱立しているようにしか見えないけど、きつと深い意味があるんだろうなあ。

「門限とかあつたんじゃなかった？そろそろ帰らないとやばくない？」

時刻は17時30分。確か門限は18時とか誰かが言ってたような。

「あつ、そういえばそうだね。二人とも大丈夫なの？」

神無もそういえばと思い、こつちもペイントに夢中の命ちゃんに声をかけます。命ちゃんの絵は月読ちゃんよりは芸術的じゃない、わかりやすい絵です。友達と遊んでる絵かな？

「もうちょっとー！」

と、月読ちゃんが言いました。

確かにそろそろ帰らないとやばいけど、もうちょっとー！

「巡お姉ちゃんが待っててって言ってたから、みこと達まだ大丈夫だよ？」

と、命ちゃんが言いました。

確かにそろそろ帰らないと怒られるけど、巡お姉ちゃんがいれば大丈夫！

「そう！巡姉ちゃんと一緒に帰るからまだ帰らない！」

命いいこと言った！

「それもそうだね」

と、神無は命ちゃんに同意しました。

もう少し命ちゃんをぶにぶに出来るねー！

「……………そうですかー」

と、水無は帰る事を諦めた。こいつら帰る気ねえや。つまり私まだ帰れねえや。18時くらいまでに帰らないと火無機嫌がバーストするけどもう仕方ねえや。

「ああ、そういえばおチビちゃん？」

ふと、思い出した事が。

「おチビちゃんじゃなくて月読！」

むー！とする月読ちゃん。さっきから気になってたけど、今、勘忍袋がぶつつんしたぜ！



「月読って呼びにくいからやだ」

ホントの理由は、なんか名前呼ぶのは気恥ずかしいから。

「じゃあ、つくよって呼んでいいよ？僕、みー姉ちゃんって呼ぶから」

「私に利益が一切ねえよその取引」

みー姉ちゃんって何だ。猫か。と、思いながら、月読ちゃんの頭をぺしぺし叩く。

「月読なの月読なのつくーよーみーなーのー！！」

「ぎゃー！暴れるな痛いー！」

膝の上で暴れる月読ちゃん。度々下ろしてるから血の巡りは大丈夫だけど、そろそろ限界。主に筋肉が。

「わかったわかったつくーよーみーちゃん！！」

「なあにー？」

ニコっつと満足気な月読ちゃん。このガキー。と思う水無。「ホント仲いいねー」「ねー」の二人。

「君の姉ちゃん、最近様子おかしくない？」

ようやく聞きたい事が聞けた水無。

「巡姉ちゃん？」

「そう、巡姉ちゃん」

「んつとねー……」

月読ちゃんは腕を組んで、うんうん考えています。なんか逆に考えていないように見える不思議。

「いや、おかしいと思わないなら思わないでいいよ」

私の気のせいかもしれないし。

「ううん。おかしいかもしれないよ？」

月読ちゃんは腕組みをやめ、水無の顔を見ながらそう言います。

「あのね、巡姉ちゃんは、夏休みになると元気になるの」

「夏休みになると元気になる？」

そりゃ、たいていの学生は夏休みになれば元気になる。全然おかしくない。

「夏休みっていうか、夏？八月？が近づくとね、元気になるの。すっごい元気になってね、いつもより神様になるんだよ」

「いつもより神様……」

巡以外には使えない言葉だな。

「うん。だから夏休みはいつぱい人助けするの。草むしりとか、ゴミ拾いとか、道案内とか、悪者退治とか、たくさーんするの。夏の巡姉ちゃんはすっごいんだよ！」

月読ちゃんは誇らしげです。

「ふーん、なるほどねー」

神無の言う通り、そういう時期だったのか。と、水無は思った。しかしこいつの思っているおかしいと、自分が感じているおかしいは、ちよつと違うみたいだ。とも、水無は思った。

月読ちゃんは、巡がいつもよりも元気になる。と、思っている。しかし水無は、巡が元気になっているとは思えない。

「水無お姉ちゃん。みことはね、夏休みの巡お姉ちゃん、あんまり好きじゃないの」

と、そんな水無に命ちゃんが声をかけました。その表情は、夏休みの巡を思い出してから、ちよつと落ち込んでるように見えます。そんな命ちゃんのほっぺをぶにぶにする神無は空気を読んで欲しい。

「僕は好きだよ！」という月読ちゃんは無視して、「どうして?」  
と、水無は理由を聞きます。

「あのね。巡お姉ちゃんいつもより元気だね、色々やってくれるし、遊んでくれるけど……なんていうかね、んーっとねー……」

どう言えばいいかなー。と、命ちゃんは腕を組んで考え中。さっき

の月読ちゃんとそっくりです。

「あのね、かなちゃんも夏休みの巡お姉ちゃんあんまり好きじゃないって言うってね、どうしてって聞いたらね」

自分の言葉は諦めた命ちゃん。前、かなちゃんが言った事を、よく意味はわからなかったけど、そのまま言う事にしました。

「夏休みの巡お姉ちゃんはね、鬼から必死に逃げてるみたいで、あんまり好きじゃないって。全然楽しそうじゃないって。鬼から必死に逃げてるっていうのはよくわからないけどね、みこともね、楽しそうじゃないっていうのは、なんかわかるの。夏休みの巡お姉ちゃんね、楽しくないの。だから、みことあんまり好きじゃない」

「ねーねー、くるみさん。もう行くうよー」

「もうちょっと待ってくれないに違いないですか？」

「もう……ちょっとだけだよ？」

「ありがとうございますか？」

「もう言ったから別にいいよ……あかねちゃん大丈夫かなあ」



5・9 どうか神様迷える私を導いて下さい（前書き）

いや、マジでお願いします……導いてくれー。

## 5・9・どうか神様迷える私を導いて下さい

「どこですかどこですかどこですかー!!!」

と、叫びながら巡は大学構内を、舞歌と別れた後、ずっと走り回っていた。どこですかどこですかと、叫びながらずっと。

その姿は必死そのもの。その姿を見れば誰もが、何か大事なモノを捜しているのだろうと思うだろうし、同情するだろうし、手伝おうと思う、かもしれない。

実際。走り回っている巡を見た、その他大勢、エキストラの皆様は、大多数は、何か捜してるのかな? と思い、早く見つかるといいな。

と心だけの応援を送り、一部の巡を知る者は、ああまた馬鹿な事してるんだろな。いつまであんなはっちゃけてんのかな。 と思い、またある人達は、そろそろ落ち着けよ、ガキじゃないんだから。 まあ、身長はガキみただけだな(笑)。ちげえねえ(嘲笑)。という会話をしていた。つまり、助けようと、手伝おうという人は、実際になかったわけだ。

これは何も、その他大勢、一般人Aさんや一般人Bさんが薄情だったからではない。まあ一部には、一般人Dさんのように、一生懸命の人をせせら笑うのがカツコイイと思っっている人間がいなかったわけではないのだが。

声をかけなかった理由。手伝おうとは言えなかった理由。それはもちろん、巡の走りが速過ぎて声をかけるタイミングがなかったからや、あまりにも必死な形相必死な声だったので声をかけるのが躊躇われたというのものもある。

しかし一番の理由、というか原因は、巡が手伝ってもらおうとしなかったという事につきる。

巡は、数少ない友人、神無と水無にさえ、一緒に捜してくれと頼ま





神様が人を救わないなら私が神様になって人を救いますー。という、子供なら微笑ましい夢。

私は神様だから人助けするー。という、子供なら健気な努力。

しかし、二十歳になる少女、というか女性が遊び零の冗談無しで必死に神様を夢見て努力する姿は、痛々しいしおかしいし、悩みがあるなら聞くよとか馬鹿じゃねえのとか言われても仕方がない。と、巡だって理解してる。

「どーこーですかっ!!」

しかし止められない止まらない。

だって巡は、神様じゃないとダメなのだから。

当初は、救うべき人が多過ぎて、神様は全ての人を救えない。そういう理由で神様が救う人間を選別しているというならば、私が手伝ってあげれば、少しでも困っている人を救ってあげれば、弟と同じ境遇の人が、救われるかもしれない。そんな考えから生まれた、神様のお手伝い。しかし成長していくうちに、神様のお手伝いから自分が神様になって、全ての人を救おうと考えるようになった巡。

どうしてそうなったのか。それは、今の神様に見切りをつけたからと、巡は意味付けた。そういう事に、した。

そして巡は、人助けの他に、人を救済するようになった。人の隠したい罪を暴き、断罪する。それが巡の救済。巡は、それが人を救うという事と信じていた。いや、勘違いしていた。

どうしてそんな勘違いを犯したのか。当時の巡にはわからなかった。当然だ。当時の巡は、それが正しいと信じて疑わなかったのだから、勘違いだと気付いてすらいなかったのだから。

「……どこですかー」

しかし、今の巡にはそれがわかる。去年、水無に自分の罪を断罪された巡にはわかる。

過去を暴く事がなぜ救済なのか。結局それは、自分がそうやって救われたかったからに外ならない。

水無が言った事が正しいのかは、巡にはわからない。父親に確認する勇気もない。もし水無の言った通りなら、自分のせいで弟は死んだのだ。それを知る勇気は、巡にはない。ただ、きつと。そんな勘違いをして、逃げるように懺悔するように代償行為の如く神様を指したり他人の過去を暴いたりしたという事は、きつとそういう事なのだろうな。と、巡は冷静に分析した。

かといって、今更神様を止めるわけにもいかないし、無理だ。

実際巡がやっている事は、救済は別として人助けは、正しい事だ。それは誰もが認めるし、巡本人だってそう思う。動機が例え不純でも行為は正しい。神様を目指すのだから……目標が高い事は別に悪くない。神無だつて応援してくれるし。

「どこなんですかー……」

それに、それに今更、神様をやめたらどうなる？神様をやめた自分に、一体どれほどの価値があるというのだろうか。

私は罪深い人間だ。私は弟の命より自分の体を取った醜い人間だ。弟を見殺しにした。弟を助けたのに助けなかった。それなのにそれを忘れて、それを忘れる為に、神様の手伝いを名乗り神様を名乗り、自分の利益の為に人に優しくする。

そんな人間わたしに生きる価値はあるか？

「どこにいるんですか……」

この時期はダメだ。

去年までの巡は、なぜ自分がこの時期になると、夏休みが近くなり八月が近くなりお盆が近くなるこの時期になると必死になるかわからなかった。

今の巡にはわかる。

わかるからこそ、今の巡は去年までより必死で、そして不安定だった。

自分を神様だとは信じられない。だけど信じないといけない。

自分は罪深くてひ弱な人間ではなく、清き正しく力強い神様であると信じなければ、巡は自分の過去つみに耐えられない。

「……どこですか……！！」

必死に走り回る巡。

必死に捜し回るのではなく必死に走り回る巡は、その呼び声がないければ、何かを捜しているというよりは、何かから逃げているように見えただろう。

さつきから同じ所をグルグルと名前の通り巡っている巡の脳裏には、さつき舞歌に言ってしまった言葉が渦巻いている。

『子供は何にもわかってないのに！自分のしてる事がどれ程危険か！自分のしてる事がどんな影響を与えるか！』

あの時ちゃんと、教えてくれればよかったのに。

『子供に何かあったら、大人の責任になるんです』

そうであって、欲しかった。そう思いたかった。

「……………」

舞歌に八つ当たりしてしまったという事から生まれる、何回目かの自己嫌悪で、巡の足が止まった。

今頃舞歌はどうしてるだろうか。私の言った事なんて気にせず、いつも通り本を読んでいるだろうか。それとも怒って帰っただろうか。嫌いになっただろうか。もう口も聞いてくれないかもしれない。明日どんな顔をして会えばいい。そもそも会いに行つていいのか。いや、何を考えている。私は神様。友達なんて必要ない。個人に執着するなんて許されない。あんな奴どうでもいいじゃないか。

巡の脳裏に浮かぶのは、妹のように慕っている少女の言葉。

『巡姉ちゃんは神様ところで、水無姉ちゃんはカツコイところー』

「……………」

「……………どこですかー！！！！」

巡はまた走り始めた。

ああ、早く出てきて。お願いだから見つかった。神様の私に見つからないモノはないんだから。

神様じゃない私を、あの子は望んでいないんだから。

～  
～  
～

「……こんな時に、誰ですか」

泣きそうな心を必死に騙しながら、走り回る巡のポケットで、まるでタイムリミットを告げるかのように、携帯が鳴った。

## 5・10・ほんにやくかなちゃん

はてさて。

くるくると、視点が変わるよ巡るよさ迷うよ、ここは図書館一階です。

巡が、走り回って鬱になったり躁になったりしていた頃。

「くるみさんいい加減にしてよー。もうちょっとは経ったよー」

「私的にはまだまだもうちょっとは経っていない可能性が高い気がしますせんか？」

「そんな気しないー！」

かなちゃんは一向に動かないくるみの足をポカポカ叩きます。しかしくるみはそんな事気にしません。失われた文明の失われた予言が指し示す人類滅亡についての情報を凄いスピードで学習しています。なるほど、来年人類は滅亡するのかー。

「早くしないと門限までに帰れないよ、怒られちゃうよー！」

ちよつと未来の滅亡より、自分はもちろんの事、あかねちゃんも怒られる事の方がかなちゃんは心配です。

「中学生の門限は19時までなので、まだまだ時間があるとは思いませんか？」

「私やあかねちゃんの門限は18時って、くるみさんだって知ってるでしょー！早くあかねちゃん見つけなと！」

「私がここで本を読んでいるうちにあなたが一人で図書館内を捜すという案はどうでしょうか？」

まだまだくるみは本を読んでいたらしいです。

「さっきの背の高いお姉ちゃんが、くるみさんの言った通りあかねちゃん捜してるなら、もう図書館にはいないってことでしょうか？だからもう図書館は捜さなくていいから、くるみさん早くー！！」

とても頭が良い子です。

「どうしてあなたは子供じゃないんですか？」

子供とは思えない程、頭が良い子です。そのせいでくるみは時間稼ぎに失敗しちまったぜ。

「子供だよ！私はくるみさんがどうして大人じゃないのかわからないよー！」

優先順位とか我慢とか、この人大人なら出来てる事、全然出来てないよー！！

「私が大人になるまでもうちちょっと待つ気はありませんか？」

具体的には月の裏側にある月面基地について学び終えるまで。

「ないよー！」

「もうちょっと、ダメですか？」

「ダー！メッ！！」

そんな事ばかり言うくるみ。温かなかなちゃんだって、プツンします。両手で大きなバツテンを作りました。

「もうねもうね！くるみさんのもうちょっとは聞きあきたんだよ！耳にタコだよ！いい加減にしてよ！くるみさんのもうちょっとっていつなのさー！？」

「今さ？」

間髪入れず、くるみはそう答えました。

「えっ、今なの？」

くるみの思わぬ速答に、きょとんとするかなちゃん。そんなかなちゃんを、どこかつまらなそうに見るくるみ。せつかく言った渾身のギャグが伝わらなくて、残念だ。というような想いが、その目から感じられます。

「もっとあなたは漫画を読むべきだと思いませんか？」

「よくわかんないけど……」冗談だったの？

「そんなの当たり前じゃありませんか？」

悪いとはカケラも思っていないご様子です。

「……くるみさん！……！」



もうやだこの人、少し前の私を私は恨むー！！

という想いを込めた悲痛な声がいけなかったのかもしれない。

「見つけたです……」

「え？」

かなちゃんは見つかつてしまいました。

かなちゃんが後ろを振り向くとそこには。

「巡お姉ちゃん！」

巡お姉ちゃんもとい、巡がいました。かなちゃんはビックリしました。巡に出会った事にもビックリですし、巡が自分を捜していた事にもビックリですが、何よりも。

「巡お姉ちゃん……大丈夫？」

巡の顔色が悪い事にビックリしました。顔色は青白いというより、土色。全力疾走した後みたいに息切れをしているのに、汗はなぜかかいていない。まるで、フルマラソンを水分補給無しで全力疾走しました。って感じです。つまり脱水症状気味。

ちなみにくるみは、巡に興味がないのか、はたまた巡より聖徳大使のお墓の方が気になるのか、かなちゃんが巡の相手をし始めたのをこれ幸いと、読書に熱中し始めました。

「大丈夫に……見えるですか？」

巡は息を整えながら、そうかなちゃんに尋ねました。いつもより声に元気もないし目が光ってないし、心も体も疲れているんだな。と、自分を見つめる巡を見てかなちゃんはそう思いました。

「うつん。見えない。水飲んだ方がいいんじゃない？」

夏は小まめに水分補給しないとダメなのです。

「ああ……確かに喉が渴いてるですけど、私の事は後回しでいいです。今はお前らをどうにかするです」

「……私たちを？」

巡の言い方が気になりはしたけど、私みたいな子供が言う事でもないだろうなと、かなちゃんは思い、特に何も言わなかった。

「です。あかねを捜して走り回ってる途中で、真奈美から電話をもらって、お前らまで来てる事を知ったです」

「……真奈美先生、怒ってた？」

恐る恐るかなちゃんは聞きます。勝手に外出したし、やっぱり怒ってるだろうなあ。

「無事帰ってくれば怒らないと言ってたですよ。全く、甘い奴です」  
腰に手を当て、嘆息する巡。なんかぎこちないな。と、かなちゃんは思っ首を傾げた。疲れてるからかな。

「しかし私はご立腹です。後でお前らも、月読と命とあかねと一緒に

に説教です。覚悟しろです」

「……………うん」

表面的には巡はいつも通りに振る舞っていた。いつもの自分をなぞっているようで、どこか芝居くさい。それはきっと、走り回って疲れているからだけではないだろう。

かなちゃんは、そんな巡は好きじゃないけど、自分にはどうしようもないので、おとなしく頷くだけにした。

「それで巡お姉ちゃん。あかねちゃんは？見つかった？」

一緒にいないという事は望み薄だが、一応聞いてみたかなちゃん。

「……………まだですが、真奈美の電話で来てるのがあかねとわかった今、か、神様してる私の手にかかれば、見つかるのは時間の問題です」

神様と言うのに、一瞬躊躇し、顔を歪めた巡。かなちゃんは、それに対しても何も言いません。

「だからお前はくるみと一緒に早く帰るです。らんとはなが心配してるですよ」

「ん。私もそうしたいんだけど……………」

かなちゃんは、呆れ顔で問題の人物を見ます。問題の人物は、金星人に夢中のご様子で、全くその視線に気付いておりません。

「くるみ……………読書の時間は終わりですよ。帰る時間です」

かなちゃんの言いたい事を察した巡が、くるみの説得に挑戦です。

「終わりを決めるのはあなたではなく私ではありませんか？」

徹底交戦の構えである。

「いいえです。終わりを決めるのは私です。さっさとかなを連れて帰るです」

「神様は終末論が大好き何ですか？」

「終わりを示す事が神様の仕事の一つです。というわけで、帰るです」

「それなら仕方ないと私が言うと思ってるんですか？」

「思ってるですってどうか、人とか神様とかと話す時は本を読むのやめてこっち見るです！！」

「神様を直視するのは危険だという噂は嘘ですか？」

全くやれやれ仕方がないなあ。というようにくるみは、本から顔を上げた。そして、腕を組んで苛立ってますアピールしている巡を、何でそんなに苛立ってるの？というように涼し気に見る。その目で巡の苛立ち度アップ。くるみの方が身長が高いので、見下ろされる形になっているのでさらに苛立ち度アップ。

そんな二人の間にいるかなちゃんは、巡さんやっぱり切羽詰まってるよ。くるみさん空気読んでよ。と、オロオロしてます。上から見たら、二等辺三角形みたいな配置の三人です。

「グダグダ言っていないでさっさと帰るですよくるみ！ここはお前が  
いていい場所じゃないです！」

「悪霊退散的な何かですか？」

「そんな感じでもいいです！さあ早くお前が本来いるべき場所、帰  
るべき場所に帰るです！」

「私が本来いるべき場所、帰るべき場所とは一体どこなんですか？」

「ええ！？」

このタイミングでくるみさんそれ聞くのー！？と、かなちゃんは戦  
いた。

「それは今この場で話す事じゃないでしょうがです！それはまた別  
の話にしておけます！とりあえず今はくるみわり園に帰っ&nbsp;とけです  
！」

巡も今はそんな話す気はないようです。つまりいつかはしてやる  
気というわけなんですけど。

「私の門限までにはまだ時間があるから平気だと思いませんか？」

くるみ自身も、今そんな事を話す気はなかったらしい。冗談って奴  
だ。

「お前が平気でもかなが平気じゃないです。お前、かなに一人で帰  
れと言いたいんですか？」

もし本気でそう思ってるなら許さねえ。というオーラが巡から漂い始めました。

「め、巡お姉ちゃん？まだ明るいし、私、一人で」「お前はちょっと黙ってるです」「うう……」  
かなちゃん、フォロー失敗。

「そんな事を私が思うと、あなたは本気で思ってるんですか？」  
表情が変わらないのでよくわからないが、くるみは、そんな風に思われたら心外だ。と黙っているようだ。

「じゃあお前はどどういう意味で言ったですか？」

「私と一緒にではなくて、月読と命と一緒に帰ればいいんじゃないですかという意味で言ったとは考えませんか？」

なんか挑戦的な言い回しです。

「つまり結局は子供だけで帰ればいいと思ってるという事じゃないですか！！」

巡は怒った。くるみの薄情さに怒りを感じたのだ。同じ園に住む、自分よりも子供達のお姉ちゃんでなければならぬのに、子供達を見守る大人でなければならぬのに、ふざけるな。一発ぶん殴る。と、巡は思い、くるみとの距離を詰めようとした。  
が、

「巡お姉ちゃん違っつてばそうじゃないよ落ち着いてよ！」

かなちゃんが、くるみと巡の間に入り、事なきを得た。上から見た

ら一直線な配置。

「くるみお姉ちゃんはあれだよ？月読ちゃんと命ちゃんと一緒にいる、神無お姉ちゃんと一緒に帰ればいいんじゃない？って言ったんだよ？そうでしょ？だから怒らないで？ね？」

かなちゃんは、くるみと巡の双方の顔を交互に見て、出来る限りの精一杯の笑顔で、二人の仲を取り持とうとしました。頑張れかなちゃん。

「……………何でくるみが、月読と命が神社神無達と一緒にいる事を知ってるですか」

そんな情報私は言っていないぞ。

「それは巡お姉ちゃんが、命ちゃんと月読ちゃんを捜していないからだよ？だからきつと神無お姉ちゃん達と一緒にいるんだろうなあって思ったんだよ？月読ちゃん達、神無お姉ちゃんの話とかよくするし、それでくるみお姉ちゃん、神無お姉ちゃんの事知ってたんだよね？ね？そうだよ？だからね？」

かなちゃんは、巡とくるみの両方の機嫌を窺う。なんとというか、不憫な子だ。

「……………くるみ、そうなんですか？」

巡はくるみに最終確認。

「だから、それ以外にどういう意味があるんですか？」

くるみは巡に呆れ気味。

「……………もっとわかりやすく喋るです!！」

巡、心からの叫び。

「かなにはわかってる気がするのは間違いですか?」

くるみ、わからないお前が悪い発言。

「くるみお姉ちゃん……………私は通訳じゃないよー」

かなちゃん、疲れ気味。

「いつかお前の性根も叩き直してやるから覚悟してやがれですよ!  
!二度と疑問文を使えなくしてやるです!！」

巡、宣戦布告。

「この人は私に死ねと言ってるんですか?」

くるみ、かなちゃんに質問。

「くるみお姉ちゃんのこれからが心配だから今度相談にのってあげるって意味だよ……………」

かなちゃん、なんで私、通訳してるんだろっと思っ。

「あなたは本当に子供ですか?」



「かな、お前はちょっと賢すぎるです」

くるみと巡、もっとお前は子供らしくしろとかなちゃんに要求。

「……………子供だもーん」

かなちゃんには、あなた達がもっと大人になって欲しいとは言えませんが。

「不本意ですがくるみの案にのってやるです。時間がもつたいたいですからです」

「感謝するべきですか？」

くるみはそう問いてから、また読書に戻った。巡がかなちゃんに目でどういいう意味か聞き、かなちゃんは「ありがとうって事だよー」と、いつもの巡さんならこのくらいはわかると思っただけ。と思いつつ答えた。

「じゃあ、かな。一緒に来るです。月読達の所に行くですよ。で、五人で一緒に帰るです」

巡的には、神無と水無が連れて帰ってくれる事は決定事項のようだ。

「くるみも、19時には帰るですよ。わかったですか？19時までには帰って来なければ、夕食はないと思えます」

「夕食抜きは私としても避けたいとは思いませんか？」

「それだけはやだから絶対19時までには帰りますって」

聞かれる前に翻訳したかなちゃん。ご苦労様です。

「じゃ、行くです」

「はい。くるみお姉ちゃん、また後でねー」

「また後で会える気がしないでもありませんか？」

かなちゃんはくるみに手を振り、しばしの別れ。

巡と手を繋ぎ図書館を出る。夏の太陽はまだまだ頑張って世界を照らしている。

「あかねちゃんがいそうな場所、わかってるの？」

「……これから頑張るから安心するです」

「……」

つまり何もわかってないのかぁ。と思ったけど、かなちゃんは何も言いません。今の巡に、休んだらとか。私も一緒に捜そうとか。

誰かに手伝ってもらったらとか。そういう事を言ったところで、聞く耳を持たないから。  
と、

「あれ……?」

かなちゃんは遠くに何かを見つけ立ち止まった。

「どうしたですか？」

神無と水無がいる建物の方しか見てなかった巡は、急に立ち止まったかなを訝しげに見ます。

「巡お姉ちゃん、あれ、あかねちゃんじゃない？」

かなちゃんはそう言って、遠くに見える二人の姿を、指差した。遠くと言ってもそんなに遠くはない。かなちゃんが一番最初に入った大学で一番高い建物だ。その入口に、今の自分のように手を引かれてる子供の姿があった。

「マジですか!？」

かなちゃんが指差した方向をバツと見る巡。神様パワーでズームして、姿を確認。そして驚愕。

「三途舞歌!？」

あかねちゃんの手を引き、こちらに、というより図書館方面に歩いて来ているのは、喧嘩別れした巡の友達（仮）だった。

閑話休題・エキストラの皆様は見た

「子供だ」

「ホントだ」「子供だ」

「何で子供？」「誰の子供？」「私の子供？」

「事務員の人の子供じゃね？」「清掃の人かも」「いや、ここは生徒の方が楽しい」「そうか？」

「子供なんか連れてくんなよ」「まあまあそういうなよ」「カワイイなあ。あつ、こつち見た」「見てんじゃねえよ」「まあまあ」

「さつきもガキいたよな。あつちは双子っほかったけど」「マジ？あの噂の？」「噂って何だよ？」「はあ？お前知らねえのかよ。遅れてんなあ」「うるせえよ。さつさと教える」「どうしようかなあ。出す物出せばぐほえ！？」

「子供か」「だな」「俺、好きじゃねえんだよなあ」「わかるわかる。うるせえし。我が儘だし」「道塞いでるガキとか見ると、引き殺したくなるよな」「もしもし、警察ですか？犯罪者予備軍がいるんですけどぐべお！？」「マジでしてんじゃねえよ！！」

「ねえ、ねえつてば」「何だよ」「何だよとは何よ。子供カワイイわね。つて私、さつきから言ってるじゃない」「ああ。そうだな。カワイイな」「カワイイなって、他に言う事ないわけ？」「他に言う事？……何だよ」「あんなガキよりお前の方がカワイイよつて言つてよ！！」「……女心はわからねえ」

「子供かあ」「だな。五才くらいか？」「リアルじゃなきやなあ」「はい、お前の発言アウト」「いや、だつてよ。あの子の目つき見たか？すつげえ生意気そうだった」「まあ確かにな」「リアルで生意気はただム力つただけだが、二次元なら萌えだぜ？」「お前の将来が心配だぜ」「ああ、二次元行きてえなあ」

「あの子カワイイわねダーリン」「そうだねハニー」「いつか私達もあんな子供が欲しいわねダーリン」「そうだねハニー」「野球

チーム作りましようねダーリン」「そうだねハニー」「大好きよダーリン」「そうだねハニー」「あら……大好きって言ったら大好きって返すように調教し直さないとねダーリン」「そうだねハニー」「双子とは別の子みたいね」「ああ、双子は水城と……あ、忘れた」「神社さんでしょ？」「そうそれ。と、一緒にいたよ」「どういう関係何だろうね？」「さあ？別にどうでもよくね？」「まあね」「つーか、子供連れて来ていいのかよって話でしょ」「別に迷惑じゃないからいいんじゃない？」「いやいや、大学にガキがいる時点で迷惑。勉強しづらい」「あなたが勉強してるとこ、見たことないけどね」

「子供かあ……双子の噂。聞いた事ある？」「大学にたまに現れる双子の座敷童の話でしょ？」「そうそう、会えると幸せになるとか」「飴を上げると幸せになるとか」「話しかけると幸せになるとか」「単体で見るとさらに幸せアップ！」「飴をあげた人が、恋人をゲットしたという報告もあります隊長！」「林檎味の飴が好きという噂もありますよ少佐！」「飴よりチョコが好きという噂もありますね」「家に連れて帰ると、一生幸せになるという噂も聞いた事が……」「実践しようとした人が、神様に個人情報をばらまかれたという噂も……」

「あつ、子供がいるよー」「そうね」「ほっぺ柔らかそうだねー」「そうね」「髪もさらさらみたいだねー」「そうね」「肌も柔肌みたいだよー」「そうね」「日焼けしてるとこが健康そうだよねー」「そうね」「目も小さくてカワイイねー。欲しいねー。棚に飾りたいねー」「ホルマリン漬けね」「あつ、こっち見たよ。手招きー」「飴もあるって伝えなさい」

「子供」「子供だ」「子供ね」「子供よ」「子供さ」「子供か」「子供かよ」「子供ねー」「子供に違いない」「子供しかない」「子供以外の何者でもない」「子供としか見れない」「子供以外にどうしろと」「子供子供子供」「子供は所詮子供」「子供は早くお帰

りなさい」「お母さんは？」「お父さんは？」「誰の子供？」

「子供だね」

わたしは、子供じゃ、ない……。

閑話休題 ・ エキストラの皆様は見た（後書き）

一部にエキストラっぽくない方々がいた事を謝罪しません。

## 6 - 1 . 何かから逃げる人の向かう先

「……」

こんなはずじゃなかった。と、あかねは思った。

こんなはずじゃなかった。ここに来れば大人に近づける、いや、大人と認められると思ってたのに。

『子供だ』

「~~~~っ!!」

耳を塞いでも聞こえてくる。周りに誰もいなくても聞こえてくる。

耳にこびりついて離れない。今日一日、何度も聞いたその言葉。何度も言われたその言葉。

こんなはずじゃなかった。

月読と命について行こうと思った。あの二人はわたし達に、わたし出来ない事が出来ていた。二人だけで外出する。わたしには出来ないこと。外は車がたくさんだし、知らない人もたくさん。わたしに、そんな勇氣はなかった。

でも、二人にはそれが出来て。それでみんなにすごいって言われて。なんだか自分よりすごいみたいで。あんな、神様を信じてて、いつも二人で、一人で寝れない子供のに。わたしは神様だって信じてないし、一人で大丈夫だし、一人で寝れるの大人なのに。なのに、わたしより、みんなに褒められて、大人みたい。

だからわたしは、月読と命の後についていこうと思って。みんなを見返えそうと思って。それで大人に近づいて、大人って認められる。



そうなるはずだったのに。  
こんなはずじゃなかったのに。

くるみわり園から出るのは簡単だった。月読と命が、出かけて来るって言ったから、その後をついていけばいいだけだった。今日はさえが風邪引いたから、先生達も忙しそうだったから見つからなかった。ブランコをしていたアイに見られたけど、あの子はよくわからないからたぶん平気。

月読と命の後ろを、ばれないようについていった。二人は後ろを見なかったから、全然見つからずについていけた。車がたくさん通る道。知らない人がたくさん歩いてる道。大人がたくさんいる道。二人は楽しそうに歩いてた。二人は手をつないで、楽しそうに歩いてた。わたしは一人、怖かった。

大学に着いて。わたしが大きな建物にビックリして、ホントに入っているのか迷ってたら、二人はどんどん行っちゃった。わたしも慌てて後をついて行こうとしたら、知らない人にぶつかった。わたしは怖くて。その人がわたしを見る目が、子供を見る目で。わたしは、走って逃げた。

月読と命を完全に見失った。心細かったけど、わたしはわたしを励まして、歩いた。大丈夫。わたしは大人。あの二人に出来て、わたしに出来ないはずはない。わたしは、平気。

平気なはずなのに。  
こんなはずじゃないのに。

知らない人が、大人の人がいっぱいいた。

みんな、わたしを見た。

みんな、わたしを見て喋ってた。

みんな、わたしを見て子供だと喋ってた。

こんなはずじゃなかったのに。

みんな、わたしを子供だって言っていた。みんな、子供としてわたしに接してきた。怖かった。違うって言いたかった。わたしは子供じゃないって。わたしは大人だって。だけどわたしは何も言えなくて、ただ逃げる事しか出来なくて。

こんなはずじゃなかったのに。

怖かった。知らない人ばかりで。みんな好き勝手言ってる。飽きあげるって。こっちおいでって。みんな笑ってたけど。みんなわたしを子供として見て笑ってたけど。優しそうだったけど。本当に怖かった。本当に怖かった。わたしは逃げるしか出来なかった。

逃げてる途中。月読と命達を見つけた。楽しそうにしてた。わたしは、こんなに不安で怖くて帰りたいのに。あの二人は、本当に楽しそうで。わたしより、ちゃんとしてるみたいで。この場所に馴染んでるように見えて。わたしより、大人みたいで。わたしが子供みたくい。わたしはそれを認めなくて、声をかけたい気持ちを押し殺して、そこから逃げた。

こんなはずじゃなかったのに。

「こんな、はずじゃ、なかったのに……」

もう帰りたい。来なきゃよかった。帰りたい。ここにいたくない。間違ってた。月読と命がどうして来てるのかわからない。どうしてあんなに楽しそうなのかわからない。

どうして二人は楽しそうでわたしは楽しくないの？

どうしてわたしは怖いのか二人は怖くないの？

それは二人が二人だから？  
それは二人が大人だから？  
それはわたしが一人だから？  
それはわたしが子供だから？

「もう、お家に帰りたいよ……お母さん、お父さん……」

あかねちゃんは、泣きながらそう呟きました。

その呟きが聞こえたからというわけではないでしょうけど。

「見つけましたよ、全く……かくれんぼ気分か？」

「え？」

あかねちゃんは、ようやく、見つけてもらえました。

「……はあ」

五階。螺旋階段を五階分上った段階で、舞歌は後悔していた。エレベーター使えばよかったと。

しかし、ここまで必死に階段を上ったのに、ここからエレベーターを使うという事はない。意地ってやつだ。残り四階。舞歌は

頑張る。

なぜ舞歌が大学で一番高い建物の、最上階を目指しているかという  
と、あかねちゃんを捜しているのだ。

なぜ舞歌があかねちゃんを捜しているのかはここでは置いておく事  
にして、どういう経路を辿り、舞歌が一番高い所を目指したかを、  
説明する事にしよう。

図書館で変な二人組と会った後。

舞歌はふらふらと大学構内を探索していた。まるで、私、別に人捜  
してませんよー。ただ散歩してるだけですよー。というように歩  
いていた。キョロキョロはたまにするが、茂みとかは捜さない感じ  
で、やる気があるのかないのかよくわからない感じだ。

何で私がこんな事をしなきゃいけないんだ。

内心、そんな事を思いながら嫌々、という感じで舞歌は大学構内を  
歩き回っていた。誰かに頼まれたわけでもないのだから、嫌ならや  
めればいいだろ。というのは言わない約束だし、舞歌にそういうツ  
ッコミをいれてくれる人は今は誰もいない。

途中。舞歌の横を巡が死に物狂いで走っていった。巡は舞歌に気付  
かなかつた。舞歌は、あいつ捜す気あんのかよ。と、周りを一切見  
てない巡に対してそう思った。そして、私にはあるのかよ。と、思  
い、舞歌はため息をついた。

構内を歩いていると、様々な情報を得た。というか、盗み聞いた。  
子供がいたー。生意気そうだったー。手招きしたら逃げられたー。  
飴で釣ったら逃げられたー。逃げてたー。走ってたー。ビビってた  
ー。泣いてたー。などなど、色々な情報を得た。

舞歌は、怖がって逃げてて泣いてるなら、もう大学にいないんじゃない

ね？と、思った。しかし、一人で帰れるなら、巡はあんなに必死にならないだろうし、わざわざ迎えに（捜しに）二人も来ないだろうとも考える。

じゃあ、今その子はどこにいるのだろう。

舞歌はあかねがどんな人間かも、そもそも何しに来たかも知らないので、怖がっていて、泣いていて、何かから逃げたい人が行きそうな所に行く事にした。いや、この場合は、自分がそういう時、行きそうな所に行く事にしたという方が正しいかもしれない。

空に一番近いところ。

人から一番遠いところ。

つまり、高い所に私なら行くだろう。

「……………しんどい」

というわけで今に至る。

舞歌は辿り着いた。九階に。階段で。下りる時は絶対エレベーターを使うと心に決め、ここにいなかったら私はもう帰ると決意した。この大学で最も高い場所。中央棟の九階。理事長室やなんかよくわからない部屋がある。とりあえず、講義では使わない場所だ。舞歌も初めてここに来た。

「はあ……………」

とりあえず、息を整えてから（螺旋階段がくせ者だった。ちょっと酔った）舞歌は廊下を進む。

すると、ゴミ箱と自販機。そしてベンチが置いてある、休憩スペースがありました。こんな所、誰が使うんだよ。と、舞歌は思ったが、私みたいに階段で上がってきた奴のご褒美か？と、窓から見える風景を見て、この場所の存在価値を理解した。絶景になって奴だ。

「……………」

とはいえ。今の舞歌は、その窓から見えるパノラマの風景よりも、自販機とゴミ箱の間のデッドスペースにすっぽり挟まっている女の子の方が気になった。自分を守るように体育座り。小刻みに体が奮えてる所を見ると、泣いているのかもしれない。

ようやく見つけた。

舞歌は、ホッとした。それと同時に呆れた。ホッとした自分にも、わざわざ見つかりづらい場所にいる相手にも。

「見つけましたよ。全く……………かくれんぼ気分か？」

こっちがどれだけ必死に頑張ったと思っただこいつは。

## 6 - 1 ・何かから逃げる人の向かう先（後書き）

時間がなあ。飛んじゃってなあ。コロコロとなあ。グルグルとなあ。  
頑張りたいなあ。

後三話くらいで、あかねちゃんを捜せ編は終わる気がしました。

## 6 - 2 ・子供の事情と大人の事情？

「だ、だれ？」

あかねちゃんは戸惑った。それも仕方がない事。いきなり見知らぬ人に見つけたと言われたら戸惑いますよ。

「私が誰か何てどうでもいいじゃないですか。ほら、行きますよ」

舞歌は自分の身分を明かすのを早々に放棄し、あかねちゃんに手を差し出した。

あかねちゃんは思った。

この人、わたしを誘拐する気だと。

「い、いやっ！」

あかねちゃんは舞歌の手を弾いた。涙を拭き、舞歌を精一杯睨む。本当なら一刻も早く、立ち上がって逃げたかったが、残念。あかねちゃんがいるのはゴミ箱と自販機の間。その前には舞歌。逃げ道がない。あかねちゃん、ピーンチ。

「わたし、どこにも行かない！！」

内心恐怖でいっぱいだけど、精一杯強がるあかねちゃん。

「はあ？」



それに対して呆れる舞歌。なに言ってるのこいつ？

「なに言ってるんですかあなた？ほら、早く帰りますよ。迷子なんでしょ？」

もう一度手を差し出す舞歌。

その手にビクツとするあかねちゃん。

「ま、迷子なんかじゃないもん！わたし、迷ってなんかいないもん！  
！そんな子供じゃないもん！！」

そしてもう一度手を弾く。

舞歌の苛立ち度が一ポイント上がった。

「じゃあなんでこんなところに？」

腕を組んで、ほら、早く私が納得出来る理由言ってみやがれのポーズ。

「そ、それは……わ、わたし狭いところ好きだから！だから、だからここにいますもん！！」

「はあ？狭いところが好き？」

舞歌は狭いとこの魅力がわからない人間のようです。人生の半分を損してるぜ。

「そうだもん！わたしは好きでここにいますもん！わたしはずっとここにいますもん！だからあっち行け！」

「……あっち行け？」

あかねちゃんのその言葉で、舞歌の苛立ち度二ポイントアップ。

あかねちゃんは、舞歌の目つきが怖くなったのを感じ取り、「ヒッ  
……」さらに縮こまった。

「私は。あなたを。捜して。ここまで。必死に。来た。その。私に。  
あっち。行け？」

舞歌は一つ一つ言葉を区切り、あかねちゃんにもわかるように言いました。苛立つてますよ！。と、わかるように。そしてもう一度、手を差し出す。

「……」

あかねちゃんは、震えています。怖くて。なにこの人。よくわかんない。悪い人？悪い人なの？捜してた？どうしてわたしが迷子って知ってるの？帰るって？どこに？くるみわり園に？この人知ってるの？一緒に帰ってくれるの？月読と命とこ連れてってくれるの？どうして？信じていいの？でも怖い。この人怖い。目が怖い。知らない人信じちゃダメ。大丈夫。わたしは一人で平気。今はちょっと休んでるだけ。そう。そうだ。わたしは大丈夫。必死に捜してた？そんなの知らない。わたしは、頼んでない！

「あっち行け！わたしは捜してなんて頼んでない！わたしは一人でも平気なの！！」

あかねちゃんは三度、舞歌の手を弾いた。舞歌を、拒絶した。舞歌の苛立ち度三ポイントアップ。

「……………ああ、そうですか。じゃあ、私は帰りますね」

舞歌のその言葉に、あかねちゃんは「え」と、動揺した。行かないで。

「とでも言うと思ったか！ほら、行きますよ！！」

「いたっ！！」

舞歌は無理矢理あかねちゃんを立たせた。腕を痛いぐらいの力で掴む。そしてそのままエレベーターに向かおうとする。しかし。

「いやっ！！わたしここにいるの！！！」

あかねちゃんは、腰を落として徹底抗戦。綱引きだぜ。

「我が儘言ってる場合ですか！？迷子でしょ！？寂しくて泣いてたんでしょ！？いいから一緒に来い！！！」

「わたしはわがままなんて言ってない！！寂しくて泣いてなんかない！！わたしはあんたについてかない！！！」

「泣いてるじゃないですか今も！」

「こ、これは心の汗だもん！！！」

「はあ！？意味がわからない事を……………！！いいから来い！」

「いーやーなーのっ！！！」

「ちっ！」

あかねちゃんは手をバタバタさせた。舞歌は仕方なく、一度手を離れた。あかねちゃんは尻餅をついた。

舞歌は、一度深呼吸して、落ち着く事にした。落ち着け私。むきになるな。落ち着かなければ、本当に誘拐みたいになるぞ。舞歌の苛立ち度が二ポイント下がった。

「いいですか？私は」

舞歌が落ち着いて、まずは自己紹介をしようとした。しかし。

「行かないもん知らないもん大丈夫だもん！」

あかねちゃんは聞く耳無し。舞歌とは違い、熱くなるとすぐには戻れない。子供と大人の違いかもしれない。

「わたしは一人で大丈夫なの！子供じゃないもん平気だもん！大人だもんみんなと違うもん！大人だから一人で平気だもん！迷子じゃないもん大人だもん！」

じたばたと、喚くあかねちゃん。舞歌に訴えてるのか、自分に言い聞かせてるのか。

「……落ち着け」

とりあえず、殴ってでも静かにさせたい。と思っている舞歌は、自分に言い聞かせてます。苛立ち度一ポイントアップ。

「だからあつち行け！知らないもん！ほつといてよ！わたしは大丈夫なだから！あつち行け！知らないもん！わたしは頼んでなんかない！捜してなんか頼んでない！だからあつち行け！！わたしは一人で大丈夫な大人なんだもん！勝手に捜されて迷惑だもん！！頼んでないもん！！勝手な事しな」「うるさい！！！」

あかねちゃんの好き勝手な言い分を聞いて、舞歌の苛立ち度がマツクスになった。つまり、プツンした。あかねちゃんは、雷のような怒鳴り声に息を呑んだ。すうーと血の気が引く。わたし、やつちやつた？

「うるさいんですよ喧しいんですよ我が儘なんですよ！！これだから子供って奴は嫌なんですよ！！！」

舞歌は左手首を握りしめ、苦虫を噛んだような表情を浮かべる。必死に暴力を振るうのを我慢しているようだ。しかし、今、一言でもあかねちゃんが何か言ったら、舞歌は間違いなく、あかねちゃんひっぱたくだろう。あかねちゃんも本能でそれを察してか。それともただ単純に怖くて何も言えないのか。大人だもんとは言わず、蛇に睨まれた蛙状態で固まっている。

「狭いところが好き！？知りませんよ！！一人で大丈夫！？知りませんよ！！子供じゃない！？知りませんよ！！迷子じゃない！？知りませんよ！！あつち行け！？誰が行くか！！大人だもん！？馬鹿じやねえの！？頼んでない！？知らねえよ！！興味ねえよお前の事なんて！！お前の言ってる事に私は一切微塵も興味がない！！お前はただ黙って私に連れてかれればそれでいい！！わかつたか！！！」

わかるわけがない。

「ど、どうして……?」

引き攣った声で、なんとかそれだけは言えたあかねちゃん。頑張った。ホントに頑張った。このままじゃわたし、どこか知らないところに連れてかれちゃうという危機感が、あかねちゃんを頑張らしたのだ。

「どうして……?」

舞歌は急に声を抑えた。迫力は倍増である。

「私が聞きたいですよ!!」

さらに倍である。

「ヒッ!」

あかねちゃんは、死を覚悟した。

「私が聞きたい!!あぁもう本当にー!!」

舞歌はリストバンドの上から手首を掻きむしり始めた。あかねちゃんは、あ、あれ?なんか様子おかしくない?怖いけど怖いけど、なんか様子変じゃない?と思った。

「私の責任!?どうして!?意味がわからない全然全く微塵もわからない!!あの神様野郎め好き勝手言いやがってー!!」

「か、神様……?」

神様って、巡のことかな。

「どうして私の責任になる！？どうやってたら私の責任になる！？理屈が全くわからない！私はずつかつただけでその時点ではそいつが迷子だという事を知らなかったのに私が悪い！？そんなはずがないでしょ！？」

「……………あつ」

あかねちゃんは、ようやく、舞歌があの時ぶつかった人だと気付いた。

「それなのにあの野郎は私が何にもわかってないって！？わかってないのはお前の方だろうが！それなのに私の責任！？責任！？何が！？どうして！？わかりますか！？」

「え！？」

わたしに聞かれましても……………。という感じのあかねちゃん。

「わかりませんよねあなたには！！だって私にもわからないんですから！！」

「……………」

じゃあ聞くなよ。と、言えるわけもなく。あかねちゃんは黙って、舞歌の叫びを聞くしかなかった。

「何なんだよ何なんだよ何なんだよもう！！何で私があんなに怒られなきゃいけない！？何で私があんな目で見られなきゃいけない！

？子供に何かあつたら私の責任！？責任！？どうして！？頼まれてないし私は知らなかったのに私の責任になるの！？クラスにいじめがあつた事すら知らなかった人間もいじめっ子と同罪！？そんなふざけた理屈がまかり通るわけがないでしょ！？何であいつはそれがわからない！？何であいつは自分を基本に考える！？責任つてなに！？私はどうなる！？私をどうする！？あなたがどうする！？あなたは何する！？あなたも私から

唐突に、舞歌が止まった。何かに気付いたのか。それともパニックになり過ぎてフリーズしたのか。リストバンドを掻きむしるのもやめ。叫ぶのもやめ。天井を見上げて、止まった。

「な、なに……？」

あかねちゃんはもう何が何だかわからない。戸惑うしかない。舞歌の叫びの後半は、というよりほとんどは、あかねちゃんに対して向けられてはいなかった。それは、なんとなくあかねちゃんも理解した。だけど、誰に何を言いたいのかは全くわからなかった。結局この人は何なんだろう。わたしを捜しに来たの？責任？捜す責任があつたの？責任を負いたくなかったから、わたしを捜してたの？何で？この人がわたしを捜す責任なんてあるわけがないのに。この人もそれがわかつてるはずなのに。

あかねちゃんにはわからない。それは別に子供だからとか大人だからとかは関係ない。というか、舞歌の支離滅裂な叫びを聞いて、舞歌がどうしてあかねちゃんを捜していたのか、わかる人はほとんどいないだろう。いたとしたら、神無と水無とかなちゃんくらいか。あれ？結構いるな。

神無がこの場にいたら、ああ、三途さん。責任を取りたくなくて頑張ったんだな。と、考えるだろう。

水無がこの場にいたら、ああ、こいつ。罪悪感に苛なごまれてやがる。



と、思っただろう。

かなちゃんがこの場にいたら、この人、巡さんと一緒にいたくて捜してたのかな？と、察しただろう。

三者三様のお答え。さあどれが正解なのかというと、みんな正解。やったね。

子供と違って大人は複数の理由で行動出来るのだ。

「よかった」

「え？」

あかねちゃんが、ちんぷんかんぷんしてた時。舞歌が天井を見上げながら、何かを呟いた。よく聞き取れなかったけど、なんか物騒な事を呟いた気がする。

「……」

舞歌は天井から、戸惑っているあかねちゃんに視線を戻す。その表情は、あかねちゃんを見つけた時同様、呆れたような。疲れているような。何もかもどうでもいいと思っっているような表情を浮かべていた。さっきまで叫んでいたのが嘘のような、なかった事にしたようなその表情を見て、あかねちゃんの混乱はほぼピークに達した。

「なんかもうどうでもいいです」

舞歌はそう言って、あかねちゃんに手を差し出した。四回目だ。なんとなく、次はないような気がする。この手を弾かれたら、舞歌はそのままここを去るだろう。

なんかもう、どうでもよくなったようだ。何もかも。あかねちゃん

の事とか巡の事とか子供とか大人とか責任とか生きる事とか。なんかもうどうでもよくなったらしい。テンションが極限まで上がった後は、テンションがどん底にまで下がる法則である。

「え、あ、」

あかねちゃんはその落差についていけない。どうすればいいかわからない。助けを求めるように、周りを見る。しかし誰もいない。当たり前だ。それをあかねちゃんは望んだのだから。

逃げようか。と、あかねちゃんは思う。今なら逃げれる気がする。きつと追っては来ないだろう。差し出された手を無視して、立ち上がって、逃げる。そうしようか。この人、なんだか危なそうだし。でも……。

逃げた後、どうしよう。と、あかねちゃんは考える。この人から逃げて。それからどうしよう。もうここにはいたくない。帰りたい。だから帰る。一人で？一人で帰る。大丈夫。わたしは帰れる。大人だもん。帰れないわけがない。でも、でも、道、わかるかな。行く時は、月読と命の後をについていただけ。わたしに帰り道はわかるかな。わかる。大人だもん。だけど……ホントはわからないかもしれない。わたしは迷子になるかもしれない。わたしは帰りたい。だけどわたしは、帰れない？

「ふえ……」

帰れない。と、あかねちゃんは泣いた。わたしもう、帰れないの？そんなのやだよ。

「……」

舞歌は、手を差し出したまま何も言わない。泣き始めたあかねちゃ

んを冷たい目で見下ろすだけ。決めるのはお前だと。そう言ってるようだ。

「かえり、たいよお……」

あかねちゃんはそう呟いた。口に出してしまった。自分の本音は口に出すと、途端に、心細くなる。月読と命に会いたい。巡お姉ちゃんにも会いたい。神無お姉ちゃんにも会いたい。知ってる人に会いたい。帰りたい。くるみわり園に帰りたい。知らない人ばかりの大人ばかりのここから早く帰りたい。みんながいるところに、早く帰りたい。

「つくよみと、みことに、会いたいよお……」

「月読………双子の事か？」

舞歌が口を開いた。

「知ってる、の？」

あかねちゃんは涙を拭う。

「わたし、二人に、会いたいよお……」

あかねちゃんは、舞歌を見つめながらそう言った。舞歌が連れてってやると言うのを待つように。ここまで来ても、自分から連れてってと。助けてと言わないのはなんというか、意地っ張りというか、馬鹿というか。

「双子の場所は知らないから無理ですけど……」

舞歌はどうでもよさげに答える。どうでもいいのだろう。あかねちゃんをどこかに連れてつてもいいし。別にあかねちゃんをここに置いてく事になつてもいいし。今の舞歌はニュートラル。

「あなたを迎えに来た人達の所になら、連れてつてあげますよ」

今の舞歌は道を示すだけ。無理矢理連れてく事はしない。決めるのはそっち。その結果はそっちの責任。私に責任は、ない。

「迎えに、来た？」

それは思ってもない事だった。わたしは誰にも見つからないように出て来たはずなのに。アイ？それはないと思う。そもそも、みんな、わたしの事嫌つてると思うし。わざわざ迎えに来るわけがない。

「うそ、だもん……」

この人は、やっぱり嘘つき？誘拐犯？

「別に、嘘だと思うならそれでいいですよ。どうぞ、ご自由に？」

「……」

ご自由に。わたしの自由。わたしが決める。わたしが決めれる。わたしは帰りたい。わたしは一人じゃ帰れない。ここには月読と命がいる。そこには一人で行ける？わかんない。どこにいるかもわからない。それに、もしかしたらもう帰っちゃったかもしれない。もしそうならわたしは帰れない？どうしよう。わたしはどうすればいいんだろう。迎え？本当に？そもそもこの人だれ？わかんないよ。

わたしにはわかんないよ。もうわたしにはわかんないよ。

「わかんない……」

「……」

「もう、わかんないよ……わたし、どうすればいいか、わかんないよ!!」

今度はあかねちゃんが叫ぶ番のようだ。舞歌とは違い、叫ぶだけでなく、泣き叫ぶだが。

「わからないもんわかんないもんわたしには全然わかんないもん!どうすればいいかなんてわたしにはわからないもん決めれないもん!命令すればいいでしょ!?大人何だから命令すればいいじゃない!!偉そうに命令してよ!!強制してよ!!わたしに決めさせないでよ!!」

「知りませんよ」

あかねちゃんの涙の訴えを、舞歌は一言で切り捨てた。

「言ったでしょ?私は、あなたに、微塵も、興味がない。どうでもいいんですよ。あなたなんて」

「……」

今度はあかねちゃんが止まる番だった。舞歌とは違い、口をパクパクさせて、止まったというより、固まったという方が正しいかもしれないが。

もう、本当にわからない。なんなのこの人は。知らない？興味がない？どうでもいい？それならどうしていなくならないの？どうしてわたしに、手を差し出してるの？言ってる事と、やってる事が、矛盾してるよ。

まあ、それはあかねちゃんも似たようなものなのだが。大人といながら、最終的に子供扱いを望んだところとか。

「……」

あかねちゃんは涙を拭き、舞歌の手を取った。

理由は？よくわからないままに？信じたから？自らそう決めたから？いや、違う。もうあかねちゃんには、この手を取る以外の選択肢がなかったから。いや、あったのかもしれない。しかし今のあかねちゃんには、舞歌の手を取る事しか出来なかった。もうこの手を掴むしかない。これを逃したら二度自分は帰れないかもしれない。誰にも見つけてもらえず一人だと。そう、思った。

「……」

舞歌は無言のまま、あかねちゃんを立ち上がらせた。そしてそのまま、エレベーターに向かう。

「……どっ、行くの」

エレベーターを待つ間に、あかねちゃんはそう聞いた。本来なら、手を取る前に聞くべき事なのだが。あかねちゃんも舞歌同様、どんだ底にテンションが下がってるのかもしれない。このままどこか知らないところに連れてかれてもいいや。そんな風にすら思っていたのかもしれない。

なんやかんやで、似た者同士だ。この二人は。意地っ張りな所が特

に。

「図書館ですよ」

舞歌は素っ気なく答えた。

そしてエレベーターが到着。

あかねちゃんは初めてのエレベーターだ。せまっ。と思った。天井たかっ。とも思った。

「……………」

舞歌が一階を押して、エレベーターのドアが閉まる。そして動き出す。

ふわっ。とした。

「わっ……………」

あかねちゃんはビックリして、繋ぎっぱなしの舞歌の手をぎゅっと握った。

「……………」

舞歌はあかねちゃんを一瞥した。が、すぐに表示板に目を戻す。

エレベーター内で二人は無言。

手を繋いだまま無言。舞歌は別に手を繋ぎたいとは思ってない。つまり手を繋ぎたいと思って、握ってるのはあかねちゃん。

あかねちゃんがエレベーター内をキョロキョロと。物珍しそうに見

る余裕が出来ているのは、きっと舞歌と手を繋いでいるから、誰かが側にいるからに違いない。



## 6 - 2 子供の事情と大人の事情？（後書き）

お察しの通り、あかねちゃんが取ったのは、運命だったからなのです。ほら、因果率とかいうやつ？サイレンというホラーゲームがあつてだな……ん？関係ないか。

また次回。

## 6 - 4 ・人間の事情と神様の事情

さて、クライマックス。

「三途舞歌!？」

自分の名前はよく聞こえる。舞歌もその声で、巡の存在に気付いた。舌打ちしたい気分になったが、ため息で我慢した。今頃出て来ても遅い。

「かな……と、巡、お姉ちゃん?」

あかねちゃんも、遠くになかねちゃんを見つけました。

かなが迎えに来たの?と、聞くようにあかねちゃんは舞歌を見上げました。舞歌は知らねえよって感じに無視である。

「あかねちゃん!」

かなちゃんが、スタタター。と、走ってきます。巡もその後ろから、難しい顔をしてこちらにやってきます。

「……」

そしてなぜか、あかねちゃんは舞歌の後ろに隠れました。舞歌は、何でだよ。と、呆れ顔であかねちゃんを見ますが、特に行動はしません。手は離しましたが、あかねちゃんは今度は、舞歌の足(といえかジーパン?)を掴んでいます。二人っきりのエレベーターを経験した結果、警戒心が薄れているのかもしれない。

「あかねちゃん！もう、心配したよ？」

あかねちゃんの側まで駆け寄ってきたかなちゃんは、ホントによかった。と、安堵の笑みを浮かべました。巡はちよつと離れた所で、やっぱり難しい顔をしながら、腕を組んで待機。あかねちゃんより、舞歌を見ている。舞歌はそれを、空を眺めるのに忙しいという理由で無視。

「ん……」

あかねちゃんは恥ずかしいのか、舞歌の足で顔を隠してしまいました。恥ずかしい理由は色々ありそうだね。

「怪我とかしてない？知らない人についていかなかった？飴とかもらってない？大丈夫？」

かなちゃんは舞歌の周り、というかあかねちゃんの周りをグルグル回って、あかねちゃんを心配します。色んな方向から、あかねちゃんの安否を確認していると思われる。

うぎつ。と舞歌は思った。あかねちゃんは、顔を見られたくなくてより一層舞歌の足に顔を埋めた。

「あかねちゃん……泣いてる？」

あかねちゃんの顔を覗き込もうとして、かなちゃんは気付きました。

「泣いてない！」

あかねちゃんは条件反射っぽくそう答えました。舞歌の足から顔を上げたあかねちゃんの目には涙が。

鼻水つけてたら許さねえ。そしていい加減手を離せ。と、舞歌は思った。

「泣いてるじゃん。もう……泣くほど寂しかったなら、最初からこんなとこに来なきゃよかったのにー」

かなちゃんはちょっと呆れ気味に笑いかけます。

「だから泣いてないもん！全然寂しくなんかなかったもん！これは心の汗だもん！」

躍りになってあかねちゃんを否定。心の汗。どこで覚えたんだろう。

「あかねちゃん……もっと素直になろうよ。寂しかったでしょ？」

かなちゃんは優しく、あかねちゃんの左手を握ります。その笑みは何だか慈愛に満ちています。まるで我が子に向ける母の笑み。生まれてからまだ五年なのに、どうやって会得したのだろう。

「……ん」

あかねちゃんは、小さく頷きました。かなちゃん笑顔を見て、素直にならない人間はいないという事か。

「頑張ったね。よしよししてあげるー」

かなちゃんはあかねちゃんの頭を撫で撫で。

「……子供扱いしないでよ」

と、呟きながらもあかねちゃんはなすがまま。

「……………いい加減、手、離してくださいませか」

私の後方足元で何してんだこいつら。と、舞歌は思い、いい加減帰る。と、決意した。何故なら巡がこっちに近づいてきたから。

「あっ」

舞歌の言葉で、まだ自分が舞歌の足（というかジーンズ？）を掴んでいた事に気付いたあかねちゃん。慌てて手を離す。「別に寂しかったわけじゃないから！」そしてかねちゃんに言い訳。頭を振って撫でるのもやめー。握られてる手も振って、手を繋ぐのもやめー。

「またあかねちゃんはすぐそうやってー……………もつと素直になる？」

「わたしは素直だもん！それよりなんでかねがここにいるの！」

「何でって、あかねちゃんを捜しに来たんだよ？あかねちゃんがないのに気付いて、もしかしてー。と思つて来たらやつぱりだよ。あかねちゃんのせいで、私まで門限過ぎちゃったよ？一緒に怒られようね」

「……………別に、わたし捜してとか頼んでないし。かねが勝手に来ただけだし……………かねが怒られる理由ないし」

「頼まれなくても捜すよ。私たち、家族みたいなものでしょ？そんな寂しいこと言わないでよ。ね？」

「……………」

かなちゃんはぎゅっと、あかねちゃんの両手を握ります。  
あかねちゃんは何も言えません。ただ、俯いて、ごめんなさい。と、  
口を動かしました。

「……で、どういう事ですか」

子供達がなんか感動的な再会を果たしていた側で、大人達はなんか  
不穏な空気を醸し出していました。  
舞歌の進行を遮るように立ち塞がった巡。腕を組んで難しい顔。舞  
歌に対してどう接すれば計りかねている感じ。

「何が？」

舞歌はやはり、巡に対してもどうでもよさげ。今の舞歌には、家に  
帰って早く寝たい。それだけしかない。

「何がって……」

いつも以上に舞歌に話しづらい。今の舞歌は拒絶というより、自分  
に全く興味がないという感じだ。取り付く島はたくさんあるんだけ  
ど、実がある島はほとんどない感じ。

「何もないなら私はもう帰ります。疲れましたから」

戸惑う巡を尻目に、舞歌はさっさと話しを進める。

「疲れたって……何で？」

「……」

何でお前、図書館にいればよかったのに。  
という意味での巡の質問。舞歌は何も答えず、巡の横を通り過ぎる。  
向かう先は図書館のようだ。

「ちよ、待って！」

去って行く舞歌を呼び止める巡。

立ち止まって振り向き、何ですか。と、目で尋ねる舞歌。

「お前！あの、その、なんというか……」

もじもじする巡。何をどう言おうか悩んでる。

「……怒ってる？」

そして怖ず怖ずと、顔色を窺うように巡はそう聞いた。

「……」

舞歌は一瞬、鳩が豆鉄砲を打ってきた衝撃な場面を目撃したような表情を浮かべた。有り体に言えば、驚いた。

そして巡を数秒見すえて、おどおどしている巡を見て、クスッ。と、笑った。

「水、飲んだ方がいいんじゃないんですか？顔色、悪いですよ」  
そして巡にそうアトバイスし、去って行った。

「え、あ、どういう意味ですか！！」

巡がそう叫んでも、舞歌は二度と立ち止まらず、振り向かない。

「……………」

巡は呆然と、舞歌の姿が見えなくなった図書館を見た。結局、あいつ。怒ってるの？

「巡お姉ちゃん？」

「あつ、何ですか？」

かなちゃんの声で我に帰る巡。後ろを振り向き、二人の姿を確認。かなちゃんとあかねちゃんは、しっかりと手を繋いで立っていた。あかねちゃんはまだ目がちよっと赤いけど、すでに涙は流れてない。

「あの人巡お姉ちゃんの知り合いなの？友達？」

「知り合いというか……………友達というか……………なんとというか……………」

歯切れが悪い巡。巡本人も、舞歌と関係性がよくわかってない。いつもなら、自信満々で友達ですと言っただろうけど。  
かなちゃんから目を離し、あかねちゃんに視線を移す。あかねちゃんはビクツと怯みましたが、すぐにそっぽを向いた。わたし悪くな



いし。

「あかね……その、なんというか……三途舞歌は、何か言ってたで  
すか？」

「え？」

あかねちゃんはビックリして、巡を見る。巡は、自分の問題を子供  
に尋ねる事を、恥ずかしがってるようだ。聞くは一時の恥というけ  
れど。恥ずかしい事には変わらない。

「そもそも、何でお前は、三途舞歌と一緒に？」

「……何であんたに教えないと」「あかねちゃん」「……ん」

かなちゃんはあかねちゃんを諷めた。空気読め馬鹿。と思ったわけ  
ではないだろうけど、反発するのも時と場所を選ぼうね。程度は思  
っているだろう。

「……わたしがあそこにいたら」

あかねちゃんは、てっぺんを指差した。「あかねちゃんあんなとこ  
にいたの？大変じゃなかった？」かなちゃんは驚いた。

「別に疲れなかったけど……下りる時はエレベーターだったから  
楽チンだったよ」

「え！あかねちゃんエレベーター使ったの！いいなー、いいなー！」

かなちゃん、結構本気で羨ましがってます。エレベーター。憧れら

しいです。

「べ、別にすごくないし……ちょっと、ふわっとしたただけだったし」

「ふわっとしたの！無重力？無重力なの？」

「ん、たぶんね」

あかねちゃんも羨ましがられて、まんざらでもない。

「……後で乗らせてやるから話し進めろです」

巡には理解出来ない憧れであった。

「……なんか急に来て」

あかねちゃんは渋々話し始めた。

「いいから来いって言われたから、やだって言って。そしたらなんか変な事言っ手首かき始めて」

あかねちゃんは、こんな感じだよと教えるように、自分の左手首をかきかき。かなちゃんちよっとビックリ。

巡は、錯乱状態？と思った。

「変な事ですか？」

「ん。なんか、責任とか、いじめっ子とか、知らないとか、あつ、神様野郎とかも言ってた」

「巡お姉ちゃんの事かな」

「たぶん」

「……」

いや、お前ら、神様野郎！私なのかよ。と、思わなくもなかったが、それよりも、責任という言葉が、巡には気になった。確か舞歌にそんな事を言った気がする。頭に血が上っていて自分でもよく覚えていないが、たぶん言った。という事は、あいつは私の言葉を受けて捜してたのか？私を手伝っていたということ？いや、それは何か違う気がする。

「なんか、わたしを見つけない自分の責任になるとか言っつて、そして急に何も言わなくなつて。どうしたんだろうと思つたら、何か呟いて」

「呟いた？何をです？」

巡は、なんとなくだが、それが大事な気がした。

「何をつて言われても……よく聞こえなかつたし」

「思い出すです。大事な事ですよ」

「……なんとかすれば、よかつた。とか言つてた気がするけど……  
なんか怖かつた」

何を必死になつてゐるんだろうと思ひながら、自分が覚えてゐる事を教えるあかねちゃん。

「……ですか。まあいいです。その後はどうしたですか？」

よくわからなかったが、まあ仕方がない。

「その後は……なんか、あの人、急にやる気なくなつて、どうでもいいとか言つてて。なんか、寂しくなつちやつて、それで、その……そろそろ帰つてあげることにしたの！！」

自分が泣き喚いたところはカットして、あかねちゃんは、これで全部。もうおしまい！というようにそっぽを向きました。

「……」

巡は腕を組んで考えます。

結局よくわからなかった。

何であいつはあかねを捜していたのだろう。私がお前に責任があると言つたから？そんなふざけた理論を信じたのか？それともただ単純になんとなく？私に対抗心を燃やして？私を手伝おうとした？どれが正しい？どれも正しくない？

いや、そんな事よりも。三途舞歌は怒っているのだろうか。それが一番重要だ。

怒つてたらどうしようか。いや、今思うと、まあほとんど覚えてないけど、あんな事言われたら怒るのも当然だろう。さっきのあの態度も、やっぱり怒っていたという事か？謝るべきか？どうするべきか？こつこつ時は神様としてどうするべきなんだ？

どうすれば……。

「……かな」

「え、なに？」

あかねちゃんに、「ちゃんとお礼言ったの？」と聞いていたかなちゃん。急に声をかけられてちょっとビツクリ。そして、もじもじしている巡を見てさらにビツクリ。まるで迷える人間みたいだ！。

「その、なんとというかですね……なんとなくお前は得意そうだから聞くですけど……」

もじもじと。怖ず怖ずと。巡は一回りも歳が違つ子供に教えを請います。

「その……友達と仲直りつて、その、どうやるんですか？」

#### 6 - 4 ・人間の事情と神様の事情（後書き）

巡の支離滅裂度というか不安定さがやべえ。どこかで持ち直さない  
とやべえ。

あれ？かなちゃんとかかねちゃんが同室という情報書いたっけ？書  
いてない？そういう裏設定的な物があったような、ないような……

あ、たぶん次回で終了です。

## 6・5・逃れられない力

舞歌はもう帰るつもりだった。

それなのに、なぜ図書館に戻ってきたかというと、鞆を取りに来たのだ。そう。舞歌は鞆を図書館に置きっぱなしにしていた。それは、『私は勉強の途中でちょっと気晴らしに外に出ただけですよ。子供を捜しに行ったわけじゃないんですよ』という自分に対する言い訳の為に置いていったのだが、今となってはどうでもいい。さつさと回収して、家に帰って、眠りたい。

「……………」

そういえば。と思い、舞歌は雑誌コーナーに目を向ける。案の定、そこには変な少女、つまりくるみがいた。ちょうど雑誌を読み終わったのか、新しい雑誌を棚から取り出している。

「……………はあ」

いないと思ったら、本に夢中だったのかよ。いいご身分なこと。舞歌は呆れ混じりのため息をついた。そしてくるみから目を離し、鞆を取りに三階へむか「奇遇ですか？」えなかった。

「……………」

いや、お前。ついさっきまであっちにいたじゃねえか。と思いつつ、後ろを振り向くと、やっぱりくるみがいた。手にはさっき棚から取り出したであろう雑誌が。オカルト三昧！。

「おかえりなさいと言つべきですか？」

「……何か用ですか？」

さっさと話を進めよう。無視しないのは舞歌の優しさである。

「用があるのは私ではなくあなたかと思っていたんですけど、間違えましたか？」

首を傾げられてもわからねえよ。というのが正直な所である。が、舞歌はなんとなくく意味を察した。

「……子供ならもう見つけましたよ」

「……私は驚きましたか？」

そう聞ってくるみは、目を大きく開き、驚いた！という感じではなく、きよとん。という感じだ。これがくるみの驚きらしい。驚いたのは舞歌が見つけた事に対してか、それとも自分の言いたい事が伝わったからか。

「どこにいるんですか？透明人間になったんですか？幽体離脱という奴ですか？小さいあかねとかになっただんですか？怪奇現象は唐突にですか？」

キヨロキヨロと周りを見て、隠れていないか確認。舞歌の足元も見て、いないか確認。舞歌の頭の上も見て、のっていないか確認。舞歌の手元も見て、手が繋いだ感じになっっていないか確認。舞歌の後ろに回り、背中に張り付いていないかも確認。舞歌の体をぺたぺた触って、懐に隠していないかも確認。

さすがに顔までぺたぺたしようとした所で、「常識って、知ってる



か？」と、舞歌は引き攣った顔で、その手を掴んで止めた。そこま  
で我慢する意味はあったのだろうか。

「あなたの常識が私の常識と一致している確率はどの程度あるん  
ですか？そしてその常識が世界の常識とどの程度まで一致している  
ですか？あなた個人が非常識と思ったとしても世界的には常識であ  
る事も考慮するべ」。「ああはいわかりました。もういいです。  
あなたは常識を知ってますよ。私が悪かったです。これでいいで  
すか？」

舞歌はくるみの手を離し、距離を取る。めんどくさい奴だ。と、舌  
打ちをしてから「子供ならもう子供に渡して来ましたよ」説明する  
気がないようにしか思えない説明をした。

「神様にも会いましたか？」

「ああ、神様馬鹿にならね」

吐き捨てるように言う舞歌。

「あなたは神様が嫌いなんですか？」

首を傾げるくるみ。

「ええ、大嫌いですよ。あと、あなたも嫌いです。さっさと合流し  
て帰れ。二度と来るな」

そして唐突に毒を吐く舞歌。

「確かにあかねが見つかったなら私はここにいる意味はありません

か？」

嫌いと言われたのは特に気にしてはいない様子。慣れているのか、本気とは思っていないのか。

「その通り。だから本なんて読んでないでさっさと帰れ」

そして私の前からいなくなれ。  
しっしっ。と、ボディーランゲージ。

「あなたも私が本を読むのに夢中で、あかねを心配していないと思っ  
ってますか？」

くるみは首を傾げた状態から、さらに首を傾げた。耳が肩にくっつ  
いた。柔らかーい？

「はあ？」

いや、そんな事微塵も思っ  
てない。

「神様はどうも本当に私をそんな薄情な人間だと思ってるようなん  
ですけど、そんな風に見えますか？」

そう言っ  
て、クルクルとその場を回るくるみ。薄情な人間って、外  
見で判断出来るのか？

「……いや、知りませんよ」

あと、どうでもいい。

「神様は、私はあなたがあかねを見つけたらここに来るであろうと思っ  
て残ったとは考えないんですか？」

回るのをやめ、不思議でしようがないというように、舞歌を見るく  
るみ。舞歌としては、お前が不思議でしようがないという感じた。

「……説明は」

「説明？」

「だから……神様にちゃんとそう言ったんですか？ちゃんと  
言っても信じなかったなら、神様は傲慢で自分勝手に馬鹿で阿呆  
って事です。すから、気にしなきゃいい」

「そういえば、私はあなたの事を神様に言い忘れてはいませ  
んでしたか？」

「……」

どいつもこいつも馬鹿ばっかだ。

「説明してなければ確かに神様にはわからなくても仕方ありませ  
んか？」

「仕方ないでしょうね。神様もどきなら」

「嫌いな相手なのにちゃんとフォローするんですか？」

「……」

いや、馬鹿にしたつもり何ですけど。

「しかし神様は仕方ないとしても、かなは仕方なくはないと思いませんか？かなは事情を知ってたんだから私の変わりに説明してくれてもいいとは思いませんか？」

「……子供に説明を期待する方が間違ってるだろ」

何で私、愚痴られてるんだろう。そして何で、相手してるんだろう。

「あなたにはかなが子供に見えるんですか？」

「子供に見えないとしたら、眼科に行った方がいいですよ。だからさっさと行け」

「子供と大人の違いは見た目だけですか？小さい人はずっと子供ですか？」

「……何が言いたいんだよお前は、何を聞きたいんだよお前は」

舞歌は左手首を握りしめ、苦虫を噛む。

不愉快だよ。本当に。お前の喋り方は本当に不愉快だ。

「あなたのハートは左手首にあるんですか？だからあなたはリストバンドで隠してるんですか？」

「はあ！？」

何でそんなピンポイントでえぐってくるんだよ。舞歌は嫌悪感百パーセントの目でくるみを見る。

一方くるみは、つまらなそうに舞歌を見る。その目は、かなちゃんに『今さ』のおもしろさが伝わらなかつた時の目に似ている。

「あなたは読書をあまりしない方なんですか？」

「はあ？」

意味がわからない。こいつの頭の中、本当にどうなってんだ？

「あなたは私が嫌いなんですか？」

また唐突に、話題が変わる。

「……いいえ、大嫌いです」

「なのにどうしてあなたは私の話を聞いてくれるんですか？」

私を知りたいよ。そんな事は。

「……お前が話しかけてくるからだ」

「そういえば、私はどうしてあなたと喋ってるんですか？神様の意志ですか？」

「……神様なんて、いるわけがない」

首を傾げて尋ねてるくるみに、吐き捨てるようにそう返し、舞歌はようやく、くるみに背を向け歩き出す事に成功した。

自分でも、どうしてこんなに話していたかはわからない。全くもって、わからない。

「私はあなたに感謝するべきですか？あかねを見つけた事、それを私に教えてくれた事、私の話し相手になってくれた事、感謝、するべきですか？」

くるみのその問いかけに、舞歌は歩きながら、心の中で答える。

知らねえよ。

「ねえ、鮑さんや」

「なに、皆さんや」

「私達、いつまでここにいればいいわけ？」

「んー、春風さんが戻ってくるまでじゃない？」

「……春風はいつ戻ってくるわけ？」

「そりゃ、来年の春には戻ってくるんじゃないかな？」

「……結局あの、神様かつこ笑いは、何してんの？」

「んー、どこかで誰かを助けてるか、何かの終わりを告げてるんじ

やない？神様だし」

「……ああ、神様かつこ笑い。早くここに来て終わりを告げて下さい。そして私を家に帰してくれ」

おしまい・・・

## 6 - 5 逃れられない力（後書き）

この終わり方はひどい。

逃れられない力とは何だったのか。子供の力が大人の力か。神の力か人の力か。運命か。それとも過去の亡霊か。

次号に続く。



## 6 - 6 ・姉妹喧嘩

「た、ただいまー……」

19時。

水無は恐る恐る自宅に帰ってきました。自宅に帰るのになぜ恐れねばならぬのか……。と、思いつつ。

ここまで辿り着くのに、色々ありました。ええ、本当に。

巡がようやく戻ってきたと思っただらなげか子供を引き連れていて双子が子供とぎゃあぎゃあわーわーお喋りし始めて巡は水分補給は大事ですーと言って休み始めて神無は相変わらず子供に好かれて意気投合してエレベーターに行くぞーとか言い始めて水無が帰っていいですかーと言ったら生意気子供以外がダメでしょとか言ってエレベーターに行こうよーって双子が言ってきて嫌じゃばけーって言うてたらまた変なのが現れてまた会いましたか？とか言ってきて会いたくなかったわばけーって感じで神無が疑問少女と話し始めたたら神無からちよつと私には無理という救難信号が届いて休憩を終えた巡が疑問少女に噛み付いたらやれやれ左手首にハートがある人の方が話しがわかりますねみたいな事を疑問少女が言ったら三途舞歌の事かー！って巡が反応して三途舞歌つてだれー？つてしつかり子供が聞いて誰だっけー？つて双子が首を傾げて別にわたし興味ないけどもしかしてさっきの人のこと？つて生意気子供が興味津々な感じで三途さんつていうのはねー。つて神無が説明し始めて水無が気付かないように帰ろうとしたら帰るんですか？と疑問少女に見つかって帰るんですかー？と子供達に言われてあは、あははーでした。

さすがにくるみわり園まで行くのは、断固とした決意で水無は拒否した。神無は双子にせがまれ、あとあかねちゃんのちらちらと見る

目に負け、送って行く事になりました。家に連絡しなくてもいいわけ？と、水無が聞くと、神無は、今日はお姉ちゃんいないから。と、困ったような笑みを浮かべた。いないからどうした。と、水無が聞くわけがない。

とまあ、そんな感じで今に至る。

恐る恐る玄関を開けた水無の手にはお弁当が二つ。疲れたので、夕食を作る気にはなりません。

「火無さーん……？」

玄関を開け、暗い台所を忍び足で進む水無。こんなに帰りが遅くなつて、妹の機嫌が大変怖いです。ただいまと言ったのに何の返答もなかったのが、水無の恐怖を増加させます。

明かりと音が漏れている部屋に続く扉を、ゆっくり開ける水無。

「あつ、お姉ちゃんおかえりー」

火無はベットに寝転がりながらテレビを見ていた。

「た、ただいまー……？」

拍子抜け。といってもいい。火無は、全く怒っていないようだ。逆になんか怖い。

「お姉ちゃんお姉ちゃん、私、お腹空いたよー」

火無は足をバタバタさせてご飯を要求して来ました。

「え、ああ、うん。というか、え？」

水無は混乱しながらも、とりあえず、入口から移動し、座った。弁当は机の上に。

「わっ、お弁当買って来てくれたの!？」

火無はベツトから飛び起き、机にかじりつきそうな勢いで近づいてきた。

「え、ああ、うん。遅くなっちゃったからね……ごめんなさい？」

ど、どういうこと?怒ってない?怒ってないわけ?

「別に全然いいよ。お姉ちゃんのご飯に比べたら美味しくないけど、たまに食べると美味しいもんね。お姉ちゃんはどっちが食べたいの?」

ニコニコと満面の笑みを浮かべながら、火無は水無に聞く。

「え?あー、ハンバーグ?」

あれ?なにこの子。私の妹ってこんなに聞き分け良かったっけ?

「じゃあ私がハンバーグ食べるー!お姉ちゃんが食べたいのを私食べたいー!」

そう言っつて火無はハンバーグ弁当を自分の前に、から揚げ弁当を水無の前に置いた。

「ああ……うん。どうぞどうぞ」

いつも通りの火無理論。水無はちよつとホツとした。

「いただきまーす！」

火無は手を合わせていただきます。モグモグ美味しいー。

「……いただきまーす」

なんか違和感を感じつつも、水無もいただきます。モグモグ、いや、なんか、緊張して美味しくない。

火無は怒っていないのだろうか。怒っていない様に見えるのは罷なのだろうか。本当はめっちゃ怒っているのではなからうか。油断させといて何かする気なのではなからうか。いやしかし。火無はそんな回りくどい事はせず、怒りたい時は怒るのではなからうか。つまり火無はやっぱり怒っていないのか。

「……あのー、火無さん火無さん？」

「もぐ？」

「あー、なんといいですかー……怒ってる？」

水無は意を決して聞きます。怒ってなかったら、藪蛇な質問です。

「？」

火無は小首を傾げる。そして口の中の物をごっくんと飲み込む。咳込む。水無は慌てて麦茶とコップを持ってくる。火無は麦茶を飲ん

でホツとしてから、「ありがとー！」と、感謝する。そしてまたご飯を口に入れる。あれ？質問の答えは？

「火無さん火無さん？怒ってない？怒ってないわけ？」

「？」

火無は小首を傾げる。そして口の中の物をごっくんと飲み込む。咳込む。水無はじと目でみーてるーだーけー。

「お姉ちゃん助けてよー！」

火無は激怒した。

「いや、意味わからないから」

水無はループする気はなかった。

「お姉ちゃん！私は怒ってないよー！」

と、言いながら明らかに怒ってる。

「ああ、やっぱり怒ってたんだ。あー、よかった」

水無はいつも通りの火無で安心しました。これでご飯も美味しく食べれるぜ。

「むー！お姉ちゃんはおかしい！」

火無は机をポカポカ叩いて怒りをアピール。

「おかしいつて、何がよ」

水無はリモコンでクイズ番組から料理番組に。

「私が怒ったら怒ったで変な目で見るし、怒らなかつたら怒らなかつたで私を変な目で見るー！」

火無はリモコンで料理番組からクイズ番組に。

「いや、だつて。あんたが怒らないなんておかしいあつて思つて」

水無はリモコンでクイズ番組から料理番組に。そしてリモコンを火無の手の届かない所に。

「お姉ちゃんにも色々用事あるからと思つてー！私寂しかったし学校行つてみようかなあとか思つたり文句言いたいと思つただけどー！我慢したのにー！なのにお姉ちゃんはー！」

火無はリモコンを取ろうと頑張るが、残念。水無に死守された。

「いや、お姉ちゃんはビツクリだよ」

水無は火無からリモコンを死守しながら、ホントに驚いた。火無が自分の事を気にかけるとは。

「火無が私の事を考えてくれたなんて。あんたも成長するんだな。私は嬉しい」

水無はよしよしと火無の頭を撫でる。「むにゃー」火無は恍惚の表

情。そしてハッ。

「お姉ちゃんがそういう態度なら私はこれからもプンスカプンスカだよー！」

両手を上げてガオー。

「プンスカって……成長してるのか退行してんのかよくわからん」

水無はモグモグとテレビを見ながらご飯を食べる。火無に対するサービスは終了である。

「もう怒っちゃうもん我慢しないもん我慢は体に毒だもん！」

その態度にぶつつんした火無は水無に襲いかかった。

「ぐえ」

横から襲いかかれた水無は潰れた。油断していたぜ。

「お姉ちゃん今日はどうしてこんなに遅かったの！またあの女と遊んでたのかー！！そんなにあの女が好きなのかー！」

火無はマウントポジションを取った。

「あの女って……お前は私の何なんだよ。昼ドラの見すぎ……」

水無は、あつ、食べたばかりのから揚げが逆流しそう。という感じで結構苦しい。

「私はお姉ちゃんの最愛の妹でしょー!!」

火無はポカポカと水無の胸を叩く。

「いや、別に最愛ではぐえ!」

喉を突かれました。

「お姉ちゃん!お姉ちゃんは私に言つべき事があるんじゃないかな  
!」

水無の上に乗りながら腕を組み偉そうな火無。

「言つべきこと……?どけええ!??」

鳩尾を突かれました。

「ちがーう!!」

ばってーん。

「ぐう……何でお前暴力振るえるんだよ……火無はどうした?」

水無は苦しげな表情でそう聞く。暴力は火無の役割だろうか。

「火無なんか知らないもーん」

ふーんって、そっぱを向く火無。そんな火無に違和感を感じる水無。  
なんか変だな。



「そんな奴の事より他に言つべき事あるでしょ！このわーたーしーにっ！」

ポカポカと水無叩きを再開させる火無。

「いや、ちよ、今、なんつつ、落ち着け！！とりあえず退け！痛いし苦しい！」

ポカポカは思った以上にうざい。水無は違和感の正体を考える前にまずはこの状況をどうにかする事にしました。

「むー……」

渋々。といった感じで水無の上から退き、元いた場所に戻る火無。水無は起き上がり、嘆息。服を直し、考える。

「言つべきこと？言つべきことねー……あつ、部屋掃除してくれた？」

部屋がなんとなく綺麗になっている気がする。物の位置も変わっているような変わっていないような。

「うん。暇だったから掃除したんだよー」

えっへん。と、火無は無い胸を張った。

「へー、偉い偉い」

最近よく掃除とかするけど、どういつ風の吹きまわしだろつ。と思いつつ、水無は火無の頭を撫で撫で。火無は「むいー」と恍惚の笑

み。そしてハッ。

「他にもあるでしょー!!」

ガオー。

「他？他ねー……」

モグモグとから揚げを咀嚼しながら思いを馳せる。部屋を見渡しても特に思いつかない。料理番組を見ても思いつかない。膨れっ面をしながらハンバーグを食べる火無を見ても思いつかない。魔法の本使おうかなあ。と思ったが、その前に携帯を開いて見る。

「……………あつ、誕生日？」

携帯のカレンダーを見て思い出した。そういえば今月末、こいつ誕生日じゃね？

「そつだよ私の誕生日もうすぐだよー!!」

どうやら正解らしい。

「もうすぐつて、まだ二週間くらい先じゃん」

「もう二週間なのー！お姉ちゃんは妹の為に二週間前から誕生日の準備しないとダメなのー!!」

火無は駄々っ子のように暴れ、「誕生日楽しみなのー！お姉ちゃんに祝ってもらいたいのー！お姉ちゃん以外には祝われたくないのー!」と、喚いた。

「……はあ」

水無は、やっぱり、怒ってる？とか聞かなきゃよかったなあ。そうすりゃ、嘘か本当かはわからないけど、こいつもおとなしくしていたらしいし。触らぬ神になんとやらか。と、ため息をつきました。

## 6・7・夏風邪は脳に来ます

「というわけで、火無の様子がやっぱりおかしいなー。って思ったわけなんですけど……神無？聞いてる？」

「え？ああ、うん。もちろん聞いてるよ。クレープはチョコバナナが一番って話だよ。でも、私としてはストロベリーもいいと思うんだよね」

「……いや、全然違う話だったんですけど」

「そうだったっけ？まあいいよね。クレープの話の方が楽しいし」

ニコニコと笑う神無。こいつ、本気でそう思ってたやがる。

「……」

あれれー？神無さんもおかしいぞー？と、水無は引き攣った笑みを浮かべました。

さて。状況説明。

時間は15時。

場所は大学のとある棟の休憩スペース。神無と水無は向かい合って座っている。水無の前にはノートパソコン。神無の前にはオレンジジュースが置かれている。

水無はレポートをする片手間に、昨日の火無の話を神無にしていたはずなのだが、どうも神無がずっとニコニコしていたので、あれ？なんかおかしいな？と思ったら、やっぱりおかしかった。という状

況です。

「……もしかして、あれですか。風邪引いた？」

なんとなく顔も赤い気がするし。風邪引くと熱が出るタイプって言うってたし。神無さん熱に弱いし。神無さんって季節の変わり目には風邪引く病弱さんだし。まあ今は季節の変わり目じゃなくて夏真っ盛りですけど。

「そうそう風邪っていえばね。ほら、さえちゃんっているでしょ？」

神無は両手を合わせて小首を傾げた。水無の発言を聞いているのか聞いていないのか。よくわからん状態。

「……いたような、いなかったような？」

水無は、今日の神無はダメだわ。と、思って相談を諦めた。本当は誕生日の事とか相談したかったんだけども。

「いたんだよねー。昨日、水無が薄情にも帰っちゃった後も色々合ったんだよねー」

神無は腕を組んで、うんうん。

「薄情って……」

今日の神無は毒を吐くぜ。

「私達は無事くるみわり園に着きました」

神無は人差し指を立てて、話し始めた。

「はあ、着いたんですか？」

水無は、いや、聞いてねえし知りたくもねー。と、思ったので、レポートを書く片手間に聞く事にしました。

「そして怒られました」

神無は肩を落として、しょぼーん。

「そりゃ、門限破ったからねー」

パソコンカタカタ。

「でもすぐ許されました」

神無は両手を上げて、やったー。

「甘いねー」

パソコンカチカチ。

「というわけで春風さんが自分の事を棚に上げて怒りました」  
やれやれだぜ。

「いや、怒ってもいいと思わなくもない」

んー、書けない。資料をぺらぺら。

「でも私達は特に気にせず食堂に向かいました。春風さんが、無視するなですう。って言うってたけど、放置プレイ。神様は人間に無視される運命だもんねー」

神無はピースでイエイ。

「神無は、鳥肌が立つ程、巡の真似が、下手」

水無は事実だけ報告した。

「食堂に入るとはなちゃんやらんちゃんその他の人達が駆け寄って来ました。はなちゃんは口元にお弁当を付けてました。カワイイので誘拐したくなりましたが、私は我慢しました」

神無は捕まりそうな笑みを浮かべた。

「今日の神無は温度が違っぜ」

体温が2〜3度違っっっていう意味だよ？

「キヤーキヤーワーワー話している子供達に、まあまあご飯食べながらお話ししましょう。という意味だと思っけど、くるみさんが私のお腹が空いているという事を考慮してくれませんか？って言うてました」

神無は腕を組んで、んー。わからん。

「一人で先食べばいいのにねー」

正直どうでもいい。

「ちなみに夕食はカレー。私にはちよつと甘かったけど、命ちゃんは辛い辛い言つてて、かーわーいーいつ。でしたー」

神無は両手を上げて、やったー。

「今日の神無は熱暴走状態なんですよー。いつものこの子は、しっかりした良い子なんですよー」

水無は誰かに向けてフォローした。

「カレーを食べながら、主に月読ちゃんとかなちゃんが、今日のお出事をみんなに教えてました。命ちゃんは辛くて辛くて使い物にならなかったし、あかねちゃんはむやみやたらにツンツンしてたし、くるみさんは意味不明だし、神様は携帯片手に唸ってたし、話しが出来るのはその二人だけだったんだよねー」

神無は腕を組んで、うんうん。

「携帯片手に唸ってたのが気になりますねー」

テキトーに返事。

「くるみわり園の子供達はあまり外出しないからかはわからないけど、エレベーターに強い憧れを持っているみたいだねー。あかねちゃん、ヒーローみたくなつてたよ。あかねちゃん、顔真っ赤で照れてたけど、満更でもない様子でした」

神無はニヤニヤと笑った。



「結局、他の子供達はエレベーター乗らなかったもんねー」

水無は補足説明係。

「皿洗いは門限を守れなかった私達の仕事でした。みんなと一緒に  
お皿洗うって、何だか楽しかったなあ」

神無はしみじみと、微笑む。

「……」

水無はレポートを書くのに忙しいのでノーコメント？

「皿洗いを終えたら、お風呂の時間。さすがにそろそろ私はおいと  
まさせてもらおうかな。と、思いました。春風さんは、もう少しツ  
クヨミノミコトを怒っておくですう。今日は久しぶりに泊まってい  
くですう。こんな時の為に着替えはここに置いてあるですう。と、  
言っていました。私は凄いなあ。さすが神様だなあ。と、思いました」

神無はクスクスと、小悪魔のような笑み。

「あれ？もしかして神無は、心の奥底辺りで、舞歌より巡の事を馬  
鹿にしているのではなからうか？」

神無の下手つぴな口真似を聞いていたら、そんな風に思った。

「さてさて。そんな感じで、みんながお風呂に入っている間に私は  
帰ろうと思ったら、かなちゃんにちょっと待ってと言われました。

さあ、なぜでしょうか？答えは！CMの後で！」

神無は水無を指差し、ケタケタと笑う。

「楽しそうに壊れてるねー」

自制心っていうか、仮面が取れやすいんだよなあ。いつも分厚くて重い仮面着けてっから、ちょっと体調が悪くなると、ポロツ。だよ。と、水無は頬杖をつき、パソコン画面をつまらなそうに眺めながら、そう思った。

「かなちゃん、お風呂入らないの？」

急に芝居風になった。

「私は後で入るからいいんです。そうなの？かなちゃん。みんなといる時と雰囲気違うね。えー。そうかなー。急に子供っぽいねー。えへへへー。それで何か用なのかな？あのね。さえちゃんが前から神無お姉ちゃんに会いたいって言ってたから、よかつたら会って欲しいなあって。さえちゃん風邪引いて弱ってるから、お見舞いして欲しいなあって。そんな風に言われたら断れませんかよーねー」

神無は頭をかいて、照れるなー。

「ひゅー、神無さん人気者ー」

とりあえず、囃し立てる。

「かなちゃんに案内されて、私はさえちゃんの部屋に行きました。さえちゃんは二段ベットの下で、布団を被って寝てました。額にひ

えびたーを貼って、時折ゲホゲホと咳をして苦しそうでした」

「ああ、その風邪をもらったわけね」

ようやく納得。

「さえちゃん大丈夫？って、かなちゃんが聞くとね。大丈夫じゃない。って、苦しそうにさえちゃん言うの。正直、家に連れ帰って看病したくなった」

「マジな顔して言う事なのかなー？」

「で、私に気付いたら。神無お姉ちゃんって言って、手を延ばすわけね。ベットから起きるのも億劫みたい。手を握って上げたらね。なんかホツとした顔してた。やっぱり、風邪引くと不安になるんだよねー」

優しい笑みを浮かべる神無。

「……」

水無は、じゃあ、あなたも家でおとなしくしてなさい。とは、言いません。神無は、家に居た方が不安になるだろうからね。

「それでまあ、しばらくさえちゃんとお喋りしてね。その間、ずっと手を握ってた。話した内容はね、今日合った事とか。好きな食べ物とか。学校の話とか。他愛もない事かなあ。ああそっいえば、気付いたらかなちゃんはいなくなってた。空気読んだのかな。あの子、気持ち悪いくらい優等生だよね」

神無はニコツと笑った。

「……天に唾を吐いた」

水無はポツリと呟いた。

「どうしてか全く見当もつかないけど、さえちゃん私の事大好きみたいなんだよね。どうしてだろう?」

首を傾げて、不思議だなー。

「よくわからないけど、波長が合ったんじゃないの?」

同じ波長か真逆の波長かはわからないけど。

「波長かー。私と水無も波長が合ったのかな? 類友ってやつ? それとも喧嘩する程仲がいい的な方かな?」

ニコニコ。

「知るかボケー」

無視無視。

「話している内にさえちゃん眠くなってきたみたいでさ。うとうとし始めてね。最後に、神無お姉ちゃんみたいなお姉ちゃんが欲しかったなあ。って言って、寝ちゃったよ。神無お姉ちゃんみたいなお姉ちゃんだったさ……」

神無は俯いた。

「そんな立派な人間じゃないのにー！」

神無は机に突っ伏した。

「私はお姉ちゃんの資格零なのにー！」

神無は泣き始めた。

「あつ、火無さんの誕生日もうすぐだよね」

神無は急にケロツとした。

「ゲホゲホゴホゴホー！」

神無は急に咳をした。水無に向かって。

「……神無さん神無さん。ちょっと私、ついてけない」

あなたの切り替えの早さに。

「これで水無が風邪になりましたー。すると、火無さんは一日水無と一緒にいられます。イエーイ。これが私からの誕生日プレゼントだぜー！」

親指を立てて、満面の笑み。私、いい仕事しました！

「あー、なんというか神社さん？」

水無はニッコリと、神無に笑みを向けて言う。

「お前もつ今日は帰れ」

6・7・夏風邪は脳に來ます（後書き）

あらかじめ言っておくぞー。

私は。書くネタに困ったら。風邪を引かせる。そんな人間だー！！  
そして。キャラクターのイメージなんて。気にしない。そんな人間  
だー！

はい。

また次回だー！！

## 6・8・仲直り それ、無かった事に

『私を帰らせたければ、プリンクレープを奢って下さい!!』

と、神無が水無に提案しているのか懇願しているのかわからない事を言っていた頃。図書館では、昨日の事なんてもう忘れた事にした舞歌が、いつも通り本を読みながら、言いたい事あるなら早く言えよこの野郎。と、思っていた。誰に対してそう思っていたかという、まあ言つまでもなく、巡である。

はい。状況説明。

講義が終わり、舞歌が図書館に着いた時にはもうすでに巡はいた。もちろん舞歌は、巡に声をかける事はなく、巡から離れた場所に空いていた、窓際四人掛けの席に座り、読みかけだった本（喧嘩の不思議）を読み始めた。

読み始めてしばらくすると、コソコソと巡が舞歌に近づいて来た。鞆ではなくわざわざ広辞苑で顔を隠しながら。そして巡は何も言わず、舞歌の向かい側に座った。舞歌は何してんだこいつ。と思つたが、もちろん理由を尋ねるわけもなく、気にしていないフリを保ちながら、読書を続けた。

座った後も広辞苑で顔を隠していた巡は、時折、広辞苑から顔を出し、舞歌の機嫌を窺うようにチラチラ見た。目が合うとすぐにまた顔を隠す。そしてまたしばらくすると舞歌を窺う。かれこれそれが20分。舞歌の苛立ちも、いい具合に溜まってきました。貧乏揺すりが止まらないぜ。

そして今、およそ20回目のお見合いからのかくれんぼによって、舞歌の勘忍袋が限界に達しました。



読んでいた本をボタンと音を立てて閉じる舞歌。広辞苑の向こうでビクツとする巡。

「用があるならさっさと行ってくれますか。ないならさっさといなくなれ」

左手で頬杖をついて、右手で机をタップ。苛立ちを隠そうともしない顔は巡ではなく、窓の向こう。夏の青空を睨んでる。

「うう……怒ってる、です?」

巡は広辞苑で口元を隠し、恐る恐る尋ねた。

「お前が来る前は怒ってなかった」

つまり怒ってるって事だよ。

「うう……やっぱり、昨日のこと、です?」

今日の巡は弱々しい。

「はあ?」

何言ってるんだこいつ。今私が怒ってる理由もわからんのか。と思い、空から巡へ視線を向ける。舞歌と目が合った巡は、また広辞苑で隠れてしまった。

「き、昨日は言い過ぎた気がしないでもないですけど私は間違っていない気がしないでもないですけど謝ってやってもいい気がするんですけど、怒ってる、です……」

広辞苑の向こうから、早口で弱々しくよくわからない事を言う巡。  
昨日の事を反省しているのか、反省していないのか。謝りたいのか  
謝りたくないのか。よくわからない巡である。

「はあ………?」

舞歌は怒りを通り越し呆れた。どうやらこいつは昨日の事を引きず  
って、こんなよそよそしい態度になっているらしい。馬鹿か。寝て  
忘れたフリでもしてりゃいいのに。いつも通り神様神様って騒いで  
ればいいのに。そうすれば楽なのに。なんでわざわざ面倒な方法を  
選んでるんだよ。

「かな曰く、です」

急になんか言い始めた。

「かな………変な子供か?」

「謝って許してくれれば、仲直りです………でも、怒っていると、許し  
てくれないと言っていた、です………」

舞歌の疑問は無視して、ぶつぶつと呟く巡。

「さ、三途ま………さんは、怒ってる、です?」

今日の巡は、ただの人間、春風巡のようだ。恐らくかなちゃんに、  
上から目線（神様目線）はダメだよ。と、助言されたからだと思  
われる。

「……」

舞歌は頼杖をついて机をタップしながら、広辞苑を睨む。舞歌は呆れからまた、苛立ちを覚えた。

どうやらこいつは仲直りがしたいらしい。つまり現在私達は喧嘩しているという事か。こいての中では。私としては全くそのつもりはない。私とこいつは喧嘩するような仲じゃない。勘違い野郎め。友達だと思ってるのか。私とお前はストーカーと被害者程度の関係だ。勘違いすんな。喧嘩はない。いつもお前の一方通行だよ。

怒っていると許してくれない？だからさつきから怒ってるか確認してるのか。怒ってたら謝っても仲直り出来ないから？つまり私が怒ってないと言つまで、聞いてくる気か？馬鹿か。馬鹿か。馬鹿か。怒ってる理由はお前の態度だ気付け馬鹿。昨日の事は全然怒ってない。さつきと謝っていつもの馬鹿に戻れ馬鹿。

「お……怒ってる、です？ど、どうすればいい、です？」

机を叩くスピードと力が強くなっているの耳で感じ、鬼みたいな目で睨んでる舞歌を広辞苑からちよっと覗いて確認した巡は、怯え気味。

「……怒ってない」

「え？」

舞歌からのまさかの答え。巡は慌てて広辞苑から顔を出す。そしてまたすぐに顔を隠す。だつてさつきと表情変わってなかったんだもん。怖いもん。間違いなく聞き間違いだもん。

「お、怒ってる、ですよね……」

念のため確認。

「だーからっ！怒ってないって！言ったっ！じゃないですかっ！」

「お、怒ってるじゃないですか！」

睨んでるし机を叩いてるし怒鳴ってるし。明らかに怒ってる。

「怒ってませんよ！苛立ってるんです！」

「お、同じじゃないですか!?!」

「全然違う！あー、もう！」

舞歌は机をドーン。巡はビクッ。

「怒ってないって言ってるんだからさっさと謝れ馬鹿!!」

「うっ……うっ……ごめんなさい？」

よ、よくわからないけど、そういう事なら……。という感じで巡は、広辞苑を盾にしながら、ちよつと涙目で謝罪。

「許します！はい！これで満足なんでしょ!?!?よかったですね!?!」

舞歌は机を叩くのをやめ、頬杖をしたままお空の観察に戻った。

「うっ……うっ……仲直り、したです？」

そして巡は事態について行けず、おどおど。

え？仲直りしたって事でいいんですか？これで今まで通り接しても問題ないですか？もう三途舞歌は怒ってないんですか？そういう事でいいんですか？教えてくれませんかー！！

「あつ……そ、そういうば、さ、三途……舞歌？」

かなちゃんに心で助けを求めたら、思い出した。広辞苑を机に置き、鞆からごそごそ何かを取り出そうとする巡。

「まだなんか用ですか」

舞歌は空を眺めながら、さっさと帰れと暗に伝える。

「かなのワンポイントアドバイス。怒ってたら、物で緩和するを忘れてたです」

緊張してて、ただただ怒ってる？って確認しか出来なかった。巡は鞆から、図書館に来る前に大学構内のコンビニで買った、例の物を取り出した。

「アイスク」 「食べる！」 「……」

アイスクリーム。と、巡が言い切る前に、舞歌は巡の手からアイスクリームを奪った。そして満面の笑みでフタを開け始める。

「何ですか何ですか、もー。これがあるなら最初から出せっていうんですよ。ホント全く馬鹿なんだからー。最初からアイスクリームを出してくれれば、私だってもっとスムーズにあなたの仲直りごっこに付き合っ上げられたんですよ？これを出されて許さない事は

私にはありませんからねー。左手首を持ってかれてもアイスクリーム三つで許す自信が私にはありますよー。昨日の事くらいなら、アイスクリーム半分でも許したでしょうね。本当にあなたは馬鹿ですねー。まあ、チョコクッキーを選んだ所は評価に値しますけどねー」

舞歌は鼻歌を歌い出しそうなくらいのご機嫌調子で、アイスクリームを口に運ぶ。声がスキップしてる感じだ。

「…………ふう、です」

機嫌が良くなった舞歌を見て、どうやら本当に許してくれたようだ  
と判断した巡。一安心。罪悪感零。これで今まで通り振る舞える。  
しかし、アイスクリームを本当に美味しくそくに食べる舞歌を見る巡  
の気持ちは、安心した気持ちが半分、複雑な気持ちが半分だ。

果たして、こんな感じで仲直りして、いつも通りの関係に戻って、  
よかったのだろうか。

6・8 仲直り それ、無かった事に（後書き）

Q・図書館でアイスクリームを食べていいんですか？

A・左手をアイスクリーム三つで交換出来るくらい、アイスクリームが好きならいいんです。

Q・春風巡はどうして広辞苑を持っていたんですか？

A・ちゃんと仲直り出来るか不安だった巡。運動すると不安とか失くなるという噂を聞いていたので、近くにあった広辞苑で運動開始舞歌襲来。あたふたあたふた。広辞苑ガード。という、流れです。

Q・結局この話で何が言いたかったんですか？

A・チヨコメントもいいけどチヨコクツキーも美味しいよね。って、言いたかったんです。

Q・また次回ですか？

A・はい。また次回です。

## 7-1・春風は自由に巡って本題へ

七月下旬になりました。

下旬に何があるのかというと、テスト期間があります。とはいえ、大学はテストがあんまりないので、テスト期間＝夏休み突入。と言つても過言ではありません。

神無と水無は、本日。午前中に一教科テストがあっただけでした。先週のもらった風邪はすでに治ったが、まだまだ本調子とはいえない神無は、昼食を食べた後、大事を取って早々に帰宅。水無はなんだかんだまでレポートが終わっていないので、一人、レポート作業を行っていた。

本日17時が締め切り。急がなければ。後もう少しだが、油断せず頑張ろうと思っていた水無。

「というわけで、もう七月も終わりです。夏休みです」

「……」

そんな水無の前に、急に現れ座った巡。何がというわけなのか全くわからないので、神妙な顔をしているが無視する事にした。

「というわけで、弟の命日が近いです」

「いや、ちょっと待て」

さすがにこの発言は無視出来ませんでした。

「奇しくも、お盆の季節に弟はこの世を去ったのです」



「いや、え？　ちよつて待てつて。急にどうした？」

「弟の死は、人間としての私の罪なのです」

巡は司令官みたいなポーズを取りながら、語るのをやめない。

「あのー、春風さん？　急に来て前フリとかなしで何語り出してるのかなー？」

「ですから毎年、この季節になると神様である私は不安定になりますよ。所詮私は人間だと、無意識が囁くのですよ。だからつい、八つ当たり気味に三途舞歌に責任がどうか言ってしまったわけですよ」

水無の言葉は無視の姿勢。

「なるですよつて。わけですよつて。聞いてねえし知らねえし。というか、一旦落ち着こうよ。落ち着いて話し合おうよ。お前のそういうのは、もう少し順序立って明かされる物じゃないのかな？　あー、お盆だー。そういえばお前弟死んでたよなー。命日いつー。そういえば今日だー。みたいなさ？　もう少し時間を置いて、ゆっくりとね？」

「そういうの、めんどくせえです」

さすが神様もどき。神様の言葉を代弁したー。

「去年までは自分がなぜこの季節になると不安定になるかわかってはいなかったわけですが」「いや、だから、待てつて」「今年の私は原因がわかってるわけです。これはお前らのおかげ。まあ、お前

らのせい。とも言えるかもしれないです」

「……」

今日の巡は止まらねえぜ。

「しかし、わかってるからこそです。どうすればいいか私にはよくわからんです。水城水無。相談にのれです」

随分上から目線の頼み事である。

「やだ」

というわけで、水無はもちろん断る。そもそも、いきなり現れていきなり暴露していきなり相談にのれって言われてもねー？

「なぜですかー!!」

巡は絶望し、机に倒れ伏した。

「水城水無にも断れるとは思わなかったですー!!」

「にもって……舞歌か」

どうやら巡は、水無に会いに来る前に、舞歌にも会いに行ったようだ。そして恐らく、似たようなやり取りをした末に、水無よりも辛辣な形で拒否られた。そんな所だろう。

「うう……何故ですかー」

机に顔を伏せたまま嘆く巡。

「この前は回りくどくて失敗したですから、ストレートに言ったのにー。ですー」

「……極端過ぎるんだよ」

この前。というのは水無にはよくわからないが、とりあえず、思った事を呟いておく。

「うう、私、極端過ぎるですかー？」

巡が顔を上げてメソメソと聞く。

「ああ、うん。まあ、中間を覚えるべきかなー。って、思わなくもない」

パソコンをカチカチと打ちながら答える水無。なんだかんだ言っただけで、相談にのってあげる優しい奴です。

「最近、神様ですよー。じゃなくて、神様もどきとか人間もどきって言ってるですよ？中間出来てるじゃないですか」

「……いや、それがお前の中間だとしたら、もうどうしようもなくね？」

処置無し。完治するのは難しいでしょう。我々は、最善を尽くしました……。

「じゃあ私にどうしろって言うんですかー！！もうゼミで腫れ物み

たいに扱われるのは嫌ですー!!」

うえーん。って泣く巡。

はあ。ってため息をつく水無。

「じゃあもう、神様なんてやめちまえばいいんじゃないですかー？」

投げやりに根本的な解決方法を提示。

「それは無理です。私の存在価値の大半は神様ですから。お前は価値の大半を捨てると言うのですか？」

腕を組んで、そっぽを向いて、ツーン。な態度。

「いや、そんなに自分を卑下しなくてもいいと思うよ？あんたには神様以外にもいい所がいっぱいさ」

たぶん。

「じゃあ水城水無。私の価値を神様を省いて言ってみるです」

「神様以外の価値？例えば……」

考え中。

「……………」

考え中。

「……………」

一分程度考え中。

「……………どうした、ですか？」

痺れを切らした。

水無は巡から目を逸らし、パソコンを見た。そして。

「……………レポートが、ね？」

水無は考える事をやめた。

「それは……………ないということですか!？」

巡、ちょっと傷つく。私の価値の大半は神様だと思ってたけど、本当は全部神様だったのかー!

「いや、なくはないんだけど……………」

歯切れが悪い水無。

「例えば、例えばね」

「例えば、です?」

「春風巡はいつも元気。それはとても価値がある事です。って、言ったらどうよ」

「神様が元気なくてどうするです」

「ほらあ……」

やっぱりなあ。と、呆れ気味に巡を見る水無。

「何が、ほらあです？ホラーですか？夏の風物詩ですか？」

どういふ事かわからない。と、首を傾げる巡。

「神様目指したから元気なのか。神様目指す前から元気だったのか。その辺がよくわからないから、何を言っても無駄なことだよ」

やれやれ。という感じの水無。

「むむです。ちょっと待つですよ……」

とんちんかんちん考え中。

「神様を目指す前から元気だったとしたら、元気というのは神様抜きで私の価値になるという事だから……えーっと、私が本格的に神様に目覚めたのは中学二年だからですからー」

「……」

中二病お疲れ様です。と、水無は思いました。

「えっとです。確かにその前から私は元気だったですけど、今よりは元気じゃなかったですから、今の元気は神様の価値という事になると思っています……もしそうなら、神様じゃなくなったら、私は元気なくなると思っています……そんな事もない気がするです……いや、今よりは減る気がするです……つまり減った分が神様効果です？……」

むむ……水城水無。よくわかりません。教えるです」

「あなたにわからない事が私にわかるわけがないでしょー？」

そんな事よりレポート書きたい。

「俗っぽい言葉ですけど、なかなかです」

巡はそう言って、鞆から大学ノートを取り出した。

「なにそれ」

社交辞令的に尋ねてみた。

「私が気に入った事や調べた事が書いてある秘密ノートです。別名、神様のメモ帳」

そう言って巡は、ノートの表紙を見せる。そこには極太マジックで荒々しく『神様のメモ帳No.20』と、書かれていた。

「20冊目かよ……」

水無は顔をしかめた。そんなノートが他に19冊もあんのかよ。そこに私の個人情報も書いてあるんだろうな。燃やしたいな。というかこいつ、神様辞める気ねえだろ。などなど、思ったからである。

「神様のメモ帳にするか、ラジエルのメモ帳にするかで悩んだです」

「即ゴミ箱行きの情報ありがとうございました」

「さてと。です」

ノートに『お前が知らない事を私が知るわけない。しかし神様は知ってるです』と書きこみ、それを鞆に仕舞ってから。巡は仕切り直した。

「前フリはこのくらいにして本題に移るです」

「本題はこのくらいにして家路に着くです。の、間違いじゃない？」  
まだなんかあんのかよ。と、うんざり気味の水無。

「これは三途舞歌にも神社神無にも相談出来ない。お前にしか出来ない事です。真剣に頼むですよ」

そう言う巡は確かに真剣。

「私にしか？」

はて。そんな相談事ありえるのだろうか。適当かどうかは置いていて。神無に出来ない相談事なんてないと思うけど。  
水無は怪訝な顔で巡を見る。

「お前は、父親の死をどう処理したです。私はどう、弟の死を処理するべきです。ちょっと相談にのってくれないですか？」



7・1・春風は自由に巡って本題へ(後書き)

後半に続くような続かないような

## 7-2・何かを暴く背徳感、病み付きに

「ゴホゴホゲホゲホー。あー、ちよつと急に風邪引いた、神無にうつされたなー、熱っぽい気もしてきたなー、これは帰らないといけないー、レポートも無理だなー、ましてや誰かの相談なんてとてもじゃないけど聞いてられないなー、というわけで春風巡さんの悩みを一緒に考えてあげたいのは山々ですが私は帰らせていただきます大変申し訳ありません、私も数少ない友人からの相談を受ける事が出来ず大変心苦しいですが万病の元が相手では帰るしかありませんね。では、幸運を祈る」

水無は神速に匹敵する速さで、ノートパソコンを閉じて鞆に仕舞い、机の上に広げていた参考書類等も仕舞って、席を立ち、逃げ出した。その間約三秒。つまり上の台詞を三秒で言い切ったわけだから、神速ってホント速いよねー。

「何で逃げるんですかー!?!」

しかし残念。巡も神速で動いた。さすが神様もどき。水無に縋り付いて逃がさないぜ。

「ええーい、放せー!私に帰るんだー!」

水無は巡を引きずるように前に進む。

「私を見捨てるんですかー!?!」

低身長 of 巡が泣きながら、水無の腰に抱き着いてる姿は、なんといつか、水無が悪者みたいである。周りの目が痛い。

「やかましいわ！！私は面倒事が大嫌いなんだよー！！」

「もしそうだったとしても今はシリアスな感じで黙って聞く場面でしょうがですよー！？」

「そんな空気知らん！！はーなーれーろっ！！」

そして周りの奴ら見てんじゃねえよ！

「ちよつと！ちよつとだけですから！！」

「ちよつとでも面倒だろその相談は！一晩寝ずに考えて、自分で答えを見つけてなさい！！」

さりげなくアドバイスである。

「自分じゃよくわからないから相談してるんじゃないですかー！！」

「お前にわからないお前の事が、所詮他人である私にわかるわけないって、ついさっき言いませんでしたかねえ！？」

「私にわからない私の事が、お前にわかるわけないとしても、二人で話し合えばきっとわかるはずですよ！お前は私の為に私はお前の為に！ほら、水城火無の誕生日とか相談のるですよ！？」

「私の相談とお前の相談の重さが違い過ぎるー！！って……よし、ちよつと落ち着こうじゃないか春風さん」

水無はそう提案した。なぜなら周りの目が痛いから。コソコソ話が

不快。修羅場つていう単語、聞こえてますよー。浮気つていう単語、どういう意味ですかー。そして携帯を向けるのはやめて下さい。許可なく写真を撮るのはマナー違反ですよー。

「お前が逃げないなら、私だってこんな事しないですよ」

全くやれやれだぜ……。というように巡は水無から離れた。解放したのだ。というわけで、水無は逃げ出した。というわけで、それを読んでいた巡は水無の腕を掴んだ。というわけで、二人はあはははーと、笑い合った後、水無が連行される形で元いた場所に戻った。

「で、なんでしたっけ。今日の夕食は何にするかでしたっけ？」

と、言いながらスリープしてたパソコンを叩き起こす水無。

「今日の夕食はハンバーグ弁当ですけど今は関係ないです。水城水無。真面目にお願いするですよ」

「はいはい。不肖水城水無。覚悟を決めて、真面目に相談にのります」

と、言いながら、やる気なさげな敬礼をする水無。

「……………まあいいです」

ホントに真面目にやってくれるんだろうなこいつは。本気なのか冗談なのかを判別しづらい。と、半信半疑だが、このままでは一向に進まない。完全に夏休みに入る前に、この事についてどうにかしたいので、巡は相談を始める事にした。

「お前が指摘した通り、私は弟の死に深く関わってるです」

「私が指摘したのはその可能性だけですけどねー。その辺、間違えないでいただきたい所存。的な感じ」

パソコンカタカタ。

「……………そしてお前は、父親の死に深く関わってる。です」

「そんな設定もあったような、ないような。そんな雰囲気」

パソコンカチカチ。

「……………もっとはつきり言えば、お前と私は加害者です。罰されてはいないですけど」

「私は春風さんに断罪されましたけどねー。あははは、今ではいい思い出。という噂」

資料ぺらぺら。

「……………水城水無。まーじーめーに。お願いするです」

水無の態度に苛立つ巡。指で机を叩いて、真面目に頼むぜアピール。舞歌の真似かもしれない。

「これ以上の真面目さを、私に望まないでくれー」

しかし残念。机タップは水無に効果はないようだ。退屈そうにパソコン画面見てる。そしてたまに、怠そうにキーボードをカチカチと。

「……こういう話題に乗り気になれないのはわかるですけど、もう少し、相談にのる態度を見せてくれです」

ちゃんと話し聞いてくれてるか、不安になるから。

「乗り気になれないってわかってるなら、やめてくれるとありがたいなあ。って、感じいい」

「それは無理です。今のうちに誰かに話さないと、なんだかこう…富士の樹海に行ってみたくなるです」

遠回しである。

「きゃー、神様に私、脅迫されてるー」

水無は巡を小馬鹿にするような笑みを浮かべた。

「別に脅迫なんかしてないです。私は頼んでるんです」

脅迫という言い方は不愉快。

「ここでちゃんと話しを聞かないと、私は夏休み中に自殺する、かも。そしてその話しはあなたにしか出来ないですますよー。これ、脅迫以外の何物でもないからね。三途さん家の舞歌ちゃんに悪影響でも受けたんですかー？ たくもっ…真面目にね、まーじーめに」

水無はため息をついて、パソコンを閉じた。

「私は真面目さは、三分間しか保てないぜ。その辺を考慮して話しておくれ」

そして、ニツコリと、作り笑顔100%。

「……………だからですね。つまり、こう、なんとというか……………まずは、どう気持ちの整理をしたですか？っていうことを、私は聞きたいです」

いざ真面目に相手をすると言われると、なんかやりにくい。

「気持ちの整理ね！。父親が自分のせいで死んだ事についてって事でいいのかな？」

「それ以外に何かあるですか？」

「いや、なくはないと思うけど、春風さんがそういうならそれでいいんじゃない？」

意味深な笑みを浮かべる水無。巡はちょっと動揺。何か、自分は、間違ってる？

「つーかさ、あんたは私の個人情報、一から十まで調べたんだから、その辺はもうわかってんじゃないの？」

巡の動揺なんて気にせず水無は話しを進める。だって三分間しか真面目が保てないんだもの。

「……………私が調べれるのは客観的データだけです。お前の内面までは調べられないですよ。そんな事が出来るのは、本当の神様だけです」

巡はそう言いながら、鞆から大学ノート、別名神様のメモ帳NO.19を取り出した。

「まあ……推測くらいは出来るですけど」

巡はパラパラとノートをめくり、水城水無の項目を見る。

「お前の父親は、お前が小学二年の頃に交通事故で死んでるですね。それ以降は、家族仲は最悪になってるんですが、学校内では特に問題は起こしてないです。しかし中学に入ってから素行が悪くなってるですね。その髪も、中学からとなってるです。それと、中学時代は左手首に包帯を巻いていたですか。思春期に入って色々不安定になったですか？というより、母親が再婚したのがきっかけで、目に見える反抗をしたわけですか。中学入学前後で再婚してるとあるですから、どちらかというところっちは主ですか？」

首を傾げて尋ねる巡。

「いやー、春風さん。思いの外、不快だよ？」

茶髪を弄りながら、引き攣った笑みを浮かべる水無。

そりゃあんだ。ぺらぺらと自分の過去を喋られたら不快でしょ？しかもそれが、ほとんど当たってるならなおさらだ。

「高校に入ってから、素行は変わってないですね」

水無の気持ちを無視する形で、続きを話す巡。昔の血が騒いだのかもしれない。水無達に会う前は、こうやってよく断罪したもんだぜ。



「というより、悪化してるです。深夜徘徊での補導は二回。停学も一回ですか。全くとんだ不良ですね。薬をやっていたという情報はないですが、どうです?」

ちらつと水無を見る。

「神様のメモ帳に書いてないならやってないんじゃないんですか?」

水無は、ほお杖ついて、明後日を見て聞き流す体勢である。なにこれ。取り調べですか?」

「まあ信じてやるです。高校二年の二学期くらいまでは、そんな感じですが、三学期に入ってから、人が変わったように素行がよくなってますね。とはいえ、学業よりバイトに精を出しているというのは、素行がいいと言えるかは微妙ですが」

「生きる為に必死だったからねー」

三分はとっくに過ぎたので、眠っていたパソコンを再起動させる水無。しかし巡はそれに対して何も言わない。どうも、夢中になっているようだ。人の過去を暴くのは、人の不幸より甘くて甘くて美味な味。やめられない、止まらない。他の事なんて、どうでもいい。

「お前の素行がよくなった時期と、水城火無が病院に通い始めた時期が一致してるですね。つまり、水城火無、いや、水城火邪のおかげでお前の素行不良は終わったわけですか」

「最初は火邪って名前はなかったけどねー」

パソコンカチカチ。

「そしてそれ以降は、包帯をやめ、父親の形見である腕時計をつけ始めてるです」

「そういえばそうだったかもねー」

パソコンカチカチ。

「高校三年は特記するべき事はないです。バイトと水城火無の世話をしながら、この大学に受かったのは凄いです」

「褒めていただき、ありがとうございますーす」

パソコンガタガタ。

「そして大学に入ってしばらくしてから、神社神無と付き合い始めた後は、これまた人が変わったように明るくなったという報告があるです」

「……どこからの報告だよ」

「気になるよねー」。

「天使です」

神様モードである。久しぶりの100%神様モードの春風巡である。

「……あー、もう一度言ってみ？」

聞き間違えだと信じたい。

「天使です」

探偵とか水無の元友人とか水無と同じ高校の人とかと、言い換えても可である。というか、言い換えるべきである。

「……」

「大学二年になっても変わらず、主に神社神無と付き合ってるですね」

絶句している水無を尻目に続きを話す巡。

「そして三途舞歌と一悶着があり、そうそう、その一悶着がきっかけで私はお前に目をつけたですよ」

「そうだったのか……」

あれがなければ、私はこんな目にあわなくてもよかったのか。ああ、やり直したい。色々。

「そして私と出会い、水城火無と水城火邪と一緒に住むようになり、今に至る。です」

巡はそう締め括り、ノートを閉じて、満足そうに息をついた。心なしか、肌のツヤがよくなってる気がする。

「めでたし、めでたし……です」

「なに私の真似して終わらせようとしてるんですか！…これからですよ  
本題は！です！」

「ちっ……」

7・2・何かを暴く背徳感は、病み付きに（後書き）

こ、後編へ続く……。

水無達と出会う前は、巡は色々な人に救済と称してこんな事をしていたわけです。怖いねー。いきなり神様と名乗って来たと思ったら、自分の過去をべらべらと語られるわけだからねー。

### 7-3・水城水無の真面目モードVer神がいる時

「で、長々と、楽しそうに、楽しそうに、たーのーしーそーに。私の過去を披露してくれた春風巡さんは、結局何が言いたかったのかな？」

大事な事は三回言わないといけないらしい。

「む……正直すまんかったです。ちよつと、神様の血が騒いだです反省しないとイケないらしい。」

「神様の血って……」

いつの時代の人間だよ。というツッコミは、巡にはしてはいけならしい。

「まあつまり私が何を言いたかったということですね……」

ぺらぺらと。閉じたノートをもう一度開く巡。

「素行が悪かった時は、まだお前は気持ちの整理が出来ていなかったと仮定すると、お前は高校二年以降、気持ちの整理が出来たという事になるですね。その辺を、ちよつと私に詳しく教えてはいただけませんか。という事を言いたかったですよ」

「詳しくと言われてもねー。その時期私、命の危機しか感じてなかったし。あっ、あんたも命の危機でも感じれば、気持ちの整理出来るって事じゃね？私の妹、貸してあげようか？」

いい考えだ。クスクスと笑う水無。

「……真面目にお願いするですよ水城水無」

気付いたらパソコンもまた起動させてるし。

「最初に私の真面目は三分しか持たないと言いいませんでしたかー？」

それなのに調子乗ってぺらぺらと喋ってたのは誰ですかー？

「延長30分を要求するです」

「そいつは高くつくぜ。具体的に言うと、300円くらいのアイスクリームを一つ」

夏はアイスクリームを食べたくなるよね。

「了承したです。というわけで水城水無、真面目になれです」

「了解したです。というわけで水城水無、真面目になります」

真面目になりそうもない感じで、真面目になると宣言した水無。パソコンを閉じて、笑顔を巡に向ける。

「まず、正直言っていていいですか？」

手を挙げて発言許可を取る。

「どござです」

発言を促す。

「あなたの言ってる事、よくわからない」

真顔で正直に言つと、そうなります。

「よくわからないって……何がです？」

何がわからないのか、わからない。

「んー、なんつーかさー……」

髪を掻きながら、どう言つたものかと考える。

「お前が何を悩んでいるかが、よくわからない、のかな？」

「何を悩んでいるかって……だから、弟の死をどう整理するかを悩んでるんです」

「整理つて、なに？」

素朴な疑問である。

「整理は……整理ですよ」

そうとしか答えられません。

「ああ……つまりさあ……なに。あなたは今、整理出来てないわけ？」



「出来てないです」

「何で？」

「何でって……さあ？」

「さあって……」

「そ、そんな目で見られてもそうとしか、答えられないですものです……」

水無に呆れたように見られて、しょんぼりする巡。そんな事言われたって仕方ないじゃないか。わからないものはわからないんだから。

「抽象的過ぎるっていつかさー、あやふやし過ぎっていつかさー」

左手でほお杖をついて、右手で空中にぐるぐると円を描く水無は、喋りながら考えてます。

「前フリ？も、そうだったけどさー。お前の言いたい事が、いまいちわかんないんだよねー」

「1、ごめんなさいです？」

なんとなく謝らなきゃいけない気がしたので、謝りました。

「いや、別に悪い事じゃないから謝る事じゃないと思うけどねー……んー、あー、つまりさー、あんた、どうなりたいわけ？」

くるくるから、指差し確認へ。

「どうなりたいですか？……………神様とかです？」

そういう事かな？

「そういう事じゃない、いや……………そういう事か？神様が。そうか。あんだ、神様になりたいんだもんね」

指パッチンをして、何かわかった様子の水無。

「……………あの、水城水無？」

それに反して、何にもわかってない巡。置いてけぼりって感じである。

「あー、いや、でもなー、違うかなー、いや、でも、多分あってると思うんだけどなー、でもそうだとしたらなー、あれだよなー、私が出る幕じゃ、いや、逆かなー、私が出る幕なのかなー、あー、でもなー、面倒だしなー、神無でも問題ないような気も、いやいや、神無は神無でなー、なんとなく無理そうだよなー、弱いもんなー、いや、この場合は強いのかなー、んー、でもなー」

「み、水城水無ー？」

腕を組んでぶつぶつと、自分の世界に没入している水無。巡は完璧に置いてけぼりである。

「んー、私もあれだしなー、忙しいしなー、面倒だしなー、真面目にやるって言うっても面倒だしなー……………よし、何も気付かなかった

事にして、今日のところは帰る事にしよう」

「いや、ちょっと待てです！！」

ポン。と、手を叩き、そう結論づけた水無に対して、巡はそう言わずにはいられませんよ。

「そんな意味深な態度を取っておいて、それはないですよ！？」

全く持ってその通りである。

「えー？別によくね？新しくね？そういうのも新しくね？」

もう色々と、どうでもよくね？

「よくないです新しくないです！いいから言えですよ！！気付いた事言えですよ！！私はどんな事実でも受け入れるですよ！！だから教えるです教えるですよー！！」

ノートで机を叩き、まるで駄々っ子のように水無に要求する巡。必死なんだね。という事でいいんじゃないですか？

「延長30分したんだから、30分はちゃんとしてくれですよー！！」

「ああ、はいはい。わかりましたよ。全くもう……じゃあいいですよー。喋りますよー。相談にのりますよー」

我が儘子供神様め……。と、思いつつ、水無は渋々口を開く。いや、水無の態度にも問題はあった。というツッコミをする神無は残念な

がらここにはいません。

「不安定なんだっけ？」

あー、気乗りしない。

「え？あぁはいです。不安定です。だからどうにかしたいですよ」  
いまさら何でそんな事聞くんだろう？

「で、なに。弟の死が整理出来たら安定するわけ？」

「……まあ、少なくとも今よりは、です？」

「整理って何だろうって考える」

人差し指で、トンと机を叩く。

「部屋の整理。綺麗にする。取りやすいようにする。いる物といたらない物を分ける。必要な物を残して、不必要な物は捨てる。掃除に似てる。そういえば最近火無は掃除をしている。整理か。私の部屋を、自分の使いやすように。染める。私としては、立つ鳥後を濁さずが望ましい」

「？」

トン、トン、トン。と、机を叩きながらぶつぶつ呟く水無を、不思議そうに見て聞く巡。妹は今、関係ないんじゃないかな？

「気持ちの整理。理由をつける。片付ける。忘れる。忘れるっ？そう、

忘れるのも気持ちの整理の一つじゃないだろうか。と、思うんだけどその辺どう?」

トン。と、机を叩くのをやめ、水無は首を傾げる。

「どつって……そんな間違ってるですよ。忘れるなんて、ただ逃げてるだけです。逃避です。整理しているとは言えないです。そんな事してたら前に進めません」

何を当たり前の事を。

「ほらなあ。やっぱりなあ。そう言うと思ったんだよなあ。春風さんってば、忘れる事を罪とか言ってる断罪する、おちやめな人だもんなあ」

もう、嫌になっちゃう。水無は机に伏せてしまった。パソコンはちゃんと脇に寄せました。

「な、何か間違ってるって言ってますか?」

さつきから水無の言ってる事や、態度が全く理解出来ない巡。わからないというのはとっても不安、不安定。

「いや、間違ってるってわけでもないよ?」

「そ、そうなんですか?」

顔だけ上げて言った水無の言葉を、半信半疑に受け止める巡。さつきの言い方じゃ、間違ってるって言ってるようにしか聞こえなかったから。

「実際さー、忘れるだけじゃダメな時も多々あるし。去年のあんたも、そうだったわけでしょ？」

「む……言われてみれば、です？」

去年の巡は弟の死が自分の責任だと、知らなかった。忘れていたと言いついても問題ない。忘却が気持ちの整理で、気持ちの整理すれば安定するなら、安定してなきゃおかしいじゃん。という、理屈。

「まあ、違う見方で言えば？」

水無は体を起こして、ニツコリと微笑む。

「気持ちの整理が出来た所で、お前が不安定な事は変わらねえって事だね」

「……………それは困るですよ!？」

「いや、困るって言われても……………」

「だってもしそうなら、私ずっとこんな感じですよ!？困りませんか!？」

「いや、まあ、困るかな？」

「ですよねです!？だからその考えはなかった事にしてくれです!」

「……………いや、巡さん?じゃあ、別の方法で安定してみようとかは考

えないわけ？」

「……………そんな方法あるですか!？」

身を乗り出して、あるですか!？」

「いやー、なくはないけどもねー……………」

腕を組んで難しい顔。あまり気乗りしない様子です。

「あるなら言えですよ!！」

「……………あつ、30分経った」

「まだ15分も経ってねえです!！」

「ちっ……………」

7・3・水城水無の真面目モードVer神がいる時(後書き)

こ、後部に続くんだよ……なんかわりいかよ……



## 7・4・究極の二択。という程ではない

「さあ、言うぞー。お前が安定する方法を言うぞー。いいかー。覚悟はいいかー。いや、まだダメだなー。たぶんダメだなー。もう少し時間が必要だなー。いや、でもさっさと言うかなー。いや、でもなー。なんか睡魔さんが来たしなー。先にそっちの相手を」「さっさと言えですよ!..!」

さつきからぐだぐだうだうだしている水無に対して、巡だって、そろそろ苛立ちますよ。

「えー……言わなきゃダメ?」

首を傾げて、本当に?

「ここまで来て言わないという選択はありえねえです!全く……今日のお前はめんどくさいですね。神社神無がないからですか」

「いやいや。お前の相談が面倒だからだよ。神無は一切関係ないって。というか、神無がないからめんどくさいって、どっという理屈だよ……」

「それはですね……」

テキトーな事言っただけじゃねえよ。という意味で水無は言ったのだが、どうも巡には、水無が神無がない時めんどくさい人間になるという考えに至った根拠があるらしい。またもやノートはぺらぺらとめくり始めた。

「待て待て。もういいって。そのノートはもういいって。それよりあんたが安定期に突入する方法を語ろうじゃないか」

それに慌てたのはもちろん水無であった。そのノートに書かれてる情報は何であれ、あまり聞きたくないからだ。過去はあまり思い出したくない。巡風に言えば、水無は過去をあまり考えない事で、安定しているのだから。

「む………そうですか？」

ちよつと名残惜しそうにノートを閉じる巡。ノートの内容を使うのが、本当に好きなんだね。

「じゃあさつさと言えです」

「じゃあずばつと言っていていいですか？」

「望む所です」

「神様なんてやめちまえ」

ニツコリ笑ってバツサリである。

「………もう一度言ってくれです」

聞き間違えかもしれないぜ。

「神様なんてやめちまえ」

真顔でバツサリである。どうも、本気で言っているようだ。

「い、いや……ま、待つですよ水城水無」

あまりにも直球だったので、ちよつと混乱。

「そ、それが出来ないから私はお前に気持ちの整理をするかです  
ね……」

急に喉が渴いてきた。水が、飲みたい。

「出来ないわけないでしょ。あんた、人間なんだから」

はあ。と、呆れ気味にため息をつく水無。

「ま、まあそうですけども……神様じゃなくなったら、私の価値が  
……」

みんなに嫌われちゃうよ。みんな相手にしなくなるよ。神様じゃな  
い私に価値なんて零だよ。

「だーかーらーさー。その考え方がよくわからん。なに？あんたも  
火無みたいに、神様じゃない自分と神様な自分がいるわけ？いない  
でしょ？神様やめるって、ただ、自分が神様じゃないと思えばいい  
だけでしょ？神様だって言わなきゃいいだけでしょ？なに？神様以  
外は人助けしないわけ？違うでしょ？なに？神様以外はボランティア  
アしないわけ？違うでしょ？なに？神様以外は子供に好かれないわ  
け？違うでしょ？もう一度言いますよ？そもそもあなたは神様じゃ  
なくてただの人間なんだから。神様やめた所で、価値が無くなるわ  
けないでしょ？今行ってる事全てがあなたの価値でしょ？違います  
か？神様やめてもあなたはあなたじゃないんですか？それとも神様

やめたら、あなたは子供と遊んだりしたくなるんですか？人が変わったように、嫌な奴になるんですか？」

「……………」

確かに言われた通りだけど。確かにごもつともだけど。それはわかるけど……………。

呆れと苛立ちが混じった水無の言葉。ごもつともな言葉。それを巡は顔を俯かせるだけで、何も言えなかった。

「……………あなたの悩みもわからないでもないよ」

そんな巡を、同情の眼差しで見つめながら、水無は言う。

「神無や……………まあ舞歌も。お前が神様とか言わなくなっても、別に一緒にいてくれるだろうね。まあ、私もお前がめんどくさい事言わないなら、やぶさかでもない。舞歌に関しちゃ、間違いなく。今より仲良くなれるだろうね。それはお前もわかってるでしょ？つまりあれでしょ？子供がどう思うか考えると、神様って言うのが、思うのが、やめられない、怖い。そういう事でしょ？」

「……………です」

巡は小さく肯定した。

「死ねって言ったか今！？」

水無は驚いた。

「別に無理に明るくしなくてもいいですよ……ありがとうございます」

巡は顔を俯かせたまま、ふるふると首を横に振った。気持ちだけは、受け取っておきます。

「ですかー……」

水無は頬をかいた。照れ隠しである。すべった事に関しての照れ隠しである。顔が赤くなってるぜ。

「……水無」

と、巡は俯いたまま、水無の名前を言った。

「お前、月読が私の好きな所を言ったの、覚えてる？」

「あー……」

水無は天井を見上げて、記憶検索。

あの子供と最近会ったのはあの時だろー。という事は多分あの時だよなー。それ以外だったら記憶にないからそこに賭けるしかないよなー。あつ、そういえばあのちびっ子が書いた絵、どうしよう。返事が届いたら見せてねとか言ってたよなー。どうするかなー。面倒だけど、絵、書いておくか。でもなあ、あの絵、意味不明過ぎるかなー。神無ならどうにか出来るかもし「神様って、言ってた」

「……あ、はい。思い出しました」

嘘ではない。今、思い出しました。こいつ覚えてねえなと判断した巡に言われて、今、思い出しました。

「神様って言わなくなったら、月読は私の事、嫌うと思うと……」  
怖くて怖くて仕方がない。

「いや、大丈夫だと思うよ?」

「へ?」

しみりとしている巡とは違い、あつけらかんと、心配事零な感じの水無。

「あのおちびちゃんの言う神様って、今の巡の事言ってるわけだからさ。巡が神様って言わなくなっても?巡が神様って思わなくなっても?問題無し。あははは、凄じゃん巡。あの子にとってはそれでもお前は神様だ。おめでとございまーす」

パチパチと拍手で祝福。

「……馬鹿にしてる、ですか」

涙目なじと目で水無を見る巡。

「まさか。真面目に褒めてるんだよ」

まだ30分経ってないからねー。と、水無は腕時計を見ながら言う。

「まあ確かに?神様と思わないっていうのはなかなか難しいかもしれないけどさ。なんてったって、神様の安定感は異常だからね。神様の都合がいいように出来るんだから、安定しないわけがない」

「……安定感」

「そつ。日本の神様は安定感からは程遠いけども。あんたが目指してる神様は欧米風だもんね。安定してるぜー。恐ろしい安定感だぜー。お前がそれに依存したくなる気持ちもわからんでもない」

水無は、うんうん。と、腕を組んで頷く。

「……依存なんてしてないですよ」

巡は、ゴシゴシと拭ってから顔を上げる。ちよつと元気になって来ました。

「まあ、確かに依存って感じじゃないけど。それで安定感を得てるのは間違いないでしょ?」

「……まあ、ですよ」

否定はしない。

「え?じゃあ神様やめるの逆効果だつて?」

「え、まあ、です」

いや、まあ思っただけども。

「まあ確かに。世の中常に、表があれば裏もある。つまり春風巡には、逆に、人間をやめるっていう選択肢もあるよ?」

神無ならそつちを進めるかもなあ。と、水無は呟いた。

「それは……」

どうなんだろう。

「楽なのはもしかしたら、そつちかもね。好き勝手出来るし。安定感も半端ない。まあ、出来たとしたらだけでも？」

水無は、クスクス。と、挑戦的な笑みを浮かべる。

「……そういう言い方をされると、そつちを選びたくなるです」

巡の心に炎が宿った！

「まあ、どつちを選ぶかはお前次第だからなんとも言えないけども。ようは。あんたが不安定なのは、過去の事とかも関係あるかもしれないけど、今の立ち位置が不安定だからだと思えますよ？人間もどき。神様もどき。不安定だよねえ」

「……それは私も、薄々思ってたです」

「去年のあの時、神様なんてすっぱり辞めておけば、こんな風に悩まなくてもよかったですら……」

「うう……だって、神社神無が、神様でもいいって、言ったんですから……」

呆れ半分、責めてる感じ半分の水無の言葉に、巡はモジモジと反論。自分でも、そう考える事があったから、反論も弱々しい。



「神無ね……まあ、あいつの事は今はいいか」

苦笑い。

「まあ、あれだよね、巡」

「……あれって、何ですか」

「悩みなよ巡。そんなに性急に答えを出そうとしないでさ」

水無はまともに入る。巡に優しい笑みを向けて。

「これを言うのは三回目かな。あんたにわからないあんたの事が、私にわかるわけがない。私が今言った事は、あんただってわかってたはずだよ。気付いていたかは、わからないけどね」

「……です」

「人間を選ぶか、まあ、私的には、というか世間的には？人間の方がいいと思うけど、神様を選ぶとしても。別の選択肢を選ぶとしても。よく悩んで決めないと。後悔するぜ？」

私みたいに。とは、言わないけども。

「ラッキーな事にもうすぐ夏休み。考える時間は山程ある。夏休みいっぱい使って、一人で考えるのもありだと思っよ？」

「……そう、ですか？」

「そうだよ。もしかしてあんた、夏休み前にはどうにかしたいとか思ってたんじゃないだろうね」

「そ、そんな事はあるわけない……です？」

「目を逸らして疑問文。わかりやすい凶星、お疲れ様でーす」

はあ。と、今日一日で何個幸せを逃したかはわからないが、ため息をつく水無。なに生き急いでるんだこいつは。

「死なない程度に悩めばいいんだよ。そういや、誰かが言ってたよね。大学ってのは、高校までで社会に適応出来なかった奴らが来る所。大学の四年間でも無理だったら、大学院。それでもダメだった奴らは学者になるって。巡、あんた就職とか考えてるわけ？」

「真面目には……考えてないです」

神様になるってというのは、真面目とは言えません。

「そういう事も含めて、夏休み、考えれば？死なない程度にさ」

「死なない程度に……」

それが、一番難しいかも。悩んでる間に突発的に……。

「まああれだ……悩んでる間にどうしようもなくなったら……」

水無は言いづらそうに、というより恥はずかしそうに言う。

「メールすれば、うん。暇だったなら、まあ、一緒に悩んでやる気

がしないでもないような……感じ？まあ、その場合、神無の方が適任だとは思っけどね」

「お前……」

なんだかんだ言って優しい水無を見て、巡はこつ言わずにはいられない。

「本当に、いい奴ですね」

「アホ。本当にいい奴ってのは、逃げないで相談にのるし、最初から最後まで真面目にやるし、答えが出るまで相談に付き合っつてやる奴を言うんだよ。神無みたいだねー。とかなんとか言ってる内に、30分経ちましたー」

水無はそう言って、いそいそとパソコンを再起動させ始めました。

「お前……」

まるで照れ隠しのようなその態度を見て、巡はこつ言わずにはいられなかった。

「ツンデレで」「ちげえよ」

水無の脊髄反射ツッコミが炸裂した。

「冗談ですよ、冗談。お前はツンデレではなくて、ただのいい奴です」

巡は笑いながら、そう返すのでした。



7・4・究極の二択。という程ではない（後書き）

もう……続きません……。次はきっと、水無と火無のラブラブ誕生  
日だと、思いますよ……

## 8 - 1 . 太陽が吠える

「お姉ちゃん起きてー!!」

「ぐえつ……!!」

幸せな夢を見ていた気がした水無は、火無に潰されて起こされた。つまり、ベットに寝てたら火無さんが上にダイブして来たんですねー。潰れたカエルみたいな声を出してしまいますよねー。

「お姉ちゃん起きてお姉ちゃん起きてお姉ちゃん起ーきーてー!!」

「じゃあまずは私の上からどけよ!!」

起きろ起きろと言いながら、上に乗ったままほお擦りしてくる火無。水無は安眠を妨害された上に、耳元で喚かれるこの仕打ちを受け、激怒である。

「えー、やだー。お姉ちゃんところしてたーい」

「キモいし暑苦しいわ!!」

火無に抱きしめられそうになった水無は、結構本気で火無をベットからたたき落とした。

たたき落とされた火無は、机の脚に頭をこっつんこ。激痛である。

「お姉ちゃん酷いよー」

涙目である。

「知るかよ馬鹿、自業自得だ……」

水無はぼやきながら体を起こし、ベットの側に置いてあった携帯を手に取る。時刻は午前3時33分。不吉。だから寝よう。水無は夏用布団に包まった。夏用布団は、暑苦しい夜でも快適な睡眠をお約束する優れものです。

「二度寝は禁止ー！」

そして火無は、どんな夜でも快適な睡眠をお邪魔するダメなものです。水無を揺さぶり寝かせない。

「何なんだよもー……」

水無はひとまず二度寝を諦めた。ベットに正座して、寝ぼけ眼でベットから下りた所にいる火無を見下ろしながら「何か私に用ですかー？」と、尋ねる。

「むー！お姉ちゃん！今日が何の日か忘れたの！？」

「今日……？ああ、忘れてないよ。誕生日。おめでとー」

「ありがとうー！」

水無の、パチパチとおざなりの拍手と共に祝福された火無は、ワイイと喜んだ。

「……………で？」

だからどうした？と、こてん。と、首を傾げる水無。そしてそのままあくびを一つ。そしてそのまま目をつむって……「お姉ちゃん！」

「ああ……だから、なに？」寝れませんでした。眠くて眠くて仕方ない。油断すると、すぐ寝てしまいそう。うつらうつらと船を漕ぐ水無を見て、火無は思った。眠そうなお姉ちゃんも、いいな。

いつも寝るのは火無の方が早い。起きるのは水無の方が早い。なので、こんなに眠いのを我慢してる水無を見るのは、初めてかもしれない。レアだ。この水無はレアだ。首をカクンカクンさせて、ハツツてなつて、またカクンカクンさせて……これは。

「カワイイー！！！」

「つたあ！？」

というわけで、火無は水無に飛び掛かった。半分夢に足を突っ込んでいた水無は対応が遅れ、がちり火無に抱き着かれた。そのまま壁に後頭部をぶつけた。鈍い音がした。激痛である。漫画なら星が見えそうだ。

「お姉ちゃん大丈夫？」

「……大丈夫じゃないから離れる」

抱き着いたまま心配する火無に、今度こそ完璧に覚醒した水無は、痛みを堪えながらそう言った。

「お姉ちゃん。お姉ちゃんは昨日私に言った事を覚えてないのかな？」



「昨日？」

渋々離れた火無と、ベットの上で膝を突き合わせて会話する水無。

「明日の誕生日は私の言う事全部聞いてくれるって言ったでしょ！」

もー！忘れたのー！？と、怒る火無。

「いや、明日の誕生日はお前に付き合っただけって言った記憶しかない」

その記憶改竄されてるから。と、訂正する水無。

結局水無は、火無の誕生日はパーティーなどをせず、その日一日火無と遊んであげる。という事にしたのだ。

「付き合っただけは、私の言う事全部聞いてくれるって事でしょ？」

「うん。絶対に違うよ？」

「お姉ちゃんの嘘つきー！！」

火無は水無をポカポカと叩き始めた。

「はいはい、わかったから静かにしようねー。ご近所トラブルはご遠慮したいよー？」

防音はそれなり。しかし完璧ではない。

水無は火無の両手を掴んで防御。バンザイのポーズ。

「むー！」

「で、なに？こんなに早く起きてなんか用なわけ？」

膨れっ面で不満を表す水無を無視して、水無は自分が起こされた理由を尋ねます。

「誕生日が楽しみで早く起きちゃったから、お姉ちゃんも起こしたの！」

悪気零。

「一人で遊んでろよ……」

心からの要望。

「そんなの飽きちゃったもん」

ぷいっつと横を向いて、拗ねたご様子。

「3時に起きちゃったの。テレビもつままないから、しばらくお姉ちゃんの寝顔見たり寝言聞いたりほっぺぷにぷにしたり一緒に寝たり抱き着いたりむにやむにやしたりふにやふにやしたりぐにやぐにやしたりしたけど、飽きちゃったもん。私、お姉ちゃんとお喋りしなくなっただもん」

「あれ？何でだろう？私の肌に鳥が総立ちだぞ？」

私、寝てる間に何されてたー！と、身の危険を久しぶりに思い出した水無は、手を離し、火無から距離を取った。布団で体を守るのも

忘れません。

「お姉ちゃんはおかしい！」

そんな水無に断言する火無。

「私は鏡じゃないぞー」

鏡に向かって言うべき言葉だよ。っていう意味です。

「お姉ちゃんは今日一日、私と付き合ってくれと言いましたね！」

「え、ああ、はい」

「それなのにもう三時間も、お姉ちゃんは私を一人にしました！私  
が我が儘な女だったら、別れ話を始めるところだよ！」

ぶんすかぶんすか。

「うん。色々と言いたい事があるけど、とりあえず。お前は間違  
なく我が儘な女だ」

それだけは間違いない。

「そんな事ないよ？私、お姉ちゃんに携帯を見せるとか言わないし  
勝手にお姉ちゃんの携帯を見たりしないよ？」

平日の日中。火無は、昼ドラとか二時間ドラマとかに夢中です。

「いや、そういう意味じゃ……………やっぱりいや」

水無は火無の更正を最近諦め気味である。

「火無さん火無さん？あなたは今日一日私があなたに付き合つと言つたのに、付き合つてはいないじゃないかと怒ってるようですけど、実は、今日はまだ始まつていないんですよ？」

というわけで、こつちの問題をどうにかする事にしました。

「何言ってるのお姉ちゃん？頭大丈夫？」

「自然に毒吐きやがった！？火邪！？いや、火邪の真似！？」

「お姉ちゃんお姉ちゃん。私、たまにお姉ちゃんが何言ってるかわからないよ……」

水無は激しく動揺した。そんな水無を、本当に心配そうな目で見る火無。さつき頭打った時、おかしくなっちゃったのかな……。

「……こほん……カーテン開けてみ？」

火無の目が痛かったので、水無は心を落ち着かせた。まさか毒を吐かれるとは思わなかったので、ちよつと取り乱してしまつたぜ。

「うん？」

お姉ちゃん本当に大丈夫なのかな？どうしてそんな事しなきゃいけないんだろう？とか思いつつ、火無はベットから下りて、カーテンを開けた。

「お姉ちゃん、カーテン開けたよ？」

「外はどうなってますかー？」

「暗いよー？」

夏の太陽とはいえ、まだ働いていない時間です。

「火無……一日って、いつから始まるんだろうね……」

「お姉ちゃん……？」

なんか水無が、悟ったような眼差しで語り始めた。やっぱりさっき頭を打って……。

「時計の針が、午前零時を指した時から？果たして本当にそうなのだろうか……。今我々が使ってる時間という概念は、グレートブリテンとか標準時子午線とかなんとか……。今の人間が作り出した物じゃないか……。じゃあ、そんな概念がない時代には一日という概念は無かったのか？いや、在った。間違いなく在ったのだ。では、その時代の」「お姉ちゃんもういいよ！！」「ぐえ……！？」

太陽が上がった時に、一日は始まるのだ。というのを回りくどく話していた水無を火無は身をていして止めた。具体的に言うと、フライディング・ボデー・アタック。水無の首に大変なダメージを負わせた。

「お姉ちゃんしっかりして！ごめんね！私が悪かったよ！ゆっくり休んで！もうわかったから！私、わかったから！」

私のせいでお姉ちゃんがおかしくなっちゃったよー！と、涙目になりながら、火無は水無の頭を胸に抱えて撫でる。痛い痛い飛んでいけー！

「え？ああ、はい。そう言ってくれるなら、そうさせてもらいますけども……」

どうして火無がこんなに物分かりがいいかわかっていない水無。

「大丈夫お姉ちゃん？一人で寝れる？一緒に寝てあげようか？」

水無の肩を掴みながら、真剣な眼差しで見つめる火無。子守唄も歌いましょうか？

「いえ、平気ですけども……どしたの？」

火無に促されるままに、ベットに横になり、布団をかけられる水無。

「大丈夫だよお姉ちゃん。どんなになっても、私はずっと一緒だからね？おやすみなさい」

手をぎゅっと握りしめてあげて、聖母の笑み。

「はあ……おやすみなさい？」

よくわからんけど、まあ、いつか。

水無は深く考えるのをやめ、目をつむった。

火無は、水無が寝息を立てるまで、ずっと手を握ってあげました。

こんな感じで、水城火無の誕生日は始まるのでした。

8 - 1 . 太陽が吠える（後書き）

サブタイトルが、思いつかねえ……。

はい。ついに始まりました。水城火無のドキ ドキ誕生日（笑）  
何がドキ ドキって、手が滑って、水城火無『禁断の愛エンド』に、  
なりそうでドキ ドキ。まあ、嘘なんですけどね。

じゃ、またー。



## 8 - 2 ・早起きは30円の得

「お姉ちゃん起きてー!!」

「ぐえつ……!!」

人生とは繰り返しの連続である。

水無の頭を心配して寝かせてあげた優しい火無。そしてその優しさを信じて眠った水無。

火無はしばらくは、大丈夫かなあ。お姉ちゃん平気かなあ。と、水無の寝顔をおとなしく見守っていたが、ふと。そういえばお姉ちゃんっていつもあんな感じだった気がする。と、思っただけなら、さあ大変。凄い音してたから、お姉ちゃんの頭おかしくなった気がしたけど、そんなんでもなかったぜ!と、気付いた火無は、水無を起こしたくなるのはもはや自然の摂理。しかし、だがしかした。太陽が上がる前に起こした所で、先程と何も変わらない。

また、このお姉ちゃんはぐだぐだと私の相手を嫌がるだろう。全く困ったお姉ちゃんだな!。と、思った火無は、水無の寝顔観察からお外の観察に移った。窓に張り付き暗い外を見た。どんどん白んで来る空を見て、まだかなまだかなと太陽を待った。

そんなこんなで一時間後。

「……4時44分」

本日二度目の起床。そして二度目の不吉な数字。今日、私死ぬんじやね?

「お姉ちゃんほら見て！太陽！太陽だよ！？もう今日だよね！ね！」

「ああ、はいはい。そうですね……」

火無に引つ張られて連れて来られたベランダで、水無は遠くに見える東の山から、顔を出し始めた太陽を見た。たまには休んでもいいんだよ？と、思いながら。

「これで、お姉ちゃん付き合ってくれるんだよね！今日はずっと一緒にいてくれるんだよね！今日はデートだよね！」

「デートって……まあ、どうでもいいか……」

太陽を指差しはしゃぐ火無を尻目に、あくびを噛み殺しながら、部屋に戻る水無。「デートく、デートく、デートオ」と、楽しそうに口ずさみながら火無もその後に続く。

水無は部屋を出て洗面所へ向かう。さすがにもう寝る事はできまい。さつき寝れたのも奇跡なのだ。奇跡は連続で起こらないから奇跡なのだ。

パシャパシャと顔を洗ったり軽く寝癖を直したり「お姉ちゃん、私の顔も洗ってー、寝癖直してー」と言ってくる妹をあしらったりした後、水無は部屋に戻った。もちろん火無も、その後ろをついていく。

「布団、片付け」

「はい」

火無が自分の使っていた布団を押し入れにしまっている間に、水無はリモコンを手に取り、テレビをつける。クーラーはまだいいかと

思い、窓を開け網戸を閉め、朝の比較的涼しい空気を仕入れる。パジャマから着替えようかと悩んだが、まだいいかと思ひ、火無が布団を片付けた所に座る。テーブルを元の位置に戻して、頬杖をついて、あくびを一つ。眠い。

「片付けたよー」

「はい、偉い偉い」

火無をおざなりに褒めながら、チャンネルを変える。通販番組ではない番組で固定。

「お姉ちゃん」

「なにさ」

擦り寄って甘えてくる火無が、うっとおしいなあ。と思う水無。

「遊ぼうよー」

「何して?」

この部屋に二人で遊べる娯楽はあまりない。せいぜいトランプくらいか。

「えっとねー……しりとりー!」

「……………いいですよー」

朝早く起こされてやる事が、しりとりってどうなんでしょうか。と、

水無は思ったが、今日はこいつの誕生日だし、付き合っただけでやるかと  
思う、優しい水無。

「リンゴ！」

「ゴリラ！」

「ラッパ！」

「パンナコッター！」

「なんてこった？」

「パ、ン、ナ。コッ、タ」

「？」

頭にハテナマークを浮かべる水無。なにそれ美味しいの？状態です。

「え？知らないの？パンナコッター」

信じられん状態の水無。

「うん。パンの仲間？ナコッタパン？」

「ナコッタパンじゃなくて、パンナコッター」

「ナコッタっていう場所で生まれたパンじゃないの？違うの？カッ  
コイイと思って逆に言ったんじゃないの？」

「逆に言うのがカツコイイというセンスは聞いた事がない」

「パンメロンとかパンカレーとか、カツコイイよ？」

「かつこよくないよ？」

「お姉ちゃん大好き！」

「脈絡がないよ？」

「ねえねえ、パンナコッタってなに？食べれるの？甘い？甘いやつ？」

火無は甘い食べ物が好きという噂です。

「プリンみたいな食べ物だよ。生クリームを大量に使う、イタリアのお菓子だったけかな？」

昔、神無からそんな話を聞いたような、聞かなかったような。

「プリン！」

目を輝かせる火無。

「お姉ちゃん作っ」「無理」

お菓子作りは出来ません。

「じゃあ買って買って！私食べたいー！パンナコッタ食べたいー！」

「はいはい、わかりましたよー」

火無に体を揺すられながら、水無はそう答え、あくびをしました。

とりあえず、火無の誕生日の予定が一つ、決まりました。

8 - 2 ・早起きは30円の得（後書き）

パンナコッタ！

と、聞いた時、私は液状の食べ物想像します。

ナントコウナッタ！

液状のパンナコッタってあつたけ？

また次回！。

### 8・3・ナンテコッタの常識

「お姉ちゃん私お腹空いたよー」

「自分で作れば？」

「お姉ちゃんのご飯がいい！」

「……めんど」

午前八時。

起きてから約二時間。火無がお腹空いたと駄々をこね始めました。火無の相手（話し相手はもちろん、しり取り、トランプ、あんな事やこんな事）をして、すでに疲れ気味の火無は、面倒だなあ。と、テレビを見ながら思った。休日の朝食。作るの面倒。前期の授業が終わった現在、毎日が休日。つまり、毎日朝食作るの面倒。

「ご飯ご飯」

「ん〜、そう言っでご飯が出てくればいいんだけどね〜？」

水無の体を揺さぶってねだってくる火無。揺さぶられながら、さてどうしようかと水無が思っていると、机の上に置いていた携帯が鳴った。軽快なメロディが部屋に響く。

「お姉ちゃん携帯」

「わかってるって」



火無から携帯を受け取り（取り返したても可）、水無は携帯を開く。  
新着Eメールあり。

「誰から？もしかしてお母さん？それともお義父さん？」

「もしそうなら今日は雪だね」

火無のありえない予想に、水無は嘲笑を浮かべながら軽口を返す。  
水無はグループで着信音を変えている。さっきの着信音は、大学だ。  
家族の着信音は、黒電話。今では、ほとんど使われていない、古き  
よき時代の音だ。

休日に大学関係者という事は、まあ恐らく巡かそれ以外だろう。と  
思いながらメールを開くと、神無からだった。驚きだ。

「ねえ、誰から？雪？雪降るの？夏に雪降るの？」と言って、近寄  
ってくる火無をあしらいながら、メールの中身を確認。

『火無さんに誕生日おめでとうって伝えといて下さい。プレゼント  
はあれでお願いします』

絵文字も顔文字もない質素なメール。

「誕生日おめでとう」

わかった。という返信メールを作成しつつ、水無は依頼を遂行。

「ありがとうー！」

お姉ちゃんにお祝いされたー！

「って、神無が伝えてって」

あつ、そういえばあれも聞いたと。と思い、メールの文面を増やし  
ながら、水無はちゃんと伝える。

「ありがたくなーい！！」

あんな奴にお祝いされたー！

「あんなのにお祝いされたくないー！あんなのに誕生日を知られた  
くないー！」

「はいはい、わかったから落ち着いてねー」

ポカポカと叩きながら、携帯を奪おうとする火無を軽くあしらいな  
がら、メール送信。そして携帯をとられないように、後ろに隠す。

「どうして火無は、そんなに神無が嫌いなのかな？」

火無の神無嫌いには呆れるしかない。

「私から見れば、お姉ちゃんがどうしてあんなのと付き合ってるの  
かがわからないよー！！」

呆れちゃうのはこっちだよ！って感じの火無。

「どうしてお姉ちゃんはあるのと一緒にいるのー!？」

「いや、どうしてと言われても……」

特に理由なんてないしなあ。と、水無が困っていると、携帯が鳴っ

た。さすが神無、ナイスタイミング。と思いながら、水無は火無に背を向け、隠れるようにメールチェック。「あんなのメールなんて捨てちゃえー！」と言って、背中に乗ってくる火無を無視してメールチェック。

「あつ、パンナコッタはやっぱイタリアのお菓子だってさ。パンナはイタリア語で生クリーム、コッタは加熱するっていう意味だって。なるほどなー」

さすが神無、物知りだぜー。

「なるほどなー、じゃないよー!!」

感心して油断していた水無の隙をつき、火無は携帯を奪った。

「あ、こら。返せ」

腰に手を当て、仁王立ちでむすつとしている火無に、返却要求。開いたままの携帯が、腰と手に挟まれて大変な事になる前に返しなさい。

「返しません！お姉ちゃん！お姉ちゃんは今日が何の日かわかってませんねー！」

火無は、携帯を持っていない方の手で、水無を指差し怒ってます。

「いや、今日はあなたのお誕生日でしょ？」

わかってますよ？

「そうだよ！誕生日は主役の事しか考えちゃダメなんだよ！？だからお姉ちゃんは今日一日、携帯禁止！だからお姉ちゃんは今日一日、私の事しか考えちゃダメなの！私しか見ちゃダメなの！携帯で誰かと、特にあんな奴とメールなんかもつての他ですよ！」

「はあ……そうだったんですか？」

「そうだよ！常識だよ！？」

「……………はあ、わかりましたよ」

水無はそんな常識初めて知ったが、なんかもう面倒なので、頷いておく事にした。まあ別に、一日携帯置いといても、問題ないだろう。

「お姉ちゃんはお姉ちゃんとしての自覚が足りなくて妹は大変だよ」

姉の役割を教えるのも一苦勞だぜ。というような発言をしながら、火無はメールの返信を打つ。『もうにどとめるしてくるなばか』と、ポチポチと拙い手つきで押して、「お姉ちゃん、送信はどうやるのー？」と聞いて、「没収」されて、「何で!？」と驚いて、「許されると思ってたお前にビツクリ」と呆れられて、火無の誕生日が本格的に始まるうとしていました。

8・3 ナンテロミッタの常識（後書き）

軸がぶれてる

## 8 - 4 ・ 時間と場所といい天気

「……火無」

「なにー？」

「離れてくれない？」

「やだもん。今日は一日こうだもん」

「……はあ、我慢だ私。誕生日だから許してやるんだ私」

水無は今日何度目かわからないため息をつき、その隣では火無が幸せ満点の笑みを浮かべて歩いていました。二人は今、腕を組んで歩いています。その姿はまさに仲良し姉妹！水無の表情がうんざりなのは、きつと照れ隠しだね！

さて、そんな感じな状況説明。

現在9時過ぎ。二人は夏の空の下、道路を歩いていた。今日は比較的涼しいようだ。風も心地よい。休日の朝早くという事で、人通りも交通量も少なく静かだ。絶好の散歩日和である。水無的にはこれで、火無が腕を組んでこなかったら最高の散歩であった。火無は逆に、水無と腕を組んで散歩出来るなんて、最高であるの言うまでもない。

神無からのメール事件の後、水無は朝食をどうするか考える事にした。考えた結果、駅前のファーストフードに行く事にした。朝食作るの面倒だし、そのまま火無をどこかに連れて行ってやろうという

案だ。今日の主役である火無も「私あの甘いハンバーガー食べたい！」と、乗り気だったので、その案で決定した。

決定したら即行動。パジャマで出かけようとする火無の頭を叩いてから、着替えとか色々と外出準備。

水無はパジャマから明るめで動きやすい服装に着替えた。巡からもらったペンダントを装着しようとしたら、「私の誕生日を何だと思ってるー！」とお姫様のご立腹だったので、ペンダントは携帯と一緒にお留守番に決定。何故か今日に限って火無が「その時計もダメー！！」と、言ってきたが、それは無視して腕時計は装着した。

火無もパジャマから、お気に入りの清楚な感じのフレアスカートにお着替え。「避暑に来たお嬢様みたいでしょ？」とは火無のお言葉である。水無は、中身はただの我が儘姫だけどねと思いつつ「そうですねー」と答えておいた。当然の事ながら、巡プレゼンツのペンダントは装備しない。

そんな感じで外出の準備を整えた二人は、一路駅前のファーストフード店に向かったのだ。

そして（水無的には）何故か腕を組む羽目になった事を除けば、至って問題なく進んでいる。

「こつやっってお姉ちゃんと歩くの、久しぶりだねー」

水無の肩に頭を寄せながら、夢見心地なご様子の火無。

「腕を組んで歩くのは、まあきつと久しぶりなんだろうけども、一緒に出かけるのは久しぶりじゃないでしょうか。二日前、近くのスーパーと一緒に買い物に行ったでしょ？」

火無が体を寄せてきて、うっとおしいなあ、もう。と思う水無。し

かし我慢だ。今日はこいつの誕生日だから許してやるう。

「お姉ちゃん。時間は絶対ではないんだよ？主観で時間感覚は変わるんだよ！お姉ちゃんにとってそれは二日前の事でも、私にとってそれは二年前の事なんだよ！？」

「なんだってー」

The 棒読み。

さて、ここで水無達が住んでる場所を説明。

水無達が住んでる場所であり、大学があるこの場所は小町という、文字通り小さな町である。大きなビルが建ち並んでいるわけではないが、建っていないわけではない。畑もある。水無達が今歩いている場所も、畑があつたり民家があつたりと、田舎道に近い。

大学と水無達が住むアパートは、小町の西側に位置しており、畑が多い田舎エリアである。近くに神社もあり、七夕にはお祭りもやっていた。火無が行きたがつていたが、水無はそれどころではなかった。行かなかったが。

駅は東にあり、高い建物も多い都市エリア。日々の買い物ならここまで来なくてもいいが、遊ぶとなるとこの辺に来ないとダメだ。ボーリングやカラオケ、ゲーセンなどなど。電車に15分程度揺られて隣町に行けば、大きなデパートもある。

この町で一番の目玉スポットは、駅前にある町立の図書館。この近辺でもっとも大きく年中無休の24時間営業という、ちょっと不思議な図書館である。

あと、小町の北側には小川という川が流れているので、そこを歩くのもオススメコースである。

「いい天気でよかったね！」



「だねー。それには激しく同意だねー」

はてさて。火無の誕生日。どこへ行くのだろうか。

8 - 4 ・時間と場所といい天気（後書き）

どうしようもない、いや、ホントに、どうしようもない……。。

## 8・5・これからの予定

「お姉ちゃん美味しいね!」

「まあ、たまにはこういうのも悪くないよね」

というわけで、9時30分頃。駅前ファーストフード店。水無と火無は、朝限定ハンバーガーセット(甘いよ)をパクついていた。火無はコーラ、水無はコーヒーを啜りながらむしゃむしゃモグモグです。

「問題はその後どうするかって事だけど」

水無は意味もなくコーヒーを掻き交ぜながら言う。

「どっか行きたいとことかある?」

「えつとねー……」

火無はハッシュポテトを食べながら、考え中。考え中。考え中。

「お姉ちゃんが一緒ならどこでもいいよ!」

「言つと思つたよ……」

水無は頬杖をついて呆れ顔だ。

「あんたの誕生日なんだからさー。なんかやりたい事とか行きたいとことかないわけ?」

私は今日は、たいていの事なら文句を言わずついで行くし、連れてつてあげるぜ。こんなチャンス今日だけだぜ？

「私はこうやってお姉ちゃんにご飯食べたりー、町を歩いたりー、遊んだりするのがやりたい事だもん。それだけで幸せだもん」

「……」

それだけで幸せとは、幸せな奴め。いや、不幸な奴なのか？と、思いながら水無はハンバーガーをモグモグと。

「それにお姉ちゃん。私、この町に何があるかよく知らないよ？」

だからどこ行きたいと言われても。水無は首を傾げる。

「あん？ああ……そういえば、案内した事ないね」

水無がこつちに押しかけてきたのは、去年の12月。それから今まで、この辺を水無に案内した事はない。水無が出歩くのは、近所のコンビニ、スーパーくらいだ。一人で勝手に散策しろよ暇人め。と、水無は思わなくもないが、同時に、こいつが一人で出歩くのって結構危険じゃね？と、思わなくもない。

「冬休みはお引越しの準備とかで、忙しかったしー」

「……ああ、うん。忙しかったよねー」

あまり思い出したくもない。冬休みは、二年ぶりに実家に帰った。水無の荷物やら、水無の事で親と話する必要があったからだ。話すの

は電話でもよかったのだが、電話では埒があかない事もある。二年ぶりに母親と水無は会って話したわけだが、まあ、なんというか。相変わらずだった。

その時あわよくば火無を置いて帰りたいと水無は思っていたが、残念。火邪さんの暴力恐ろしや。

「春休みはお姉ちゃん、色々言っただけ全然遊んでくれなかったしー」

「だって出かけるの面倒だしねー」

出かけるとお金が飛んでいくから。という理由もあるが、あまり外に出さないタイプの水無。春休み、火無の相手をするのは大変でした。火邪さんの暴力、大変でした。春休みはよく、鬼ごっこことかしました。ええ、大変でした。

「だから夏休みはいっぱい遊んでねー」

「んー、じゃあまあ、この後は散策するって事でいつか」

「お姉ちゃん無視しないでよー!」

火無の希望を軽くスルーして、これからの予定をぼんやりと考える水無。

散策。これを期に、火無が一人で出歩く範囲が広がるといいなあ。引きこもりの妹に対して、そんな淡い期待もある。自分も結構な引きこもりだが、それはそれ。これはこれである。

「もー……あつ!」

夏休みも水無が自分とはあまり遊ぶ気はないのを察し、不機嫌そう

にコーラを飲んでいた火無は、いい考えを思いついたというように顔を輝かした。

「地元に戻って遊ぶっていうのもいいと思うよお姉ちゃん！」

この辺はよく知らないけど、あっちなら知らなくもない。今日はあつちで、こちら辺を散策する（遊ぶ）のはまた今度にしたらどうだろう！

「却下」

「むー……わかったよー」

こちらを見る事なくそう言った水無の、取り付く島もない態度に、火無は、いい考えだと思ったのに！。と思いつながらも、諦めた。

「あつ！お姉ちゃんお姉ちゃん！」

「……何ですかー？」

次から次へとなんなんですかー？

「あれ！お祭り！行きたい！」

「祭りい？」

火無が指さした方を見ると、そこには、来週の日曜日、隣の市である胡桃割市でお祭りがありますよー。結構大きなお祭りですよー。というポスターが貼ってあった。

「行きたい行きたいお姉ちゃんとお祭り行きたいー！」

「ここが家じゃないという事、あんたにはわかって欲しい」

お姉ちゃんは妹に、店員さんが迷惑そうに見てる事に気付いて欲しい。

「あれは来週でしょ？今は今日行きたいとこ考えてるの」

わかってる？

水無はコーヒーを飲む。

「でもあれ行きたい！」

わかってるけどあれ行きたい！  
火無は身を乗り出して言う。

「お姉ちゃん絶対行こうね！」

「はいはい、それはまた今度決めましょうねー」

誰が行くかめんどくさい。というのが本音。

「今は早くハンバーガーを食べましょうねー。色々見て回りたいですよ？」

「むー……………絶対だからねー」

乗り気じゃないご様子の水無に不満を抱きつつ、火無はハンバーガーをモグモグするのだった。





8・5・これから（予定）後書き

いーろーいーろーとっ。

おかしな感じだねー。

## 8 - 6 ・移動する店はなんか美味しい

ファーストフード店で、美味しく楽しく朝食を食べた水無と火無。

「じゃあお姉ちゃんレッツゴーだよ！」

「……腕を組むのは基本ですか？」

「基本じゃないよ当然だよ！」

「そつつすかー……」

太陽が働き始め、気温が徐々にながって来た街を散策する事になったわけですが、既に水無は家に帰りたくありません。

休日という事もあり、駅前はそれなりに賑やか。駅を利用して、どこか遠くに遊びに行くご様子の家族。ウインドショッピング中の、親子。近くのカラオケで、これからフィーバーする気の友達グループ。図書館に行き、休日を知的に過ごす気のお一人さん達。休日何それ美味しいの状態なスーツ姿の方々。そして二人で幸せな休日を過ごす気のカップルさん。そんな感じに、中々の賑わい具合なわけですが、その中でも、姉妹で腕を組んでるのは恐らく水無と火無だけでしょう。仲良き事は美しきかな。当事者の水無的には、ただ鬱陶しいだけだが。

「で、お姉ちゃんどこ行く？あっち行く？そっち行く？」

火無は幸せ満面、ああ、久しぶりにお姉ちゃん分をすっかり補給出来てるかもー。と、水無の腕にすりすりほお擦りしちゃう。

「とりあえずまあ、あっち行くか」

「あう！」

調子のるな。という意味を込めて火無の額を軽く叩いてから、水無は駅の東側に向かう事にした。

「うう……お姉ちゃん、何で火無の事すぐ叩くん？」

火無は額をさすりながら、そう嘆いた。ちなみに、先日の映画はホテルがあれで涙なしでは見られないお話でした。

「逆に聞こうかな。何で火無はすぐ私に叩かれるような事をするんだろっ」

「え〜？私、お姉ちゃんに叩かれるような事した事ないよあ？」

猫撫で声でそう言って、またもや二の腕にすりすりと。夏はいいねっ。お姉ちゃんの肌に直接すりすり出来ていいねっ。と、恍惚な火無の額に先程より強めの攻撃が飛んで来たのは言うまでもありません。

「次やったら、腕組みも拒否するからね」

「むー……今日は私の言う事聞いてくれるって言ったのにー」

「何事も限度つてもんがあるんだよ」

「えー」

「えー、じゃないの」

「むー……全く、お姉ちゃんは我が儘さんで妹は困っちゃいます」  
「やれやれだよー。」

「はあ……全く、お姉ちゃんは我が儘さんな妹で困っちゃいます」  
「こっちの台詞ー。」

「ああ、あそこのクレープ美味しいよ」

とことこと散策中。ツタヤの駐車場に移動式クレープ屋さんを見

「食べたい!!」

当然そう言います。食いしん坊魔神の火無さんは。

「いや、朝食食べてからまだ一時間も経ってないでしょうが」  
「太るぞ。」

「お姉ちゃん。甘い物は別腹なんだよ？つまりあれだよ？甘いハン  
バーガーは、私のお腹じゃなくて別の人のお腹に入っちゃったって

事だから、私はお腹ペコペコという事だと思わない？」

だから太るわけがない。

「じゃあ、クレープ食べたところであんたのお腹の足しにならないから、買う意味ないね」

その意味不明な理屈によるとそうなっちゃいますね。

「それはそれでこれはこれなのー！食べたい食べたいー！！」

「はいはい、わかったわかった。クレープ大好き神無ちゃんも大絶賛のクレープだからね。実は私も食べたいと思ってました」

あのクレープ、ホントに美味しいからね。別腹ですよ別腹。別の人の腹にはいかないけど別腹ですよ。

「ぜっつたい食べない！！」

「はあ？」

火無は唐突に意見を変えた。

「あんなのが褒めたクレープは、ぜっつたい美味しくないので、ぜっつつつつつつたい私食べない！！」

ふんっだ！というように、そっぽを向いた火無。

「……………はあ、そつでございますか」

呆れ気味の水無。神無の名前を出したのは、火無の反応を見る為にわざとだったのだが、ここまでの反応をするとは思わなかった。

「じゃあ、私一人で食べよつと」

まあ、そうなるよね。

「ええ！？お姉ちゃん酷いよ！！私も食べたい！！」

酷い裏切りだ！

「あれー？火無さんは絶対に食べないんじゃないのー？」

水無の意地悪モードである。

「むっ、むー……絶対食べないもん」

と、言いつつチラチラと。

「そつ。じゃあ私は一人で食べよつと。チョコバナナにしようかなー。いや、ここはプリンにしようかなー。いやいや、あえてここはお惣菜クレープもいいかもなー」

ニヤニヤと笑いながら、水無はクレープ屋に近づいていく。当然、腕を組んでる火無も一緒だ。

「……お姉ちゃん！」

「ん？なにかな？絶対クレープを食べない火無さん」

「お姉ちゃんがどうしても私にクレープを食べて欲しいなら食べてあげてもいいよ!！」

クレープを食べる為に必死なご様子です。

「いや、別に私はあんたにクレープを」「お姉ちゃんがどうしても私にクレープを食べて欲しいなら食べてあげてもいいよ!！」「いや、だから」「お姉ちゃんがどうしても私にクレープを食べて欲しいなら食べてあげてもいいよ!！」「……食べたいなら素直に」「お姉ちゃんがどうしても私にクレープを食べて欲しいなら食べてあげてもいいよ!！」

「……お姉ちゃんはどうしても火無にクレープを食べて欲しいな」  
何この子。すっごい意地っ張りなんですけど。火無の何がここまで神無に対抗心、対抗心でいいのかは微妙だけど対抗心を抱かせるのだろう。と、水無は思った。

「お姉ちゃんに頼まれちゃったら仕方ないな」。私はホントは絶対にあんなのが褒めたクレープを食べたくないんだけど、仕方ないね。大好きなお姉ちゃんの頼みなら、断れないもんね」

ニコニコ笑顔で、さあ、速く行こうよ!というように水無を引っ張ってクレープ屋を目指す火無。

「ちょっと待ちなつてば。先にこつち」

めんどくさい妹だ。と、水無は苦笑いだ。

「何でー?」

その建物にクレープはないぜ。

「せっかくここまで来たから、DVD借りようと思ってね。あんた  
会員カード持ってる？」

「ううん」

「じゃあついでに作ってくか。なんか見たい映画とかある？」

「お姉ちゃんが見たい映画！」

「つまり、ホラーね」

「お化け出てこないのならいいよ！」

「私はオカルト系がいいんだけどなあ……」

そんな会話をしながら、二人はツタヤに入店するのです。



8 - 6 ・移動する店はなんか美味しい（後書き）

何で石焼き芋、すぐ行ってしまっくん？

今まで一度も捕まえた事はございません！！いつか捕まえて見せるぞ！

はい、そんな感じですよ！

## 8 - 7 小町図書館不思議な図書館

ツタヤで、サスペンスホラーとオカルトホラーのDVDを数本借りて、火無の会員カードを作った二人は、クレープ屋で水無はチョコバナナクレープ、火無はツナサラダクレープを購入し、うまうまと食べながら、散策に戻った。

火無がツナサラダクレープを買った理由は、「あいつがまだ食べた事ないクレープどれ！」と水無に聞いてきたからである。馬鹿め。神無に食べた事がないクレープがあるわけないだろ。という事実を言うとまた面倒なので、水無がなんとなく「ツナサラダクレープ」と答えたので、火無はツナサラダクレープをモグモグする事になったのだ。まあ、美味しいからいいよね。

その後、ゲームセンターに行き、UFOキャッチーに貯金したり、エアホッケーで水無が命の危機を感じたり、ゾンビを火無がケタケタ笑いながらぶち殺したり、火無のリズム感覚のなさに水無が驚いたり、プリクラで火無が無邪気にはしゃぎ水無が辟易したりして。

そんなこんなで12時前後。二人はとある大きな建物前にいました。

「お姉ちゃんここなにー？」

右手には水無、左手には二千円程度貢いで手に入れた八チミツ大好きなクマのぬいぐるみを持った火無がそう聞きました。

「そこに書いてあるでしょ？」

疲れ気味の水無は、石に掘られたこの建物の名前を指さしました。

「んー……………小町町立小町図書館！」

「うん。あのね火無。そんな風に、私読めたよ褒めて褒めてみたいに見てもね。褒めないから。読めて当然だから。あなたは今日でいくつになっただんでしたっけ？」

「みじゆきひにゃ、じゅうきゆうちやいになりまちたー！」

「うん。正解だけど、間違ってる。いや、間違ってるけど、正解なのか？」

はい、そんな訳で二人は小町図書館にやって来ました。四階建ての、綺麗で大きな図書館です。

ここに来た理由は二つ、いや、三つ。

一つは、火無の利用カードを作る事。これにより昼間ずっと家に籠ってテレビを見ている火無が、図書館行って学を深める事が出来るようになるのだ。舞歌みたいにずっと図書館にいてくれてもいいぞと、水無はちよっと思ってるのだ。

二つ目は、休憩目的。水無はもうしんどいです。火無はそれに対してまだまだ元気がいっぱい。もしかして、吸われてるのかもしれない。その可能性は高い。

三つ目は、夏の太陽が本気出し始めたので避難したくなったから。

「ああ、涼しいー……」

「広い」

というわけで、自動ドアを抜け図書館に。天国には必要不可欠だぜ。クーラーって奴は。

小町図書館一階には、貸し出しカウンターの他に、変なモニュメント、多目的ホール、テレビが置いてありソファアが設置されている

憩いの場、飲食可能エリアなどがある。

二階は、絵本やビデオや漫画、子供が遊べるエリアがあるため、親子連れが多く、奥様方のたまり場になっている。オムツを変える場所なども用意されている親切設計です。

三階は普通に本棚たくさん。四階にも三階同様本棚たくさんだが、学習机もあるので、静かに勉強したい人は是非ここへ。

「ほら、行くよ」

「待ってお姉ちゃん。驚きの鑑定結果知りたくない？」

「あれは偽物間違いない。はい、行くよー」

テレビっ子の火無を引っ張り、水無はカウンターへ向かう。第一目的を達成する為だ。

「すみません。この子の図書カードを作りたいんですけど」

「はい、でしたら、この紙にご記入をお願いします」

司書（三十路未婚お酒大好き）さんは、カウンターから紙とボールペンを取り出し、水無に渡した。

「わかりました。ほら、火無。自分で書きなさい」

「えー。何でー？私、別に図書カードなんていらさないもん。本、あんまり好きじゃないもん。お姉ちゃん大好きだもん」

「本があんまり好きじゃないならこれから好きになりなさい。書くまで腕組み禁止」

水無はそう言って、腕を外した。なんてこった。

「お姉ちゃん酷いよ！」

当然火無は水無の腕を捕獲しようとする。

「ダーメ。ほら、早く書く。住所はこれ。電話番号はこれ。名前は水城火無。ツタヤの時は一緒にやってあげたんだから、ここは一人でやんなさい。じゅうきゆうちゃいになったんでしょ？書き終わったらこの人に渡して指示を聞く。私はあっちにいるから」

火無の魔の手を避け、どこからともなく住所と自分の携帯番号が書かれた紙を取り出しカウンターに置いた。そして苦笑している司書（先日お酒を浴びるほど飲みました）さんに、ご迷惑おかけしますという意味をこめ頭を下げ、火無にひらひら手を振った。

「そんな！お姉ちゃん待つてよ行かないでよ一人にしないでよー！」

「ついて来るな！！ついて来ても無視するからな！書き終わるまで私とお前は赤の他人だ！」

ついて来ようとする火無にそう言い放ち、水無は飲食エリアに向かった。そこには自動販売機があるのだ。

「うう………そんなぁ………お姉ちゃん酷いよー………お姉ちゃんはお姉ちゃん、私には妹なのに赤の他人じゃないのにー………」

水無のまさかの裏切りを受け、火無は悲しい。

「お姉ちゃん、私の事、嫌いになっちゃたのかな……」

「そ、そんなわけないと思いますよ？ほら、カワイイ子には旅をさせると言いますし、獅子は子供を突き落とすといいますから。だから早く書いてお姉さんのところ行く？ね？」

今にも泣き出してしまいそうな火無を見て、司書（先日五年付き合った彼氏に結婚とかどうと言ったら別れを告げられました）さんは慰めた。

「うう……変なおばさんに言われるまでもないもん。早く書いてお姉ちゃんのとこ行くもん。一人で出来るもん。火邪なんて知らないもん」

涙を拭いて、火無はボールペンを手に取った。

「おばっ……み、水城さんでしたっけ？わ、私はまだお姉さんよ？」

司書（同僚には二十八と言ってます）さんは、頬を引き攣らせながら、おばさんがよく言う事を言った。

「軽々しく話しかけないで下さいおばさん。私は今集中してるんだから邪魔しないで下さいおばさん」

「……」

このガキがー！と、はらわた煮え繰り返っている司書（先月弟が結婚して焦ってます）さんは、引き攣った笑みを浮かべながら、火無が書いた記入用紙のチェックは、とつても厳しく時間をかけてしやろうと決めました。



## 8 - 7 小町図書館不思議な図書館（後書き）

つーわけで、小町図書館。図書館と言えばあの人。

そう、やはり司書さんが重要ですよね。

どうもこの司書さんは、性格に難がある気がしますね。結婚願望は強いみたいですけど、はてさて。彼女が結婚出来る日は来るのだから。 とうか。 とうご期待。

次回には続かない。



## 8 - 8 ・ 悩みはいつも先のこと。想いはいつも過去のこと

水無は飲食可能エリアの前まで来たところで振り返った。

火無は追いかけては来ていない。こちらを呆然といった様子で見ている。遠いが恐らく、捨てられた子犬のような目をしているだろう。いきなりで、ちょっと可哀相だったか。

今日くらいは甘えさせてもよかったかもしれない。と、水無は一瞬思ったが、いや、あのくらいなんでもないだろうと思いつき直し、飲食可能エリアに入った。

飲食可能エリア中央には六人がけのテーブルが三つ並んでいる。複数の親子がそこで楽しそうに昼食を食べている。他にも友人同士やお一人様がちらほらと。

「……………」

水無は壁際に並んでる自動販売機の中で、カップのタイプを選んだ。アイスカフェオレが美味しそうでした。

出来上がるまでの間、ぼんやり思う事は火無の事。

あんな酷い事（火無的には）されたのに、火無は出てこない。これはやっぱりどうやら、小康状態になったらしい。

小康状態。火邪が出てこなくておかしいなあ。と水無は思っていたのだが、実はおかしくないのではないかという可能性を、水無は思い出した。

思い出したのは巡に。べらべらと昔の話をされたからなのだが、巡に感謝する気は水無にはさらさらない。

「ふう……………」

出来上がったカフェオレを持って、水無は中央のテーブルではなく、

壁際に並んでいる一人掛けのソファに座って一息ついた。肩も回す。疲れた。もう半日頑張らないといけないと思うと、ため息しか出ない。

四年前。火邪が現れた当初は、水無は散々の目にあつた。腕の骨を折られたり、包丁持って追いかけられたりと、本当に、大変でした。しかししばらく経つと、火邪はあまり出てこなくなつた。それも今思うと、このくらいの時期だつた気がする。火邪が出てこなくなつて、火無はもう大丈夫そう。あまり自分に縋られても困る。等々思い、心置きなく水無は一人暮らしをする事が出来たわけなのだが。今回も恐らく同様だろう。と、水無は思うことにした。よくよく考えれば火邪は火無の我が儘と暴力の化身みたいなもんだし、火無自身でそれが出来るようになったら出現頻度が少なくなるのは道理。道理か？

まあ結局は、神無の言った通り消えるのが当然つーことだよなあ。四年前とは違って、火邪が私以外に懐いてたから、火邪と火無は別物と思つちまつた私が間違つてたということか。

そして問題はやっぱり、これからの事。

「水無さん、ですよね？」

水無がこれからどうするかと、アイスカフェオレを飲みながら、ぼんやりと考えていると、声をかけられた。

「ありや。舞歌じゃん。いつからそこに？」

いつからそこにいたのか。水無の前に舞歌が立っていた。ジーンズにTシャツという、ちよつとそのコンビニまでという感じのラフ

な格好で、手にはコンビニ二袋。コンビニ二袋はすでにゴミ袋になっているところを見ると、昼食を食べ終わり、ここからどこかへ行こうかと思っただけなら水無らしき人物を見つけて声をかけ、今に至るといふ感じだろう。

「ついさっきですよ」

舞歌は隣のソファに座り言う。

「全然気付かないので、もしかしてただのそっくりさんかと思いましたが。こんなところで何してるんですか？」

「ああ、まあ。妹の付き添いみたいなもんかな。で、休憩中。舞歌はあれ？本読みに来たわけ？」

「本を読みに来たというより、図書館に来ただけです。私、図書館は好きですけど、本はあまり好きじゃないですから」

読む量は一日平均10ページ。滞在時間は8時間近く。

「つまり図書館の雰囲気味わいに来たわけね。まあ、わからなくもない」

本棚の間を歩いたり、図書館特有の静けさとか。素敵。

「それで……」

舞歌はキョロキョロと見回してから言う。

「妹さんは？」

付き添いとか言ってた癖に近くにはいない。脳内妹？

「今あつちで図書カード作ってるはずだよ。なに？興味あんの？」

興味あんならあげようか。プレゼントしようか。今なら八チミツ大好きくまさんぬいぐるみもついて来て送料もかかりません。

「いえ、別に興味ないですけど……ただまあ、私だけ一度も会ってませんか……」

そう言っつて舞歌は、拗ねたようにそっぽを向いた。

「いや、なに……仲間外れにされた気分なわけ？ひそかに気にしてたわけ？」

言われてみれば、舞歌だけ火無に会った事はないが……拗ねる事じゃないし、羨ましがる事でもないだろ。

「まさか！全然そんな事思っつてませんよ！？私は妹なんかは一切興味ないですよ！？というかもうあれですよ！？世界中の妹なんていなくなれっつて思っつてるくらい妹なんかに興味ないですからね！？」

「それはもう興味ないっつていうレベルの思いじゃねえよ……」

慌てて否定する舞歌に呆れた感じでツツコミを入れる水無。

「っつていつか、世界中の妹がいなくなったら、神無も消えるんだけど」

「神社さん以外の妹全員です！」

「つまり神無が世界で唯一の妹になるんですねー」

意味わからんわー。

「水無さんの妹さんは、二重人格なんですよ？私は二重人格という奴に興味があるんですよ。一度会ってみたいと思ってたんですよ。妹さんじゃなくて、二重人格者に興味があつて会いたいです。別に、あの馬鹿が妹さんの話をしてたから興味があつたわけじゃないません」

「はいはいそうですかー」

水無は苦笑い。巡とはまた違ったためんどくささが舞歌にはある。

「しかしそれなら残念だったね。今の妹は、二重人格じゃないよ」

「治ったんですか？」

「んー、治ったっていうか……落ち着いて来てるっていうか……沈静状態かな？家の妹は、二重人格もどきだからね。完治したかわかりづらい。そもそも本当に病気なのかさえよくわからない。まあ、心の病全般そんな感じがするけどねー」

そう言つて水無は氷をガリガリと。

「もどきなんですか？」

「うん。もどき。本物に近いもどき。嘘から出た誠。そんな感じ」

「そうだったんですか。期待外れですね」

「期待外れ？」

「ええ。二重人格もどきなら別に………別に何ですか？」

舞歌は、天井を見たまま固まったと思ったら、急に水無を睨んだ。

「いや、私に聞かれても困る。急に不機嫌になられるのはもっと困る。なに、どうしたの？」

「別にどうもしてませんよ。用がないならもう行きます。よい夏休みを」

そう言って舞歌は立ち去ってしまった。

「……………情緒不安定ってレベルじゃねえ」

舞歌の後ろ姿を見ながら、水無はそう、呟くのでした。

「あー……やべ」

舞歌が去った後、水無はアイスカフェオレを啜り、氷を砕き、これからの事をぼんやり考えていた。しかしこちらにやってくる火無を見て、未来の事ではなく現在の事を考えなければいけないと悟った。こちらに歩いて来ている火無は、見るからに怒っていた。犬がいたら間違いない吠えただろう。猫がいたら間違いない威嚇しただろう。人間ぐらいだ。遠巻きに眺めるなんて選択するのは。

「やつほー………」

水無は試しに手を振ってみた。火無は手を振り返えさず、歩みを早めた。

どンドン近づいてくる火無。足音がしないのが不思議というくらい力強く歩みを進めてくる。逃げるなんて出来るわけもなく。水無は引き攣った笑みを浮かべながら、ソファーで待つ。

「ひ、火無さん？」

声が聞こえるくらいの距離に来た火無の名を呼ぶが火無は無視。膨れっ面のまま水無に近づき、近づき、近づき、そして。

「お姉ちゃんのバカーー!!」

火無は図書館中に響いたのではないかというくらい声をあげながら、水無にダイブ。





供。「若いわ……」と、何かを思い出し出してる母親。「図書館では静かにしないとダメなんですけど……」と、先程の大声でかけつけようと思っただけどちよつとあの二人に近づくの無理っぽくないかなこれと思つて、でも一応仕事だからという事で二人に聞こえない距離で注意する司書（既婚女性）さん。「全く最近のわけえやつは」と、社会に憤っている老人。図書館は今日も盛況です。

「お姉ちゃん反省の色なし！」

リスのように頬を膨らませて火無は指摘。

「だって私悪い事してないし」

反省する理由がありません。という水無の態度は火無の頬をさらに膨らませる。まるで河豚のようだ。

「お姉ちゃんは私を一人にしました！」

これを悪いと言わずなんという！

「人は皆、生まれた瞬間一人になるのさ……」

黄昏れてみました！

「意味わかんないー！謝って謝って反省してー！お姉ちゃんが悪かったこれからはずっと一緒に言っつてよー！！」

「痛いやめろ下りろー！」

火無は水無の上でびよんびよん跳ねて謝罪と賠償を要求。

「お母さん私もあれやりたいー」と、何か勘違いしてる子供。「後でねー」と、テキトーに流す母親。「あのー……公共の場なんですけどー……」と、聞こえない距離で弱々しく注意する司書（引つ込み思案）さん。「ったくほんと最近のわけえ奴らは」と、とりあえず言いたい老人。二人は注目的です。

「だー！もう！たかが図書カードを一人で作らせただけで何で私はこんなに痛いめを見なきゃいかんだ！お前いくつだ！しゃんしゃいか！一人で出来ないもんか！」

火無のぴよんぴよんを止め、水無は怒っちゃう。

「じゅうきゆうちゃいだもん！でもいくつになっても私はお姉ちゃんの妹で、いくつになってもお姉ちゃんは私のお姉ちゃんなのは変わらないのー！！」

「変わらないからどうしたー！」

「お姉ちゃんは妹を大事にして大切にせずと一緒にいるのが世界の常識なのー！！」

「そんな常識はどぶに捨てろって言ったはずだろうがー！！」

「お姉ちゃん大好き！！」

「脈絡を学べ！」

「お姉ちゃん好き」

「ぎゃー！離れろー！」

火無は水無に抱き着いた！なんかもうこういう流れでしか收拾つかなくなつたのは内緒だ！

「充電中」

お姉ちゃんの体温ー。お姉ちゃんの匂いー。お姉ちゃんの肌ー。お姉ちゃんの汗ー。

「な、舐めるなキモい……み、耳はやめ……」

ち、力が抜けて力が出ない……あ。当たり前か。

「あ、あのー……ここは公共の場なのでー……」

そんな二人に意を決して話しかけた司書（新米）さん。

「邪魔するなら殺す」

火無は蕩けながら殺害予告。

「へ、へるぶ……」

力が入らないんですけど。これマジでなんか吸われてませんか。このままじゃやばいんじゃないんですか。

そんな二人に司書（先輩の酒癖の悪さには困ってます）さんは、どうすればいいかオロオロと。

「すみませんが、公共の場でそういうハレンチな事は遠慮していただけませんか」

そこに現れた司書（さっきの人）さん。

「あつ！！また邪魔に来たのおばさん！！あつち行け！」

火無は司書（根に持つ方）さんに敵意を剥き出しにした。水無の上  
に乗りながら、シャー！と威嚇する。

「マジ……しんどい」

その下で水無は脱力の極み。汗以外にも色々吸われた。気力とか吸  
われた。

「お、おばさんってこのガキ……ご、ごほん。水城火無さんでした  
っけ？さっき書いてもらった書類に不備がありましたので書き直し  
てもらってもいいですか？ほらここ。『無』の点が一つ足りないで  
しょ？」

「むー……」

司書（酒乱）さんが取り出した紙を見ると、確かに烈火の点が一つ  
足りない。

「あちらでーからまた書いてもらえますか？」

「何で！？ここにちよつと書けばいいだけじゃん！！」

「そついつ規則なので」

「え……そんな厳密な規則な」「規則。なので」「はう……」

司書（酒に弱いので飲み会とか大変）さんの言葉を司書（飲み会とか大好き）さんが、ニツコリ笑って潰しました。

「むー！お姉ちゃん私こいつ嫌い！読みにくいか字が汚いか紙破けたとか言つて何枚も何枚も何枚も私に書かせるんだよー！おばさんのくせにお姉さんと呼びなさいとか意味わかんないこと言うし！お姉ちゃん助けてよー！」

火無は水無に助けを求めた。

「あー、無理無理無理無理、私無理。すっげえ怠い。あんたマジでエナジードレイン？」

水無は疲れ果てていた。

「さ、こちらにどうぞ」

司書（後輩を飲み会に誘うのが好き）さんは火無の手を取りカウンターに拉致しようとした。そして二度とおばさんとは言えないよう教育しようとした。

「触らないで気持ち悪い！おばさんがあっち行かないなら私があっち行く！行くっ！お姉ちゃん！」

「今の状態で直射日光は死ねる……お騒がせしましたー」

火無は水無の手を掴みずんずん歩き、出口に向かった。

「逃げられたか……次来た時は、絶対お姉さんと呼ばせて見せるわ

……」

「……」

司書（今日はもうそろそろお暇させていただきます……と言って飲み会から抜け出そうとすると、先輩に所詮女の友情はそんなもんか。愛には勝てないのか。そんなに脆いもんだったのか。と泣き付かれて帰るに帰れなくなる）さんは、そんな事を爪を噛みながら言う司書（先輩が結婚していてマジ羨ましくて妬ましい）さんを見て思った。

この人……結婚出来ないだろうなあ。

8 - 9 ・ 図書館の主役（後書き）

あ、姉妹のスキんシップの範囲だよ。汗舐めるって。え？違う？  
まさかあ……え？

なんか色々めっちゃめっちゃな結果、司書さんが最後にまとめてくれる  
という事になりました。

図書館だから、いいよね。

「あちい……太陽があちい……アスファルトの反射とかがあちい……人肌があちい……クーラーが恋しい」

昼過ぎに本気出す太陽は怠け者。本気出す太陽に当てられて本気出すアスファルトは優柔不断野郎。腕を組んで引っ付いてくるのは我が儘妹。

「お姉ちゃんもつとしゃんとして！！だーらーけーなーいーでっ！」  
こんな暑さに負けないで！と、暑さに強い火無さんはプンスカプンスカ。

「大声出すなよ……暑苦しいなあ……」

図書館出ても機嫌は斜め上かよー。と、暑さに弱い水無さんはグツグツグツ。

「もー！お姉ちゃんそこになおって！」

火無は水無から離れ腕を組んで仁王立ち。

「そこってどこよ、なおれってどういう意味よ」

ちなみに現在二人は図書館駐車場。ここで正座とか無理じゃん危険じゃんあちいじゃん。

「口答え禁止ー！！いいから私の話を聞けばいいのー！！」



地団駄地団駄。駄々っ子駄々っ子。

「はいはいわかりましたよお嬢様……あっちの木陰で話そうね」

こっちのここは暑苦しい。あっちの木陰は涼しいぞ。セミがやかましそうだけど。暑さよりは我慢出来るぜ。

「ダメ！今！ここで！お姉ちゃんは私とお喋りしないといけないの！あつ！お姉ちゃん待つてよ！走って逃げるなんて酷いよ！怒るよ！待つてよー！」

「あはははー、捕まえてみーろ……はあ、あちい」

図書館の脇には芝生が植えてあつたり、木なんかもあつたり、ベンチとかもあつたり、蛇口を捻り過ぎると雨となつて襲つてくる水飲み場があつたりと、つまりまあ、休憩スペースがあるのだった。もう少しちゃんと説明すると、今ここはセミに占領されていて鳴き声つてレベルじゃねえぞつて感じなので、聴覚以外を休憩するスペースになつているのだ。

そんな感じのスペースに数あるベンチのうち、水無と火無は木陰になつているところに隣同士仲良く座つたのだ。涼しいのだ。この涼しさで火無の機嫌もクールにダウンしてくればよかつたのだが、どうやら火無はセミの鳴き声にフィーチャリングして機嫌が絶好調の

ようだ。ニユアンスパワー。

「お姉ちゃん！お姉ちゃんいいですか!？」

説教する気満々。

「どござどござ」

聞き流す気満々。図書館の窓を見て、舞歌が偶然見てたりしてなあ。あいついつも窓際にいるし。とか思ってた。

「今日がどんな日かお姉ちゃんはわかってますか!」

「んー、わかってるよ?」

「言ってみて!」

「暑い日」

「怒ってるよー!」

「知ってるよー」

「今日は私の、たーんーじょーうーびー!」

ポカポカポカポカ。温かかって意味じゃないよ?

「知ってるよー」

ああ、喉渴いたなあ。

「知ってるのにその態度はおかしいでしょ！！お姉ちゃんは今日私に付き合ってくれるって言ったでしょ！！」

「言ったよ。だから今ここにいるんじゃない」

その約束なきやこんな暑い日に外なんざ出歩かない。

「付き合うつていうのは一緒にいるだけじゃダメなのー！一緒に座ってるだけじゃダメなのー！」

「腕も組んであげたし、一緒に朝食も食べたし、クレープも食べたし、一緒にDVDも選んだじゃん」

十分過ぎじゃね？

「そこまではよかったけど図書館で私を置いてけぼりにしたでしょ！！！！」

それで帳消しなのー！！

「いや、だから別にあのくらいいいじゃん……」

30分も離れてませんでしたよ？15分くらいかな？

「お姉ちゃんは、ぜんつつっぜんわかってない！！」

力強く首を横に振っちゃう。

「はぁ……わかってませんか？」

「そうなのわかってないの！今日は私の誕生日なの！一緒にいないとダメなの！一分も一秒も私の側から離れちゃいけないの！そういう日ーなーのー！！」

「……………」

大声を上げ、手足をバタバタさせる火無を見て水無は思った。元氣だなー。

「誕生日なんだもん誕生日なんだもん！一生に一度しかない十九才の誕生日なんだもん！大切な日なんだもん！誕生を祝ってもらえる日なんだもん！大切な人に育ってくれてありがとう生きててありがとうって言ってもらえる日なんだもん！とつてもとつても大切な日なんだもん！それをどうしてお姉ちゃんはわかってくれないの！？」

「……………泣くことはないだろー」

何か良いことを泣きながら訴えているが、残念。彼女は短時間一人ぼっちにしただけで怒っているのです。図書カードを一人で作りなさいと言われただけでご立腹なのです。水無の心にわく感情は、反省ではなく呆れである。

「お姉ちゃんは私がどれだけ今日を楽しみにしてたかわからないの！？」

「他人の気持ち完全に理解するなんて所詮ふかの」「お姉ちゃん真面目にー！！」

「……………すいません」

黄昏れよつとしたら怒られました。ちょっと反省。

「いや、まあ、ぶつちやけあれだ。誕生日って、そんなに大切な  
?」

この前の誕生日はまあ楽しかったけども。大切って感じではない。

「寿命に近づくだけじゃん」

「歯を食いしばるべきー!」

「ぐはっ……!」

水無は火無のお友達パンチをくらった。お友達パンチとは親指を外  
ではなく内にしまったグーで殴るパンチの俗称であるという噂です。

「な、何すんだお前……殴ることないだろ……」

お友達パンチというカワイイ名前でも、痛いものは痛い。

「愛故あいゆえにだよ!愛故に私はお姉ちゃんの間違った考えを直す為に殴  
ったんだよ!私はお姉ちゃんを愛してるから調教しなোস義務があ  
るんだよ!ドラマでそう言ったもん!調教は愛の形!!私もお姉  
ちゃんを調教するんだもん!!」

そう言ってまた拳を振り上げる火無。調教してやる!

「何を言ってるんですかこの妹!?!」

「あうー!!」

火無の愛ある拳が炸裂する前に、変なこと観察学習してんじゃねえよ!という想いをこめた水無のチョップが火無の脳天に炸裂した。

「調教調教言つなバカが!怖いわ!変なドラマ見るんじゃありません!悪影響がある映像は規制するべきかー!!」

火無の脳天にどんどん炸裂する愛なきチョップ。これは調教ではない。教育である。愛なき教育。あるのは身の危険である。

「うう……お姉ちゃんお姉ちゃん、そういう映像を見るとふらすとれーしょんとかが発散されるんだよ?」

チョップを食らいながら火無、反論。

「たまに頭良いこと言うんじゃありません!というかお前発散出来てねえじゃん!欲求不満をそれで我慢出来てねえじゃん!行動に移しちゃってるじゃん!!さらに言えばお前にはすでにそういう機能を備えた設定があるだろぅがー!!」

加速するチョップ。しかしちゃんと手加減している水無はいい子です。

「うう……火邪なんて知らないもん」

頭を手で守りながら火無は呻いた。そんなに嫌じゃないので、ガードするだけー。あんまり痛くないしね。

「知ってるじゃねえかー!って……知ってるじゃないか」

「ん？」

水無のチヨップが止まる。不思議そうに火無を見る。火無は首を傾げる。

「今、なんつったお前？」

「ん？」

「違う。火邪って言った？」

「うん」

「私、火邪なんて言った？」

「ううん」

「私、お前の欲求不満を解消する機能って言ったよね？」

「うん」

「それで火邪を知らない？」

「うん」

「なんで『火邪』っていう名前が出てくる？」

「ん？お姉ちゃんが何を言いたいか私よく……あっ」

火無は、やつちまったという表情になって慌てて横を向いた。

「おいこら目を逸らすな」

そんなの許さないというわけで、水無は火無の顔を両手で挟んでこつちを向かせた。火無は「むぎゅー」と鳴いた。しかし水無の目は鋭いままで和まない。攻守交代。

「私の記憶が確かなら、お前は火邪を知らないはずだよな」

水無は火無の目を覗きこみながら問う。

「か、かやにやんてしらにやいよ?」

「目が大海原を泳いでる」

「き、きによせいだよ」

「自分の中に火邪がいるって知ってるってことは、お前、自分が二重人格って知ってたのか」

「に、にじゅうじんかくってにやに?」

「いや、まあ、おかしいなあとは思ってたよ?普通気付くもんだもんな。おかしいなと思うよな。記憶の断絶とかあるわけだし。精神病院に一緒に行った時もあまり理由聞かないし。火邪って名前に反応もしてたし。まああれは私に火邪っていう名前の友達でもいるとお前が思ったと解釈してたわけでも、違ったわけか」

「にや、にやんのことかわきやんにやいよお」



「つーことは、自分がどうして高校を退学したかも知ってるのか？いや、覚えてるのか？私はそこに関してはちよっと同情してたんだけど。それを隠してるってのはどーいうことかな？私に同情させるためか？」

知らないうちに、教師を殴ったことになっていて。知らないうちに、高校退学。同情しなくてもなかったが。

「し、しらにゃい。お、おぼえてにゃい。よくわかんにゃいよお」

私は何も知らない無知な子ですよ。私の手は真っ白です。

「まあいいや。今一番重要なのはね火無。どーしてお前は私に黙ってたかってこと」

「にゃ、にゃー……？」

「目が空を飛ばうとしてるとこ悪いけどね。例えば、そう。私がグルグル巻きにされてたことあるよね。あの時お前、どうしてこんな事になったかわかんねえとか言ってたけど、あれ、嘘だったってことじゃね？」

「お、おねえちゃん、いたいよー」

「痛くしてんだから当たり前。どうして黙ってた？どうして騙そうとした？もしかしてお前は、あれか。全部火邪のせいにしとけばいいやとか思ってたか。火邪がやったことなんだから私は知らず存せぬ責任なしか」

「お、おぼえてにやいもん……」

「ああ、覚えてないかもしれない。何をやったかは覚えてないかもしれないけど、何をやったか知ってたんじゃないのかな？」

「……」

「目は口程に物を言う。知ってたのに知らないふりして、大丈夫？大丈夫？つか。火無ちゃん火無ちゃん、それってどうなの？ねえどうなの？病気だったりしてもお前が覚えていない間にやったことでも、ちよつとくらい反省するべきじゃないの？」

「……」

「目をつむつてだんまりですか。まあいいや。うん。まあいい。私はお前の性格が悪いってことは知ってるからまあいいんだよ。もう一つ聞いてもいいかな火無。火邪の事を知らないなら聞いても無駄だと思つてただけだね。知ってるなら聞いて見ようかな。火邪は消えたのかな？最近全く出て来ないし。治ったわけ？もしそうならお前実家帰れば？あの人達も、頭がおかしくないお前なら優しく受け入れてくれると思うよ？」

「……にやまいき」

火無は目を開け、じっと水無を見て言った。

「あいつはにやまいきだからもういらにやいの。でもべんりにやからによこしとくによ」

「はあ？お前、それどういうっ！？」

水無の顎に火無の拳底がクリーンヒット。

「なにをつ　　!？」

火無の顔を挟むのをやめ、なにをする。と、痛みを堪えながら言おうとした水無の鳩尾に火無の拳がめり込んだ。

「がつ　　!!」

体をくの字に曲げて悶絶した水無の後頭部に、いつの間にかベンチから立ち上がっていた火無の両手叩き落としが炸裂。

「がはっ!!」

水無はベンチに倒れた。そして追い撃ちとばかりに、倒れた水無の背中に人間が飛び乗ったような衝撃と重み。

「い、意味が　　」

「姉さんが記憶を無くすまで殴ることにするね。早く記憶、無くしてね」

「　　っ!!」

水無が火無の言葉の意味を理解する前に、また、後頭部に衝撃が走った。

「やめ　　!!」



8 - 10 ・ 姉妹喧嘩 Ver ??? (後書き)

今起こった事をありのまま語る。ほのぼのした姉妹喧嘩を書こうとしたら病んでた。何を言っているわからねえと思うが俺にだってわからねえ。作者の文才がないとか後先考えていないとかテキストだとか読者置いてけぼりとか展開早過ぎとかそんなちやちなもんじゃ断じてねえ。もっと恐ろしい片鱗を見た気がするぜ。いやホント、どうしてこうなった……。

## 断章・知らされない事実

「お姉ちゃん？」

水無の反応が全くなくなったので、火無は拳を振り下ろすのをやめた。念のためにその場で弾んでみる。水無はぐえともなんとも言わなかった。どうやら気を失ったようだ。死んではいないはず。私のお姉ちゃんはそんなに弱くないのだ。

火無は水無の上から下り、俯せ状態の水無を転がして仰向けにさせる。鼻から血が出ている。おでこも少し擦りむいている。他は目立った傷はない。後々、頬骨当たりに痣が出来るかもしれないが、まあ骨は折れていないだろう。私のお姉ちゃんはそんなにやわじやないのだ。

鼻血が出ている状態で仰向けにしておくのはよくない。火無は水無の体を起こす。血が服につかないように、手で鼻を覆うのも忘れぬい。よしよよしよと水無の体を起こし、座らせる。水無の体に全く力が入ってないので、案外楽に出来た。片手で水無の鼻をつまんで、あいた手で水無のバツクを漁る。ポケットティッシュとハンカチを発見。さすが私のお姉ちゃんだ。

「ふきふきしましうねー」

幼児に語りかけるようにそう言って、火無は水無の顔をティッシュで乱暴に拭く。そして鼻ちよんぼをテキストに作って差し込む。お姉ちゃんの世話をするのは楽しいな。と、ランラン気分で火無は、ハンカチを持って水飲み場に行く。途中手についた血を舐めてうん。私と同じ味。とご満悦。

「冷たい！」

ちよつと水遊びしてから、ハンカチを濡らして水無の元に戻る。鼻に入れた詰め物はすでに真つ赤になつていたので抜き取り、その場に投げ捨てる。新しい詰め物を作る前に、濡れたハンカチを使い、血で汚れた水無の顔を拭く。水無はもちろんされるがまま。まるで赤ちゃんみたい。私がいらないとお姉ちゃんは何も出来ないんだな。と思い、火無の頬は緩みまくり。

拭き終わつたらもう一度鼻に詰め物を入れる。そしてハンカチを一度洗い、おでこを軽く拭いてあげて、処置終了。私完璧。これは起きたらお姉ちゃん、私を褒めまくりだな。と、水無に褒められる自分を想像し「えへへへ」見た人間ほぼ全員が目を逸らすような笑みを浮かべた。

「なんとというか……異常ですねあなたは。ギャップが気持ち悪いを通り越して、怖い」

しかし偶然にも。そんな笑みを浮かべている火無を見ていた人間は、目を逸らさずに嫌悪感を向けるタイプの人間だった。

「だれ！？」

火無は声が出た方を見た。そこには背が高いラフな恰好をした女性が立っていた。その距離およそ三メートル。お姉ちゃんと遊んでて全く気付かなかつたぜ。

「別にだれでもいいじゃないですか」

「確かにお前が誰かとかどうでもいいや！」

うんざり顔の女性の言う通りだと火無は思ったので同意した。その結果女性が呆れ顔になったけど、それもどうでもいい。どうでもよくないのは。こいつがどこまで見ていたかということ。もし全部見ている。それをお姉ちゃんに言う気なら。こいつの記憶もなくさないかね。

「……見てた？」

火無は問う。一分の嘘も見逃さないという意気込みで。

「見てましたよ。ほとんど。一から八まであそこから」

女性は一つの窓を指差す。三階の窓だ。なるほど。確かにあの場所からなら木陰にあるこのベンチも見れるだろう。

「ふと外を見たら水無さんが座ってて。隣にるのが妹さんかなあと思って見てたら、急に殴り始めるんですから。正直動揺して、行動が遅れました」

「……」

肩を竦める女性を見ながら火無は考える。こいつはどうやらお姉ちゃんの知り合いらしい。全くお姉ちゃんは一人になったと思っただけすぐこれだ。変な人間ばかり知り合いを作って。やっぱり一人暮らしなんて許すべきじゃなかったな。

「あー……一応聞いてみますけど。自分が何をしたか覚えてますか？」



火無の長考をどう受け取ったのかはわからないしどうでもいいが、女性はバツが悪そうに尋ねた。それを聞いて火無はラッキーだと思っただ。ごまかせる。

「うっん。覚えてないよ？」

これは本当。

「じゃあ、気付いたら水無さんの上に乗っていたと？どうして水無さんが鼻血を出しているかわからない？」

「うん。私わかんない。気付いたらお姉ちゃんが鼻血出してたの」

これは半分嘘。

「大変だ大変だと思って私は急いでお姉ちゃんに応急処置したんだよ！」

これはほとんど嘘。

「だからね。お姉ちゃんは今もう平気なの。応急処置したからもう平気。あなたに心配される筋合いはないの。だからあなたはあっち行け」

これは本心。あんな質問してきたということは、こいつは私が二重人格もどきと知ってるのだろう。こう言っただけはこいつは、火邪がやったと思うに違いない。間違いない。それなら別に問題ない。見られていても問題ない。お姉ちゃんに告げ口されても火邪の評価が下がるだけで、私はいい子だもん。

「……」

火無にとってはそれで解決でも、女性にとっては解決ではないようだ。上機嫌な様子で足をブラブラしている火無を訝しげに見る。

「……聞かないわけか」

「ん？まだいるの？あっち行ってよ邪魔だから」

上機嫌な火無はニコニコと笑いながら言った。

「最愛の姉が気付いたら血出してたのに、その理由を聞かないわけですか？」

「……何が言いたいの？」

笑顔が消える。

「別に。まあ、もどきだから何でもありかと思っただけですよ。あ、別に水無さんに忠告したりはしませんよ？姉妹のことに口は挟まないから。めんどくさい」

危険な雰囲気を感じたのか女性は、鬱陶しそうに手を振り言う。

「でも、水無さんが起きたらなんか聞くんじゃないやありませんかとは聞いてきましょうか？大丈夫ですかその辺は？」

「……大丈夫に決まってるよそんなの」

火無はいまいち、この女性が何しにきたか掴めなかった。お姉ちゃ

んの心配をしに来たと思ったのに、今の言い方はまるで私を心配しているようだ。

「お姉ちゃんは私のお姉ちゃんだもん。私はお姉ちゃんにそっくりでお姉ちゃんは私にそっくりなんだもん。えへっ、だからね。だからねだからねっ。私が乖離しやすいようにねっ。えへっ、えへへっ。お姉ちゃんもね、乖離しやすいんだよ！」

「乖離しやすい……………笑いごとじゃありませんよね」

「え？うん、でもね、でもね、なんだか笑えるんだよ！」

そう。なんだか自然と笑いが零れる。楽しいのかな私は。よくわからないけど。この事を誰かに言うのは始めて。本当のお姉ちゃんを知ってるのは私だけっていう優越感からかな。火邪が笑ってるのかな。まあいいや。自分のことなんてわからなくてもいいや。私はお姉ちゃんのことかわかってれば、それでいい。

「知らないでしょ？あなたは知らないでしょ？お姉ちゃんの知り合い？友達？でも知らないでしょ？知らなかったでしょ？でも私は知ってるよ！お姉ちゃんはねお姉ちゃんはねっ。とっても弱くて女々しいの！えへっ！知ってた？ねえ知ってた？ほら見てこれ見て何かわかる？」

火無は水無の左手を上げた。だらっとしている水無の左手首には男物の大きなロレックス。

「何って、腕時計じゃないですか」

女性は火無が何を言いたいのかわからないようだ。

「そう時計だよ！もうずーっと前に死んでいなくなった人の時計をまだ大事につけてるんだよ！お守りみたいに！変だよね女々しいよね弱いよね！えへっ！でも私はそんなお姉ちゃんが大好きなんだよ！そしてそんなお姉ちゃんを私を大好きじゃないといけないんだよねー？」

「……」

水無の手に自分の頭をさすらせる火無を見て、女性は何も言わない。ただ、生理的に無理な物を見たような表情を浮かべるだけ。嫌悪感と、ちよっぴりの恐怖。

「知ってる？知らないよね？知ってるわけないよね！」

水無の左手を自分の頭にのせたまま火無は言う。

「私は覚えてないけど知ってるの！お姉ちゃんはねお姉ちゃんはね！この時計をとつてもとつてもとつても大切にしてるんだよ！前ねっ。昔ねっ。最初ねっ！お姉ちゃんがこの時計をつけてるのを見た時ね！ビックリしたの！何でかわかる？」

「……いえ」

「まだあんなの持ってたんだってビックリしたんだよ！だってこの時計交通事故の時に壊れちゃってたんだよ！ガラクタなんだよ！そんなのを大事に10年間以上持つてて！しかも修理したんだよ！それを宝物みたいにお守りみたいにして！バカみたいでしょ？えへっ、えへへへっ。でも安心していいよー？そんなお姉ちゃんでもね。私はだーいすきだから」

「……………」

気を失ってる水無に笑顔を向ける火無を見て、女性は引き攣った笑いを浮かべていた。何かを我慢しているようにも見えだし、なんかもう逆に笑える。という境地に達しているようにも見えた。

「でねでね！えへっ！奪っちゃったの！」

火無は楽しそうに言う。本当に楽しそうな笑顔で女性に言う。

「はぁ？」

「わからない？わからないでしょ？わからないよね！所詮お前はその程度！私は覚えてないけど知ってるしわかるよ！だってお姉ちゃんが私よりこんな物を大切に思ってるってわかったら奪いたくなるでしょ壊したくなるでしょ？もういない人よりいる人を大切にするのが大事でしょ？そう思うでしょ？」

「……………」

女性は答えない。

しかし火無には答えがわかった。なぜなら。

「お姉ちゃんが言ってたよ。目は口ほどに物を言ってる」

火無はさらに笑みを深める。その色は愛。狂喜に満ちた愛の笑み。

「えへっ！だからねだからね！お姉ちゃんが間違ってるのを教えてあげる為にこれを奪ってもう二度と間違えない為にもっとちゃんと

壊してあげることにしたの！そしたらねそしたらねっ！私は覚えてないんだけどね！きつとお姉ちゃんも覚えてない！えへっ、お揃いだね！お姉ちゃんったらね！泣いたんだよ！泣いて返してっ言うんだよ！土下座までするの！腕の骨折られても返してっ言い続けるんだよ！弱いでしょ？惨めでしょ？情けないでしょ！知ってた？知らなかったでしょ？私は知ってた！覚えてないけど知ってたんだよ！お姉ちゃんが本当は淋しがり屋だっと言うのも知ってるしお姉ちゃんには本当は頼られるのが好きだっというのも知ってるしお姉ちゃんには必要とされるのが好きっというのも知ってるしお姉ちゃんには全部を知ってるしお姉ちゃんの全部を知ってるのは私だけ！つまりお姉ちゃんの全部をひっくりくるめてまとめて理解してあげていて、そのうえで、好きで好きで好きで大好きで愛してるのはこの世で私だけなの！それなのにあの女はまるでお姉ちゃんを理解者面して！嘘つき嘘つき嘘つきめ！本当はどうでもいいと思ってるくせにお姉ちゃんに言い寄って近づいて取り入って！嫌い嫌い大嫌い！死ねばいいのに！それなのにお姉ちゃんもまるであの女が自分を理解してくれると思ってる！ぜんっっぜんわかってない！お姉ちゃんを理解してあげられるのは私だけなの！私だーけーなーのーにーっ！！」

前半は楽しい思い出を語るように、後半は理解しない相手に対して憤るように、火無は語った

「……………どうして」

それを聞いた、聞かされた女性は、火無を叱るでもなく褒めるでもなく、眉ねをよせて聞いた。

「どうしてそれを私に？」

「なんとなくだよ。なんとなくこの事を誰かに話したかっただけ。あなたはお姉ちゃんを知ってて、でも、お姉ちゃんには言わない気がしたから。ただそれだけ。何の意味もないよ。あつ、言わないよね？言うわけないよね？お姉ちゃんに言わないよね？」

言うつて言つたら忘れてもらおう。覚えてるけど、忘れてもらおう。

「……………言いませんよ」

女性は、堪えるように拳を握りしめながら、答えた。

「知ったこつちやないですよ。姉妹のことなんて。私にとっては、どうでもいい」

「そつ。じゃ、バイバイ」

女性の言葉は信じられると踏んだのか。火無は無邪気な笑顔で手を振って、いなくなれと暗に伝えた。

「ああ、本当に……………どうでもいいんですよ……………」

女性は、心底疲れたというように、そう呟きながら火無に背を向け歩き出した。

「はい、お姉ちゃん。ティッシュ変えましょうね」

女性の方を既に見てない火無は、秘密を暴露してスッキリ気分なニコニコ笑顔で、水無の世話をまた始めた。





断章・知らされない事実（後書き）

支離滅裂。

覚えてないけど知ってるのは火無。

覚えてるけど知らないのは神無。

覚えてないし知らないのは水無。

覚えてるけど知らないけど調べるのは巡  
どうでもいいのは舞歌。

## 9 - 1 恐怖から目を逸らせば

「……」

目をあけるとそこには視界いっぱい妹の顔があった。

「……なにしてんの」

しばらく息がかかるくらいの距離で見つめあった後、覗き込まれた後、水無は聞いてみた。

「お姉ちゃん全然起きないから、目覚めのちゅー、みぎゅ」

間一髪。唇がくつつく前に手を挟み難を逃れた水無。そのまま火無の頭をどかして起きる。

「……」

そして現状確認。セミうるさい。目の前にある建造物は図書館。座ってるのは木陰のベンチ。隣にはニコニコな火無。どうやらひざ枕されていたらしいが。腕時計を見ると、13時過ぎ。確か火無に引っ張られて図書館を出たのが12時30分くらいだった気がする。

「……ったあ？」

はて、いつ寝たんだったっけか。水無がなんとなく頭をかくと、後頭部にタンコブ発見。結構でかいぞ。

「お姉ちゃんどうしたの？」

何でこんなところにタンコブが？どっかにぶつかったっけ。と水無が頭を傾げていると、火無も小首を傾げて聞いてきた。

「どうしたもこうしたも……私が聞きたいんだけど……どしたの私？」

水無のその言葉を聞いて。火無は心の底から驚いたというように、目を大きくひらいて「お姉ちゃん覚えてないの!？」と、言った。

「あんな事があつたのに!？」

さらに、言う。

「え、なに。そんなに衝撃的な事があつたの？そしてそれを私忘れちゃったわけ？あ、いや……待て待て、なんか思い出しそう……」

来てる来てる。喉元辺りまで来てる。そうそう確か火無が怒って「お姉ちゃん熱中症で急に倒れちゃったんだよ!」

「……熱中症？」

え？マジで？

「そつだよ熱中症だよ！駐車場で急にボタンキューで私ビックリだよ……」

「駐車場で？」

両手を広げてビックリしましたと表現する火無が、なんだかオーバ

ーリアクションで白々しいなあ。と水無は思う。が、駐車場までは記憶は確かにあるので、火無の言葉を頭ごなしに否定することは出来ない。

「熱中症って……マジで？」

「うん、マジで」

「図書館出てすぐに？」

「うん、すぐに」

「熱中症って……そんなすぐに訪れるような病だっ」「お姉ちゃん頭は大丈夫！？後頭部をアスファルトにごつつんこしてたよ！すつごい音したんだから！」

「……いや、確かに頭はなんか痛いけども」

なんかこいつ、ごまかそうとしてないか？

「それに鼻血もブーだよ！」

火無はそう言って、地面に投げ捨てられている真っ赤に染まったテイツシュを指差した。

「いや……ポイ捨てはよくない」

色んな疑問があるが、とりあえず水無はそうツッコミを入れておく。鼻部分をさすってみると、なんか痛い。はて、鼻血は熱中症の症状にあったらどうか。しかも痛いってどういうことだろう。後頭部を

打ったのなら、背中から倒れたわけだろう。なのに鼻を痛める？

「……駐車場で倒れて、お前がここまで連れてきたわけ？」

「うん！私頑張って運んだの！褒めて褒めて！撫でて撫でて！」

「あー……うん。偉い偉い……」

火無のご要望に従い頭を撫で撫で。火無は「えへへへ」とご満悦の様子。

おざなりに撫でながら、水無は自分の足を確認。引きずられた後はない。火無は細腕だが、馬鹿力だ。馬鹿力だが、さすがにおぶったりは出来ないだろうから、運ぶ時は、脇に手を入れ、引きずったはずだ。しかしその場合アスファルトに足が接触するから、傷があってもいいような気がするが……。そもそも熱中症。数分前まで水分を摂取していたのに？何かおかしい。忘れてる。何か。何を。そう、確か、火無と何か話していた気が「お姉ちゃん？」

「え？ああ、なに？」

心ここにあらずで考えを巡らしていた水無は、火無の呼びかけで現実に戻る。

「お姉ちゃん」

火無は、怪訝な表情を浮かべながら聞く。

火無は、水無の体を、心配しているようにも見えた。水無が忘れていることを心配しているようにも、見えた。

「思い出した？」

水無が忘れていたかを心配しているようにも、見えた。

聞かれた水無は、問われた水無は、しばらく火無と見つめ合った後。

「まっ、いつか」

と、言った。

「お姉ちゃん私お腹空いた！」

パーツと顔を輝かせた火無がそう言った。

「はいはい、んじゃまあ、昼にしますか」

水無はタンコブをさすりながら、歩き出す。

「お姉ちゃん私ケーキ食べたい！」

もちろん火無もそれに続き、腕を組んで水無の隣に。

「ケーキは夕食。もう予約してあるよ。あんたのご要望通りね」

「やったー！」

「はいはいよかったね……ん」

水無は立ち止まり振り返る。

「どうしたの？」

「いや……なんでもないよ」

視線を感じたのだが、気のせいだったようだ。

水無は歩みを再開し、今度こそ、図書館を後にした。

「お姉ちゃんどこで食べる？」

「んー……とりあえず、電車乗ってから考えようか」

水無は、納得したわけではないし、火無の話を感じたわけではない。ただ、思い出すのを諦めただけだ。

思い出せそうもなかったからではない。明日や明後日ではわからないが、まだ時間が経っていない今なら、もう少し思い出す努力をすれば、思い出せただろう。でも、諦めた。

理由は単純明快。怖かったから。いや、思い出すのが怖かったわけではない。忘れていく記憶が怖かったわけではない。

火無が怖かった。それだけの話。

怪訝な表情を浮かべていた火無は、自分の体を心配しているようにも見え、忘れていく事を心配しているようにも見えたし、忘れていくかを心配しているようにも見えた。どれが正しいかはわからない。どれも正しいのかもしれないし、どれも間違っているのかもしれない。

ただ。

ただ確かに言えることは。

怪訝な表情を浮かべていた火無は。瞳の奥で笑っていた。狂喜の色が見えた。

あの時思い出したとか、思い出せそうとか言ったら、その笑みが前面に出てきそうで、怖かった。  
それが出てきた時、どんな事をされるかわからなくて、怖かった。

「お姉ちゃん大好きだよ！」

「だから脈絡つてもんがさ……」

きつと、水無が忘れた理由も、それと同じだろう。



9 - 1 恐怖から目を逸らせば (後書き)

恐怖から目を逸らせば、そこはいつも通りの日常なのです。

## 9 - 2 ・ダイジェストでお送りします

その後も色々あった。

まずは、隣街の胡桃割市へ移動することに。電車内で、膝の上に乗ろうとしてきて一悶着。どちらが膝に乗ろうとしたかは言わずもがな。調子のんなと怒った方も言わずもがな。

到着してから、大学入学当初に一、二度行ったことがある喫茶店でお遅めの昼食を取った。

「この軽食セットを二つ」

「はいはい、飲み物はいかがいたしやすかー」

「アイスコーヒーと「メロンソーダ！」で、お願いします」

「はいどうもー、ご注文繰り返した方がいいですかー？」

「あと、パンナコッタであります？」

「はいはい、お時間いただければ、ご用意しますよー」

「じゃあパンナコッタ二つ」

「はい、承りましたー。ごゆっくりお冷やでも啜ってお待ち下さー

い

という感じでウェイトレスに注文し、

「マスター、パソコン借りますよ」

「な……」

「なにに使う？そりゃマスター。パンナコッタの作り方を調べるんですよ」

「な……」

「つとく。って言ってる暇合ったら軽食セット作ってくれますか？あと、もういい加減いい飽きましたけど、つとく。くらい言おうか。な。じゃなくて、つとく、まで言おうか。そこまで言

う暇はあるだろうが」

という、マスターとウェイトレスのやる気なさ気な会話を聞き流しつつお冷やを啜り、軽食セット（サンドイッチとかさ）を食べ、「初めてにしては上出来。さすが私。永遠に子供な私さすが私」というパンナコッタを食べ、腹ごしらえを終えた。

その後、駅前のデパートに入り、ぶらぶらと、服を見たり、CDを見たり、ウィンドショッピングに興じて時間を潰した。

ウィンドショッピング中。二人は奇妙な店を見つけた。どこが奇妙かというと、まず鈴しか売ってない鈴専門店だったこと。そして、店員がまた奇妙だった。

「わー、お姉ちゃんお姉ちゃん。見てこれ。すごい大きい鈴だよ？携帯ストラップだって」

「確かにでかい。林檎くらいあるね。こんなの携帯に付ける奴いんのか？」

「私、欲しいなあ」

「いや、お前携帯持ってないじゃん」

「お客さんお客さん。お目が高いっすね」

「目が高い？」

「一応教えとくけど、位置のことじゃないよ……しかし、枕まであんなのかよ……何だこの店……」

「あ、待って」「待つつす。あたいはこの『鈴の森』の店長、鈴鈴りんじ美鈴んみすずこいつはただの鈴つきストラップじゃないっすよ。この鈴は今日入荷した新作の鈴っす。いや、確かに見た目はただのデカイ鈴ストラップっすよ？だけどほら。ここにスイッチがあるのわかるっすか？これを押すと……ほらビククリっす！小さい鈴がじゃらじゃらと！すごいいい音っすよね！一つの鈴はリンリンと、弱いか弱い音しか鳴らないっすけど。こんだけあれば20で一つのリン！わ

かるっすか！？この甲高い音が私達の心を揺さぶるわけっすよ！神様だつて寄つて来るっす！もうあなたの携帯は、鳴らない携帯とは言われなくなるわけっすよ！どうっすか！？今ならお得にしておくっすよ！？」

「お、お姉ちゃん、助けて！なんか、すっすすっすっ言ってくる年増がしつこいよ！」

「そう！ちよつとしつこいんじゃないかなって思うくらい響くのが、鈴のいいとこなんすよね！わかるっすねお客さん！」

「お姉ちゃん！肩が痛いよ鼻息荒いよ加齢臭がするよー！助けてよー！」

「助けを呼ぶならこれがオススメっす！防犯鈴！」

「ただの防犯ベルじゃん！」

「ただじゃないっす一万はするっす！」

「そついう意味じゃない！って、一万円もするの？こんなのが？」

フィールド効果によりこの場なら何人にも負けない店長の前に、さすがの唯我姉尊水城火無もツツコミに回っている時、水無は枕を手にとって、独り言を呟いていたつもりだった。

「うわぁ……マジで鈴だ。形が鈴型とかいうレベルじゃねえよ。中にスポンジとか羽毛とかじゃなくて、鈴入ってるよ。これ間違いなく小さい鈴入ってるよ。振るとじゃらんじゃらんするよ。寝れない。寝れるわけない。抱き枕にすら出来ない。使い道無し」

「オブリエとして使えます」

「オブリエって、これを？ハイセンス過ぎて私にはちよつと理解出来ない……って、わっ！気付いたら私の横に鈴のイヤリングをしていて幸薄そつな二十歳前後っぽい店員さんがいた！」

「説明口調ですね」

「驚いたからね」

「幸、薄そつですか？」

「え？ああ、うん、まあ……勢いって……あるよね。傷ついたなら謝ろうか？」

「いえ、いいです……ごゆっくりどうぞ……」

「そう呟いて、店員さんは、レジの奥に姿を消したのだった……いや、なんだったんだ……」

哀愁漂う店員の背中を見送った水無は、なんとなく申し訳ない気分になったので、利用価値不明の鈴枕を買うことになった。

そして火無も「もう買うからあっち行ってよ鈴馬鹿！」「鈴馬鹿！？最高の褒め言葉っす！ありがとうございましたー！」「お姉ちゃんもうやだこいつー！！」という感じで、鈴ストラップを買うことになった。

お金は水無が出したので、それが水無からの誕生日プレゼントという形になり、たいそう火無は喜んだ。店長も久しぶりに品が売れて、たいそう喜んだ。店員は感情がこもっていない声で「またのお越しをお待ちしております」と言って、水無はもう来ることはないだろうと、この時点では思っていたので、愛想笑いを浮かべるだけにとどめた。

その後もふらふらと散歩、火無的にはデートを経て、17時過ぎ、二人は小町に戻ってきた。

### 9 - 3 ・ 気が気ではない話

太陽さんは、そろそろ元気がなくなりそう。そんな中、駅を出て、二人はてくぽくと。腕を組んで、「ねえねえ」と。

「お姉ちゃん、もうお家帰るの?」

「そ。ケーキ受け取って帰るの。もう十分でしょ?」

「えー、まだ遊びたいよー」

「無理無理。もう勘弁して」

ほぼ一日、火無に付き合った水無はへろへろである。

「むー、まだ遊びたいよー」

ほぼ一日、水無と遊んだ火無は逆に元気である。

「今日はもう無理なの。また気が向いた時ね」

ほぼ一日、遊び歩いた財布は、だいぶ軽くなりましたた。

「むー……仕方ないなあ。あっ、お祭りにも連れてってね」

胡桃割駅にも、小町駅にも、喫茶店にも、デパートにも、夏祭りのポスターが貼ってあった。ポスターを何度も見かけた火無は是非、夏祭りに行ってみたいと思っただけ。

「それも気が向いたら」

ポスターを何度も見かけた水無は別に、夏祭りに行ってみたいとは思わなかったらしい。

「むー、なんか気のない返事ー」

「んー？そりゃ、お前に気がないからじゃないかなー」

「えー！じゃあお姉ちゃんの気は今どこにあるの！」

「えー、そんなの聞いてどうすんのさ」

「そいつを倒して私に気を向かせるの！」

「そ。今の私の気はあれにあるよ」

そう言っただけの水無は、個人で倒すことは不可能な国家権力の象徴、パトカーを指差した。

水無達が歩いている道の反対側。そこには大きなマンションがあり、その前にパトカーや救急車が数台止まっていたのだ。周りにはやじ馬もたまっていて、何か事件か事故でもあったのかと、水無は気になっていたのだ。

「わかったお姉ちゃんちょっと待っててあいつら倒して来るから！」

しかし火無は、何でパトカーがあるとか、救急車があるとか、何か事件があったのかなとかは思わない。何はともあれ、あれを倒して水無の気をこちらに引くことにした。

「待て待て落ち着け！ 国家権力を倒すとか軽々しく言つな。あと、交通ルールを知れ」

警察に喧嘩を売る為に、交通量がそれなりの駅前大通りを突っ切ろうとした火無を、当然水無は止めた。交通事故とかマジで勘弁して欲しい。それが自分の発言が発端ならなおさらだ。

「離してお姉ちゃんあいつ倒せない！」

「変なスイッチ入れてんじやねえよ！」

公共道路で、警察を倒す気満々の火無とそれを羽交い締めにして止める水無は、パトカーや救急車とはまた別の意味で注目的である。注目的ではあるが、所詮役に立たない馬が語源であるらしい、野次馬さん達。止めるでもなく話しかけるでもなく、遠めに眺めたりするだけである。当然である。知り合いでもない限り、「やらねばならぬやらねばならぬのじゃー！」「時代劇も守備範囲か！」という感じで、道路でじゃれあっている奴らに話しかける、勇気というか使命感溢れる人は、ほとんどいない。

「お前達天下の往来で何してるですか。お天道様以外もバッチリ見てるですよ」

というわけで、二人に話しかけて来たのは二人の知り合いだった。声がした方を見る二人。そして二人とも怪訝な顔をした。



「なにこのチビ」

「さあ……知らん」

どうやら二人は誰かわからなかったようだ。しかしそれも仕方がない話。話しかけた奴は、野球帽を目深に被り顔がわからなかったからだ。まあ、特徴的な話し方だし、小柄だし、火無はともかく水無はわかって欲しい物だが。

「私ですよ私です。みんな大好き春風巡です」

野球帽を上げ、顔を見せたのは本人が名乗った通り、巡であった。手にコンビニ二袋を持っているところを見ると、コンビニ二回りで偶然二人を見つけ、声をかけたということだろう。しかし。巡が名乗っても、二人の表情は変わらなかった。

「なにこのチビ」

「俗にいう……お前じゃなかったらよかったのに。って感じ」

「水城火無は後でぶん殴るです。水城水無は、どういう意味です？」

「どういう意味って……なにその恰好。怪しさ爆発なんだけど」

水無が言う恰好というのは、野球帽のことではない。いや、野球帽もあいまっての評価なのだが。

季節は夏。太陽がそろそろ許してやるかと思いはじめるとはいえ、まだまだ暑いというのに、巡は大量生産品の長袖ジャージ。しかも黒。それで野球帽を目深に被りコンビニ二袋を持っていた巡は、わかりやすい不審者であった。

「ああ、今日はちょっとある人物を尾行をしてたから、げふんげふんです……」

巡は目をそらした。

「聞かなかったことにしておく……」

水無も気まずい表情を浮かべ、目をそらした。

「犯罪者死ねばいいのに」

「誰が犯罪者ですか誰が！これはれっきとした人間的な仕事だと私は信じて疑わないです！」

パトカーから巡に標的を変えた火無は、羽交い締めから解放されても、道路に飛び出そうとはせず、水無の後ろに回り、巡に対してあつかんべーを用いて挑発した。

「全く……妹の教育をもっとちゃんとしろですよ水城水無。お前がやらないなら私がやってやってもいいですよ？」

「それはありがたいと言いたいけど、お前に教育させたら悪化しちゃうだから、遠慮しといて」

「ちゃんと更正させてやるですけど、まあお前が言うなら遠慮しといてやるですか」

「なに偉そうに言ってるのチビ。こっちから願い下げだよバーカ。私はお姉ちゃん以外に教育してもらおう気はないよーだ」

「お前の性根は叩き直したいですマジで！」

「教育してもらおう気があるなら、もう少し私の言う事聞いてくれな  
い？」

「お姉ちゃんお姉ちゃん。教育っていうのはね、お互いに学ぶこと  
なんだよ」

「つまり私に教育してもらおう気がないなら、自分も教育される気は  
ないと？」

「うん。お姉ちゃんが私を教育したいなら、私にもお姉ちゃんを教  
育させてね」

「私にその気はないからいいや」

「むー、お姉ちゃんはやる気がない」

「お前は根気がない」

「じゃあお姉ちゃんには愛する気、略して愛あいき気もないよー」

「合気道を習っておりませんので」

「楽しそうにテキストな会話しているとこ悪いですけど、私を無視し  
ないで下さいです」

巡は、話しかけたことを後悔するよつに、人間臭く嘆息してから尋  
ねる。

「お前達はあれですか。夏休みが始まったから、姉妹で楽しく出かけた帰りという感じですか？」

二人が持っている買い物袋とかから推測した。

「何言ってるんの気違い。全然違うよ。私達はデートをしてたの。だから早くあっちいけ。馬に蹴られる前に私が蹴っ飛ばすよ」

「そういえば今日は水城火無の誕生日でしたですね。それですか」  
巡は火無を無視することにしたようだ。水無だけを見て話す。懸命な判断だ。

「その通り。朝から付き合わされて、もうへとへと」

「こんな生意気な妹を持って、お前も大変ですね」

「チビに言われたくないもんね！。それに何言ってるの？私は生意気じゃなくて可愛くて元気な妹だもん。そんなこともわからないなんて、一度死んだ方がよくない？」

「で、あんたはなにしてるわけ？」

「私は、夕食を買いにコンビニに行ってたわけですよ」

「チビはいいけど、お姉ちゃんまで無視しないでよ！」

「教えてなかったですか？私はあのマンションに住んでるんです」

「へえー……金持ちだな」

火無を気にせず、二人は会話を続ける。

巡が指差して示したのは、パトカーや救急車が止まっている、先程のマンションだ。入口にオートロックがあり、五階建てで、見た感じ、一階につき六部屋程度だろうか。駅前という立地条件もあって、結構いいお値段がしそうだ。

「1LDK。ちなみに部屋は、最上階の角部屋です。ちょっと寄っていくですか？」

「誰が行くかチビ。チビが住んでる部屋に行けるわけないでしょ？きつと全部がミニチュアなんだろうねー」

「いや、いや。また気が向いたら行く」

「ですかー……」

巡は見るからに落胆した。

「ほら見ーろ。チビのくせに調子乗るからいけないんだ」

火無は明らかに調子に乗っていた。

「調子乗り過ぎ」

というわけで、水無の軽めの裏拳が、背後にいた火無のおでこに炸裂した。

「あうー……痛いよお姉ちゃん」

火無はそう言いつつも、水無に構ってもらったのが嬉しかったのか、嬉しそうにおでこを撫でた。

「ところで巡」

火無はこれではばらくは黙っているだろうから、水無は巡との会話を続ける。

「なんかあなたの住んでるマンション前が、えらいことになってるけど、どしたの？」

「ふむです。実は私も気になってたんです。一仕事を終え、コンビニで夕食を買って、さあ帰ろうと思ったところ、あんな感じでした。遠目から観察したら、お前達を見つけたわけだったんです」

二人はマンションの方を見る。一人は一人の髪の毛を弄って遊び始める。

「とりあえず、死人が出てるのは間違いないです」

「なんで？」

「救急車とパトカーが来てるのは、呼んだ人間がパトカーと救急車の必要性を感じたからです。救急車が必要なのは病人や怪我人がいた時です。しかし、かれこれ十分くらい見てるですけど、救急車が一向に立ち去らないです。怪我人がいたら、さっさと連れてくのが通りではないですか？」

「まあ、確かに？」

「ということ、病人なのか怪我人なのかはわかりませんが、呼んだ時は生きていた人間が、救急車がついた時にはもう死んでしまっただけです。ご愁傷様です」

「ご愁傷様ね、そしてタンコブ触んな」

水無は二度目の裏拳を食らわした。「あー」火無は二度目の呻きをもらした。

「つまりこれは事件の匂いです！」

「まあ、パトカーもいるしね」

「つまりこれは密室殺人です！」

「いや、それは飛躍し過ぎな気がする」

「ふふふ、こいつは血がたぎり、テンションが鯉の滝登りです！私はお前とは違って近所付き合いも完璧ですから、事情聴取とか余裕のよっちゃん私はめぐちゃん！父上の名にかけて犯人は私が見つけます！だって私ってば、神様………夢見たっていいじゃない、人間だもの………」

「テンションの下がり方もはや病気レベル！」

「短い人類の歴史の中で、人間か神様かで悩んだ奴は私とメシアくらいだと思っす………」

「いや、うん。そんな悩みを持っているのは珍しいだろうけど、他

にもいたと思うよ。うん、残念ながら……でいいのか？」

「うう……今日も眠れない夜になりそうです……鏡とじゃんけんして負ける現象が恐すぎます……あの野郎、勝ち誇った顔しやがってです……」

「鏡とじゃんけんしてる状況がすでに怖い……」

自己分析がうまくいかないという意味だと信じたい。

「すでに私のスタンドの三分の二はあいつに持ってかれたです……」

「ごめん、もう意味わかんないや」

「今日、お前の家行っていいです？」

「気を落ち着かせる巡。話しが飛び飛びだぞ」

「家になんか上げないよ」。チビは鏡に吸い込まれて死んじゃうのがお似合いだよ」

「お前は水城火邪をベースにするのがお似合いですよ」

「ベース……？なに言ってるんのこの低身長コンプレックス」

「水城水無。先に謝っておくです。お前の妹を教育ではなく調教してやるです。教えて育てるのではなく、調べて教えてやるです。本当の自分って奴をてめえに教えてやるです、覚悟しやがれ敬語もできねえクソガキが……」



「いや、お前は他人じゃなくてまず、自分の本当の自分を捜せば？」  
「それが出来てれば私はこんなじゃないんですよー！ー！ー！」  
巡は泣きながら、去って行った。

「お姉ちゃん、あの女とかあのチビとか、頭がおかしい奴とあんまり関わっちゃダメだよ？お姉ちゃん優しいから、そこに付け込まれちゃうんだよ」

「わかった。まずはお前から関わるのをやめることにする」

「何で!？」

「まつ。巡も気がかりだけど、しばらくほっとくか。私に迷惑が来ませんようにー」

「お姉ちゃん待ってよ私を気遣ってよー！」

「あんたを気遣うと私は気疲れするんだよねー」

「気の置けない仲？」

「間違った解釈の方ならね。ほら、さっさとケーキ買って帰るよ」

「はい」

9 - 3 ・気が気ではない話（後書き）

次か次で、火無の誕生日は終わり

## 9・4・霧の中からこんにちわ本音

「お嬢様、お誕生日おめでとーございます」

「ありがとうございます」

「お嬢様は今日でいくつになられたんですか？」

「19才になりました」

「では、ロウソクは19本立てればよろしいですか？」

「はい、よくつてよ」

「かしこま……飽きた。いち、にー、さーん、よーん、ごー、ろくしちはちきゅうじゅうじゅういちじゅうに以下略と。そしてライターファイヤー……はい、さっさと吹き消せお嬢様」

「お姉ちゃんちゃんとやってよー！」

場所は水無の家。

時間はそろそろ俺の時代だぜと月が目立ち始める19時。

テーブルの上には、19本のロウソクが乱雑に刺さり大炎上状態でもはやシンプルとはいえない4号ケーキと、サラダとグラタンとおつまみ数種類。そして、ワイングラスではなくガラスのコップに注がれた、ワイン。

『ワイン飲みたい。赤くて綺麗なやつ』

と、言ったのは火無であった。  
ケーキを受け取った後の、帰り道での発言。唐突に何言っただこいつ。と、水無は思ったが、どうやらちよつと大人の誕生日に憧れているのかなと考える。

『グラタンも食べたい。お姉ちゃんの手づくりのやつ』

と、火無は続けて言った。火無的には、グラタンは大人な感じなのかもしれない。

まあそのくらい叶えてやるかと思つた水無は、途中のスーパーでロゼワインやらグラタンの材料を購入。

ワインは嗜まない水無の家には、ワイングラスはないが、別にガラスコップでいいだろうと考えワイングラスは購入せず、帰宅したの18時。

その後、料理の才能がありそうな水無が、初めてのグラタンを気合いと根性で作つて、二人きりのささやかな誕生日パーティーの準備が出来たのは18時55分。

『こんなんじやだー！ちゃんとしたやつがいいー！』

と、コップを見て火無がごねたのが18時56分。

『じゃあ、お姉ちゃんは私をお嬢様として扱つて』

ないもんはないんだから仕方ねえだろと水無が言ったら、火無がそう言ったのが18時57分。

大人っぽいじゃなくて、お洒落な誕生日パーティーに憧れているようだと水無が気付いたのが18時58分。

仕方ないなあ。と、水無が執事だかメイドっぽく演じ始めたのが18時59分。

水無が早々にうんざりして、火無が怒ったのが今現在、19時。

「お姉ちゃんが飽きっぽくて、妹の私は大変だよー」

「やれやれみたいなどころ悪いけどね。さっさと吹き消してくれる？なんか火事になりそう」

「むー、わかったよー。お姉ちゃん、電気消して」

「はいはい」

「わー………幻想的だねー」

「わー、破滅的だねー」

水無が電気を消すと、部屋は真っ暗。ではなく、ケーキに立てて口ウソクが爛々と輝き暗くはない。

火無はその火を見て妖精を、水無は魔女を連想した。

「ほら、早く消す。チョコが溶ける気がしないでもないから」

『水城火無誕生日おめでとう』と書かれたチョコ板が心配である。せつかく用意してもらったもの。溶かすのは忍びない。

「はい。お姉ちゃん、歌うたってー」

「はいはい、ハッピーバースデーディア、火無ちゃん……ハッピーバースデートゥーユー、おめでとー」

「ありがとー！」

水無のテキトーな歌とおざなりの拍手を受け、火無は心からの感謝を込めてお礼を言って、一息でロウソクの火を消した。

「おー、凄いね」

「えへへへー、私、肺活量には自信があるんだ」

「初耳だよ」

電気をつけて、ロウソクを抜き取りケーキを切り分け、19時10分。

「かんぱーい！」

「はい、乾杯」

二人っきりの誕生日パーティーが始まりました。

そして時は流れ、19時50分。

「あのね、ひなはね、ひなはね……ひななんだよ！」

「うん。だからなにかなー？」

火無は、ぐにやぐにやに酔い潰れていた。

『なんだかピリピリするけど、甘くて美味しい！』

と、ワインが気に入った火無。パクパクと「美味しいー！お姉ちゃん」が事前に用意しといてくれたからその分さらに美味しいー！」とケーキを食べながら、がぶがぶとワインを飲んだ。そうは言ってもコップ二杯。ワインボトル半分くらいでこの有様だ。

慣れてないってこともあるだろうけど、やっぱりこいつ弱いな。と、猫のように体を擦り寄せて甘えてくる火無をあしらう水無も、飲み慣れていないワインで、いつもより酔いが早い。なんだか頭がぼんやりするぜ。

「あのね〜、ひなはね〜、おねえちゃんが〜、だ〜〜〜いすき！なんだよ〜？」

「うん、それはもう飽きるほど聞いたよー？」

「うれしい〜？」

「はいはい、嬉しいよー？」

「えへへ〜、おねえちゃんがうれしいと〜、ひなも〜、うれしいよ〜！だからちゅ〜！」

「幸せな奴だねー、だが断る」

水無は必殺鈴枕を使用した。火無は鈴枕と熱烈なキッスをして、「ガチャガチャする〜！」と、ケタケタ笑った。水無は鈴枕の利用価

値を見つけた。

「おねえちゃんはいあわせ〜?」

「それなりにねー」

「む〜、それなりじゃメなの〜。ひながしあわせならおねえちゃんもしあわせじゃなきゃいけないの〜!」

「どんな理屈なんですかー?」

膝の上に倒れ込んできた火無の頭を、ペシペシ叩く水無。わけわからんわー。

「おねえちゃんはわかってません!」

火無は水無のひざ枕を堪能しつつ、怒る。

「きょうがどんなひなのかわかってません!」

「わかってるよ?お前様のお誕生日でしょー?」

「ちがうのー!おねえちゃんがはじめていわってくれたたんじょうびなのー!」

「初めてってことはないよー?」

「一歳と二歳くらいの誕生日は祝ってあげたよつな気がする。」

「はじめてだもんはじめてだもんー!ひなはおねえちゃんのことな



ら、ゼーんぶおぼえてるもん！そのひながいうんだからまちがいないもん！」

「それはそれは、前頭葉の無駄遣いだねー」

膝の上でじたばたする火無のおでこを突くが、火無ストップスイッチはここではなかったようだ。止まらないぜ。

ああ、早くこの前みたいに寝てくれないかなあ。

と、思う水無。そう思った時、ふと。何か忘れている気がした。

何か大事なことを忘れているような……。

しかしアルコールが回った頭は、霧がかかったようで役立たず。

「でもね〜、おねえちゃんは〜、それでもいいんだよ〜？」

「ん？そうなの？」

火無が膝の上で転がるのをやめ、にへらあ。と、弛緩した笑みを浮かべたので、思考を内から外へ向ける。

「そうなんだよ〜？おねえちゃんは〜、なんにもわからなくても、しらなくても、いいんだよ〜？ひなが〜、ず〜とつ。しぬまです〜とつといっしょにいてあげるから〜、なんにもつ。もんだいな〜しっ」

「私には問題しかないように思えるけどね」

膝の上でニヤニヤと笑い、ブイサインまでする火無のおでこを、水無はペチンと叩く。

「もんだいなんてないの〜！おねえちゃんとひなは〜、ず〜つとこ  
うやって〜、ふたりでおたがいのたんじょうびお〜、ふたりだけで  
いわってくんだよ〜？」

「こっやってって……お前にとっては残念なことだね。すでに私の  
誕生日はお前以外にも祝られてんのよ？」

私が生まれたことは、家族以外にも祝られているんです。幸いなこ  
とに。

「あははは！おねえちゃんはおばかさんだなあ、あんなあはくじよ  
うなやつらわね〜、がっこっおおそっぎょうしたら〜、あかのたに  
んでおんしんふつうなんだよ〜？」

あの人達があなたを今祝ってるのは気まぐれみたいなもんです。気  
の迷いみたいなもんなんです。

「でもでもあんしんしてね！ひなだけわあ、ず〜つとおねえちゃん  
のお、たんじょうびをいわってあげるからね〜。それでそれでえ〜、  
おねえちゃんだけがあ、ひなのたんじおびいを、いわってえ………  
かんぺきなあふじんだねっ！」

「そうだねー。火無ちゃん的には完璧なんだろうねー」

ニコニコと頭を撫でてくる火無に対して、水無はニヤニヤと笑う。

「まあお前の言う通り？舞歌とか巡とかは、大学を卒業したら音信

不通かもね。特に巡は、気が多い奴だから、すぐ忘れそうだよね。でも、神無は違つと断言出来る」

「またあそうやってえおねえちゃんわあのおんなおかじょうひょうかあしてえ!!!」

「はいはい、あまり動くな。体に毒さけが回るぞ」

火無は体を起こしてポカポカと水無を叩く。が、もうベロンベロンである。全く力が入ってない。

「あいつわあおねえちゃんのおやさしさにだなあ」

「逆だ逆。私がつけこんでるだよ。まつ、今のお前に、いや、今じゃなくてもお前にはわからないだろうけどね。あははは、お前は私が何にも知らないと言っけど、お前は神無の事を何にも知らないね」

「しりたくないもんしらなあいもおんう、ひなわあおねえちゃんのこおとだけえおおしつてえればあいいんだもおん……」

火無は瞼はもう三分の二閉じていた。古時計の振り子のように体は揺れ、振り上げた手は自らの力はなく重力だけで、落ちていく。

「早く眠っちまえ、絡み酒め」

「ひなあわあ……まあだあねないもんう……じゅっきゅつちやいにい……なたんだもお……」

「はいはいそうだね……あつ。言い忘れてたけど、そのケーキ、

神無からの誕生日プレゼントだから。おめでとう火無。お前も家族以外から、生まれた事を、生きてる事を祝られるようになったんだよ」

それがどれだけ幸せな事が、お前にはわからないだろうね。

「うう……………？おねえにゃん……………ひな……………だましたあ……………」

「はい、おやすみなさいお嬢様」

火無は水無に倒れ込むように眠った。すうすう寝息を立て始めた。

「騙したわけじゃないんだけどね。でも、黙ってないと受け取らないだろうって神無がさ。いやいや、そこまでして祝いたいものかな？」

そんな風に独り言を言いながら、水無は火無をベットに寝かせる。そして、さてさて。一人静かにワインを嗜もうかな。借りてきたブルーDVDを見ながら。と、考えていた。

「うおっ！」

考えていたが、ついさっきベットに寝かせた火無が、音もなく体を起こしていて驚いた。ホラー映画とかで、ベットに寝ていた女が超自然的な力で体を起こしたかのようなのだ。

「ど、どしたの？」

体を起こしたまま、ぼーっと目の前の壁を見ている火無に恐る恐る声をかける水無。

何かにとり憑かれたのか。そういや前、巡がなんか言ってたな。水無がそんな事を思い出していると、怠そうに水無は首を動かし据わった目で水無を見た。そして口を開く。

「そのケーキ、神無さんのプレゼント何ですか？」

「……………」

ああ、そういえば酒を飲んで眠ると火邪が現れるとかいう意味わからん設定があつたな。

ようやく思い出した水無は、まだまだ静かに酒は飲めないな。と、嘆息するのだった。

#### 9 - 4 ・ 霧の中からこんにちわ本音（後書き）

もやではなく後書きからこんにちわ。更新スピードが順調に落ちて  
いるありすなきやろるです。

次回で誕生日はおしまい。

邪悪でも火が出てきたらおしまいなのです。  
色んな意味で。

バイバイさよならグッバイなのです。

## 9 - 5 ・教えられない気付かない

「何ですか姉さん。そんな幽霊を見るような目で見て。目、潰しますよ」

「いや、なんつーか、久しぶりでビックリしたもんで。元気？」

「元気じゃないです。最悪です」

火邪はベットから下りて、水無の隣に移動する。

何で隣来るんだよー。怖いよー。と水無は思わなくもない。

「姉さんにはわからないでしょうね。起きたら、頭がフワフワしてぐにゃぐにゃしてる状態がどれだけ不快なのか」

「ああ……それはわかるわけないねー」

起きたら二日酔いになっていた経験はあるが、起きたら酔っていたという経験はない。

「どうしてわからないんですかー」

「痛い痛い、やめんか」

無表情で間延びした声というアンバランスな火邪は水無の頬を抓った。お前も絡み酒かよ。

「ケーキ、食べていいですか？」

「どうぞどうぞ。どうぞお前の体のもんだ」

四つに切り分けたケーキ。水無と火無で一つずつ食べて、残りは明日食べるという予定だったのだが、まあいいだろう。

「甘くて美味しくないです」

一口食べてそんな事を言う火無。

「なら食べなきゃいいんじゃないですかー？」

ワインをコップにつきながら、投げやりに答える水無は、なんかもうやる気がない。あっ、ワインなくなつた。

「これ、神無さんが火無の為に買ったんですか？」

「そうだよー。それを選んで金を出したのは神無。物じゃないところが神無らしいというか、火無の事がわかってるというか」

「そうですか」

何だか複雑な表情を浮かべながら、火無はまずいと評したケーキを食べる作業を、黙々と再開する。

「去年の私の誕生日もケーキだったしー、一昨年はクレープを奢ってくれてー、三年前は何だったかなあ……ああ、神無と会ってねえやまだ」

過去を思い出し独り言を呟き、コップを片手にクスクス笑う水無は完全に酔っ払いである。



「あいつは形に残るのが嫌なんだろうなあって思ったもんだよねえ……まあ、今年は形があつたけど」

そこでふと、あの本どこにやったかなあと思い、キヨロキヨロ部屋を見回す水無。しかし見当たらない。はて、どこにやったっけ。

「ベットの下の下です」

ケーキを食べ終え、口の中が甘つたるいなあ。なんか飲む物ないかなあ。と、舌を出しながら飲み物を探す火邪がそう教えた。

「ベットのしたあ？」

何でそんなところにあるって思うんだ？と、半信半疑のままベットの下の覗きこむと、ベットの奥、壁の辺りにそれらしき物があつた。手を限界まで延ばして、なんとか届く距離。

「何でこんなところってなに飲んでるのお前！？」

魔法の本を手に入れた水無が見たのは、まだコップに半分くらい入っていたワインを一気に飲み干している火邪の姿であつた。

「あまり美味しくないですね。こんなのが美味しいなんて、姉さん、頭大丈夫ですか？」

「まずいと思うならすぐに飲むのやめろよ馬鹿！ああもう……一人で楽しみながらゆっくりと飲もうと思ったのに……台なしだあ」

空になったコップを逆さにして今にも泣き出しそうな水無は、 21

になったばかりのうら若き乙女である。

「口直しが欲しかったんです」

だからしょうがないじゃないか。

「冷蔵庫に麦茶があるだろ馬鹿！馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿なのかー！

！」

最後の一杯を飲まれたのが、よほどショックだったようだ。

「馬鹿なのは姉さんの方です。頭、大丈夫ですか？」

「馬鹿なのも頭の中が心配なのもお前の方だー！ああもう、なんなんだよお前は……何で出てきたんだよー。明らかに蛇足じゃないかー」

水無は膝をつき床を拳で叩いた。なぜこうなったー。

「私だって好きで出てきたわけじゃありませんよ」

火邪は拗ねた様子であった。久しぶりに水無とお喋り出来たというのに、馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿言われ、終いには出てこない方がよかったとまで言われ。もう少し労ってくれてもいいじゃないか。心配もしてあげたのに、本の在りかだって教えてあげたのに。

「……なに、お前泣いてんの？」

「泣いちゃ悪いんですか？」

火邪は泣いていた。というより、涙を流していた。それ以外はいつもと変わらないので、泣いているというよりただただ涙を流していたという表現の方が正しいかもしれない。

「ああ、もう………なんかごめん。私が悪かった」

泣かれると分が悪い。いつもは泣かないような奴が泣く時は特にだ。こつこつという時は早々と謝るに限る。

「なんかってなんですか。姉さんは私がどうして泣いてるかわかりますか？」

「どうしてかって？そりゃ………馬鹿って言われたから？」

もしくは泣き上戸？

「姉さんは本当に何もわかってませんね。頭、大丈夫ですか？」

ガツカリだぜ。と、呆れ顔で水無を見る火邪。勝手に流れてくる涙を拭って立ち上がり、覚束ない足取りで部屋を出る。

「頭大丈夫頭大丈夫って、今日私は何回聞かれた……？」

んー。なんか期待を裏切ってしまったようだ。なぜに？と、腕を組んで考えてみるもよくわからない。アルコールがいけないんだ！

「そんなに今日の私は頭が心配なのか？」

「そんな事を言ってる時点で心配はないようですね。火無的にはですけど」

冷蔵庫から麦茶を持ってきた火邪は、火無が使っていたコップに麦茶をくむ。ついでに水無のコップにもついであげる。不可抗力でテーブルの上が大惨事になったが、まあいいかと麦茶を飲む。

「わー！お前なにしてんだよー！」

水無は慌ててティッシュを取り、テーブルをふく。

「私が悪いんじゃないんです、コップが勝手に動いたのが悪いんです。本当ですよ？」

「真実は太陽の周りを地球が回ってるんだよ……っていつかお前、びっちょびぢゃ……」

火邪は麦茶を自分ではなく服に飲ませていた。

「私は悪くないんですよ？」

「はいはい、わかったから拭きなさい」

「本当にわかってるんですか？」

「お前は自分の今の状態をわかってるんですかー？ったく……」

なぜか両手でコップを持ったまま、一向にティッシュを受け取らない火邪に業を煮やした水無は、仕方なく拭いてあげることにした。

「少なくとも頭がおかしい姉さんよりはわかってますよ」

おとなしく拭かれる火邪。

「わかってるなら行動に移してもらいたいもんだよねー」

かいがいしくティッシュで火邪の口周りやら服やらを拭いている水無は、私何してるんだろうつて感じである。

「それが出来れば苦労しません」

「いや、出来るでしょ？コップから手を離して代わりにティッシュもしくはタオルを装備すればいいだけでしょ？」

「頭、大丈夫ですか？」

「なにそのフレーズ、もしかしてお前らの中で今日限定で流行ってるの？」

まあ麦茶だし染みにはなるまい。という感じで、水無は拭き終わった。

「結局姉さんは、何もわかってないんですね」

火邪は心なしか残念そうにそう言って、麦茶を口に運ぶ作業を失敗した。

「口の位置くらいはわかってるよ。お前とは違ってね」

水無はため息混じりにそう返し、タオルを取りに行くのだった。

その後、火邪がふて寝のような形で眠るまで、似たようなやり取り

を繰り返したが、火邪が言いたいことは水無には伝わらなかった。

それが水無にとってよかったのか悪かったのかは、定かではないが、少なくともそれは、火邪にとっては悪いことだったし、火無にとってはよいことだったのでした。

それも仕方がないこと。

今日は、火無の誕生日。

火無が主役の日。

主役に都合がいいようになるのは、仕方がないことである。

そして火邪が主役になることは、永遠にない。

今は・・・

9 - 5 ・教えられない気付かない(後書き)

というわけで夏休みが始まるぜ！

寒くなんかねえし！

次回は夏休みの一幕を予定してるって噂ですよ！

またね！

## 1・1・夏の風について

「おはようございますー!」

「まーす……」

「はい、おはようございます。よく寝れましたか?」

「うん! いっぱいお昼寝したよ! ねー、つくよちゃん?」

「……ん」

命ちゃんの問い掛けに、月読ちゃんは目を擦りながら、カクンと首を倒しました。

というわけで、そんな感じで、ここはくるみわり園。

時刻はおやつ時。双子な二人は、昼寝から起きて、事務室で夏なのに暑くないのかなあって思っちゃう修道服を着てデスクワーク中だった真奈美先生にご挨拶をしていました。

「ついさっき、さえちゃん達も起きたようですよ。外で遊んでるみたいだから、行ってきなさい」

「はいー!」

「……いー」

今日は珍しく、幼少組は全員お昼寝しました。

なぜなら昨夜、真奈美先生の怖い話で寝れなかったからです。マジ



怖かったです。真奈美マジックでした。言い出しっぺのさえちゃんも今朝、あれはないわー。マジないわー。引くわー。トイレ行けないわー。と、くまを作っておっしゃっていました。

「あつ、忘れてました。少ないけど、みんなで分けなさい。あと、帽子も忘れないように」

外に行こうとする二人に、畑で採ったプチトマトを数粒渡し、麦藁帽子を被せてあげる真奈美先生。

「ありがとうー！」

「とー……」

命ちゃんは真奈美先生からプチトマトを受け取り、一粒を自分の口に、もう一粒を月読ちゃんの口に放り込んだ。

「おいひいへー」

「んー……」

麦藁帽子に、口の中でコロコロとプチトマトを転がし、両手でプチトマトが逃げないように捕獲しているという、ある意味最強装備で、二人は外へ。

「あつ、あいひゃん」

玄関から出ると、夏の眩しさとアイちゃんが、二人に襲いかかってきた。

アイちゃんは何か慌てているようで、二人には目もくれず、びゃー

っと走りながら園内に入っただけだ。

プチトマト渡せなかった。しかしアイちゃんの目は、昨日真奈美先生が話してくれた宇宙人に似てるな。クリクリお目のアーモンドこわあい。

というような事を思いつつ、命ちゃんはまだ玄関の日影からは出ず、キョロキョロとさえちゃん達を探します。月読ちゃんはモグモグとプチトマトを咀嚼中。

「あつ、いはー」

さえちゃんはすぐ見つかりました。というか、庭にはさえちゃんしかいませんでした。

夏休みなので、小学生組も日中園にいるのため、庭はいつも大盛況だったはずだけど、今日は何故かいません。

何でだろー。と、命ちゃんは首を傾げる。月読ちゃんは、ゴックンとプチトマトを飲み込んだ。

「しょういえは、どこかひくってひってたへー」

さえちゃん達は、何故かいつもアイちゃんがいるブランコの近くにいたので（でもブランコで遊んではない）、そっちに歩きながら、命ちゃんは思い出した。

「うん、とーげいきよーしつだっけ？」

月読ちゃんは、リコピンと夏の太陽の力で覚醒したようだ。

夏休みということで、ちょっと遠出。今頃小学生組は陶芸教室で形あるものや形ないものを手に入れているだろう。幼少組は所事情で

お留守番。

「！ ネコだー！」

さえちゃんに近づいていくと、さえちゃんがなぜ、ブランコにいたかわかりました。そう、ブランコにネコが乗っていたのです。命ちゃんは、プチトマトを飲み込み、駆け出しました。

「ストップみこちゃん！」

ネコに近づき触ろうとする命ちゃんを、さえちゃんは止めました。

「えー、何でー」

命ちゃんは不服顔。隣の月読ちゃんは、ネコだあ。ちっちゃーい。と、物珍しそうに、ブランコで丸くなって眠っている様子のネコを観察中。

「さわったら逃げちゃうでしょ」

と、ネコがビックリしないように小声で言うさえちゃん。しかしさつき大声を出していた気がしないでもない。

「そっか」

と、納得する命ちゃん。キラキラと輝く目で、ネコを凝視。カワイイんですけどー。

「カワイイねー」

と、感嘆の声をあげる月読ちゃん。あくびしたよこの三毛猫超愛くるしいんですけどー。

「あっ、プチトマトあげるー」

命ちゃんはネコから目を離さず、さえちゃんにプチトマト贈呈。さえちゃんもネコから目を離さず、受け取り、口に放り込み、かみ潰した。さえちゃん、目を離したら逃げられるといわんばかりの気迫で凝視である。

「ねえねえつくよちゃん、ネコちゃんプチトマト食べるかなあ」

ネコと視線を合わせながら、素朴な疑問。

「たぶん食べるんじゃないかなあ。あげてみれば？」

ネコと視線を合わせながら、あっ、ヒゲ動いた！

「うんー！」

命ちゃんは早速プチトマトを「ダメ！」あげる前にさえちゃんに止められた。

「何でー」

膨れっ面な命ちゃん。

「私があけたいから」

そう言って、ほれ、よこせ。と手を差し出すさえちゃん。

「みことがあげるのっ」

ツーン。と、誰がやるかー。な、命ちゃん。

「ちちちちちー」

どこがで見た捕獲方法を試してる月読ちゃん。ネコは、はあ？なに  
してんの？というように半目をあげ月読ちゃんを一瞥した後、また  
目をつぶってしまった。なかなかふてえ奴だぜ。

「ちようだい！」

「やだ！」

「ちよーだいつ！」

「やーだっ！」

「怒るよー！」

「怒れば！」

「……二人で仲良くあげればー？」

月読ちゃんは、今にも取っ組み合いになりそうな二人を呆れ顔で見  
て助言。月読ちゃんは、二人とは違いそんなにネコに興奮していな  
いようだ。犬派なのかもしれない。

「むー……仕方ないなあ」



「違うもん」

「違うないもん」

火花を散らし合う二人。

ネコは鼻っ面に差し出されたプチトマトを嗅ぎ、何だこりゃ。肉じやねえのか。ならいらねえ。と、言わんばかりに鼻を鳴らしてまた目をつぶってしまった。

「食べないみたいだねー」

唯一その光景を見ていた月読ちゃんはそう結論づけたけど、「私のなら食べるもん」「みことのだけなら食べるもん」と、二人はまだ火花を散らす。

「ノラかなー。首輪ないしなー。でもなー、逃げないしなー」

もう勝手にして。という感じで、二人を気にせず、なかなか逃げないネコを観察して呟く月読ちゃん。

「あー！つくよちゃんたちだー！」

そこに響く新たな声。

声が出た方を向く月読ちゃん。

ほっぺを抓り合うお二人ちゃん。

「あ、はなちゃんらんちゃん！」

月読ちゃんは、こちらに走ってくるはなちゃんらんちゃんに手を振

った。関係ないが、ちゃんらんちゃん擬音っぽい。

二人は裏庭の方から現れた。前を走るはなちゃんは、夏の太陽のように輝く笑顔で、両手にネコじゃらしを複数本持っている。じゃらす気満々のようだ。

一方、後ろを走る、というかはなちゃん追いかけているらんちゃんは、一本だけネコじゃらしを持ち、心配顔で、はなちゃん転ばないかなあ。大丈夫かなあ。と思っている「あ！」結果、自分の足元がお留守になりこけた。はなちゃんはそれに気付かず、らんちゃんを置いていく。顔を上げて遠ざかるはなちゃんの背を見るらんちゃん。はまさに、転んだら置いてかれたんだ状態である。全力少女である。

「らんちゃん大丈夫!？」

月読ちゃんは慌てて、らんちゃんの側に駆け寄る。二人は「みこちやんのバーカ!」「みことバカじゃないもん!さえちゃんがバカだもん!」という感じでそれぞれどころではない。

「らんちゃん転んだのー?」

月読ちゃんがこっちに來た事で、ようやくらんちゃんが転んだ事に気付いたはなちゃん。地面に座りこみ、半べそ状態のらんちゃんに笑顔で声をかけた。

「うわあ、すりむいてるよ。痛い?」

今は夏。肌の露出が高い、半袖半ズボンだったらんちゃんは、手や腕を擦りむいてしまった。

「う、うん、すっごい痛いよ……あ、いや、ごめんなさい、いた



くないです……」

痛みを訴え、今にも泣き出しそうだったらんちゃんは、慌ててそれを撤回。首を横に振って、涙を拭いて。立ち上がる。

「ホントに平気ー?」

はなちゃんがネコじゃらして、らんちゃんをコチヨコチヨしながら、確認。

「う、うん、平気だよ」

明らかに痩せ我慢である。

「でも一応キズ洗ったほうがいいよ。らんちゃん、こっちきて。はなちゃんはネコと遊んで来ていいよ。はい、プチトマットあげる」

「つくよちゃんありがとうー!」

月読ちゃんから、プチトマットをもらい、それを口に放り込んだはなちゃん、弾丸のようにネコに向かってまた駆け出した。元気な奴だぜ。

月読ちゃんは、らんちゃんの手を引き外にある水飲み場へ。

「しみるっ」

「へ、へいき」

水で砂を洗い落とすと、結構痛そうです。

「ばんそうこーもらいに行こー！」

というわけで、そうすることに。

「え、いいいいよ。大丈夫だよ……」

「大丈夫じゃないよ。キズからはバイキンマンが入ってくるんだよ？かなちゃんたちの風邪がうつりやすいつてことだよ？風邪ひきたいの？」

「そ、それはやだあ」

かなちゃんとあかねちゃんは、風邪でダブルダウン。監禁中です。

「じゃあ、行こー！」

「う、うん」

というわけで、真奈美先生に会いに園内に戻る二人。

途中、なぜかお人形を抱えて外に走っていくアイちゃんとすれ違った。

おままごとでもするのかな？

もちろん、おままごとをするわけではない。

「じゃらしじゃらしー。私にじゃれてー」

「ほらほらー。みことにじゃれるんだよー」

「しっぽしっぽー!」

はなちゃんから受け取ったネコじゃらしで、プチトマト戦争からネコじゃらし戦争にチェンジしたさえちゃんと命ちゃん。持ってたプチトマトは美味しくいただきました。

トライアングルフォーメーションで、ネコをじゃらす。いや、背後に回ったはなちゃんはすでにじゃらすというより、叩くになってるけどね。ネコじゃらしで、ペちペちと。

「むー、じゃれない」

「ネコパンチしない」

「しっぽー!」

しかしこのネコ。愛想ってものがカケラもない。全く反応しない。しっぽとヒゲが少し動く程度。つまんなーい。いや、はなちゃんは楽しそうだけどね。

「……」

そこに現れる一人の少女。

「あ、アイちゃんもやる?」

それに気付く命ちゃん。

アイちゃんは、胸に市松人形を抱え、ジーツとネコを見えています。そして近づくアイちゃん。場所を譲る命ちゃんとさえちゃん。ピクツと耳を動かすネコ。しっぽを叩き続けるはなちゃん。

「……」

アイちゃんは距離が近づいたネコを、また凝視。その目には、カワイイとか捕まえたいとかいう気持ちはまるでない。ただ、何でそこにいるのお前。というように見えているだけだ。

「ニャー！…」

と、威嚇したのは、はなちゃんであった。なぜ威嚇したかはわかりませぬ。

ネコは目をあげ、あん？なに見てんだ？ここは今日から俺様の場所になったんだよ。というように、ふてぶてしい態度で、アイちゃんを見る。ネコと目が合い怯むアイちゃん。さつきはこれで諦めてしまったが、今回は違う。

「ミギヤー！…」

アイちゃんは、バツ！と、ネコの前に市松人形を突き出した。突然眼前に現れた人形に、ネコはビビったようだ。脱兎の如く逃げ出した。

「逃げたー！」

「捕まえろー！ネコ鍋にするんだー！」

「さえちゃん食べる気だったの!？」

「わたしハンバーガーがいいー!」

「それはダメ!ネコ鍋にするの!」

「ダメだよ二人とも!ネコちゃんは捕まえて大切に飼うんだよー!」

逃げたネコを追う三人。捕まるわけもないだろうけど、楽しそうだからいつか。

「……」

一人残ったアイちゃんは、ホッと胸を撫で下ろし、市松人形と目を合わせ、「ありがと」と頭を下げた。

そしてようやく取り戻した指定席に座る。膝の上にはもちろん市松人形だ。

「……」

そしていつもよりどこか満足気に、ブランコを漕ぎ始めた。

「あっちに行っただー!」

「こっちだよ!」

「木の上だよ!」

「……」

賑やかに楽しそうに、庭を駆け回る三人を見ながら、アイちゃんは  
ブランコの生温い風を、感じるのです。

おしまい・・・

## 1・1・夏の風にのって（後書き）

って、気付いたら100話越えてるじゃないですかー!!  
これからもよろしくね？

って、気付いたら文章目茶苦茶じゃないですかー!!  
いつものことでしたね？

え？けんちゃんはどうしたって？

……あの子は、転校しちゃったんだよ。

というわけで次回予告！

「田中さんが起きてこないですって？」

それはそんな些細な事から始まった。

「扉にも窓にも力ギ……しかしこれは明らかに他殺……そう、これは密室殺人です！」

絶海の孤島で起こった密室殺人。

「台風！？それじゃあ明後日の朝まで救助が来ないんですか!？」

密室で殺されたのは1人。

密室に取り残されたのは、11人。

「そういえば……佐藤と山田はどうした？」

そしてその数は増え、減っていく。

「この島には、魔女がいるんですよ。ええ、伝説ではありません。実際に彼女は、いるんですよ」

島に伝わる不可思議な伝説。

「あの場所には力ギが全部かかっていたのよ!? 犯人は、どこに消えたって言うのよ!!」

「あ、あんなこと、人間には不可能だ……! そうだ! 魔女だ! あれは魔女がやったんだ! 俺達は全員魔女に殺されるんだ! アハハハハ

八！」

「そ、そんな……さつきまでこんな物なかったのに……」

犯人は本当に魔女なのか。

「魔女？お前達、何を言ってるんですか。魔女なんているわけがない。いるのはいつも神様が、人間だけです。そしてここには神はいない。この密室殺人の犯人は、この中にいるです！」

探偵春風巡は、この難事件を解く事が出来るのか！

「もうこんなところにいられるか！俺は泳いでもこの島を出る！今すぐにだ！」

「私、犯人わかっちゃったわ」

「どこに行くんだ木下！みんな一緒に「この中に犯人がいるんだろ！？」5人も殺した糞つたれの犯人が！！そんな奴と一緒にいられるか！俺は部屋に戻る！！」

混乱し、次々と死亡フラグを連立させていく登場人物達！

「つまり……私の推理は、間違っていたということですか……」

「やっぱり魔女だ！魔女がやったんだよ！」

「魔女……ですか」

春風巡は、魔女の存在を否定し、犯人を見つける事が出来るのか。「え？木下さんが起きてこない？ならきつと、死んでるんじゃない？あら、そんな目で見ないですよ。12人だったのもすでに2人だけ仲良くしましよ？だって、起きて、来ないんでしょ？ノックしても返事、ないんでしょ？カギ、かかっているんでしょ？つまり密室、なんでしょ？今のこの状況でその状況って、死亡フラグよ。さあさあ、座りなさいな小さな探偵さん。どうせもうすぐ救助が来るんだから、密室を開かなくてもいいじゃない。あら、今の発言も死亡フラグだったかしら。ふふふ、気をつけましようね。最後の晚餐ならぬ、最後の朝食にならないように。お互いに、ね？」

ネコが笑うとき、全ての謎が開かれる。



次回『春風が吹くころに』

乞うご期待。

もちろん、嘘ですけどね！。

## 1 - 2 ・独言乱舞

「私は私、それ以外の何物でもありません」

ジャージ姿の巡は、ソファーで胡座をかきながら、そんな事を呟いた。その隣にはなぜか、幼児くらいの大きさがあるクマのぬいぐるみが、置いてある。

「この世に神様はいます」

目をつぶり、巡は先ほどからぶつぶつと呟いている。

「でも、役立たずです」

自分に言い聞かせるように、ぶつぶつと。

「何を言っても何をやっても、誰一人救わないクソ野郎です」

説明するように、ぶつぶつと。

「じゃあ私が代わりに神様やってもいいじゃないですか」

再確認するように、ぶつぶつと。

「というか、誰も救わねえ神様よりも誰かを救おうとしている私の方が神様じゃねえですか。どう考えてもそうです。それしかねえです」

言い聞かせるように、ぶつぶつと。

「というわけで私は神様です。異論は認めないです」

この結論しかないというように、ぶつぶつと。

「って、またこの結論じゃないですかー!!」

巡は、ソファアーの上で地団駄を踏んだ。胡座をかいたまま跳びはね空中で胡座を解いて行った行為にしては、なんとというか、幼稚である。

「私は結局神様に縋ってるただの弱い人間ですよー!!いや、それ以下だ!!神様と同一化しないと自分を保てないなんて脆弱にも程がある!!何なんですか何なんですか何なんですかー!!私って何なんですかー!!」

巡がクマに空中コンボを与えている間に、状況説明。

時刻は午後2時。巡がいるのは自室。とあるマンシヨンの一室の、1LDKのLの部分で、巡はクマと戯れているのだ。

ソファアの前には、冬には火燵に変身しそうなテーブル。壁際には大きな本棚と、高そうな薄型テレビ、その反対側には、もう一つの部屋に繋がるドアと、書斎にありそうな高級机と椅子、そしてデスクトップなパソコンが安置されている。

テレビラックには最近のDVDレコーダーとDVD。本棚の上にはこれまた高そうな、音楽機器。ベットやタンスは、恐らく隣の部屋だろう。

本棚の中身は、有名な少年漫画や少女漫画もあれば、一部の人は真面目に、一部の人は嫌悪感バリバリで、たいていの人は笑いながら読むオカルト系本、ファッション雑誌、専門誌、聖書、洋書から和書、文庫本からノベルズと、雑多な種類が乱雑に仕舞われている。

せめてシリーズ物くらいは、ちゃんと並べて仕舞って欲しい。そもそも雑誌を本棚に仕舞うのもいかな物か。

本棚とは違い、机の上はそれなりに整頓されている。パソコンの周りには鉛筆や調査報告書と書かれた怪しげな書類などが散らかっているが、机に置いてあるファイルはちゃんとナンバー通りに並んでいる。並んでる中には噂の、神様のメモ帳もあるところを見ると、この机が、神様の仕事場なのだろう。

全体的に部屋は片付いている。と言えば片付いているが、テーブルの上には空の栄養ドリンクやペットボトル、ゴミが入ったコンビニ袋が放置されている。昼食のゴミだと思われる。

キッチン綺麗だが、毎日ちゃんと掃除しているというよりは、使っていない綺麗さである。戸棚に即席ラーメンがあるので、多少は使っているようだが、ちゃんとした料理をしているとは思えない。冷蔵庫の中はきつと、飲み物しか入っていないだろう。

「だーっ！……疲れたです」

クマに空中コンボのフィニッシュを与えた巡は、クマを抱えて、今度はちゃんと、ソファに座った。クマの無機質な瞳が、大丈夫です。自分、慣れてますんで。と、虚しく語っている。日常茶飯事のようにです。

クーラーが熱心に働いている部屋とはいえ、108コンボを達成した巡は汗をかいていた。

「……ちっ」

巡はテーブルの上にあったペットボトルに手を伸ばし、口元に運ぶが、中身は空だった。

舌打ちと共にペットボトルを投げ捨て、クマのぬいぐるみを隣に置いて、投げ捨てたペットボトルを拾う。そしてそのまま、キッチン



巡は漫画を投げ捨て、クマからマウントポジションを取った。クマの無機質な瞳は語る。ええ、わかってますとも。さあ、おやりなさい。一思いに、人想いにおやりなさい。それでご主人の気が済むのなら。と。

「死ね詐欺師!!」

巡はそう言って、拳をクマの顔に叩きこんだ。

「お前に生きる価値って誰ですかこんな時に……」

さらに続けて拳をめりこまそうと、巡が拳を振り上げた時、チャイムが鳴った。誰か来たようだ。

全くこれからだというのに。

不満顔で巡はソファアから降り、玄関へ向かった。

「はいはい今開けるですよ」

二回目のチャイムにそう愚痴りながら、巡は相手を確認せず、カギを開けた。

「誰ですかって、猫猫子猫ですか」

「はあい、巡ちゃん」

ドアの向こうには、隣人、猫猫が立っていた。

猫猫は最近三十代に突入したけど若々しい（外見的にも内面的にも）女性であり、胡桃割市の高校で働く教員である。

「何か用ですか。ないならさっさと失せるです。私はお前とは違い忙しいです」

「ダメよ巡ちゃん。あんまりクマちゃんを虐めちゃ」

巡が鬱陶しいげにシッシツとしても猫猫は何のその。実に楽しそうだ。

「む。聞こえてたですか」

防音に不備があるようだ。

「もうバツチリよ？最近荒れてるわね。悩み事があるなら聞いてあげてもいいわよ」

「昼過ぎまで寝てるダメ人間に相談する程、危機的状況ではないです。静かにしててやるですから、二度寝に突入しろです」

猫猫は明らかに寝起きだった。澁刺とした表情と、肩耳につけている鈴のピアス以外の全てが、寝起きだと言っている。服装は、明らかにパジャマ。肉球マークが乱舞しているパジャマ。そしてボサボサの髪。間違いなく寝起き。隣が、つまり巡がうるさかったので起きたのだらう。

「すでに三度寝もしたから、もう睡眠は十分よ」

二度寝ではなく三度寝から起きたところのようだ。時間を考えれば、当然と言えば当然。

「本当に相談したいことないの？一応私、あなたのお父さんにあなたの事を気にかけてやってって、頼まれてるから心配んだけど」

「知らねえですよそんな事。相談したい事もないですし、父の頼みなんか忘れてもらって結構です」

「そう？私一応教師だし、悩み事を解決するの、得意なのよ？」

「そうは見えないです。じゃ、飲酒はほどほどにするですよー」

巡はそう告げ、ドアを閉めようとしたが、猫猫はドアを掴みそれを阻止。

「まだ何か？」

と、ちょっと機嫌悪げな巡。

「いや、巡ちゃん、美味しいゼリーがあるんだけど、一緒に食べないかなーって思ってたね？」

「ゼリーですか？まあ……食べてやらない事もないですけど……何を企んでるです？」

「別に何も企んじやいないわよ。一人で食べるより二人で食べた方がいい美味しいじゃない。巡ちゃんだって、夏休み突入で暇でしょ？世間話しながら、食べましょう。この前の事件の話とか、巡ちゃんの将来の話とか、大学の話とか、お友達の話とか、ね」

巡は、他意はなさそうな、悪い事は考えていなさそうな猫猫を、訝しげに見る。



巡の父から、猫猫は自分の事を頼まれたと言っているが、巡も父から猫猫に関して言われている事がある。いわく、猫猫子猫はいい人間だが、利用されないように気をつける。

多い週で一、二度、夕食を共にする程度の仲だが、なるほど確かに、猫猫はいい人間である。しかし、巡同様、影で暗躍する人間でもあるようだ。その事を周りには知られないようにする点は、巡とは違うが。

「……まあいいです。お前がそこまで言うなら、暇人の暇つぶしに付き合つてやるです。ちょっと待ってるです」

「はいはい、私、まーっわーっ。いつまでも、まーっわーっ」と

さすがに、クーラーをつけっぱなしにするほど、巡も地球を痛めつける気はない。

「そっといえば、猫猫子猫」

玄関からリビングに向かう途中、ふと、久しぶりに聞いてみるかと思ひ、巡は玄関でいまさら寝癖を直し始めた猫猫に問う。

「お前、神様はいると思うですか？」

「ええ、もちろんいるわ」

猫猫は即答した。

何かを悟りきつた。もしくは、何かを諦めてしまった人間だけが浮かべる事が出来る、儚なげで、寂しげな笑みを浮かべながら。

「神様は私達に見えないだけで、いつも私達の近くで見守ってくれ

ているわ。今だっけきつと、私の右に、私の左に、私の前に、私の後ろに、私の上に、私の下に、あなたの右に、あなたの左に、あなたの前に、あなたの後ろに、あなたの上に、あなたの下に、私とあなたの間。きつとどこかに神様はいて、私達を見守ってくれてるのよ。絶対にね」

猫猫はそう言っつて、ピアスの鈴を鳴らした。

その音は、夏の終わりに鳴る風鈴のように、どこか寂しげだった．．

## 1 - 2 ・独言乱舞（後書き）

さすがネコ！簡単に世界を行き来しやがる！！

自由過ぎるよネコ。カワイイよネコ。もふもふしたいよネコ。しっぽぺしぺししたいよネコ。肉球ぷにぷにしたいよネコ。いいよネコ。素敵だよネコ。でも近寄らないでネコ。くしゃみ、止まらなくなるから。

はい、というわけで、巡がクマと戯れるお話でしたー。

巡はきつと、バトル系ジャンルでもいける存在だと思います。

じゃ、次回予告。

「お姉ちゃん待つてよー！！」

「待たない。もううんざり。もうやだ。もう勝手にしろ」

それはある種必然の結末。

「よかったね水城さん。もう私、出てけなんて言わないし、思わない。バイバイさよならお元気で」

「お姉ちゃんー！！」

「せいぜい死ぬまでお達者に」

火無の呼ぶ声に答えたのは、ドアが閉まる音。明確な拒絶の、音。「どうしてどうしてどうしてお姉ちゃんはわからないのわかってくれないの私はお姉ちゃんの事を想ってお姉ちゃんの事を考えてお姉ちゃんの為に生きてるのにどうしてお姉ちゃんはちっともわかってくれないのどうしてお姉ちゃんは私の側からいなくなっちゃうのー！！」

部屋に木霊す、エゴの叫び。

「こうして私はまた、帰る家を失ったのでしたつと……ちつ、死ねばいいのに……私」

夏の夜に溶ける、自嘲の眩き。

「あいつのせいだ」

「さて、どうつすかなあ」

「当てもなく街を彷徨う水無。」

「あいつのせいだあいつのせいだ」

「あ、もしもし？よかったあ。寝てるたらどうしようかと思ってた」  
行く場所も帰る場所も失った水無が頼る人物は。

「あいつのせいだあいつのせいだあいつのせいだ　あいつのせいでお姉ちゃんは！！」

「というわけで、夏休みの間泊めてくれない？」

「あいつを殺す！！そうすれば姉さんは戻ってくる！！」

「ありがとう神無。持つべきものは肉親じゃなくて親友だ」

真逆の思惑を持ちながら、同じ目的地を目指す水城姉妹。

「はいはいどちら様ですかあ！？」

「これ以上痛い目に会いたくなかったら神無さんの家を教えなさい」とぼつちりを食らった巡は果たしてどうなるのか。

「お前は神社神無が好きなんじゃないんですか！？お前がやりたくないならやらなければいいじゃないですか！！」

「黙れ！！私は私であって私じゃないんです！！」

そしてついに姿を表す神無の姉。

「いらっしやい水城さん」

「あ、お姉ちゃん帰ってきたの？」

「……こんにちわ」

「はい、初めましてこんにちわ。妹がいつも世話になってます。さっそくだけど、一ついいかしら」

「何でしょうか……？」

「今すぐ出て行ってくれる？ここにいられて迷惑なのよ」

神さえ切り裂く完璧な存在の登場で、水無と火無、火無と火邪、そして水無と神無の関係はどうなってしまうのか。

次回『葉月に流れる水無月の涙』

T o b e c o n t i n u e d . . .

正直本編より、この嘘予告の方が書くの大変。  
なら書くなよとかは、言っちゃダメだよ？

### 1 - 3 ・水城の食卓

「お姉ちゃん今日の夕ご飯なにー？」

「んー？答えるまでもなく、カレーだよー」

という会話をしているのは、火無と水無。

日中、外は常人が出歩く事敵わぬ気温の高さだったので、文明の利器をフル稼働させながら、ホラー映画を嗜むという、大変有意義な時間を過ごした二人。

19時前後になり、そろそろ飯にするかー。と立ち上がった水無と、ベットに転がっている火無との会話であった。

「えー。お昼もカレーだったー。昨日の夜もカレーだったー」

不満なご様子の火無。

「カレーやだー！違うの食べたいー！」

必殺、ベットでバダバタ。効果、埃がまう。

「嫌なら食べなきゃいいじゃない」

しかし水無には効果がなかった。気にせず台所に向かい、二日目カレーを温める。うん、まだ二人分はあるな。明日の分はなさそうだけど。

昨夜、カレーを作ったのはもちろん水無である。少し火無も手伝った。最後にカレーを皿に盛ったのは火無である。

一人暮らし時代は、一度に四皿分作っていたが、昨日は八皿作った。

昨日の夕食、今日の昼食、そして今。単純計算だと、明日の朝食、もしくは昼食の分まである事になるが、残念。人の胃袋は単純計算とは食い違う事がよくある。まあつまり、火無がいつぱい食べたのだ。

「はい、上手に出来ましたー」

ちゃっっちゃかちゃー。と、カレーを温めている間に、大皿にキャベツをちぎり、キュウリをへし折り、プチトマトを飾り立てて、サラダが完成。

サラダをリビングに持っていくと、火無がベットから下り、テーブルの前に座っていた。なんだかんだ言っても、もちろん食べるのです。

「待つてるとご飯が食べれるなんて、いいご身分ですねー」

必殺皮肉。効果、相手に準備を手伝わせる事が出来る。

「くるしゅうないのですよー」

しかしニートには効かなかった。

「ったく……」

家事手伝いでさえないぞ。と、水無は内心で愚痴りつつ、皿にご飯をよそってカレーライスを作り、スプーンを刺して、運ぶ。

「わー、美味しそうー」

「いや、すでに味知ってるだろ」

水無はツツコミを入れつつ、空になった鍋を水に浸す。そしてコップを片手で二つ持ち、冷蔵庫から麦茶を取り出し、運ぶ。

「麦茶ー」

「あ、忘れてた」

さて、これで準備完了。と座ろうとしたが、箸とマヨネーズとソースを忘れてた事に気付く水無。また台所に戻り、箸を二膳取り、冷蔵庫からマヨネーズとソースを取り出す。

「お姉ちゃん、麦茶くんでおいた」

「その程度でどや顔しない」

箸を火無に渡して、ようやく座れる水無。

「いただきますーす」

「はい、いただきます」

ちゃんと手を合わせ、いただきますをして、夕食を開始。まず水無は、大皿サラダにマヨネーズをぶちまけた。火無も水無も、ドレッシングよりマヨネーズ派なので、問題なし。

「夏のカレーは最高だねー」

「さっき嫌って言ってた奴と同一人物とは思えないねー」



次に、カレーにソースをぶちかけて、さあいただきます。

「…………お姉ちゃん」

「ん？」

一口食べて、うん。タマネギ溶けてんなー。と水無が思っていると、火無が神妙な面持ちでこつちを見ていた。

「ずっと聞こうと思ってたんだけど……………ソースかけるの、何で？」

「何でって……………美味しくなるから？」

普通じゃない？

「えー……………」

「な、なんだよその、えーって……………」

火無がなんか引いていた。珍しい反応に、水無は怯む。な、なんか悪い事してるみたいだ。

「お姉ちゃんお姉ちゃん」

火無はスプーンを置いて、真剣な眼差し。

「私、お姉ちゃんの事大好きだよ」

「ああ、うん。どうもっ？」

「愛してるよ」

「はあ………?」

「お姉ちゃんがする事はたいてい許すし受け入れるよ」

「いや、それはちょっと信じられない………」

「でも、カレーにソースをかけるのは許せないしありえないし受け入れられないよ!!」

テーブルを力強く叩く水無。本気のご様子。

「ええ!?!」

そこまでの憤りを感じられているのですかとビックリな水無。そ、そんなにダメなのか?カレーにソース普通でしょ。

「ずっと我慢してたけど気持ち悪いよお姉ちゃん!!」

「ずっとそんな風に思ってたのかよ!!」

あの水無が、思った事はたいていすぐに口に出す水無が、ずっと言わずに我慢していたというのが、本気の証明であるような気がして、水無は大変傷ついた。

「そつだよずっとだよ!お姉ちゃんが小さい頃から、ずーっと、思ってたよ!気持ち悪いって!」

水無は小学生の頃から、カレーを初めて食した時から、カレーにソ

ソースをかけているのだ。筋金入りである。

「お母さんも言ってたよ！気持ち悪いって！」

幼き火無は、母親に相談したのだ。お姉ちゃんは、どうしてあんな気持ち悪い事してるの、っと。すると母親はこう答えたのだ。いや、あいつは元々気持ち悪いから仕方ないんだ。気にするな、と。

「お、お前らがどう思おうと知らねえし！！」

内心。え？そ、そんなにやばい？と思いつつ、強がる。

「私はこれからもソースをかけ続ける！だって美味しいから！ほら、お前もやってみ！そうすりゃわかるから！！」

そう言つて、水無は火無のカレーにソースをかけようとする。

「キモい！やめてよ食べれなくなるから！！」

だがしかし、火無は、命の危機を払い除けるかのように力強く、素早く、ソースを、水無の手を、払い除けた。

水無の手からソースが離れ、ソースが空中を舞い、カーペットに転がる。カーペットにソースの色が点々つついた。それはまるで、ソースが流した涙のようだった。

「あ……………」

「そ……………そこまで拒否しなくてもいいじゃん……………」

かつてない程のショックを受けている水無を見て、火無は我に返っ

た。

「いいもんいいもん……」

「ご、ごめんなさいお姉ちゃん。私、その、ずっと我慢してたから、その、ちよつと頭に血がのぼっちゃって……」

あたたと、さっきまでの自分は、責任能力皆無みたいな物でしたのでー。と言いつくする火無。

「美味しいもん、食べられないもん……気持ち悪くないもん」

水無は、半ベソでそんな事を呟きながら、もぐもぐとカレーを食べる。少し、幼児退行してます。

「お、お姉ちゃん？」

肩を揺さぶり猫撫で声で媚びを売る。

「……なに」

じと目で返す。

「お、怒ってる？」

ジャブの確認。

「別に怒ってないよ。お前は気持ち悪い私なんて気にせず、気持ち悪くないカレーでも食べてればいいじゃん」

ぷいっとそっぽを向き、拗ねたご様子の水無。

「うっ……うー、お姉ちゃん」

水無がかつてない程の怒り（先日の図書館以上だぜ）を感じていると察した火無は、どうしようどうしようと考える。

そしてふと目に入るカーペットに涙を染み込ませ続けるソースの姿。

「……むー」

ソースを手に取り、熟慮する火無。こ、こいつをカレーにかけるだ  
と？ありえない。し、しかしこれをかければ。

「……じー」

水無が、さあどうすんだよ。その手に持ったソースどうすんだよ。  
かけんのか？かけないのか？と、じと目で見る。

「うっ、うっ……！」

これをカレーにかければお姉ちゃんの機嫌は直るに違いないけど、  
気持ち悪いよソースかけるとかありえないよ。どうしてカレーにソ  
ースなんてかけるんだよソースって揚げ物にかけるものでしょ、カ  
レーは揚げ物じゃないよ。揚げ物じゃないのにソースかけるとか、  
サラダにケチャップをかけるようなものだよ。気持ち悪いよ。でも  
お姉ちゃんの機嫌がー。お姉ちゃんの試すような目がー。

「むー！！」

「そ、そんなに嫌なのか……」

水無は戦いた。火無が泣きながら、カレーにソースをかけようとしているのだ。その表情は苦渋に満ちている。火あぶりにされるか、重りをつけて池に飛び込むかという究極の選択を決死の覚悟で選んだかのような。決死とは、死が決まっているという意味の業界用語である。

「……ごくり」

「え？今、口で言った？思ったより余裕ある？」

火無は水無のツツコミを相手にする余裕もなく、生唾を飲みこみ、ソースに汚され穢され犯されてしまったカレーをスプーンですくう。しかし。

「うー……うー……うー!!」

「そ、そんなに嫌なの！？そんな唸る程の事！？普通に美味しいよ！？」

火無の手はそこで止まる。手が震え、視界は涙で滲む。食なきやダメだ食べなきやダメだ例え吐いたとしても食べなきやダメだと思うが、スプーンは一向に口元に運ばれない。スプーンから口元までの距離は僅かなはずなのに。いつもは刹那の速さで辿りつける距離なのにー!!

「にゃー……にゃー……!!」

「にゃー!!?」

火無が泣きながら鳴いた。水無はビックリした。

「……………」

そして、スプーンを持ったまま固まる。

「ひ、火無ちゃん？」

何で私が悪い事したみたい気分にならないといけないんですかー！。と思う水無。

「いえ、私は火邪ですけど」

火邪は答え、何でもないようにカレーを食した。そして、何事もなかったように食事続ける。

「お、お、」

「どうかしましたか？」

「お前が出てくる程の状況だったんですか今は！？」

「何を言ってるんですか？タバスコかけますよ？」

「かけんな！逆にお前がもっとソースかける！！」

「いえ、それはちょっと……………」

「まさかの拒否！？まずかったの！？」

「いえ、美味しかったですよ？」

「だ、だよー」

「そうとしか私には、答えられません」

「どういう意味だそれはー！！」

水無はその日、二度と火無の前でカレーを食べない事に決めた。

カレーにソースをかけるのをやめないで、カレーを食べるのをやめたのは、水無の意地である。



1 - 3 水城の食卓（後書き）

あ、今回は嘘予告とかありませんよー。

## 1 - 4 ・真夏の夜の空想

「……」

時刻は21時。小学生もまだ眠りにつこうともしないこの時間。すでに神無は眠りにつこうとしていた。

まだ眠くもないが、今日はもう、寝る以外にする事もないので、早々にベットに横になり、目をつむり、夢に招かれるのを待っている状態だ。

神無は毎日毎夜、眠いから寝るのではなく、寝る以外する事がないので寝る。という形で、就寝する。そのため、ベットに入ったのは21時でも、眠りにつくのは1時になる事もよくある事だ。神無はそれを苦痛とも時間の無駄とも思っていない。むしろ、1番好きな時間と思っている。

「……」

暗闇の中、身動きせず、ベットに身を預け、天井を見つめ、考えた瞬間忘れるようなどうでもいい事をつらつらと考える、もしくは妄想する時間が、神無は好きだ。

神無は今日一日を天井に思い浮かべる。朝は6時に起きた。リビングに下りるとすでに父と母が朝食を食べていた。自分の分の朝食の前に座り、神裂がいなければあんたみたいな使えないゴミの朝食なんか用意しないだけどねえ。という母のいつもの愚痴を聞き、母が姉を絶対に思っている事、自分は親にとってはゴミである事、自分が姉と親に甘えてる事を再確認しながら、朝食を食べる。

食べ終えてからは、自室で静かに過ごす。クーラーなんていう贅沢品は神無の部屋にはないが、南と北に窓があるので、両側の窓を開けて風の通り道を作り、ボロい扇風機を回せば、ずいぶん涼しい。

インターネットで知識や豆知識や無駄知識を調べたり、読書をしたりと、物音を立てずに過ごし、昼食と夕食の時に親と会話をし、寝る。それが神無の休日である。

「……ん」

暗闇の中、勉強机に置いていた携帯が勝手に光った。メールか電話がきたようだ。

勉強机の明かりをつけ、携帯を開くと、水無からのメールだった。内容は「カレーにソースはおかしくないよね!？」というものだった。突然どうしたんだろうと思いつつ「うん。別におかしくないよ」と送る。

数十秒で返ってきた。「美味しいよね!？変じゃないよね!？気持ち悪くないよね!？」なんか必死だなあと思いつつ「うん。美味しいよ。変じゃないよ。気持ち悪くないよ」と返す。

今度は数秒で返ってきた。「どうして美味しいか、このバカに教えてあげて!」ああ、火無さんになんか言われたんだなあ。水無、カレーにソース凄いかけるからなあ。と思いつつ、カレーにソースをかける美味しくなる理由を思い出しつつ「ウスターソースは、リングとかトマトとかニンジンとかタマネギとか、野菜や果物がいっぱい入れて作られてるから、かけるとコクが増えて美味しくなるんだよ」と打ち、送信。

「……」

今度は返信がすぐには来なかった。神無は椅子に座ったまま、網戸の向こうから聞こえるカエルの合唱を聞き流す。

窓を開けたまま寝るのは危ないかもしれない。でも暑いしな。まあ、お姉ちゃんがいるからどうにかなるか。あ、今日はお姉ちゃん帰ってきてないっけ。でも、お姉ちゃんならここにいないくてもどうにか

出来そうなもんだ。セミとカエルは、昼と夜で住み分けているのだから。明日は本屋にでも行こうか。クーラーがあるお姉ちゃんの部屋で寝ようかな。いや、ばれたら怒られるか。お母さんとお父さんに。そんな事はつらつらと考える事、数分。メールが返ってきた。『コクって、なに？』火無さんに聞かれてうまく説明出来なかったんだな。と、神無は苦笑しながら『味に深みがある。単純じゃなくなる。色んな味がうまく絡み合って、美味しいってこと。飽きない味って、ことなのかな？』と打つ。打ってる途中で、自分でもよくわからなくなつたが、まあいいやと思い、送信。

また数分経つてから『この分からず屋め！Thank you！おやすみ！』というメールが返ってきた。この分からず屋め！は、書かなくてもよかつたんじゃないかな。と思いつつ『どういたしまして。おやすみなさい』と送り、携帯を机に置き、明かりを消し、ベットに戻る。

「……………仲良しさんだ」

暗闇の天井を見ながら、神無はそう呟いた。そして天井に、水無と火無が、ウスターソースをかけるかかけないかで、喧嘩をしているシーンを思い浮かべてみる。すぐ、想像できた。ほほえましい。今度は自分と姉がウスターソースで喧嘩をするのを思い浮かべてみる。が、無理のようだ。

私もお姉ちゃんも、ウスターソースをかけないから。というだけじゃないだろうなあ。喧嘩は対等じゃないと出来ないとかいうし。

「……………クレープ食べたい」

神無は天井に、山盛りのクレープを思い浮かべる。すでに、さっきまでの空想は忘れた。

想像し、忘れて、また想像する。神無は死んだように眠る時がくるまで、ベットでぼんやりと、そんな遊びに興じるのでした。

1 - 4 ・真夏の夜の空想（後書き）

更新スピードがあ……。

今回はまた図書館。子供達の出番かな。

気長に待ってね。

## 2 - 1 . 私の言う事を聞け

「上げて落とすのかー……ん？」

それはある晴れた昼下がりのお話。

火無が昼ドラを見ていると、水無の携帯が鳴った。

台所で洗い物をしている水無は気付いていないようなので、優しい火無は、携帯を確認する事にした。

メールではなく電話のようだ。アドレスに登録されていない番号なのか、名前は表示されていない。

「これは浮気の予感！」

というわけで、火無は電話に出た。

「もしもどちら様！私のお姉ちゃんに何の用だ！二度と電話してくんな！バカ！死ね！アホ！」

「アホはお前だー！！」

「あう！」

台所から戻ってきた水無に、火無はチョップされ、携帯を取られてしまった。

「ったく………すみませんでした」

「お姉ちゃん！浮気を許しませんよー！！」

火無の言葉を手であしらいながら、水無は台所に戻った。火無がいるところでは、静かに電話出来ないからだ。

「お姉ちゃん、電話誰からだったのー」

電話を終え、戻ってきた水無に、ベットに寝転がり状態な火無は聞いた。膨れっ面で、怒ってますアピールも忘れない。

「図書館。あんたのカード出来たから取りに来てって。これから行くけど、あんたも行く?」

外出準備をしながら、水無は一応聞いてみた。

「えー、図書館ってあの嫌な奴がいるところでしょー」

「そうだよー。ってか、今の電話もあの司書さんからだし。妹さんも是非来て下さいってさー」

「絶対やだ!」

「あっそ。じゃ、お留守番よろしく」

「それもやだ!」

「じゃあ、どうすんの?」

「お姉ちゃんが出かけないで、部屋で遊べば万事おっけー!」

「はい、却下」



「お姉ちゃんお姉ちゃん、部屋は涼しいよ?」

「知ってるよ」

「そして外は暑い!」

「知ってるよ」

「だから出かけない方がいいよ!」

「そういうわけにもいかないから。冷蔵庫の中も補給しないとけないし」

「上げて落としたのにお姉ちゃんが屈服してない!？」

「いつ上げられて落とされたのかもわからんし、屈服の意味もわからん」

火無に引き止められつつ、水無は外出の準備を終えた。

「いやー!!お姉ちゃん、いーかーなーいーでー!!」

「離れんかバカ!!」

水無は足にしがみついて離れない火無を、なんとか引き離そうとするが、これがなかなかうまくいかない。

「お姉ちゃん、図書館は危険がいっぱいだよ!!」

「図書館はここよりは安全だよ!ここっていうか、お前だけどね!」

「お姉ちゃん、あつちは暑いんだよ?」

「知ってるよ」

「お姉ちゃん、こっちは涼しいんだよ?」

「知ってるよ」

「じゃあ、今日は外出しないでごろごろしよ?」

「しないって」

「お姉ちゃん、分からず屋!」

「分からず屋はお前!置いてかれるのが嫌なら一緒に来ればいいでしよって言うてるでしよ!来るなどは一言も言っていないからね私今日!」

「私は図書館には行きたくないの!」

「私は図書館に行く!」

「じゃあやだ!」

「じゃあ行つてきます!」

「置いていかないで!」

「じゃあしいわ!」

「みぎやー!!」

水無は半ば本気で、火無を蹴り飛ばし、近くにあった鈴枕を投げつけた。買った当初は使い道皆無かと思っていた鈴枕だったが、対火無迎撃用に使用出来る事が最近わかってきた。

「じゃ、行ってきます！お土産は期待すんな！」

「お、お姉ちゃん待ってー……うう、鈴痛いよー」

火無が鈴の聖なる力（笑）に当てられ、動きが鈍っている間に、水無は家から脱出したのだった。

2・1 私の言う事を聞け(後書き)

導入部分。

## 2・2・子供のお化け

「すいませーん。水城ですけど、図書カードを受け取りに来ました」

暑い中、なんとか図書館にたどり着いた水無。カウンターに誰もいなかったたので、奥にいるだろう司書さんと呼んだ。

すると、奥から火無と一悶着あった司書さんが出てきた。出来るなら別の人がよかった水無は、嫌そうな顔をしてしまった。だって、絶対面倒な事になりそうだから。

「……はあ、何なんだよ」

案の定である。水無はロビーの隅にあった二人掛けソファーに腰掛け、ため息をついた。

ただ、カードを受け取るだけなのに、30分かかった。その30分のうちで、何度司書さんをお姉さんと、呼んだか。というか呼ばされたか。数えきれない。火無の分まで言わされた。勘弁して欲しい。

「……」

精神的疲労から回復した（10分はかかった）水無は、ロビーを眺める。夏休み期間だからだろうか。どうも子供が多い気がする。広いロビーで、鬼ごっこやかくれんぼでもしてるのだろうか。少々騒がしいが、誰も叱ろうとしない。まあ、一階は読書スペースではないからいいのか。と、水無は解釈した。

「やけど……」

子供達の観察をやめ、水無はこれからどうするか考える事にする。すでに用も終わったので、図書館から出て、食料品を買い、帰ってもいいのだが、火無の相手をする事を思うと、気が進まない。特に読みたい本、借りたい本もないが、もうしばらく図書館で時間を潰そうか。

「そついや、三途さん家の舞歌さんは今日もいるの」「うらめしや  
く」「うらめしやー」

「ん？」

水無の独り言を遮るかのように、古典的な脅し文句を豆腐並の破壊力に下げた声が聞こえた。しかも二つ。

声が出た方、つまり背後を見るが、そこには大理石つばい壁しか見えない。見えないが……。

「……」

壁とソファーの隙間から、クスクス笑いを噛み殺すような気配がある。そういえばこのソファー、なぜか壁から少し離れたところにあったな。水無は、また面倒な予感。と、顔をしかめながら、壁とソファーの間を覗きこんだ。

「あ、つくよちゃんが笑うから見つかつちゃったよー」

「命が笑うから見つかつちゃったんだよー」

「……なにしてんの君たち」

壁とソファーの隙間には、見知った一つの顔が二つあった。双子な

月読と命である。

「かくれんぼしてたの！」

「そしたら水無お姉ちゃんがきたの！」

「気付いてないみたいだから脅かす事にしたの！」

「うらめしや〜！」

「うらみしや〜！」

「お、おう……なんか絶好調だね君たち」

水無は二人の波状攻撃に怯み気味だ。

月読と命は隙間から出ないまま、ケタケタと無邪気な笑みを浮かべながら、水無に話しかける。

「水無お姉ちゃんは何しにきたの？」

「水無お姉ちゃん一人なの？」

「本借りにきたの？」

「神無お姉ちゃんは？」

「マンガ読みにきたの？」

「巡お姉ちゃんは？」

「ねーねー、一緒にかくれんぼしようよー」

「上にね。あの背の高い人いたよ」

「ねーねー、いいでしょ？」

「神無お姉ちゃんと巡お姉ちゃんもどこかにいるの？」

「お、おう……数秒前のは奇跡か何かなのか。一人ずつ喋れ」

月読と命は顔を見合わせた後、ジャンケンを始めた。

「ジャンケン、ポン」

グーとグー。

「「あいこでしょ」「

チヨキとチヨキ。

「「あいこでしょ」「

パーとパー。

「「あいこでしょ」「

チヨキとチヨキ。

「「あいこでしょ」「

グーとグー。

「…………双子クオリティ？」

「みことの勝ちー！」

「僕の負けー…………」

あいこが続くこと数十回。勝ったのは命だった。命はバンザイ。月読はガツカリ。

「はい、んじゃあ、そっちのおチビちゃんから」



「神無お姉ちゃんと巡お姉ちゃん是一緒じゃないの？」

「一緒じゃないよ。今日は私一人」

「そうなのかー……」

命は見るからにへこんだ。

「残念だったね。はい、じゃあ、次はそっちのおチビちゃん」

「一緒に遊ぼうよ！」

「みことも遊びたい！」

命も追従した。お早い復活である。

「やだ」

水無は拒否。

「やだ！」

「やだー！」

双子も拒否。

「おチビちゃん達は、おチビちゃん同士で遊んでなさい」

「おチビちゃんじゃなくて月読なのー！！」

「みことなのー！！」

狭いところで器用に、駄々をこねる二人。

「はいはい、月読ちゃんと命ちゃんねー。いい子だから静かに遊んでようねー」

水無は二人の頭をよしよしとおざなりに撫でる。そう、静かにしないといけない。ここは図書館。そしてこの二人は、かくれんぼ中。大きな声を出したら、見つかってしまう。見つかってしまう……？

「……ハッ！」

水無がその意味に気付いた時には、すでに遅かった。

水無が背後を振り返る。つまり壁側ではなく、ロビーの方に体勢を戻すとそこには、見たような顔と見知らぬ顔がたくさんあった。水無は子供達に囲まれていたのだ。

水無の中のコマンド『逃げる』の成功確率が、ぐーんと下がった。

## 2・2 子供のお化け（後書き）

こんな感じで、これからは行くところかな……

## 2・3・口々各々好き勝手

「遊ぼうよー」

「遊ぼうよー」

「遊びたい遊びたい遊びたいー！」

「遊びたいーい」

「うん」

「私も遊びたいもん」

「ねむー」

「そ、そうだね」

「わたしは別に遊びたくないけど」

「お姉様、お茶飲む？」

「……か、帰りたい」

私、絶対保育士にはなりたくない。水無は、そう思った。

水無は今現在、九人の子供達に取り囲まれ、一人の子供を膝にのせていた。

どうやらこの子達は、みんなくるみわり園の子供達のようにだ。みんな、肩から麦茶が入ったペットボトルをさげている。

水無が名前がわかるのは、ツクヨミノミコト（まだ隙間）かなちやん（長袖長ズボン。ハイキング？）あかねちゃん（なんか不機嫌）の、四人だけ。残りの六人は、顔は見たことあるけど、名前はわからない。水無の膝の上を勝ち取った（壮絶なジャンケン大会が行われた）、自分にキラキラとした目を向け、お姉様呼ばわりしてくる女の子の名前も不明だ。なんだろう。どこことなく火無と同じ匂いがある。

「……おチビちゃん達は、何で図書館にいるのかな？」

とりあえず、遊びたいコールは無視の方向で、水無は子供達に尋ねた。

すると、子供達は口々に各々説明を始めた。わからなかった。

最終的に、リーダーっぽい子、さえちゃん、が一人で説明した事によると、今日は社会科見学（遠足と言っていたが水無はそう解釈した）で、みんなで電車に揺られここまで来た。後一時間（四時まで）ここにいなきゃいけないらしい。他にもいるのだが、二階や三階で本を読んでいるか、本を読んでもらっているらしく、ここにいるのは読書なんてつまらない子供達らしい。

「だから外で遊びたい！」

「ふーん……」

さえちゃんはそう締めくくったが、水無が見た感じでは、この中の全員が、外で遊びたいと思っではないようだ。数人、遊ぶより本読みたいけど、空気読むか。というのがいるようだ。空気を読んだというより、自分の意見を言えなかったというのが正しいかもしれないが。

「外で遊びたいなら、勝手に遊べば？」

水無は膝の上の女の子が執拗に進めてくる麦茶を、手で遠慮しながら、提案してみた。

「いいの!？」「ダメだよさえちゃん」

さえちゃんが、え、マジで!??と、目を輝かせたが、かなちゃんが苦笑混じりで口を挟んだ。

「勝手に外でちゃダメなんだよ。先生と一緒にじゃないといけないの」  
かなちゃんが言うには、そういう事らしい。

「じゃあ、私が一緒でもダメじゃん。先生じゃないよ私」

知らない人と遊んじゃいけねえな。よし、帰ろう。という流れ希望。

「水無姉ちゃんならいいと思う！」

「思う！」

背後から双子の声。

「私もそう思う！」

「私も」

さえちゃんとかなちゃんも同意。他の子も、頷いたり眠ったり起こしたり興味なさげだったりお茶飲むだったり、同意気味。

「……何で？」

「水無姉ちゃんだし」

「水無お姉ちゃんだし」

「前来てたし」

「先生達も知ってるから平気だと思います」

「うん」

「怒られるのは私達じゃないもん」

「ねむ……」

「は、はなちゃん起きて」

「わたしはよくないと思うけど、あんたが遊びたいならいいんじゃないの」

「お姉様なら何をしても許されます」

「……外行きたいなら、先生呼べば？」

数人、変なのがいたな。と、思いながら、水無は提案した。

「それが出来たら苦労しない！」

さえちゃんがプンスカしながら言うには、今、くるみわり園ではカゼがブームらしい。今日の遠足は、全員参加だったらいいのだが、カゼ引きはもちろんお留守番。

「アイちゃんとくるみお姉ちゃんも、カゼ引いて今日はお留守番なの」

「それはそれは……お大事に」

かなちゃんも補足を聞き、水無は少し安心した。あの二人はいないのか。安心。特にあの市松人形がないのは、心穏やかだ。

「先生たちもカゼ引いたんだよ！だらしないなー！」

「たまに来る人達もいるけど、足りないよね」

くるみわり園のカゼは、子供達だけでなく、先生達にも牙を向いたようだ。

「あー、つまり？ただでさえ少ない先生達が？二手に別れ、しかも

休みもいるから、あんたらみたいにな、おとなしくしていない奴らの面倒まで手が回らないってことかな？」

「その通り！」

「パチパチ！」

背後からお褒めの言葉と音。

「だから外行けない！つまんない！」

「私たちは、おとなしい方だと思うけど……」

「うん」

「信頼されてるからこうやって自由なんだもん」

「……すー」

「た、立つたまま寝た？は、はなちゃん」

「わたしがおとなしくないわけがないでしょ」

「お姉様の頭の良さに、私メモメモ」

周りから十人十色なお答え。

「言われてみたらそうだな……」

確かに、おとなしいからこそ、勝手に外に出ないという信頼を勝ち得ているからこそ、こうやって遊び回っているのだろう。

「だから外で遊ぼうよー」

「遊ぼうよー」

「もうここで遊ぶのあきた！外行きたい外行きたいー！」

「私はどっちでもいいよ」

「うん」

「私も本より太陽を感じたいもん」



「……くねくね」

「は、はなちゃん!？」

「ちよ、そいつ近づけないで!くねくねやめて!」

「私はお姉様の側にいられるのなら、どこでもいいです!」

「決定!」

「わーい!」

「オニごっこがいい!」

「え?決まったの?」

「うん」

「私は日光浴がしたいもん」

「くねくねくね」

「は、はなちゃんがおかしくなっちゃったよ!どうしよどうしよ!」

「い、いいから近づかないで!あっち行きなさい!わたしは見ないわたしは見ないくねくねを見ないから!」

「お姉様のためなら、例え火の中水の中土の中スカートの中です。スカートの中……」

「わかった!わかったから!遊んでやるから黙れ!混乱するから!そしてお前らはいいい加減隙間から出てこい!そこはそいつを早く起こせ!無理ならこっち持ってこい!くねくね止めてやるから!そしてお前は変なところ触るな!なんか怖い!」

こうして、なし崩し的に、水無は子供達と遊ぶことになったのだった。

2・3・口々各々好き勝手(後書き)

くねくね……くねくね……くねくねー！

## 2 - 4 ・水無の子供回し

「で」

いっこうに出てこない月読と命をソファアープレッシャー（ソファアーと壁のサンドイッチ）で叩きだしながら、くねくねと踊りながららんちゃんときえちゃんに連行されてきたはなちゃんを、つむじ（停止スイッチ）を連打して覚醒を促し、膝の上ののって足をさすってくる女の子（名前不明）を膝から蹴落として代わりにのせ、で、である。

「なに？外で遊ぶわけ？」

まったくくねくね踊らないように、はなちゃんを抱き抱えながら水無は尋ねる。それを見た名前不明の女の子が、どこから出したのか、ハンカチを噛み締めて、「妬ましい！」と言っているが、スルーの方  
向だ。

「遊ぶわけー！」

「わけー！」

双子がぴよんぴよん跳びはね、喜びをアピールした。

「おにごっこやりたい！」

さえちゃんが具体的な遊びを提案した。

「でも、車とか危ないよ？」

かなちゃんが現実的な危険性を示した。

「うん」

名前不明な女の子が、どれかに同意した。

「私はひなたぼっこがしたいもん」

名前不明な女の子が、新しい選択肢を提案した。

「くね」「だまらっしやい」

はなちゃんは、くねくね言う前に、水無にスイッチを押された。

「は、はなちゃん……」

らんちゃんは、はなちゃんを心配した。

「くねくねなんか怖くないくねくねなんていないくねくねなんか知らない……」

あかねちゃんは、自分の想像力に怯えていた。

「妬ましい妬ましい妬ま」「なるほどなるほど……」

水無は最後の名前不明女の子をスルーした。その子だけでなく、後の四人はスルーしていいだろうと判断した。

「んじゃ、だるまさんが転んだね」

水無は全員の意見を聞き、そう結論づけた。

「何でー!」

不満の声をあげたのは、体を動かすのが大好きなさえちゃんだった。

「くー」「私一人で全員を見張れないからだよ。おチビさん達は、おにごっこに夢中で駐車場に飛び出し、車にひかれないといい切れるのかなー?」

はなちゃんのほっぺをつまみながら、水無は尋ねる。

「その危険が外でやるおにごっこのだいごみなのだ!」

「やかましい」

水無の手加減チョップがさえちゃんに炸裂した。

「ねー」「それに、ひなたぼっこしたいとかいう奴もいるし。おにごっこをしながら、ひなたぼっこは出来るか?ん?」

はなちゃんの口をたこにしながら、水無は尋ねる。

「やる気があればできないことはあんまりないのだ!」

「やかましい!」

「いたあい!」

水無の本気チョップがさえちゃんに炸裂した。さえちゃんは頭を抱

えて苦しんだ。

「でも、だるまさんが転んだも、ひなたぼっこ出来ないと思うんですけど……」

チヨップに怯えているのか、かなちゃんが恐る恐る聞いた。

「くー」「だるまさんが転んだをしている近くのベンチで、光合成、じゃなくてひなたぼっこでもしてれば？」

ぺしぺしとはなちゃんの頭を叩きながら、万事解決案を提示する。ようは、全員が目の届く範囲にいてもらえばいいのだ。

「あ、なるほどー」

「私はそれでいいもん」

かなちゃんと名前不明女の子は、納得したようだ。

「ね」「あんたらもそれでいいですかー？」

はなちゃんの耳を引っ張りながら、水無は他の子供達に確認をとる。

「はい」

「いいよー」

「うん」

双子と名前不明女の子は同意した。

「は、はなちゃんを、いじめないで欲しいなって……」

らんちゃんは、「ごによごによと水無に、やめてあげてよー。

「虐めてないって。これは愛の鞭って、暴れんなバカ！」

膝の上でくねくねと、海藻のように動き出そうとしたはなちゃんを抱きしめる形で、水無は拘束した。それを見て、名前不明な女の子も、海藻みたいにくねくね動き始めたが、みんな無視した。

「おいこらチビちゃん。ふざけてるのかなー？寝ぼけてないだろお前」

「ねーねー、お姉ちゃんくねくねって知ってるー？」

はなちゃんは、無邪気な笑みを浮かべながら、水無に聞いた。

「知らん。ただ、なんか怖そうという事は知ってるし、それをするとその二人がビビるといふ事は知ってる。だから、やめる。わかっただ？」

「くねくねはねー、たんぼに出るんだよー。それからねー」

「は、はなちゃん、その話はやめようよー」

はなちゃんが楽しそうに、くねくねの話をするのを、らんちゃんがおどおどと、止めに入った。

「そつだよはなちゃん。僕もその話もう思い出さなくなーい」

「みこともー」

「あれはよくない」

「そうだね。私もやだ」

「うん」

「私もやだもん」

「わたしは知らないわたしは知らない夢に出てこないで……」

「妬ましい」

一人を除いて、他の子供達もやめて欲しがってるようだ。

「くねくねはねー。白くてねー。ひらべったくてねー。くねくむぎゆ」

「はいはい、わかったから静かにしようねー」

その空気に無理に抗い、くねくねについて聞くほど、水無は好奇心旺盛ではなかった。後で、神無に聞けばいいし。はなちゃんの口を塞ぎ、説明を一度強制終了させ、抱っこして、ソファーから立ち上がる。「私も私も！」と、言ってくる名前不明はもちろん無視するし、水無の耳元で「くねくねはねー」と、小声で言ってくるのは、まあいいや。

「さて、んじゃ、外行くぞー」

「「おー!」「」

「おにじつこー!」

「さえちゃん、諦めなよー」

「うん」

「ひなたぼっこだもん」

「くねくねにはねー。前と後ろがあつてねー」

「は、はなちゃん」

「……あ、いや、わたしは別に怖くなんかないし」



「きいー！」

水無と愉快的な仲間たちは、そんな感じで、ロビーを後にしようとした。

2・4・水無の子供回し(後書き)

続きはWebで。

## 2 - 5 ・第一次水無戦争

ぞろぞろと九人の子供を引き連れ、一人抱っこしながら、水無は図書館から出て、図書館の横にある憩いの場所に行こうと思っていた。が、しかし。

「お、お姉ちゃん……」

「げっ……」

出入口で、水無に出会ったその瞬間、諦めた。

どうやら水無は、夏の太陽と鈴の魔力（笑）に何とか打ち勝って、水無を追い掛けてきたようだ。汗、すごいです。

そんな大変な思いをして、ようやく図書館にたどり着き、水無に出会えたと思ったら、なんか周りに色々いたわけで。水無は驚愕したわけで。

「お姉ちゃんに隠し子が……！！」

そう思ってしまうのも仕方ないのです。火無的には。

「ちげえよ……」

水無はうんざり声で否定する。これからの展開を考えると、もうやだ。

案の定、子供達が騒ぎ出した。

「ねーねー、水無姉ちゃん、あの人だれー？」

「だれー？」

「早くおにごっこしようよー!」

「さえちゃん、ガマンしなよ……」

「うん」

「ひなたぼっこだもん」

「遠くにいてねー。むしめがね、じゃなくてー、そーがんきよーでねー」

「はなちゃん……」

「だ、だからさっきまでののは、演技だからねっ。全然、こわくないから。く、くねくねなんて、こ、こわくないし」

「お姉様の素足ハアハア」

「むむむむむー!」

水無に懐いているような子供達を見て（特に最後の一人）火無は驚愕から怒りにシフトチェンジした。

火無は大股で距離をつめる。怒りオーラを敏感に察知した子供が、水無の後ろに避難した。抱っこされているはなちゃんと、素足ハアハアしてる女の子はそのままである。

「お姉ちゃん!」

火無は一メートル程度のところで立ち止まり、水無を力強く指差した。

「浮気は許さないと申ったでしょ!」

そしてよくわからない事を言う。

「お前は本当に残念な奴だな……」

水無は、呆れ八割。疲れ二割のため息をつく。

「水無姉ちゃん、うわきつてなにー？」

「なにー？」

「うきわ？」

「それは違うよ……」

「うん」

「プールにも行きたいもん」

「そしたらねー。見ちゃだめって言うてねー」

「こ、こわいよー……」

「わ、わたしは怖くないけど、泣き虫が怖いなら、手をつないであげて」

「すべすべー」

ざわめく子供達。

「信じてたのに！私、お姉ちゃんの事を信じてたのにー！」

「信じてたらこんなとこまで来ないんじゃないかなー」

テレビで聞いたようなセリフをはきながら、地団駄を踏む水無を、めんどくさげに水無は見る。実際面倒。

「水無姉ちゃん、あの人だれー？」

背後に隠れた子供達の代表として、月読が水無の服を引っ張り、聞いた。

「妹」

水無は顔をしかめながら、答えた。妹とは認めたくねー。という気持ちは滲んでいる。

「水無姉ちゃんの妹？」

「本当にお姉ちゃんだったの？」

「おにごっこはー？」

「……さえちゃんには、おにごっこしか見えてないの？」

「うん」

「私も妹だもん」

「おとーとがねー。そーがんきよーでねー」

「……似てない」

「ちょ、耳元でポソって言わないでよ泣き虫！怖いじゃない！じゃない！」

「妹……！」

「そこのガキ……！」

火無は水無の後ろに隠れている月読を指差した。月読と命は、ビクツとなつて、背筋を伸ばした。

「さつきから水無姉ちゃん水無姉ちゃんって！お姉ちゃんは私のお姉ちゃんなんだから、水無姉ちゃん言うな！！バカ！死ね！どっか行け……！」

「……！」

「あ、あの人怖いよつくよちゃん……」

月読と命はふるふる震えて今にも泣きそうである。

「バカって言った奴がバカだ、バーカバーカ！！お前が死ね！」

「ちよつとさえちゃん！そんな事言つちやダメだよ！」

「うん」

「つくよちゃんをいじめたら許さないもん」

「そしたらねー。おじいちゃんがきてねー」

「……」

「……にらむなら、わたしの前でにらみなさいよ泣き虫」

「……」

月読に対して酷い事を言った火無に、敵対心を向ける子供軍団。水無は天井を眺め、めんどくせー。なるようになれー。

「生意気なガキ！！お姉ちゃんから離れる！！あつち行け！！」

「……怒られた、僕、何も悪くないのに、バカって言われた、死ねつて言われた、悪くないのに……」

「つ、つくよちゃん？」

「お前があつち行け！バカ！バカ！」

「こ、ここは私たちがあつち行った方がいいと思うなーって」

「うん」

「負けないもん」

「おまえも見たのかっておじいちゃんが言ってねー」

「あ、あの、ちが、わ、わたし」

「ほら、早く何か言いなさいよ。わたしにかくれないで言ってやりなさいよ」

「……」

「うううううううう……！！」

なかなか水無から離れない子供に、火無の鬱憤が溜まっていく。

「がおおおおー!!」

そして爆発した形が、がおー!だった。バンザイして、自分の体を大きく見せ、大きな声と一歩前に進む事により威嚇した。

「み、水無さん、またねー!」

「ちょ、なーちゃん私はまだ戦えるー!」

その威嚇で、場の收拾に動いたのは、かなちゃんだった。さえちやんの手を引っ張り、ぴゃーっと逃げたす。

「水無姉ちゃんって呼んだだけなのに、なのに死ね言われた……僕悪くないのに……」

「つくよちゃん、いっつ。ねっ」

命もそれに続く。目に涙が溜まり始めてる月読も、一緒に連れていった。

「次はこうはいかないもん」

「うん」

名前不明コンビも、走りさる。

「は、はなちゃん。はなちゃん!」

らんちゃんもみんなの後に続くため、はなちゃんに手を伸ばす。ちなみにあかねちゃんは、もう逃げた。捨てゼリフくらい、はいて言うて欲しいものだ。

「ほら、チビちゃん。お帰りの時間だよ」



「やー!」

水無は、はなちゃんを下ろそうとするが、はなちゃんは嫌がる。

「まだくねくねの話、終わってないーのー!」

「は、はなちゃん、わがまま言わないの!みんなもう行っちゃったんだから!」

「やーなーのー!最後まで話すのー!」

「うっ、うう、うー……」

らんちゃんが涙目で、水無に助けを求める。助けてくれそうなのが、水無しかいないのだ。一人は腕を組み、後一分は待ってやろうという感じだし、もう一人は、あれだし。

「……そのチビちゃんが、続き聞いてくれるってさ」

「ふえ?」

「らんちゃんほんとー?」

「う、うん?」

「ならいくー」

はなちゃんはニッコリ笑って、水無から離れ、らんちゃんの手を引き、去っていく。話を聞いてくれるなら、誰でもよかったようだ。

そして残りの子供は一人。名前不明な女の子は、水無の足に引っ付き離れない。

「お姉様は今日から私のお姉様です!!」

そして宣戦布告。

「な、なんだとー!!」

火無の闘争本能に火がついた。

「………帰ってー」

水無は天井を眺め、ため息をついた。

## 2・5・第一次水無戦争（後書き）

結局最後まで、あの、もんもん言う子と、うんうん言う子の名前が  
出ませんでしたね。きっと、考えるのが面倒だったのでしょう。

## 2・6 プレッシャーに勝つ褒美

「……」

舞歌は、読んでいた本から顔を上げた。聞き覚えがある声が出た気がしたからだ。周りを見るが、夏休みの宿題をやっている学生や、静かに本を読む大人の中に、知り合いはいない。さつき現れたうるさい子供達もいない。

気のせいか。舞歌は、また読書に戻る。

舞歌がいるのは、小町図書館の三階。窓際の四人席を一人で使うという、リッチな環境で、午前中から読書にふけている。

午前中は静かに読書をして過ごし、昼時には一階の飲食スペースでコンビニのサンドイッチを食べた。ここまでは、夏休みの舞歌のいつも通りの日々だった。

午後になり、いつもと違う事が起こった。子供軍団が現れたのだ。舞歌が知っている子供は、舞歌を知っている子供は、あかねとかなの二人だけだったが、あの子供達は、仲間が知ってて優しいと判断したら警戒心がなくなるといふシステムでもあるのだろうか。遊ぼう遊ぼうとやかましかった。ので、忙しいを理由に怒鳴ったら、いなくなった。

その後は、また、いつも通り読書と外を眺めるといふ日課に戻っていたわけなのだが。

「……」

舞歌は、本から顔を上げ、何だか騒がしい、階段の方を見る。本棚が邪魔で階段自体は、ここからは見えないが、誰かが命がけで逃げてるような、必死な足音がする。そしてその音がこっちに近づいて

いる気がする。

舞歌が足音を追うように首を前方から、右へ動かす。

「……」

なぜか子供を抱き抱えながら、本棚と本棚の間の通路をひた走る水無と目が合った。合った瞬間、通り過ぎていった。と、思ったら戻ってきた。そしてこっちに、必死の形相で走ってきた。そして何も言わず、机の下に潜り込んだ。

「……なに？」

舞歌は机の下を覗きこもうと思ったが、別の騒がしい足音が近づいてくるのに気付き、覗きこむのをやめ、先程同様、足音が聞こえる方を見る。

すると、先程同様、本棚と本棚の間をひた走る火無と目が合った。合った瞬間、通り過ぎていった。と、思ったら戻ってきた。そしてこっちに、ニコニコ笑顔で近づいてくる。なぜか手に、広辞苑を持っている。

「こんにちは」

「……どうも」

邪気がないからこそ相手を警戒させるような笑みを浮かべながら挨拶してきた火無に対して、舞歌は軽く会釈で返す。

「あなた、確かお姉ちゃんの知り合いだね」

「……まあ、一応は」

舞歌の足を、水無がツンツン突いている。舞歌はそういう、言語以外での意思疎通は苦手なのだが、今回に限りは、水無の言いたい事がわかった。つまり、匿ってくれという事だろう。

「はあ……」

何だか前も似たような事があったな。と思い、舞歌はため息をついた。面倒だ。

「ため息をつくと幸せが逃げるんだよ。知らないの？」

「知ってますよ。だから何ですか」

「別にどうもしないよ。あなたが不幸でも、私関係ないし」

「そうですか。で、何か用ですか？」

「お姉ちゃんどこ？」

火無は、舞歌が知っている前提で、聞いた。そして、広辞苑で机を叩く。重い音がした。舞歌の気のせいではないだろう。この広辞苑、火無にとっては、読むためのものではない。別の用途で使ってる。

「あつちに走っていききましたよ。非常階段で、外にも行ったんじゃないですか？非常事態みたいでしたし」

舞歌は興味なさげに、頬杖をつき窓の外を見ながら、答えた。窓の外からは、先日、水無と火無が使っていたベンチが見える。

「本当？」

「私は友達より命が大事ですからね」

「ひどいやつ」

「あなたに言われたくはないですけど、まあ、私もそう思いますよ」

「ふーん……あっちかー」

火無は机を広辞苑で、小刻みに叩きながら、思案顔で、非常階段の方を見る。舞歌の言葉を信じるべきか、悩んでいるのだろう。

「ねえ」

こつちを見ない舞歌に火無は確認する。

「お姉ちゃん、本当にあっち行っただの？」

「行きました」

一度はね。と、心の中で呟く。

「嘘じゃない？」

「嘘じゃありません」

「隠してない？」

「隠してません」

「机の下、見ていい？」

「どござ」

足首を掴まれたが、舞歌は表情を変えず、素面を突き通す。

「……まあいいや」

舞歌の反応から、信じる事にしたのか。火無は机の下を確認せず、広辞苑を片手に、非常階段へ走っていった。

「……はあ」

舞歌は目だけで、その姿を追い、ため息をついた。

そして水無を蹴った。

机の下から「いたっ!？」と聞こえたが、まあ、水無のせいであるなプレッシャーを受けるはめになったのだから、蹴るくらい許されるだろう。と、舞歌はほくそ笑みながら、もう一度蹴るのだった。



2・6 プレッシャーに勝つ褒美(後書き)

次回、謎の女の子の驚愕の正体が!?

## 2・7・ふつつか者と力持ち

「で、今日はどうしたんですか？」

舞歌は、机から這い出して対面に座った水無に尋ねた。

「どうしたって……図書カードをもらいにきたただけなんだけどね……」

「図書カードをもらいに来るのも、命がけですか」

「ふっ……」

黄昏れた。頬杖をつき窓の外を、遠くを見る。ああ、どこか遠くに行きたいな。

「お姉様……」

と、思っている水無の隣に座っている女の子は、すでにどこか遠くにトリップしているようだ。水無に抱っこされたのがたいそうよかったようだ。

「……何ですかこいつ」

そんな女の子を嫌そうに見る舞歌。

「なんか気持ち悪いですね」

「正直過ぎる」

否定はしないけど。水無は苦笑いだ。

「こいつのせいでホント全く……愚痴っていい？いいよね？」

「出来ればいち早く立ち去って欲しいとこですけどね。私、広辞苑で死ぬとか、まぬけな死にかた嫌ですから」

「大丈夫。広辞苑で死ぬの、私だけだから」

サムズアップでやけっぱちだぜ、イエーイ！をアピールな水無。

「ならどうぞ」

本を開いて、読書の片手間に聞く気満々な舞歌。

「お姉様は私が守ります！」

トリップから戻ってきた女の子。

「はいはい、君は静かにしててねー」

水無はおざなりに頭を撫でて女の子をまたトリップさせてから、愚痴という名の状況報告を始める。

「子供がさあ、いたわけだよ」

「私のところにも来ましたよ。追い払いましたけど」

「お前が追い払ったのが私に回ってきたわけだよ」

「それはそれは……災難ですね」

「人事ですか。まあそうだけどー。で、遊ぼうとして外に出ようとしたら、妹参上」

「遊んであげる事にしたんですか。相変わらず、優しいですね」

「別に。暇だったから。気まぐれだし。優しいには程遠いぜ」

「水無さんがそう言うなら、そういう事にしておきましょうか」

「お姉様は優しいです！ぜひお姉様の妹にして下さい！」

「はい、君は黙ってようねー」

「ふみや〜」

猫をあやすように首を撫でると、女の子は長時間、夢の世界に旅立つのだ。水無は勘でその事がわかるのだ。舞歌はその光景を、この人、なんだかんだ言っただけ子供好きだよな。と、冷めた目で見るのだ。

「では話しを戻す」

話しの腰を折る女の子がトリップしたので。

「どつぞ」

「火無が他の子供達を追い払ったんだけどさー。なんかこいつだけ、離れなかったわけよ。で、火無激怒」

「モテモテですね」

「全然嬉しくないけどね。そして始まる、理解不能な争い。お姉ちゃんはそのものだ。お姉様は私のです。お前のお姉ちゃんじゃないわ。今日から私のなんです。ハハハ、私は私の物だ。お前らの物じゃね」

水無は乾いた笑いを漏らしながら、机に突っ伏した。よほど、不毛な戦いだっただろう。

「それで、妹さんが先にぶちギレですか」

「そうそう。全く短気な妹だよ。目がマジだったよ。火邪出てくるかと思っただよ。慌てて逃げたわ。挑もうとするこいつを抱き抱え走った。私は走った。脱兎の如く。メロスの如く」

「そいつを置いていけば、水無さんの命は安泰だったと思うんですけど」

「私は加害者家族にはなりたくない……」

「そうですね。優しいですね」

「今の発言で優しいに飛躍するか普通？まあいいや。で、舞歌に匿ってもらい、なぜか蹴られ、今に至る。いや、ギリギリの戦いだっただね。さすがに子供を抱き抱えながら全力疾走は厳しかったし。途中で火無の視界から逃れられたのは奇跡に近かったね。ありがとう神様！」

「いない存在じゃなくて広辞苑に感謝するところじゃないですか？」

武器（広辞苑）を手に入れる時に、視界から逃れる事が出来たと思われる。

「なるほど。広辞苑ありがとう！」

なむなむ。と、本棚の方を向いて拝む水無。

「さて、私はちょっとこいつを、仲間の元に帰してくる」

こいつ。と、女の子の頭を叩く水無。それをスイッチに女の子帰還。目の焦点が水無に合い、ぺこりと頭を下げた。

「私は今日からお姉様の家が家になりました。ふつつか者ですが、よろしくお願いします」

「意味わからん。っていうかお前誰だよ」

まだトリップしてやがる。と、女の子の頭にチョップを連打。

「私はお姉様の妹の、ななです。小学二年生です。得意料理は目玉焼きです。毎朝、美味しい目玉焼きをお姉様にけんじょします」

「はいはい、それはありがたいですけどねー。あなたには他に帰る家があるでしょー？帰りましょーうねー？」

「私の帰る家は、お姉様のいる場所と、今日決まり、あ、あ、やん、あー！やー！嬉しいけどやーなーのー！お姉様と帰るのー！おーろーしーてー！」

「じゃ、またねー」

暴れるななを肩に担ぎ上げ、水無は笑顔で舞歌に手を振った。

「はい、また」

水無さん力持ちだなー。と思いながら、舞歌も手を振り返す。

水無は恐らく二階に向かったのだろう。二階は、子供向けエリアが豊富だから、そこに他の子供達がいると考えたに違いない。

「…………お人よしですね」

舞歌は、遠くから聞こえる「お姉様のケチー！妹が一人増えるくらいいいでしょー！」という喚き声が聞こえなくなった後、そう呟き、また、いつも通りの平穏な日々に戻ろうとした。が、ドン。という鈍い音が、それを許さなかった。

「あのガキの声がこの辺から聞こえた気がしたんだけど」

「……………気のせいじゃないですか？」

いつの間にか近くにいた、笑顔の仮面をつけた火無に、舞歌はそう答えた。

広辞苑で死ぬのは、やっぱり私ですか。そんな事を思いながら。





2・7・ふつつか者と力持ち（後書き）

サブタイが思いつかない季節になりましたね。

## 2・8・変なのは、どっち？

「ねーねー。どういう事かなー。気のせいかなー。ねー。もしかしてもしかしてだけど、あなた嘘ついたのー？ねー。どうしてこっち見ないのー？」

「私は空が好きなんですよ。あなたよりね」

舞歌の目は夏の空を見て、耳は火無の甘ったるい声と、広辞苑が机を小刻みに叩く鈍重な音を聞く。聴覚遮断して！。

「あなたは空、お嫌いですか？」

「私は空より海が好きだなー。あ、お姉ちゃんに今度海に連れてってもらおう事にしよー。えへへへ、お姉ちゃんの水着姿ー」

「……………」

舞歌は横目で火無をちらつと確認。だらしなく緩んだ顔で、虚空を見つめている。水無と海で戯れる妄想に浸っているのだろう。ぶっちゃけ気持ち悪いが、水無が戻ってくるまでそのまま置いてもらいたい。が、それは無理な話である。

「あ、そういえば、空が青いのは、海が青いからなんだよねー。海の色が空に写ってるんだよー」

「……………そうですね」

まだ逆ならわかるけど、それはないだろ。と、舞歌は思ったが、訂

正すんのも面倒なんでテキストに流しておく。

「って、そういう話をしてたんじゃないでしょうか!！」

火無が広辞苑をおもいつきり、机に叩きつけた。先程までの小突いた時とは比にならない程の大きな音と振動が、舞歌に伝わる。

「……あなたが勝手にそんな話題にしたんじゃないですか」

ため息をつき、空を見る。ああ、悩み一つもなさそうな、青い空が羨ましい。

「お前が空が好きかなんか聞くからいけないんだ!変な事聞くな!」

「じゃあ話しかけないで下さい」

「どうしてそうなる!」

「あなたが話しかけるから、私が話す。なら、あなたが話しかけないなら、私は話さない。そうすれば、私はあなたに変な事は聞かない」

「そうか!」

「そうですよ」

「……」

「……」

「……騙したな!!」

「はあ？」

「喋らなきゃお姉ちゃんの居場所を聞けないじゃないか！騙したな！バカ！悪人め！死んで償え！」

「ちょっと意味がわからない……」

「いいからお姉ちゃんの居場所を吐けよバカ！忘れたなら叩いて思い出させてやるうか!？」

火無は広辞苑を振り上げる。舞歌はそれを見て、舌打ち。めんどくさい。付き合い切れない。

「図書館では静かするっていう常識すら知らないのかよお前は」

空から火無に視線を移し、机を指でタップして苛立ちをアピール。

「さつきからこつちが下手に出てりゃ、意味がわからない事をペチャクチャとうるさい奴だ。あんたの姉がどこにいるかなんか知るわけないだろうが。勝手に探せよ。どうして私が知ってる前提だよ。勘か？それならその勘を使ってお前の大好きなお姉ちゃんを探せばいいだろうが。私に関わるな。嫌いなんでしょ？奇遇ですね。私も嫌いですよあんたみたいな妹はね」

「……………」

「っ!」

火無は無表情で舞歌は見つめた後、無言で広辞苑を舞歌の頭に振り下ろした。舞歌はその広辞苑を両手でなんとか頭に当たるのは防いだ。手、痛い痛い。

「……私が聞いてた情報だと、あなたは水無さん以外には暴力を振るわないんじゃないか？」

また広辞苑を振り下ろされないように、広辞苑を頭の上で掴みながら、舞歌は聞く。

「それは私じゃなくて火邪の設定でしょ。私はむかついたら誰にでも暴力を振るう。人間だもん」

火無は無表情で、まばたきもせず舞歌を見つめる。

「その気持ちを抑えられるのが人間だよバカが。さつさとお姉ちゃんを捜しに行け。ここにはいないから、広辞苑は私が片付けといてやるから、さつさと失せろ」

「ちゃんと死なないように抑えるよ。殺す暴力は火邪の役割だから。ねえあなた名前何だっけ」

「あなたが広辞苑から力を抜けば教えてやってもいい」

重力と火無の力に、舞歌は負けそうである。このままでは広辞苑の角で頭をグリグリされてしまう。

「お前は、なんか、変」

「お前に言われたくない。いいから広辞苑を、どっにかしろ」

「この前の事、お姉ちゃんに言った？」

「何の事かわからん。それより力を抜け」

「そこは協力的。でも今は違う。あなた、何なの？」

「お前が何なんだよ。広辞苑は調べる物だぞ」

「なんか変。私はどうしてお前に話しかけてるの？」

火無は思い出したようにまばたきをして、首を傾げる。

「あなたなんかどうでもいいし、嫌いですらないから、さっさとお姉ちゃんを捜しに行けばいいのに。何で？」

「……知らねえよ。自分の事を他人に聞くな。他人が知ってるわけねえだろ。自分知りたきゃ自分に聞け。もしくは広辞苑読め」

「なんか変だなー」

火無は振り下ろした時同様、急に広辞苑から手を離れた。

「なんだろう。なんかおかしいなー。夏だからかなー。変だなー。19才になったからかなー。おかしいなー。水城火無って、こんなのだっけー……」

火無は、ぶつくさそんな事を呟きながら、フラフラと、夢遊病患者のように立ち去った。

「……何だあいつ。意味わからん」

火無が去って行った方、非常階段の方を見ながら、舞歌はそう呟いた。

手には広辞苑。まさか本当に、自分が返すはめになるとは。立つ鳥後を濁しまくり。舞歌はため息をつき、広辞苑がある本棚に向かうかと思っただが、それはまだ出来そうもなかった。

「あなた、いつの間に火無とあんなに仲良くなったわけ？」

「……はあ」

何故なら、水無が火無同様、いつの間にか側にいたからだ。

さすが姉妹。息の合った波状攻撃。と思い、舞歌はため息をつくのだった。疲れる。

2・8・変なのは、どっち？（後書き）

エターナルフォーススーパーアルティメット広辞苑クラッシュ。  
相手は疲れる。



## 2・9・逆らえない言葉

「広辞苑は私が返しといてあげよう。悲しいかな。私はあれの姉だから」

「それはどうも。心中お察しします」

舞歌は水無に広辞苑を渡して、読書に戻る事にした。

「おつと残念。まだ君は読書は出来ないのさ」

「……何するんですか」

しかし舞歌の対面に座った水無に、本を奪われてしまった。

「何をするって話をするのさ。君にはちょーつとばかり、聞きたい事がなきにしもあらずなんだよねー」

「……思ったよりお早いお帰りでしたね」

頬杖をつき不自然にニコニコする水無から視線を反らし、話も反らす舞歌。

「ああまあね。ちょい一悶着あったけど、ちょうど帰るところで助かった。あいつらは先生達に逆らう程、ガキじゃなかったね」

「ガキはガキですよ」

「そう?」

「ええ、そうです」

「そうか。まあそういう事にしとくか。さて、本題に入ろうか」

「……本題ですか。一体何を聞きたいんですか？」

今度から席、変えようかなあ。この席は面倒事に巻き込まれるようだ。舞歌は窓の外から見えるベンチを見下ろしながら、そんな事を考える。

「んー。何を聞きたいかと言われると、何を聞けばいいんだろうって感じなんだけどさー……」

水無は腕を組み、考える。

「なんか変なんだよねー？なんつーか、私の知らないところで色々変わってる気がするんですよ舞歌さん。私が知らないうちに、色々と首を傾げておかしいなー。」

「あなたが知らないところで、みんな生きてるといふ事でしょうそれは。当たり前の話ですよ」

「そうかな？」

「そうですよ」

「そりゃそうか。だけど、それが意図的に隠されてたら、当たり前か？」

「水無さんが何を言いたいのか、私にはよくわかりませんね」

「それは君がこっちを見てないからじゃね？私の顔を見れば、わかるんじゃない？私の顔を見ていつ火無と出会ったのかを、私に教えるべきじゃね？」

「私今、空を見るのに忙しいんですよ。あ、水無さんは空と海、どっちが好きですか？」

「空は好きだけど飛行機は嫌いだから、海の方が好きと言えるかも知れないと思っただけど、クラゲが嫌いだから、どっちもどっちだな」

「そうですね。妹さんは海が好きと言っていましたよ。さらに、海に連れてけと言っていました。私に構ってる暇があるなら、妹さんに構うべきではないですか？」

「妹さんには十分構ってるつもりなんだけどねー。しかし、マジかよー。海とか絶対行きたくねー。海は泳ぐものじゃなくて、眺めるものだと思わない？」

「全面的に同意します。塩水の中で泳ぐなんて、意味がわかりません。漬け物願望か何かなんですかね」

「いや、違うと思う。そんな願望、ないと思う」

「そうですね」

「そうですね。で、お前はいつ火無と出会ったわけ？今日が初対面って感じじゃなかったよね？」

「……たい焼きとたこ焼き、どっちが」「おいこら話し反らしてん  
じゃねえよ」

「なんのことやら」

「惚ける意味がわからん。もしかしてお前、今の状況楽しんでね  
？」

「それなりに」

「それはよかったねー」

水無は、嘆息。机に突っ伏し、ぐてー。舞歌は雲を眺めて、あ、ソ  
フトクリームだー。

「……」

「……」

「……」

「……はあ、いつからいたんですか？」

「お、真面目にやる気になった？」

無言圧力作戦成功イエーイ。水無はニヤリと笑って体を起こす。

「いつから？ そうだね。火無が、お前なんか変じゃね？ って言った  
あたりかな」

「そうですか。それはそれは……」

「……それはそれは、なに？」

「いえ、別に。悪運が強いなと思って」

「あんたが？」

「いえ、妹さんが」

「あっそ。で、いつ会ったわけよ？夏休みに入る前は会ったなんて事、聞いてないけど」

「……言ってませんでしたからね」

そついう事にしとくか。

「え？」

てつきり夏休み中に会ったのかと思ってた水無は、驚いた。

「夏休み前に会ってたの？マジで？てつきり私は、ほれ。この前図書館に私と火無が来た時に出会ったのかと。あのベンチ、私が熱中症で倒れた」「熱中症で、倒れた？」

舞歌は驚いた顔をして、水無を見た。

「え？違った？」

「違ったも何も……ちっ」

そういうごまかしをしたのかよ。舞歌は口の中でそう呟き、苦虫を噛んだような顔で、また空を眺め、水無にテキストに嘘をつく。

「ああ、そうでしたそうでした。熱中症。熱中症でした。すっかり忘れてましたよ。私が慌てて駆け付けて、案の定水無さんに返り討ちをくらったんです。そんな感じでした。ええはいもう。うっかりしてましたよ。あはははー」

「…………あれだよ。お前、騙す気ないよね」

「私は本当の事を言ってるんですから騙す気なんてありませんよ。人聞きの悪い事言わないで下さいよ全くもう。世間体があればいいですよ。壁に耳あり将棋に歩ありでしたっけ？」

「違うし。色々違うし。三途さんってばそんなキャラだっけ？あはいはい、騙す気はないけど隠す気はあるみたいな感じですか？」

「私が水無さんに隠し事なんかするわけないじゃないですかあははははー」

「おい、なんかやけになってるぞ。はあ全く……いや、別に君と火無が知り合っただってというのは何ら問題ないわけよ。うちの妹に手を出してんじゃないよ、なんて言うキャラじゃないからね私」

「言っつのは妹さんですか」

「イエース。だからねー。舞歌ちゃんが最初から、この前会いましたー。恐ろしい妹ですねー。みたいに言ってくれたら、私もこの手

を使わなくてすんだんだぜ？もうなんか、意地でも口を割らせたくなつた」

「この手？」

舞歌は、不穏な単語を言った水無を訝しげに見る。

「ふふふ、私には神無とお前を無条件に従わせる魔法の言葉がある！というか知ってる！」

水無は悪役顔で宣言した。

「はあ、魔法の言葉ですか……………あ」

何言つてんだこいつ。と、可哀相な物を見る目で水無を見ていた舞歌の表情が、驚愕に染まる。思い至つたのだ。自分が逆らえなくなるであろう魔法の言葉を。単語を。物を。

「食べ物力を誠に恐ろしいね三途舞歌！理由は知らんがお前はつてちよつと待てこらー！！アイスクリームアイスクリームアイスクリームー！！」

脱兎の如く逃げ出した舞歌に向け、魔法の言葉『アイスクリーム』を連発したが、舞歌は耳を塞ぎ「あー！あー！あー！」と騒ぐ事により聴覚を遮断し、魔法の言葉を脳内に入れられないようにした。

「クソー……………何だあいつ。二つの意味でそこまでー？」

舞歌に逃げられてしまった水無は、悔しさ八割心配二割の表情を浮かべた。

二つの意味というのは、そこまでしないとアイスクリームの誘惑に勝てないのかよ。という意味と、そこまでして自分には隠したい事があるのかよ。という意味である。

「……まあいいか」

後を追いかけてようとも思ったが、水無はやめた。追いかける事だけではなく、舞歌と火無が自分に隠している事を探るのも、やめた。それは、二人が隠している事が重要な事ではないと思ったからではない。むしろ逆だ。舞歌があそこまで、図書館内で奇声を上げて走つてまで、隠そうとするのだから、よほどの内容であると推測出来る。

「隠し事は、火無が私に知られたくない重要な事と、考えるのが順当か。最近あいつ、特に火無が変な気もするし。しかしそうになると、何で舞歌がそれに負担するかがわからねー。あいつは依存するタイプだと思っただけだなー。脅されるような奴じゃないだろうし……」

ぶつぶつと、窓の外を眺めながら水無は考える。

「まあ……舞歌と火無が友達になれそうとわかったのはいい事と判断するか」

火邪は、不安もあるが、神無のおかげで変わってきてるけど、火無は神無じゃ無理っぽい。巡は論外。舞歌が変えてくれりゃ、ラッキ―だな。

「……ん」

そういえば。舞歌の読んでた本を奪ったままだった。勝手に返却し



といていいのだろうか。何読んでたんだろ。と、思い、水無は舞歌から奪った本のタイトルに読む。

「ポジティブになる100の言葉……」

水無は、思った。

見なかった事にしよう。

## 2・9・逆らえない言葉（後書き）

この章で私が何を言いたかったかというと、みんなみんな生きているんだ友達なんだ。という事ですはい。もしくは、人間生きてりゃ一つくらい逆らえないモノってあるよねって話して。それが物なのか者なのか、はたまた概念なのかは知りませんが、それをいかに克服するかが人生大事だなーって思う私は今、人生の岐路に立たされていると自分では思ってるんですけどすでに帰路だったりしたらやだなー。って事を、書きたかったんです。もちろんあれですよー。

はい、また次回ー。

### 3 - 1 ・春風ってレベルじゃない

「ん……」

夜。神無がカエルの合唱を聞きつつ、天井にありとあらゆるトッピングをしたクレープを妄想していたら、机の上で携帯電話が光った。また水無かな。

クレープではなくもはやピザみたいになっていた妄想をやめ、神無はベットから出て携帯を取る。

「春風さん……?」

携帯画面に表示されていたのは、巡の名前だった。メールだ。巡のメール自体は珍しくない。『今日もいい天気です』とか『そうめんうまいです』とか、ツイッター感覚?と思うようなメールが、たまに届く。しかし夜中には珍しい。

「?」

メールを確認して、神無は首を傾げた。メールは『電話するです』としか書かれていなかったからだ。

これは……私が誰かに電話しろということ?と、神無が悩んでると、画面が変わった。巡から電話がきたのだ。どうやらこのメール、電話予告だったようだ。まどろっこしい事をする神様だこと。神無は苦笑いを浮かべつつ、ポチっとな。

「もしもし神社です」

『もしもし春風巡です！神社神無ですか!?!』

「はい、そうです」

『そうですかよかったです！神社神無の携帯なのに神社神無以外が出たら事件のかがりがぶんぶんしますからですねますです！！』

「う、うん、語尾が大変な事に……久しぶりに声聞いたけど、元気そうだね春風さん」

『当たり前です！！自分、元気が取り柄ないですから……』

「元気ない！？あ、いけないいけない……」

巡のテンションの落差にビックリして夜中についつい大声を出してしまった。神無反省。

『む。すまないです。最近情緒不安定気味なのです私』

「自覚があるだけまだ大丈夫だね……」

『何が大丈夫ですか何が！！』

「い、ごめんなさい……」

怒られたー。

『全く、お前は那场凌ぎの発言が多い気がしなくてもない気がする気もしたのですが果たしてそれを確かなのはわかりますか？』

「そ、それは自分ではなんとも……」

せめて断言していただきたかった。

『というわけで、明日朝八時くるみわり園よろです』

「どついうわけで!？」

また大声を出してしまったが、大声をあげなければならぬ時が、人にはある。

『ああ、まだ説明してなかったですか。すまないです。どうも最近、時をかけてしまつです。春風真琴です。よろしくお願いしまーす、です』

「ああうん、よろしくお願いします?」

『ほら、私って今あ、軸がぶれてるじゃないですかあ?』

「うん、ひしひしと今感じてるよ」

『お前達はまだしも、こんな姿を子供達には見せられないわけですよ! 恥ずかしいです恥ずかしいです私が積み重ねた神様キャラが総崩れになるですー!!』

「そ、それは大変だね……」

巡が思ってるほどあの子達は神様像を持ってない気がしないでもないけれど、指摘はしない。

『とうわけでお前には、私のキャラが決まるまでくるみわり園に行ってもらいたいわけです。人手が足りないと連絡が来たので、お前を推薦しといたです。じゃ、よろしくです。いい夢見るで』「待つて待つてまだ切らないでー!!」

一方的に切られそうになり、慌てて神無は止めに入る。

「うるせえぞ!!」

「す、すいません!」

階下から聞こえた父親の怒声に謝罪してから、深呼吸して落ち着きを取り戻す。久しぶりに聞いた父親の怒鳴り声に、体温も急上昇。うちわで冷却冷却。

『今誰に謝ったです?私にですか?』

どうやら巡には、怒声は聞こえなかったようだ。

「いや、違うよ。ちょっとうるさかったから、お父さんに怒られちゃった」

さっきよりも小声で、神無は答える。

『何ですか。お前の家は防音に不備ありますか?』

「いや、普通だよ?」

『お前、一人暮らしかしないんですか?』

「え？何で？」

巡の言い方が、そうするのが当たり前なはずなのに、という感じだったので、神無は違和感を覚えた。流れが唐突なのは、もう慣れた。

「別に一人暮らしする理由もないから……」

『理由なんて腐るほどあるでしょうお前の家庭は』

「……えーっと、春風さん、調べた？」

巡の言葉に、神無の体温がすーっと下がった。

『いいえ調べてないです。気付いたら調査書が机に置いてあっただけです。ビックリしたです。いやマジです。お前悲惨です』

「……聞かなかった事にするね」

悪いとは全く思っていない様子の巡を、神無は怒鳴りたい衝動にかられたが、うちわをブーメランのように壁に放り投げる事によりその衝動を緩和、抑え、本当に、聞かなかった事にした。

「それで、くるみわり園に行くって話だけど」

『よろです』

「よろじゃなくてさあ……頼むよ本当に」

『どうしたですか？疲れてるみたいです』

「……いや、うん。そだね」

あなたのせいという事に気付いて欲しい。

『それでまだ何か聞きたい事あるですか？私、自分探しに忙しいんですけど』

「ああうんなんかもう……いいや。明日、八時に来るみわり園に行けばいいんでしょ？わかりましたわかりました。水無と三途さんには声をかけなかったの？」

『水城水無に電話かけたら水城火無に馬鹿は死ね言われて切られたです。三途舞歌に電話かけたらストーカー死ね言われて着信拒否されたです。どうしてですか！！』

「火無さんは春風さんが嫌いだからで、三途さんは番号教えてないのにかかってきたからじゃないの？」

『正直者は嫌われるですよ！！』

「いや……うん、そだね」

今の春風さんには嫌われてもいいかなー、なんて、口が裂けても言えません。

『じゃあ頼むですよ！私は夢やら希望やら青春やら愛やら波紋やら踊る大捜査線やら密室やら殺人事件やらアダムやらイヴやらアリスやらウサギやら井戸の底やら宇宙人やら超能力やら未来人やら蟹やら蝸牛やら猿やら蛇やら猫やら鬼やら自分探しとかで忙しいんですからー！！』



「……………一つきくけど春風さん。自分探して、何してるの？」

『漫画や小説やDVDを』

神無は電話を切った。電源も落とした。久しぶりに大声を上げ、心の底に溜めてあるドロドロした物をぶちまけたい衝動にかられたが、ベットに飛び込み枕に顔を押し付け自殺ごっこをする事により、なんとかその衝動を押さえた。

春風さん、自由過ぎる。

3・1・春風ってレベルじゃない(後書き)

よくわかんないけど私だったらマジギレですけどね!!

### 3 - 2 ・ 今日の子供達

朝八時前。これからどんどん暑くなるであろう夏晴れな空の下、神無はくるみわり園の敷地についた。

「あ……アイちゃんおはよう」

庭にはアイ一人しかおらず、ブランコを揺らしながらこちらを見ていたので、無視するのかわいそうだな。と思った神無は、目線を合わせ、アイに挨拶した。

「……」

アイはビー玉みたいな丸い目で神無を見つめ、コクンと頷いた。

「一人で遊んでるの？」

アイはまた頷く。

「お友達は？」

「？」

アイは、意味がわからない。というように首を傾げた。

「他の子供は？」

アイはくるみわり園を指差す。中にいるという事だろう。

「そっか。ありがとねー」

神無はアイの頭を撫でた。髪さらさらだなー。撫で心地いいなー。自然と頬がにやける。

そんな神無をアイは不思議なモノを見るような目で見るのだった。

「こんにちわー」

アイの頭を十分堪能した後、神無は屋内に入った。暗い。目が慣れていないからというだけではなく、玄関や廊下の電気がついていないからだ。節電だろうか。

「どうも。よく来てくれました」

「あ、どうも……」

神無の声を聞き、修道服姿の例の真奈美が食堂から現れた。同年代で見知った人が出てきてくれた事が嬉しいような、別の人の方がよかったような。とりあえず微笑んでおく。

「春風さんから聞いています。今日から手伝ってくれるとの事ですか?」

「ええまあ一応は……」

「ありがとうございます。ではまず、修道服に着替えますか？」

「遠慮します」

ノーと言えた私偉い。

「あー！かなお姉ちゃんだー!?」

「あ、こんにちわー」

「おやすみー」

「はなちゃんちがつ……お、おはようございます……」  
「……」

食堂からぞろぞろ現れたのはお馴染みの幼少組。上から順番に、さえちゃん、かなちゃん、はなちゃん、らんちゃん、あかねちゃん。なぜか月読と命はいなかった。

「こんにちわー。みんな元気だったー？さえちゃんはカゼ、もう大丈夫？」

目線を合わせて、ニツコリ笑う。

「私カゼもう大丈夫！」

「元気でしたー」

「ねむー」

「は、はなちゃん……」

「元気じゃないわけがないじゃない」

「そっかー。元気な事はいい事だねー」

よしよしと、一番近くにいたさえちゃんの頭を撫で撫で。さえちゃんご満悦。かなちゃん微笑み。はなちゃんは夢現つ。らんちゃんはおどおど。あかねちゃんはツーン。

「あなた達、お勉強は終わったんですか？」

真奈美先生が呆れ顔で言う。

「私もうあきたー！かな姉ちゃんと遊ぶー！」

「私は終わったー」

「にゃー」

「あたしは終わったけどはなちゃんが……」

「さ、算数以外は終わったもん！」

各々の声。

「お勉強してたの？」

抱っこをせがむさえちゃんを抱っこして（重い）神無は聞く。

「うん！つまんない！」

「涼しいうちにみんなでやるってことになってました」

「すう……」

「はなちゃんおもいよ、起きてよ……」

「ちょ、わたしの方にたおれてこないでよね！」

「上の子達が夏休みの宿題をやってる横で、この子達も勉強させてたんですが……もう飽きたみたいですね」

あかねちゃんやらんちゃんが潰される前に、眠ったはなちゃんを抱

え、真奈美先生が補足説明。

「神社さん、この子達を頼んでもいいですか？荷物は事務室に置いておいて下さい」

「あ、はい。わかりました。じゃあ、みんな。天気もいいし、外で遊ぼうか」

「わーい！私、おにごっこしたい！」

「さえちゃんその前にお勉強道具片付けないと」

「あたし、かくれんぼがいい……」

「あんたもつと大きな声でしゃべりなさいよ」

「かなの言う通りですよ。あなた達、ちゃんと片付けてから遊ぶように。帽子も忘れないで。じゃ、神社さん。よろしくお願いします」

真奈美先生はそう言って、はなちゃんを部屋に寝かせに行った。

「じゃあ、みんな。お片付けしたらここに集合ね」

こんな感じで、神無のお手伝いが始まったのでした。

3・2・今日の子供達(後書き)

ねむー。

色々修正しないと。ねむー。



### 3・3・気づいたら増える

「えつと……」

勉強道具を片付け、庭に集合した麦藁帽子装備の子供達、さえちゃん、かなちゃん、らんちゃん、あかねちゃん。と、名前もわからぬ見知らぬ女の子二人。てつきり四人だけかなと思ってた神無は、増えた子供に困惑である。

「お名前聞いていい？」

おにごっこおにごっこ騒ぐさえちゃんを宥めつつ、かがんで神無は二人に聞く。

「私、はるだもん」

先に答えたのは、春みたいにポカポカした雰囲気で、なんとなく、学校の休み時間には折り紙やビーズで遊んでそうな女の子、はるちゃんが答えた。

「はるちゃんか。私は神社神無っていうんだよ。よろしくね。はるちゃんは、いくつなの？」

さえちゃん達より、年上な気がする。

「私は八つだもん。割り算得意だもん」

「八つという事は、三年生かー……お勉強はいいの？」

「私達はお姉さんをにんめーされてるんだもん」

「お姉さんを、任命？」

「そくだもん」

「うん」

誇らしげに頷くはるちゃんと、まだ名乗らぬ、ふわふわした女の子。お姉さん……？と、首を傾げる神無。その神無の背中によじ登り、満悦なさえちゃん。おんぶゲットだぜ。

「夏休みは人が増えるんです」

ちよつと意味がわからない神無に、すかさずかなちゃんのフォロが入った。

「人が増えるの？」

「はい。お出かけする事も多いし、増えたり減ったりするから、先生達大変何です。私達にはあまり目が届かなくなるんですよ。でも心配だから、はるちゃん達に見ててって」

かなちゃんの説明を聞き、ふむふむと神無は頷いた。

夏休みに人が増えたり減ったりするというのは、恐らく、夏休みの間だけ、預かる子供がいたりするという事だろう。かなちゃん達のように、ここの生活に慣れてる子より、そちらの子達を気にかけるから、かなちゃん達に目が届かなくなるという事か。というわけで、お目付け役を用意したと。お目付け役だから、勉強ではなくこっちに来たと。

「でも……」

でも今は私がいるから、いなくてもいいんじゃないかな。と、神無が言おうとすると、かなちゃんが近づいてきて小声で「はるちゃんは、勉強好きじゃないから」と、神無に伝えた。なるほど。お目付け役という建前で、逃げてきたのか。

そしてかなちゃんは苦笑いして、内緒にしてて。言わないであげてという意味だろうか。唇に人差し指を当てた。何この子。出来過ぎ君だ。と、神無は戦いた。

「ねーねー、かなお姉ちゃんまだー？」

神無の髪を引っ張りながらさえちゃんが言った。早く遊びたいようだ。

「ん、もうちょっと待ってねー」

まだ神無には気になる事が二つ、三つくらいあるのだ。

「えっとじゃあ、あなたのお名前も聞いていい？」

「うん」

はるちゃんの隣で、ほわほわと、眠いのだろうか。ボーッと、光がない目で神無を見る女の子は頷いた。

「……」

「えっと……？」

頷いただけで、いつこうに名乗らぬ女の子。  
こまつちゃん神無を救ったのはさえちゃんだった。

「その子はみえちゃん！私と同じ部屋なのだ！いつも本ばかり読んでるから、最近は私たちが連れ回してるのだー！！」

「あ、ありがとうさえちゃん。みえちゃんも、よろしくね」

耳元で叫ばれ、鼓膜がー！状態で、みえちゃんによろしくね。

「うん」

「みえちゃんは、基本、うんとしか言わないんだよ……」

「そ、そうなんだー。さえちゃん一回おりようかな」

耳の辺りからこそばゆさがグハツな感じなので、神無はさえちゃんを地に下ろす。

「おじじっ！おじじっ！」

さえちゃんは、よほどおじじっくに飢えてるのか、ぴよんぴよん跳びはねせがむ。

「あ、月読ちゃんと命ちゃんはカゼを引いて部屋にいます」

かなちゃんは神無がまだ聞きたそうな質問を先答え。

「私はひなたぼっこがしたいもん」

はるちゃんは、それは遊び何だろうかというモノを提案。

「……………あついよー」

らんちゃんは人知れず夏の暑さにやられ気味。

「……………あつくなんかない」

あかねちゃんは人知れず夏の暑さに満身創痍。

「うん」

そしてみえちゃんが、誰かに同意した。

「そうだね。じゃあ、遊ぼっか」

アイちゃんは誘わないの？という疑問は心に秘めて、神無は子供達と遊ぶ事にした。

### 3・3・気づいたら増える（後書き）

はるちゃん、みえちゃん。

諸事情により、子供の名前はひらがなが多い。

ちゃん付けをやめたら読みにくい雰囲気になったので、やはりちゃん付けに戻す。

### 3 - 4 ・ 邪魔者は木登りの刑！

「かなお姉ちゃん、好きな食べ物とかある？」

「好きな食べ物？もちろんあるよ。私はねー、クレープが大好きなんだ。さえちゃんとあかねちゃんは？」

「私はカレーが好きー！」

「わたしはキャビアが好き」

「キャビア？あかねちゃんキャビア食べた事あるの？すごいねー」

「別にふつーだし」

「あはは、嘘つきあかちゃん。食べた事ないくせにー。かなお姉ちゃん違うんだよ、あかちゃんはねー。前テレビで見て大人っぽいからキャビア好きキャビア好き言ってるんだよー」

「ち、違うもんー!!」

「違うないよー。あかちゃん嘘つきなんだよー」

「あ、あ……あかちゃん言うなバーカ!!」

「はいはい二人とも喧嘩はダメだよ。見つかったちゃうからね。静かに静かに」

「そつだよあかちゃん。静かにしないとダメじゃーん。見つかった

「やうよー」

「あんたが変なこと言うからでしょー!!」

「あかちゃん、しー。静かに出来ないならあっち行ってよー」

「うう……!!」

「ほらほら、そんな事言っちゃダメだよさえちゃん。あかねちゃんも泣かないでね、ね？」

「泣き虫あかちゃん」

「泣き虫じゃない!」

「もう、仲良くしなさい」

というわけで、かくれんぼ中である。ブランコの後ろのツツジの後ろに、さえちゃん、神無、あかねちゃんという形で、身を寄せ合い隠れ中である。

当初はさえちゃんがやりたいおにごっこをやるうという流れであった。さえちゃん以外も別にそれでいいやという感じで、神無も別に止める気はなかった。しかし突然さえちゃんが、『やっぱりかくれんぼをやりたい』と言ったので、かくれんぼである。この場の決定権はさえちゃんにあるようだ。

かくれんぼをしたいと言ったさえちゃんはさらに続けて『ルールはー、隠れていいのはこの庭と裏庭だけ!中とか教会まではいっっちゃダメ!そしておには私とかなお姉ちゃん以外!出来ればかなとみえちゃんがいい!』と、元気よく言った。



隠れ場所は妥当だけど、何でおに指定？と、神無とかなちゃん以外の子供達は疑問に思ったが、『私おにでいいよ。捜すの好きだから』と、かなちゃんが言ったので、じゃあそんな感じで。という事になった。みえちゃんも『うん』と、頷いたからいいんじゃないか。

というわけで、かくれんぼである。こんな事もあるうかと神無が用意しといた虫よけスプレーを全員に散布（夏のかくれんぼには必須な行為）してから、かなちゃんが50秒を50秒以上かけて数える間に、『こつちこつち』と、さえちゃんに服を引つ張られ神無はここに隠れたのだ。ここまでは、さえちゃんの計画通りであり、かなちゃんと神無の思った通りの展開。これで後はかなちゃんが、時間をかけて捜してる間、さえちゃんはいっぱいお喋り出来るってわけだぜいやっほーいというところに現れたのは、自称大人のあかねちゃんである。

さえちゃんから見たら邪魔ー。あかねちゃん的には、わざとなんかじゃなくて偶然たまたま隠れ場所が神無と一緒にたったただけだもん。神無としては、二人ともカワイイなあ。である。

「あかちゃんあかちゃん。なーちゃん今いないから、今のうちに木にでも登ればー？」

かなちゃんはみえちゃんと一緒に、裏庭、畑の方に捜しに行ったよ。うで、姿が見えない。今、庭で姿が見えるのはアイちゃんの後ろ姿だけだ。

「何でわたしが木なんかに登らないといけないのよ！」

「ここより木の上の方が見つかりづらいからに決まってるじゃーん。ほら早く早く」

押し殺した声で怒るあかねちゃん。でもさえちゃんは涼しげに受け流し、庭にある大きな木（柿の木）を指差す。そしてニヤリと、挑発するように笑う。

「もしかしてあかちゃん、木登り出来ないの？大人なのにー？」

「で、出来るもん！」

大人だからって木登りが出来るわけがないのだが、あかねちゃん、畏にはまる。

「えー、本当かなー？あかちゃんが木登りしてるの見たことないしなー。無理なら無理って言うていいんだよー？あかちゃんは子供だしー」

「無理じゃないもん！子供じゃないもん無理じゃないもん！」

あかねちゃんは興奮して立ち上がる。

「こらこら二人とも。仲良くね。あかねちゃんも落ち着いて。別に木登りが出来なくても大人だよ」

神無が落ち着かせようとするが、今回はそれは逆効果だった。あかねちゃんは涙目で、自分には木登りが出来ないと思ってるさえちゃんと神無をキツと睨み「わたし木登り出来るもん！！」と言って、木に走って行った。

「あ、待ってあかねちゃん」

「ほっとけばいいよあかちゃんは」

神無が追いかけてよとしたが、さえちゃんに止められた。

「あかちゃん運動出来るし、しっかりしてるよ。たぶん。するすると登るよ。きつと」

だから座って座って、お喋りしよ。と、さえちゃんは神無の服を引っ張る。

「本当？」

「うん！私が言うことは基本正しい！」

「基本って……」

さえちゃんの言う事を半信半疑ながらも、神無はあかねちゃんをツジの陰から見守る。

神無の心配をよそに、さえちゃんはあかねちゃんが言うように、びつくりするくらいするすると、危なげなく庭の隅にある木を登っている。神無びつくり。

「凄いねあかねちゃん」

「私ならもつと速く登れる！」

「へー、凄いんだね。みんな登れるの？」

「らんちゃん以外はみーんな登れるよ！」

さえちゃんは誇らしげに言った。

神無は、木登り出来るなんて凄い子供達だ。と、感心した。ので、さえちゃんの頭を撫でてあげた。そしたら、さえちゃんは喜んだ。そして、ニコニコ顔で驚愕の事実を口にする。

「でも、一人で降りれるのは私とかなちゃんをつくよちゃんだけなのだー!!」

「…………え!?!」

### 3 - 4 ・邪魔者は木登りの刑！（後書き）

昔。夏場。藪に隠れたら、体中を蚊に食われて、見た目が常時蕁麻疹という悲惨な目にあつた私です。あの時血を吸われ過ぎたから今こんな感じなんだなと思います。

昔。柿の木から落ちて頭を打つた私です。あの時頭打つたから今こんな感じなんだなと信じてます。

その後。

案の定、木から降りれなくなったあかねちゃんを、脚立を用いて神無は慌てて救出。当然、かくれんぼはその時点で終了。かなちゃんとはらんちゃんも集まっていた。みえちゃんとはるちゃんは、職員さんに捕獲され、勉強に戻った。

半ベソかいてるあかねちゃんをあやし、泣くほど怖かったのかよー。と、からかうさえちゃんをたしなめる。そんな事やらやってたら、屋内から勉強を終えた子供達がやってきた。みえちゃんとはるちゃんの姿はなかった。延長かもしれない。

そこからはみんなで遊んだ。縄跳び。大縄跳び。かんけり。充実した午前中であつた。

そして昼ご飯（素麺）を食べた後、午前中遊び疲れた幼少組はお昼寝タイム。お昼寝しない子供達は近くの公園へ。神無はそちらにはついていかず、園内に残り、お手伝い。

子供達は部屋より涼しい食堂（窓全開、玄関全開、廊下の窓全開で風がよく通る場所）で昼寝をする事になったため、食堂の机をどかし、布団をしく。そして枕投げ大会を始めようとする子供達を寝かしつけ、今に至る。

「真奈美先生、同い年だったんですか」

事務室で、真奈美から麦茶をいただき、世間話に興じていた神無は驚いた。ちなみに、真奈美の事を神無は名字で呼びたかつたのだが、『真奈美が名字で先生が名前です』との返答をいただいたので、真奈美先生と呼んでいる。

「ええ。あなたと同じピチピチのつら若き乙女です。言ってませんでした?」

ピチピチって……。世代が違う気が、と神無は思ったが口には出さない。

「てつきり年上かと。しっかりしてるから」

修道服関係に目をつぶれば。とは言わない。今も、真奈美はチクチクと針で子供サイズの修道服を作っている。作れるなんてすごいんですね。と褒めたら、『神社さんの分も作りましたけど』と、口ツカーから修道服を取り出したのは見なかった事にした神無である。

「この服を着るとあら不思議、年上に見られるんです。年上に憧れてるなら是非。絶対似合うから。というか似合ってたから」

「私は別に年上には憧れてませんので」

そんなやり取りを時たま挟みつつ、くるみわり園の事や子供達の事、そしてお祭りの話をした。

「へー、そんなに大きなお祭りがあるんですか」

「知りませんでした?結構、有名なお祭りですけど。市の半分を使う大きなお祭りなんですよ」

くるみわり園がある胡桃割市は、ひょうたんの形をしており、その祭りはひょうたんの上の部分、胡桃割市の西の地域全体を使って行われるのだ。

「お祭りですか。さえちゃん達も楽しみにしてるでしょうね」

「ええ。子供達はとても楽しみにしてます。園でも、べっこう飴とビーズで作ったアクセサリーを売りますから。神社さんも是非、よろしく願いますね」

「はい、わかりました」

去年、一昨年は行かなかったけど、今年は行ってみようかな。水無を誘って。あ、でも水無は火無さんと行くのかな？と、神無は真奈美先生の『よろしく願います』を、『見かけたら買って下さいね』という意味で受け取ってわけだが、真奈美先生は『お手伝いよろしく願いますね』という意味で言ったわけで、後日困った事になるのは後日の話。

その後も、二人が世間話に興じていると、事務室にふくよかで古きよき時代にいそうな母ちゃん的な雰囲気をもとう恵子先生が現れた。

「おや、神社さん来てたの？」

「あ、はい。どうもお久しぶりです」

恵子先生とは、先日、さえちゃんがカゼを引いていた時に、顔を合わせている。

「恵子先生、月読と命の具合はどうですか？」

真奈美先生が聞いた。恵子先生は付きつきりで二人の看病をしていたのだ。



「そうねえ。二人ともまだ熱が下がらないから、明日一日は安静ね。神社さん、今は寝てるけど、後で顔を見せてあげてね」

「はい、わかりました。あ、恵子先生も麦茶飲みますか？」

「ありがとうございます。あ、神社さん、免許持ってる？」

「車の免許ですか？持っていないですけど……」

「そう、困った……真奈美先生も持ってないし、他の先生達も出かけてるし……」

恵子先生は、麦茶を片手に、頬に手を当て、どうしましようのポーズを取った。

「どうかしたんですか？」

「いえね。買い出しに行こうと思うんだけど。たくさん買うから車でないと大変なのよ。で、今、園内にいる中じゃ、運転出来るのは私だけなのよね。荷物持ちで一人は欲しいんだけど……」

「あ、じゃあ私が一緒に行きましょうか」

神無が立候補したが、恵子先生は首を横に振った。

「そうすると、園内に真奈美先生だけになってしまうのよね。真奈美先生はね、風邪にかかりやすいから、月読ちゃん達の世話はあまりやらない方がいいし……」

子供達が帰ってきたら、人数は足りるけど、今度はあの子達ついて

きたって駄々をこねるし……。と、恵子先生は困った顔である。

「子供達がついてきてもいいんだけど、そうすると今度は店の中で駄々をこねるし、どうしましょう」

「私と恵子先生で行けばいいのでは？」

真奈美先生が修道服を作る手を止め、そう提案した。

「そうねえ……でもそうすると、神社さんだけになってしまつてしまふよ？」

「神社さんなら、一人でも平気では？しっかりしていますし。子供達も懐いてますし」

真奈美先生は、同意を求めるように、神無を見ながら言った。  
神無は愛想笑いを浮かべる。そんなに高く評価されても……。

「んー、そうねー。確かに大丈夫そうだけど……」

恵子先生も、神無が一人でも大丈夫だとは思っている。しかしそれは日常においてであり、いざ何かトラブルがあったら、園の事や子供達の事情をよく知らない神無一人では大変だろうし、不安である。  
三人が、さてどうしようかと。やっぱりみんなが帰ってきてからにしようかと。私一人で大丈夫ですよ。と神無が、ちよつと不安だけで請け負うかと。そんな時、新たな人物が事務所にきた。

「私が神社さんとお留守番すれば万事解決ではありませんか？」

話しは全て聞かせてもらった。というように登場したのは、疑問系少女、くるみであった。

### 3 - 6 ・典型的な悪夢

「じゃあ、神社さん。よろしくね。早めに帰るから」

「はい、いつてらっしゃい恵子先生、真奈美先生」

「いつてきます。くるみもよろしくお願いしますね」

「お願いしてもいいですよ？」

というわけで、神無はくるみと二人でお留守番である。

くるみと恵子先生という組み合わせでもよかったのだが、くるみは受験勉強があるから外出したくないとのたまった。その後、「暑いですよ？」と付け足したところを見ると、受験勉強があるから外出したくないというのは怪しいところだ。と、神無は思った。

そして案の定、神無の予想通り、くるみは勉強をせず、事務室で、神無が持ってきた小説を読んでいる。全く部屋に戻る気配はない。熟読中である。推理小説好きなのかな。

「……………」

同じ部屋で、顔見知り程度の他人が、向かいの席で読書中というのは、大変気まずい。息苦しい。何か会話が出来ればいくぶん気が楽なのだが、熟読中なのでそれもしづらい。というわけで神無は、食堂で寝ている子供達の様子を見てくるといふ理由で、事務室を出る事にした。

「ちよつと子供達の様子見てくるね」

そう言つて神無は席を立つと、くるみが本から顔を上げ首を傾げ「私も行きましようか?」と言つた。

「ん、いいや。ホントにちょっと見てくるだけだから。くるみさんは、本読んでいいよ」

神無がやんわり断ると、くるみは「そうですか?」と言つて、また本を読み始めた。

それを確認し、神無は事務室を出る。そしてちよつと歩いたところで背伸び。んー、なんか短時間で肩こつた。

「私も一緒に行きましようか?」

「へ?」

神無が後ろを向くと、くるみがいた。気配を感じなかった。

「いや、いいよいいよ。本読んで」

納得したんじゃないのか。と、神無は少し困惑である。

「犯人が義理の母だったのは驚きませんでしたか?」

「え?」

「てつきり義理の弟かと思いませんでしたか?」

「え?義理の弟が犯人じゃ……ま、まさかもう読み終わったの?まだ30分も経つてないようないや……」

速読が出来る子なのだろうか。驚いた。そして自然にネタバレされた神無であった。

「もう読む本もないのでついて行きましょうか？」

「ああうん。じゃあ一緒に行こうか」

本を読み終わったなら、事務室で交流を深めてもいいのだけど。まあ、子供達の様子を見てからでもいいか。

神無はそんな風に考えながら、食堂へ行こうとした。だがしかし。

「な、なに？」

どこからか、子供の甲高い、泣き叫ぶ声があった。食堂からではない。神無の後ろの方からだ。

「月読か命ではありませんか？」

声がある方を見ながら、くるみが言う。

「月読ちゃん達？どうしたんだろう」

「私についてくるといいと思いませんか？」

くるみはそう言って歩き出した。

くるみと神無が話している間も、泣き声は続いている。助けてとかお母さんとか。泣き叫んでいる。

「ここではありませんか？」

「間違いなくここだね」

ドアのプレートには月読と命と書いてあるし、叫び声はドアの向こうから聞こえてくるし。

「月読ちゃん！」

神無は慌てた。ドアを開けると、二段ベットの下の段で泣き叫んで暴れてる月読がいたからだ。一緒に寝ている命は顔をしかめて「つくよちゃんうるさい！」とご立腹だ。

「月読ちゃんどうしたの？大丈夫？」

月読を抱っこして、背中をほとんど叩いて落ち着かせようとする神無。

くるみは「うるさいうるさいうるさい！！」と喚く命を上へのベットに避難させてあげた。命はそのままタオルケットに包まり、静かになった。

「かなつ。ねえちゃん？」

「そつだよ。どうしたの？怖い夢でも見た？」

少し落ち着いた月読をベットにまた寝かせ、額に触れると、だいぶ熱い。熱にうなされたのだろう。

「あのつねつ、あのつねつ、みんなねつ、いなくなっちゃってねつ、ぼくをねつ、おいてねつ、ぼくつ、ひとりにつ、なっちゃったつ」

「大丈夫だよ。みんなちゃんというからね。みんな月読ちゃんを置いてどこかになんかいかないよ。月読ちゃんは一人じゃないよ」

月読の頭を優しく撫でる神無。泣きながらの月読の言葉を聞くにどうやら、みんながいなくなるという典型的な悪夢を見たようだ。

「ほんつとっ？みんつなっ、いるっ？」

「いるよ。ほら、ちゃんという」

ギョツと、手を握ってあげると、月読は安心したように息をついた。

「大丈夫？喉、渴いてない？」

汗をだいぶかいている。水分補給をした方がいいだろう。何か飲むものは。と、神無が探そうとすると、目の前にコップが差し出された。ストローもささってる。くるみだ。

「ありがとう。月読ちゃん、ポカリだよー」

「ん……」

くるみからコップを受けとり、月読に飲ませる。

「……みことは？」

隣で寝ていた命がない事に気付いたのか。月読は不安げに聞いた。

「命ちゃんは上で寝てるよ。月読ちゃんも眠るといいよ。早く元気



になりたいでしょ？」

「ん、ぼく、げんきになりたい。はやくみんなと、あそびたい」

「そうだね。みんなもそう思ってるから、早くよくなるうね。おや  
すみなさい」

「み……」

月読は頷き、目をつむった。

神無は眠るまで月読の側にいてあげた。月読が悪夢を見ないように、  
手を握ってあげて、頭を撫でてあげた。優しく微笑みながら。

「……」

その姿をくるみは、興味深げに見つめていた。

### 3 - 6 ・典型的な悪夢（後書き）

子供の頃、熱を出した時。

似たような悪夢を見たもんです。

体も心も弱ってるからでしょうが。

その悪夢はどんな悪夢より怖かった。

ブラックホールに吸い込まれる夢。

マジ、怖い。

### 3 - 7 ・くるみの暴走

「寝たかな？」

「妬んだんじゃないですか？」

月読の側にいる事、十分程度。月読はまた眠ったようだ。規則正しい寝息を立てている。

神無は起こさないように静かに行動を開始する。握っていた手を離し、タオルケットをかけなおす。側の机に置いてあった冷えピタを、月読の額に張り付ける。そして頭をとんとんと叩いて、「よし」

「最後に頭を叩く理由はありましたか？」

「頑張つての意味があるんだよ。さて、命ちゃんは大丈夫かなー」

くるみの疑問に軽く答え、二段ベットの上を確認。命はこちらに背を向け、丸くなっていた。

肩をとんとん叩くと、命は怠そうに体を転がし、こつちを向いた。

「つくよちゃんねた？」

しかめっつらで命は聞く。

「うん。もう平気だよ。起こしちゃってごめんね」

「ん……みことものどかわいた」

「ちょっと待ってね」

神無はポカリをコップに注ぐ。その間に、くるみは命を抱えて、下に降ろしてあげた。

「はい、どござ」

「ありがとう……」

命はコップを受け取り、一気に飲みほした。

「もつと飲む？」

「いっ」

命は首を横に振った。そしてコップを持ったまま、ボーツと眠っている月読を見る。

「命ちゃん？」

「……」

神無が命の額に手を当てても無反応。命も月読同様まだ熱が高い。ボーツとしているのはそのせいだろう。と、神無は思った。

「命ちゃんも、月読ちゃんと一緒に寝る？」

「……つくよちゃんづるさいからやだ」

と言いながら、命は神無にコップを渡し、月読の横に潜りこんだ。

「冷たいの貼るよー」

「ん……つめたっ」

「我慢我慢。寝るまで一緒にいてあげようか？」

「ん……つくよちゃんいるからいい」

「そっか。おやすみ」

「みー……」

月読の手を握りながら寝る命を見て、神無はほほえましいなあ。と思いつつ、命の頭を撫でた。

そして命にもタオルケットをかけてあげて、静かに部屋を出た。そして息をつく。ふー、疲れた。

「命はどうしてうるさいのに月読と一緒に寝たと思いますか？」

当初の計画通り、食堂の様子を見に行こうと神無が歩き出すと、くるみが聞いた。

「そうだね、命ちゃんも寂しいからじゃないかな。もしくは、月読ちゃんが起きた時、一人じゃかわいそうと思ったのかも。優しいね、命ちゃんは」

「私は感心しましたか？」

「え？あー、うん。したんじゃないかな？」

奇妙な人だなあ。と、神無は苦笑いである。

「私は食堂行くけど、一緒に行く?」

事務室の前で神無はくるみに聞く。

「一緒に行かない理由はありますか?」

「あー、どうだろう。捜せばありそうだけど、まあいいか。じゃ、一緒に行こうか」

神無がそう言って歩きだそうとしたが、くるみが「妬んだんじゃないですか?」と言って、手首を掴んでそれを止めた。

「え?誰が寝たの?」

「わざとですか?」

「何が?」

「寝たではなく妬んだ、と、私は言ってませんか?」

「ああ……ごめん、聞き間違えてたよ」

てつきり『寝たんじゃないですか?』と言ってるかと思っていた。くるみは独特な言い回しをするので、秀困気しか聞いてなかったから。

「妬んだ?誰が?どうして?後、手首離してくれない?」

力が思いの外強い。

「私とあなた以外に誰かいますか？」

離してくれについては聞こえなかったようだ。というか逆に、力が強まった。なんか引つ張つてくる。なんか怖い。

「だ、誰もいないね。という事は、私は妬んでないから、くるみさんが妬んでるのかな？」

「それ以外に答えはあるんですか？」

呆れたようにそう言って、くるみは手を離れた。神無がホツとしたのもつかの間、「ヒッ！」両肩をガシツと掴まれた。

「な、なに！？どうしたのくるみさん！？」

「私も風邪っぽくないですか？」

「そ、そうなの！？そ、それがどうして顔近くない！？」

なぜかくるみの無表情な顔が近い。近いというか近づいてくる。なんだかなんだか、神無、なんか恐怖を感じる。

「風邪っぽくないですか？」

「ちょ、ちょっと待って落ち着いて距離をとって私達にはそういうのまだ早くない！？」

もう息がかかるくらいの距離にくるみの顔があり、何この状況何こ

な状況どうしてこうなったー！とパニクる神無。

「なにしてるのー？」

そこに現れる救世主の正体は、次話に続く。



3・7・くるみの暴走（後書き）

何してんだ……俺……

「ねーねー、なにしてたのー？教えてー」

「んー？教えたいたいのもやまやま何だけどー、何してたのかなー？私にもよくわからないんだよねー？なんなんだろうねー？」

神無は向かいで麦茶を飲んでくるみを探るように見る。すると「私も風邪っぽくないですか？」そんな事を言ってくる。よくわからない神無は引き攣った笑いを浮かべながら、とりあえず距離をおくのだった。

「くるみちゃんまだカゼっぽいのー？」

神無の膝の上に座っている、危機的状況を救ってくれた救世主、はなちゃんはニコニコしながら、そう聞くのだった。

はい、状況説明。

午前中も寝ていたはなちゃんは、一人眠れず暇だったので、誰かいないかなー。って食堂から抜け出てきたら、くるみと神無がなんかやってて、声かけて、二人離れて、三人で事務室に来て、今に至る。

「私はすでに風邪は治ったような気がしませんか？」

「なのにかぜっぽいのー？変だねー」

キヤッキヤ笑うはなちゃん。カワイイんだけどこの子ー！と思った神無は「そうだねー」と同意しながら、ほっぺをぶにぶにする。やわい。

「くるみさん、風邪っぽいなら部屋で休んでたら？わからない事があつたら聞きに行くから」

暗に、怖いからどっか行けと言ってみた。

「一緒にいきますか？」

「何で!？」

「どうしてそんなにビックリするのー？お姉ちゃんもへーん」

楽しそうなのはなちゃんに対して神無は「あは、あはははー」と、乾いた笑いをもらす。

今まで感じた事がない恐怖をくるみに覚える神無。なんというか、貞操的な？

「カゼっぽいならくるみちゃん寝ればー。わたしのお布団かしてあげるー」

「ちょうど眠くなってきた私には願ってもない提案な気がしませんか？」

くるみは、はなちゃんの提案にそう答え、神無を見た。そして首を傾げ言う。

「一緒に寝ますか？」

「寝ません!」

神無は手でバツテンまでして、その提案を拒否。「ねませーん！」と、はなちゃんも真似。絶好調であるこの子。

「寝ないんですか？」

不思議そうなくなるみに「どうして私が一緒に寝なきゃいけないの…」と、疲れ気味に聞く神無。はなちゃんを抱きしめ、心を休める。

「もしかしてさっきから気にはなっていた事が正解ですか？」

「……何が？」

「なにがー？」

「神無さんは私が性的な何かをしようとしていると思ってますか？」

「せ、性的な何か！？」

驚き顔が赤くなった神無は「せいてきな何かってなにー？」と聞いてくるはなちゃんの耳を「はなちゃんにはまだ早いから！」「ふさぐ。」「聞こえない！」「と、楽しそうなのはなちゃんである。

「そんなに赤くなる事ではないとは思いませんか？」

「赤くなる事だよいきなり、せ、性的な何かって……」

「ムツツリですか？」

「そんな事初めて言われたよー！！」

初体験である。

「そ、それで！なんなのかな！さっきからくるみさんは何がしたいのかな！はつきり言ってくれないと、何も伝わらないよ！」

あー、顔熱い。と、神無は机に置いてあったうちわで自分の顔をあおぐ。はなちゃんが「わたしもわたしも」と催促するので、はなちゃんもおおいであげる。「すずしいー」

「はつきり言うのは恥ずかしいという気持ちを察してはくれませんか？」

「察してはくれません。ねー、はなちゃん？はなちゃんもくるみお姉ちゃんもつとわかりやすく喋るべきだと思つよねー？」

神無が珍しい事に、他者を批難する事に同意を求めた。しかし「わたしはおもしろいからそのままでもいいと思うー」裏切られた。

「看病してくれませんか？」

「は？」

くるみがストレートに自分の気持ちを言った。出来るなら最初からそうして欲しかった。

「神無さんが月読の看病をしているのを見たら羨ましくなつたというのは変ですか？」

「う、羨ましい？看病が？」

ちよつと神無には意味がわからない。

「私も手を繋いでもらったり頭を撫でてもらいたいと思ったのはいけませんか？この前風邪を引いた私はそんな事されましたか？されていた月読を妬んだらいけませんか？」

「えーっと、つまり……甘えたいのかな？」

神無はようやく、くるみの言いたい事を理解した。ようは、甘えたい。そういう事かと。という事は「さつき顔を近づけたのは、熱を測ろうとしたのかな？」「マンガで見たらやりたくなりませんか？」という事のようにだ。

「いや、マンガで見たからって……ああいう測り方は大人が子供に對してやる事だよ？」

「こつこつというのー？」「うん、こつこつというのー」と、はなちゃんとおでこを合わせて実演。それを見てくるみが一言「次は私と神無さんですか？」

「だから違つって。こつこつというのは子供にやるの」

「この前見たマンガでは高校生同士でやってたような気がしたからいい気がしませんか？」

「いや、多分それは、親密な間柄の二人だったからで……私とくるみさんじゃ、それはレベル高いよ……」

「後何レベル上げれば出来るんですか？」

「え？んー、そう言われてもー……二十くらい？」

テキストである。「わたし、にじゅーまで数えられるよー」「よくわかってないのである。とりあえず、「すごいねー」「撫でておく。」

「どうすればレベルは上がるんですか？」

「どうすればと聞かれても……」

「スライムとか狩ればいいんですか？」

「スライム！？現実とゲームをごっちゃにするのはよくないよ！？」

「レベルと言ったのはあなたが先じゃありませんか？」

「うっ、まあそうだけど……」

「ねーねー、お姉ちゃん？」

どう説得しようかと神無が悩んでいると、はなちゃんが話しかけてきた。

「なあに、はなちゃん」

「くるみちゃんはお姉ちゃんに甘えたいんですよー？」

「そしてみたいだねー」

「甘えさせてあげればー？」

「んー、そうしたいけどー……」

何だかその度合いが、私の羞恥心を超えている気がする。

「勉強を教えるとかならいいんだけど……」

「勉強を教えるのは何か違くありませんか？」

「だよな……」

「こじやって、ぎゅーってしてあげればー？」

ぎゅーって。コアラみたいに神無に抱き着くはなちゃん。カワイイ。神無もぎゅーってしちゃう。

「私にもそれをやってくれたら私は大変満足する気がしますませんか？」

「いや、くるみさんは子供じゃないからちょっと……」

身長があまり変わらないもの同士抱き合うのはちょっと、レベル高い。

「わがままねー」

「私もそう思わずにはいられません何か？」

「わ、私は悪くないと思うんだけど……」

釈然としない状況である。



「じゃあこのくらいならどう？」

そう言うてはなちゃんは、神無の手を自分の頭にのっける。そして「なでれー」

「ん、まあこのくらいならいいけど……」

頭を撫でるくらいなら。しかし相手は納得するだろうか。

「撫でますか？」

「はやっ！いつの間に!？」

いつの間にかくるみが向かいではなく、横に移動していた。しかも、撫でると言わんばかりに頭をたれている。

「じゃ、じゃあ撫でまーす」

少し緊張しながらも（意識しないで撫でるならこんなにも緊張しないのに）くるみの頭を撫でる神無。さらさらである。

「……」

しばらく無言で、右手ではなちゃんの頭を撫で回し、左手でくるみの頭を機械的に撫でる神無。両手に花である。たぶん。

「ま、満足した？」

無反応のくるみの頭を一分くらい撫で、もういいかなー。と思い、神無は恐る恐る撫でるのをやめた。

くるみは顔を上げ、相変わらずの冷えた表情で、首を傾げ言った。

「何だか余計甘えなくなった気がしませんか？」

「……他の人に頼んで下さい。私にはもう無理です」

頼まれた事は基本的にこなす神無にしては珍しく、神無はさじを投げたのだった。

3・8 両手に頭(後書き)

これがいわゆる、作者が方向性を見失った小説なのかもしれません。

### 3 - 9 . なまえをください

くるみに対してさじを投げた神無。その直後、買い物から真奈美と恵子先生が帰ってきて助かった。

二人が帰ってくると、くるみは何もなかったように部屋に戻っていた。

真奈美先生と恵子先生に甘えればよかるうにと神無は思ったのだが、もちろんそんな事を言うわけもない。

帰ってきた恵子先生は、また月読と命の看病に戻り、神無ははなちゃんとあや取りして遊び、真奈美は服を作っていた。

しばらくそんな事をしている昼寝を終えた子供達が起床。戯れていると、外に行っていた子供達も帰還。さらに戯れていると、夕食時に。

帰るタイミングを見失いつつあった神無は、夕食の準備を手伝う事になった。

「神社さん」

カレーをわいわい作り終え、さあ、後は皿に盛るだけだという時、真奈美が神無に声をかけた。

「何ですか？」

「ちょっと、アイちゃんの様子を見てきてくれますか？部屋にいますか？」

「何で私かと思いつつ」様子、ですか？夕ごはんと呼べばいいという事ですか？」

「ええ。できれば。お願いしますね」

「はあ……わかりました」

怪しいほど綺麗な笑顔の真奈美に送られながら、神無はアイの部屋へ向かった。一人だ。子供達は誰もついてこない。アイの部屋は他の子供達からは魔境的な扱いを受けているという事は知っている。神無は、別にそこに疑問は持たない。

ただ、他にも行けそうな人がいそうなのに自分が頼まれたのがちよつと疑問だ。アイはこのくるみわり園で、どこか浮いているような言い方はあれだけど問題児。自分のような素人を一人、わざわざ行かせるというのは、いかななものか。

私に何か期待されても困るんだけど。

神無はアイの部屋の前にたどり着いた。階段横の、三人部屋だ。ドアが閉められているのでノックを試みる。しかし反応はない。もう一度ノックしてみるが、やはり反応はない。物音すらしない。いないのかな？

「アイちゃん入るよー」

神無はゆっくり、ドアを開けた。不思議と、ひんやりとした空気が部屋から流れてくる。風もあまり吹いていない夏の夜、冷房機器がなく、窓を開けているだけにしては、少し奇妙だ。

「あ、寝てるのか……」

そんな奇妙に涼しい部屋で、アイは三段ベッドの一番下で眠ってい

た。タオルをかけて、市松人形を抱きながら、かわいらしい寝顔を浮かべ、規則正しい寝息を立てている。かわいい。

「起きてアイちゃん」

起こす気がない声量と共に、ぷにぷにとほつぺを突く神無。ほつぺマニアとしては、ここは突かずにはいられないのだ。

アイはお昼寝はみんなと一緒にしたが、お昼寝を終えた後は、やはり一人でブランコに乗っていた。みんなもそれが当然のように、まるでアイなんか見えないかのように、アイに話しかけもしないし、近づく事もなかった。

「嫌われたりしてるわけではないんだよね……かわいい」

鼻をつまむと顔をしかめるアイ。かわいい。

嫌われているわけではないようだ。遊んでる時、どうしてアイちゃんと遊ばないの。と聞くと、なんかよくわかんないから。とか、アイちゃんと話すと、お化けでるから。とか、近づくると大変だから。とか、アイちゃんは一人が好きだからそれをそんちよーしてるの。アイちゃんと喋っても平気なのは、つららお姉ちゃんだけなの。とか、そんな返答をもらった。嫌われている感じではない。避けられているようでは、あるけど。その避けてる理由が、曖昧過ぎてよくわからない。

「水無もなんか変な事言ってたし……市松人形か」

神無はアイのほつぺを弄るのをやめ、市松人形を手取る。おかつぱ頭に、少し汚れている真っ赤な着物。無表情、無感情の人形を見る。この人形は、アイちゃんの唯一の友達なのかもしれないな。と、思いながら。

と。

「あ、アイちゃんおはよう」

「……」

アイがいつの間にか目を開けていた。ぼーっとした様子で、神無を見ている。まだ半分寝ているみたいだ。

「ん？」

「……」

しばらく見つめ合う二人。

そして。

「！」

完全に覚醒したアイが慌てて神無から距離を取り、ベッドの隅に移動。

タオルを握りしめ、怯えた目で、な、何でここにいるんですか！。と、聞いてくる。

「夕ごはんだから呼びに来たんだよ。でも、アイちゃん寝てたから。起こそうかなあって思ったとこ。よく寝れた？」

動きが小動物みたいでかわいいなあ。と、神無はクスクスと笑う。

「……」

アイは、何かに対して小さく頷いてから、神無が持っている市松人形を見た。そして、両手を神無に向ける。

抱っこをせがんでいるようにも見えるが、多分違う。神無は「はい、どうぞ」市松人形をアイに返した。

アイは、返してもらった市松人形を、ぎゅっと、抱きしめた。その仕種がかわいくて、神無は微笑む。

「その人形かわいいね。お名前とか、あるの？」

アイは、ビー玉みたいな瞳を神無に向け、首を傾げた。神無も首を傾げる。てっきりあるものだ。

「ないの？」

「……………なまえ」

アイは初めて、神無に向けて口を開いた。

「なまえ？」

「そう、名前。アイちゃんは、お人形とかに名前つけたりしないの？私は小さい時、してたんだけど……………」

「なまえはだめ」

「え？」

「なまえはだめ」

困惑する神無を余所に、アイは続ける。胸に抱えた市松人形と同じ



ように無表情で、暗記した台本を棒読みするかのようにならんと、言う。

「なまえはだめ。なまえはともたいたいせつなまえはこころ。なまえはアイ。なまえがあるからアイはアイなまえがないならアイはいない。だからなまえはだめ。なまえをあげたらうまれるこのこがうまれるなまえがあるとつよくなるなまえをよべばもつとつよくなるどんどんどんつよくなる。アイといっしょそれはだめ。アイはアイこのこはこのこ。だからなまえはだめ。アイがいつてアイはアイのままでもいいつて。だからだめ。さびしいけどアイはアイだからなまえはだめ。なまえをつければアイはさびしくないけどアイはアイじやなくなる。それでもいいとおもうけどだめ。アイはアイじゃないとアイしてくれないからだめ。だからだめなまえはだめつけたいけどだめがまんしないがまんしないアイはだめ。なまえはだめ。やぐそくしたからなまえはだめ」

「えつと……？」

アイの平淡な声は、理解を難しくさせる。耳に入っても、脳に入っていない。すーっと入り、すーっと抜ける。引つ掛からない。だから神無には、アイが何を言っているかよくわからなかった。

「名前は……ダメつて事、だよね」

わかった事は、そのくらいだ。それと寂しいとかなんとか。我慢してるとかなんとか。約束がなんとか。

アイは、頷いた。そして顔を隠すように、市松人形を持ちあげる。

「でも。どうしてもならないよ」

そして言う。

「どうしてもぼくになまえをつけたいなら。ぼくはよろこんでなまえをもらおうよ。」

「えつと……」

急にお人形遊びが始まり、どう対応すればいいか、困惑する神無。

「アイはやくそくしたからなまえをつけてくれないけどあなたはやくそくしてないからなまえをつけてもいいとおもう。それはやくそくをやぶってないからいいとおもうからなまえをつけともいいよ。ぼくのなまえをつけてよいつてよおしえてよ。ぼくはなにかなぼくはだれかなぼくのやくめはなんだろう。ぼくにはまだわからないけどなまえがあればわかるとおもう。だからなまえをはやくつけてよおねがいだからつけてみてよおねがいだからなまえをちょうだいなまえがないのはさびしいよおかししいよくるしいよなまえなまえなまえなまえなまえなまえなまえなまえ。つけてくれないの？」

市松人形が首を傾げた。もちろん、実際に首を傾げたわけではない。実際は、アイが市松人形を傾けただけで、首を傾げたのはアイの方だ。しかし、そう分かっているにもかかわらず、神無は一瞬、市松人形が、本当に首を傾けたように、見えた。そして何より、今、喋っていたのがアイではなく、市松人形のように、神無には感じられた。

神無は昼間、子供達が言った事を思い出す。

『アイちゃんと話すと、お化けでるから』

『アイちゃんと喋っても平気なのは、つららお姉ちゃんだけなの』

「なまえ」

気のせいか。部屋の温度が下がっている気がする。いや、部屋の温度は下がっていない。自分の体温が下がっているのだ。腕を見る。いつの間にか鳥肌が立っている。何だか、吞まれている気がする。何かに、吞まれている気がする。

「あ、アイちゃん！夕ごはん食べに行こっか！」

このままでは、水無の二の舞になる気がした神無は、無理に笑みを浮かべながら、アイにそう提案した。

「今日はカレーだよ。アイちゃんもカレー、好きでしょ？ほら、お人形置いて？」

水無が言っていた通り、この人形がやばいと思った神無は、アイから市松人形を取り上げようとした。しかしアイは「んー」と、唸り、市松人形を抱えて丸くなってしまった。

「ほらアイちゃん。いい子だから、その人形離して、一緒に食堂いこ」

「やー！」

それでも神無は諦めず、アイから市松人形を取り上げようとするが、アイは、さっきまでの平淡な人形のような様子から一変、お気に入りのおもちやを取り上げられそうになる子供らしく暴れる。

「ほら！こちよこちよしちやうよー！くすぐりたいでしょー！だか

「人形を離しなさい！」

「うー！ー！ー！」

「ほら！ベットでコロコロしちゃうよー！目が回るでしょー！だから人形を離しなさい！」

「やー！ー！ー！」

「ほら！高い高いしちゃうよー！暴れると落ちちゃうよー！だから人形を離しなさい！」

「んー！ー！ー！」

神無はどうかかしてアイから人形を取り上げたい。しかしアイは人形を手放したくない。先程までの奇妙な涼しさ、何かに吞まれるような空気はもはやなく、神無とアイの熾烈な攻防のような、ただのじゃれ合いのようなものが繰り広げられた。

「どうして私には甘えさせてくれないで私以外には甘えさせているんですか？」

「え？」

「？」

そんな現場を見たのは、人肌に飢えているくるみだった。



3・9・なまえをください(後書き)

くるみの便利さに私は助かっていますか？

### 3 - 10 ・三人ぼっちの夕食

「……くるみさん、カレーおいしい？」

「おいしくないわけがないと思いませんか？」

「……そうだねー」

回りくどい回答だなー。と、思いつつ、神無は空になったアイのコップに麦茶をついであげる。アイはいきなりそんな事をされ、きよとんとした。神無はニッコリした。距離を置かれた。シヨックを受けた。

今三人は、アイの部屋にちゃぶ台を持ち込み、狭い中三人だけでカレーを食していた。

なぜこんな状況に陥ったか。順を追って説明するところ。

神無がアイから市松人形を取り上げようとする場面、じゃれ合っている場面を、目撃したくるみ。

またそうやって神無さんは私以外を甘やかすんですか？私も甘えてもよくないですか？どうして私はダメなんですか？差別ですか？人間皆平等とは夢物語ですか？もしかして私嫌われてますか？もしかして私うざいですか？と、神無を追い詰めるくるみ。

いや、今は甘やかしてたわけじゃないよ？いや、別に甘えてもらってもいいんだけど節度を守って限度を知って？いや、嫌ったりうざがってるわけじゃないよ？と、弁明する神無。

部屋の隅で人形を抱えて小さくなって避難するアイ。

様子を見に来た真奈美と園長先生。

園長先生、神社さんは私が思った通りの逸材でした。そのようですね。という、ちよつと待てな会話を止めたいが、くるみを宥めるの

でそれどころではない神無。

いなくなる真奈美と園長先生。

迷惑そうに、押し問答を繰り返す神無とくるみを見るアイ。

ちやぶ台を持ってまた現れ、はい、ちよっとどいて下さいね。と言  
って部屋の真ん中に置き、台ふきでちやぶ台を拭く園長先生。

カレーとコップ、麦茶が入った容器を持って現れ、アイちゃんの分  
は、これから持って来ますね。と言って退出する真奈美。

有限実行で小さい容器に入ったカレーを持ってくる真奈美。

では、神社さん。よろしくお願いします。くるみ、存分に甘えなさ  
い。と言って、去っていく真奈美と園長先生。

残ったのは、お腹空きませんか？のくるみと、はめられたー！の神  
無と、？のアイだけだった。

という経緯をたどり、今に至る。

なにぶん、広くない部屋。三段ベットと勉強机の間は、なんとかち  
やぶ台が置ける程度しかない。なので、窓際の方に神無とアイが座  
り、出入口側にくるみが座っている。つまり、神無は逃げ道を塞が  
れている感じなのだ。嵌められた。

「……」

どうやら、真奈美先生と園長先生は、私にこの二人をどうにかする  
足掛かりにしようという魂胆だったようだ。と、神無はアイの口を  
拭きながら思う。

「私の口も汚れてませんか？」

この二人は園内でも屈指の変わり者だろう。変わり者というか、問  
題児か。勝手に園内を抜け出す月読ちゃんとか命ちゃんとは、また  
別の意味での問題児。きつと色々困っているのだろう。だからとい



って、私に期待されても。と、神無はアイが麦茶を零してしまったので慌てて台ふきで拭きながら思う。

「私も麦茶が零れてしまったような気がしませんか？」

あまりみんなと遊ばないアイちゃんを、どうにかしたいというのはわからなくもない。ちょっと変なくなるみさんを、どうにかしたいというのもわからなくもない。アイちゃんは、今のままだと、ずっと一人ぼっちって事にもなりかねないし。くるみさんも中学三年。確か春風さんが、この園は中学生までとか言ってた気がする。このままでは……どうなるんだらう。困った事になりそうな気はする。と、神無はアイにアーンさせながら思う。嫌がられた。ショック。

「私の口は開いているように見えませんか？」

アイちゃんの問題は、引っ込み思案……じゃなくて、他人に興味がない事と、人と触れ合うのを怖がってるところ。なんか他にもあるようだけど……まあ、そんなとこだらう。どうやら、アイちゃんと今、良好なコミュニケーションが取れているのは、冰山さんだけのようだ。まずは同い年の子でなくても、そういう人を増やそうという作戦だらう。私じゃなくてあなた達がそういう人になって下さいと言いたいけど、うまく出来なかったから私何だらうな。と、神無は思いながらアイのコップに麦茶をつぐ。不思議そうに首を傾げられたので、微笑む。ついでにくるみのコップにつぐ。首を傾げて「感謝しますか？」と言われたので「いいよ」と苦笑いを返す。

「そうですか？」

くるみさんの問題は……言い回しか。それ以外は……マイペース的なところかな。マイペースなのは別に悪くはないだらうけど、言い

回しと思考がちょっとあれだよな。でも、それって私にどうにか出来る事じゃないよなあ。何で私に……。と、神無はくるみの事を考えていたが、もう一度アイにアーンをチャレンジしたところ、アイが仕方ないというようにゆっくり口を開けてくれたので、いやーん！アイちゃんデレたー！どうでもよくなつた。

「ん？くるみさん、雛鳥みたいに口を開けてどうしたの？」

「神無さんはもしかしなくても私の事が嫌いだと感じた私は悲しくなりませんか？」

「冗談だよ冗談。くるみさんは一人で食べれるでしょ」

「アイも一人で食べれるのでは？」

「アイちゃんは一人じゃ食べられないよね？」

アイは無言で首を横に振った。

「……ほらね」

神無は見なかった事にした。

「ほら、早く食べちゃおうね」

「神無さんが食べさせてくれるまで私は一口も食べないと言ったらどうなりますか？」

「そつだね。私は困って、仕方なくくるみさんにあるよ」

「仕方なくでは何だかダメな気がしませんか？」

「……くるみさん、昼間も聞いたけど、どうして私にそんなに甘え  
たがるの？真奈美先生とかじゃダメなの？」

正直私には無理っばい。

「私は年長さんの存在なのでは？」

くるみはアイを見て言う。アイはモグモグカレーを食べながら、首  
を傾げた。

「年長さんの？」

「お姉さんのでも可な気がしないでもないような気が？」

「確かに、年上だね」

「お姉さんの存在はなかなか甘えづらい気がしませんか？」

「ああ……わかるような、わからないような」

くるみはもう中学生。それでなくとも小学生、小さい子が多いこの  
場所では、小さい子達に先生達を譲らないといけないという事だろ  
う。

「そういう鬱憤が溜まっていた私はあなたが月読と命に見せた笑顔  
にキュンとしてしまい溢れ出し今に至るといのが答えに限りなく  
近い気がふつふつとしてきてわがママを聞いてあげてもいい気がし  
てきませんか？」

「う、うーん……そういうとこがなければ聞いてあげてもいいよ  
な気がするんだけどな」

苦笑い。

まあつまり、甘えられるなら誰でもいいというわけだ。

それがたまたま私だっただけ。

今日春風さんが来てたら、春風さんに甘えていた。

今日水無が来てたら、水無に甘えていた。

そんなもんだ。

3・11を境に変わった(前書き)

O  
r  
Z

### 3・11・どうしてこうなった

「どうしてこうなった……」

「何か言いましたか？」

「何も言っていないよー。早く寝なー」

神無はそう答え、暗闇の中、見慣れぬ天井ではなく、見慣れぬ二段ベット下を見て、ため息をついた。どうしてこうなった。と、横を見れば、さえちゃんの寝顔。カワイイ。だけど、どうしてこうなった。

時刻は夜の十時。よい子が集まるくるみわり園では、すでに就寝時刻だ。郷に入れば郷に従えというから仕方なくというわけでなく、神無もすでにベットに入っている。アイの部屋の三段ベットの一番下。パジャマ代わりの修道服を着て。どうしてこうなった。

そもそもあの三人での夕食がいけなかったのだ。

子供好きな神無はつつい、アイのお世話をして、人がいい神無は結局、くるみの願い通りあーんをしてあげたりと、サービスし過ぎたのがいけなかったのだ。アイが不思議そうに首を傾げつつも、神無の世話を受け入れ、くるみがあればこれと神無に甘える？のを

見て、この子、やはり睨んだ通り。と思ったのか定かではないが、今日は神無さん、泊まっていくといいですよ。というか、夏休み中ずっといたらどう？インターシッパ的な。なんて、真奈美が提案したのだ。どうしてそうなった。

もちろん神無は、やんわりと、しかしきつぱりと、お断りした。いや、帰りますと、着替えとかありませんしと、夏休みいっぱいなんて素敵な冗談ですなと、両親も心配しますしと、嘘まで交えつつ断ったのだ。

しかし、夏とはいえもう暗い。女性の一人歩き危険だから泊まっていきなさいと、着替えは真奈美先生が用意してくれるから大丈夫と、冗談ではありませんよ。あなたがよかつたら、夏休みの間、泊まり込みでお手伝いしてくれませんかと、ご両親には電話すればよいのではと、返されてしまった。しかも真奈美ではなく、園長先生にだ。困った。

神無は人の頼み事を断るのが苦手な人間だ。何せ、頼まれるという事は、頼りにされているという事なのだから。家では全く頼りにされない、必要とされないで生きてきた神無にとって、それを断るなんてとんでもない。最近はそのでもないが、今もそれは変わらない。頼られるという事は、必要とされるとい事は、大変嬉しい。それに加え、今回頼んできたのは園長先生。男性。年上。父親と同じくらいの年齢。断りづらさここに極まる。

というわけで、神無はとりあえず今日は、泊まっていく事になった。夏休み中のお手伝いはまた別の時に話しましょうという事で、ことなきを得た。

そんな会話を夕食後、皿洗いを手伝った後の食堂でしていたわけだが（つまり周りの子供達の視線も、断りづらくさせていたわけだが）、そうこうしている間に、お風呂に入る時間となった。神無はさえ

ちゃん達と一緒に入った。結果、パジャマが修道服になった。どうしてそうなった。

真奈美先生はこう言った。神無さん、着替えは用意しときますので、私の代わりに子供達をお風呂に入れていただけますか。と。

その時、神無が、真奈美の笑顔の意味に気付けばよかったのだが、残念。その時の神無は、家に連絡しないといけないという事で、頭の大半を使っていたので、わかりました。と、かるーく答えてしまった。結果、お風呂から上がると修道服があり、自分が着ていた服が消えていたというイリュージョン。神無が脱衣所で、はめられた。と、膝をついたのは言うまでもないかもしれぬ。

というわけで修道服を着た神無は、髪が濡れてるのがいいアクセント。黒髪もいいが、これが茶髪ならどうだろう。いいだろう。という、よくわからない事を言いながら写真を撮る真奈美先生を意識の外に追い出しながら、将棋とか出来ますか？と、マグネットの将棋を持ってきたくるみと食堂で将棋を打ちつつ、周りであーだこーだと言ってくる子供達の相手もしつつ、お姉ちゃんは今日帰ってこないから、家にいるのはお母さんとお父さんだからー、あー、うー。と、考えていた。

そんな神無にくるみが、王手ですけど、神無さんは今日、私の部屋で寝ますか？と、王手関係ないだろという発言をしたから、さあ大変。

くるみお姉ちゃんは一人部屋でしょー。なのに一緒に寝るのー。なら私の部屋でもいいんじゃない？確かに。確かに。じゃあ私達の部屋でもいいよねー。わたしはせまいからやだけどうしてもというなら。とか、なんとか、子供達が騒ぎだし、神無争奪戦が始まった。結果、アイの部屋で寝る事になった。どうしてそうなった。

子供達に手を引っ張られ、どうしょー。という困り顔の神無に助け船的なものを出したのは、写真を撮りまくり満足した真奈美だった。



真奈美は、ちょうどアイちゃんの部屋のベッドが空いてますから、神無さんにはアイちゃんの部屋で泊まってもらいますけど、いいですよ。と、もう決まってるみたいです。発言をしたのだ。

子供達は驚いた。神無も驚いた。しかし一番驚いたのは、食堂の隅っこで、お風呂上がりの麦茶をちびちび飲んでたアイだった。どう。え？つと、神無達の方を見た。

アイちゃんの部屋で寝るのー？お化け出るよー。夏だしー。アイちゃんの部屋だしー。やめといたらー。私の部屋がいいよー。と、子供達は言う。が、真奈美が、そんなに神無さんと一緒に寝たいなら、アイちゃんの部屋で一緒に寝る事になりますよ。と、言ったところ、お化け恐ろしやと、ほとんどの子供達は、じゃあまた今度にするー。という事になった。ほとんどという事は一部の子供は、諦めなかったのだ。お化けとかいないっていう事になった。じゃんのなさえちゃん、お化け何それおいしいのー？的なのはなちゃん、お化けとか逆に見たくありませんか？的なくなるみである。

じゃあ、あなた達も一緒に、今日だけアイちゃんの部屋で寝ますかと、真奈美が許可しようとしたところ、らんちゃんが、はなちゃんやめといた方がいいよ。あたしと一緒に寝ようよー。と、はなちゃんを引き止め、はなちゃんが抜けた。

という経緯をたどり、神無はくるみわり園でパジャマ代わりに修道服を着ながら、アイの部屋でさえちゃんと添い寝しているのだ。

自分の許可なく全てが決まってしまった部屋の主のアイちゃんは、逃げるように三段ベッドの一番上に移動したため、くるみは真ん中。神無とさえちゃんは一番下で眠る事になった。

アイちゃんいいの？と、神無が聞いたところ、アイは布団をかぶってしまった。もしかしたら怒ってるのかもしれない。申し訳ない事をした。

アイの部屋で、神無とさえちゃん、そしてくるみは、しばらく他愛ないお喋りをしていたが、さえちゃんが眠ってしまったので、もう

寝る事にした。くるみはまだ話していた的な事を言っていたが、寝ている人の近くでは静かにするのがマナーである。

「……」

さえちゃんが寝たのが、だいたい三十分前の出来事。くるみはもう寝たと思っていたが、まだ寝ていなかったようだ。まだ眠くはないのかもしれない。でも、静かにしてくれている。いい子だ。

神無もまだ眠くない。眠くないというか、寝れそうにない。それは、枕が違うからというわけでも、蚊取り線香の匂いが気になるからというわけでも、くるみが起きてるからというわけでも、アイの部屋が夏の夜にしては涼し過ぎるからというわけでも、さえちゃんがまるで抱き枕のごとく腕を抱きしめてるからというわけでも、寝たらさえちゃん潰しそうだからというわけでも、まるでこちらを監視するかのごとく机に置かれた市松人形が気になるからというわけでもなく。さっきの電話の事が気になっていたからだ。

### 3 - 1 2 ・自信は自身で人の形？

神無は就寝前、一人外に出て、意を決して、自宅に電話をかけた。両親のどちらが出ても、何を言われても、平気、大丈夫、そういう気持ちで電話をかけた。

『はい、神社です』

しかしその気持ちに、意気込みに、何の意味もなかった。

「…………お姉ちゃん？」

『そう言うあなたは妹ちゃん』

まさかという思いで聞いた声に、返ってきた涼しげな声はまさしく、姉、神裂のものだった。

「…………」

今日は家にいないはずの神裂が電話に出た事に、神無は驚き、何も言えなかった。頭の中はハテナがたくさん。さっきまで必死にシミレーションしていた、両親との電話の受け答えなんて、もう忘れてしまった。

『今日は帰らない予定だったけど、なんとなく帰省したのよ。で、なんとなく取った電話が神無だった。驚いた？』

「…………驚いた」

神無の無言の意味を察し、神裂は自分がいる理由を教えてくれた。理由といつても、ただ、『なんとなく』特に意味もなく、この姉は自分の意気込みや決意や準備を無意味にしてくれた。両親と話さなくてもいいと、助かったと思うと同時に、助けられたという怒りも覚える。その怒りが理不尽であると神無は自覚しているから、その怒りは神裂を傷つけず、神無を傷つける。

『そう。私も驚いた』

「……そっか」

自宅の電話には、ナンバーディスプレイ機能はない。その言葉は、嘘ではないだろう。神裂は嘘をつかない。しかし、神無には嘘に聞こえた。それは神裂の声に全く、驚きを感じられないからではない。この姉ならば、この、天才で完璧な姉ならば、私が電話をかけてくる事くらい、わかっていたような気がしてしまう。そう思ってしまう。神無は、今日、くるみわり園に行くと神裂には教えていないし、ましてや泊まるなんて、神無自身も知らなかった。だけど、神裂なら、この姉ならば、自分程度の行動なんて、全部お見通しなのではないかと。そんな姉に比較され続けた神無は、思ってしまうのだ。水無と火無の、あの姉妹関係を見て、神無は神裂に遠慮しない、神裂より自分が劣っていると卑下しない。そう、思い始めてはいるが、そう簡単には変わらない。変わらない。そういう生き方を、神無は二十年間してきたのだから。

『それでどうしたの？まだ帰って来ないの？』

どうしたの？と、聞いてくるが、本当はわかってるんじゃないかなと思いつつ、神無は神裂に、今日はくるみわり園に泊まる事になったから帰らないから、伝えといて。と、伝えた。

『そう。わかったわ。お姉ちゃんが伝えといてあげましょう』

「うん。よろしくね」

『はい、よろしくされました』

「……………」

これで神無の用事は終わった。両親とは違った意味で緊張する神裂との電話。もう切りたいのだが……………。

『水城さん』

「え？」

神裂はまだ話したい事があるようだ。

『ほら、あなたのお友達。水城さんは、一緒なの？』

「ううん。一緒じゃないけど……………何で？」

『その何では、何で一緒にいると思ったか？それとも何で聞いたか？』

「どっちも」

『そう。欲張りさんね』

「……………お姉ちゃん、何かいい事あったの？」

何か、楽しそうだ。

『あつたわ。だからちよつと私、機嫌がいいの』

「そつか、よかつたね」

クスクスと笑っている雰囲気だ。相当機嫌がいいようだ。何かあったのだらう。

『何で一緒にいると思つたかはね』

「うん」

『神無が外泊する時は、いつも水城さんが一緒だったからよ』

「ああ、なるほど」

神無が学校行事以外で外泊したのは、水無の家での外泊が初めてだった。

『それで何で聞いたかはね』

「うん」

『なんとなくよ』

「なんとなく?」

また、なんとなく。

『そう、なんとなく。なんとなく今、聞いてみようかと思って』

「聞いてみよう?」

『神無は水城水無の事を、どう思ってるのかなって』

「どう思ってるって……いい友達だと思ってるけど」

『そういう事じゃないんだけど、仕方ない。もうタイムリミットみたいね』

「タイムリミット?」

どういう意味だろうと思っていると、「神無お姉ちゃんまだ?」と、自分を呼ぶ声があった。そして偶然にも、電話の向こうでも、母親が神裂を呼ぶ声がする。自分に向けられた記憶がない、優しい声だ。

『じゃあね、神無。ちゃんとうまく、伝えておくわ』

「うん。よろしくお願いします」

『神無』

「ん?」

『自身を持ってね』

「え?」

『おやすみ』

「おやすみなさい……」

電話を切る。

電話を見つめる。

夜空を見上げる。

満月に見えるが、実際は満月ではない不完全な月が、輝いている。

神無はため息をついた。

「……はあ」

電話の内容を思い出して、ため息一つ。さえちゃんのほっぺを突いても、気分は優れない。

神無が気になるのは、神裂が水無の事を聞いたこと。そして、最後の言葉。

自信を持ってね。

「……自信か」

自分は自信を持ってない。自覚はある。しかし、自信を持つなんて、



どうしろというのだろうか。  
どうすれば、自信を持てるのだろうか。

「地震ですか？」

「うわっ」

神無が暗闇の中で、その答えを見つけようとしていると、上から逆さまの生首が現れた。驚いた。

「くるみさん、ビックリさせないでよ……」

その生首は、一つ上のベットで寝ているくるみであった。「こちらにビックリさせる意図は毛ほどもなかった気がしますよね？」逆さまのまま、くるみはそう言うが、くるみの短いとは言えない黒髪が、重力に従い垂れ下がっているのは、なかなかのホラーである。無表情だからまだいいが、これで笑ったりされたら、悲鳴を上げた自信が神無にはあった。

「こつこつ自信はあるんだけどなあ……」

神無が自虐的に呟くと、「どういう地震ですか？縦揺れと横揺れな地震ですか？」くるみは首を傾げた。

「その地震じゃなくて、というかくるみさん、そろそろ頭、戻さない？」

「人と話す時は顔を見なさいと教わりませんでしたか？」

「教わったけど、そういうのは臨機応変にね」

「それは大変難しい事な気がしませんか？」

「いや、全然そうは思わないんだけど……わかった、じゃあ私がベツトから出るね。眠れないんでしょ？ちよつとお喋りしよつか」

神無の提案にくるみは「まさしくそれを望んでいた私が断る理由はないですよね？」と答え、頭を引っ込めた。

神無は隣で寝ているさえちゃんを起こさないように、静かにベットから出て「……よし」こちらを監視しているよう市松人形を壁に向かせてから、椅子に座った。

くるみは「その地震ではないなら、どのジシンなんですか？」体を起こして聞いた。

「自分を信じると書いてのじし……いや、自分自身の方かな？」

神無は、唐突に、なんとなく、そう思った。ちよつど自信がなくなっていたから、自信、の方だと考えていたが、神裂は、自身、と、言っていた気がしてきた。

「どうかしましたか？」

「んー、ちよつと待ってね……私もよくわからなくなっちゃったから……」

神無は腕を組み、神裂の言葉を考える。

自身を持ちなさい。自身を。自分を。自分らしさ？自分らしさは、価値。価値を持ちなさい？私の価値。あるかな。優しい？面倒見がいい？それくらい？でもそれは、本当の私かな。

「ん、これは春風さんの悩みに近い……」

解決方法は知っている。

今の自分を受け入れればいいのだ。今の自分を、ありのままに。自信を持って。自分は自分でいいのだと。

「しかしそれが出来る人は、そもそも悩まないって」

神無は、嘆息。お姉ちゃんは どうして今、あんな事を言ったんだろう。なんとなくなんて言って……絶対に意味はあるんだ。

「独り言が趣味ですか？」

「いや、そういうわけじゃないんだけど……」

首を傾げるくるみに、苦笑で返す神無。口では否定したけど、夜は独り言が多くなる癖はあるかもしれない。

「ねえくるみさん？」

「何ですか？」

「くるみさんは何か、悩み事とかある？」

他人の悩み事を聞く事により、自分の悩みの解決策を練ろうという作戦というよりは、くるみがそろそろ会話しないと何かまた突拍子もない事をしそうなので、会話の取っ掛かりとしての、神無の質問。

「私は悩み事がない人間に見えますか？」

「んー」

何を考えているかわからない無表情のまま、限界まで首を傾げているくるみは見る限り、悩みとかなさそうに見える。逆に、誰かの悩み事になりそうに見えるが、くるみのその言い回しからすると「そういう人間には、見えないかな」と、答えてあげるのがベストな気がした。

「何か悩み事とか、あるの？」

「なかつたらここにはいませんよね？」

「え？何か私に相談したい事があったの？」

甘えたいだけではなかつたのか。

「あなたに相談したい事というわけではなく適任かなと思った私ですか？」

「えーっと……つまり、別に誰でもいいんだけど、相談しやすそうだったから相談しようって事かな？」

なんかシヨック。

「落ち込みましたか？」

「わざと!？」

それともそんなに顔に出た!？」

「静かにしないとダメですよ?。」

口の前に指を立て、しーっとするくるみに対して神無は「しゅ、しゅめんねー」我慢我慢。

「私は変ですか?。」

「うん。あ、いや、んー、まあ、ほら、個性があるって、素晴らし  
いよね、うん」

唐突な質問に、つい正直に頷いてしまったので、神無はフォロー頑  
張る。

「別に隠す必要はないと思いませんか?。」

「そう?つまり、自分でも変だと思ってるって事かな?。」

自覚症状があって何よりだ。

「やっぱりそう思ってたんですか?。」

「誘導尋問!?。」

引っ掛かった!?

こころなしか、くるみさんも傷ついている気がする!枕を抱きしめ  
たのは傷ついたから!?

「静かにしないとアイ達が起きますよ?。」

「しゅめんなさい……。」

この人苦手だわー。

「それで、えーっと、なにかな？変だと思われるのが悩み事なの？」

「まずはそこからいきましょうか？」

「あ、それ以外にもあるんだね……」

「悩み多き年頃という噂ですか？」

「ああうん、くるみさんくらいの年頃はそついう噂だよな」

中学三年生。思春期は悩みが多いという噂。神無にも、覚えがある気がしないでもない。

「では、私に変なところを遠慮なく教えてくれますか？」

「んー、まあ……言い回しが独特なところかな？」

話し方が全部、こつちに尋ねてくる形にするのが変な気が。自分で気付いてないのかな？

「つまりそれを直せば変ではないという事ですか？」

「うん」

「つまりそれは死ねという事ですか？」

「何でそうなるの！？」

「静かにしないと起きますよという流れは後何回続けますか？」

「お互いにもう続けられないように気をつけようね……」

「私にも責任ありましたか？」

「無責任……」

神無嘆息。くるみ首傾げ。天然か？

「それでえーっと……何だっけ？」

神無は精神的に疲れ気味。これなら自分の悩みを考えていた方がよかった。

「神無さんが私に死刑宣告をしたところですよね？」

「私にはその意味がわからなかったところだったよね？」

「何がわからないのかわからないとはまさに今この状況を表しませんか？」

「互いにそんな状況って、もう詰んでるよね……」

「つまり私の悩みは解決されないという事ですか？」

「いや、だから喋り方を直せばいいだけだよ？ちよっと、自分の名前  
前言ってみて？」

「私はくるみですけど何か？」

「何で挑戦的……断定してみてくれる？」

「私はくるみに違いありませんか？」

「……わざと？」

「何の事ですか？」

「……」

「……」

暗闇の中、無言で見つめ合う二人。微妙な空気が流れる。

「口癖、なの？春風さんが、語尾にですをつけるのと同じ？」

「キャラ付けだと言いたいんですか？」

「うん」

「あなたがそう思うんならそうなんじゃないんですか？」

「……怒ってるの？」

攻撃的だ！。

「逆にとても機嫌がいいという考えはありませんか？」



「あー……機嫌がいいって事でいい？」

「あなたがそう思うんならそうなんじゃないですか？」

「……その言葉、気に入ってるの？」

「気に入ってないなら使いませんよね？」

「あなたがそう思うんならそうなんじゃないですか？」

「嫌味ですか？」

「あなたがそう思うんならそうなんじゃないですか？」

「怒ってますか？」

「ちょっと機嫌は悪いよね」

温厚な神無でも、イラツとしますよ少しは。相談にのるうとしているのに、この態度は、いただけない。

「ずばり聞くけど。どうしてくるみさんは、そういう喋り方をするのか？キャラ付けなの？それとも何か特別な理由でもあるの？」

「惚けてもいいですか？」

「いいけど。その場合は私、ベットに横になってテキストに聞くけど、いい？」

自分の事八割で、聞かせてもらいます。

「月読や命は神無さんは物知りで優しくて何でも話を聞いてくれて怒らない神様よりも神様みたいと言っていましたけど、神無さんはそこまで優しくないですよね？」

「……うん。私はね、ここの子供達が思ってるほど、優しくないんだ」

だから優しくあると、優等生であろうと、頑張っているのだ。そうしないと、誰からも必要とされないから。

「ガツカリした？」

神無は微笑みながら「くるみさんも、私が優しいなと思ったから悩みを相談しようとしてくれたんだよね？」と、聞いた。月読に優しく接している姿を見て、くるみは優しいなと思ったから、くるみは甘えて、悩みを相談しようと思ったのだ。優しくないなら、相談しない。

「どうして聞くんですか？」

「ん？」

「神無さんはかなに似ていますよね？あなた達のような人は、自分がどう思われてるかを確認するのを避ける傾向がありますよね？」

「ああ……そうだね」

かなちゃんは確かに自分に少し似ている。空気を読むのがうまい。人の顔を窺って、どう振る舞えば怒られないか、最良な立ち位置

を見つけようとしている。目立たず、邪魔にされない立ち位置にしようとする。そういうタイプの人間は、周りが自分をどう思っているかに敏感だから、周りが自分に何を求めているかに敏感だから、わざわざ口に出しては聞かないのだ。言葉にして、しっかりとした確かな事を知るのが、怖いから。知りたくないから。自分がピエロだと知られているかを知りたくないから。

だからこれは珍しい。そこに理由を求めたくなるのもわかる。理由をつけたいのもわかる。だけど。

「うん、なんとなくだよ」

「なんとなくですか？」

「そう。なんとなく、くるみさんに聞いてみた。優等生じゃない私にガツカリした？つて。なんとなく。特に意味はないよ」

特に理由も意味もない。なんとなく。なんとなくの行動で、いい事があるかもしれない。お姉ちゃんみたいに。

「別にガツカリなんてしませんよ？」

「正直に言ってもいいんだよ？」

「神無さんは思ったより優しくはないですけど優しい人には違いありませんよね？」

「そう？」

嬉しい事を言ってくれる。神無はホツとした。なんとなく聞いて、

よかったのかな。

「優しくない人とは私は話しませんという心がわかりますか？」

「心？優しくない人とくるみさんが話さない、その心は的なの？」

「理解力が高くてビックリした私ですか？」

「その心ね……あ、優しくない人はくるみさんと話さないからという考え？」

「正解者には何か賞品をプレゼントしましょうか？」

「何をくれるの？」

「何も無い時は体で払うのが王道ですよね？」

「遠慮します」

丁寧に断りしますので、両手を広げて力モンしないで下さい。

「って、何だか話しがそれている気がするね」

「誰のせいですか？」

「私のせいなような、くるみさんのせいなような」

「喧嘩両成敗にしますか？」

「しときましようか。で、くるみさん」

「何ですか？」

「何でそんな喋り方なの？」

「何だか眠くなってきた気がしませんか？」

くるみはそう言って、ベッドに横になってしまった。明らかに逃げた。

「言いたくないならいいけどもね……」

悩みを聞いて欲しいって言ったのは、そっちなんだけども。まあ、言いたくないなら仕方ない。気になるけど、まだ私にそこまで心を開いていないという事だろう。いや、でも、それなら悩みを相談しようともしない気が。話しているうちに信用を失ったのかな。いやいや、そういう風に考えるのはやめよう。自身を持って、自信を持つて。

神無はクスツと笑って「これでいいですか、お姉ちゃん？」と、咳いた。

「お姉ちゃんがどうかしましたか？」

「何でもないよ、おやすみ。それとも、理由を教えてくれるの？」

「おやすみなさいで構いませんよね？」

「はい、おやすみなさい」

さて、じゃあ自分も寝ようと神無は立つ。が、「……………」「むー」いつの間にかさえちゃんぐベット中央でぐーすかしていたので、ベットに戻りにくい。何故か顔をしかめているが、嫌な夢でも見ているのかもしれない。

それを見て、ふと、アイの様子も見ておこうと思った神無。三段ベットの一番上に乗ってみたいという好奇心もあったし。

梯子を上って一番上に乗る。おー、天井が近くて閉塞感。と、ちょっと驚き。「アイちゃん……………」と、なんとなく声をかけつつ、壁を向いて丸くなり、眠っているアイに近付く。寝顔を拝見しておこうという魂胆である。

顔を覗き込む神無。目と目が合った。

「……………起きてたの？」

ビックリした神無。てっきり寝ているものかと。

アイはモゾモゾ動き、タオルケットに包まりながら、ベットの隅で体育座り。避難してから「……………」お目目パツチりなアイは、首を横に振った。寝てたらしい。

「眠れないの？」

なら、添い寝してあげようかという神無に対して、アイは、机の方を指差した。

「あっち行けってこと？」

ちょっと残念。と、思ってる神無に対して「……………」アイは首を横に振って否定。指は差したままだ。

何だろうと思いつつ、神無はアイが指差した方を見してみる。

壁には特に何も無い。下を見下ろすと、くるみと目があった。「何してるんですか?」「ちよっとね」と答えると、顔を引つ込めた。他に何か変なところはと見ていると「えっ!」神無は気付いた。

市松人形がこつちを見ていた。

「どうかしたんですか?」

くるみの問い掛けに、神無は答えられないほど、驚いた。口を抑え、悲鳴を堪える。

神無の記憶が確かなら、ベットの方を見ていた市松人形はさつき、壁の方に向けたはずだ。しかし今は、また、こつちを見ている。どういう事だろう。勝手に動いたのか? いやいやありえない。でもだけど……。

部屋の空気が、また、下がった気がした。

神無は目で、壁ではなく、市松人形を指差しているアイに、どういう事が尋ねた。

アイは人形みたいに無機質な瞳で、神無を見ながら、答えた。

「こつちみてないとねれないの」

「……」

どういう意味ですか?

と、神無は胸の内だけで問い掛けて「……おやすみなさい」と言っつて、逃げるようにそそくさと梯子を下りる。

「どうしたんですか?」と不思議そうに聞いてくるくるみに対して

も「おやすみなさい」と言ってから、「うー」とうなされてい  
るさえちゃんを脇に寄せて、ベットに入って、守るといふより、お  
守りをギュツと握るような感じで、さえちゃんを抱きしめて、目を  
閉じて、背後から感じる視線を、無心を貫き通して黙殺し、眠りに  
堕ちるのをひたすら待った。

次の日の朝。

目の下にくまが出来た神無は、子供達の「お化け出なかったー？」  
という言葉に、曖昧な微笑みを返すしかなかった。  
さらに、さえちゃんが「怖い夢みたー」と、言った事で、あの部屋  
はやっぱりやばい。という噂がまた、強くなったのだった。



3 - 1 2 ・自信は自身で人の形？（後書き）

なんかもうめっちゃくちゃ or z

一度全リセットしたい気分……

1・1・夏のグータラな一日

「お姉ちゃんひまー」

「だねー」

「外は暑そうだねー」

「だねー」

「お姉ちゃん好きー」

「だねー」

「あい、らぶ、ゆー」

「だねー」

「むぎゅー」

「ぐえー！」

ベットからダイビング気味に火無が水無の背中に乗ってきた。水無は潰れた。ぐえー。

八月上旬。太陽、絶好調な昼下がり。外は地獄、クーラーガンガンな部屋は天国。好き好んで地獄に向かうような人間ではない水無と火無は、天国でぐーたらしていた。

火無はベットでゴロゴロしながら、二時間ドラマは流し見しつつ、

お姉ちゃんうなじうへへー。とか思っていた。そして、水無にダ  
イブした。

水無はベツトを背もたれに、図書館で借りた本をぺらぺらと読んで  
いた。そして、潰された。

「お姉ちゃん暇だよー」

水無の背中から下ろされた火無は、猫のように水無の腕に擦りより  
ながら、遊ぼうよー。

「私は忙しいんだよー」

ひつついてきてうつつとうしいが、離れないだろうから火無をほって  
置くことにした水無は、順調に火無に毒されている気がしないでも  
ない。

「はい、これで忙しくなーい」

火無は水無の手から本を奪い、ポーンと部屋の隅のゴミ箱に投げ  
た。入った。「痛い！」鈴枕で頭を叩かれた。

「暇なら外で遊んできな。図書館はきつと涼しいぞ」

ゴミ箱から本を回収し火無から距離をとり、また距離をつめられた  
水無は、火無にそう助言した。

「図書館なんか行ってもつまらないもん」

お姉ちゃん相変わらずいい匂いだー。と、火無は思いつつ、拒否。

「お姉ちゃんはずっとお家にいて、つまんなくないの？」

「つまんなくないね。私はインドア派だから」

「私はお姉ちゃん派！」

「火無ちゃん、脊髓反射で喋るのやめようか」

「お姉ちゃんは投げやりに対応するのやめようよー」

「そいつはちょっと難しい」

「なら私も難しい！」

「なら仕方ない」

「うん、仕方ない」

1・1・夏のグータラな一日(後書き)

久々更新短い。短過ぎる。許してー。

## 1-2・ゲータラな夏のおやつ

「ガリガリうまい」

「んー」

ダラダラとおやつ時。冷凍庫に溜め込んでいる氷菓子を二人は食しながら、だらーっと、並んで二時間ドラマを見ていた。

「お姉ちゃんお姉ちゃん？」

「んー？」

「お盆はお家帰るのー？」

「私は隕石が落ちてても帰らないけど、お前は帰りたいたら帰ればー」

「お姉ちゃんが帰らないなら帰る意味ない」

「帰る意味はあるだろ未成年」

ねむねむ。と、水無はあくびを一つ。

「去年と一昨年の夏休みは、お姉ちゃんが帰ってこなくて、私寂しかったんだよー！」

昼寝でもしようかと思っている水無の膝で「寂しくて悲しかったんだよー！えーん、えーん！」と、泣く火無。薄着な水無は生足であるがこれでそれなもんで、火無至福。

「ああそうなの？」

「どうでもいいわー。と思いいながら、機嫌取りに「ごめんねー」と頭を撫でる水無は、相当眠い。

「許ませーん」と、水無のひざ枕に顔をうずめながら機嫌よさ気に言う火無は、お姉ちゃんのおふとももー。にやへへ。と、変態さんである。

「そういえば、去年のお姉ちゃんは夏休み何してたー？私はお姉ちゃんの部屋に入り浸ってたよー！！」

「あー、去年の夏休みー？何してたかなー」

火無に、勝手に入り浸ってんじゃねえよ。後、いつまで膝の上にいたんだ。という気持ちを込めたチョップを与えてから、去年何してたかなー。と、ねむねむな脳を探る水無。

「あの女とあんな事やこんな事をしてたら私許さないからねー！！」

「あんな事やこんな事って何だよって、噛むな舐めんなー！！」

足に噛み付いてきた火無を叩いて蹴っ飛ばし、距離を取る水無。眠気吹っ飛んだわー。

「お姉ちゃん痛い！」

「痛いのはお前の頭だ！つたく、ちよつと気を許すとすぐ一線を越えやがる……」

ティッシュで火無の唾液を拭いて、ため息一つ。

「去年の夏休みだろ？あー……あれだ。思い出した。たまーに友達と遊んだり、臨時バイトしたりしてた以外は、今年と変わらん。うん。暑くて外に出たくないのは毎年のこと」

「友達ってあの女の事なのかー！浮気者ー！！」

「はい、お前が今言った言葉に正解は一つもありませーん。だからにじり寄ってくるんじゃない！！」

また距離をつめてこようとすると火無は足で迎撃しつつ、水無は火無の誤解？をとく。

「神無とは夏休みは会わないんだっつーの。今年だって夏休み入ってまだ一度も会ってないっしょ？」

去年も今年も、メールをするくらいだ。夏休みに会って遊ぼうという事にはならない。理由は特にない。なんとなく。

「夏休みに会わない！つまりお姉ちゃんは学校で嫌々あの女と一緒にいるわけだからちょっと待ってねあれしてくるから！！」

「待て待て待て待て落ち着いて話すということを知らんのか！！」

リモコン片手に想いのおもむくままに駆け出そうとした火無を止める水無。

「夏休みに会わないからといって、嫌々付き合ってる事にはならな



「いだろうが」

無駄な体力を使った水無は、若干汗をかいた。火無の抵抗が冗談の度合いに収まらない強さだったため、冷や汗みたいなものもかいたのは秘密だ。リモコンをどんな用途で使う気だったこいつ。

「でもお姉ちゃんお姉ちゃん。本当にかげがえない人になら、毎日でも会いたくなるものだよ。私が毎日お姉ちゃんに会いたかったみたいに！！」

「バカめ。この時代、本当にかげがえない人とは毎日会わなくても問題ない人の事を言うのさ」

ふっ。と、黄昏れる水無。「なんかムカつくー！！」と、鈴枕を投げつけられたが、冷静にキャッチ。そしてリターン。「ふぎゃ！」勝った。

「うう……わかんないけどこの枕に当たると力がー」

「邪悪だからでしょ」

仰向けに倒れて唸る火無のお腹に封印として鈴枕を載せ、一段落ついた水無は、あくびをかみころしながら、テレビ鑑賞に戻った。

1・2 ゲータラな夏のおやつ(後書き)

ねむねむ……。

### 1 - 3 ・夏の夜長の長電話？

「お姉ちゃん何してるのー？」

夕食の冷し中華を食べた後、皿洗いをしたり（最近の火無の仕事）歯磨きしたりシャワーを浴びたり布団を敷いたりして、寝る準備を早々に整えた火無は、ベッドで携帯をいじっている水無に聞いた。

「んー、息してんのー」

「お姉ちゃんがそういうバカな事言う時は、あいつからのメールでしょ。ぶんぶんー!!」

眠いのか、怒り方にバイオレンス成分がない。

「はい正解、よしよし」

まだ9時にもなっていないのにすでに眠そうな火無の頭を右手で撫でる水無。火無は首を撫でられる猫のように気持ちよさ気である。そして左手で神無にメール返信。

「あいつ何だつて」

もう半分寝てるんじゃないかというところけた声で、火無が聞いてくる。

「んー、まつ。たいしたことではない」

「ふーん……まあ、どうでもいいけどー」

ここ最近、珍しいことに神無からのメールが多い。内容は、くるみわり園の事で、実際どうでもいいことが多い。

どうも巡に頼まれくるみわり園の手伝いをするはめになったらしい。断れない神無らしい事態だ。

神無はくるみわり園であったこと、例えば『月読ちゃんが水無に会いたいて』。水無もどう？』『ななちゃんが水無の家に行きたいって』。水無もどう？』『真奈美先生が水無に修道服着せたいって』。水無もどう？』『くるみさんとアイちゃんがさ……水無もさ……』『もうホント……水無さんも、ね？』というようなメールが来る。暗に水無もくるみわり園においでよ働こうよ助けてよというメールだ。もちろん丁重に『私は陰ながら応援しています。頑張ってください』とお返りする。

「お姉ちゃんまだ寝ないの？」

「お姉ちゃんはまだ寝ないの。あなたは、もう眠りなさい」

「ねむねむ」

「はい、ベット入ってくんな」

目を擦りながらナチュラルにベットに侵入してくる火無を蹴っ飛ばす水無。

「むー……結局は一緒に寝るのにー。わがままだなー」

「一緒に寝るんじゃない。あんたが勝手にベットに潜り込んでくるだけだっつーの。そして気付くと私が布団で寝てる……」

火無は夜中に目が覚めると、寝ている水無の横に潜り込む。そして暑いので水無を蹴っ飛ばして追い出す。何がしたいのこの子。

「おやすみー」

「はい、おやすみー」

今はクーラーがついていないが、さっきまで軽快に働いていたので部屋は十分涼しい。火無は毛布を被り、早々に夢の中へ旅だった。

「ようやく静かになった……」

見たいドラマが始まるにはまだ少し時間がある。水無はテレビを消した。こうして水無は、一日のうちでとても短い静寂な時間を手に入れたのだ。

携帯が鳴った。神無からメールが返ってきた。

『また泊まる事になった……またお姉ちゃん……もう本当に疲れるよ……水無がいれば負担が減るのにー!!』

「これはこれは……」

メールの文面を見て水無は苦笑。またお姉ちゃん。というのはよくわからないが、相当まいってるようだ。ただ、本当に困っているわけではないと、水無は思う。

試しに『そんなに大変なら、私に助けを求めるより、断った方がいいと思うよ』と、送信する。

「……」

返信が返ってくるまで、ぼーっとする水無。

水無の住むアパートの周りには畑ばかりなので、カエルの声は聞こえない。実家周りにはたんぼが多かったので、カエルの声がうるさかった。もうかれこれ三年は、あの声を聞いていない。が、別に寂しくもなんともない。

布団で寝てる火無の寝顔は健やかだ。そんな寝顔を見ながら、ずっと寝てりゃいいんだよなあこいつは。と、ありきたりな事を水無は思った。こいつこれからどうすんだろう。と、姉みたいな事も水無は思った。今のうちに殺しといた方が、私的にいいような。と、アブノーマルな事も水無は思った。

思ってたたら、携帯が鳴った。開く。画面を見てめんどくさそうな顔になる水無。その顔のまま、耳からちよつと離れたところに携帯を持っていく、ボタンを押す。

『水城水無!!三途舞歌が私の番号を着信拒否にしたみたいなんですけどどうす』

「ぶち」

水無は擬音を言いながら、再度ボタンを押した。テンパってる叫び声が聞こえなくなり、また部屋に静寂が戻った。平和が一番である。

「……………」

またすぐに携帯が鳴った。さっきと同じ表情、手順を行う水無。

『どしどし』

「ぶつん」

間髪入れず切る水無。わざわざ一度出てから、切ってあげるのが、水無の優しさである。たぶん。

「……………」

またすぐに携帯が鳴った。水無はため息をつき、そろそろ相手してやるかと思った。出る。

「もしもし」

『水城水無は私の事嫌いなんですかー!!』

電話の向こうで巡が泣いているのが目に浮かぶ。

「いや、お前が好きか嫌いかと聞かれれば……………うざいと答えるよ」

好きだけど、うざい。うざいけど、嫌いじゃない。という意味である。たぶん巡には伝わらないだろう。

『そこは好きと答えてくれです!』

「私そういう趣味ないし」

『ライク程度でもいいから私に愛情や優しさを向けてくれという意味ですよ!』

「向けてるよ?その程度の優しさなら」

『向けていてこの扱いですか!?!』

「あ、ごめん。そろそろ神無からメールが返ってくると思うから切っ  
つていい?」

『可能性のメールより今の電話を優先すべきではないですか!?!』

「私は今より未来を大事にするのさ」

『カッコつけて嘘ついてんじゃねえですよ全く……久しぶりの会話  
でこの仕打ち。私の心がブローケンです』

「クラーケン?」

『イカじゃないです!壊れるの過去文詞系!』

「私は過去文詞より未来詞が好きなのさ」

『じゃあこのままでは私の心がブレイクするでしょうです!文句あ  
るかどうか!』

「ない」

『ならよしです……で、何でしたっけ』

「優しく慰めてもらいたきゃ神無に電話しろって話」

『うう、そうしたいの山々ですが……って、そんな話でしたかです  
』?』

「いや、このままだとそんな話になりそうだから先取りした。ほら、



私って未来好きだし」

『未来好きだしは聞かなかった事にすれば、おおそ同意したです。神社神無に電話したいのは山々ですが……最近、あいつ怒ってる気がするですからちよつと遠慮したです』

「怒ってる？神無が？神無が怒るなんて、早々ないよ。しかも長期間それが継続するなんて、天変地異の前ぶりじゃない？」

『そ、そこまでですか？神社神無の怒りが継続すると天変地異ですか？どこぞの神様ですか？神社神無の名前は伊達じゃないですか？』

「おつと春風。そいつは禁句に近いぜ。神無の目の前では使わない方がいい言い回しだ」

『どついう意味で』「あ、ごめん。ドラマ始まるから切る」『ちよぶち』

水無は携帯を切り、設定をサイレントにして、離れたところに置いた。

そしてテレビをオン。

「お、始まった始まった」

ちよつど始まったところだった。

水無はドラマが終わる一時間、携帯がチカチカしてるなあとは思ってたが、一切携帯に触れなかった。

そして一時間後、携帯を手に取り、側面長押しでモードを解除して、携帯開いて画面確認『新着メール1件』『着信アリ30件』『メッ

セージ1件』との事だった。

「おとなしくドラマ終わりに電話しろよな……」

自分でやっついて何だが。そう思わずにはいられない水無だった。まずは神無からであろうメールを確認。

『なんとなく断れないし、なんとなくやってみたい。今月はなんとなく強化月間』

「強化……月間？」

なんとなくを強化する月間なのか、なんとなく何かを強化する月間なのかはわからないが、なんとなく『なんとなくがんばりたまえ』と送る。なんとなく、神無は頑張ってるな。と、思った。

次にメッセージを確認してみる水無。メッセージは案の定、巡だ。メッセージを再生するなら1を押せと言われたので、1を押して携帯を耳元に。「わっ！」そしてすぐに耳元から離す。携帯からすり泣く声と『優しくしてえ』という声が聞こえたからだ。巡の声に聞こえなくて怖かった。知らない女性かと思った。「うお！」そして震えて鳴き出す携帯電話。

「……もしもし」

『やっと出やがったですね!!』

巡、ご立腹の様子。

「お前さあ……」

『な、なんですか。何でお前の方が怒ってますか呆れてるですか』

怒っていいのはこっちです?』

「何だよあのメッセージ……怖いぞ」

『メッセージ、です?』

「……え、何その反応。まるで、メッセージ何て入れた覚えがないみたいな」

『入れた覚えないです。どんなメッセージです?』

「どんなって、泣いて、優しくしてえって」

『泣いてないです私。何だか途中から電話するのが楽しくなつたですから』

「……じゃあこのメッセージなに」

『……夏、ですね』

「……寝る。舞歌の着信拒否は明日には解除されてると思うから安心したら。もしくは直接会いに行け」

『何だかんだ言って優しい奴です』

「おやすみだ」

ぷちつと携帯を閉じ、「幽霊とか、怖くねえし、全然怖くねえし」と呟きながら、水無はいつもより早く、就寝することにしたのだ。た。



1・3・夏の夜長の長電話？（後書き）

次回は誰と誰を書こうかな！。

## 2 - 1 . 久しぶりに会ったら一味違う

「…………死ねる」

流れる風は温風で、直射日光は人を殺せる強さなある夏の午前中。舞歌は死人のような足取りで、図書館へ向かっていた。

「ああ…………」

図書館につけば涼しい図書館につけば涼しい図書館につけば涼しい。その一心で歩いてきた舞歌は、図書館に足を踏み入れた時、天国にたどり着いたかのようなため息と、安堵の笑みをもらした。

自販機でペットボトルのお茶を購入し、喉の渴きをうるおす。水分補給、大事です。

そして、左手首につけているリストバンドをパチパチさせながら、三階へ向かう。

「…………」

席につく前に、本棚から本を選ぶ。いつもは目についた本を流し読むのだが、昨日読んだ百物語がそれなりにおもしろかったので、その続きを読むことにした舞歌。そしていつもの窓際の席へ。その席は人気がないのか、いつも空いているのだ。空いていなかった日は、今のところ一度もない。不思議だな。と、思ったこともあったが、そういう事もまああるか。と思い、気にしない事にした舞歌であった。

ここまでは、いつも通りの舞歌の午前中。

「む、ようやく来たですか。二時間は待ったです」

「……」

そしてここからが、いつもと違う舞歌の一日。

「な、何でそんな露骨に嫌そうな顔するですか。久しぶりに友達と会ったんですから、もっと嬉しそうな顔しろですよ！！」

なぜか、舞歌がいつも使っている席に、座っていた巡。教えた覚えはもろろんない

「……いつから友達になったんだよ」

はあ、また面倒事だよ。と、ため息をついて、舞歌は巡をスルーして、傍の空いていた四人掛け席に座って、読書開始。

「その反応は予想済みでしたから悲しくありませんもん！」

そして予想通り、巡がなんか言いながら、正面に座ってきた。

「ほらほら舞歌。友達がせっかく会いに来たんですから、本なんて読んでないでお喋りしようです。ほら、え、お前二時間前って、八時からいたの？ え、何時起き？ 一緒に昼ご飯食べよ？ とか、

そんなノリでお喋りしようですよー。せっかく舞歌に会いに来たのですからよー」

「……なんか」

舞歌は本から顔をあげた。無視する気だったが、なんか、様子が変わった気がしたからだ。巡を見ると、なんか恥ずかしげである。目を合わせようとしない。

「いつも馴れ馴れしいですけど……今日はいつもより馴れ馴れしい。変なもんでも食ったか」

「そ、そうですか？ き、気のせいじゃないですかね舞歌？」

「……その呼び方、やめてくれませんか」

なんか、すっごいこそばゆい。

「フルネームはどうしたフルネームは」

「今日はフルネームじゃない気分なのです。別にいいじゃないですか、舞歌呼ばわりでも。水城水無だって舞歌呼ばわりしてるじゃないですか。なら同じ友達である私が呼んでも問題なしです？」

「……まず、あなたと私は友達じゃない。百歩譲って、友達だとしても、お前に名前呼ばれるのは嫌だ」

「どうしてですか！！ 神様差別ですかー！！」

あんまりですー！と、泣き崩れる巡。なんかいつも通りに戻った気



がしたので、読書に戻る舞歌。

「うう、名前を自然に呼ぶために私がどれだけ練習したか舞歌にはわかるかです！わかるかです！わかるか、です！わーかーるーかーです！わー」「わかるわけないでしょ！黙れうるさい机を叩くな名前呼ぶな図書館では静かにしろ！」

無視してたら、机まで叩き始めた巡。困ったさんだ。仕方なく、本を読みつつ相手をするに。「はあ……」ため息一つ。

「半日です！」

「……キモッ」

「さらに友達とスムーズに言えるまで半日！ 実質一日ですよ苦労させやがって！ です！」

「お前が勝手にやった事だろ……後、静かにしろ」

「舞歌のためにやった事ですよ！うわ！今恥ずかしい事言っただです！恥ずかしい！超恥ずかしいです！」

「なら喋んな黙ってる名前呼ぶな！」

久しぶりにあった巡は相変わらず、うざかった。本を読みながらの相手は無理だ。「はあ……」ため息二つめ。

「急に名前で呼んだり友達とか言ったり恥ずかしい事言ったり……なんか変な本でも読んだんですか？」

「まあ、本の影響もなくもないですよ」

「ああそうですか。今すぐその本は焼却処分した方がいいですよ」

これだから読書を危険だ。変な考え方を植え付けられる。流し読みが一番。

「でもです。私は助言も、もらったですよ。舞歌と仲良くする方法の助言をです」

「私と仲良くする方法……？」

何だそれ。

「です。舞歌は下の名前呼んで、友達友達と押して行けば仲良くなれると聞いたです。押しに弱い女と聞いたです。後、定期的にアイスクリームを与える餌付けも有効と聞いたです」

アイスクリーム。という単語に、パブロフの犬のように、顔を輝かせてしまった舞歌。すぐに顔を伏せ、両手を強く握りしめ、条件反射が憎いー！と、怒りで震える舞歌を見て、巡は、おもしろい奴ですー。と、笑うのであった。

「……どこの誰ですかそんなバカな事をあなたに吹き込んだのは。水無さんですか」

怒りを飲み込み、犯人を探す。

「水城水無ではないです」

「じゃあ……まさか神社さん？」

神無にそんな簡単な女と思われてたとか、ショックだ。

「神社神無がそんな事言うわけないじゃないですか」

「そうですね。じゃあ……妹か？」

「舞歌、妹いたですか？戸籍には載ってなかったですけど」

「戸籍って……そういやお前、何で私の携帯番号知ってたんだ」

教えてもないのに、いきなり電話がかかってきて、ビビった。

「勘です！」

「……」

巡の堂々とした嘘に、舞歌は呆れるしかない。

「水城火無でもないですし、もちろん水城火邪でもないです。そういえば舞歌、水城火無に会った事あります？」

「ええまあ、一応は……」

火無の事を思い出し、嫌そうな顔をする舞歌。

「どうしたんです？水城火邪にボコボコにでもされたんですか？」

「そっちには会ってない……あいつの事はあまり考えたくないし思

い出したくもない」

「ふむ、そうですね。私は気になるけど、触れないでやるです。優しいですか？」

「自分で言うな。で、じゃあ誰だ」

「それは秘密です。名前を言ったら殺されるです」

「殺されるって、どんな奴だよ」

殺人鬼か。

「いえ、名前を言ったら、舞歌に殺されるという意味です」

「はあ？」

「まあ、あいつが真面目な顔する時は従っとくに限るです。酔っ払ってたから信憑性低いですけど」

「……意味がわからない」

「わかるように言ってないですもん。伏線って奴です伏線」

「頭、本格的におかしくなりました？」

「酷い言い草です！」

「で、今日は何の用ですか……いや、その前に何でここに私がいるって知ってた」

「勘です！！」

「……はあ」

2 - 1 . 久しぶりに会ったら一味違う(後書き)

三途舞歌がどんな奴か忘れた。  
まあいつか。

## 2・2・私は変わった？いいえ、変わらない

「リハビリ？」

「です」

舞歌が巡に結局何の用だと聞き、数々の怒号と机バンバンを経て、ようやくたどり着いた答えがそれだった。仲良くなりに来たです！。よりは受け入れやすい答えだったが、意味のわからなさは段違いである。

「そろそろ一人で部屋の中、ああでもないこうでもないと言を言い、ぬいぐるみを殴り、小説で涙し漫画で笑い、ネットの世界にダイブし酒を煽る生活に飽きたです。その時、神様が人間かなんかで悩むのも飽きたです」

「墮落した生活ですね」

「最初からわかっていたことです……私は人間だってことは」

「……」

舞歌の呆れ混じりの呟きは無視で、巡がほお杖をつき、窓の外を見て、なんか黄昏れた始めた。

「私、神様なわけねえですし、神様になれるわけもねえですし。人間だし。わかってるし。じゃあ何で、うじうじしてたかって？」

「聞いてねえよ」

「ほら、私って、ぶっちゃけ性格わりいじゃないですか」

「そうですね」

「否定してくれですよー!!」

巡は黄昏れモードから一転、泣き崩れた。舞歌はめんどくさい奴。と、改めて思い、二十回目のため息をついた。巡に会ってから、まだ一時間も経っていないというのに、舞歌の幸せが二十個、なくなつたわけだ。不憫。

「で、性格わりいのと神様が何が関係あるんですか」

「関係大有りなんですよ!!」

机を叩いて「密接な関係があるーんーでーすーよっ!」と、主張する巡。「うるさいからやめろ!」と、注意して、どこまでも広がる青い空を見て、空飛びてえ。と、思う舞歌。

「いいですか!私にとって神様と名乗るのは、制服の意味があつたんですよ!」

「はあ、制服?」

何バカな事言つてんだこいつ。という、冷たい目。

「です!制服!学校の制服!中学校の時は、舞歌だつて着てたはずです!舞歌がスカートはいてる姿が全く想像出来ねえですけど!ぶっちゃけ似合わない気がするです!」



「余計なお世話ですよ！後名前呼ぶな！」

「制服つてのは身分を証明すると同時にそいつを縛る役目もあるです！つまり、『中学の制服』を着てたら、『中学の生徒』と証明すると同時に、『中学の生徒』と縛るわけです！行動を制限するです！顕著なのは警官の制服です！あれを着てたら悪いことは出来ねえですよ！身分が人を作るんです！」

「悪いことしてる人もいますけどね……」

「例外はどこにでもいるものです。私にとって、神様と名乗ることは、神様の衣を被るという意味があり、私の性格を強制するギブスの役目もあつた！という事に最近気付いたです。私は自己中心的な性格をしてるです。神様は博愛主義。合わされば、中和されてちよつどいい感じですよ！」

「いや、お前はずっと自己中だった。神様とかバカな事言ってる時からずっと自己中心的なバカだった」

「私が悩むべきは」

巡、スルー。

「神様じゃなくなっても、私に価値があるのか。今まで通りに人に優しく出来るのか。そんな事じゃなかったんです。警官の制服を脱ぎ捨てても、警官であるのか。神様と思わなくても、私は神様のように振る舞えるのか。そういう事だったんですよ！！」

これが私の見つけた答えだー！という感じで、誇らしげに言う巡。

舞歌は頭が痛くなってきた。

「ちょっと待って……意味がわからない」

「どこがです？」

「何で神様のようには振る舞う必要がある？」

「私のモデルは神様ですから。神様を参考にして、人格形成し直すです」

「……お前は結局、神様か？神様を目指すバカな人間か？」

「私は神様のような人間を目指す人間です。崇めてもいいですよ？」

「……意味がわからない」

「舞歌が何がわからないのかが、わからないです」

「だから……いや、もういいや。考えるの面倒だ……」

「疲れてるですね。誰のせいですか？って、私のせいですよー！」

「……はあ」

巡の一人ポケットコミ。舞歌はため息をつくしかない。

「……で？」

「ん？です」

「だから……リハビリって、どういう意味ですか。って話だったでしょ……」

「ああ、そうでしたです。ですからね。これからは私、神様っていう制服、というか言い訳ですね。これをポイツと捨てるわけです。つまり丸裸で人付き合いをし始めようというわけなんです。だからリハビリです」

「意味がわからない……」

「つまりですねー。今までは、自己中心的な事しても、私、神様ですから！みたいな言い訳が出来たわけですよ。でも、もう私はそれをやめるんです。神様のせいにはしないで。私、こういう人間ですから！って、自分を認めて生きていくんです」

「……それ、開き直ってるだけだろ」

「そうじゃないです。私、こういう人間ですから！って、認めながら、成長して行くんです。開き直ってるわけじゃないです」

「……じゃあ、そういう事でいいですよ」

「投げやりですね。まあいいです。ですけどね、まあ私だって不安なんです。身分が、言い訳がなくなるっていうのはねですね。逃げ道がないのは不安です。神様辞めた、神様の衣着てない私を認めてくれないかもしれない、嫌われるかもしれない。そんな事はないと思うけど、不安で怖いんです。だから、慣れていきたいです。大丈夫だと、自信を持ちたいです。リハビリです。練習です。実験です。」

その相手に舞歌が選ばれたです！」

「……何で私が？」

「リハビリ候補は、四人いたです。月読と命。神社神無。水城水無。そして、舞歌です。月読と命は、真つ先に却下です。あいつらに嫌われたらと思うと、ガクガクブルブルです。リハビリには難易度高すぎです。くるみわり園は、最終目標です。次に神社神無も却下です。あいつは、どんな奴でも受け入れます。最近はなんか拒絶する事もありますけど、まだまだです。それじゃあダメです。結果わかりきりです。私の自信には繋がらないです。それに、神社神無にはくるみわり園で頑張ってもらってるですし、あいつはあいつで変わっている途中みたいですし。となると、水城水無と舞歌です。ここまではおっけーです？」

「おおよそは……」

「水城水無は、神社神無のように、自分の言いたい事を我慢したりはしないです。ちゃんと怒るし、注意もしてくれるし、助言もしてくれるです。リハビリにはいいかもしれませんが、しかし、あいつには水城火無がいるです！！あいつがいると面倒な事になります！それもまあ悪くないですが、水城水無が水城火無の対処になって、私のリハビリには不向きな感じになる気がしたし、そうなるに違いないと思う事にして、やめる事にしたです。というわけで、舞歌です！舞歌は嫌な事は嫌ってちゃんと言うし、なんだかんだ言っつけて合ってくるから最適です！舞歌とはもっと仲良くなりたいたいと思っただですから一石二鳥です！」

「帰ります」

「待つてくださいです!」

席を立とうとした舞歌に機敏に反応し、身を乗り出して舞歌の手を掴み、帰らせねえよ!の巡。

「離せ」

「いいじゃないですか!もう少し付き合ってくださいですよ!つきーあーってーですーっ!いーかーなーいーでーですっ!」

「わかったから黙れお前!」

机の上に寝転んでるような恰好で、大声で喚く巡は子供であった。

「ホントです?」

「ホントだから離せ」

「信じたです」

手を離し、体を戻す巡。ため息をついて、席に座る舞歌。

「じゃ、舞歌。友達らしいお喋りに戻ろうです」

「嫌だ。私はお前と話すくらいなら、本を読む」

「じゃあ私も一緒に読むですー」

ふんふんふーん。と、鼻歌を歌いながら、巡は舞歌の隣の席へ移動。

「近づくな」

「だが断るです」

「……ちっ」

舞歌は舌打ちをうった後、本を読み始めた。これで黙るならまあ我慢するか。という事である。

「めくるの速いです。一ページ戻せです」

「……」

「ありがとうございます。読んだから次行けです」

「……」

「……ところで、今の私は神様の衣着た時よりどんな感じですか？嫌な感じですか？いい感じですか？」

「……」

いや、変わりねえよ。

と、舞歌は思いながら、ゆっくりページをめくるのだった。

2・2・私は変わった？いいえ、変わらない（後書き）

いや、何が書きたかったんだ

巡が何言ってるか、私もわかりません。

## 2・3・百発百中の一撃必殺は、虚しい

「質より量という感じでしたが、まあまあ冷えた気分でしたですね」

「……」

お前が隣にいなきゃ、もう少しおもしろかったと思う。

舞歌はそう思いながら、読み終えた本を閉じた。

舞歌と巡は、二人で怖い話を読んでいたわけだが。巡が大変うるさかった。うざかった。『早いです』『遅いです』『ちよつと戻れです』『今のところ、どういう意味です』『あ、これ知ってるです。猫が出てくるです』『怖いです。次行けです』『UFO私も見ただことあるですよ。舞歌はないです?』という感じである。二度と、巡とは読書しない図書館来ない。そう誓った舞歌であった。

「さて、昼食にしますか?」

「……」

時刻は12時を過ぎたところ。窓の外を見れば、ジリジリと、俺の休憩時間はまだまだだぜと言わんばかりに、太陽さんが頑張っている。舞歌も昼食にするのに、不満はない。不満はないが……。

「そつえば舞歌、昼食は買ってきてないですか?いつもは図書館に来る前にコンビニ行って買ってきてるはずですけど」

「……だから、何でそれを知ってる」

「友達に会いに行く時は、事前の下調べが重要なのです!!」



「……はあ」

舞歌は、お前の相手は本当に疲れる。と、言わんばかりのため息をついた。巡は「ため息が口癖になると、幸せが逃げるのが癖になつてしまつですよ」と、よくわからんこと言つて、舞歌のため息をたしなめた。舞歌はまた、ため息をついた。

巡の言う通り、舞歌はいつもなら、図書館に行く前にコンビニにより、昼食を買う。しかし今日はあまりにも暑くて、いち早く図書館に行くことしか頭になく、うっかりコンビニに寄るのを忘れてしまつた。

「ふふふ、どうやら忘れたみたいですね。昼食を買うのを忘れるとは、案外ぬけてる奴です」

「……たまにはそういう事もありますよ」

舞歌は、うぜー。こいつうぜー。ふくみ笑いがうざさを倍増させるぜー。と、巡を睨みながら、席を立つ。本も忘れず持つ。空になつたペットボトルも持つ。

「拗ねたですか？コンビニ行くですか？私もついて行ってやるです」  
巡も席を立ち、荷物を手に取つた。

「いや、ついて来なくてもいいです。というか、私が戻ってくる前にいなくなつてくれると嬉しい」

切実に、そう思う。

「まあまあそう言うなです。実は私も昼食がないですから、ついで行くのは決定事項なのです」

「……忘れたんですか」

「まさか、です。舞歌じゃあるまいし、です。ふふふ、じゃあ何で持っていないか、ですって？それはって待て待て待て、です!!」

舞歌は巡の台詞の途中、ふふふとふくみ笑いをした時点で、さつさと歩き始めた。巡も慌ててその後を追うのだった。

「舞歌舞歌、です」

「……名前呼ぶなよ」

「あちいです」

「口に出すな……余計暑い」

図書館から出た瞬間、舞歌は図書館に戻りたくなった。アスファルトが鉄板の如く熱くなっていて、上からは太陽で、下からはアスファルトで熱されると、まるで電子レンジの中にいる気分になる。さつさと用事は済ませることにする。

コンビニは少し歩いたところにある。その少しが、地獄なわけだが。

「ところで舞歌、尻ポケットにサイフを入れるのはやめた方がよくないですか？」

巡は暑さに強いのか。平常通りの調子だ。

「何ですか」

ファッションとかに興味がない舞歌が、服装で気にするのはポケットがあるかどうかであるが、夏は薄着になるため、ポケットがあるのは少ない。そのため、あまりバックを持ち歩かない舞歌は、長サイフをジーンズのポケットに押し込んでいる。携帯はたまにしか携帯していない。サイフを潰して座ることがたまにあるが、そんなに気にならない舞歌はなんか変である。

「だって盗まれそうじゃないですか。こんな風に、です」

「なっ！」

舞歌の後ろを歩いていた巡が前に出ると、その手には舞歌のサイフが。

「お前、バカみたい神様でもうざい人間でもなくただのこそ泥じゃないですか!？」

巡の手からサイフを奪いとり、素早く中身を確認する。どうやら中身は抜かれていないようだ。舞歌はサイフをしっかりと握りしめ、盗まれないようにする。

「何でそんな慌てて必死に中身確認するですか！私が本当に盗むと思ってるですか！？」

「現に盗すんだじゃねえか！！」

「危ないという事を教えてやっただけですよ！」

「お前が危ないという事はわかった！いや、わかってたけど、再確認できた」

「酷い言い草です！私には舞歌がリュックサックを装備してみたらどうですかと教えようという親切心じゃないですよ！危険な思想など皆無です！」

「いや、リュックサックって……」

「何か問題あるんです？」

舞歌は歩みを止め、低身長で迷彩柄のリュックサックを背負い、首を傾げる巡の姿を見る。まあなんとというか。

「小学生に見える……」

リュックサックが幼い印象を強くしている気がする。子供がピクニクに行くってる的な。

「ま、マジですか！？」

「正直、リュックサックはありえない」

「ま、舞歌にはそういう事で何かを言う資格はないです……」

「どういう意味ですかそれ……」

互いに互いを傷つけながら、舞歌と巡はコンビニへ向かう。

「あ、ここに私は住んでるですよ」

コンビニには後、道路を渡ってちょっと歩くだけ。というところで、巡がそう言っつて、マンションを指差した。

「そうですね」

興味もない舞歌は、そちらを見ようとせせず、赤信号を睨みつけている。

舞歌の睨みに恐れをなしたわけではないが、信号は青に変わった。舞歌は当然、歩き出そうとしたが、腕を掴まれ、一歩しか進めなかった。

「……何ですか」

腕を掴んだのは、当然、巡だった。

「ここに私は住んでるですよ」

巡は舞歌の腕を掴みながら、もう一度言った。

「だから、どうしたんですかそれが」

「ここは私の家で、私と舞歌は友達なわけです」

「友達じゃねえよ」

「友達なわけです」

舞歌の否定はスルーである。舞歌の苛立ちを表すように、信号が点滅し始めた。

「友達なわけですから、家に来てもいいわけですよ？」

「友達じゃないし、お前ん家に行く理由もない。つつーか、お前、本当にここに住んでるのかよ。帰り道反対で困ったもんですとか、前、言つてなかったか？」

「神社神無と舞歌と一緒に帰るために、夏休みに入って引越したんです!!」

「……うわぁ」

どや顔で巡が言ったその言葉に、舞歌はどん引いた。こいつ、マジ危ない。信号も危険信号だ。

「というわけで、行くつですよー」

「行かねえよ!」

「な、何故です!？」

舞歌に振り払われ、本気でビックリしているような巡。役者である。

「私が用意した豪華な昼食が、豪華な夕食に変わってしまったていいというのですか!？」

「あなたが昼食を持って来なかったのはそういう理由ですか……」

私がいつも通り先に昼食買ってたら、どうする気だったんだこいつ……。と、舞歌は呆れる。

「その時は、舞歌のいつもの昼食が、おやつになっただけの事ですよー」

舞歌の内心を読んだかのように、私はあらゆるパターンを考え行動している!という巡。

「そうですね」

アホらし。と、また青になった横断歩道を渡り出す舞歌。

「行かせねえよDEATH or HOUSE!」

「意味がわからねえ事言ってんじゃねえよ!!服掴むな伸びる!!」

「家に来るか、さもなければ死ぬかを選ばせてやってるんです!考えるまでもないでしょうが!です!」

「お前の家に行くくらいなら死を選びますよ!」

「何故です!?!美味しいご飯を用意してあるですよ!?!」

「美味しいご飯も食べる場所がお前の家でお前と一緒に生ゴミだ

「！！つて、また信号が……！！！」

「さすがにそれは言い過ぎです酷いです傷ついたのでですよ！！舞歌は私の事が好きではないんですか！！！」

「いつ好きだと言ったか！！！」

「夢の中ですよ！！！」

「夢の中の私に何言わせてんだキモい！！触れるな触るな近寄るな！！！」

「そう言われると逆に触れて触って近づきたくなる性分ですから私、人間的に！！！」

「くつつく腕を組むな指を絡めんな頬を寄せんな気持ち悪いし暑苦しい気持ち悪い！！！」

「暑いなら私の家に行くですか！クーラー常時ガンガンですよ！？」

「家にいない時くらい切るべきでしょ！？」

「切ったらクマが暑がりませんか！？」

「お前ん家クマがいるのかよ！余計行きたくなくなりました！ちっ、また信号が……！！！」

「クマが以外もあるですよ！！！」

「動物園ですかあなたの家は！！！」



「アイスクリームもあるです!!」

「さあ、行きましようか。何階ですか？」

舞歌はそれまでのやり取りを忘れたかのように、人が変わったかのように、コロツと態度が変わった。野次馬さん達が、ポカーンとするくらいの早業で、とても柔らかい笑みを浮かべ、巡の手を取った。

「アイスクリームに頼ってしまったです……!!」

巡が悔しそうにそう呟くと同時に、信号は青に変わったが、舞歌は横断歩道を渡らず、巡の手を引き、スキップでも始めそうな軽い足取りで、マンションへ歩き始めた。

2 - 4 ・ キャラなんて捨てた。捨てた後にもキャラがあった。

「アイスクリーム、アイスクリーム、アイスクリーム」

「こ、怖いです……あの三途舞歌が、鼻歌混じりにニコニコ笑顔です……何ですかこいつ……アイスクリームでここまで変わりますか……いや、知ってたけどもここまで変わりましたっけ……どうしてそこまでアイスクリームが好きなんですか……というかもうこれ、好きってレベルですか……病気が何かじゃないんですかこれ……」

「春風さん！何をぶつぶつ言ってるんですか！早く鍵を開けてアイスクリームを食べさせなさい！！」

「初めて名前を呼ばれた気がするんですけどなんか嬉しくねえです！！」

巡は、知り合いが気付いたら別人になっていた。という感じの、世にも奇妙な恐怖を感じながら、部屋の鍵を開けようとしていた。その隣で、舞歌は足踏みをしながらまだかまだかと待っているのだ。その足踏みが、巡を焦らせ恐怖させ、手が震え、鍵穴になかなか鍵が入らず、また急かされて、さらに入らない。という悪循環に陥っていた。

「巡ちゃん何騒いでるの〜？」

そんなやり取りをしていたからか。人が、隣の部屋から顔を出した。ボサボサな髪だけでも寝起きとわかるのに、ダメ押しでパジャマ姿である。昼過ぎまで眠っているダメ女、隣人、猫猫子猫であった。

「げっ」

しかし、猫猫は舞歌の姿を確認した途端、慌てて顔を引っ込めた。鍵をしめ、チーンまでかける音がした。

「何ですかあいつは……」

「アイスクリームはまだですか！」

巡は訝しげに隣の部屋を見るが、舞歌は隣人が顔を出したことにも気付かなかったのか、相変わらずアイスクリームアイスクリームと騒がしい。

「開いたです！」

「アイスクリームはどこですか！」

「おまつ、家主より先に入るってありえなくないですか！？常識をどこに捨てたです！」

鍵が開いた途端、舞歌は巡を押しつけ入っていった。慌てて巡も後に続く。

部屋はクーラーが働いていて、大変涼しかった。地球環境とか節電とか、一切考えない巡である。

「アイスクリームないじゃないですか！」

「なぜクマを殴るですか！」

そんな涼しいリビングに、家主より先に突入し、テーブルにアイス

クリームがないことに激怒した舞歌は、ソファに座っていたクマを殴った。とぼっちりである。

「アイスクリームは冷凍庫の中ですよ！当たり前でしょうが！もう少し落ち着いて下さいです！」

「それはできない相談ですよ！」

舞歌はクマを放り投げ、ダイニングキッチンへ向かおうとした。「待てです！」しかしそれを阻む巡。

「何ですか！」

「アイスクリームはまだです」

「何故ですか！」

「なんか今食べさせたら舞歌そのまま逃げ出しそうです」

「当たり前じゃないですか！アイスクリームがないこの場所にどれだけの価値があるというんですか！一切、無し！」

「断言しないで下さいよ泣きますですよ私！なんと言おうがアイスクリームは食後です！まずは私特製シチューを食べてもらってください！」

巡はキッチンに行き、ずん胴鍋にたんまり入ったシチューを舞歌に見せた。何人分だよ何日分だよ。と、ツッコミを入れたい量だ。二人分ではないのは間違いない。豪華な昼食の豪華とは、量のことだったようだ。

「嫌です。食べたくありません」

舞歌はその量のシチューを見て、あからさまに嫌そうな顔をした。そしてさらに「アイスクリームがいいです」と、拗ねたようにそっぽを向いた。いつも素っ気ない態度か、呆れや侮蔑の態度しか取らない舞歌にしては珍しい、かわいらしい態度であった。こ、これがギャップなんちゃら。と、巡は戦き恐怖した。

「い、嫌じゃないですよ。いいですか舞歌。アイスクリームは食後のデザートに食べるのが一番美味しいんですよ？」

「はあ？」

「な、何ですかその、何言ってるんだこいつ何もわかってねえよホントバカだな。みたいな目とため息は……」

「アイスクリームは食後が一番美味しい？アイスクリームはいつ食べても一番美味しいですよ！オードブルにアイスクリーム、メインもアイスクリーム、デザートもアイスクリーム、スープもドリンクもサラダもアイスクリーム！そんなコースを私は求む！」

「栄養が偏ってるっていう以前の問題ですよ！？」

「栄養なんてアイスクリームの前では無価値！問題なんて皆無！アイスクリームがあれば全てが許される！」

「もうこの舞歌嫌ですー！元の冷たい舞歌に戻って下さいですよー！」

巡の心が折れた。涙目で、私が悪かったです！私が悪かったから元に戻って下さいです！」と、舞歌に縋り付いた。そんな巡の頭に優しく手を置き、舞歌は微笑み、言った。

「なら、アイスクリームを寄越しなさい。さすれば私は即、あなたの前から消えるでしょう」

「だが断るです」

巡は立ち直るのも早かった。

「アイスクリームを食いたきゃシチューを食らえですよこんちくしようめー！」

「ちっ……アイスクリームの道は険しいですね……」

舞歌は爪を噛み、仕方なくシチューを食べることにした。

「はい、いただきました。はい、アイスクリーム寄越しなさい」

「はやっ！！なんかもつとあるでしょうが！」

巡がシチューを温め、皿に盛り付け、麦茶を用意し、昼食の準備するのに約十分。その間舞歌はソファで「全てはアイスクリームの

ために全てはアイスクリームのために全てはアイスクリームのために……」と呟きながらクマを抱えていた。

ソファーに二人並んで座り（クマは邪魔なので巡の手により部屋の隅に投げられた）「いただきます」。そして、舞歌の「いただきます」宣言までにかかった時間は約五分。その間、会話一切なし。舞歌は食べるのに集中していた。

「も、もっと感想とかなんかないんですか!？」

「感想? …… ああ、はいはい美味しかったですよ。で、アイスクリームは?」

「あーかーらーさーまーにつー!おーせーじーでーすーかー!！」

「ちょ、うざっいたいなこいつ。ガキみたいに殴ってくんなよ。泣くなよ。食ったから満足だろ。アイスクリーム寄越せよ」

「違うですよ!私が望んで夢見た昼食風景はこんなじゃないんですよ!!見てみるですよこれ!!」

「見た。アイスクリームではなかった」

「お前の皿は空っぽで!私の皿はまだ半分も減ってないという事実に着目して見なしゃんせー!!!」

「語尾がおかしくなってるからさっさとアイスクリーム出して下さいよ」

「もっと和気あいあいと!私なんのために夜を徹して約6時間!ことごとくぐつぐつぐつたりと!シチューに気持ちを入れて作ったと

思ってるの！別に前にも美味しい言ってもらえなくても！一緒に食べてる感じが欲しかったから！どうですか聞いて！おいしくないですって！何でそんな事言うんですかって！そんなやり取りでも満足だったのに！違うじゃん！もうこれ違うじゃん！ただ並んで食べた感じじゃん！二人じゃなくて、一人と一人じゃん！」

「キャラ、大事にした方がいいからアイスクリームを」

「今の舞歌に言われたくない！！もう一回！」

「何が。何を。アイスクリームは」

「もう一回いただきますからやり直し！」

「え、私もうアイスクリーム以外食べたくないですよ」

「いーいーかーらーやーるーのー！！！」

「……全てはアイスクリームのために全てはアイスクリームのために全ては」



2・4・キャラなんて捨てた。捨てた後にもキャラがあった。(後書き)

違うんです聞いて下さい。春風さんも大変何です。聞いてやって下さいよ。彼女は思春期にあれでこれでそれだったもんで、友達と遊ぶってことに憧れてるんでしかもあそこがこれでもそれなわけなんですよ！

舞歌はただのアイスクリーム好きだけどね！！

## 2・5・酒の席ではいけない2つの事柄

「どうですか。うまいですか？」

「味が濃すぎて……二皿は厳しい」

「そりやお前、6時間は伊達じゃないです。何回私が材料を鍋にぶち込んだと思うんですか。スープーにあるシチューの元、全種類フランス私特製スパイスは伊達じゃないです。ささ、遠慮せずにお食べですよー。まだまだいっぱいありますですからねー」

巡はスプーン片手に、鼻歌まで歌っている。自分の望む昼食が出来てるからだろう。満足気で、ご機嫌だ。その隣の舞歌が、もうホントいや。もうホント食べたくない。というように嫌々とスプーンを口に運んでいるのは見えていないご様子である。舞歌は「アイスクリーム食べたい……」と、一口食べる度に呟いている。

「ふー、満足ですよー」

「……早く、アイスクリームを」

そんなこんなで数十分後。巡は自分で四皿、舞歌に三皿食べさせたところで、満足した。

巡はお腹もいっぱい気分も満足大満足といった様子で、ソファーに深々と座り、舞歌はお腹は嫌な感じにいっぱいになり気分はぐったりといった様子で、うなだれていた。

「今度は神社神無と水城水無と、まあ水城火無達も呼んで、みんなでシチューパーティーでもしましょうです」

「アイスクリームパーティーなら喜んで。というわけで、アイスクリームを早く下さい」

「はて、何のことです。アイスクリームなんて家にはないです。暑さは熱いものを食べて克服するタイプの私です」

「もう一回言ってみる」

「うつつ嘘です嘘です嘘ですからゆゆゆ揺さぶらないでくくく下さい！！」

「次、そんなくだらない嘘ついたら、殺しますよ」

「目が本気です！？」

舞歌の目に、本気以外の色はなかった。

巡は慌てて使った皿を持ってキッチンへ。そして舞歌もその後についてキッチンに来た。

「む、何ですか。舞歌はソファでぐったりしてなさいです。お客ですし、私のわがままに付き合ってもらったわけですから、休んでるです。皿洗ったら、私特製シャーベットをご馳走してやるですよ」

「いえ、そういう事する気は一切ないです」

「それはそれで問題な気がするですけど……じゃあ何です？」

「口をゆすぎにきました。あのシチュー、味が濃すぎます。口の中

にまだシチューの味が残ってるみたいで気持ち悪い。このままじゃ、アイスクリームにも影響が出ます」

「そんなに濃かったですかね」

自分はそうでもなかったけど。と思いながら、巡は皿洗いをする前に、舞歌に水道を譲った。舞歌は「どうも」と言ってから口をゆすぐ。しかし、何回ゆすいても口の中が気持ち悪いのか、舞歌は険しい表情で呟く。

「ダメですね。最悪ですね。やっぱりシチューなんて食べずにアイスクリームを食べるべきでした……はあ、どうしてあの時は折れてしまったんだ……どうしてあんなアイスクリームの億分の一程度の美味しさのシチューを三皿も食べてしまったんだ……はあ、アイスクリームをお腹いっぱい食べて死にたい……」

「そんなに後悔しなくてもいいじゃないですか！ゆすいでダメなら歯磨きしろです！」

「したくても、歯ブラシがない」

「あるですよ。舞歌の歯ブラシ。洗面所のピンクのが舞歌のです。ちなみに私のはグリーン、水城水無はブルー、神社神無はホワイトです。こんな事もあるうかと、準備済みです」

「ストーカー、いえ、ゴキブリ並に気持ち悪い事してますね」

「ゴキ……！！あ、アイスクリーム・ハイでも舞歌がナチュラルに毒を吐くことがわかってきたです……！！」

「まあ、アイスクリームのためなら我慢します。洗面所はこつちですよね」

「出て左手ですー!!」

全てはアイスクリームのために。舞歌は我慢して、巡が用意したあった歯ブラシ（開封済みだった。一人暮らしなのに、歯ブラシ四本立ってた）で歯磨きをすることにして、「そんなに気持ち悪いことかな……」と、若干へこみながら、巡は皿洗いを開始したのだった。

「歯磨き粉のさっぱり感は、アイスクリームを食べるのに邪魔しないんですか？」

「邪魔しないに決まってるじゃないですか。シチューじゃあるまいし」

「そついうもんですか」

まあ、そうだよな。シチューも邪魔しないと思うけど。と思いつながら、巡はキッチンでアイスクリームの準備をしていた。舞歌はソファでぐったりしている。

「はい、これが私特製スペシャルアイスクリームシャーベットタイプウォーターメロンバーション1.5ですよー」

巡はなんか長つたらしくせに情報量は少ないような変な料理名を言いながら、アイスクリームを持ってきた。

「こ、これは……！」

アイスクリーム皿に入った巡特製スペシャルアイスクリームシャーベットタイプウォーターメロンバージョン1・5を見て、シチュエーションと、長時間のアイスクリーム・ハイによりぐったりとして目が死んでいた舞歌の体に力が、目に生気が宿った。

透明な、見るだけで涼しげな皿に盛られているシャーベット状のアイスクリームの色はピンク色だった。その回りには、真ん丸にくり抜かれたスイカがコロコロ置かれていた。それが、巡特製スペシャルアイスクリームシャーベットタイプウォーターメロンバージョン1・5の姿だった。

「準備にどんだけかかってんだよ殺すか、いや、殺したらアイスクリーム食べれないか、いや、冷凍庫にあるんだから殺してもいいかな、いや、とか思ってたら、こんな手の込んだ事をしていたんですね！私は初めてあなたを心から褒めたい気分ですよ！」

舞歌は少女みたいにキラキラした目で、巡の手を取り「ありがとうございます！」と、感謝した。

「殺すうんぬん発言は聞かなかったことにすれば、なんか照れるですね。ささ、早く食べるとういいます。この、私特製スペシャルアイスクリームシャーベットタイプウォーターメロンバージョン1・5はもちろんのこと、このアイスクリーム用の皿、アイスクリーム用のスプーンも、全て舞歌のために用意したんですからね」

巡はとことん、つくす女であった。

「私のために……！私の中で春風さんの存在が、マイナスからプラスマイゼロになりました。おめでとうございます」

「あ、ありがとうございますって、今までマイナスだったんですか！？」

「当たり前じゃないですか。私、あなたの事嫌いだったわけですし。言ってませんでしたか？じゃあ一応言っときますね。私、あなたの事嫌いでした。わりかし本気で」

「嫌い嫌いも好きのうちとかいうレベルではなくですか！？」

「何気持ち悪いこと言ってるんですか。嫌いは嫌いですよ。好きなわけじゃないじゃないですか。あなたと会っていた時八割方、私は、嫌いで面倒でうざいなあ。としか思ってませんでしたよ。残り一割は気持ち悪いと思ってました」

「ふ、ふん。その発言の裏に好意があるわけです。水城水無といい、舞歌といい。ツンデレさんはめんどくさい奴ですね！」

「ツンデレ？漫画や小説の読み過ぎじゃないですか？現実に、ツンデレなんていませんよ。嫌いで面倒でうざいと言われたなら、嫌いで面倒でうざいという態度を取られたら、嫌いで面倒でうざいと思われてるんですよ。喧嘩する程仲がいいわけがないじゃないですか。喧嘩する奴らの方が、仲が悪いに決まってるじゃないですか。なに自分に都合がいい方に考えてるんですか、気持ち悪い」

「う、うう……ま、まあいいです。それは昔の話で今はマイナスじ

やないんですよね？」

「ええ、プラマイゼロです」

「ならいいです……ん、マイナスが嫌いな存在だとしたら、プラマイゼロはどんな存在なんですか？」

「どうでもいい存在」

「なんか存在下がってませんか!？」

「では、いただきます」

「ちよ、ちよっとまだ話が終わってませんよ!？」

巡が涙目になってなんか慌ててるけど、そんなの気にせず、舞歌はスプーンを手にとり、ゆっくりと巡特製スペシャルアイスクリームシャーベットタイプウォーターメロンバージョン1.5を入れた。「どうでもいいって嫌いより悪いですよね!ねえまふぎゃ!」そして、隣でやかましく体を揺さぶってくる巡を左手で沈め、巡特製スペシャルアイスクリームシャーベットタイプウォーターメロンバージョン1.5をすくい、芸術品を取り扱うかのように、ゆっくりと廠かに、口に運び、食べた。

「ふわぁ……」

そして恍惚の声と表情を浮かべ、夢見心地。一瞬にして天国。幸せの絶頂。隣の巡は对象的に「う、裏拳で、か、顔を、顔を迷いなく……!」と、苦しんでいた。



「しやりしやりで冷たくてバニラの上品な甘味とほのかに広がるスイカの風味が……ああもう春風さん！」

舞歌は、辛抱たまらん。といったように、巡の肩を掴んだ。その目は真剣そのものであったが、巡は「は、鼻曲がつてないですよね大丈夫ですよこれ！」それどころではなかった。

「春風さん！いえ、巡さん！」

「な、なんですか？私の鼻、平気ですか？」

「こんなに美味しいアイスクリームを食べたのは久しぶりです！歴代三位に入るでしょう！あなたは最高ですよ！」

「あ、ありがとうございますです。それより鼻、大丈夫ですよね。なんかすごい痛いんですけど」

「もう巡さんはあれです！マイナスでもプラマイゼロでもなく、プラスです！ああもう大好き！」

言葉ではもう言い表せない！というくらい感極まっちゃまった舞歌は、巡に抱き着いた。

「え、え、え、え……ななななにをしますかー！！」

さすがにそこまでされると、鼻（正常）を気にしてはられない巡。舞歌の思いがけない行動にちょっと思考停止した後、焦り、ホールドから抜け出そうと手足をバタバタさせる。顔は真っ赤である。

「もうこれはあれですね！これから毎日私のためにスペシャルアイ

スクリームシャーベットタイプウォーターメロンバージョン1・5  
を作り続けて下さい！」

「おまつ……！冷静に落ち着いて正気に戻ってからもう一度今の発言の意味を考えてみた上で発言し直せですー！！」

「ずっと一緒にいましょう。大好きです」

耳元でなんか囁かれた。巡の顔がリンゴになった。

「ささささささつきよりも真剣味と告白色（こくはくしょく。一般的にはピンクだが、現在は百合色でも可）が強くなってるですよ！？」

顔真っ赤で、息を切らしながら巡はなんとかツッコミを入れる。心臓はバクバクである。室内設定温度を二十度まで下げたいくらい顔が熱い。

巡を恥ずかしさの極みにたたき落とした。もしくは恥ずかしさの極みに上らせた舞歌は、別に自分の発言を恥ずかしいとは思っていないので、真剣と書いてマジでしたので、全く恥ずかしそうでもなく幸せそうな柔らかく表情をしている。「ああもう本当に、巡さん大好き」もう一度そう言って、巡から離れ、「落ち着くです私！。今の発言に動揺するなですー」と、気を沈めてる巡を尻目に、また一口アイスクリームを口に運び「ああもう本当……本当にあれ……本当にあれです……もう本当に、幸せ……」と、呟きながら、幸せを噛み締めるように、食べていった。

「……舞歌、大丈夫ですか？」

そんな幸福とはまさにこのこと。という様子の舞歌に、若干落ち着

いた巡（まだ顔が若干赤い）が不安そうに聞いた。

「大丈夫じゃないですよ……こんな美味しいアイスクリーム食べさせてもらったら、もうあなたからは離れられそうもありません……」

「いや、そういう意味じゃないんですけど……」

薬、やってる？と、聞かれても仕方ないような恍惚とした表情を浮かべる舞歌を見て、巡（また顔が赤くなった）は、不安で仕方がなかった。

巡は、アイスクリームを食べ終わり、舞歌が我に帰った後が、不安ではないのだ。

## 2・5・酒の席ではいけない2つの事柄（後書き）

一、酔ってるときの発言を真に受けない。

二、その時の様子をビデオ等で撮影し、素面の時に見せたりしない。

舞歌の言動が、火無に似てた。いつもの状態だと、水無に似てる気がする。これは三途舞歌が三途さん家の子ではなく、水城家の子の可能性が出てきましたね。もちろん、冗談です。

ラブではありません、ライクです。舞歌の大好きがラブに至ることはありません。火無はラブです。放送禁止用語なこともしたがりません。決定的な違いですね。

では次回、舞歌、我に帰って死を決意するをお楽しみください。

## 2・6・ここに常識や冷静さはない

「もう死なせてくださいー!!」

「落ち着くですよ落ち着いて話し合いますよー!!」

「落ち着いて話し合っても何も変わらないですよ私はもう死ぬしかないー!!」

「大丈夫ですから！私忘れてあげますから！」

「私は忘れられませんよあんな恥ずかしいことを、ああもう、ああもう……後生だから死なせてくださいー!!」

「だからダメですよ死ぬのはダメですよー!!」

というわけで、修羅場である。

舞歌はベランダに出ようと前進して、巡は舞歌の左手を両手で掴みそれを必死に阻止している。力は均衡しており、どちらかが一瞬でも油断したら、勝負がつくだろう。舞歌が勝ったら転落死体の出来上がりであり、巡が勝ったら尊い命が一つ救われるのだ。まさに、命をかけた闘いが繰り広げられている。

数分前。

舞歌は巡の分のアイスクリームも食べた。食べている間は、それはもう幸せそうで「美味しいです美味しいです」と口にし、「巡さん大好きです。もうホントありがとうございました。こんな美味しいアイスクリームをありがとう。また作って下さいね。また絶対来ますからね。巡さんホント大好き」とまで言っていたわけだ。

巡はそれに対して、「あ、ありがとうございます。これからもよろしくです。も、もちろんまた作ってやるですよ」と、嬉しいと思うと同時に、舞歌がいつもなら絶対言わない発言をするたびに、恐怖と不安で顔を歪ましていった。

そしてその時はやってきた。

アイスクリームを食べ終わり、名残惜しそうに皿にスプーンを舞歌がおいた。そして、「ふう……」と、余韻を味わうようにため息をつき、数秒。舞歌の体が、ピクツ。と、震えた。巡は直感的に、舞歌が我に帰ったと理解し、身構えた。舞歌は錆び付いたブリキみたいにゆっくりときこちなく、隣に座る巡に顔を向けた。その顔は、羞恥や絶望や呆然といった様々な想いが混ざり、綺麗な泣き笑い状態だった。そして巡は、恐怖で、引き攣った笑みを浮かべていた。

「……」

「……」

そして数秒、見つめ合う二人。その数秒は、一瞬にして永遠だったといえるだろう。

その永遠の一瞬を経て、舞歌が人間の限界レベルに達した速さで動いた。まさに刹那の速さ。巡が気付いた時にはすでに舞歌はテーブルを飛び越え、一直線に目の前に見えるベランダへ向かっていた。待て！と、声をかける時間すらなかったのは言うまでもない。巡はその刹那、人間を超越しなければいけなかった。スタートダッシュで遅れた巡が、舞歌に追いつくには、それが必要条件だった。呼吸はもちろん、心臓と思考さえ止め、本来そこで使われていた肉体的精神的な力を全て、舞歌を追う速さに変えた。その結果得られた速さは、まさに神速。巡はこの刹那、速さだけを見れば、神になった

のだ。

しかしその速さを持ってしても、ギリギリだった。巡が舞歌の左手を掴んだ時、すでに舞歌はロックを外し、窓を開け、網戸まで開け、すでにベランダに体を出していたのだ。もし、巡が地球環境や節電を気にしてクーラーを使わずベランダを開けていたら、もし、ロックを二段階にしていなかったら、もし、網戸が反対にあったら、そんな些細なことで、この結末は変わっていただろう。

「死なせて下さい!!」

「落ち着けです!!」

そして二人はようやく、言葉を口にした。

刹那で行われたこのやり取り。この刹那、この空間は間違いなく、コメディではなくファンタジーの世界でした。

1302

そして数十分後。

「はあ、はあ……私は、今日ほど、体を鍛えていて、よかったと、はあ……思ったことはない……です」

「……私は今日ほど、アイスクリームを食べたのを後悔した日はありません」

巡はソファーに横になり、ぜえはあぜえはあ息を調べており、舞歌は床に俯せで、足と手に手錠装備という状態で倒れていた。後ろ手に手錠をされているため、立ち上がるのも難しく、芋虫のように這ってしか動けない状態だが、動く気力はないようで、ピクリともしない。

舞歌が死んではおらず、そんな状態であることからわかるように、命をかけた闘いは、巡の勝利で終わった。

神様を目指していた人間の精神力と体力は伊達ではなかった。日々鍛えていた力は、ジリジリと舞歌は部屋内に戻していた。舞歌の死にたいパワーも伊達ではなかったが、長時間のアイスクリーム・ハイとシチュー三皿という食べ過ぎによって体力を使っていたのは大きなハンデだった。

しかし、勝負はなかなかつかなかった。この勝負は、どちらかが諦めるまで終わるような勝負ではないのだ。舞歌が五階から鳥になるのを諦めるか、巡が舞歌の命を諦めるか。そういう勝負であり、舞歌をどれだけ部屋に引きずり込んでも、巡の勝ちではない。

「もう諦めるです！作戦命を大事にですー！」

「私の命をどう使おうと私の勝手でしょ！」

というわけで、舞歌は諦めそうになかった。

長期戦になりそうな状態だったが、決着は数十分でついた。数十分綱引き状態なのは、長期戦だった気もするが、数時間はやってそうだったので、短期戦と言ってもいいんじゃないだろうか。

幕引きは唐突にやってきた。勝負がつく要因になったのは、巡が舞歌の左手を、左手首を掴んだという、たったそれだけの事だった。舞歌の左手首には、リストバンドが装着されていた。それが滑った



のだ。外れたのだ。汗の力だったのだ。巡の手に残ったのはリストバンドだけで、舞歌の手から外れてしまったのだ。その瞬間、巡に襲ったのは絶望だった。舞歌が死んでしまう！当然の結末として尻餅をつく形になった巡は、臀部に走る激痛と絶望で一瞬、目をつぶってしまった。しかしすぐに目を開ける。はたして、そこに舞歌の姿はあった。巡が尻餅をつく形になったのだから、舞歌も当然、似たような事になったのだ。巡と違った点は、舞歌は臀部ではなく、体前面、特に顔を、床、ではなくベランダと部屋の境界、サッシ部分にぶつけた。死んだんじゃないかね？という音がした。

「……………ハッ！」

そして、巡が先に動いた。さっきは出遅れたが、今回は、巡が先に動いたのだ。それが勝負を分けたもう一つの要因だった。巡は痛みを無視し、ゆつくりと、這うようにベランダへまた向かい始めた舞歌の両足を持ち、力任せに引きずり、机付近まで引きずり、引き出しの中を見ることなく、その中から迷いなく手錠を取り出し、舞歌の足に装着。そして舞歌から手を離し、隣の部屋、寝室に走り、タンスから手錠をもう一つ取り出し、まだ諦めず人魚のように手でもってベランダへ進もうとしていた舞歌の背中に飛び乗り、抵抗する舞歌の手を、後ろ手に手錠を装着した。そこまでされ、ようやく舞歌は死ぬことを諦めた。

「何で手錠があるんですか!？」

それが舞歌の敗北の言葉だった。その言葉を聞き、安心を得ると共に、巡は臀部に走る痛みを思い出した。フラフラと、ソファーまで歩き、ソファーに倒れ込んだ。友の命を救った達成感に満たされた巡は、久しぶりに呼吸をした気がした。

そんな感じで数分後。

「ふー……あ、なんか飲むですかって、床が悲惨な事に!？」

しばらくソファで体力回復と痛みが和らぐのを待っていた巡。回復して、さて、なんか飲んでさらに落ち着いてから話し合うかと。と、体を起こして、驚いた。ようやく気付いた。なんか床に血が点々というレベルではなく、血の道が出来ていた。終着地点は、俯せ状態の舞歌さんであるのは言うまでもない。

「どどどどうしたですか大丈夫ですか!？」

巡は慌てて俯せでさっきからピクリともしない舞歌に駆け寄り、足で蹴っ飛ばし、仰向けにした。

「……いや、今何で足蹴にした」

「ちちちち血まみれですー!！」

冷静にツッコミした舞歌の顔は血まみれだった。鼻から血が流れまくりである。大変なことになっている。

「どどうするですかどうなったですか死ぬですか死んでしまっんです

かー！！いやー！舞歌死なないでー！！」

「……」

取り乱す巡に対して、大変なことになっている舞歌は奇妙なほど冷静だった。冷静に冷たい目で巡を見てたと思つたら転がって俯せ状態に戻った。鼻血が出た時は、顔を下に向けるのがいい。という以外にも理由がありそうだ。

「と、とりあえずティッシュ、いや、タオル！？いや、警察ですか救急車ですか！？」

「……この状態で警察呼んだら、間違いなくあなたは逮捕されますよ」

「わかったです！救急車呼ぶです！」

「手錠外せてことだよ！！」

俯せ状態での、心からの言葉であつた。そして、顔を横にし、大声を上げたからか、血が口に入ったようで、舞歌は咳き込んだ。

「わわわわ！とりあえず救急車ですね！」

「違う！手錠を外せといった！それかティッシュ！」

「わかったです！タオルですね！！」

「ああもう……勝手にしろ！」

タオルを取りに洗面所に走る巡。数枚取り、ダッシュで戻ってきて、舞歌を足蹴にして仰向けにする。

「だから何で足蹴……」

「ほらこれで血を拭けです！」

「……」

「どうしたですか！」

「……」

「さあ早く！舞歌も一応女ですよ顔は大切にしろです！」

「手錠外せよ……！」

「忘れてたです！」

巡は慌てて舞歌の体を起こし、「おい、違う違う。手錠をむ……！と、なんか言っている舞歌の顔を乱暴に拭き始めた。

「大丈夫ですか生きてるですか鼻は曲がってませんか……！」

「痛い痛い痛い……！」

「それは大変です！」

「ならやめるもついいからもう平気だから……いい加減落ち着けよお前……！」

「む……す、すいませんです。ちょっと取り乱してたです」

巡はようやく、落ち着いたようだ。しよぼーんとした様子で、舞歌から離れる。舞歌の顔は、巡が拭く前とそんなに変わりはない。逆に、血が薄く、顔全体に広がり、酷くなったようにも思える。拭いたというより、塗りたくった感じだ。

「はあ、全く……いいですから、まず手錠を外して下さい」

「わかったです！タオルを水に濡らしてくるですね！」

「……まさか、鍵がないってオチじゃないでしょうね」

「ちょっと待ってるですよ！今その顔を綺麗綺麗してやるです！」

「おい！」

2・6・ここに常識や冷静さはない（後書き）

思いの外長くなりそうだったので、区切ることにしました。

巡がなぜ手錠を持っているとか、なぜタンスに一個あったのかとかは、きっと永遠の謎だと思います。

2・7・終わりよければ全てよし。問題は、終わりがどこかという点。

「……」

「鼻は大丈夫ですか？血は止まったみたいですけどです」

「……おい」

「な、何ですか？何でそんなに睨むですか？そんな睨んでも怖くないもんです！鼻ちよんぼしてるからあんまり怖くないですもん！！」

「……手錠外せよ」

「あ、取って大丈夫ですか？大丈夫みたいですね。よこせです。捨ててきてやるです」

「手錠外せよ！」

「うるさいですねー。外したじゃないですか……手は」

「そつだよ足も外せってことだよ！！」

舞歌は隣に座っている巡に襲いかかった。巡は慌てて距離を取った。舞歌は追いかけたかったが、足に手錠がついてる状態では厳しかった。結果、また顔面から倒れそうになったが、今回は手で防いだので、顔面激突は避けられた。

「ふう……全く危ないですね。また顔面から床に激突したら、今度こそ鼻が曲がるですよ？」

「誰のせいだと思ってんですか!?!」

「私のせいですよ!?!」

「何で逆ギレしてんですか!?!」

舞歌の顔を濡れタオルで拭き、ティッシュで鼻ちよんぼを作った後、巡は舞歌をソファーまで引きずり、座らせた後、ようやく手錠を外したのだ。手だけ。

「もう一度聞きますよ」

「いいですよ」

麦茶を飲んで、気を落ち着かせた二人。ソファーに座る二人の間には、壁としてクマが陣取っている。

「何で、足の、手錠を、外してくれないんですか」

「それよりちゃんと病院行くですよ?鼻骨にヒビが入ってるかも緊急ガードです!?!」

巡は舞歌の左裏拳を、クマで防いだ。

「急に何するんですか!」

「お前がふざけるからだろ」

「すみませんでしたです」



「反省したなら、早く手錠」

「らじやっただです」

巡は、舞歌の左手と自分の右手を手錠で繋がれた後、足の手錠を外してあげた。

「はい、外した緊急ガード!!」

巡は、体を捻り、フックのような形で襲ってきた舞歌の右拳を、緊急ガードで防いだ。

「何をするですか!」

「こっちの台詞だろ。何した今」

「足の手錠を外してやっただです」

「その前ですよ!何でまた手錠つけた!何の真似だこれ!」

これ。とあって、舞歌は左手を上げる。すると、巡の右手も上がる。手錠がじゃらじゃらいう。一心同体である。

巡は舞歌の左手を一瞥してから、ため息をついた。

「何でそこであなたがため息をつくんですか。ため息をつきたいのはこっちだ」

「だって舞歌、手錠外したら帰る気ですよね」

「当たり前ですよ。こんなところ、一刻も早く出ていきたい」

「それじゃあダメです。いいですか舞歌。お前がどれだけ恥ずかしく、早く帰りたいかという気持ちはわからなくもないです」

「ならもうそつとしておいて下さいよ……」

「ダメです。こういうのは、一度別れてしまうと、気まづくなつて、解決するのが難しくなるですから、今日のうちに解決しておくです。ぶつちやけ舞歌、帰ったらもう二度と私と会う気なかつたんじゃないですか？」

「当たり前じゃないですかあんな恥ずかしい事、言っただけで言っただけ……もうホントやだ……」

「……同情するです」

急激に落ち込んで天井を見上げて、「ああ……もうホント死にたい」と、呟く舞歌に同情した巡は、クマを膝の上に乗せてあげた。慰めたのだ。しかし、舞歌は天井を見上げたまま無言で払いのけた。クマは無言で床を転がった。ゲーセンにおいて、二千元で巡に捕獲されてから、このクマに苦労は絶えない。

「……アイスクリーム食べるですか」

重苦しい空気が流れ始めた中、巡がポツリと禁じられたワードを呟くと、天井を見上げて落ち込みまくりだった舞歌が目を輝かせ「はい！」と、答えた。そして、すぐに我に帰り、落ち込んだ。体を丸めて「恥見せつ恥見せつ、死にたい死にたい……」と、呟く舞歌を見て、巡は呆れ混じりのため息をつく。

「舞歌……」

「……何ですか」

「そのアイスクリーム好き、どうにかならないですか？もう病気ですよこれ」

「……どうにか出来るなら、とっくの昔にどうにかしてますよ」

「そりゃそうですか。そもそも、どうしてそんなにアイスクリームが好きなんですか？舞歌の事はあんまり調べてないですから、私は知らないですけど」

「……教えたくありません」

「ならいいです。どうやら、何かちゃんとした理由が、想いがあるみたいですね。アイスクリームを嫌いになることは可能ですか？」

「無理です」

「速答ですか」

「アイスクリームを嫌いになるという事は、私が死ぬと同義です」

「それほどですか……まあ別に、アイスクリームが好きなのはいいわけですよ。ただ、このレベルはちょっと危険ですよ。言動があとこまで変わるといふのはね、です。鍋奉行ってレベルじゃねえです」

「仕方ないじゃないですか……アイスクリームが食べれると思うと、

自分を抑え切れないんですよ」

「はあ……。と、顔を両手で覆う舞歌。よしよしと左手と一緒についてきた巡の右手が頭を撫でる。弾く。撫でる。掴む。「いたたたたたたたたです！」「握りしめる。「二度と、そういう事はしないで下さい」「忠告する。「わかったです」「嘘をつく。」

「そこですそこ。自分を抑え切れないというか、アイスクリーム以外は自分を全て投げ捨てちまうようなところを、私は心配してるです」  
そして、何事もなかったかのように話しを続ける。

「例えばですよ？例えば、舞歌が街を歩いていたら、へいへい姉ちゃん。モデルみたいにすらっとしててなかなかいかす姉ちゃん。ちよつと俺つちと茶でもしばかねえか。と、金髪で鼻ピアスなチャラ男に話しかけられたらどうするですか？」

「無視します」

「です。しかし、しつこくついてきて、おいおいそんなつねねえ態度取らないでくれよ。もしかして俺つちの声聞こえてない？背が高いと耳も遠くなっちまうのかな。なんつってなー、ハーハッハッハッ。というわけで、茶でもしばきたおそうぜ。と、言われたらどうするです？」

「蹴り飛ばします」

「ですです。すると男が、なかなかいい蹴りじゃねえか。一緒に世界を目指さないか。その前に、アイスクリームでも食うか。と、言ったら？」

「……け、蹴り潰しますよ?」

「アウトですー!! 舞歌は間違いなくついていってしばきたおされてしまうですー!!」

「そ、そんなわけないじゃないですか。ちゃんと捻り潰せますよ。あ、あれですよ? 私、ヤンキーを倒した事だってありますよ?」

「ダウトですー!!」

「う、嘘じゃありませんよ」

「目をそらして言っても信用零です。全く……いいですか舞歌。さつきも言いましたけどね。お前も一応女なわけですから、そういう危険も考えておけですよ。男はみんな、飢えた狼です。白馬の王子様が来るまではちゃんと身を守らないといけないですよ」

巡が親切心で忠告したのだが、舞歌は「白馬の王子様って……」巡のその発言に、どん引きしていた。物理的にも距離を置いた。

「な、何ですか! 憧れるのがいけない事ですか! 女はみんな、夢見るヒロインですよ! 舞歌もそうですよ!」

「いや、私も巻き込まないでくれますか……あ、じゃあ私帰りますね。メルヘンさん、お元気で」

「あだ名で呼ばれたのに心の距離感がばねえです! 絶対やめてくれですー!! そして帰らせねえですー!」

ソファーから立ち上がり、そそくさと帰ろうとした舞歌を、手錠で引っぱりソファーに戻す巡。

「ちっ……痛いんですけど……」

舞歌は左手をさすると、ハツとし、キョロキョロし始めた。

「どうしたですか？何か探し物ですか？」

「……いえ、何でもありません」

舞歌は手首をさすりながら、そう言った。何でもないので見えないが、巡は「そうですか」と、答え、話しを進める。

「まあ今の例えは現実味が薄いですけども、例えば舞歌が会社で働くようになり、何か重要な契約を結ぶといった時に、相手側からアイスクリームを提示されたりしたら、大変な事になっちまうですよ！あれよあれよに会社が一つなくなっちまうですよ！」

「いや、その状況の方がありませんよ……」

「ありえるですよ！現代社会は情報社会！相手の弱点を調べあげて仕事に望むのはもはや常識です！」

「どこの常識ですか……」

「だから私は決めたです！この夏、舞歌のアイスクリーム好きを直してやることに！」

「はあ？」

「いえ、別にアイスクリームを嫌いになるようにするという事ではないです。舞歌の問題は、アイスクリーム・ハイ状態が異常な点ですからね。そこを直して、もっと落ち着いてアイスクリームを食べれるようになるれば、オッケーなわけですよ」

「それはまあそうですね……」

「出来るわけがない、という感じですね。甘いです甘い。アイスクリームのように甘い女ですね舞歌は。まあそれも仕方がない事です。なぜならこれまでの三途舞歌の人生に私という存在はいなかったわけですからね！私に任せればちよちよいのちよいです！！」

「……テンションつぎっ」

「私はミートスパゲティーが好きなのわけです」

「どつでもいい情報ですね」

「しかし毎日食べたら飽きるです。つまりそういう事です！」

「………はあ」

舞歌は、お前には心底がっかりした。というため息をついた。

「な、何ですか。何か間違った事を、私は言ったですか？さすがに毎日アイスクリーム食ってりゃ、アイスクリーム・ハイも弱くなるでしょうです」

「………そんな解決策を、私が今まで生きてきて、考えなかったと思

ってるんですか」

「思ったです。舞歌はまあ、このままでもいいかな。アイスクリーム食べれば。と、思って、何もしなかつたんじゃないかと思ってたですよ」

「はあ……いいですか。もう散々恥をかいたから言いますけどね。私だって、直そうと努力くらいしましたよ。今までも、これのせいでだいぶ恥をかいてきましたからね」

「という事はです？」

「ええ、毎日食べればいいというのは、そんなの初期に考えた事ですよ。ダメでしたけどね」

「何でダメだったんですか？」

「……」

舞歌は答えず、横を向いてしまふ。

「ここに来てだんまりはどうかと思うです」

「……自分で買うんじゃダメだったんです」

「は？」

「だから……私はアイスクリームが好きなんじゃなくて、人に買ってもらったアイスクリームが好きなんですよ！！自分で買って食べるアイスクリームはそこまで美味しくないし、あんなに舞い上がり



ないんですよ！なんか文句あるか！！」

「なんか怖いです!？」

舞歌は恥ずかしさをごまかすため、大声を上げた。ただのアイスクリームが好きなのではなく、人が、他人が、自分のために買ってくれる。作ってくれる。そういう過程を経て食べるアイスクリームが、舞歌は好きなのだ。その事が、舞歌はどうやら大変恥ずかしい。それじゃあまるで、アイスクリームが好きなのではなく、誰かと一緒にいることが好きなのではないかと、そう思われるのが恥ずかしいのだ。

「いやいや文句ないです文句ないです!!あれですよね!!一人で食べるよりみんなで食べるのが美味しいし好きなのですよねむぎゅー!!」

巡は舞歌に口をタコにされた。鼻がくつつんぐじゃないかというくらい接近してきた舞歌は「理由はわかりませんよね。不思議ですよね。どうしてなのでしょうね。こんな不思議で不思議でしょうがない事が起こるのもまた、アイスクリームの魅力の一つですよね。ね?」と、言い聞かせる。巡が首を縦に力強く振ったのは言うまでもない。

「物分かりがよくて助かりました」

「全く……舞歌はたまに怖いです……いや、いつもですか?」

「知りませんよそんな事。そう思うなら、二度と私に関わらないで下さい」

「そうはいかないです！私には舞歌のアイスクリーム・ハイを直す義務があるですからね！」

「まだやるんですか……もういい加減帰して下さいよ……」

「ダメです。これから毎日、私の家に来てアイスクリームを食べると約束するならいいですけどね」

「喜んで、死ね……！」

「っ……！！脊椎反射的にアイスクリームを食べれるとわかり喜んで後、刹那に我に帰り羞恥心をごまかすために暴力を振るうのはやめてくれますですか!？」

緊急ガードがなくてギリギリだったが、なんとか巡は今回も、舞歌の拳を防いだ。

「何を言っんですかあなたは！」

「いや、だからですね。毎日、自分で買ったアイスクリームを食べるだけじゃ直らないなら、私が毎日アイスクリームを食べさせてやるっていうわけです」

「余計なお世話です！」

「何ですか。私のアイスクリーム、もう食べたくないんですか？」

「食べたいに決まってるでしょ!？あなたのアイスクリームは毎日食べたいくらい美味しかった!」

「あ、ありがとうございますです」

「あ……あぁ……あぁもう!」

舞歌は頭を抱えた。今日ほど、このアイスクリームと聞くと自分を抑えれない事を恨んだ事はない。

「ふう、全く……仕方ないですね」

巡は、仕方ないなあ全く。と、苦笑のような笑いを浮かべ、右手で舞歌の頭を撫でてやる。当然弾かれる。

「とりあえず今日の事は忘れてやるし、アイスクリーム・ハイ状態の舞歌の言ったことも、もちろん真に受けません」

「……どうも」

「だから舞歌も、恥をかいたからといって、二度と私に会わないようにしようなんて考えないようにお願いするですよ」

「……考えときます」

「よろしいです。舞歌のアイスクリーム好きを直すのは、まあ、アイスクリーム好きをどうにかしようと思ってるかわかっただけで、今回はよしとしてやるです」

そう言って巡は、どこからともなく鍵を取り出し、手錠を外した。

「しかし、お前には一つだけ言っておきたい事、約束してもらいたい事があります」

「……何ですか」

ようやく開放された舞歌が、手首をさすりながら聞く。巡はソファアを立ち、部屋を出ていった。何なんだよ。と、舞歌が思っていると、すぐに戻ってきた。

「あんまり死ぬ死ぬ言うなです。言うのは百歩譲って許すとしても、本気で死のうとするなです」

そう、いつになく真剣な顔して巡は言っ、舞歌がしていたリストバンドを放り投げた。それは舞歌が探していたものであり、巡がタオルを取りに洗面所に行った時、置き忘れたものであった。

「……私の命、私がどう扱おうが勝手でしょ」

舞歌はリストバンドを嵌めながら、不機嫌そうに言った。

「馬鹿ですかお前は。自分の好き勝手に出来る命がこの世の中にあるわけではないでしょうが」

「説教はごめんですよ。帰ります」

舞歌はようやく帰れると、安堵のため息をつく。長い時間ここにいたような気がしたが、二時間も経っていない。時刻はまだ、おやつ時ですらないのだ。いつもなら昼食食べたら図書館に戻るのだが、今日はもう疲れきった。家に帰ろう。

「………何ですか。まだ何か用ですか」

と、舞歌は思い、帰ろうとしたのだが、リビングの出入口に巡が何故か仁王立ち。

「まだここを通すわけにはいきません！まだ舞歌を帰らせるわけにはいきません！」

「……何ですか。もう用事ないでしょ」

そもそも今日ここに来たのは、シチューとアイスクリームを食べるためだ。その後の、アイキャンフライと手錠プレイは蛇足なのだ。

「ふふふ、言い方を変えます。舞歌はまだ帰れないのです！」

「はあ？」と、馬鹿を見るような目で、なんか勝ち誇った笑みを浮かべている巡を見る舞歌。

「まだ気付かないですか！自分の服を見てみるです！」

「服……？ぐっ……」

舞歌は自分の着ている服を見て、うめいた。服が大変なことになっていた。

「後ろもヤバ気ですよ。もう、血を流しながら転がったりするからですよ？」

「あなたが蹴つ飛ばして転がしたりしたんでしょ！」

そう、服がところどころというか色んなところの血で汚れていた。赤が目立たない黒い服だったらよかったのだが、舞歌は白い服だった。

たので、悲惨な事になっていた。特に首回りとか、背中とかの方は、転がった影響で、事件だった。

「どうするんですかどうするんですかー？そのまま帰るのはさすがにどうかと思ったりするんじゃないですかー？」

「くっ……いえ、帰りますよこのままで！」

なんかこいつの思い通りみたいで気に食わないから！！

「マジで言ってるんですか！？やめた方がいいですよ！？この前このマンションで事件があったばかりですからね！警察とか結構頻繁に歩き回ってますよ！？ぶっっちゃけさっきの死ぬ死なないのやり取りはギリギリだった気がするですよ！！！」

「関係ありません！別にやましい事は一切ありませんし、いざとなったらここであつた事を正直に話すまでですから！！！」

「どんな事を話すです？？」

「手錠で拘束されて血だまりの中で転がされた」

「やめろですよ！私捕まるじゃないですか！」

「最高じゃないですか」

「ひどっ！そ、それにあれですよ！舞歌は実家暮らしだからこんな服で帰ったら心配されるですって、今の無し！！そっいえば私達の中では家族ネタは地雷でしたね！！！」

「……帰ります！」

「いいえ帰らせるわけにはいけません！こうなったら力づくです！」

「ちょ、やめる馬鹿……！」

「バカはそつちです！いいから脱げです大丈夫乾くまでは私の大きなジャージ貸してやるしゲームとかして時間も潰して私と遊ぼうですよ……！」

「最後のが目的だろ……！おま、こら、やめ、また手錠か……！死ぬ……！もうお前死ね……！」

というわけで数時間後。

二人はマンシヨンの前にいた。巡は笑顔で、舞歌は綺麗になった服を着て、ぐったりしていた。

「本当に送っていかなくていいんですか？」

「もう今日はこれ以上、あなたの顔を見たくもないし声も聞きたくありません……！」

「つまり明日以降はまだ顔も見たいし声も聞きたいというわけです」

か

「ええ、はいはい、そうですよ」

「肯定された方が否定されてる気分になるです!？」

「じゃ、さようなら」

「バイバイです。また遊ぼうですよー」

「嫌ですよ」

舞歌はしっしつと手を動かしながら、去っていった。

「いやー、色々ありましたけど、なかなか楽しかったですねー。いりハビリになった気がしないでもないですしー。今度は神社神無とも遊ぼうですかねー。水城水無は、水城火無があれですよねー」

ルンルン気分で部屋に戻る巡。

「む」

「あら」

部屋の前に、隣人、猫猫子猫がいた。寝癖は直っていたが、服装はパジャマのままだ。なぜか、白衣をはおっている。手にはポスターらしきものを持っており、耳にはやはり、鈴がついたピアスをつけている。

「何で白衣着てるですか」



「勝負服よ。ほら私ってば、保健医だし。あなたの父親が教頭をしている隣の胡桃割市にある私立八尾比丘尼高校の養護教諭だし」

「何ですかその説明口調……」

巡はうさん臭げに猫猫を見る。

「どこかにお出かけしてたの？」

「いえ、違いますですよ……というか猫猫子猫。白々しいですよ」

「え、何が？」

「お前、私が部屋を出たのを察して、いえ、舞歌が帰ったのを察して、こうやって出てきたわけだからです」

「何のことかしら」

そつぽを向いて、口笛を吹く猫猫は、怪しさ抜群だった。

「ところで、ちゃんと下の名前で呼べるようになったのね」

「え？ああ、ですよ。最初は呼ぶなとか言われたのですが、途中でそんな事言わなくなったですね」

「そつ、それはいい事ね。本当に……ね」

「……お前は真面目な空気と不真面目な空気を頻繁に変えるから、信頼がなくなるですよ。とりあえず、どけです。もう暑くて死ぬで

す涼みたいです。ゲームの特訓をしたいと思います」

「ああ、なんか途中から別ベクトルの騒がしさになったなあと思ったら、ゲームしてたのね。舞歌ちゃんとゲームが出来るなんて、羨ましいぞ」

「なら、一緒に遊べばよかったじゃないですか。お前、三途舞歌と知り合いでしょう」

「何故わかったの!？」

「舞歌が八尾比丘尼高校出身って事くらいは知ってるですよ。しかもお前、私が三途舞歌と知り合いと知ってるから、頻繁に訪ねてくるじゃないですか。わからない方がおかしいです」

「まあ、それはそうよね。でも、ちゃんとは調べてないみたいね」

「まあ、友達ですからね。調べてないです」

と、言いつつ、水無と神無の事は調査済みである。

「それは結構。いい事ね」

「もういいですか？私、忙しいんです」

「何？舞歌ちゃんにゲームで負けたりしたの？」

「そうです！あいつ、こんなとこで変な才能発揮しやがったです！まさか初心者に負けるなんて……!！」

「あはは、悔しげね。なんなら私が練習相手になってあげましょうか？」

「結構です。ほら、さっさとどけです。部屋に入れなさいです」

「そうはいかないわ！ここを通りたければ私を倒してからにしなければ！」

猫猫はそう言って、ファイティングポーズを取った。

「お前、いい年して……恥ずかしくないんですか」

似たような事を、つい数時間前にしたわけだが、そんな事は棚に上げ、巡は冷めた目を猫猫に向ける。

「恥なんて、ずいぶん前に忘れたわ。はいこれ」

猫猫は巡に、手に持っていたポスターを渡した。

「……ああ、今週末のあれですか」

ポスターは、今週末に開かれる祭のポスターであった。

「あ、やっぱり知ってた？」

「まあ、有名ですからね。これがどうしたんですか？」

「いや、舞歌ちゃん誘ったらどうかないって、思ってね」

「何ですか？」

「何でって……行きたくないの？お祭り」

「そうじゃなくて、何でお前がそんな事を言うんですか。って話です」

「それはもちろん、舞歌ちゃんと巡ちゃんを仲を取り持ったためによ」

「……」

キラーン。と、輝く笑顔を浮かべる猫猫は明らかに何かうさん臭かった。しかしあからさまにうさん臭過ぎるので、逆にツッコミづらい。

「行かないですよ」

「え？」

巡はポスターを猫猫に返した。猫猫は驚いた。

「行かないの？」

「です。今週末から私はちょっと実家に帰るですからね。お土産は期待するなですよ」

「そうだったの。知らなかったわ。あ、じゃあ帰る前に舞歌ちゃんとちょっと遊ぼうという感じだったのね」

「そういう感じもなかったです」

「ふーん。なら仕方ないわね」

猫猫は、つまんなーい。といった感じで、道を譲った。

巡は「ではではです」と、別れを告げ、猫猫の脇を抜け、自分の部屋に入ろうとしたが、ふと、猫猫に声をかけた。

「猫猫子猫」

「なあに？というか巡ちゃん、一応私、年上何だから呼び捨てってどうよ」

猫猫はポスターで素振りしながら答えた。部屋に戻る気はないのだろうか。

「お前が舞歌を誘えばいいじゃないですか」

「それじゃあ意味ないのよ」

素振りをやめて、猫猫はニヤリと笑った。相変わらず、何かを企んでるという事を隠そうとしない奴である。

「私じゃなくて、あなたじゃないと。ま、あなたじゃなくても、お友達なら誰でもいいんだけどね」

意味深な発言をしながら、猫猫は鈴のピアスを鳴らした。

2・7・終わりよければ全てよし。問題は、終わりがどこかということ。

(後書

無駄に長くなりました。

次回は神社神無のお話になるでしょう。

神無さんは、くるみとアイちゃんが出てこなければ、落ち着いてるから長くないと思います。多分。

猫猫子猫は別作品『暗中模索』の登場キャラクターであり、三途舞歌のラストに関わるキャラクターなので、発言が意味深です。ラストだと思えます。気をつけないと巡がただ理由されてポイされる可能性があります。九割ありえねえですけどね。

では次回。

### 3 - 1 神社神無の問題

「はい、バンザイしてー」

「んー」

「はい、右足あげてー。はい、左足あげてー」

「んー」

「はい、お手を繋いで、とことこ歩いてー」

「んー」

「……」

「はい、軍手つけてー。月読ちゃんは起きてー」

「んー」

「……んー」

「はい、園長先生おはようございますしてー」

「おはようございますいませ」

「……よー」

「はい、命さん、月読さん、神無先生、おはようございます。珍しく命さんも眠そつですね」

「昨日ちよっと、寝るのが遅くてなりまし。ねー？」

「んー」

「そうですか。では、三人は草むしりをお願いしますね」

「はい。あ、みんなもおはよー」

「かなお姉ちゃんおはよー」「おはようございまーす。神無先生、今日一緒にお勉強しよ」「一緒に夏休みの友と遊ぼー」「えー、せんせー、今日はビーズで遊ぼうよー」

「うん、その話は後でね。今は畑仕事しましよー」

神無は寄ってくる子供達にそう言ってから、寝ぼけ眼の月読と命と一緒に、畑の草むしりを始めた。

夏の朝の涼しい空気の中、今日も朝早くから、神無は修道服姿で、子供達だけでなく、園長先生からも先生と呼ばれながら、一仕事をしている。

「ふー……」

神無は額に流れる爽やかな汗を拭い、透き通るような青い空を見上げた。

そして思う。

私、何してんだらう。



朝早くから、神無がくるみわり園にいる理由は、昨日泊まったからである。一昨日も泊まった。つまり二泊三日である。今日は帰ってみせると、神無は決意しているが、昨日もそう決意していたので、どうなるだろうね。

昨日神無は、月読と命の部屋で、一緒に寝た。一昨日は、さえちゃんともえちゃんの部屋で、一緒に寝た。三日前は自宅の自室で、一人で寝た。四日前はかなちゃんとかかねちゃんの部屋で、一緒に寝た。色んな女の子の部屋を渡り歩き寝る女、神社神無である。

真奈美先生と園長先生からは、泊まるなら教会の一室を貸しましょうか。スタッフ部屋、空いてますし。と、言われたが、それはちょっと。と、断った神無である。パジャマを持ってきてもいいですよ？巡さんみたいに、着替えを置いておけばどうでしょう。今度お家に帰った時、着替えを多めに、ね？と、提案されたが、下着は持ってきてますけどパジャマとかは。と断わり、結果、最近修道服での生活に慣れ始めている神無である。

なぜ断ったかという、なんかそこまで行ったら、もう逃げられないんじゃないかなー。なし崩し的に、夏休み中、ずっとここでボランティアする事になるんじゃないかなー。私的には、春風さんが復帰したらお役目終了したいんだけどなー。と、神無は思ったからなのだが、もうすでに手遅れ感がある。特に修道服に関しては、すでに抵抗感がほぼない。真奈美先生大勝利である。

そんな神無の、くるみわり園での、最近の日常、一日は、こんな感じである。

「え、もう夏休みの宿題終わったの？」

畑仕事を終え、朝食も食べ終えた神無は、二階のベランダ、というより屋上のな場所で、洗濯物を子供達と干していた。今日は天気もいいので、シーツも干しています。

「驚きましたか？」

「うん、驚いた」

神無が洗濯物を干している横にいるのはくるみである。くるみは毎日洗濯物当番であり、洗濯物に関しては、くるみが責任的な立場にいるらしい。理由はわからない。

「これで一緒に遊べますよね？」

「う、うーん、そうだねー……あ、これ、そっちに干して」

「私がわかったかは行動を見てくれればいいと思いますよ？」

くるみに用事を言いつけ、少し時間を稼ぐ神無。自分もシーツを干す準備をして、さらなる時間稼ぎを準備しながら、タオルを干しているくるみをちらつと見る。修道服姿のくるみの瞳は、心なしか期待に輝いているようであった。

最近、くるみも修道服を着始めた。神無が修道服を抵抗なく着始めたのと、同時期であった。『パールツク的な雰囲気ありますか？』

と、くるみが言っていた。そういう事らしい。何はともあれ、真奈美先生大勝利である。

そんなエピソードからもわかるように、くるみは神無に懐いており、遊びませんか遊びませんか、言ってくる。しかし、そんなエピソードからもわかるように、神無はくるみにちよっと、危険な匂いを感じている。ので、宿題終わったらねー。といって、断ったのが二日前。そして今日、もう終わったらしい。

そういえば最近、くるみさんを見かけなかったけど、部屋にこもって宿題していたのか。と、神無はくるみの努力に驚きを隠せない。

「今日の午後は私の部屋であんな事やこんな事をするのもいいですよね?」

「もしかしてくるみさんは、わざと誤解を生むような言い方をしているのかな?」

洗濯物を干し終えたくるみの発言に、やれやれな神無。

「えっちい事を想像する方が期待している可能性はいかほどですか?」

「その可能性がいかほどかはわからないけど、くるみさんがそういう想像している可能性は、百パーセントと今わかりました。からかうのはやめてね」

はあ。と、ため息をつく神無は、ここ数日で、くるみのこっぴつのにも、だいぶ慣れました。

「私はいつでも本気ですよ?」

「申し訳ないけど離れてくれる!？」

慣れてきたけど、まだ翻弄される日々。顔に手を伸ばしてきたくるみから、距離を取る。

「かなお姉ちゃん! 私はバツチリ聞いてしまったよ!」

「さ、さえちゃん?」

くるみの魔の手から逃れた神無に、一難去つて、また一難。

洗濯物当番と一緒に洗濯していたさえちゃんと愉快的仲間達。さつきまで飛行機雲だ!。飛行機乗ってみた!。とか、楽しそうに話してたはずなのに、何故か神無の周りでみんな怒ってますポーズ。

「今日は私と公園行って遊ぶ約束してたでしょ!」

ぷんぷん。と、ご立腹なさえちゃん。そういえば昨日、そんな約束をした気がする神無は「そうだったね。先に約束してたからさえちゃんとの約束を優先しないとね」と、くるみにニッコリ笑いかける。

「わたしに怖いお話してくれる約束は!」

ニコニコ。と、笑うはなちゃん。そういえば昨日、そんな約束をした気がする神無は「そうだったね!。じゃあ、公園から帰ってきたらお話してあげるね!」と、はなちゃんに笑みを返す。

「あ、あの、ビーズ遊びの……」

おどおど。と、恐る恐るならんちゃん。そ、そんな約束をしたかなと思いつつ神無は「そ、そうだったね!。じゃあ、洗濯物終わった

「らやろっねー」と、らんちゃんに若干引きつった笑顔を向ける。

「夏休みの友を倒す約束もしたもん」

「うん」

じー。と、見つめるはるちゃんみえちゃん。し、したような気もしないでもない神無は「そ、そうだねー。ビーズ遊びしながら、教えてあげようかな?」も、もうないよね。今いる子はこれで全員だし、もうないよね。さすがにちよつと限界気味だよ。と、背中に嫌な汗をかき始める神無。

「そういえば昨日、かなが、明日は神無さんにポッターを読んでもらうと言ってませんでしたか?」

「Oh...」

くるみの追い撃ちで、神無撃沈。なんか英語っぽい諦めな声を出して、天を仰いでしまった。

「かなお姉ちゃん?」

「おねえちゃん?」

「ゆ、ゆびわとか、作りたいなって」

「夏休みの友とは早く縁を切りたいもん」

「うん」

「私は夜遊びでも構いませんよ？」

「……あは、あはははー」

モテモテな女神社神無は、ダブルブッキングってレベルじゃない約束をしてしまった今日という日を果たして切り抜ける事は出来るのか！

それはお天道様にもわからない！

3 - 1 ・神社神無の問題（後書き）

神社神無のターン。  
いきなりピーンチ。

### 3 - 2 ・神社神無の神業

神無が今日やらねばならぬ事。

- 1 ・らんちゃんとビーズで遊ぶ。
- 2 ・はるちゃんとみえちゃんの勉強を見る。
- 3 ・さえちゃんと公園で遊ぶ。
- 4 ・はなちゃんに怖い話をする。
- 5 ・かなちゃんにハリーな本を読んであげる。
- 6 ・くるみと遊ぶ。
- 7 ・家に帰る。

おおよそ、この七つである。

一つ一つなら、特に問題なくこなせる用事である。そのため、昨日神無も安請け合ってしまったのだが、これを一日でやるとなるとちよつと厳しい。家に帰るを諦めれば、まあ出来なくもないが、諦めたくない。そこを諦めたら、もう神無はこの一員になってしまう。大学三年にして、就職先が決まってしまう。昨日真奈美先生に履歴書を渡された時の危機感を忘れてはならない！

しかし、約束を破るなんて事は出来ない！

だから神無は今日、本気を出してこの七つの用事をこなすのだ。まず、順番が大事だ。同時に出来るなら、同時に用事を消化しようではないか作戦だ。

となると、さえちゃんとかくるみとかかなちゃんの約束がポイントになる。

さえちゃんの、公園で遊ぼう！は、午後、みんなで公園に行く時でしか出来ず、しかも、外で遊ぶため、他の約束を同時にするのは難



しいうえに、長時間拘束される。

くるみの約束は、どうも一対一を所望しているようなので、困る。夜でもいいと言われたが、そうすると家に帰れなくなるので、困る。

かなちゃんの、ハリーさんの本は長いので、どこまで読むかで、色々。

そんな感じで困りながら、神無が考えた今日のスケジュールは、午前中、勉強時間の時、はるちゃんとみえちゃん（恐らく他にも数人）の勉強を見ながら、らんちゃんとビーズ製作を行う。あわよくば、くるみも誘って一緒にビーズを作る事により、約束を達成した事にしたい。

昼食の時、食べながらはなちゃんに古典的怪談を披露する。あわよくば、くるみにも怪談を語り、約束を達成した事にしたい。

午後、まずは公園に行き、さえちゃんと戯れる。あわよくば、くるみも誘って遊ぶ事により、約束を達成した事にしたい。

公園から帰ってきたら、かなちゃんにご本を読む。あわよくば、くるみにも本を読んであげ、約束を達成した事にしたい。

そしてここまでで、くるみが満足していなかった時に限り、夕食をくるみの部屋で二人つきりで食べる事にして、くるみの約束を達成し、帰る。

完璧な行動予定である。

神無は今日という日を選び越える事が出来ると、思った。

「それで、今日はどこまでする予定なの？」

「全部なの」

「うん」

「ぜ、全部!？」

神無の完璧な予定は、初っ端から崩れ去った。

洗濯物を終え、食堂に集まった神無と子供達。

神無の膝の上にはらんちゃん、正面には命、両隣にははるちゃんみえちゃん。はるちゃんとみえちゃんの横にも子供がいて、神無と命とらんちゃんの前にはビーズ道具。他の子供達の前には、夏休みの友がいる。

月読とさえちゃんとはなちゃんは離れた席で、真奈美先生直々に勉強を教えられている。あの三人、昨日勉強をサボったのだ。

かなちゃんやあかねちゃんは、くるみとなんかしてる。午前中のあわよくば、難しいようだ。というか、午前中の目標達成も厳しい。

「ぜ、全部って、これ全部？」

「そつだもん。今日は一日勉強デーだもん」

「うん」

「い、一日って……」

神無ははるちゃんとみえちゃんの、夏休みの友を手に取り、中身を見る。国語、算数、理科、社会、さらに英語まで、万遍なく網羅し

ている恐るべき友は、驚く事にほぼ白紙であった。午前中、残り三時間では、とてもじゃないが、出来そうにない。

「そ、それを私に手伝ってくれと?」

「そういう約束だもん」

「うん」

「そ、そういう約束だったかなー……あ、パンダ出来たよー」

はるちゃんとみえちゃんと、驚くべき約束をした事に動揺しながらも、神無の手は、寸分狂わず、ビーズアートを作り上げていた。

「わ、わ、すごい。あ、あたしも、作りたい」

「うん、じゃあ一緒に作ろうね」

らんちゃんに、じゃあまずはこれをねー。と、指示してから、神無は「二人はもう少し、計画的にやってみたらどうかね?」と、助言する。

「ほら、夏休み前に予定表とか作らなかつた?」

「作ったもん」

「うん」

「じゃあ、そんな今日一日で全部やるとか言っちゃダメだよ。計画的に、今日やる分までやろうね」

これで大丈夫だろう。と、ちょっと神無は安心した。「あ、命ちゃん、そこ違うよ。まず黄色を通さないと」「あ、ホントだ」命の事も、忘れてないぜ。

「それじゃあ夏休みまでに終わらないもん」

「うん」

「すでに計画破綻してるの!？」

そういえば夏休みの友、ほぼ白紙だった!と、神無驚愕。「わっ」膝の上のらんちゃんも、一緒にビツクリ。「はるちゃんとみえちゃん、勉強するフリしてたんだもんね」命から、驚愕な事実を教えられる。

「ま、まあ、全部は無理でも、算数だけならいけるかもね?算数やるつか。わからないとこあったらどんどん聞いてね」

「わかったもん」

「うん」

はるちゃんとみえちゃんは、ようやく、夏休みの友に手をかけた。ふう、やれやれな神無。「あ、みかんちゃん、さっきから手が止まってるけどわからないとこあるの?」別の小学生のフォローも忘れない。

「お、らんちゃんいい感じだねー」

らんちゃんは手先が器用で、順調にパンダを作っていく。よしよしと頭を撫でると、照れながらも、嬉しそうに顔をほころばせる。何この子カワイイ。

「全部わからないもん」

「うん」

「諦めるの早くないかな!？」

そんな感じで、らんちゃんは問題ないのだが、早々に鉛筆を放り投げたこの二人が問題だった。特に、みえちゃんが問題な気がする。みえちゃんの口から『うん』以外が発せられるところを、神無は見た事がない。

「みえちゃんもわからないの?」

「うん」

「本当に?」

「うん」

「本当は、わかるの?」

「ううん」

「あ、本当にわからないんだね」

『ううん』は、言える事がわかった。なんか安心した。「はい、フ

「エニックス出来たよー」そして、片時も休まず作製していたピースフェニックスを披露。

「す、すごいー！」

らんちゃんが思わず拍手しちゃほどの力作、五センチフェニックス。今にも羽ばたきそうな、ダイナミックフェニックスに、他の子供たちも、ぱねえー。と、羨望の眼差し。

「さ、はるちゃん、みえちゃん。算数頑張ったら、これあげるから、頑張ってね」

「私頑張るもん」

「うん」

はるちゃんとみえちゃんにやる気が生まれた。投げ捨てた鉛筆を手に取り、凄い勢いで手を動かす。おい、わかんなかったんじゃないのか。と、神無はちよつと思いつつも、二体目のフェニックス製作に取りかかる。

「神無お姉ちゃん、みことも欲しいー！」

「命ちゃんには、ハートと三日月のをあげるからねー。ちょっと待ってねー」

「あ、あの、あ、あたしも……」

「はいはい、わかってるよー。らんちゃんにはねー、お花のブローチを作ってあげるからね」

他の子供達も、欲しい欲しい言うので、神無は次々に新しいビーズを生みだしていく。その速さと出来具合は、反比例しない。

「あ、らんちゃん。そこはこうやって」

その上、らんちゃんと命ちゃんのビーズ指導もしっかり行う。間違えそうになったら教えるというのは、片時も目を離していないという事だ。

「十個のケーキを、五人で分けるんだから」

さらに、はるちゃんとみえちゃんの勉強もちゃんと見る。しかし問題を教える時は、ビーズ作りを止めない。つまりこの神無、口頭だけで説明出来ているという事だ。

「で、できた！あたし、パンダできた！」

「私も算数終わったもん」

「うん」

その結果、らんちゃんは初めて一人だけで、パンダを作れて、はるちゃんとみえちゃんは、夏休みの友Ver算数を倒した。

「私も出来たよー。ペガサス！」

「す、すごい！」

神無がこの時間で作ったビーズ作品は、パンダから始まり、フェニックス、カメ、三日月、ハート、蘭、白鳥、百合、桜、エトセトラ、

エトセトラ、ペガサス締め。計二十個。二時間程度で、それらを完壁に、しかも片手間に作ったわけだ。

それを見ていた子供達の神無を見る目は、この人魔法つかいだー！と、憧れと尊敬でキラキラと輝いていた。

「……くるみさーん」

「何ですか？」

そしてそんな神無の神業を遠くで見ている比較的冷静な、かなちゃんとくるみ。

「神無さんって、何物なの？」

「私としてはあなたも何物ですかと聞きたいですよね？」

「私はふつーの子供だもーん」

そんなかなちゃんとくるみの横で「……いいなあ」一人あかねちゃんは、私も欲しい。と、目を輝かせていたのです。

何はともあれ。

神無は、七つの約束のうち、二つを無事クリアしたのだった。



### 3 - 2 ・神社神無の神業（後書き）

この章では、基本的にこのように、神無さんのハイスペックぶりが披露される事になります。

二時間でビーズ作品二十個というのは、まあありえないと思います。パンダー一個作るのにも、一時間はかかるんじゃないでしょうか。

しかも、フェニックスとか、多分神無さん、レシピとか用意せずですよ。ばねえー。

そういう風に思っていたら、いい感じですよ。

### 3 - 3 ・神社神無の切り札

お昼になった。

この時間の目標は、はなちゃんに怪談を語る事である。あわよくば、くるみとの約束も達成したい。

食事中にお喋りするのを嫌う人もいるが、神無とはなちゃんはそんな事はないので、問題ない。すでにはなちゃんにも、昼食を食べながら怪談してあげるねー。わかったー。と、承諾を得ているので、さらに問題ない。くるみも誘ったところ、その時の私によりますよね？と、言われたので、そこは問題ある。

昼食時間は一時間。その間、はなちゃんに怪談をお話する。それで満足してもらえれば、ミツシヨンコンプリート。神無は、はなちゃんとの約束を達成出来る。しかし念には念を入れ、時間は多くしたい。昼食の後は、恐らくはなちゃんは昼寝に入ってしまうだろうから、延長は出来ない。さえちゃんの約束もあるし。となると、開始時間を早めようではないか。

今日の昼食はチャーハン。神無は率先して昼食作りを手伝った。結果、今日の昼食は数十分早く準備ができ、チャーハンがいつもの数倍美味しくなった。

「あ、あの、はなちゃん？」

「おいしいー！」

その結果、はなちゃんがチャーハンに夢中になってしまった。こちららの話を全く聞いてくれない。こ、困った。

「神無姉ちゃん料理上手だね！今度僕にも教えてくれる？」

「わたし、お菓子作りとかしてみたい、かも」

「うん、今度教えてあげるね」

そして月読とあかねちゃんと、また、安易に約束をする神無であった。

「それじゃあ、はなちゃんおまちかね、怖い話をしたいと思います」

「わーい！」

結局、はなちゃんがお腹いっぱいになるまで、神無は待つしかなかった。時間は残念ながら、残り三十分。すでにさえちゃんも神無の側において、「公園、公園、公園」と、体を揺すって待機中。これはやはり、時間延長は出来そうもない。あわよくばも出来そうにない。神無は気合いを入れた。

「では、まず、むじなの話を」

「知ってるー！」

「し、知ってるの？」

初っ端からつまずいた。一緒に怪談を聞きに来た月読と命も「前、真奈美先生に聞いた」「こんな顔でしたかーって」と、知ってる知ってるー。

「じゃ、じゃあ、番町皿屋敷」

「知ってるー!!」

「一まーい、二まーい!!」

「一枚足りなーい!!」

「じゃあ、ろくろっ首は？」

「知ってるー!!」

「伸びる!!」

「舐める!!」

「じゃ、じゃあ、お岩さん!!」

「知ってるー!!」

「なんか怖い!!」

「きつと怖い!!」

「じゃ、じゃあね」

こんな感じで次々、古典怪談を神無は話そうとするが全て、知ってる知ってる、真奈美先生から聞いたー。と言われてしまう。真奈美先生を神無は恨みたくなつた。

「し、知ってるのじゃダメなのかな？」

終いにや、妥協を引き出そうとしたが、はなちゃんは笑顔で「ダメ！」と、一刀両断である。

「くねくねみたいな話が聞きたいのー！きさらき駅みたいな話が聞きたいのー！」

「僕はそこまでのじゃなくてもいいよー！」

「みこともー！」

「く、くねくね系かー」

古典怪談ではなく、最近の怪談がいいとのご要望に神無は困ってしまう。何故なら恐らくきつと、このはなちゃんが要望している怖い話は。

「あー、つまり実話系がいいのかな？」

「うん！おねーさんの怖い話がいいー！」

という事なのだ。語り部としての役割なら得意なのだが、当事者的な話は苦手な神無である。

しかし、苦手とはいえ、困ってしまうとはいえ、基本、出来ない事はない神無さんである。そういう事なら、そういう事で、どうにか出来る能力はあります。

「じゃあ、怖いというか、不思議な話になっちゃうけどいいかな？」

「むー、内容によりまーす。とりあえず、話してみてくださいーい」

「は、はい、わかりました」

なかなか厳しい幼女、はなちゃんである。

「はなちゃんは、水無を覚えてるかな？前一度、私と一緒に来たことあるんだけど。ほら、カミナリが凄かった日」

「知らない」

はなちゃんは首を横にふるふる。まあ、あの日水無は、はなちゃんと絡んでないので仕方ないかな。と、神無は思ったが、「はなちゃんも知ってると思うよ」と、月読が言った。

「図書館で会った人だよ。はなちゃん、おんぶしてもらったでしょ？」

「その人なら知ってるー。やさしいー」

「図書館？」

ちよつと、どういう事かわからない神無に、命が「この前、図書館行った時会ったの」と、何故か不機嫌そうに付け足した。

「そうなんだ。まあ、知ってるなら話は早いね。その水無はね、私の友達何だけど、この前不思議な体験したって、電話してきたんだよ。そのお話をしたいと思います」

「おー！」と、歓声を上げ、拍手するはなちゃんと月読と命。「遊ぶー」と、どつかトリップ気味のさえちゃん。「お姉様の話！」と、急に現れたななちゃん。なんか増えたけど、これ以上の口スは厳しいので、スルーする神無。

「水無は妹さんと二人暮らしなんだけどね、あ、水無に妹がいるのは知ってるかな？」

神無は、何気なく聞いたただけだったが、『水無の妹』と聞き、月読と命とさえちゃんとななちゃんがむすーつとした。はなちゃんだけは、「知らない」とニコニコだ。

「あ、あれ？みんなどうしたのかな？」

何で急に不機嫌になったの？まさか、火無さん、この子達に何かした？と、焦り気味な神無。

「水無姉ちゃんの妹、僕きらーい！」

「みことは、だいつつっつきらい！」

「次会ったらぎったんぎったんにしてやるんだから！！」

「私がお姉様の妹なんだから！」

月読と命とさえちゃんとななちゃんは、次々に、あの妹は最悪だ！。悪魔だ！。つくよちゃん泣かした！。私こそが妹なのだ！。理不尽だ！。次会ったらひねりつぶす！。水無姉ちゃんの妹とは思えない！。私の方が妹なのだ！。と、火無に対する評価と不満を爆発させた。

「み、みんなとりあえず落ち着こうね、ね？ほら、今は怖い話怖い話ね？」

神無はなんとか宥め、話を進める。

「えっと、それで……そう、水無の妹さんは、みんなが知ってるように、あー……変わった子だから。水無は心休まる時は、妹さんが寝てる時だけらしいんだよね」

「わたしも寝てる時だけ心休まるー」

「そ、そうなんですか」

はなちゃんが唐突に意味深な事を笑顔で言ったので、神無動揺。他の子達は特に気にしてないのが、なんかさらに動揺を強くさせるが、神無はとりあえず、話を続ける。

「でね。その日も、妹さんが寝た後、一人、テレビを見ながらボーツとしてたらしいんだけどね。ほら、夜っていつても今は夏だから暑いでしょ？暑いとやっぱり、喉が渴くよね。だから水無は、麦茶を飲んでたらしいんだよ」

「私が口移しで飲ませたいです！」

「そっか。水無に伝えとくねー」

急にななちゃんが自分の欲望を口に出したが、神無は軽く流して、先に進む。

「麦茶はね。ここにあるのと同じく、ニリットル入りの容器に作ってあったの。それをコップに汲んで、グビグビ水無は飲んでたらしいんだよね。でも、ニリットルって、結構すぐなくなっちゃうんだよ。水無もね、まだまだ夜はこれからだぜー。って時に麦茶がなく



なっちゃったらしいんだよ」

「ざんねーん」

「むねーん」

「そうだねー」

月読と命の、かわいらしい相槌に心を和ませながら、神無は話を続ける。

「なくなつたからには、作りなおさないといけないんだけどね。麦茶が麦茶になるのもそれなりに時間がかかるし、冷えるのにはもつと時間がかかるでしょ？だから水無は、はあ、やれやれ。と思つたわけなんだよね。思つても、作らないといけないわけだ。他に飲む物もないし。でもその前に、水無はお手洗に行つたらしいんだよ」

「私も夜一人でトイレに行けるのだ！」

「おー、偉いねー」

さえちゃんが対抗心を出してきたので、神無はさえちゃんの頭を撫で撫でしてから、話を続ける。

「で、お手洗いから戻ってきたら、不思議な事に、麦茶があったらしいんだよ。ニリットル容器に、いっぱい入ってたの」

「みすてりー！」

はなちゃん的笑顔度数が上がった。

「そう、ミステリーなんだよ。もちろん、妹さんは寝てるからそんな事しないし、水無がなくなっただって、記憶違いしてたのもありえないんだよ。だってね、確かに水無は麦茶を飲んでたわけだよ。コップにちよつと残ってたのがその証拠。なのに、麦茶の容器は、マシタンなの」

「妖精さん？」

「妖精さんかなー？」

月読と命の犯人予想に、神無は「どうだろうねー？」と、ニコニコ。

「実は私がいきりよーを飛ばしました！」

ななちゃんの私犯人発言に、神無は「妖精さんかもね」と、ニコニコ。

「さらに不思議な事に、麦茶は程よく冷えててね。水無は、不思議だなー。と思いながら、麦茶を飲んだらしいよ」

「え、そんな変なの飲んだの？」

さえちゃんがどん引いた。なんだかんだで、この中で一番常識的な少女である。

「うん、もったいないからね。というお話でしたー。どうだったかな、はなちゃん？」

「うん、ダメー」

「ダメなの!？」

はなちゃんニコニコ笑顔で即答で、却下した。

「たしかに不思議な話でー、おもしろかったですけどー、正直言ってー、盛り上がりにかきましたー。もっと、ドカーンが欲しいですねー」

「は、はい。すみません」

そしてダメ出しをくらう。

「僕はおもしろかったよ？」

「みこともー」

「お姉様の話という事で満点でした」

「あ、ありがとう」

そしてフォローされる。

「かなお姉ちゃん！そろそろ私のじかーん！」

「そ、そうみたいだね」

そしてタイムリミット。

「えー、もっとー！」

はなちゃんはまだまだ、満足していない。しかしタイムリミット。神無ピンチ。このままでは、これからの予定に影響が！

「行こうよー！行こうよー！」

「もっとー！もっとー！」

「う、うう……！」

はなちゃんとさえちゃんに板挟みにされ、神無は呻く、困る、悩む。月読と命はその様子をおもしろ気に見守り、ななちゃんはすでに消えた。

「あー、では！はなちゃんにとっておきなショート怪談を話してあげよう！これで満足してくれたら私は嬉しいな！」

「内容によるよー」

どこまでも手厳しい幼女である。

「春風さんは知ってるね？」

「知らなーい」

「巡姉ちゃんの事だよ」

「神様だよー」

「その人なら知ってるー」

「うん、この前夜遅くに、巡さんから電話があっただね。いきなり、鏡の自分に、ついにジャンケンで勝ったです！って、言われました！どうかな？」

投げっぱちな怖い話であったが、月読と命は、「鏡とジャンケン出来るのー?」「みことはいつもあいこだよー」「巡姉ちゃん元気かなー」「会いたいねー」と、なかなか好感触である。さえちゃんは、「か、勝ったの?」「恐怖でどん引いていた。そして一番重要ななちゃんは。」

「わたしも勝つー!」

興味を持って、洗面所に駆け出した。

「…………ふう」

ギリギリな戦いだったが、なんとかはなちゃんとの約束を達成した神無は、一息ついた。

「さすがの神無さんも、はなちゃんには苦勞してたみたいだねー」

「はなは私たちの中では最弱ですか?」

「意味わからないよー」

そして遠くでやっぱり、観察していたくるみとかなちゃん。側には他に、あかねちゃんやらんちゃんがいる。この二人、怖い話が苦手なので、あつちにはいなかったのである。らんちゃんがもらったビーズアートを、あかねちゃんが「い、いらならもらってあげてもいいんだけど?」という感じで、欲しがっていたのだが、「いらなくないからあげない」と、らんちゃんに力強く断られ、あかねちゃん涙目状態である。

「次のさえがどうなるか楽しみですね?」

「別に私は楽しみじゃないけど……くるみさん、神無さんと遊んでるよね」

「何の事かわかりかねますよね？」

「……別にいいけどー」

子供達の中で唯一神無を心配する子供らしからぬ子供、かなちゃんでした。

### 3 - 4 ・神社神無の弱点

「ふーふーふーん、ふーふーふーん、らららら、らんらん！」

「ご機嫌だねー、さえちゃん」

「うん！」

公園に向かう道すがら、神無とお手手繋いで、散歩的な歌を満面な笑顔で口ずさむさえちゃんは、誰がどう見たって、ご機嫌の極みだった。

「かなお姉ちゃんと遊ぶのを、私はずっと楽しみにしていたのだ！」

「そっかー、じゃあいっぱい遊ぼうね」

「うん！」

ニコニコさえちゃんを見て、自然とニコニコになる神無は、さえちゃんとの約束は、特に問題なく出来るなど、確信したのだった。

「……………抜かったー」

確信した三十分後、神無はベンチで背中を丸めていた。

近くには噴水があり、そこで子供達がワーワーキヤーキヤー水遊びに興じている。子供達はビッチャビッチャになっっているが、楽しそうで涼しそうだしまあいいかと、噴水に入って滝打ち修業のような事までしている子供達の問題は放置している神無である。

放置出来ない問題は、そこにさえちゃんがいない事である。もちろん、神無の横にもいない。それが目下、神無を悩ませ、背中を丸めさせている原因である。

自然公園につくまではよかったのだ。そこまでは、さえちゃんはとも楽しそうにしていた。

しかし、自然公園に着いてからが問題だった。

まず、一緒に引率に来ていた先生が、体調不良でダウンしたので、神無が一人で、子供達を見る事になった。責任が重くなった。

ちゃんとみんなを見守らないと、と思った神無は、子供達みんなと遊ぶ事にした。さえちゃんの機嫌度数が減少した。

子供達と何して遊ぶ。と考えていると、さえちゃんが「かなお姉ちゃんと二人つきりで遊びたい！」と、駄々をこねはじめた。

しかし神無には、みんなを監督するという役割があるので、それは難しい。もう一人、監督してくれそうな人がいれば問題なかったのだが、監督してくれそうな人筆頭、くるみは、何故か遠く離れたところでかなちゃんを羽交い締めに使っていた。

神無はやんわりと、みんなと遊ぼうねと、言えば言うほど、さえちゃんの不機嫌度は跳ね上がっていった。自分を独占したいと思う人間の対処に、神無は不慣れであり苦手である。

そして、そんな感じでさえちゃんは不機嫌が溜まりに溜まり、「じやあかくれんぼ！！かなお姉ちゃん才二！始めー！！」と、一方的に宣言して駆け出していった。他の子供達も、さえちゃんの号令に従い、自然公園内に散っていった。一人残された神無は、ちよつと



泣きたくなかった。そんな神無を遠くで見守るくるみに肩車されたかなちゃんは「た、高いよ！！下ろしてよー！」と、半ベソかいていた。

そして現在、さえちゃん以外の子供達を全員発見捕縛した神無は、いっこうに見つからないさえちゃんに頭を悩ませているのだ。

広大な自然公園。かくれる方には最適でも、探す方には最悪だった。それでも三十分で、九人を発見した神無はよくやった方である。しかし、一番肝心の、一人が全く見つからない。自然公園のありとあらゆるところを捜したはずなのに。

もしかして、勝手にどっか行っちゃったのかも。そして車にとか…。

そんな可能性を考えてしまうほどには、神無は悩んでいた。

早くさえちゃんを探さないといけないけども、子供達の様子も見えないといけない。子供達と一緒に探すのが一番何だけど、水遊びに興じる子供達が素直に従ってくれるとは思えない。くるみの姿もないし。

「……………はあ」

憂いを帯びたため息一つ。

このままでは、任せてくれた先生と、さえちゃんの信頼を、期待を裏切ってしまう事になる。期待を裏切った先に待つのは、失望と落胆の眼差し。そういう態度を取る人達を、神無はたくさん見てきた。そういう態度を、取られてきた。あっちが勝手に期待したのに。悪いのはいつも、自分。姉より劣っている、自分のせい。

『最初から、お前に期待したのが間違いだっただ』

「神無先生大丈夫ですか？」

「え？」

忘れた事にした記憶を思い出し、久しぶりに、どうせ自分なんかモ  
ードになりそうになった神無に声をかけたのは、かなちゃんだった。  
神無は慌てて、笑顔を作る。

「あれ、かなちゃん。くるみさんは？なんか今日、よく一緒にいる  
のを見かけてたけど」

「はい、まあ……」

かなちゃんは、認めるのやけどまあそうですよ、ちょっとそこ  
には触れないで。って感じで、嫌そうに目をそらした。この子、仕種  
が子供っぽくないよなー。と、神無は思った。

「かなちゃんはみんなと一緒に遊ばないの？」

今日幼少組で公園に来てるのは、さえちゃんとかなちゃんだけだ。  
他の子は、かなちゃんより上なので、遊びにくいからくるみさんと  
一緒にいたのかな？と、神無は思っていたのだ。

「えーっと、別に遊びたくないじゃなくて、私の事は、まあ、置い  
といて」

かなちゃんは、あたふたしながら、ジエスチャーで、横に置いた。  
「……かなちゃんいくつだっけ」と、神無は思わず聞いてしまった。

「ご、五ちゃんになりまちた！」と、かなちゃんは子供っぽくパーを突き出した。神無は「そだね」とりあえず微笑んだ。

「あ、あのですね！さえちゃんはあっちにいますと思うんです！」

わたふたしながらかなちゃんは、神無の後ろを指差した。

わたわたしてる姿は子供っぽいなー。と、思いつつ、神無はかなちゃんが指差した方を見る。丘になっているそこには木々と藪。がよく見て見れば、藪の向こうに獣道のようなものがある。気付かなかった。

「この向こうにいるって事？」

「はい、多分います。前、さえちゃんに話した事あるんです。特別な隠れ場所だよーって」

「そうなんだ。ありがとう、困ってたんだよ」

感謝の意味をこめ、かなちゃんの頭を撫でる神無。かなちゃんは目を細めて気持ちよさ気だったが、すぐに神無の手から離れた。

「ここはくるみお姉ちゃんに見ておくよう頼んでおくから、神無先生、さえちゃんの事、よろしく願います」

かなちゃんは丁寧に頭を下げた。そして言うべきか悩むようなそぶりを見せた後、手招きした。神無は意味を察し、かなちゃんに顔を寄せる。

「さえちゃん、神無先生に見つけて欲しいから、かくれんぼにしたいですよ」

かなちゃんは小声で、神無にそう言った。かくれんぼ何だから、当たり前じゃないか。とは、神無は思わなかった。かなちゃんの言いたい事は、しつかり伝わったから「わかってるよ。ありがとう」と、頭を撫でた。

「それじゃ、行ってくるね」

「はい、神無先生、あんまり頑張らないで下さいね」

「ん？うん、かなちゃんもね」

神無はかなちゃんに手を振り、茂みの中に入っていった。

「うまく出来ましたか？」

「……くるみさん」

神無の姿が見えなくなってから、隠れていたくるみが現れた。

「くるみさんが何をしたいか私にはわからないよ」

「怒ってるんですか？」

「ちよっぴりねー」

かなちゃんは、ぷくーっと、頬をふくらました。確かにちよっぴりだ。

「何で怒ってるんですか？」

「くるみさんが、神無さんをいじめてるみたいだからだよ」

「虐めではなく遊んでるといふ解釈ではどうですか？」

「いじめっ子はみんなそういふんだよー！」

かなちゃんはポカポカくるみさんを叩いた。しばらく叩かれっぱなしにした後、くるみはおもむろにかなちゃんを抱き上げる。そしてまた、肩車に移行。

「な、何するの!?!」

落ちそうで怖いので、くるみの頭を掴んで、ビクビクするかなちゃん。

「神無さんの後を追う以外に何かする事ありますか？」

くるみはそう言って、神無の後を追うように歩き出したが、慌てたのはかなちゃんだ。

「だ、ダメだよ！神無さんの代わりにここでみんなを見てるって約束したでしょ！」

「約束は破るためにありますよね？」

「最低だよこの人!!」

「神無さんは大丈夫だとどうして思えないんでしょうね？あの人は信頼される事に慣れていない気がするのは私だけですか？それは人を信頼する事が苦手という事に違いありませんか？」

「そう思うなら約束を破らないでよー！」

「バレなきゃ何をしてもいいという言葉をあなたに送りましょうか？」

「最悪だよこの人ー！！」

「大声出すとバレるし落としてしまいそうですよヒヤヒヤですよね？」

「……」

かなちゃんの苦勞はまだ続く。

「……見つけたー」

茂みを抜けた小高い丘には、ベンチが一つだけ置いてあった。そしてそこに、さえちゃんはいた。

「遅くなってゴメンねー」

さえちゃんはベンチで寝ていた。待っているうちに寝てしまったのだろう。カワイイ寝顔を見て、神無はホッと一安心。見つけられてよかった。

「なるほど……特別ね」

ベンチに座り、見晴らしがいい景色を見て神無は、かなちゃんが言った意味を理解した。

「……」

ひざに乗せたさえちゃんの安心しきった寝顔と、規則正しい寝息、そしてこの場の現実から切り離されているような寂寥感で、神無は今までの疲れをドツと感じた。

ちよつと休もう。ちよつとだけ。

神無は目を閉じて、ベンチの背もたれに体重を預ける。

夏の風に揺れる木々の音とさえちゃんの寝息を子守唄にして、神無は眠りについた。

「この可能性を考慮して後をつけた私を褒めてもいいですよ？」

「やだ」

夢の中で神無は、そんな会話を聞いた。

### 3・5・神社神無と神奈

「せんせー。起きてくださーい。せんせー」

「ん……かなちゃん？」

神無が目を開けると、そこにはかなちゃんがいた。数秒、ニコニコ  
かなちゃんを見つめて、自分のひざの上でよだれを垂らして眠り  
こけてるさえちゃんを見て、現状を思い出す。

「ああ、寝ちゃったんだね……今何時？もう帰る時間？」

「はい。もうみんなは、くるみお姉ちゃんが連れて行きました。後  
は私たちだけですよー」

「そっか。くるみさんには、後でお礼言っておかないといけないな  
ー」

「それは別にいいよー……」

「ごによごによとそんな事を言っかなちゃん。何かあったのかな。と、  
神無は首を傾げる。」

「まあ、いつか。それじゃ、私たちも帰ろっか」

「はい！ほら、さえちゃんも起きてー」

かなちゃんがさえちゃんの体を揺ると「ん……やーやっー！」と、  
拒否するさえちゃん。



「いいよいいよ。起こしたらかわいそうだし。私がおんぶしてくよ」  
神無はさえちゃんをおんぶした。「むにゃー」と、さえちゃんは鳴いた。そしてガジガシと服に噛み付いた。借り物修道服なので、気にせず神無は「じゃ、行こっか」

「先生、大丈夫ですか？重くないですか？」

心配そうに神無の後ろをついていくかなちゃん。

「平気平気。こう見えて、私はそれなりに力持ちなんだよ？」

神無は安心させるように、振り返りニッコリ笑いかけたが、その笑顔の横ではガジガシと、さえちゃんが、もう服じゃなくて肩まで噛みついてる勢いで、かなちゃんは心配気だ。

「かなちゃんは心配性だね。かなちゃんはまだ子供何だから、もっと自分の事だけを考えて行動してもいいんだよ？」

獣道を一列で歩きながら、神無はいい機会なので、かなちゃんに助言する。

「私、自分の事だけ考えて行動してるもん！」

急に幼い口調になるかなちゃん。わかりやすい。

「かなちゃん、私に猫被らなくなってきたよね。ちょっと嬉しいかも」

「猫なんて被ってないもん！私素直だもん！子供だもん！」

「そつだねー」

神無はクスクスと笑った。もん。ってつければ子供っぽいだろうという考えがほほえましい。

「私、子供だもん。猫なんか被ってないもん」

クスクス笑いを聞いて、むすーとした口調になるかなちゃん。信じてくれてなーい。

「うん。かなちゃんは子供だよ。だから、そんなに頑張らなくていいんだよ？」

「私は頑張らないと、いけないだもん。神無先生もそうなんじゃないですか？」

「んー？」

「だから今日はあんなに忙しそうなんですよ？」

「んー」

一回り歳が離れた子と、何でこんな話をしてるんだろうと、思わなくもない神無である。

「違うんですか？」

「確かに、頑張らないといけないから、頑張ってるんだけど、んー、

頑張りたいたから頑張ってる気持ちもなくもないんだよねー。期待されるのは嬉しい事だよ。なら、その期待を裏切らないように、頑張ってる、頑張りたい。かなちゃんにもわかるでしょ？」

「……難しい事はわかりません！私、子供ですから！」

「そうだね、子供だもんね」

自分は大人だという子供がいれば、自分は子供だという子供がいる。足して二で割れば、ちょうどいいのかな。と、神無は、かなちゃんとあかねちゃんが同室である理由が、なんとなくわかった。

しばらく無言で歩き、神無とかなちゃんは獣道を抜けた。噴水がある場所に、戻ってきたのだ。そこにはもうくるみわり園の子供達はおらず、親子連れが数人いるだけだった。

神無がさつき座ってたベンチにも、親子が二組座っていた。側にはベビーカーが置かれている。茂みから現れた神無とかなちゃん見て、母親は驚き、少し警戒した。

「こんにちわー。いいお天気ですね」

「え？あ、そうですねー。暑くてたまりませんね」

しかし、神無の爽やかな笑顔と挨拶で、警戒を解いたようだ。

「シスターの、方ですか？」

神無の修道服を見て、母親の一人が尋ねた。それを着てるならシスターだろうけど、シスターって子供背負ってるもんかな。肩、ガジ

ガシされてるけど大丈夫かな。と思ったようで、疑問文である。

「ええまあ、そんなもんです」

「そうですかー。若いのに偉いんですねー」

神無が母親達と歓談している横で、かなちゃんは最初は、神無を壁にして隠れていたが、三人の話が盛り上がって来た辺りで、恐る恐るベビーカーにいる赤ちゃんに近づいた。

赤ちゃんは起きていた。真ん丸な目をかなちゃんに向け、観察するように見つめている。かなちゃんは「こ、こんにちわー」と、小声で挨拶する。もちろん声による返答はないが、手と足をバタバタさせた。

恐る恐る手を延ばし、かなちゃんはほっぺをプニプニした。やわい。小さい手に触れると、ギョツと掴まれた。かなちゃんは驚いたが、赤ちゃんは笑って、掴んだまま手をパタパタさせた。まさに天使の微笑みという感じの赤ちゃんを見て、かなちゃんは思わず「かわい……」と、呟いた。

「ふふふ、抱いてみる？」

「ふへ！？」

赤ちゃんに夢中だったかなちゃん。みんなに注目されているの気付いていなかった。

慌てて赤ちゃんの手を振りほどく。すると、赤ちゃんが泣く。慌てふためく。そんなかなちゃん見て、微笑む神無と母親A。よしよしと赤ちゃんをあやしなから微笑む母親B。

「か、神無さん帰る！」

かなちゃんは神無の服を引っ張り、撤退を要求した。

「抱っこしないでいいの？」

「い、いいから！帰ろ！」

「はいはい、わかりました。では、また」

神無はクスクス笑いながら、親子連れと別れた。

「慌てるかなちゃん、かわいかったよ？」

「神無先生もいじわるですね！」

かなちゃんは恥ずかしいのか、早足で神無の前を歩く。

「そんなに恥ずかしがる事ないひゃ！？」

神無はかわいらしい声を出した。さえちゃんが肩に飽きたのか耳にかじりついたからだ。

「ちよ、ちよつとさえちゃんやめんっ！こ、ころっ！」

「神無先生も、かわいいですよー？」

ここぞとばかりにかなちゃんは、クスクス笑って、さっきの逆襲をはかる。

「そ、そういう事を言うのがっ！子供っぽくなく、首を舐めない

でー！」

背後からの攻撃はどうしようもない。神無は一旦、芝生にさえちゃんを下ろし、息を整えた。

「はあ、全く……さえちゃん、寝てるんだよねこれ」

ツンツン突いて確認してみるが、やはり寝ているようだ。本気を出した神無にかかれれば、タヌキだって嘘寝入りは出来ないぜ。

「神無先生、お耳弱いんですかー？」

「弱いわけじゃないけどね……急に噛み付かれたら、誰でも驚くよ……」

ニコニコかなちゃんを見て、ため息をつく神無。

「かなちゃんは、私に似てるなーって思ってたけど、私より強い子だね」

自分が小さい頃は、そんな事言えなかったらう。

「そうですね。名前、似てますよね」

「うん。そうやって、正しくないけど正しい事を言うところが、そっくり」

神無は、かなちゃんと目線を合わせる。かなちゃんは笑顔をやめ、首を傾げる。

「後は、頑張らないといけない環境だったとことか、似てるよ。かなちゃんの方が、大変だったろうけどね」

神無はかなちゃんの肩や腕を優しく撫でる。いつも長袖の服を着ているので、肌に触れる事は出来ないけれど。慈しみをこめ撫でる。

「う……あ、……い、い、今は大変じゃないからいいんです！早くお家帰ろ！」

かなちゃんは、顔を真っ赤にして、何か言おうとしたけど、うまく言えなくて、どうすればいいかわからなくて、逃げた。

「待ってよ、かなちゃん」

神無は、芝生を転がり始めていたさえちゃんを捕獲し、背負ってから、かなちゃんの後を追った。

ちなみに、神無はさえちゃんとの約束を果たせたか、少し不安だったのだが、くるみわり園に着く前に起きたさえちゃんに聞いてみたところ。

「ちゃんと見つけてくれたし、おんぶもしてくれたし、私は満足！それに夢の中で遊んでくれたし！」

との、事だった。

何はともあれ、神無はさえちゃんとの約束も無事果たしたのだった。





### 3・5・神社神無と神奈(後書き)

かなちゃんを漢字表記すると神奈ちゃんになりますが、色んな事情により、ひらがな表記です。

### 3 - 6 ・神社神無と初体験

さて、自然公園から帰り、さえちゃんとの約束をなんとか守った神無。

次の約束は、かなちゃんにハリーを読む事だったのだが。

「おねーさん、怖い話してー」

立ち塞がるは、昼寝を終えたはなちゃんと。

「うええん！！あかつ、あかねちゃんがっ、あたしのっ、パンダっ、こわっ、こわしたー！！」

「こ、壊していないもん！！わたしがさわったら勝手に壊れたんだもん！！」

喧嘩中のらんちゃんとあかねちゃん。

そして。

「神無先生にはずかしめられましたー！！」

と、どこで覚えたそんな言葉。 的な事を言いながら部屋にこもってしまったかなちゃん。

「ど、どうしろと……」

目標達成までもう少しでありながら、今までで一番混沌とした状況に、神無の顔は引き攣っていた。

とりあえず、喧嘩していた二人は真奈美先生と協力の上、らんちゃんにまたパンダを作ってあげる事と、今度はあかねちゃんも一緒にやるという約束を結び、なんとか出来た。

なんとか出来なかったのが、はなちゃんであった。

どうやらこのはなちゃん、昼の怖いような不思議な話で満足したわけではなく、続きは寝てからにしようと思っていたようで、「怖い話してー、怖い話してー」と、神無の服を放さなかった。

他の約束あるからねー。と、言ったところで引くようなはなちゃんではない。はなちゃんを退けるためには、満足させるか、水無がいつかやったように、身代わりを用意しなくてはならない。

身代わりを用意出来ない神無には、はなちゃんを満足させるしか選択肢しかなかった。多少の時間口スを覚悟し、神無が怪談を捻り出そうとしていると、「こんにちわー」という、間延びした声の救世主が現れた。

「さくらちゃん！」

食堂に入ってきた女性を見て、はなちゃんは目を輝かせて駆け寄った。

「おー、はなちゃん！」

女性、桜木さくらは駆け寄ってきたはなちゃんを抱きしめた。

「さくらちゃんさくらちゃんさくらちゃん！」

「はなちゃんはなちゃんはなちゃんはなちゃん！」

そして互いの名前を呼びながら、頬を擦り寄せるといふスキンシップ。チュツチュツとキスマでしちゃう。そんなスキンシップを見て、神無は苦笑いを浮かべながらも、ホツと一安心。桜木さんが来れば、はなちゃんはもう大丈夫だな。

さくらは神無と同年であり、氷山つららの親友らしい。つららが落ち着いたお姉さんタイプならば、さくらは優しいお姉ちゃんタイプだ。側にいるだけで、ふわふわしてポカポカ出来るような、柔らかい、少女のような女性である。

つららの送り迎えをしているらしく、たまにくるみわり園にもよる。はなちゃんが大変懐いていて、『つららお姉ちゃんはアイちゃんのお姉ちゃんで、さくらお姉ちゃんは、はなちゃんのお姉ちゃんなの』と、命が言っていた。

「神無さんご苦労様ですねー」

「いえ、桜木さんもご苦労様です」

神無は、はなちゃんと熱烈な抱擁を交わしているさくらと軽く挨拶を交わして、心なしか足早に、食堂から、さくらから離れていった。

嫌いになる理由を見つける方が大変なさくらなのだが、神無はさくらとは距離を取りたかった。

神無とさくらは数日前に初めて顔を合わせ、挨拶を交わしたのだが、

その時さくらから、『神裂さんから噂は聞いてましたよー。お会い出来て嬉しいですよ』と言われたのだ。神裂というのは、神無の姉の名前である。さくら、そしてつらは、どういう経緯で知り合ったかは皆目検討もつかないが、姉の知り合いらしい。姉の知り合いとは、あまり関わりたくない神無である。

何故なら、どうしたって、姉を知っている人は、姉と自分を比べる比べられれば、絶対に、劣っていると、ダメな奴と、失敗作と、評価されてしまう。

まあ、その評価が正しいんだけどね。

神無は自虐的な笑みを浮かべながら、かなちゃんの部屋に向かった。

「かなちゃん入るよー」

神無は、ノックをしても返事がないので、そう断りを入れ、ドアを開ける。神無は、同室のあかねちゃんは外で遊んでいる（命が気をきかせて、らんちゃんとあかねちゃんを外に誘った）から、部屋にはかなちゃん一人だけだと思っていたが、部屋にはもう一人いた。

「くるみさん、ここにいたんだ」

いたのはくるみだ。まるで自分の部屋のように、椅子に座り本をめ

くっていた。本来の主たるかなちゃんは、二段ベットの下で毛布被って丸くなってる。

「はなはどうしましたか？」

本を閉じてくるみは聞く。

「まさか見捨てる事が出来たんですか？」

「まさか。桜木さんが来てくれたから、私はお役目ごめんって奴だよ」

「桜木さんが来たなら仕方ありませんよね？」

「何が仕方ないの？」

神無の質問には答えず、くるみは立った。

「ちよつとそこをどいてくれますか？」

「え、どこ行くの？」

せつかく、あわよくばがよつやく出来ると思ったのに。

「かなは優しくされるのに慣れてませんよね？」

「へ？」

「間接的に優しくされるのは慣れてるかもしれませんが、直接的にはどうなんでしょうね？」

「えっと……くるみさん、かなちゃんを慰めてたの？」

「無条件に優しくされるって、子供の特権の一つな気がしたのは私だけですか？」

「それは多分くるみさんだけじゃない気がするけども……」

「それではまた後で会いましょうか？」

「はあ……？」

くるみはなんか意味深な事を言っつて、部屋から出て行って、「ごめつくり？」ドアを閉めた。あまりにも唐突に意味深な事を言っつて、会話が成り立たなかつたので、神無はくるみを呼び止められなかつた。何はともあれ、今回もあわよくばはダメなようだ。

「かーなーちゃん」

毛布がビクツとして、神無から距離を取るように壁に寄っていった。

「どうしたのかなー？」

「……どうもしてませんので、そつとしていただければ、私はうれしく思います」

毛布から子供とは思えない発言で、ほつといってくれ言われたので、「えいつ」神無は容赦なく毛布をはいだ。

「……なんですかー」

毛布は思いの外、抵抗なく剥ぎ取れた。毛布という隠れみのを失ったかなちゃんは、体育座りになり、じと目で神無を見る。

「んー、かなちゃんどうしたのかなーって。何で隠れてるのかなーって、思ってたね」

毛布を畳み、ひざかけにして、神無は椅子に座って、首傾げ。

「神無先生と距離を取りたかったんですよー」

ぷいっと、そっぽを向くかなちゃん。

「何が悪い事したかな？」

いつものかなちゃんとは違う可愛さがあるなー。と、微笑む神無。

「別に悪いことはしてませんけど……」

「ごによごによと、歯切れが悪いかなちゃん。」

「頭以外は、撫でられるの嫌いだった？もしそうならゴメンね？」

神無はズバリと、尋ねる。

「別に嫌いじゃないから、謝らなくてもいいですけど……神無先生、まだよくわかんないから」

「よくわかんない？」



「うん……」

かなちゃんは、自分の膝をより、ギュツと抱え、小さくなって、弱々しく本音を語る。

「家族以外には、あんまり、その……キズとか、触って欲しくない……さえちゃんとか、あかねちゃんとか、月読ちゃんとか、命ちゃんとか、らんちゃんとか、はなちゃんとか、真奈美先生とか、くるみお姉ちゃんとか、巡お姉ちゃんとかは、家族だけど、神無さんは、まだよくわかんないから……なんか、変な気持ちになる」

「そっか、変な気持ちになっちゃうか……」

神無は、かなちゃんから目を離し、かなちゃんの言った事を考える。直接聞いた事はないし、確認した事はないが、かなちゃんがいつも肌を隠している事と、お風呂の時間が違う事、そしてこの場所にいる事から、なんとなくそうは思っていたけど、やっぱり、かなちゃんにはキズがあるようだ。肉体的な意味でも、精神的な意味でも。そして、そのキズを『家族』以外は触れて欲しくないと、かなちゃんは言った。なんとなく、神無にはその気持ちがわかった。水無だったら『家族につけられたのに、家族以外に触れられたくないのかよ』と、呆れるかもしれないな。と、神無は思った。

「それじゃあ、私はどうしたらいいのかな？かなちゃんに、あんまり触れない方がいい？」

「別に頭を撫でるくらいならいいけど……神無さんは、どうしたいんですか？」

「もちろん私は、かなちゃんと仲良くしたいなって思ってるよ。か

なちゃんが変な気持ちになっちゃうなら、諦めるけどね」

「そういう事じゃなくて……………しー」

「？」

かなちゃんは少し考えるように上を向いた後、神無に静かにと合図した。そして、ベットから出てきて、ドアの方へ。どうしたんだろうと、神無がかなちゃんを見ていると、かなちゃんは「くるみさん！」と、声を出してドアを開けた。ガン！と、ぶつかる音がした。

「……………開ける時はノックが大切だと私は身を持って知りましたか？」

ドアにぶつかったのは、くるみだった。どうやらこのくるみ、ドアの向こうで聞き耳を立てていたようだ。

「もうくるみさん！私だって怒る時は怒るんだからね！」

「怒らない人はいないという事を痛感した私ですか？」

くるみはそう言って、食堂の方に歩いていった。

「どっしているってわかったの？」

腰に手を当て、「全く。くるみさんはすぐ調子落って」と、プンスカしているかなちゃんに神無は聞く。

「くるみさんは神無さんを待ってたのに、すぐ出ていったからもしかしたらと思って……………」

かなちゃんはそう言って、もう一度ドアの外を確認してから、ドアをちゃんと閉めた。そして神無を見つめ、首を傾げる。神無も、首を傾げる。

「そこに座ってもいいですか？」

「ん？ うん」

かなちゃんが指差したのは、神無が膝に引いた毛布だ。ようは、膝に座っていいですかという事だ。何で急にそんな事をしたくなったのかはわからないが、神無はもちろん了承した。

かなちゃんを抱き上げ、膝に座らせる。命の時は、この形の時、髪を撫でたり、後ろから抱きしめたりするのだが、かなちゃんの気持ちを考慮し、それはしない。

「重くないですか？」

神無を見上げ、そう聞くかなちゃん。

「全然。むしろ軽いくらい。命ちゃんより軽いかも」

「そうですか」

かなちゃんはそれを聞いて、ホツとしたような顔をして、前に向いた。顔がよく見えないように、ここに座ったのかな？なんて思いながら、神無はかなちゃんのつむじを見つめる。左巻きだ。

「今は私の時間ですか？」

確認するかなちゃん。

「うん、かなちゃんに本を読んであげる時間」

「あ、それ、くるみさんがついた嘘ですよ？」

「え!？」

驚愕の事実である。

「それを神無さんに教えないよう見張るために、くるみさんは私の側にいたんです」

クスクスと笑うかなちゃん。別に怒ってはないけど神無は、軽くかなちゃんの頭を小突く。それには特に反応しないかなちゃん。さっき自分でも言っていたように、頭を触れられるのに拒否反応はないようだ。頭にキズはないのだろう。

「神無さんは、どうしてここで働いてるんですか？」

「ん?」

足をブラブラさせながら、かなちゃんは世間話のような軽さで本題に入った。

「まあ、あれだね。春風さんに頼まれたから、お手伝いしてるんだよ?」

真奈美先生や園長先生に頼まれたり、姉に奨められたりという理由もあるが、最初はそれだ。

「それじゃあ巡さんが元気になったらもう来ないんですか？」

「うーん……どうしようかなーって、思ってるんだよね！。結構楽しいから、このまま夏休みの間だけでもいようかなって思ったりもするけど、本当に私、ここにいるでもいいのかなーって思うし。かなちゃんはどうか。私にもっという欲しい？」

「私はずっといて欲しいとしか言えません」

「そうだと思った」

ポンポンと頭を撫でると、かなちゃんは同じリズムで神無にかかとを当てた。

「神無さんは、よくわかんないです」

「立ち位置が、って事かな？」

「そんな感じだと思います」

さつきかなちゃんは、『家族』以外に触れられたくないと言っていた。神無は『家族』ではないという事だ。そして『家族』として、このくるみわり園の子供達と巡の名前を上げた。かなちゃんにとって、『家族』とはくるみわり園の人達という事なのだろう。

神無はくるみわり園に、頻繁に来るようになったのは最近だが、子供達には慕われており、先生達からの信頼もある。そこだけ見れば、もう立派なくなるみわり園の一員、仲間、『家族』といえるかもしれない。しかし、神無本人が、それを拒んでいる節がある。だからかなちゃんは、神無に触られると、変な気持ちになったり、よくわかんないと思うてしまうのだろう。

「神無さんは、どうしたいんですか？私とか、真奈美先生とか、くるみさんとか、巡さんとかを抜きにして、どうしたいんですか？どうになりたいんですか？」

「……どうになりたいんだらうねー」

神無は、自分で何かを明確に選択するのが苦手だ。怖いから。自分で決めた選択で、自分のやりたいようにやった選択で、誰かを傷つけたり嫌われたりするるのが、怖くてたまらない。誰かの意見を聞いて、誰かのために行動する方が、期待を裏切るかもしれないという恐怖はあれど、断然楽だ。

「神無さんには自分がないんですね」

ビシビシと、責めるように足で攻撃するかなちゃん。かなちゃんの家族になりたいな。って言うって欲しかったんだらうな。と、神無は思っていたので、甘んじてその攻撃を受ける。弁慶に当たって、地味に痛い。

「厳しくて難しい事を言うね、かなちゃんは。でも、こうやってかなちゃんとお喋りするのが楽しいのは、本当何だよ。それは確かに、絶対に、言い切れるよ。私はかなちゃんが大好き。私の事を、心配してくれたり、助けてくれたり、しっかりしてるかなちゃんが大好き。そして、赤ちゃんに夢中になったり、恥ずかしくて逃げ出したリ、よくわかんなくて毛布で丸まったりする、今の子供みたいかなちゃんも大好き。私はかなちゃんの、ゼーんぶが大好きだよ。これは私の気持ち。それは、信じてくれる？」

神無は優しくそう言いながら、かなちゃんの髪を優しく優しく、梳

く。

「そんな事は言われなくても、わかってるもん……」

かなちゃんは小声で答えた。裏も表も、自分の全てを認めて受け入れてくれたような、くれるような神無の優しさに当てられた。恥ずかしいのか、耳まで真っ赤だ。足のブラブラも、止まってしまった。

「ギュツってしていい？」

「……うん」

神無は許可を取ってから、かなちゃんの体に手を回す。大切な物を抱えるように、ギュツと優しく力をこめる。

その態勢のまま、二人はしばらく、無言になった。

心地よい静寂が部屋に流れる。窓の外からは、子供達の遊ぶ声が聞こえてくるが、その声は遠く、まるでここだけ世界が切り離されているようだった。それほど静かな、ゆっくりとした空気が流れていた。

「……ずっとこうしてたい気分かもです」

かなちゃんが、ポツリとそんな事を言った。

「私もずっとこうしてたいよ」

神無もそう答え、かなちゃんの頭に頬をよせる。かなちゃんの足が、パタパタ動いた。それは、赤ちゃんが嬉しくて足を動かすのに似ていた。

「かなちゃんとうとう話出来て、嬉しかったよ」

「……私も、園長先生以外と、こうやって話せるの、初めてで……うれしかったです」

かなちゃんの、初めてという言葉に、神無は驚いて、頬を離した。

「春風さんとか、くるみさんとか、真奈美先生とは、しないの？」

「……巡さんとうとう話すると、なんか、解決させようとする気がするし、みんなに言いそうだから」

「ああ……わからなくもない」

否定出来ない、ごめんね春風さん。

「くるみさんは、とうとう話に向いてないし」

「まあ、くるみさんはね……」

あれだしね。

「真奈美先生は、みんなの事を考えないといけない人だから、あんまり出来なくて……だから、神無さんが初めて」

「そっか……大変だったね」

「大変だった……？」



「違っの?」

「ううん、違くないけど……神無さんは、すごいなって思っ

「ありがとう。かなちゃんも凄いよ」

寝める気持ちをこめ、うりうりと、頬でかなちゃんの頭を撫でてみる。かなちゃんはくすぐったそうに体をよじるが、嫌ではなさそうである。

「……神無先生、まだ時間平気ですかー?」

かなちゃんが、間延びした声で、神無に体重を預けながら聞いてきた。

「時間は気にしないでいいよ。今はかなちゃんの時間だからね。かなちゃんが満足するまで、私はいつまでも付き合っよ?」

おや、雰囲気が変わったな。と、神無は思う。

「本当にいいんですかー?」

「うん、いいよ」

「……あはっ」

神無の返事を聞いて、かなちゃんは身をよじり始めた。神無は察して、かなちゃんを持ち上げ、向きを変える。

向かい会う形になって、かなちゃんは神無の顔を見て、にへらあと、緩んだ笑みを浮かべた。かなちゃんが見せる初めての笑顔に、神無

はちょっと、動揺した。

「神無先生がいけないんですよ。神無先生、優しくて、何しても受け止めてくれる気がしてきて、私の中に入ってきて、変な気持ちにさせるからいけないんですよ。かな、今、すごく、甘えたくありません」

そう宣言して、かなちゃんは、ガバツと神無に抱き着いた。

「ぐえ……！」

慣れていないからか、それとも力加減を気にする気がないのか、かなちゃんは力いっぱい抱きしめ、神無の胸に顔を擦り付ける。

「神無先生、暖かくて、やわらかくて、いい匂いがして、ずっとこうしてたい……ずっとこうしたかった」

「あ、ありがとう……」

ちょっと苦しいが、かなちゃんがようやく、甘えてくれたのだから、神無は我慢である。我慢だけでなく、こっちからも抱きしめる。

「命ちゃんとからんちゃんとかあかねちゃんとかくるみお姉ちゃんとかが、神無先生の事大好きなのは知ってるし、神無先生の何でも受け止めてくれるところが大好きなんだって事もわかってたし、きつとかなも大好きになれるなって思ってたけど、みんなの神無先生取っちゃダメだと思ってたけど、今はいいよね、かなだけの神無先生だもんねいっぱい甘えていいよね」

「こ、ごめんかなちゃん、何言ってるか聞き取りづらいから、話す

時は顔を離してくれない？」

まあ、聞こえたけども。やべ、我慢してた分、かなちゃんの気持ち  
が、重い。と、神無は若干、冷や汗をかき始めていた。

「神無せんせー」

かなちゃんが、神無の胸から顔を離れた。神無の意見を聞いてくれ  
たのか、神無の苦しみを察してくれたのか。いつものかなちゃんな  
らその理由からだろうけど、今のかなちゃんは恐らく別の理由で離  
したのだろうという事を、神無はかなちゃんの緩みきった顔を見て  
わかった。

「大好きですよ。ちゅー」

「ちょ、ちよっとかなちゃん落ち着こうよっ」

かなちゃんは、ちゅー。と、神無の頬や唇にっいばむようなキスを  
繰り返す。神無のファーストキスの可能性があるが、子供だからノ  
ーカンである。

「あはっ、神無先生はこれで、特別に家族になりましたー」

「あ、ありがとう」

これで、とは最後に長く吸ってたあれだろうな。キスマークの事だ  
ろうな。と、神無は若干引き攣り笑顔。

「ベットに運んで下さい」

「ん、わかったよ」

これがかなちゃんのリレモード、いや、本当の姿なのか。一体どこでそのスイッチが入ったんだ。どこで私はここまで信頼を得たんだー！と、神無は動揺しながら過去を振り返りつつ、かなちゃんをベツトに運ぶ。

「一緒にねよっ」

自分の横を叩き、添い寝を所望するかなちゃん。神無はもちろん、拒絶はしない。

「あはっ、前は三人だったけど、あの時も本当は二人で寝たいなって思っていました」

「そ、そうなんだー」

ギューってまた抱き着いてきたかなちゃんに、キューって感じの神無である。

「神無せんせー」

「な、なーにー？」

「かなね、神無先生の話聞きたいなー」

「私の話？」

「うん。だってね、かなの話ばかりでするもん。神無先生の、子供の時の話して欲しいな。かなと神無先生、似てるって、かなも

思うから、聞きたいなって。かなが話したんだから、いいでしょ?」

「う、うーん……恥ずかしい話だから……」

とは言っても、確かにかなちゃんが話したのに、私が話さないってのは……。

「ダメ?」

「……か、かなちゃんが、絶対に内緒にしてくれるって約束してくれるならいいよ?」

かなちゃんのうるうるな目にやられた神無である。

「うん! かな、約束する! 指切り!」

「うん、指切り!」

「そして誓いのキス!」

「う、うん。誓いのキス!」

「約束したからお話して!」

「う、うん。えっとね、私にはお姉ちゃんがいるんだけどね」

神無はかなちゃんに自分の話を始めた。

かなちゃんは、神無に抱き着きながら、それを聞いた。

その時間は、この時間は、神無とかなちゃんの、二人だけの秘密の

時間になった。

3 - 6 ・神社神無と初体験（後書き）

な、なんじゃこりゃー！！

### 3 - 7 ・神社神無の本題

「キスマークをつけて私の部屋に来るとは覚悟が出来てると思ってもいいですか？」

「あ、ごめんねくるみさん。今私は疲れ切ってるから、覚悟って何だよー。とか、ツッコミを入れるのは出来ないよ」

「してるじゃないですかと言わせたいんですか？」

神無は、椅子に座って、ハアとため息をついた。

「思ったよりかなと仲良く出来たみたいで私は大変満足に見えるでしょ？」

「ああうん……見えるよ」

ベツトに腰掛け、うつすらと笑っているくるみを見て、神無はもう一度ため息をついた。

かなちゃんとの秘密の時間が終わったのは、五時だった。自然公園から帰ってきたのが三時くらいだったので、二時間近くかなちゃんと二人でいたのだ。



デレかなちゃんは凄まじく、神無の昔話を語り終えると、より一層神無に甘え始めた。それはもう凄まじく、かなちゃんがくるみわり園にやってきたのは一年前らしいのだが、その一年分の甘えたい気持ち<sup>キスマーク</sup>を二時間でぶつけたという感じであった。

どのような甘えようだったかを具体的に書くと、かなちゃんのイメージと神無のイメージが崩れさる上に、警告タグを入れなければならなくなる気がするので、書かないが、抽象的に二言で表現するならば、ベタベタのイチヤイチヤだった。

そのベタベタイチャイチヤは、かなちゃんが神無の胸で眠るという事で、終わりを迎えた。かなちゃんが寝息を立て始めた時、神無が心の底から安藤したのは言うまでもないかもしれない。

一番楽だと考えていたかなちゃんターンで、まさかの過去味わった事がない程の（愛されるとい理由での）精神的疲労を蓄積した神無は、くるみの部屋ではなく、まず食堂に向かった。水分補給をしたかったからだ。

食堂にはアイちゃん以外の幼少組が勢揃いしていた。さくらとお喋りしていたはなちゃん以外の幼少組は、全員、食堂に入ってきた神無に集まってきた。

「あれ？神無姉ちゃん顔どうしたの？」

「蚊に刺されたの？かゆいかゆい？」

神無の顔の、至るところにある鬱血部分を見て、月読と命が不思議そうに首を傾げた。

「大丈夫大丈夫、ちょっと色々あってね」

何だ何だ大丈夫か大丈夫か、ウナ使うかウナ使うかと声をかけてくる子供に、苦笑で平気だと返す神無。本当の事は口が裂けても言えない。かなちゃんのイメージのためにも。私はさっきの時間の事を墓場まで持つていく！

「なーちゃんは一緒じゃないの？」

「へ？」

と、内心意気込んでいたので、さえちゃんのその質問に神無は動揺した。

「な、何で私がかなちゃんと、い、一緒にいると、お、思ったのかな？」

「だって、くー姉ちゃんがそう言ってたから。違うの？」

「くー姉ちゃん……あ、くるみさんの事？」

「うん。さっきまで、ここにいて、本読んでくれた」

ねー。と、さえちゃんが周りの子に同意を求めると、いたいたー。そう言ってたー。くるみお姉ちゃんは本読むの上手なのー。わたしは退屈だったー。嘘つきー。何をー。や、やめなよー。というやり取りが始まった。それを傍観しつつ、神無は、なるほど、道理で誰もあの部屋に来なかったわけだ。くるみさんが足止めたのか。と、納得。二時間も誰も尋ねて来ないなんて、おかしいと思っていたのだ。

「あ、くるみお姉ちゃんが、私の部屋来てって言ったよー」

「ん、ありがとう。かなちゃんは部屋で寝てるから、安心してね」

そんなやり取りを経て、神無は本日最後の約束を果たしに、黒幕霧  
困気をかもしだす、くるみの部屋に向かったのだ。

「それで、何して遊ぶ？六時には帰りたいから、時間はそんなにな  
いよ？」

「今夜は帰さないよ？」

「言ってみただけでしょ、それ……はあ、もう一度聞くよ？何し  
て遊びますか？」

「この部屋を見たら遊ぶ事は二つくらいしかありませんよね？」

くるみの部屋は二階にある一人部屋だが、部屋の広さは、一階の二  
人部屋とさほど変わらない。二人部屋には壁際にあつた二段ベットの  
代わりに、普通のベットが窓際に置かれ、勉強机は一つだけで、  
その横には小さい本棚とタンスが置かれている。タンスの上には服  
をかけられるフックが取り付けてあり、制服がかけられている。

「ふむ……」

タンスと本棚には遊べそうなものはなし。勉強机の上は綺麗に整頓され、教科書と、何故かサボテンが置かれている。「引き出し開けていい?」「否定する理由はありますか?」「許可をもらって引き出しを開けたが、特に遊べそうなものはなし。

「遊ぶもの、二つもある?」

「一つは私としても、もう一つ何だろう。」

「神無さんで遊ぶか、ベットで遊ぶか、それが問題ですか?」

「一択しかない選択問題は問題とは言えないよ」

「初めてだから優しくしてね?」

「今度からそういう発言は容赦しない事にするから」

「冗談がわからない人は嫌われますよ?」

「冗談ばかり言う人も嫌われるからね?」

くるみは神無のその言葉に、肩をすくめた。まるで、仕方ない、こちが折れてやるか。という態度に、神無はため息をついた。

「それではこれで遊びながらガールズトークでもしましょうか?」

くるみは自分の後ろに手を回し、『これ』を取った。

「何でそんなものが……」

それは、海賊っぽい人が危機一髪的な状況に陥ってるオモチャであった。最初からそれで遊ぶつもりで、自分の近くに置いてあったのだろう。つまりさっきの問答はいらなかったのだ。

「ダーツで取ったのはいい思い出になりつつある私ですか？」

くるみは、ダーツの景品だったんですよと言いながら、ベットから下り、床に座った。そして、海賊危機一髪を自分の前に置いて「Shall We Game?」と、流暢にまあ意味は伝わるよねって言葉で、神無を誘った。

「まあ別にいいけども……」

クッションなんていうものはないので、カーペットに直座りで向かい合う女が二人。その間には海賊危機一髪だけ。服装は二人共修道服。なんだかなあ。と思う神無であった。

「では私からやりますけどいいですか？」

「いいよ」

「一刺し事に質問してくから相手は答えるまで刺せないってルールで文句ありますか？」

「何で威圧的なのかわかんないし、くるみさんはいつも質問的だよなって思うけど、いいよ」

「敗者は勝者の言う事を聞くのは常識ですよね？」

「負けたら罰ゲームって事ね。いいよ」

「では行きますよ？」

くるみはそう言って、ポケットからおもちゃの剣を取り出し、テキトーに置いた。そして、海賊を半回転させ、海賊の顔を壁の方に向けてから、剣を一本手に取り、自分の近くの穴、上の段に刺した。そして神無を見て首を傾げ、質問した。

「かなとの初体験はどうでしたか？」

「痛みによる教育！」

神無は剣でくるみの額を突いた。

「何するんですか？」

くるみが額を摩りながら、不思議そうに聞いた。

「くるみさん。どうしてあなたはいつもそつという言い方をするのかな？」

全くやれやれ。と、神無はくるみ同様、自分の前の刺しやすい穴、上段に剣を刺した。

「そついうのに興味がある年頃という事で諦めてくれますか？それと私の質問への答えはどうしたんですか？」

くるみは自分がさっき刺した横にもう一本。

「初体験的な事はしてないので、くるみさんの質問には答えられません。っていうか、何してたか知ってるの？」

神無も間髪入れず、同様に刺す。この二人、海賊危機一髪の醍醐味である緊張感が全くない。

「密室で若い二人が二時間いて片方にキスマークありという問題文があつたら私は正解を取る自信しかありませんよね？まだ言い逃れ出来ると思っっているんですか？」

くるみは今度は、さっきまで刺していた剣の間の穴、下の段に刺した。

「その問題文に、若いといっても女の子同士、しかも片方は五才児という注釈を入れるべきだと私は思うな。つまりくるみさんは鎌をかけたわけだね？」

神無も同様に、下の段に。

「鎌をかけたわけではありませんよ？神無さんと違ってここに来たばかりのかなを知ってる私がそういう想像をしてしまうのは致し方がないと許してくれますか？それとキスマークという単語は無視ですか？」

くるみは、さっき刺した横、また下の段に刺した。

「来たばかりのかなちゃん、ね」

神無はタルを回して、くるみがさっき刺していた剣の横に刺す。これで剣は八本刺さった。空いてる穴は、残り十六。

「ファーストキスはレモンの味らしいね。結局、くるみさんはどうして私とかなちゃんを二人っきりにしたの？わざわざ嘘の約束まで作って」

「最近はいちごの味だと聞いたんですけどガセでしたか？誤解されがちですけどくるみという女の子は優しい子なんですよ？」

くるみもタルを回し、自分の二手目に刺した横の穴に刺す。

「イチゴは甘すぎるよ。レモンくらいの甘さが最適な表現だと思うな。で、その優しいくるみさんは、今日はどっという企みで行動してたのかな？」

今度はタルを回さず、神無も自分が二手目に刺した横に、刺す。

「レモンって酸っぱいだけじゃありませんか？かなと神無さんは雰囲気似てるから状況を作ればうまく行くと思った私に間違いはありませんでしたよね？」

さつき刺した横にくるみは刺した。

「強い酸味の中に、ほのかな甘味があるんだよ。それが初恋の甘酸っぱさに似てるから、ファーストキスはレモンの味って言われてるんじゃないかな。という事はくるみさんの計画通りに今日は進んだって事かな？」

神無も同様に横に刺した。

「神無さんの初恋はいつだったんですか？かながそこまで急速に自



分を出したという点を除けば計画通りと悪い顔で言えそうな私でしたか？」

くるみは今度は下の段、神無がわざわざタルを回して刺した横に刺した。これで十三本刺さった事になる。互いに互いを見ず、猫背になって海賊危機一髪をずっと注視している姿は、真剣そのものだが、二人共迷いなく剣を刺していくので、テキトーにやっているようにも見えるという不思議な光景である。

「初恋かあ。ライクな好きはあったけど、ラブ的な好きはなあ、記憶にないや。昔から勉強ばっかやってたからね、そういう世界には疎いの。なるほどね。かなちゃんが私に甘えられるよう、自分を出せるようにしてあげようとしたわけだね？」

神無はまた、横に刺した。どうやら、上の段から攻めるようだ。

「勉強が恋人という感じですか？かなが溜め込んでいるものは他の子供達とは違い大人になると取り返しのつかない事になりそうだと心配してるのは私だけではないんですよ？」

くるみは刺した横に刺した。どうやらくるみは、二回刺したら段を変えろという法則でやっていたようだ。くるみが今刺した剣の横にはすでに剣が刺さっている。神無が三手目に刺したものだ。

「別に勉強が好きじゃなければいいから、恋人つてのは違うかな。かなちゃんの危険性はねえ、確かに私も痛感したよ。思ってたより危ういね。でもそれなら、前から心配してたくるみさんがやればよかったんじゃない？」

「勉強が好きじゃないならどうして大学に行っただんですか？それが

出来ないから神無さんに任せたんですよ？」

くるみは上の段に刺す。その隣は神無が一手目に刺した剣がある。

「勉強したくて大学に行く人なんて、そんなないよ。くるみさんにだって出来ると思うよ？その喋り方を直せばね」

神無が今刺した横には、くるみの一手目の剣が。これで、上の段には全て刺さった事になる。残りの穴は、六個だ。しかし二人には緊張感もなく、やはり、お喋りの片手間にテキトーにやっているようにも見えるし、まるで飛び出す穴がわかつているようにも見える。

「そういうものですか？では、神無さんは結婚願望はあんまりないんですか？私の喋り方は前世のカルマ的なあれなのでどうしようもないとみんな諦めてますか？」

くるみが今度刺したのは、自分が三手目に刺した剣の横だ。

「あんまりないね。なんか、そういう、なんていうのかな、恋愛？みたいな事をしてる自分が想像出来ないし。きっと私は恋愛系のジャンルにはいられないキャラ何だなんて思うよ。諦めちゃダメだねって思うけど？」

神無は、くるみが刺した横に刺した。残りの穴は、四つだ。

「結婚願望はないけど子供は欲しいなって感じですか？諦めないと終わらない試合もあると思いませんか？」

くるみも、神無が刺した横に刺した。

「そうそう、そんな感じかも。まあ確かに解決出来ない問題もあるからなあ。でも、仕方ない。って諦めてもいいのかな？」

神無も、くるみが刺した横に刺した。残りの穴は、ついに二つである。

「人には向き不向きがあるというのはたった一つの当たり前な真実だと私が思っているも構いませんか？つまり要約すると神無さんは私と同じく男より女が好きという事でいいですか？」

「教育的暴力！！」

くるみが刺した事により、残りの穴は一つになったが、神無はくるみの額を刺す事により、敗北を回避した。

「何するんですか？」

くるみは額をさすり、神無を見た。その表情は、本当に何で刺されたかわからないように見える。

「何をするんですかじゃないよ全く。どうしてそういう発言するのかわかるみさんは。気付いてないかもしれないから言うっておくけど、くるみさんギリギリだからね？」

ハア。と、ため息をついて神無は背筋を伸ばす。それだけで、少し疲れが取れた気がする不思議。

「神無さん、愛に形はないんですよ？」

くるみはそう言って、海賊危機一髪をどかした。これで、くるみと

神無の間には小さな障害はなくなった。

「……いや、だから、そういう冗談はやめようよ、ね？」

神無は笑おうとしたが、ぎこちない笑いしか出来なかった。さっきの海賊危機一髪ではなかった緊張感が神無に襲いかかる。

「このゲームは神無さんの負けでしたよね？」

くるみはじりじりと距離をつめる。正座したまま。

「ど、どうだろうね。これは引き分けと言える状況だと思うけどな！だって明らかに私不利だったし！かなちゃんから聞いたけどくるみさんって瞬間記憶力能力があるんでしょ！？海賊の位置でどの穴が正解とかわかってたんじゃない！？」

神無は素早く距離を取る。正座したまま。

「では神無さん、心の準備はいいですか？」

「人の話をもう少し聞いた方がいいと思うよ！？」

神無は追い詰められた。追い詰められた先がドアだったのが、神無にとっては幸運であった。

くるみは小首を傾げ、微笑み言った。

「ファーストキスはどんな味がするんでしょうね？」

「超法規的措置！！」

神無はそう叫び、くるみを突き飛ばし、その隙に立ち、ドアを開け、「またねくるみさん！あなたとはよき友人でありたい！」と言って、脱兎の如く逃げ出した。

「……全く、からかいがあつて楽しい人ですよね？」

神無が慌ただしく階段を下りる音を聞きながら、くるみはそう呟いて、体を起こした。

「でもそろそろやめないといけないんですか？」

くるみは脇にどかした海賊危機一髪を手に取り、しばらく眺めてから、おもむろに最後の穴に剣を刺す。海賊が元氣よく飛び出してきたが、出る事がわかつていたので当たり前なのだが、くるみは驚く事なく、それをキャッチした。

そして、神無が出ていったドアを見て、首を傾げる。

「神無さんをかなに譲ってしまった私が甘えられる人を誰か教えてくれませんか？」

独り言さえ、疑問系。

独り言さえ、無解決。

それが、くるみである。

「えー、神無姉ちゃん帰っちゃうのー」

「神無お姉ちゃん今日も一緒に寝ようよー」

「んー、ごめんねー。また今度ねー」

六時、玄関先で神無は子供達に帰らないでー。と、引き止められていた。

「別に修道服着て帰ってもいいのに……」

「かなお姉ちゃんともっと遊びたい!」

「また今度来た時遊ぼうねー」

後、真奈美先生から修道服を私服にしるとも奨められていたが、そこは無視である。すでに修道服からいつもの私服に戻った神無である。

「今度はいつ来てくれるんですか?」

「う、うん。今はまだ考えてないかな」

そう聞いたのはかなちゃんだった。かなちゃんの声や表情や態度はいつも通りで、周りの子供達も、恐らく真奈美先生でさえ、何ら違和感を持っていないようだ。神無だけは、自分を見るその目の奥に、今までなかった、もしくは今まで気づくことがなかった、何

か情熱的な想いのようなものが見えて、ちょっと怖かった。

「え？神無先生、金曜日には来ていただかないと困りますけど」

「え？」

真奈美先生が驚いたように言った言葉に神無も驚いた。

「どうしてですか？」

「だって夏祭りの準備を手伝ってもらわないと」

「え？」

「え？」

神無と真奈美先生は、互いに首を傾げる。子供達も空気を読んで首を傾げる。

「あれ、神無先生。夏祭り手伝ってくれるんですよね。前、そういう約束しませんでした？」

「え……そ、そんな約束しましたか？」

まさかの土壇場で、新たな約束が登場し、神無の表情が引き攣る。

「しました」

真奈美先生断言である。

「神無先生、約束は守らないとダメですよね？」

「か、かなちゃん!？」

まさかの、かなちゃんからのこの発言。前のかなちゃんなら私のフオロー発言してくれるか成り行き見守ったと思っただけですけどー!と、神無は冷や汗。

「僕に料理教えてくれる約束も忘れないでね！」

「みことにも教えてね！」

「今度はオニごっこで遊びたいから！」

「あの……今度は、笹食べてる、パンダ作りたくなって」

「わ、わたしの約束も忘れないでよね」

次々と子供達も声を上げる。

「あ、はなちゃんも怖い話期待してるってー」

急に食堂の方から顔を出し、はなちゃんを背負ったさくらまでもがなんか言ってくる。背負われているはなちゃんは、幸せな顔して手を振ってくる。

「アイもあなたに興味あるみたい」

ブランコで遊んでいたのか。子パンダのようにアイちゃんに抱き着かれているつららが、このタイミングで外から入ってきて、神無の



横を通る時、そんな事を呟いた。

「こ、これは……」

神無は無意識に後ずさった。こ、これはなんかまずい。何だこの状況は。私の今日はまさかチュートリアルだったのか。というか最後の二人どっから湧いてきた！

「神無先生」

心が折れそうな神無に、とどめとばかりにかなちゃんが足元に寄ってきて、屈めと服を引っ張る。抵抗する力もない神無が屈むと、かなちゃんは神無の耳元に口を近づけ、囁いた。

「また二人つきりでお話しようね」

「ちょ……」

かなちゃんはそう言って、すぐに離れた。離れる時、神無の耳に唇が当たったが、それは故意なのか事故なのか神無にはわからなかった。わからなかったが、みんなの元に戻った後かなちゃんが、唇を舐めた姿はどこか妖艶さがあったのは確かだった。

「あは、あははは……」

子供達の無垢にしか見えない笑顔を見ながら、神無は思わず、乾いた笑いをもらった。そして思った。

ああ、春風さん。早く元気になって。私、このままだと間違いなく、

今度からパジャマ持参に一週間分の着替えを持って来ないといけなくなるから。

神無の受難は、まだまだ続きそうである。

### 3・7・神社神無の本题（後書き）

はい、そんな感じでおしまいです。

次回は、どうしようかな。

気長によろしくどうぞ。

#### 4・1・ファミリーではいけないけれど

「こんにちわ」

その声をかけられた時、舞歌はほお杖をついてうとうととしていた。時刻はまだ昼にもなっていないお天道様の時代だったのだが、何だか無性に眠かったのだ。だから舞歌は半分頭が寝ている状態で、声をかけた人物を見た。

「久しぶり。元気してた？」

「……か、神社さん!？」

そこに立っていたのは神無だった。まさかの人物にほお杖からガクツとなつて、一気に覚醒した。

「な、何でこんなところに？」

「三途さんがここにいるって水無に聞いたから、ここ、いい？」

「もちろんいいですけど……」

急に現れた神無に、動揺する舞歌。一体何しに来たのだろうか。

「……今日は、一体、何しに来たんですか？」

「うん、三途さんにちょっと頼み事があったさ」

「……つまり、私に会いに来た、と？」

「そうだけど……ダメだった？」

「全然ダメじゃありませんよ！むしろありがとうございます！」

舞歌は巡や水無が来た時には見せなかった明るい笑顔で、神無を歓迎した。

「ごめんね。読書中だった？」

「いえ、うたた寝中でしたし、読書なんてどうだっていいです」

そう言って舞歌は机に置いてあった本を自分から遠ざけた。

「そっか。ならよかった。それで、ちょっと頼みたい事あるんだけどね……」

神無が、さも、言いづらそうにちらちらと舞歌を見る。

「神社さんの頼みなら何でもやりますよ」

舞歌は胸に手を当て、任せるのポーズ。相当、乗り気である。

「ありがとう。じゃあ悪いんだけど今週、夏祭り」「嫌です」

「……」

「……」

神無が、えー。と、非難な目で見ると、舞歌は、何事もなかったように窓の外を見た。

「あ、あれ、おかしいな。も、もう一度言っていていい？」

「いいですよ？」

「あの、頼みたい事があるんだけど……」

神無が、さも、言いづらそうにちらちらと舞歌を見る。

「神社さんの頼みなら何でもやりますよ」

舞歌は外から神無に視線を戻す。が、さっきのように胸は叩かない。

「ありがとう。それじゃあ今週末の夏ま」「嫌です」

「……」

「……」

二度目の沈黙である。

「あ、あれ、おかしいな。もう一度やっていていい？」

「何度やっても、嫌です」

「そうですかー……………」

残念、舞歌は三回目にはのってくれなかった。

「えっと……………まだ夏祭りとか言っていないんだけど……………嫌なの？」

「申し訳ないですけど、嫌です」

「……………一緒に行きたいとかいう理由でも？」

「ありがたい話ですけど、別の機会に誘って下さい」

「水無と春風さんを誘っても？」

「水無さんはともかく、あいつを誘うならもっと嫌ですよ」

「……………理由を、聞いていい？」

まあ、聞かなくてもわかるけども……………。

「夏祭りとか、あんな人混みの中行きたくありませんよ。神社さんは私に死ねというんですか」

舞歌はほお杖をつき、外を見ながら、神無が思った通りの理由を言った。

「それだけ？」

しかし、神無にはそれが建前の理由な気がした。それ以外に、何かちゃんとした、本当の理由がある。『なんとなく』そんな気がしたのだ。

「それだけですけど」

舞歌は神無と目を合わせた。そこに隠し事をしている疚しさのようなものは見られないが、やっぱり神無にはそれだけではない気がした。なんとなく。

「……そっか」

だけど、神無はそれ以上追求はしなかった。舞歌から本音を聞き出すのは難しい。何よりもそれを聞き出したところで、どうにもならない。

「夏祭りがダメなら、くるみわり園の手伝いだけなら？子供と遊ぶだけだよ？」

「もつと嫌ですよ」

舞歌は嫌そうにしかめた。

「えー、楽しいよ？一緒にやろうよ。子供と遊ぶのは癒されるよー」  
子供らしからぬスキンシップをしてくれる子供とか、就職させようと迫られなければ楽しくて癒されるよー。

「子供と遊ぶのなんて楽しくもなんともないですよ。我が儘でうるさくて、よくあんなのと一緒にいられますね。尊敬しますよ」



「そんなに嫌う事ないと思うけど……」

まあでも、三途さんや水無みたいな人は、子供の純粹さは苦手なのかな。と、神無は苦笑い。

「というか、くるみわり園ってあいつが手伝ってるってことじゃありませんでしたか？」

「うん。そうなんだけど、春風さんがちょっとあれだから、ピンチヒッターで手伝い中何だけど……ちょっと色々大変でさ」

今度は神無がほお杖をつき、外を眺めた。疲れきった人間が浮かべるアンニュイな表情で、ふつ。と、悟ったような笑みももらす。よっぽど苦労してるんだな。と、舞歌は思ったが、手伝うのは嫌である。

「断ればいいんですよ。あんな奴のために神社さんがそこまで頑張る必要ないですよ」

「んー、春風さんのためだけでもないからね。断れないかなあ……いや、働くとか、泊まり込みとかは断りたいんだけどね……」

「全く、水無さんといいあなたといい。優し過ぎるんですよ。そんなんだからあいつが調子乗るんですよ」

「三途さんは厳し過ぎるよね」

せめて、名前で呼んであげればいいのに……。と、神無は苦笑い。

「私の態度が正しい態度ですよ。あの馬鹿、手錠とか持つてるんですよ?」

「て、手錠?」

それは笑えない!

「おもちゃのだよ、ね?」

「いえ、本物でしたよ。びくともしませんでしたから」

「使われたの!?!」

驚愕の事実である。

「ええまあ、色々あって……思い出したくもないですけどね」

思い出してしまった舞歌は苦虫を噛んだような顔になり、机を叩いた。よつぽどなのだろう。神無はそつとしておく事にした。

「えっと、それでさ……」

とりあえず、話題を変える事に。しかし話題が思いつかない神無である。あまり舞歌と一対一になる事はないので、話題が難しいのだ。実はまだ本題があるのだが……もうワンクッションくらい欲しいとこだ。

「何か他に頼みたい事があるなら、何でも言っして下さい」

「あー、そうだね……あつ、怖い話」

「怖い話？」

「うん。怖い話が好きなきがいてさ。なんかオススメのホラー本ないかな」

「それなら、これをどうぞ」

舞歌はうたた寝に入る前に眺めてた本を、神無に手渡した。

「百物語の形式ので、まあまあおもしろいですよ。短いですし」

「へえー……おもしろそうだね」

「シリーズで十冊出てて、それは五冊目です。他のも、持ってきますか？」

「後で場所教えてくれればいよいよ。それよりさ、三途さんもう昼食食べた？」

「まだですけど」

「それならさ……一緒に食べない？その、ファミレスとかでさ」

神無は少し、緊張した様子で舞歌を昼食に誘った。

「ファミレスというところ……ファミリールレストランの事ですか？」

舞歌は若干、声のトーンを落とした。

「うん、そう……ファミリレストラン」

神無も声を抑え、何か二人で重要な話を話しあっている雰囲気である。

「ファミリレストランですか……私、行った記憶がないですね」

「私も、友達と一緒に行った事ないから……ちょっと緊張するかも」

舞歌と神無は真剣な面持ちで、ファミレスについて情報交換を行う。

「ファミリレストランって、ハンバーグとか売ってるところですよ  
ね」

「うん。他にも、パスタとか海鮮丼とか、何でもあるよ。それに、  
ドリンクバーで、ジュースとか飲み放題だよ。私、使った事ないけ  
ど」

「ドリンクバーですか……聞いた事がありますよ。確か、そう……  
別名、楽園と呼ばれているらしいですね」

「うん。それに、デザートとかもたくさんあるよ。ケーキとか、パ  
フェとか、」

「アイスクリームとか」

「クレープとか……も、あるよ」

「……神社さんが連れてってくれるなら、喜んで行きましょう」

「ありがとう。三途さんがついて来てくれるなら、私も心強いよ」

「よろしくお願いします」

「いちいち」

神無と舞歌は握手を交わした。

こうして二人は、緊張しながら、家族ではなく友達同士で利用するファミレスに、向かったのだった。

#### 4・1・ファミリーではないけれど（後書き）

どうも。ドリンクバーではとりあえずメロンジュースを飲む貧乏性の私です。

というわけで、神無の電撃訪問編が始まりました。よろしくね。

#### 4 - 2 ・建前と本当の理由

ピンポーン

「む……また猫ですか」

巡が帰省の準備をしていると、チャイムが鳴った。どうせまた、隣室の猫猫子猫とかいうふざけた名前のふざけた奴だろう。

無視してもいいのだが、帰省する前に会つといてやるか。この前もらった美味しいチョコレートを、今日も持参している可能性もあるし。そろそろおやつにしてもいい時間だし。と、考えた巡は荷物整理の手をとめる。

ピンポーン

「はいはい、今開けるですよー」

スタタター。と、玄関へ行き、ぱっぱとカギを開け、ドアをオープン。

「こんにちはわ」

ドアの向こうには、笑顔で手を振る神無がいた。

「……………」

巡はとりあえずドアを閉めた。カギも閉めた。そして首を傾げる。あれ、私まだ幻覚を見る精神状態だったかな。

ピンポーン

またチャイムが鳴った。また開けた。「こんにちは」またいた。また閉めた。

「……いやいやいや」

巡は一人、いや、ありえねえですよねえ。と、両手と首を振る。

ピンポーン

三度目である。巡はチェーンをかけたまま、恐る恐るドアを少し開けた。

「こんにちは」

ドアの隙間からはやはり神無の姿が見えた。

「……お前、本当に神無ですか」

「そうだけど……あれ、フルネームはやめたの？」

「友達は下の名前で呼ぶ事にしたのです」

「そうなんだ。まあいいや。入れてよ」

「……合言葉を言えます」

「山」



「川です」

「はい、オツケーでしょ？」

「うむ、オツケーです……です？」

なんか違う気がしたが、まあいい加減入れてやる事にした巡。いきなり神無が現れた動揺から立ち直ったという事である。

チエーンを外し「どうぞです」と言って、ドアを開け、招き入れると、神無は「ありがとう」と言って、「あ、これお土産のロールケーキ」と、巡に、二つ持っていた紙袋の一つを手渡した。

「おー、ありがとうございます。ちょうど小腹が空いてたですよ。早速食べようです。どうぞ上がれです」

「ん、ありがとう」

ニコニコ笑いながら神無は後ろ手でカギを閉めた。

潜入成功である。手錠に気をつけて、ミッションを完了させる。

「それで、急に来てどうしたんですか？」

ロールケーキを切り、飲み物を用意したところで、巡が神無に聞い

た。

「というかそもそも、お前、私の家知ってたですか？」

舞歌と水無と火無は教えたが、神無に教えた覚えはない。

「三途さんに聞いたんだよ」

ロールケーキをフォークで切り倒しながら、神無は何でもないように答えた。

「あれ、お前、舞歌の携帯番号知ってたですか？直接会ったですか？」

「うん、さっき図書館で会ってきたとこ」

「舞歌にも会って来たですか？」

巡は驚いた。一体何の用だろう。

「何か大変な事態に陥ったから助けて欲しい的な感じですか？」

神無がいきなり訪問して来たのだ。しかも自分だけでなく、舞歌にも。よほどの用事なのだろう。

「うん……私今、大変な事態に陥ってるんだ……」

神無はフォークを置いて、俯いた。とても深刻そうだ。巡は気を引き締めた。

「任せろです神無。私は友達のためなら神様じゃなくても手を貸してやるです」

「本当？」

「本当です」

「本当に本当？」

神無は俯いたまま、ちらつと巡を見た。

「本当の本当です。私を信じろです。さあ早く悩み事を言ってみるです」

巡は自分のない胸を叩いて、任せておけアピール。それを聞いて神無は、ニツコリ笑って巡に悩みを言った。

「実は、くるみわり園のお手伝いが」「あ、ロールケーキ美味しいです!!」

巡はロールケーキを口に放り込んで、神無の相談事を途中でキャンセルした。

「……春風さん」

「いや、本当に美味しいですね。これどこで買ったのですか？」

「はーるーかーぜさん？」

「残念、今の私は夏風邪です。ゴホゴホ。ちょっともうお暇させて

いただきます」

「お暇つてここが春風さん家でしょ！もう無理だつて私！」

神無はテーブルに拳を振り落とした。テーブルから離れようとしてた巡ビツクリ。冷や汗たらり。

「元気そうじゃん春風さん！もう私、ピンチヒッター下りてもよくない！？」

「お、落ち着くですよ神無。落ち着いて話そうです」

「なら、春風さんもはぐらかさずちゃんと応対するように」

「すみませんでしたです……」

巡、反省。

「全く……春風さん、私が本気だという事をわかって欲しいな」

神無はロールケーキをむしゃむしゃ食べながら、全くもつ。

「電話じゃ、切られちゃうだろっからわざわざこっつやって来たんだからね。逃げれると思わないように」

「はい、すみませんでしたです……」

巡は怒られ、しょんぼりしながら麦茶を飲む。

「で、どうなったの？」

「何がです?」

「だから……春風さんの悩みは解決したの?」

「です、完璧です。そもそも答えは最初からわかってたですからね。それを認めれるかどうかって話でしたから」

「そっか。神様はもうやめたって事でいいの?」

それが答えだと、神無は知っていた。

「固執するのをやめた。って感じですよ。神様を目指さない私を私は信じてやる事にしたですよ。神様なんて指針がなくても支柱がなくても、私はきつと、これまで通りにやれるです。そんな私を、これからは友達としてどうかよろしくです」

巡は照れ笑いを浮かべながら、頭を下げた。何だか改まって友達としてとか言つと、恥ずかしい。

「うん。春風さんは春風さんだからね。こちらこそ、よろしく願います」

神無も丁寧に頭を下げた。顔を上げて目が合い、互いに笑う。いい空気だ。というわけで。

「じゃあ今週末のお祭りの手伝い、春風さんも出来るよね」

ニコッ。

「それは無理です」

ニコッ。

「何で!？」

「いや、ほら、まだ月読達に会うのはちょっと怖いっていう感じですか?」

「断言してよ断言……もう無理何だってばあ」

神無はぐったりと、机に突っ伏した。おお、あの神無がここまでとは。と、巡は驚く。

「そんなに疲れたですか?」

「ああうんなんかね……しんどい」

「確かにしんどい時もあるですけど、楽しくないですか?お前ならしんどくても何だかんだで楽しく出来ると思ってたんですけど」

「いや、楽しいよ?らんちゃんとかビーズで遊んだり、さえちゃんとかくれんぼしたり、月読ちゃんと命ちゃんとかに本を読んであげたりとかさ……でも、かなちゃんと真奈美先生がさ……」

「真奈美はどうせ修道服とか働かないかとかでしようけど、かながどうしたんです?今は普通のいい子じゃないですか」

どうしてかなちゃんが問題児みたいな言い方をするか不思議な巡。

「……ふっ」

神無は顔を上げ、巡を一瞥し、悟ったような笑みをもらした。知らぬが仏、か。

「な、何ですか。かなに何があつたのですか!」

「知りたいの?」

「知りたいです!」

巡は好奇心旺盛である。

「実はね……」

「ドキドキ、です」

「まあ、教えないけど」

「なら何故溜めたのですか!」

「なんとなくだよ!」

「お、おう、なら仕方ないです……」

なんか久しぶりに会った神無は一味違った。成長したのか、鬱憤が溜まりに溜まっているのか。

「それで、本当に無理なの?」

「む、むー……だから、月読達に嫌われかもしれないと思うんですけどね……」

「それ、嘘でしょ」

神無は麦茶を飲みながら、さらっと嘘を指摘した。

「う、嘘じゃないですよ？」

「嘘じゃないけど、一番の理由じゃないでしょ」

「……何でわかるですか」

「なんとなく。納得出来ないから、そうかなくて。違った？」

「……お前には敵わないですね」

はあ。と、巡は息をつく。

「実家に帰るんですよ」

「それは聞いてるよ。でも、何も今じゃなくてもいいでしょ？お祭りが終わってからもいいじゃない」

「お墓参りです」

「それもお盆でいいじゃない」

「……なんか意地悪ですね」



「春風さんが上辺の理由を言うからでしょ」

「だから、何でわかるんですか……」

「だから、なんとなくだつてば」

クスクスと笑う神無。肩を竦めて諦める巡。

「しばらく、自分のためだけに時間を使いたいんです。月読達に会うと、どうしてもあいつらに時間を割く事になるですからね。それが嫌なわけではないですけど、今はやりたくないです。だからお前にもう少しやってもらいたいです。我が儘ですか？」

「別に、自分のやりたい事をやりたいなんて当然な事だよ。わかりました。それなら納得して、もう少しがんばるね」

「あ、ありがとうございます」

案外すんなり納得してくれて、巡は少し拍子抜けした。

「……お前、最初から私が手伝いに来る事はないだろうと思ってたんです。本気とか言つて、本気で私をくるみわり園に連れてく気はなかったわけですか」

ニコニコとロールケーキを食べる神無に、巡は聞いてみた。

「ん、まあ、多分ダメだろうなとは思ってた。逆に、わかったです！任せるです！とか言われたらどうしようと感じました」

「だからといって、舞歌にも頼むのはどうかと思うですよ」

あいつが手伝うわけがない。

「まあね。だから、んー、まあ察してよ」

神無は恥ずかしげに笑った。

「ふむ……………あ！つまりそういう口実で久しぶりに顔を見に、遊びに来たわけですか！愚痴ったり相談事というのは建前ですね！」

神無の訪問の本当の理由に気付いた巡。顔が輝く。カワイイ奴め。

「大声で指摘されると恥ずかしいんだけど……………」

神無は赤くなつた顔を、手で仰ぐ。自分が会いたいから会いに行こうなんて、考えてもやった事はなかったから、実はずっと、緊張していたのだ。

「神無らしからぬ行動ですが、いい傾向じゃないですか。お前ももっと我が儘にならないとダメだと常々思ってたですよ。いやあ、さすが私。くるみわり園にお前を放り込めば、そういうのが育つと思つてたんですよね」

「それはどうも」

あの場所では、ちゃんと自分の意見を言わないと、自分のやりたい事をやらないと、どんどん大変な事になる。神無は身をもってそれを知っている。

「この後は、水無の家に行くですか？」

「うん。水無ならもしかしたら、本当に手伝ってくれるかもしれないしね」

そのためのロールケーキも準備してある。

「水城火無がいなかったら間違いなく手伝ってくれると私も思うですよ」

「うん、私もそう思う……まあ、そういう事だから。ロールケーキ食べたらずくお暇するよ。準備とか、忙しいんでしょ？」

「別にゆっくりしていけますよ。ゲームとかして遊んでください。この前、舞歌来た時やって楽しかったですよ」

「三途さんはつまらなかったと言ってたけどね」

「そんな事言ってたですかあの野郎は！次来た時はこてんぱんにしてやるです！」

「もう二度と行きたくないと言ってたけどね」

「そんな事まで言ってたですか！何故一緒に来なかったですか！？」

「んー、誘ったんだけど、吐き捨てるように行きませんよって言われた」

「……あいつ、本当に私の事嫌いなんですかね」

巡、しょんぼり。

「そんな事ないと思うよ？昼食の時も、春風さんの話が一番盛り上がったし」

神無のフォロー。もちろん、舞歌は巡に関して否定的な事ばかり言っていたわけだが、本当に嫌いならあそこまで話さないだろう。

「……ちょっと待つです」

しかし、神無のフォローは逆効果だった。

「お前今、昼食……と、言ったですか？」

「う、うん。言ったけど？」

巡の雰囲気が変わったのを敏感に察知した神無。何か地雷を踏んだ気がする。

「それは、コンビニで買ってどっかで食ったという意味ですよね……？」

「えーっと……ファミレスだけど」

「もちろん舞歌は、最初、嫌がったですよね？」

「……あ、このロールケーキは駅前の」「やっぱりあいつは私の事が嫌いなんですよー！！」

巡は泣き崩れた。

「違う違う違って！ほら、あれでしょ！？春風さんは自宅に招こうとしたんでしょ！？だから嫌がったんだって！最初からファミレスとか言ったら多分平気だったんじゃないかな！？」

「……本当にそう思うですか？」

「う、うん。本当にそう思うよ？」

「本当の本当ですか？」

巡は、若干涙目で神無を、じーっと見た。

「……私はそろそろ」「ほれみたことかー！！」

神無は嘘が苦手だった。

「この傷ついた心をお前はどうするですかー！！」

「わ、私のせいではないような……」

「いいやお前のせいです！というわけで遊ぼうですよ。何したいですかー」

巡は残っていたロールケーキを全部口に入れ、立ち上がりゲームの準備を始めた。その姿につきさっきまでの泣き崩れていた面影はない。切り替えの早さがもはや病気レベルである。

「いや、だから私はそろそろ水無の家に……」

もう春風さんとは十分交流したし……これ以上は面倒だし……。

「遊んでくれないと嫌です嫌です嫌ですー!!」

突然巡が駄々っ子になり床を転がり始めた。神無は、この人絶対傷ついてない。と、顔が引き攣った。

「遊びたい遊びたい遊びたいですー!!」

「わかった！わかりました！もう、ちょっとだけだからね」

「やったですー!!」

わーい。と、両手を上げて喜ぶ巡に、神無は笑顔を向けるのだった。その笑顔が、神無が子供達に向けるのと同種の笑みだという事に、果たして巡は気付いているのだろうか。

#### 4・2・建前と本当の理由（後書き）

春風巡さんは嘘泣きが出来る大人の女性です。

はい、リピートアフターミー。

春風巡さんは嘘泣きが出来る大人の女性です。

はい、そんな感じですよ。

#### 4 - 3 ・蝋燭の火が一番輝くとき

夕方。その日水無は、久しぶりの危機に陥っていた。

「待て、落ち着け。私達は話し合うべきじゃないか？」

「そうですね。話し合うべきですね」

「わかってくれて嬉しいよ」

「私も嬉しいです」

「というわけで、まずはハサミを置こうか。話し合いはそれからだ」

「何を言ってるんですか。まずは切ってからですよ」

「だからお前は何を切る気なんだよー！！」

「まずはその喧しい舌ですかね」

「私は舌切り雀か！！」

「舌切り雀なら切っても平気ですよね」

という感じで、久しぶりに火邪に脅されていた水無。ハサミを持った火邪とテーブルを挟んで睨み合い。どうやって切り抜けるべきか、必死に頭を巡らせていると。

ピンポン



このタイミングで来客。水無は、ラッキー！と、心の中でガッツポーズ。

「火邪さん火邪さん。今の聞いた？」

「そんな当たり前な事聞くなんて、まずは耳からですかね」

「来客という事で、ちょっとタイムね。目を離した隙に襲うとかなしだからね」

「わかりました。姉さんの期待にしっかり応える事にします。となるとやっぱりまずは耳ですね」

「そういうフリじゃねえよ！」

「やっぱりまずはその舌ですか」

「いいから、ほら、また鳴った。タイムな、タイム」

「どうせ宗教とかネットとかですよ。それともあれですか。私よりもそういう人達と話したいと。そうですか、わかりました。やります」

「違うわボケ！いいからちょっと待ってて下さいお願いします！」

水無は火邪から目を離さずに、ゆっくりと部屋の出口へ移動。そしてそのままやはりゆっくり台所を移動。火邪はハサミをくるくる回しながらついてくる。

「いいな……お前、背後からいきなり襲うのはなしだからな」

「わかりましたからさっさと外の奴、追い返して下さい。チャイムがうるさいです。不愉快です。姉さんに八つ当たりしたいです」

「はいはい……」

水無は、大丈夫そうだと判断し、火邪に背を向ける。

今だにチャイムを鳴らし続けるとは、しつこそうな人だが、まあ、ドア開けたら後ろにハサミ持った女がいるわけだから、追い返すのは楽だろう。ん、楽じゃダメなんじゃなかるうか。時間稼がないといや、しかし。と、考えながら水無はカギをあけ、ドアを開けた。

「こんにちはわー」

そこには笑顔で手を振る神無の姿があった。

「……」

水無はとりあえずドアを閉めた。カギもかけ直した。そして腕を組み、おやー？と首を傾げる。

「姉さん、今の神社さんですよ。何で閉めたんですか。頭蓋骨切り取って脳みそ交換した方がいいんじゃないんですか？」

火邪はそう言って、水無をどかしてドアを開ける。

「「じんに」「切られたくなかったら早く入って下さい」「ちわー……」

神無はいきなりハサミで脅され、笑顔が固まった。

「……んー、まあ」

そして水無はそんなやり取りを尻目に、よくわからんがラッキー。という結論に達していた。

「で、急にどうしたの？」

神無からいただいたロールケーキを切りわけ、飲み物を用意して、水無は神無に尋ねた。

「あ、うん。その」「私を見ないと切りますよ」「はい、すいませ」「口を開かないで下さい。舌を切りますよ」

「……」

神無は来た用件を言おうとしたが、残念。隣にぺったり座った火邪にハサミ（腹部に押し付けられています）で脅され無理である。水無がロールケーキの準備をしている間も、ずっとこんな感じで、神無は困っていた。

「ふむ……」

神無は恐怖で、火邪は緊張で、固い表情のまま見つめ合う二人を見ながら、水無はロールケーキを口に運ぶ。うまい。

久しぶりにアルコール以外で、ちゃんとした理由で現れた火邪は、暴力度が高かった。神無に会う前というか、実家にいた時の不安定な状態に近い気が、水無にはしていた。張り詰めているというか、強迫的というか。先月、そう、水無の誕生日前までの火邪ならば、今は神無と会話していたはずだ。ただ、ハサミで脅して見つめ合うだけなんて事はなかったはず。

火無の鬱憤がよほど溜まっていたのか、それともただ単純に久しぶりに会った神無とどう接すればいいかわからないのか。

いや、それともこれが、『水城火無のための人格』としては正しい行動なのか？

「……………」

神無が先程からちらちらと、水無に視線を送ってくる。その度にハサミが鳴る。助けて欲しいという気持ちは痛いほどわかるが、今の状況は、水無にはどうする事も出来ない。というわけで、一人ロールケーキをぱくつく水無であった。美味しい。

「……………今日は何しに来たんですか」

水無がロールケーキを食べ始めて数分後。火邪がそう聞いた。火邪が喋ってくれて一番安心したのは神無だったろう。まばたきしか出来ないのはつらかったに違いない。

「う、うん。水無にちょっと頼み事があってね」

「頼みごと？」

水無は驚いた。神無がそんな、急にやってきてまで頼みたい事なんて、想像も出来ない。

「頼まれてくれる？」

「内容によるけど……どうしてもってなら、別にいいよ」

内容も聞かず、とりあえず水無は請け負った。そうした理由は、何か大変な用事なのだろうと思っただけ以外にも、火邪から助けてくれたという借りを返すためという理由もあった。

「ダメ!!」

しかし、火邪がそれを拒否した。強く、悲痛な叫びのように、否定した。

「え？」

「喋らないで下さい帰らないで下さい触らないで下さい話しかけないで下さい嫌わないで下さい切り殺しますよ!？」

火邪の様子は明らかにおかしかった。苦しんでいるように顔を歪ませ、ハサミを持つ手は震えている。

「か、火邪さん？」

「喋るなど言ったのに死にたいんですか!?!」

「火邪……?」

「姉さんも黙ってて下さい！殺されたいんですか切られたいんですか愛されたいんですか!？」

「……」

神無も水無も黙った。二人共、刺激しない方がいいと判断したのだ。火邪は目の前にいる神無を睨みながら、顔を歪ませる。ハサミを持つ手だけでなく、全身が小刻みに震え、何かを必死に我慢しているように、水無には見えた。

「……っ」

水無は舌打ちしたいのを必死に我慢していた。ぬかった。どうせ、神無を傷つける事はないだろうと放置していたが、今の火邪の様子では、どうなるか全くわからない。ハサミを持つ手が、段々と、上がっていくのを見て、このままだと本当にやばいかもしれないと水無の焦燥感が膨れ上がる。

水無よりも焦るべき神無が、焦燥や恐怖の表情ではなく、逆に、焦りを一切感じない微笑みを浮かべているのも、水無の焦りを増大させる一因だった。あいつ、受け入れる気じゃないだろうな。受け入れられると思っただけじゃないだろうな。

その緊迫した空気は、唐突に終わりを迎えた。

「……寝ます」

火邪の口から出たその単語がどういう意味か、水無には一瞬わからなかった。

「神無！」

火邪が突然、神無に倒れこみ、水無は思わず悲鳴を上げた。

「大丈夫だよ」

神無は水無を安心させるように微笑み、ハサミを見せた。血はもちろんついてない。水無は安藤のため息をついた。

「水無、火邪さん運ぶの手伝って」

「それはこっちが頼む方だよ」

火邪は本当に眠っていた。いや、あの早さは眠ったというより、気を失ったの方が近いが、神無と水無は協力して火邪をベットに運び、ようやく神無も水無も、一息つけた。

#### 4・4・対等な友達・不平等な姉妹

「悪いね。せつかく来てくれたのに、こんな迷惑かけちゃってさ」

「いいよいいよ……まあ、もう一度同じ状況にはなりたくないけどね」

神無は肩をすくめて、苦笑いを浮かべた。

「ったく、いきなりどうしたんだよこいつは……あ」

水無は気を失っていた火邪、もしくは火無の額を叩くと同時に、気付いた。

「どうして火邪さんが出てきてたの？」

それには気付かず、座って、本日二個目のロールケーキを食べる神無。

「ああうん。ほら、今週末、夏祭りあるじゃん。火無が行きたい行きたいしつくくてさ。で、私はずっと面倒だ面倒だと拒否してて、今日この日、例の魔法の本に全てを託した結果、動くと大変な事になると書いたあったのが引き金で、久しぶりに火邪さんが登場しました」

「なるほどね」

ふむふむ。と、納得したように神無は頷いた。



「あのさあ、神無」

「なにさあ、水無」

「さつきお前さ、火邪が変になってた時、笑ってたでしょ。あれ、  
どどういう事よ」

「いけなかった？」

「異常ではあった。もう少しあそこは焦るべきでしょうが」

水無は問い詰めるように、神無を睨んだ。

「心配してくれたの？」

「そりゃするでしょうが」

「あ、ありがとう」

照れた。

「でも、あれは別に諦めてたから笑ってたわけじゃないし、もう笑  
うしかないという気分だったわけじゃなくて、ただ、微笑んだ方が  
いいかって思ったんだ。そうした方が、助かる気がした」

「気がしたって……何でさ」

「んー……なんとなく？」

「なんとなく？」

水無は呆れた。何だそりゃ。

「あのねえ神無さん？」

「ん？」

神無はフォークを口に入れたまま、首を傾げた。水無はちよつとイラツとした。真面目な話だつっの。

「君はもう少し危機感というか、自分を大切にした方がいいんじゃないかな？さっきの状況、傍からみたらすっごい危なかったからね。神無があのまま刺されてたり切られてたら、私は加害者家族になってたわけだから。そういう事、わかってた？」

「わかってたし、自分を大切にしているつもりなんだけど……どうもあれだね。私と水無で、思った事が違うっぽいね」

「どづいつ事？」

「さっき火邪さん震えてたでしょ。どう思った？」

「どづいつ思ったって……あ、こいつ切るの必死に我慢してんなって思った」

「私は怯えてるように見えたよ」

「……はあ？」

「だからあの時は、安心させるために微笑んでた方がいいなって思

ったの」

「……」

確かに、神無の言う通り怯えていたのなら、焦るよりも恐怖するよりも、笑ってあげた方が、安心させた方がよかつただろうけども。

「怯えてたって……何にどうして」

水無には、怯えているようには思えなかつた。何よりも、怯える理由がわからない。どちらかというところあつちが怯えさせる側だ。

「それはまあ……」

神無は考えるように天井を見上げた。しばらくして、水無を真剣な面持ちで見つめた。そして口を開く。

「わかんないけど」

「わかんないのかよ」

水無は脱力した。

「んー、まあ、なんとなくなくて事で一つよろしく」

「またそれか……何だっけ、なんとなく強化月間中何だっけ？」

笑顔でロールケーキを頬張る神無を見て、やれやれという感じで、これ以上説教みたいな事をするのをやめた水無。自分の勘違いの可能性もあるようだし。とりあえず、ロールケーキを食べて、心を休

める。

「うん。なんとなくね」

「そもそも強化月間って何だよという感じだけど、それはあえて聞かずに、強化月間中である理由をなんとなく聞いていい？」

「理由っていうほどでもないんだけど……お姉ちゃんの『なんとなく』がなんとなく頭から離れないからなんとなくね」

神無は、クスツと笑った。羞恥心をごまかすために笑ったようにも、自分を嘲るために笑ったようにも、水無には見えた。

「お姉ちゃん、ね」

神無の姉、神裂はとても優秀で、完璧で、天才らしい。しかし具体的に、どういう人かは、水無は全く知らない。神無が神裂について語りたがらないからだ。ただ、神無の自己評価の低さと自己主張のなさ、その他色々のコンプレックスの原因が神裂である事は水無にもわかつてはいた。神無が言う神裂しか知らない、そして何よりも神無の友人である水無としては、神裂という人物にあまりいい感情はない。

神無は最近、変わってきている。こうやってアポなしでやってくるなんて、去年、ましてや一昨年では絶対に考えられなかった。そしてきつと、姉に関しても変わってきているのだろう。

どうせ神無の事だから、向き合おうとしているんだろうけど。私なら無視するよなあ、そんな姉がいたら。まっ、お姉ちゃんが好きな神無にそんな事言ったら嫌がられるから言わないけど。と、水無は口―ルケーキを切り崩しながら苦笑する。まあ、自分が積極的にどう

「こうしていい問題ではない。

「まっ、なんとなく頑張れば？」

「うん、なんとなく頑張るよ」

神無はそう答え、フォークを置いた。ロールケーキを食べ終わり、両手を合わせて、ごちそうさまでした。

「じゃ、私はそろそろ帰るね」

「おう。またねーって、違う。まだ帰るの早いでしょうが」

「実は、春風さんのところで時間を取られたから、そろそろ水無の家を出ないとやばい」

全然、帰してくれませんでした。

「巡んどこにも行ってたの？という事は、舞歌のどこにもか」

「よくわかったね」

「駅から図書館近いし。巡と私に会いに来といて、舞歌だけのけ者にするのは平等な神無さんはしないでしょ」

「会いに来たんじゃなくて、頼み事に来たんだから、無理っばい三途さんはスルーしたかもよ？」

「頼み事なんて電話で十分だよ。つまり頼み事があるから来たなんて怪しい話だぜ」

「いや、ほら、私って電話苦手だし、電話だと切られちゃうかもしれないじゃん？」

「電話よりいきなり会いに来るなんて行為の方が苦手ですよ。あの巡なら、頼み事っていえば無下にはしないだろうし、まあ承諾するかはわからないけど、いきなり切るって事はないって。という感じで、電撃訪問してまで頼みたい事なんてのが本当にあるのかも怪しさ爆発だぜ」

「……いつからわかってたの？」

「火無の頭を叩いたとき。電撃的に理解した」

「何でそんなタイミングで！？全く、水無には敵わないね」

神無は、悔しそうではなく嬉しそうに笑顔で、両手を上げて降伏した。

「水無さんの言う通りです。私、久しぶりに水無達に会いたくて来たの、うるうる」

「愛いやつめ。火無の分のロールケーキを食べる権利をやるう、えっへん」

「遠慮します、てへ」

「何ではにかんで断るか意味がわからないぜ、どやあ」

「何で意味がわからないのにとや顔なのかわからない、にたあ」

「何そのにた笑い、こわっ」

水無は手元にあった鈴枕を投げつけた。

「わっ、何これ、鈴が入ってるの!？」

神無はそれをただの枕かなと思いキャッチしたが、キャッチしたら鈴の音がジャランジャランと鳴り響き驚いた。

「そうそう、鈴が入ってるの。凄くない？」

「いや、凄いつていうか……何に使うの？」

鈴がたくさん入ってるこれは、枕にもクッションにも使えないだろう。

「私も買った時は使い道ないと思ったけどさ。これがビックリあるんだよ。ちよつとその鈴枕、火無の上に置いてみ？」

意味がわからなかったが、神無はベットに近づき、水無に言われた通り、寝ている火無の上に置いた。

すると、置く前は健やかな寝顔だった火無が、急に苦しそうな顔になり、手足をバタバタさせ始めた。

「……何これ」

「鈴枕の使い道。火無をおとなしくさせる事が出来る」

水無は何でもないようにそう答え、鈴枕を火無の上からどかした。

すると、火無はまた健やかな寝顔に戻った。

「おとなしかったのが暴れてた気が……いや、それより、あの……  
どういう事？」

「私の勘では、鈴の邪気を払う力に当てられて、邪気まみれの火無  
が苦しみ、力が抜けるという仕組みだね、うん」

「えー……」

そんな事あるわけないでしょ。と、疑いの眼差しな神無。

「いや、鈴にはあるんだよそういう力がさ！火無をおとなしくする  
のに効果は抜群なのがその証明だよ！」

「鈴が魔よけっていうのは知ってるけどさ……火無さんって、無邪  
気じゃん」

水無が好きなだけなので、ある意味無邪気じゃないかな理論である。

「それはない」

きっぱり否定である。

「それもそっか」

さっさと納得である。

「じゃ、私はそろそろ帰るから」



「はいはい、またいつでもおいでー。というか来て下さい。火無の相手だけをして一日が過ぎる日々にはもう飽きた……」

「春風さん家に行ったり、図書館行ったりすれば？」

「どつちも火無のせいで台なしになる予感しかない……あつ、そういえばさ」

神無が靴を履き、もうドア開けて立ち去りますというタイミングで、水無は一応聞いておく事にした。

「結局、頼みたい事って何だったわけ？あるにはあるんでしょ？」

「あー……いや、もういいよ。忘れて」

「忘れるなんて無理よー！」

「昼ドラにはまってるの？」

「火無がああいうの好きなんだよ。いいから、ちょっと試ってみてみ？出来そうなら協力してあげるから」

「夏祭りでき、くるみわり園の出店とかを手伝って欲しかったんだけど。水無、火無さんと行くんでしょ？」

「……行かなきゃダメかな？」

「ダメっていうか……水無にとって、火無さんが出てきたらもう詰みでしょ？二度も三度も、ラッキーは起きないよ。頑張っつてね」

神無はそう言って、手を振り帰っていった。

「よくわかってらっしゃる……」

神無の言う通りなのだ。火邪が出てきた時点で詰んでいる。水無が火無と夏祭りに行く事は決定している。

『火邪』とは、そういう存在なのだ。誰かにとってのアイスクリームやクレープのように、水無にだけ、百発百中の一撃必殺が、『火邪』なのだ。卑怯な存在だ。アイスクリームやクレープとは違って、火無しか使えないのが卑怯さを跳ね上げている。

出てきたら詰みという『火邪』だが、今まで、『火邪』が出てきて火無の思い通りにならなかった事はある。それは、水無以外が『火邪』と対峙した時だ。神無をアイスクリームで釣ろうとしたようなもので、それでは百発百中ではない。

残念ながら、今回はそれが出来そうもない。今日はラッキーな事に神無が来てうやむやになったが、神無が説得してくれたわけではない。明日にも、いや、もしかしたら起きたらまた、『火邪』が出てくる可能性もある。そうしたら、どうしようもない。水無は『火邪』を説得する事は出来ない。何故なら『火邪』は、水無にだけは暴力を振るうのに躊躇しないから。水無にだけは、それこそ腕を折るくらいの暴力を振るえるから。だから、水無は『火邪』の、火無の要求を飲むしかない。そういう仕組みになっている。

「……………」

火無を見て、水無は思う。

忘れちゃいけない。最近出て来なかったし、神無や巡のおかげで退けられていたし、アルコールというイレギュラーで出たりしていたから忘れそうになっていたが、『火邪』は、火無が無意識に作り出

した私に対する絶対の切り札なのだ。火無に対しての同情はともかく、『火邪』に同情なんて、間違ってもしちやいけない。

「ああもう……本当に腹が立つ。こいつがそれを知らないってのが最悪だ。こいつに当たる事もできやしない。全く、本当に……ふざけた妹だ」

いい夢でも見ているのか。にやけた寝顔を浮かべている火無に、『何も知らない火無』に、水無は愚痴った。そして、鈴枕を火無に置いた。

効果は抜群だ。

#### 4 - 4 ・対等な友達・不平等な姉妹（後書き）

何だかこの章は、サブタイトルがいい感じですよ。ピッタリなサブタイトルをつけれると、気分がいいぜ。自己満足って、大切だよ？

#### 4 - 5 ・天使＋悪魔Ⅱ小悪魔

「こんばんはー」

神無がくるみわり園の玄関で、挨拶をすると、食堂から真奈美先生が出てきた。

「こんばんは。あれ、神社さん。今日は来ないはずでは……あ、修道服を忘れていったのを思い出したんですね。ちょっと待ってて」

「違います。近くまで来てたので、明日からの事を言っておこうと思ひまして。だから違いますって！もう修道服着ませんからね私！」

神無は、話しを聞かずに真奈美先生が事務室に走って行くのを慌てて止める。しかし真奈美先生は止まらなかった。

「やっぱり神無姉ちゃんだー！」

「ホントだー！」

神無が靴を脱ぎ、真奈美先生を追いかけようとすると、声を聞きつけたのか、月読と命が食堂から出てきた。

「こんばんは。夕ごはん食べてたの？」

靴を揃えてから目線を合わせてご挨拶。真奈美先生は後回しだ。

「こんばんわー！夕ごはん食べてたの！」

「今日はハンバーグなの！」

「僕達が作ったんだよ！」

「神無お姉ちゃん今日はどうしたの？」

「泊まつてくの？一緒にねよ！」

「ちょっと用事があつて来たんだよ。今日は泊まつてかないよ。またいつかね」

「「えー！」」

月読と命が、不満げな声を出した。と、真奈美先生が事務室から出てきた。

「こら、月読、命。ご飯を食べ終わるまで席を立たない。戻りなさい」

「怒られたー」

「はいい……」

月読と命は、しょぼーんな様子でとぼとぼ食堂へ戻っていった。

「全く……はい、これ」

「遠慮します」

真奈美先生は、さも当然のように修道服を神無に手渡してきたが、神無は丁重にお断りした。「カワイイのに……」と、真奈美先生は、修道服を見て呟いた。

「真奈美先生？」

「あ、着たくなりました？」

真奈美先生の顔が輝いたが、「違います」

「そうですか……素敵なのになぁ……」

「……」

こ、この人、子供がいないとホントにただの修道服マニアだ。と、神無は苦笑しながら思った。

「それで、どうしました？」

真奈美先生はしばらく、ちらちら期待するような目で神無を見ていたが、笑顔で受け流す神無を見て、ちっ、ダメか。と、判断したのか、真面目モードに移行した。

「はい、今週末の、というかまあ明後日の夏祭りの事何ですけど」

「あ、決めてくれましたか？」

「はい」

神無は、夏祭りのお手伝いは、とりあえず保留という事にさせてもらっていたのだ。

「お邪魔じゃなければ、お手伝いさせていただきます」

神無が頭を下げると「こちらこそよろしくお願いします」と、真奈美先生も頭を下げた。予定調和のような流れであった。真奈美先生も、神無が断る事はないと思っていたのだろう。神無自身も、断る

気はなかった。

「友達の方はやっぱりダメでした」

実は神無は、真奈美先生に、友達にも声をかけてくれたら嬉しいです。ほら、あの茶髪の子とか。と、頼まれていた。水無と舞歌に今日アポなしで頼みに来たのは、そういう理由もあっての事だった。

「そうですか、仕方ないですね。ああ、そういえば、今日、春風さんから電話がありましたよ」

「え、そうなんですか？」

「ええ、色々喋ってましたが、ようは、あまり神社さんに仕事回して疲れさせんな。というような電話でしたね」

「そ、そうですか……」

いや、春風さんのせいでもあるんだけど私が苦労してんの。と、自分を棚に上げたような巡に苦笑い。

「よくあんな人と友達でいれますね。私は春風さんが苦手なので、尊敬しますよ」

本人には内緒ですよ。と、真奈美先生は笑う。

「いや、まあ、ああいう人ですけど、春風さんは優しい人ですよ？」

神無のフォローしきれていない発言である。



「それはもちろん知ってます。子供達もとても懐いてますし、月読と命も、久しぶりに話せて嬉しそうでした。私も、早く、戻ってきてくれるのを待ってます。まあ、苦手ですけどね」

真奈美先生は、クスクス笑った。巡の事が苦手だけど、嫌いではないようだ。それがわかって、神無も微笑む。

「神無せんせー」

玄関で笑い合っていると、食堂から今度はかなちゃんが現れた。

「こんばんは。お弁当ついてるよ?」

かなちゃんのほっぺにはご飯粒がついていた。神無は屈み、それを取って食べると「ありがとうございます」と、かなちゃんは、はにかみながらお礼をいった。

「かな、もう食べ終わっただの?」

「はい、食べ終わりました!」

「そう……」

真奈美先生が不思議そうにかなちゃん、そして神無を見る。神無は微笑みながら、その件に関しては私は関与していませんし、何の事やら。と、首を傾げる。

「神無先生、今日は泊まってくんですか?」

「ううん、今日はちょっと寄っただけだから。もう帰るよ」

「もう暗いから帰ると大変な事になります」

かなちゃんの前言である。真奈美先生が訝しげに神無を見る。神無は外を見る。

まだ外は暗くない。秋や冬ならもう暗い時間だろうが、夏である今は、そろそろ、夕方かな？程度の時間である。

「まだ暗くないから大変な事にはならないよ」

「でも、神無先生のお家につく時は暗いので大変です」

かなちゃんは心配そうな顔で、神無ではなく真奈美先生を見つめた。

「だから今日は帰らない方がいいと思うんです」

「……それもそうですね。泊まってきましたか？」

「……いえ、今日はもう帰らせてもらいます」

真奈美先生を味方にして攻めてくるとは、恐ろしい子。と、神無は内心でかなちゃんに怯えていた。

「今日はもう帰るよ。明日は泊まるつもりだから、ね」

我慢してね。と、神無がかなちゃんの頭を撫でると、かなちゃんはちよつと不機嫌そうな顔をして「わかりました……」と言って、スカタターっと食堂へ行ってしまった。ホッと一安心。

「かなと何かありましたね？」

「と、特に何もありませんよ。」

真奈美先生からズバツと指摘され、神無は動揺した。

「何かあったなら教えてくれませんか。子供達の事は知っておきたいので。」

その動揺を見逃す真奈美先生ではなかった。

「あー……いえ、本当に何もありません、はい。」

神無がそう否定しても、真奈美先生は追求をやめる雰囲気ではなかった。神無は、ど、どうする。真奈美先生くらいには教えてもいいのでは。と、悩んでいると、食堂からまた新たな人物が現れた。

「神無さん、こんばんはー。」

「う、こんばんは……。」

食堂から来たのは桜木さくらだった。何故か修道服を着ていたので、神無は困惑した挨拶をしてみた。原因であるう真奈美先生を見ると、まだ手に持っていた修道服を晴れやかな笑顔で見せてきたので、見なかった事にした。

「似合っのに……。」

という呟きは聞かなかった事にした。

「かなちゃんから聞きましたよー。私にお任せあれです。」

そう言っつてさくらは胸を叩いた。

「え、えっと、何を聞いたんですか？」

「暗い夜道は危ないので、私に送ってもらいたいつて話じゃなかったの？」

「……」

神無は固まった。真奈美先生は「よっぽどですね」と、呆れた。

「……さ、桜木さんは、いつ帰る予定なんですか？」

「私はつららと一緒にだから……」

さくらが食堂の方を見ると、スタンバイしてたんじゃないかというタイミングで、アイちゃんと手を繋いだつららが出てきた。

「あたしはアイが寝てから帰る予定だよ」

つららは話の内容がわかっていたのか、そう言った。

「アイはだいたい八時から九時就寝ですね」

真奈美先生の補足情報。

「じゃあだいたいそんな感じでー。私、はなちゃん待たせてるからー」

バイバイ。と、手を振ってさくらは食堂に戻る。入れ違いの形で神無に近づいてきたつららは、通り過ぎ様にボソツと呟いた。

「さくらの運転スリリング」

「……ハハッ」

神無は、乾いた笑いを漏らした。その呟きもそうだし、食堂からまたやってきたニコニコ笑顔のかなちゃん見て、もう笑うしかない状態になったのだ。

「神社さん、しんどくなったらいつでも相談を。修道服はいつもあなたを待っています」

真奈美先生は神無の肩を叩き、食堂へ行ってしまった。

「神無お姉ちゃん、帰るまで二人っきりで遊びましょ」

笑顔のかなちゃんが、神無には小悪魔に見えた。

#### 4・6・ご注意なさい全てに

「かなちゃんは何して遊んでたのー?」

「ええまあ、色々って桜木さんブレーキブレーキ!!」

「まだ余裕だよー。ほらねー。神無さんは心配性だなー」

「……」

クスクスとさくらは笑うが、神無は笑えない。シートベルトをギュツと掴んで、助けて水無ー!と、心の中で大絶叫である。車間距離をもっと開けて走って欲しいと切に願う神無だった。「っ!」後、急発進もやめて欲しい。

「かなちゃんは、なんか壁を感じるんだよねーっ」と

「も、もっとスピード落としません?」

「えー、十分落としてるよー?」

神無は現在、さくらの車の助手席で怯えている。もちろん、運転しているのはさくらだ。見かけによらず、大変乱暴な運転である。助手席にあまり乗った事がなく、同い年の人が運転してるといふ事だけでさえ緊張して恐怖を感じているのに、この運転は勘弁して欲しかった。

さらにさっきまで神無の後ろに乗っていたつららが「ああ。後部座席はまだましだ」とか、ぶつぶつ言っていたのも追い撃ちだった。神無にしか聞こえない声量で「もう死ねるよねこれ」「これ以外は

本当にいい子何だよ』嫌いにならないでね』『だんだん病み付きになるかもね』『いや。それはないか』と、平淡な声でぶつぶつ言っていたので、神無はジェットコースターとお化け屋敷を同時に味わっている気分であった。

「も、もうこの辺でいいですよ?。」

「遠慮しなくていいよー。私も走るの楽しいしー」

わ、私は楽しくないー!と、叫びたい神無であった。

さくらの車にはナビがついているので、神無が指示しなくてもさくらは車を走らせる事が出来る。それは、夜道で車という事で、神無も道がよくわからないという事から言えばいい事だったが、神無がどれだけ言っても、さくらが目的地まで走らせる事が出来るという点では恐怖であった。

「冰山さんのところで、一緒に下りればよかった……」

まさに後悔先に立たず。つららを降ろしてからの方が、運転が乱暴というか自由になった気がする。

「もう、みんな心配性だなー。ほら、全然大丈夫だよ」

「前を見て!!」

「今のは冗談だよー」

「……」

いや、本当にこっちを向いた時点で冗談ではすまされないよ!と、

叫びたい神無であったが我慢である。今の神無の生殺与奪はさくらの手にあるのだ。今日ほど、家に早く帰りたいと思った日はない神無である。

「んー、なんか喋ってくれない？」

「いえ、運転に集中していただきたいです」

「あんまり知らない人が黙って座ってる方が、集中出来ないよー」

「……それもそうですね」

確かにそれは一理あるな。と、神無は思った。神無としても、無言でこんな乱暴な運転された方が怖い。

「えっと……はなちゃん仲良いですよね」

「うん！もうはなちゃんとは一目見た瞬間に」「前見て信号赤だからブレーキブレーキ助けてお姉ちゃん！！」

「っとー……今のはギリギリだったねー」

危なく赤信号に突っ込むところだったが、急ブレーキが間に合っただけでなんとか止まった。横断歩道の上だけでも。

「……桜木さん」

「う、うん。今のは申し訳なかったです。反省しています。つららと家族以外を乗せるのは久しぶりで調子に乗ってました」



助手席で頭を抱える神無に睨まれ、溢れ出すいい加減にしるよオラに、さくらは冷や汗をかき反省を述べた。

「ん」

と、気まずい空気が車内に流れた時、神無の携帯が鳴った。

「か、神無さん携帯鳴ってるよー。ゆ、ゆっくり行くからねー。本当だよー？だから睨むのやめてくれたら嬉しいなー。ほ、ほら携帯まだ鳴ってるよ？電話じゃないかな？」

「……」

さくらは言った通り、ゆつくりと発進したので、神無はさくらを睨むのをやめ、携帯をポケットから取り出した。

「か、神裂さんの妹なだけはあるなあ……怖かったあ」

プレッシャーから解放されたさくらが思わず呟いたその言葉に、神無はドキッとしたが、まずは携帯だ。そして驚く。電話は姉、神裂からだった。

「……もしもし、お姉ちゃん？」

『ええ、お姉ちゃんだけど。どうしたの？』

「え？」

いや、電話かけてきたのそっちなんだけど……。と、神無は困惑した。「神裂さんからー？」「前、見る」「はい、すみません……」

すでに反省を忘れているさくらを黙らせてから、電話に集中する。

「いや、お姉ちゃんこそどうしたの？」

『あなたが助けを呼んだから電話したんだけど。平気そうね』

「……………」

そう言えば、さっき、思わずお姉ちゃん助けると言ったような、言わなかったような。

「……………凄いねお姉ちゃん」

『偶然よ、偶然。帰りが遅いから電話しただけ。今のは冗談だったのよ?』

普通に考えれば、神裂のそれが正しい。だけど、やっぱり神無は普通には考えれなかった。

『それで、今日も泊まる事になったの?』

「ううん。今、家に帰ってるよ。ちょっと捕まっちゃって遅くなっちゃったんだよ」

かなちゃんという子供にしてやられました。

『』という事は、もう駅に着いて家に歩いてるとこ?迎えに行きましょうか?』

「ううん、車で送ってもらってると」「さくらですよー!お久しぶ

りですー!」

『あらら、その声はさくらさん。そう、さくらさん免許取ったのね』

「……………」

急に大声を出して、姉との電話を面倒な方面にしたさくらを、おいこら。と、睨む神無。「ま、前見てるもーん」と、プレッシャーに耐えるさくら。

『さくらさんと知り合いだったの?』

「う、うん。くるみわり園で、桜木さんもたまに手伝いしてるんだつて。お姉ちゃんこそ、いつ知り合ったの?」

『昔ちよつとね。お手伝いというと、つららさんの関係かしら。わかりました。さくらさんなら安心ね。あの子、法定速度で走るような子だし、事故とは無縁でしょうから』

「え!?!」

神無は驚愕した。あの完璧な姉が、全く的外れの事を言った。信じられない事である。

「……………じよ、冗談だよね?」

『何が?』

「そ、そんな……………」

冗談ではなかったようだ。神無は戦々恐々としながら、前を見て運転しているさくらを見た。

この人は何者なのだろうか。お姉ちゃんの知り合いで、あの完璧で天才なお姉ちゃんが間違った見解を出してしまつような人物。底が知れない。よく考えれば、こんな乱暴な運転で事故らない人が一般人なわけがなかった。いやそもそも、こんな乱暴な運転をする人が普通なわけがなかった。

「気のせいかな失礼な事を考えてる気配が……」

『どうかしたの?』

「う、うん。何でもない」

さくらの呟きは聞かなかった事にして、神無は気を落ち着かせる。

『……もしかして、さくらさんって運転下手なの?』

「あー……うん」

神無は肯定した。神裂のミスを指摘したようで、とても申し訳ない。心はなかなか落ち着かない。

『そう……シートベルトはちゃんとしてる?』

「うん、もちろん」

してないと生きた心地がしない。していても生きた心地はしないけど。

『さくらさんに、事故を起こしたら許さないと伝えといて』

「あー……お姉ちゃんが、事故を起こしたら許さないって」

「ラジャーです！」

さくらは神無に笑顔を向けて、敬礼ポーズで任せなさいだったが「前を見て！」と、神無は絶叫である。

「ああもう……先に謝っておくね。ごめんなさい」

「んー？」

「あなたはバカだ!!」

「ふえ!?!」

そして我慢の限界である。神裂のミスで心の許容量が減少していたためである。

「前を見て運転しないなんて何を考えているんですか！」

「ち、違うんだよ。これは、壁がある神無さんと仲良くなるためにわざとやったんだよ？その結果、ほら、神無さんが私に怒りをぶつけれるくらいフランクに！」

「命をかけてまでやる事ではないよね!?!」

「かしらあ……」

「落ち込んでるのかふて腐れてるのか!？」

『神無』

「あ、ごめんなさい！」

さくらに今まで抱えていた恐怖感を怒りに変換してぶつけていて、あろう事が神裂を忘れていた神無。慌てて謝罪である。

『今すぐ車を降りなさい。私が迎えに行くわ』

「え、いいよそんな。大変でしょ？もうすぐ着くから平気だよ」

もう後は道なり。二キロもない。

『いいから降りなさい』

「……………わかりました」

神裂の力強い言葉に、神無は従う事にした。従うしかなかったともいえる。

「ごめんなさい桜木さん。もうここで降りしてくれる？」

「んー……………仕方ないなあ。神裂さんって、そういうところあるよねー」

神裂の声は聞こえていないはずだが、さくらは神裂が何を言ったかわかっているようで、おとなしく路肩に車を停めた。

「色々ごめんなさい。ありがとうございます」

「いいよー。また明後日ねー」

さくらは笑顔で手を振り、車を発進させた。もちろん、急発進であった。神無は苦笑した。スピード狂だな、あの人。

『神無、今どこ』

「今は、ほら。家の近くの古本屋のとこ」

『迎えに行くわ』

「いってば。歩いて帰れるから」

『そう？気をつけてね』

「うん、じゃあね……はあ」

神無は電話を切って、夜空を見上げてため息をついた。

なかなか刺激に溢れた疲れる一日だった。

今夜は綺麗な三日月だった。

4・6・ご注意なさい全てに(後書き)

はい、という感じで次回から夏祭りです。

神無主体のストーリーになる予定です。巡は完璧にお休みタイムです。

次回もよろしくどうぞ。



## 5 - 1 . 今回の祭りの組み合わせ

くるみわり園がある胡桃割市は、ひょうたんの形をしている。夏祭りはその、上の部分を使って行われる。街の一角を囲うように道路が歩行者天国になり、そこに屋台やらが出来るという大変大きな祭りとなっている。祭りの最後には花火が打ち上げられ、それを見に遠方からも来るとか来ないとか。

二時半には歩行者天国になり、そこに屋台が並び、三時から九時まで祭りが行われている。人が増え、活気が出てくるのはやはり日が落ち夜になってからだだが、日中も、神輿や近隣の小学生が踊り歩いたりして盛り上がり、十分楽しめる。

「皆さん、準備お疲れ様でした」

「疲れたー」

「終わったー」

「遊ぶー！」

園長先生の労いの言葉を受けて、子供達が各々の感想を述べて拍手をする。あまり対した事はしていないが、神無も達成感を感じつつ子供達と一緒に拍手をする。

今、神無とくるみわり園の子供達と関係者がいるのは、自然公園近くの、歩行者天国になっている道路の片隅だ。屋台を張って、売り

物のべっこう飴やビーズのアクセサリーなどを並べてある。

「皆さんのおかげで今年はたくさんビーズ作品が用意出来ました。頑張りましたね」

「頑張ったー」

「疲れたー」

「いっぱい売れるかな」

「神無お姉ちゃんのおかげだねー」

「神無姉ちゃんすごい」

「神無先生パチパチ」

今年の屋台に並ぶビーズ作品は、もはやアートの域に達しているものがある。え、これ千円しない？五百円！？と、驚くようなそれは、子供達が言うように、神無が作ったものであった。みんなに褒められ「あ、ありがとう。でも、みんなが頑張ったからだよ？」神無は照れ笑い。

「それでは、当番さんは残って下さい。それ以外の方は、気をつけて、お祭りを楽しんで下さいね。先生方、よろしく願いますね」

そう言つて、園長先生は園に戻つていった。今日も園に残っている子もいるので、園長先生はそっちの子を見る事になっている。

残ったのは、いつもの幼少組みと、学校の集まりがない小学生組みと、くるみとその他の中学生。真奈美先生とその他の職員。それと

「では、神社さん、桜木さん、つらら。よろしく願いますね」

「はい」

「わかりましたー」

「わかった」

神無とさくらとつららである。この三人で、今日は幼少組みを見る事になっている。

幼少組は、夜に祭りを歩くのは危ないので、日中に回る事になっている。五時か六時くらいまでに戻ってきて下さいと、言われている。現在時刻は三時だ。

「それで、グループ分けですが……」

真奈美先生が、三人の回りにいる幼少組、月読、命、さえちゃん、かなちゃん、あかねちゃん、はなちゃん、らんちゃん、アイちゃんを見て、眉ねを寄せる。このグループ分けが、ちよつとした問題だった。

まず、アイちゃんはつららと一緒に決まっている。はなちゃんも、さくらと一緒にじゃなきや嫌だと泣くので、さくらと一緒に。そして残った全員が、神無と一緒にいきたいと希望した。神無モテモテである。が、さすがに一人で六人を見守るのは大変だ。

とはいえ、やるうと思えば出来る神無である。それに、そうなるならみんなで行けばいいんじゃないかな？と、神無は思った。しかし、真奈美先生はその提案に対して首を横に振った。

『団体行動させるのも大事ですけど、あまりさせ過ぎるのもよくないんです』

という事らしい。難しいんだな。と、神無は思った。

「神社さんと一緒に回りたい子は手をあげて？」

真奈美先生のその言葉に、アイちゃんとはなちゃん以外の子が手をあげた。

「神無姉ちゃんと一緒にいいー！」

「みこともー！」

月読と命は背伸びをして手を上げて。

「一緒に金魚救うのー！」

さえちゃんはジャンプまでして手を上げて。

「……………」

かなちゃんは何も言わないけど、ニコニコと笑いながら、ピンと手を上げ主張して。あかねちゃんはピッツとして、らんちゃんはおどおどしているが、しっかりと手を上げている。

それを見て真奈美先生はため息一つ。そして、さくらに目配せをした。さくらはニッコリ笑って頷いた。

「らんちゃんは私たちと一緒に回るー！」

「ひゃあー！」

さくらに急に抱きしめられ、ビックリならんちゃん。

「うー、カワイイなあ。うりうり、はなちゃんも一緒にいいよねー」

「うりうりとほっぺを寄せるさくら。らんちゃんは、」きゅー

「らんちゃんなら一緒いいよー。うりうりー」

はなちゃんもさくらの真似をして、らんちゃんにうりうり。らんちゃんは顔を真っ赤にして「あうー」と、恍惚な様子である。

「らんちゃん一緒にいいっ」

うりうりから開放して、さくらはらんちゃんを誘う。ふらふらしながら、らんちゃんは「は、はなちゃんがいいなら……」と、答える。

「一緒にわたあめ食べよー」

「う、うん」

はなちゃんはニコニコとらんちゃんの手を握る。

「さくらちゃんもー!」

「うん!私もわたあめ食べちゃうよー!」

そしてはなちゃんはさくらの手も握る。はなちゃんが真ん中になって、歩き出す。一緒に来る事は許可したが、さりげなく、さくらと手を握る事は許さないはなちゃんである。何はともあれ、これで残り五人である。ここまでは、打ち合わせ通りである。問題はこの後だ。

「かなちゃん、つららお姉ちゃんと一緒に回ってくれない?」

「やです」

真奈美先生の提案に、かなちゃんは取り付く島もない拒絶。困り顔で真奈美先生は神無を見るが、こればかりは神無にもどうしようもない。

つららと一緒に回るといふ事は、アイちゃんと一緒に回るといふ事で、みんなやんわりと嫌がっている。でも、かなちゃんならいいよって言うってくれるんじゃないかなと思っただが、この有様である。

「さえは？」

「絶対やーだ！」

「そう、月読と命は……」

「僕もちよつとやだ」

「みこともやだ」

「……あかねは」

「やだ」

「……」

やっぱり手詰まりである。本当なら、一人に対して二人にしたかったのだが、こうなれば仕方ない。申し訳なさそうに真奈美先生は神無を見た。三人お願いできますか？という意味だ。

「わかり……」

まあ、そうなるだろうとは昨日から思っていたので、神無が頷こうとした時、視線を感じた。視線の方を見ると、屋台当番で座っているくるみがいた。目が合ったと思うと、くるみは視線を逸らした。逸らした先にいたのはかなちゃんだった。偶然だったかも知れない。ただ、神無はなんとなく、偶然ではなく、くるみが伝えたい事があるのがわかった。そして、何を伝えたいのかがわかった。

「かなちゃん、ちょっといい？」

「はい！」

かなちゃんを呼んで、「みんなちよつと待ってて」と、他の子に言うてから、少し離れた場所に移動する。

「かなちゃん、どうしてもアイちゃんと一緒にはやだ？」

「そんなに嫌じゃないけど、かな、神無お姉ちゃんと一緒にいいの……」

見られているのでボディータッチはないが、二人つきりになったので、かなちゃんが甘えモードになった。うるうるした目で見つめられ、神無は怯む。その目は卑怯だ。

「か、かなちゃん、私のお願い聞いてくれない？」

「じゃあ、かなのお願いも聞いてね」

「う、うん」

頭がいい子だ。多分、神無が呼んだ時点で、何を言われるかわかつ

ていたのだろう。

「あのね、あのね、かなね。神無お姉ちゃんと二人だけで花火見たい！」

「それは……」

花火はもちろん夜だ。その時間は、神無と幼少組は、園に戻っている予定だ。園の二階からも十分花火は見えるが、二人つきりは無理だろう。

「ダメならいいよー。私、ジャンケンで絶対勝てるから」

この後、グループ分けがジャンケンになる事も、予想済みのかなちゃん。絶対というのは、こういう時、みんなが最初、グーを出す事をかなちゃんは知っているからだ。つまり、このまま進んでもかなちゃんは神無と一緒にお祭りを回れるし、神無が条件を飲んだら、花火を神無と二人で見られる。どっちに転んでも、かなちゃんはい思いが出来る。いい立ち場にいるかなちゃんであった。

「かなちゃんには敵わないね。わかったよ。でも、無理だったらごめんね？」

「その時は、また別のお願い聞いてもらいます」

「……ホントに、敵わないね」

ニコニコと笑うかなちゃんを見て、神無は苦笑いだ。

その後、みんなの場所に戻り「私、アイちゃんと一緒にいいよ」と



かなちゃんが途端に言つて、子供達は驚き、真奈美先生は神無を訝しがり、つららは何もかもわかつてますというように微笑み「よろしく。かなちゃん」と言つて、アイちゃんはつららの足にしがみつき顔を隠した。

そしてジャンケンの結果、神無と月読と命と、真奈美先生とさえちやんとあかねちゃん。という組み合わせになった。余談だが、やっぱり最初の一回目は、みんなグーであいこだった。

## 5 - 1 ・今回の祭りの組み合わせ（後書き）

はい、というわけで始まりました夏祭り。とはいえ、夏祭りが舞台でやる事はほとんど同じ。まずは、昼間は神無と双子がワーワーいながら夏祭りに行く話。夜は、水無と火無がギャーギャーいいながら夏祭りに行く話になりますね。

よろしくどござー。

## 5 - 2 ・お金の事情と対策法

「二人共、今日は何したい？」

「スーパーボールすくい！」

「ヨーヨー釣り！」

「それからわたあめ！」

「タコ焼き！」

「射的ー！」

「えつとね、えつとね、いっぱいー！」

「僕もいっぱいー！」

「そつかあ、いっぱい楽しもうね」

キヤツキヤツ騒ぐ命と月読を見て、カワイイなあと、和みながら神無は歩行者の天国を歩いていた。

長方形の形で歩行者天国が作られているわけだが、出発地点のくるみわり園の屋台は、その右辺、北側の歩行者天国にある。そこから三人は、下、東側の駅がある方向に歩き始めた。ひょうたんの下部分に向かっているわけだ。さくらとはなちゃんらんちゃんという花組も、こっちの方に歩いていった。つまり、時計周りである。

ちなみに、真奈美先生とさえちゃんあかねちゃんという敗北コンビは、『あかちゃんがチヨキ出したから負けたー！』『ならあんたがパー出せばよかったでしょ！』『あかちゃんがパー出せばよかったじゃん』『あかちゃん言うなー！』と、騒ぐ二人の首ねっこをシスター服真奈美先生が掴んで反対側、西側の方へ歩いていき、反時計周り。

同様に、つららとアイちゃんかなちゃんという異色コンビも、『か

なちゃん。手。繋がなくて平気？』『大丈夫ですよ』と、アイちゃんを背負うつららの横をかなちゃんが歩くという形で、真奈美先生達の後をついていった。

というわけで、三人は今、三人だけで夏祭りを楽しんでいた。

「あ！スーパーボール！」

「ホントだー！」

「待つて待つて、引つ張らないで。スーパーボールは逃げないよ？」

「逃げるよー！」

「逃げられるよー！」

「流れてるからー！」

「穴からワーー！」

「そ、そうだね。でも、屋台は逃げないよ……」

月読と命に引つ張られながら、神無は反対車線にあったスーパーボール救いの屋台に向かった。

まだ始まったばかりのため、人を掻き分けて進まなければいけない程、人はいないが、それなりにいる。家族連れや小学生らしき子供が目立つ。恐らく夜は、ここにカップルや若者が増えて、こんな自由な移動は出来ないだろう。

「一回くださいー！」

「みこともー！」

スーパーボール屋台に客は誰もいなかった。まあ、いたとしても二人はこんな風に元気に突っ込んで行っただろう。

「おー、元気な子じゃねえか。双子かい？」

「双子の月読です！」

「命です！」

「スーパーボール欲しいです！」

「みこともです！」

「ははは、そうかいそうかい。よし、おっちゃん元気でカワイイ子が好きだから、サービスだ。金はいらねえ。ほれ」

そう言つて、屋台のおっちゃんは二人にポイとお椀を渡した。二人は「ありがとうございます！」と言つて、しゃがんで、真剣な面持ちで流れるスーパーボールを見始めた。

「どうもすみません。あ、私も一回お願いします。いくらですか？」

「いって事よ。一回二百円だ」

二百円か。まあ、一般的かな。と思いながら、お金を払い、装備を受け取る。そして二人の横に座り、二人の様子を見る。

「僕はそのキラキラしてるの」

「みことはあの人形がいい」

「人形は難しいから最後だよ」

「じゃあちっちゃいの」

「うん。慎重にね」

「うん」

綿密に打ち合わせしてから、二人はポイを水につけた。何にでも真剣になれていいなあ。と、神無は微笑む。

「「あ！」」

二人が同時に声を上げた。つまり二人同時に、ポイが破れてしまったわけだ。

「一個だけ……」

「お人形……」

二人は一個づつしか取れなかった。落ち込んだ顔で、屋台のおっちゃんを見る。

「残念だったねえ。もう一回やるかい？さすがにもうサービスはないけどな」

「「やる！」」

二人は二つ返事である。ポケットから布とボタンで作った手作り感あふれる財布を取り出したところで「待つて待つて二人共！」と、神無が止める。

「お金はもつと計画的に使わないと。せつかくサービスしてもらったんだから、そのお金は別ので使わない？」

子供達には一人千円。軍資金が与えられている。日頃、お小遣いをもらっていない子供達にとっては大金だが、祭りを楽しむ上では心もとない。

「えー、僕、スーパールボールもつと欲しい」

「みことお人形欲しい」

「そつだぞお姉ちゃん。それになあ、一回サービスしたんだから一回の料金で二回出来たって事だ。お得じゃねえか」

「いえ、その浮いたお金で他のをした方が……」

まあ、売る側にそんな事を言っても仕方ない。神無はため息をついて、サツと命が欲しがっていた指人形を取った。

「神無お姉ちゃんすごい！」

「ありがとう。月読ちゃんは？どれが欲しいの？」

「あれ！あの赤くて大きいのが欲しい！」

神無は月読が指したスーパーボールを危なげなく取る。このために、神無は二人が終わるまで始めなかったのだ。

真奈美先生からきつく『絶対に、神社さんのお金を子供達に使おうとはしないで下さい。千円使い切ったら、それでおしまいです。駄々をこねられても、そこだけはしっかりとお願いします』と、言われているが、まあこのくらいならいいだろう。神無は、頃合いを見計らいポイに穴を開けた。その時にはすでにお椀にはスーパーボールは十分過ぎるほどあり、二人は「ありがとう神無お姉ちゃん！」  
「ありがとう！」と、満足したようだ。よかったよかった。

ちなみに、同時刻、真奈美先生も同じような事をしていたが「ああ、破けちゃった」「一個も取れないなんて……」「かなお姉ちゃんならいっぱい取れただろうな」「はあ……もういい。次、いこつ」「真奈美先生、はやくー」「……」と、苦しんでいる事を神無が知るよしもない。





### 5 - 3 ・もう一人の予定を確認

「わたあめ美味しいー」

「わたあめあまーい」

「そうだねー。あ、ほら、また来たよ」

三人は今、歩行者天国の端に設置されていたベンチに座っている。二人はわたあめを食べてご満悦である。

「はるちゃんだ！」

「みえちゃんも！」

歩行者天国におみこしを担いだ集団がやってきた。さっきから、ちよっと間を置いておみこしを担ぐ集団が練り歩いている。どうやら近隣の小学生がおみこしを作ったようで、カラフルな物からもおみこしじゃない形状なものまであり、なかなか楽しい。

「……………うん」

それで、今、前を通った集団の中に、はっぴを着たはるちゃんとみえちゃんがいたわけだが、周りの子が楽しそうに笑っているのに対して、二人共、ボーッととして、なんか浮いていた。眠いんだろうか。

「あ、やっほー！」

「やっほー！」

と、はるちゃんがこっちを見た。手を振る月読と命に気付いたように、ちよっと顔をほころばして手を振り返して、隣のみえちゃん

肩を突く。みえちゃんはこっちを見て、頷いた。そして通り過ぎていった。

「二人共楽しそうだったねー」  
「ねー」

はるちゃんはともかく、みえちゃんの頷きはそういう意味なのかはわからなかったけど「そうだねー」と、神無は同意しておいた。

それから数十分後。三人はまた歩行者天国を歩いていた。

「去年は春風さんと一緒に回ったの？」

「うん！」

「巡お姉ちゃん楽しかった！」

「春風さんが楽しかったんだ……」

屋台全てを遊び倒す巡の姿が簡単に思い浮かんだ。確かに、見るだけで楽しそうだ。

「それにね、いっぱい買ってくれた！」

「神様は太っ腹何だってー」

「でもそれは内緒何だよー」

「シートだよ」

「うん、内緒にしておくね」

しかし、内緒と言いつつこんな簡単に言ってる事と、事前にあれほど強く真奈美先生がお金に関して言っていた事を考えると、巡が大盤振る舞いな事をしたのは周知な事実な気がした神無である。

「ねーねー、神無姉ちゃん」

「ん？何かやりたいのあった？」

二人はスーパーボールすくいとわたあめ以外はまだしていない。ちよど駅の近くを歩いているので、歩行者天国の四分の一を歩いた事になる。二人の残金も八百円で、約四分の一である。まあ、そろそろ何かやってもいいかな？

「水無姉ちゃんは今日来ないのー？」

「のー？」

「あー、水無ね……」

神無の予想に反しての質問がそれだった。神無は困り顔になる。

「来るとは思っただけど……ちょっと電話してみよっか」

「出たら代わって！」

「代わって！」

「うん、わかったよ」

道路の隅により、神無はバックから携帯電話を取り出す。そしてアドレス帳から『水城水無』は選択、コール、コール、ニコール目を出た。

「あ」『二度とかけてくんないバーカバーカ!!』

そして切られた。予想はしてた神無は、冷静に耳から携帯を離れた。

「どうしたのー？」

「お留守番？」

「うん。ちょっと待ってね。すぐかけ直してくれると思うから」

神無がそう言った直後、携帯が鳴った。水無からだ。

「もしもし」

『もしもし神無？いやあごめんごめん。馬鹿が馬鹿力で馬鹿な事した』馬鹿じゃないもん！』馬鹿だろうが馬鹿！』

電話の向こうも賑やかである。不思議そうな顔して見上げる二人をよしよしと撫でながら、神無は向こうの決着がつくのを待った。

『ったく、うざい妹だ……ああ、で、なに？子供の世話をして以外の用件？』

「その用件だったら？」

『あー、なんとということだー、電波の調子がー』

「その用件じゃないから電波の調子は良好でよろしくね。今日、夏祭り火無さんと一緒に来るんでしょ？」

『不本意だけどね』

「いつ頃来るの？」

『ろ』『いーまーすーぐー！！』『ちっ！鈴の対抗ができて始めてやがる！！』

また戦いが始まったようだ。「代わって代わって！」「みことにも！」と、ねだる双子に待てをしながら、それが終わるのを待つ。

『これは新しい鈴が必要だな……で、何だっけ？ああ、いつ行くか？六時か七時だけど。何、一緒に回る？』

「うっん、違うけど。ちょっと待って、今、月読ちゃんに代わるから」

『え、それはちょっと待って』と、水無が言っているのは聞かなかつたフリをして神無は「はい」と、月読に携帯を渡す。

「もしもし水無姉ちゃん！つくよだよ！」

月読が元気よくご挨拶。隣の命も耳を近づけて「みこともいるよ！」と、ご挨拶。そして楽しそうにお喋りを始めた。

カワイイ仲良し姉妹を見て、神無は自然と微笑み、ラムネを後で奢ってあげよう。と、思った。



## 5・5・幸福の感じ方

「あ、はなちゃん達がいる」

「ホントだー」

夏祭り中、一部の店舗の駐車場は休憩スペースとして使われている。テーブルとベンチが置かれ、多くの人がそこで物を食べたり、手に入れた戦利品を弄っている。その休憩スペースの一つに、さくらとはなちゃんらんちゃんの花組がいた。

「やー、二人共ー。神無さんと一緒に回れたんだねー」

「うん！」

「あ、らんちゃん焼きそばいいなー」

花組は四人がけのテーブルの片側に座っていた。はなちゃんはさくらの膝の上でご満悦な顔でタコ焼きを食べさせてもらっている。その隣でらんちゃんは焼きそばを食べていたわけだが、どこか居心地が悪そうに神無は見えた。

「桜木さんお疲れ様。ここ、いいですか？」

「もちろんだよー」

すでに双子は座っていたので断られたら大変だった。

「それじゃ二人共休憩ね。タコ焼き、熱いから気をつけてね」

「うん！」

月読と命は顔を輝かせてタコ焼きのパックを開けて、爪楊枝をぶっさし、迷いなく口に入れ「ッ！」「パックにベツってした。返事をしたのに、聞いていなかったようだ。」

「もう、熱いから気をつけてねって言ったのに……」

神無は呆れ顔で、パックからさつき買ったラムネを二本取り出して、手際よく開けて、熱い熱いと苦しんで二人に渡した。

「うう、熱かったー」

「死ぬかと思っただー」

「今度はちゃんとフーフーしてね？」

「うん」

「フーフー」

月読と命はパックに向けて、フーフーし始めた。爪楊枝で取ってかすればいいのにと、神無は思ったが、その仕種がカワイイのでよしとした。自分もタコ焼きのパックを開け、一つ取り、フーフーしてから口に入れる。うん、タコが小さい。

「さくらちゃん、わたしもー」

はなちゃんがそう言うと、さくらは「いいよー」と、言ってタコ焼きを一つ取り、フーフーしてから「あーん」と、はなちゃんの口に入れてあげる。はなちゃんはタコ焼きをモグモグしながらさくらを見上げて、えへへへ。と、笑い合った。なるほど、らんちゃんの居心地の悪さもわからないでもない神無である。



「らんちゃんはタコ焼き食べないの？」

「あ、あたしはもう自分の食べちゃったから……」

と、らんちゃんは物欲しげな目で、はなちゃんの前にあるタコ焼きを見る。パックの中には二つしかない。見た感じ、八つ入りのようだから、四つずつで分けて、先に食べちゃったのかな？

「ほら、らんちゃん、あーん」

「え？」

かわいそうなので、神無は自分の分を冷ましてから、一個あげる事にした。らんちゃんは驚き、戸惑い、最終的に恥ずかしそうに顔を赤らめ「あ、あーん」して、嬉しそうにモグモグした。

「あー！いいなあらんちゃん！」

「みこともあーん！」

「僕もあーん！」

「はい、あーん」

隣で口を開ける月読と命に、神無はらんちゃんと同じように、タコ焼きを食べさせてあげた。何だか親鳥になった気分だ。

「あ、あのー！」

らんちゃんが珍しく大きな声を出した。そして、

「あ、あたしも……あ、あーんって……」

顔を真っ赤にしてごにょごにと、らんちゃんは焼きそばを神無の口元に差し出す。お礼に、焼きそばをあーんしてくれるようだ。神無は拒否するわけもなく「ん、美味しい」と、いただき、「ありがとうね」「感謝の気持ちをこめよしよしと頭を撫でる。らんちゃんは満足気にはにかんだ。

「らんちゃん幸せいいねー」

そんならんちゃんを見て、さくらに頭を撫で回せながら、はなちゃんもニコニコと言った。

「う、うん。はなちゃんも幸せ？」

「うん！幸せー！」

「二人が幸せで私も幸せー！」

さくらはそう言って、はなちゃん、そしてらんちゃんをギュッと抱きしめた。「やー！」「あわわわ！」と、二人は嬉しそうに声を上げた。

そんな幸せそうな三人と、隣で「みことにあーん」「つくよちゃんにあーん」と、仲睦まじい二人を見て、神無は、くるみわり園の手伝いに来て、本当によかったと感じるのだった。

「あ、射的！」

「あ、りんご飴！」

三人は、また歩行者天国を歩き始めていた。花組はもう少し休んでから行くと言っていたので、側にはいない。

「やりたい！」

「食べたい！」

「もちろんいいけど……二人共、後もう二つくらいしかできないからね？注意してね？」

出発して、一時間程経ち、三人は夏祭りのだいたい半分を歩いた。その間に月読と命は、タコ焼きとわたあめにお金を使った。タコ焼きは一パック五百円、わたあめは三百円。タコ焼きは二人で一パックを購入したので、残金は四百五十円だ。屋台は安くても二百円を使っただろうから、後二つくらいしか屋台で何かを買う事はできない。お金は計画的に。

「わかってるよ！」

「よー！」

「……」

そう元気よく言って、二人は射的の屋台に駆け出した。神無はホントにわかってるのかなあと思いながら、二人の後を追う。

「一回やりたいです！」  
「です！」

「ちよ、二人共！二人で一回にしなよ！」

やっぱりわかっていなかった。このままでは射的とリンゴ飴でお金がつきてしまう。

「えー、僕一人でいっぱいやりたい」

「二人でわかるの無理だもん」

双子が不満を口にする。ここの屋台は一回二百円で球は三発だ。確かに二人じゃ分けられない。

「私もやるから、球を共有しよ。そうすれば一人二回出来るよ？」

球の共有とか、別に問題ないですよね？と、屋台のおばちゃんに目で聞くと、構わん。というように腕を組みながら頷いてくれた。

「みことはそれでいいよ」

「僕はやだ！」

しかしその提案、命はよしとしたが、月読は拒否した。

「僕は三つ打ちたいの！二つじゃやだもん！」

「でも、こっちの方がお得だよ？他のもできるよ？」

「それでも三つじゃないからやなの！」

よっぽど、コルクを三発撃ちたいようだ。神無の説得にも耳を貸さうとはしない。こうなっては仕方ない。神無が二回分払うのはさすがにやり過ぎな気もするし、命だけ優遇するわけにはいかないのが、球の共有計画はなしだ。

「じゃあ」

「私もやりたいから一緒にしよ」

「か、かなちゃん!？」

神無が、それじゃあいいよ。と言おうとした時、ひょっこり背後から、かなちゃんが現れた。

「こんにちはわ神無先生。運命ですね」

「そ、そうだね」

そこは運命じゃなく、奇遇にしていたきたかった神無である。

「こんにちはわ。射的やるの?」

「ええ、はい」

かなちゃんに続いて、つららも屋台に入ってきた。背中にはアイちゃんが背負われている。顔を埋めてはおらず、つららの肩から不思議そうに神無を見ていた。

「えっと、みこととつくよちゃんとかなちゃんて二回分にして、神無お姉ちゃんの分も入れれば……」

神無が不思議組に挨拶をしている横で、命は指を折って、球の数を確認。次に、月読達を指差しながら一つ、二つと、頭の中で配っていく。

「あれ、一つあまつちやうよ？」

球の数は九。やる人は四。一人二つで一つ余る。

「余ったのは月読ちゃんにあげるよ。これで三つだからいいよね」

「三つならいいよ！」

「命ちゃんもいい？」

「うん！」

かなちゃんの提案で、子供達はまとまったようだ。かなちゃんが期待に満ちた目でこちらを見たので、神無は「ありがとう。助かったよ」と頭を撫でる。褒められるチャンスを逃さないかなちゃんである。

「あれ、でも、お金はどうするの？四百円で、三人だから、みことはいくら出せばいいの？」

「……えっと」

頭を撫でられ満足気なかなちゃんが困った顔に変わる。お金の計算はしていなかったようだ。そして、うまく出来ないらしく、涙目で神無を見る。月読と命に背を向けてるので若干甘えん坊モードかなちゃんである。

「私が」

「アイもやりたいうって言うてるから。四人で四百円で計算して」

神無が、私が百円出すよ。と、提案しようと思った時、つららが助け船のような提案をした。確かにそれなら、子供達は一人百円で済むが……。

「でも、アイちゃんもやると、月読ちゃんが三つ出来ませんよ？」

かなちゃんの言う通りである。それではダメだ。

「多分大丈夫。ほら。アイ。自分でいいな」

つららはしゃがみ、アイちゃんが降りれるようにした。「うう」と、しばらく嫌そうに唸っていたが、いくら待ってもつららが動かないので、諦めたのか、背中から降り、怯えた様子で神無の前に立った。

「ん、私に何か言いたい事があるのかな？」

そんな雰囲気を感じて、神無は屈んでアイちゃんに合わせる。

「……」

アイちゃんは観察するように、ジッと神無の目を見る。

「……」

神無は首を傾げて何かな？の、待ちな体制。

「……」

「……」

無言で見つめ合う二人。「アイちゃんどうしたのー?」「のー?」  
と、双子はつららに聞き「もう少し待ってね」と、つららは微笑み  
「……」かなちゃんは一人ひそかに膨れっ面だった。

「……いつしよ」

「ん?ああ……うん、いいよ」

アイちゃんが唐突にそう呟いた。危なく聞き逃すところだったが、  
神無はちゃんと聞き、理解した。

「アイちゃんは私と一緒にやるから、球の数を気にしなくていいよ。  
月読ちゃんが三つで、命ちゃんとかなちゃんは二つね」

「やった!」

「よかったね!」

「むー」

かなちゃんが不満そうな声を上げたが、神無はとりあえずほってお  
いた。

「それじゃあ下さいな!」

「な!」

屋台のおばちゃんはすっかり話を聞いていてくれたのか、お金を  
受け取り、銃を四丁と、三つのコルクが入った紙皿を一枚、二つの



コルクが入った紙皿を三枚出してくれた。

「つくよちゃん何狙うの？」

「キャラメル！」

「じゃあみことも！」

双子をキヤツキヤツ言いながら、精一杯手を伸ばして、射的を始めた。

「アイちゃんは何が欲しいの？」

「？」

コルクを詰め込んで準備を整えてから、神無がそう聞くと、アイちゃんは首を傾げた。いや、傾げられても困る神無である。

「……ん」

「ん？決まったの？」

と、アイちゃんが両手を上げた。それは持ち上げてくれという意味だ。アイちゃんは机と同じくらいの身長なので、持ち上げてもらわないとやりにくいのだ。他の三人も、机よりちょっと高いくらいなのだが、机に体を乗り上げる事でそれを克服している。

「……っと、はい、大丈夫？」

アイちゃんは頷き、手を伸ばして机の銃を取ろうとするが、うまく取れない。当然、両手を使っている神無も取れない。

「かなちゃん、銃、渡してあげてくれない？」

というわけで、神無は隣で歴戦のスナイパーのように静かに銃を構えているかなちゃんに助けを求めたのだが、とんでもなく集中しているからか、それとも別の理由か、かなちゃんは無視である。

「はい。頑張れアイ」

と、後ろで見守っていたつららが銃をアイちゃんに渡してくれた。つららの応援に、アイちゃんは無表情ながらもしつかりと頷き、銃口を得物、つまりキャラメルに向けた。てつきり、ウサギのぬいぐるみを狙うかと思っていた神無は、キャラメルの人気に驚いた。

「あ………」

アイちゃんが残念そうな声を出す。放ったコルクはキャラメルにかすりもしなかったからだ。

「……………」

いつもの無感情なアイちゃんとは別人じゃないかと思うくらい、アイちゃんはしょんぼりしていた。キャラメルがそんなに好きだったのだろうか。

神無はアイちゃんを降ろし、新しく銃にコルクを詰め、慎重に狙いを定めて、撃った。コルクは神無の狙い通りに、キャラメルの箱の中心に当たり、見事に倒れた。

「おめでとー」

無愛想におばちゃんはそう言って、倒れたキャラメルを神無に投げ

る。神無は「ありがとうございます」と受け取り、開封し、二、三個取り出してから、「はい、どうぞ」と、アイちゃんに箱を渡した。

「……」

目をパチクリし、手に乗ってるキャラメル箱を見て、次にそれを渡してくれた笑顔の神無を見て、そして母親のように側で微笑んでるつららを見て、慌ててつららに駆け寄り背中に回り込んだ。

「んー！」

「はいはい」

そして肩車を要求して、所定の位置に戻る。しっかりとキャラメル箱を握りしめながら、アイちゃんはつららに何か囁く。

「……そのくらい自分で聞けるようにならないと。アイが。どうしてくれたの？だって」

苦笑混じりのつららに、神無も苦笑いを返す。

「だって、アイちゃんと一緒にやったんだから。取ったのも一緒にしないとダメでしょ？」

「……ん」

アイちゃんはしばらく、考えるように神無を見つめていたが、頷き、キャラメルを取り出して、銀紙を取り、口に入れた。表情はほとんど変わらず無表情だったが、コロコロと口の中でキャラメルを転がすその様子は嬉しそうに神無には見えた。あげたかいたもん

だ。  
アイはキャラメルを味わいながら、もう一つ取り出して、それをつららの口に近づけた。どうやらおそろわけらしい。カワイイなあと神無は思った。

「あたしは甘いのが好きじゃないからいらないよ」

つ、冷たい人だな。と、神無は思った。

「わたしは好き」

「ん？ああ……そうだったかな。じゃあいただくね」

そう答えてつらは口を開けた。アイはその中にキャラメルを入れる。「ん。甘い」「あまい」「美味しい」「おいしい」「噛むより舐める」「なめる」そして、確認作業をするようにそう言い合う。神無にはちんぷんかんぷんなやり取りだったが、キャラメルを口の中で転がしている二人は、幸せそうで、それを見てる神無も幸せな気持ちになれた。

## 5 - 5 ・幸福の感じ方（後書き）

とりあえずの目安としまして、次話で神無の夏祭り巡りは終わり、次に神無の店番を軽くやりましてから、舞台は夜になり、主役は水無と火無、そして最後にエクストラー。で、夏祭り編は終わりですね。多分

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7392/>

---

彼女たちの平々凡々な日常

2012年1月6日18時49分発行